アマナワ　甘縄　相模國鎌倉の地名。また海士郷に作る。今神奈川縣鎌倉町大字長谷の東、御興岳の麓の邊をいふ。山の中腹に甘縄神明の祠あり き。

アマヌマ　天沼・乗瀦　東京市杉並區にある町名。阿佐ヶ谷の西北に位し荻窪に近し。續紀・神護景雲二年「東海道按察使、式部大輔紀廣名等言、武蔵國乗瀦、豐島二驛、承山海兩路、使命繁多、乞準中路、置馬十疋、奉勅依奏」とあるはこの地か。思ふに乗は剰と相通ずる故乗なあアマと訓ぜしものか。近世この地は多磨郡野方領に屬し郷庄の唱を傳へず東京市廣町の山王社の神領たりしことあり。延喜神名帳の多磨郡青渭神社はアサヌマと讀み乗を青に謬りたるものか。近年豐多摩郡杉並村の大字となれるも杉並村はその後町制を施行し、昭和七年東京市に編入せられ杉並區を成す際、天沼は杉並區の一町名となる。

アマノ　天野　【天野】　伊豆國田方郡の郷(和名抄)。今の静岡縣田方郡伊豆長岡町の地なるべし。大字天野はその遺稱か。この地は鎌倉時代伊豆の名族天野氏の居邑にして、その始祖は後三條天皇の皇子輔仁親王の曾孫遠景なりといひ、或は藤原爲憲に出づともいはる。天野系圖に景澄姓は藤原氏、入江權守と稱し、始めて伊豆の天野郷に居り、因りて氏とし、その孫遠景は藤内と稱し、保元中舞野茂光に從ひて源爲朝を討ち、治承中源頼朝に屬して屢〻大功を樹て、文治二年鎮西の守護職に補せられ子孫此處に居るとみゆ。

【天野村】　大阪府河内國南河内郡の西南邊。地南北に長く西は泉北郡上神谷村横山村に隣りし、東北部は長野町に接す。和泉丘陵の東部にて南よりほゞ東北に緩やかに傾き天野川西部を北流す。梨・葡萄・蜜柑等の果樹園藝を主とする農家多し。天野街道天野川に沿ひて南北に通じ北方にて西高野街道に合し、また社線南海鐵道高野線の長野驛・滝谷驛に遠からず。此地は和名抄、錦郡郡山田郷の地にして、大字小山田は蓋しその遺稱ならん。村名の天野は金剛寺の號天野山より取るものといふ。【濱崎神社】　大字小山田に鎮座。郷社。祭神、表筒男命・中筒男命・底筒男命外數神。一に住吉神社とも、豐浦神社とも稱す。神功皇后三韓征伐凱旋の時の鎮座と傳ふ。爾後上下の尊信篤し。例祭は十月十二日。祭典に競馬を爲すは皇后凱旋の當時裸馬の競走を偲されしに因るといふ。【金剛寺】大字天野山に鎮座。古義眞言宗。天野山と號し、仁和寺の末寺。聖武天皇の勅願により僧行基の創建。弘法大師留錫のことを傳ふ。永萬元年高野山の僧阿觀これを中興し金剛寺と稱す。歴代皇室の尊崇厚く、八條女院堂塔を修補し、僧衆の威儀方式を高野山に倣はしめ、喜陽門院令旨を賜ひて女人高野の稱起る。のち後醍醐天皇の勅願所となり、次いで正平八年十月後村上天皇の賀名生より此地に徙御遊ばさるゝや其行宮所となり、世に天野行宮とも天野殿とも稱せらる。然るに同十四年七月足利義詮等東國勢を以て襲ひしを以て天皇は觀心寺に徙御あらせらる。今境内は金剛寺境内として指定史蹟たり。現に本堂・多寶院・御影堂・觀月堂・食堂・樓門及び鐘楼等の古建築を遺存し、國寶に指定せられしもの多し。御影堂は日本三御影堂の一。その東にある唐破風造の觀月亭は後村山天皇御觀月の處にして、爲忠朝臣「君すめば峯にも尾にも宮居して深山なからの都なりけり」と詠ぜし處なりと傳へ、また食堂の政廳は楠正儀等の軍議を練りし處なりといふ。

【天野村】　和歌山縣紀伊國伊都郡の西部。高野山西麓の山地を占め、南北に長き四—五〇〇米臺の高原狀の地にて、新濃川は北半の、貴志川は南部の水を集めて共に西南流し、その川筋には田畑拓け米を產す。また蔬菜の抑制栽培行ばれ、山地よりは木炭を出す。高野街道新濃川に沿ひて村の中部を横ぎり梨子ノ木峠を經て花坂に出づ。和名抄、伊都郡神戸郷は本村の丹生津比賣の神戸なるより起りしものなれば、或は本村はその域内なりしか。村名は蒙族天野祇なるもの上古より丹生津比賣神社に奉祀せるを以て起るとも、又この地は海拔四九〇米の高所の山間にあり、兩も平野を成すより、高き所にある平野の意より起りしものともいはる。また村内には官幣大社丹生都比賣神社を始め西行法師の遺蹟西行堂及び有王丸の墓等あり。【丹生都比賣神社】大字上天野に鎮座。官幣大社。社殿は四宇に分れ、第一殿に丹生都比賣命を主祭神とし、第二殿に高野御子神、第三殿に大食都比賣命、第四殿に市杵島比賣命を配祀神とす。丹生都比賣命は伊弉諾尊伊弉冉尊の御子にして此國土に下られ古くより高野山に鎮まりましたる地主神たり。延喜の制、名神大社に列し、弘仁年中、空海の高野山に金剛寺を創むるに當り、崇めて一山の鎮護神とせり。爾來朝廷・武家の崇敬篤し。朱塗の楼門は室町時代の建築にして國寶に指定せられ、其他神輿・狛犬等の多數の國寶を有せり。當社はまた天野神社・丹生神社・丹生高野明神・天野四社明神等とも稱す。例祭十月十六日。

【天野】　→八木村(兵庫縣三原郡)

【天野川】　大阪府河内國北河内郡東北部の川。天之川にも作る。磐船村の南部山中に發し枚方の北にて淀川に合す。流程一〇粁餘。上流磐船村地内に磐船渓・天磐船の勝地あり。伊勢物語「ゆき暮れて七夕祭に宿からむ天の川原に我は來にけり」好色一代男・三「旅のこころを書つづけて行に、左に天野川、磯鳴と、いへるにも舟子の瀨枕、しのび女有所ぞかし」

アマノカグヤマ　天香久(天香具)山　【天香具山】　都岡縣駿河國富士郡の海濱にある砂丘。沼津尻の東岸。狩津川・生蒼川の潤川に會する所。北は富士を仰ぎ、南は海を距てゝ伊豆の山を望み、西は久能・三保の景勝を一眸に收む。

【天香久山(天香具)山】　大和三山の一。奈良縣磯城郡香久山村にあり。標高百に一四八米に過ぎざるも大和平野展望の好位地にあり、古くより名山として著はる。山頂を天の福と稱し、其麓にもと埴安池あり。また山西には持統天皇の藤原宮を始め宮址多し。神武天皇御東征の時神歌により、橿根津彦・弟猾等をして此山の埴土を採りて平瓮・手抉・厳瓮を造らしめ、天皇親ら厳咒詛(咒詛)をなし給ひ賊徒を平定せらる。神武天皇の土を取り給ひし所は、山の北麓大字南浦なる天香山神社のある地なりと傳ふ。萬葉・一に「春過きて夏來るらし白妙の衣ほしたり天の香具山」とあるは持統天皇の藤原宮にて此山を詠み給ひし御製なり。曾我會稽山・一「昔の〳〵とつと昔の其の古、大和國天の香久山といふは女山、又欲傍山耳無山此の二山は男山、香具山縣の嬰なる容に想をかけ我が妻にせんいや我こそはと、山と山とが妻爭ひ」　※天香具山。

アマノカゴヤマ　天香語山　→天香山。

アマノカワ　天之川　→アマソ——アマハ

北河内郡殿山町大字禁野の一名。南部を小流天ノ川西流して淀川に入る。古來歌枕として知られ鶯・花・五月雨・女郎花・雪・鹿鳴などの名所たり。續後撰「あまの川とほきわたりに成にけりかた野のみのの五月雨のころ　爲家」玉葉「天のかは宿とふみちもたえぬへしかた野のみ野につもる白雪　貴平」新續古「けふもまたあまの河波立上りおなしかた野にかりくらしつつ　家豐」

アマノタケチ　天高市　天高原の地名。天は高天原の意。市は人の多く集まり交易する場所なれども此處には集合する意に用ふ。天安河原の附近なるべし。書記・神代紀・上一書に「故會ニ八十萬神於天高市一而問ヘ之」

アマノナカ　天の中川　静岡縣を流るゝ天龍川の古稱。源平盛衰記「駿河國には富士川・天中川・大井川なんどいふ大河あり」

アマノノサト　あまのの里　香川縣讃岐國大川郡志度町東部の天野部落をいふか。いま詳ならず。謠曲・海士「これは讃州志度の浦、寺近けれども心なき、あまのの里の海人にて候」

アマノハシダテ　天橋立　【天橋立】　日本三景の一。京都府與謝郡吉津村及び府中村に屬す。宮津灣を兩斷する平坦なる沙嘴にして一に子日岬ともいふ。延長約二・二粁。南端は切戸或は文殊の切戸と稱する狹水道を隔てゝ文殊山久志濱沙嘴と相對す。一帶の蒼松白砂、碧海と相映じ風光頗る明媚、古來陸前の松島、安藝の厳島と竝び稱せらる。又北方成相山の笠松(天の橋立の眺望臺として著名)に登れば、脚下に天の橋立眞一文字に南方に延び、恰も自然の長橋を架せるが如く。これに反して與謝内海の西方岩滝村の大内峠(樗峠)上より横にこれを眺むる景は一層美しく「樗峠の眺のぞき」にて有名なり。天橋立を地學的に說明すれば比較的新しき沈降海岸にて幼年期の海蝕地形の一つとして生ぜし灣中砂洲なり。橋立の一部に橋立神祠あり。傍に温泉湧出し磯清水といはれ海潮に接近せるも鹹味を帶びざるをもつて名高し。いま橋立公園となり、公園としての施設整ふ。公園の面積約一三四・五アール。金華・丸「大江山いくのの道の遠ければまだふみも見ず天の橋立　小式部内侍」

【天橋立鋼索鐵道】　私設鐵道。京都府與謝郡府中村にあり。大字大垣の府中驛より岡地の傘松驛に至る〇・四粁の鐵道にして鋼索によりて成相山に登る。

【天橋立】　省線宮津線の驛(大正十四年設置)。京都府與謝郡吉津村にあり。附近に臨濟宗、日本三文殊の一たる智恩寺、國幣中社籠神社、古義眞言宗成相寺及び文部大臣の指定になる史蹟丹後國分寺址などあり。

アマノリト　あまのりと山　傳說的の山。一にアマノモト山ともいふ。德島縣麻植郡山瀨村邊にありしといふ。のりと山か。大和國の天香山と共に天上より降り著きし山と傳ふ。仙覺萬葉集引く所の阿波風土記「空より降りたる山の大きなるは、阿波國に降りたるあまのりと山と云ふ、その山の碎けて、大和國に降著きたるを、天香山となん申す」伊豫國にも是と同じき傳說的の山あり。

アマハ　天羽　上總國にありし古郡名。萬葉卷二〇に天羽郡上丁丈部鳥とあり て此時始めて郡名見ゆ。また續紀・光仁天皇寶龜三年七月の條に「上總天羽郡人宗我部虫麻呂」とあり、延喜、式兵部省式に上總國天羽郡傳馬五疋と見え又同書に上總國天羽驛馬五疋とあり、天羽驛は今の千葉縣君津郡湯町の邊なれば、往時は郡家こゝにありて驛傳の事を掌れり しものならん。和名抄は阿末波と訓じ、三宅・讃岐・長津・雨霑の四郷を管す。中世桓武平氏千葉氏の一族、平直風本郡を領し天羽莊司と稱し子孫因りて天羽氏を稱す。近古私に天羽・嶺上・大貫の三莊及び吉野・佐貫・造海・濃・宇部の諸郷を置き、近世に至りては大貫庄の名殆んど全部に亙りたりと雖も其由來を詳にせず。故にまた天羽と大貫の異同詳かならず。明治二十九年、周淮・望陀の二郡と共に君津郡となる。

アマバタ　雨畑　→硯島村(山梨縣)

アマハラシ　雨晴　省線永見線の驛(明治四十五年設置)。富山縣氷見郡女田

村にあり。附近は夏季海水浴に適し近く小島點在して風景よく、太田村大字溢谷の海岸に三箇の瓦最あり、その上に大なる平面岩を載き宛ら小室をなせる所を義經の雨晴といふ。往時源義經、奥州落の際、此地を過ぎ、驟雨に遇ひ此小室に雨の晴れるを待ちしより此名生ぜりと傳ふ。

アマビキ　天引峠　↓石坂山

アマビキ　雨引

【雨引村】茨城縣常陸國眞壁郡の東北部。南は眞壁町との間に椿巡村を隔て、北は西茨城郡岩瀬町、東は東那珂村に隣りす。筑波山塊の北部をなす雨引山（四〇九米）の山嶺東麓より北麓に連りて障壁をなし、中部より西南部は低平にて櫻川の上流によりて西隣大國村に接し、田畑よく拓け、米を産し養蠶行はる。土浦より眞壁を經て岩瀬に至る縣道と、社線筑波鐵道南北に走り、後者は雨引驛（大正七年設置）を置く。本村は和名抄、眞壁郡大苑郷の地、阪東三十三所第二十四番の札所雨引觀音堂あり。〔樂法寺〕大字本木にあり。新義眞言宗豐山派。雨引山と號す。別稱雨引觀音堂。用明帝の御宇、法輪獨守居士の開山といひ、或は大同年中德一の創建とも傳ふ。中古足利尊氏の歸依深く堂宇を修理す。文明年間火災に罹り、眞壁久幹の弟高幹の再興、以後眞壁氏の尊崇捨からず。近世國學者の憲岳、性相學者の憲隆等名僧輩出す。本尊木造觀世音菩薩立像一軀は國寶に指定され、安產守護の靈驗ありと稱し賽者多し。本寺は坂東三十三所第二十四番の札所。御詠歌「隔なき惠みを何と飯沼のふかき誓は洩む人ぞ知る」「當陸なる佛の山を打ち越えてあまびき寺といはばこのたび」

【雨引山】筑波山脈北部の一峯。茨城縣眞壁・西茨城二郡に跨り、標高四〇九米。山腹に雨引觀音堂あり坂東三十三所第二十四番の札所。婦人の賽者多し。※雨引村

アマビコ　天彦橋　飛鳥國にありといふ橋の名。天彦は山彦の意か。枕草子・三「橋は、あさむつの橋、長柄のはし、あまびこの橋」

アマベ　海部村　京都府丹後國熊野郡の中部。久美濱町神野村の南に續き、東西の兩邊は第三紀の丘陵地南北に延びその中間は南隣川上村より北流して久美濱灣に注ぐ川上谷川に沿ふ沖積層の低地にて田畑廣く拓け、農業行はれて米・蠶を主とし、麥・西瓜・鶏卵・トマト等を產す。西北は久美濱町へ、東は宮津町へ、西南は出石町（兵庫縣）へ道路通ず。本村の地は隣村神野村とともに和名抄、海部郷の地にして、古くは川上海士などとも稱せられ、近くは川上谷と稱せらる。孝靈天皇の御代神服連海部直は丹波・但馬の國造となりて此地方を統治す。大宇海士に海部族の祖か祀れる矢田神社あり、海部の地名これに基づくといふ。大宇油池に意布夜神社あり、大字友重には熊野神社あり。熊野神社は出雲の熊野大神を祀りしもの、此神は三代實錄貞觀十年に授位のことあり、本郡名は此神社に基づくと。村内に神服連海部直の屋敷跡及び丹波道主命の古墳（茶白岳にあり）と稱せらるゝ前方後圓の墳あり、更に大字蘆原には四道將軍丹波道主命の居りしといふ玉屋敷及び丹波道主命の妃川上麻須郎女の古墳と稱せらるゝ蘆原古墳あり。此古墳封土中より有機式石劍の發見せられたることは注意すべく、前記の四神社の何れも式内の古社に擬せらるゝことを合せ考ふれば、此地は餘程早くより開け居りたることを推定し得べく、同時に此地の古代史研究は相當興味あることを信ぜしむ。

アマベ　海邊村　大分縣豐後國北海部郡の中部東岸。白杵灣奥の北岸に臨み、南は白杵町と相對す。東西約三粁、南北廣き處約一粁の小村にて地は略んど丘陵をなし、主として漁業行はる。白杵町へバスの便あり。豐薩軍記に「大友宗麟白杵の海邊詠訪明神の側に藤林寺と云ける一宇の梵刹を建てらる、最佳景の勝地なり」とあり。詠訪村は西南部の舊村にして東北部の大濱・中津浦と合して明治二十二年海部村となれり。而して海邊の村なりしが故に海邊村と名づく。この地また平家末裔の住みし地なりともいはる。

アマベ　餘戸　↓餘戸

アマミ　天見村　大阪府河内國南河内郡の南部。葛城山脈の一部に當り、南は和歌山縣紀伊國伊都郡と境す。概ね山地なるも中部は石川上流の河谷にて、高野街道及び社線南海鐵道高野線（電車）これに沿ひて村内を貫通し、千早口・天見の二驛（大正四年設置）を設く。主產物は農產・林產。和名抄の錦部郡餘戸郷に屬し、楠合戰注文に甲斐莊安満見とあるも此地を指せるもの。南北の紀伊見峠（本の實峠）は寛正四年金胎寺城主畠山義就、畠山政長に攻め落され、高野山に逃れんとして こゝに至り「夏落る木の實峠の行末も人にまかせてさくはなを見ん」と詠ぜし處といふ。〔地蔵寺〕大字清水にあり。古義眞言宗。九華山と號す。元祿四年蓮甕此の地に本寺を創む。初め玉井山と號し靈雲寺（東京本郷區湯島新花町）に屬し一派の重鎮たり。のち九華山と改め、現に當宗御室仁和寺末。

アマミ　天美村　大阪府河内國中河内郡の西南部。大和川下流の南岸に沿ひ、堺市の東方に位し、その間に五箇庄村を挾む。村内平坦にて田畑よく拓け農業行はれ米・麥等を產す。また堺市・大阪市に近く綿織物（廣幅物・小幅物）・人造眞珠等の工產多し。村内に社線大阪鐵道の河内天美驛（大正十二年設置）あり。本村は和名抄、丹比郡依羅郷の地にて、大宇城蓮寺の西南天美岡に延喜式神名帳の丹比郡阿麻美許曾神社あり、村名之に因む。

アマミ　奄見

【奄美群島】鹿兒島縣南部、薩南諸島南

半の島群。一に大島群島ともいひ、鹿兒島縣大隅國大島郡に屬す。吐噶喇諸島（川邊十島）と沖縄島との中間に散布し、大島を主島とし加計呂麻島・德之島・沖永良部島・喜界島・與論島等を含む。これ等の島は主として古生層より成るも、海岸には到る處に珊瑚礁の發達せるを見る氣温高く雨量多きため甘蔗の耕作盛んなり。此群島の名は古くより國史に見え、江戸時代には琉球國の域内なりしも、慶長十四年島津家久の琉球征伐以後その領有に歸し、現今北方の川邊十島と共に大島郡を成す。然し言語風俗いまなほ琉球に本とし、アマミも土人單にウシマと呼べり。

【奄美大島】鹿兒島縣大隅國大島郡に屬する奄美群島の主島。一に大島といひ、南西は大島海峡を隔てゝ加計呂麻島に對す。天武天皇十一年に入朝せし阿麻美人はこの島人なり。其後琉球に屬し、慶長十四年島津家久の琉球征伐以後その南方にある四島と共に島津家の領地となる。明治に至り又琉球藩に屬せしも十二年琉球藩を廢し沖縄縣を置くに及び、大島郡となりて大隅國に屬し、鹿兒島縣管下に歸し以て今日に至る。島は東北より西南に延び、長さ約五六粁、最大幅約三〇粁。大體に丘陵性を成し海岸出入多く良港灣に富み、島の南部は加計呂麻島と共に要塞地帶に入る。大島紬は本島の著名なる工產物にして、その起原は遠く二百年以前にあり、今や全島經濟生活大半の基礎をなすといはる。また本島及び德之島にのみ產する黑兎は、色黑く、目少さく、耳及び尾著しく短く、俊敏また比較的短き特徴を有し、奄美の黑兎として指定天然記念物たり。

アマミ　阿麻彌

【阿麻彌島】海見島・奄美島とも書く、奄美群島の主島奄美大島の古稱。

【阿麻彌山】一に阿麻美嶽とも書く。鹿兒島縣大隅國大島郡奄美大島の最高峯湯灣嶽の古稱。

アマヤマ　天山　伊豫國久米郡の郷（和名抄）。和名抄には訓を闕くも高山寺本には安末也末と訓す。今の愛媛縣温泉郡石井村に當る。大字天山に天山なる小丘あり。大和國の天香山と共に降り著きし山なりと傳ふ。阿波國アマノヤト山は天山の異傳か。釋日本紀引用の伊豫國風土記に「自二郡家一以東北在二天山一所名二天山一由者、俊在二天加具山一、自レ天天降時、二分。而以二片端一者一、天二降於伊豫國一、以二片端一者天二降於此土一、因謂二天山一本也」とあり。＊アマノヤト山

アマリ　海部　↓海部（郡）

アマリ　餘戸　↓餘戸

アマリコ　餘子村　島根縣伯耆國西伯郡の西北部。夜見ヶ濱半島の先端部にて東は美保灣に面し、西は中ノ海東岸の外江村・淺村に隣り、南は中濱村に續き、北は境町との間に上道村を隔つ。土地平坦にして田畑拓け、米・蠶を產し、製絲業盛んに行はれ又漁業も行はる。米子市・境間の縣道及び省線境線通じ、後者の餘子驛（昭和七年開業）あり。村名は本郡の境町にある本村の氏神餘子神社より起ると傳ふ。永祿年間この地に於て尼子氏の重臣龜井安綱と毛利氏の部將杉原盛重と戰ひし際に戰死せる者の古墳あり。また江戸末期の儒者にして京都と藩主池田慶篤との間の斡旋に盡力し、維新後は兵部省に出仕せる勤王の士景山龍造（贈從五位）の生地たり。

アマリヘ　餘戸　アマ・アマリ・アマル・アマルヘ・アマルベ等の稱呼にて各地に散在する此地名は其語原を一にし、もと普通名詞なるが後世固有名詞に轉化せるものゝ如し。大寶令の制は或地域内の戸を五十戸づゝに割りて里となし、里毎に長を置きて管理せしむ。しかと各地の戸必ずしも五十戸の倍數たる能はず、玆に殘餘の戸を生ず。これを名づけて餘戸といへり。時に一定地域の餘戸と隣接地域の餘戸とを合して一餘戸となせることあり。從ひて或は建置の間短く或は廢置等も頻繁なりし爲め其所在の今明ならざるもの少なからず。而して餘部・餘目等の郷名（中世）及び村名あるは戸と部・目は普相通ずるより蓋し其轉訛せしものならん。

【餘戸】陸奥（陸中）國磐澤郡の郷（和名抄）。其地いま何れか詳ならず。地圖を案ずるに北上川の西岸なる今の岩手縣磐澤郡相去村に當るか。一に小山村・南都田村・若柳村等の地なりともいふ。

【餘戸】陸奥（陸前）國名取郡の郷（和名抄）。今の宮城縣名取郡の增田・閖上の兩町の邊に當るか。名取郷の南東を割きて一郷と爲せるものならん。或は同郡の秋保村の地なりともいふ。

【餘戸】陸奥（陸前）國宮城郡の郷（和名抄）。今の宮城郡岩切村なりとも、又同郡大津村・七北田村の邊なりともいふ。いま岩切村に餘目の地名殘る。されば冠川の南に位す。餘目は餘戸の轉音。留守系譜に「留守氏、本苗伊澤、中古參河守家任代、始稱二餘目氏一」とあれば、留守家任この地に居住せしにより家名にも呼ばれしものか。

【餘戸】陸奥（陸前）國遠田郡の郷（和名抄）。其地いま詳ならず。蓋し清水郷と藤城郷（長岡郡）の南にして今の宮城縣遠田郡の北浦村なるやに推せらる。江合川の南岸に屬す。

【餘戸】陸奥（陸前）國桃田郡の郷（和名

抄)。其地いま詳ならず、或は宮城縣柴田郡沼邊村などにや。

【餘戸】 陸奥(磐城)國伊具郡の鄕(和名抄)。其地いま詳ならず、按ずるに宮城縣伊具郡西根村の地かと判ぜらる。一に角田町は其地なりといふ。

【餘戸】 陸奥(陸前)國色麻郡の鄕(和名抄)。其地いま詳ならず。惟ふにいまの宮城縣加美郡色麻村の地にて此村の大字清水・高根・平澤・小栗山などに當るか。

【餘戸】 陸奥(陸前)國賀美郡の鄕(和名抄)。其地いま詳ならざるも、今の宮城縣加美郡の宮崎村の邊ならんか。

【餘戸】 陸奥(陸前)國新田郡の鄕(和名抄)。其地いま詳ならざるも、今の宮城縣栗原郡の畑岡・玉澤の兩村に當るか。

【餘戸】 陸奥(陸前)國志田郡の鄕(和名抄)。其地いま詳ならざるも、郡の西北偏の地、今の宮城縣志田郡志田村に當るか。

【餘戸】 陸奥(陸前)國玉造郡の鄕(和名抄)。今の宮城縣玉造郡の鳴子町・鬼首村などに當り、同郡の極めて山中に屬せる邑落なり。

【餘戸】 陸奥(陸前)國小田郡の鄕(和名抄)。其地いま詳ならず。諸鄕の位置より推定すれば鳴瀨川の兩岸に亙り中世の松山鄕に當ると思はる。松山鄕は今は宮城縣遠田・志田の二郡に分管す。松山鄕は志田郡松山町を中心とす。

【餘戸】 陸奥(陸前)國桃生郡の鄕(和名抄)。其地いま詳ならず。今の宮城縣桃生郡の十五濱村と本吉郡の十三濱村などの海に面せる地か。一に桃生郡野蒜村・小野村・鷹來村・廣淵村・北村・前谷地村等の地なりともいふ。

【餘戸】 陸奥(陸前)國牡鹿郡の鄕(和名抄)。今の宮城縣牡鹿郡の南半をなす牡鹿半島に當り、俗に遠島と稱する地方。一に女川町の地なりともいふ。

【餘戸】 出羽(羽後)國河邊郡の鄕(和名抄)。其地今いづれの地なるか詳ならず、或は今の秋田縣河邊郡岩見三內村か。

【餘戸】 出羽(羽後)國飽海郡の鄕(和名抄)。其地いま詳ならざるも、諸鄕配置の形勢より推せば、今の秋田縣由利郡矢島町と東瀧澤・西瀧澤の二村に當るものゝ如し。卽ち子吉川の上流、鳥海山・丁嶽の陰に當るか。

【餘戸】 出羽(羽後)國山本郡の鄕(和名抄・高山寺本)。其地いま詳ならず、或は今の秋田縣仙北郡の南楢岡・內小友・外小友の四村に當るか。一に畑屋村・飯本村の地なりともいふ。

【餘戸】 出羽(羽後)國雄勝郡の鄕(和名抄)。其地いま詳ならず、或は中村鄕の東北にして岩崎川の上流なる今の秋田縣雄勝郡稻庭町と皆瀨・東成瀨・西成瀨の諸村の地か。又一に稻庭町・皆瀨村・三梨村等の地なりともいふ。

【餘戸】 出羽(羽前)國出羽郡の鄕(和名抄)。今の山形縣東田川郡の北部に位する余目町及び常萬・八栄里・請川の三村にも亙りたるものと思はる。其の內余目は餘戸の轉訛。東鑑・文治五年九月「二品令ㇾ求ニ奥州羽州兩國省帳田文已下文書ー給。而平泉館。炎上之時。燒失云云。仍件兄弟。唯注ニ進兩國繪圖ー。幷定ニ諸郡券契鄕里田畠ー。山野河海。悉(以)見ニ此中ー也。注ニ遍餘目三所ー之外。更無ニ犯失ー誅家ニ御感之仰こ」とある餘目も此地なり。

【餘戸】 出羽(羽前)國置賜郡の鄕(和名抄)。其地いま詳かならず。或は今の山形縣西置賜郡小國谷に當るともいひ、一に南置賜郡中津川村は其地ならんかともいふ。

【餘戸】 陸奥(岩代)國磐瀨郡の鄕(和名抄)。其地いま詳にせず、或は今の福島縣岩瀨郡の白方・西袋・仁井田・白江の諸村に當るか。

【餘戸】 陸奥(磐城)國標葉郡の鄕(和名抄)。其地いま詳ならず。標葉・磐瀨の二郡の位置よりして請戸・幾世橋二村の邊ならん。卽ち今福島縣雙葉郡の東、海岸をいふ。

【餘戸】 陸奥(岩代)國會津郡の鄕(和名抄)。其地いま詳ならざるも諸鄕の位置を考ふるに只見川の下流の地に當り、卽ち今の福島縣河沼郡柳津村の邊か。源平盛衰記に陸奥國の人に横新太夫なる人あり、横と餘戸は調音通ずれば、或はその地名を以て氏と爲したるものなるべし。

【餘戸】 陸奥(磐城)國菊多郡の鄕(和名抄)。其地今の福島縣石城郡植田町・泉村・渡邊村等の地に當るか。

【餘戸】 常陸國久慈郡にありし鄕(和名抄)。其地いま詳ならざるも、或は今の茨城縣久慈郡天下野村・諸富野村の邊か。又久慈川の上流に沿ふ下小川村・上小川村の地ともいふ。

【餘戸】 下總國猿島郡にありし鄕(和名抄)。其地いま詳ならず。或は今の茨城縣猿島郡の古河町・新鄕村の邊に當るか。

【餘戸】 下總國相馬郡にありし鄕(和名抄)。今の茨城縣北相馬郡守谷町・大野村・小絹村・稻戸井村の地なるべし。守屋町に城址あり。千葉系圖に常胤の子師常が相馬郡を領し始めて此處に築き相馬氏を稱し、子孫世襲せしも天正年間に滅ぶ。房總治亂記に菅沼定政は下總の相馬に封ぜられ、その子定義攝津の高槻に移封せられ城廢すとあり。

【餘戸】 常陸國行方郡にありし鄕(和名抄)。其地いま詳ならず。郡鄕考に小幡村(いま要村の大字)の雨見に擬するも、地形上より考ふれば茨城縣行方郡延方村の地ならん。

【餘戸】 下野國足利郡にありし鄕(和名抄)。其地いま詳ならざるも栃木縣足利郡北鄕村・名草村の地に當るか。諸書に三重村の大字五十戸を以て餘戸の遺稱なりとするも疑はし。

【餘戸】 下野國梁田郡にありし鄕(和名抄)。其地今詳ならざるも、今の栃木縣足利郡氣賀村の地ならん。

【餘戸】 下野國鹽屋郡にありし鄕(和名抄)。其地今詳ならざるも、栃木縣那須郡上江川村の邊ならん。

【餘戸】 武藏國橫見郡にありし鄕(和名抄)。其地今詳ならざるも、今の埼玉縣比企郡東吉見村・南吉見村の邊に當るか。

【餘戸】 武藏國埼玉郡にありし鄕(和名抄)。大日本史國郡志に「今不ㇾ詳」とあり、蓋し郡の北部、利根川に近き埼玉縣北埼玉郡羽生町の邊ならん。

【餘戸】 武藏國幡羅郡にありし鄕(和名抄)。今の埼玉縣大里郡內なるも今詳ならず。大日本史國郡志に「按上野新田郡有ニ武藏島村ー古屬ニ本郡ー蓋此」とあり。

【餘戸】 武藏國大里郡にありし鄕(和名抄)。大日本史國郡志に「今不ㇾ詳」とあり。位置より推して今の埼玉縣大里郡小原村の邊の地ならん。又同郡明戸村の邊なりとの說あり。

【餘戸】 武藏國新座郡にありし鄕(和名抄)。大日本史國郡志に「今不ㇾ詳、按今新座村、疑其地也、在ニ白子北ー」とあり。其地詳ならざるも、今の埼玉縣北足立郡大和田町の地ならんか。

【餘戸】 武藏國足立郡にありし鄕(和名抄)。大日本史國郡志に「今不ㇾ詳、按鴻巢忍二領、在ニ郡西北ー疑其域也」とあり。其地詳ならざるも、今の埼玉縣北足立郡鴻巢町附近なりとも、或は東京市足立區の邊なりともいふ。

【餘戸】 上總國夷灊郡にありし鄕(和名抄)。南總郡鄕考に「餘戸は今の何れの地なるか審ならず」とあるも、諸鄕配置の形勢より恐らく今の千葉縣夷隅郡勝浦町・御宿町の地に當るならん。一說に同郡上野村・總野村の地なりともいふ。

【餘戸】 下總國印旛郡にありし鄕(和名抄)。下總舊事考に餘戸は癈せられて今の印東郡に天邊村あり阿萬倍と呼ぶと見ゆ。蓋し天邊は餘戸の轉訛なり。地は今の千葉縣印旛郡和田村の地にして同村の大字に天邊の名遺る。なほ川上村・彌富村・根鄕村も本鄕の內なるべし。

【餘戸】 安房國平群郡にありし鄕(和名抄)。其地今詳ならざるも、相模多聞院・壽永二年文書にも安房國群房莊餘戸村の名見ゆ。今の千葉縣安房郡稻都村大字御庄は中世群房庄と言へる地なればこの地に當るならん。

【餘戸】 下總國葛飾郡にありし鄕。下總舊事考に餘戸は今の何れの地なるか審かならずとあり、或は今の千葉縣東葛飾郡行德町の地にあたるか。一に今の東京市葛飾區新宿町金町の地なりといふも明ならず。

【餘戸】 相模國愛甲郡にありし鄕(和名抄)。其地今詳かならざるも、或は今の神奈川縣愛甲郡高峰村・愛川村の邊か。又津久井郡青根村・青野原村ならんとの說あり。

【餘戸】 相模國足上郡にありし鄕(和名抄)。新編相模風土記に「餘戸其地詳かならず」とあり。今詳ならずと雖も或は神奈川縣足柄郡上秦野村曾我村の地に當るならんか。

【餘戸】 武藏國都筑郡にありし鄕(和名抄)。其地今詳ならず。新編武藏風土記「餘戸は鄕名にはあらず、令式に據に、一鄕五十戸の限に出て、しかも別に一鄕を建るには、赤戸數足ざるとき其剩餘を別區として餘戸と云なり、或曰、あまりべと訓ずべしと、他郡これに倣ひ、按に當郡の餘戸は、今の久良岐・橘樹接界の所ならん、府を上として次第に鄕を置ときは、其邊最後にあたる、又是を久良岐郡の方より次第する時は、郡首に在べきなり」とあり。

【餘戸】 越後國磐船郡にありし鄕(和名抄)。越後野志に「餘戸鄕の所在今不詳」とあり。今の新潟縣岩船郡の西部日本海岸に面せる海府浦並にその北なる八幡村・大川谷村の地に當る。餘戸は海部に通じ、海部の民の住居なりしを知るべし。

【餘戸】 能登國鳳至郡にありし鄕(和名抄)。その地詳ならざるも、今の石川縣鳳至郡東部海岸の宇出津町・三波村より珠洲郡の小木町・本鄕村の邊に當る地方ならん。

【餘戸】 若狹國三方郡にありし鄕(和名抄)。其地今詳ならざるも、福井縣三方郡西田村の地に當るならん。一に本郡東北部の山東村の邊なりともいふ。

【餘戸】 甲斐國巨麻郡にありし鄕(和名抄)。今の山梨縣北巨摩郡清哲・神山・旭・大草・龍岡の諸村に亙る。中世は甘利莊と稱す。清和源氏武田一條氏の族この地に居り甘利氏を稱し、其族に上條・下條・東條の諸氏あり。武田系圖「甘利莊、爲ニ一條忠頼領邑ー、其子行忠居ㇾ此、稱ニ甘利氏こ

【餘戸】 信濃國佐久郡にありし鄕(和名抄)。其地詳ならざるも、今の長野縣南佐久郡平賀村・田口村の地に當るか。

【餘戸】 信濃國小縣郡にありし鄕(和名抄)。其地今詳ならざるも、長野縣小縣郡武石村の大字に余里あり、余里は音讀して餘里に同じく、アマリノサトと訓ずるを得、恐らくは此地ならん。

【餘戸】 岐阜縣土岐郡にありし村。大正十年木村を廢し、大字釜戸の區域を以て釜戸村を、大字大湫村の區域を以て大湫村を設置す。

【餘戸】 美濃國山縣郡にありし鄕(和名抄)。其地今いづれの地に當るか詳かならざるも、岐阜縣山縣郡千疋村の地か。或は一に武儀郡乾村・北武藝村の邊ならんともいふ。

【餘戸】 飛驒國荒城郡にありし鄕(和名抄)。其地今詳ならざるも、岐阜縣吉城郡河合村邊の地ならん。

【餘戸】 美濃國土岐郡にありし鄕(和名抄)。其地今詳ならざるも、岐阜縣土岐郡稻津村の邊ならんか。或は肥田村・駄知町・瑞浪町もこの鄕の中なりともいふ。

アマリ——アマル

【餘戸】尾張國山田郡にありし郷（和名抄）。尾張志に「餘戸今亡」とあり。其地いま詳ならざるも、愛知縣東春日井郡品野町の邊か。

【餘戸】伊勢國壹志郡にありし郷（和名抄）。其地今詳ならざるも、今の三重縣一志郡松ヶ崎村の地に當れるが如し。一に同郡の西南部の竹原村・八知村邊に當るとの說もあれど確かならず。

【餘戸】河内國若江郡の郷。和名抄は餘部郷の次に列したれば、蓋し同郷の餘剩か、されば舊の獅刀・小坂の二村などに在て西郡村の西に當り、今の大阪府布施市内に當る。※布施市

【餘戸】河内國錦部郡にありし郷（和名抄）。河内志に「餘戸今亡」とあり。今の大阪府南河内郡天見・川上・加賀田・三日市四箇村の地凡そ之に屬す。天見は餘戸の遺稱か。

【餘戸】播磨國西生郡にありし郷（和名抄）。大阪市西成區の内ならんも、其地いま詳ならず。

【餘戸】播磨國住吉郡にありし郷（和名抄）。安倍野は餘戸野の轉說ならんといふ。枕草子の阿倍原もこれに同じ、平治物語に平清盛熊野に詣で源義朝等の舉兵を聞きて途より還り、源義平これを阿倍野に要すとあり。今の大阪市西成區鉤潰勝間の地なるべし。

【餘戸】播磨國東生郡にありし郷（和名抄）。其地いま審ならざるも、大阪市東成區の内なるべし。一說、後世阿部野の名は餘戸郷に因むといへり。

【餘戸】播磨國揖保郡にありし郷（和名抄）。其地いま詳ならざるも、大阪府豐中市の地ならんか。或は豐能郡の中豐島村・南豐島村の地なりとの說もあり。

【餘戸】播磨國河邊郡にありし郷（和名抄）。其地いま詳ならざるも、今の兵庫縣尼崎市の地に當るか。或は又、伊丹町・稻野村の邊か充つるものあるも信じ難し。

【餘戸】播磨國印南郡にありし郷（和名抄）。其地いま詳ならざるも、兵庫縣印南郡の南部にある大獅町・的形村の邊か。

【餘戸】但馬國城崎郡にありし郷（和名抄）。今の兵庫縣城崎郡城崎町・港村の地に當るか。港村の大字小島に海神社あり、餘戸は海部の義なるべし。海神社は延喜式神名帳の城崎郡の名神大社にして但馬海部の祖、建田背命を祀る。

【餘戸】播磨國賀古郡にありし郷（和名抄）。其地いま詳ならざるも、賀古郡長田郷の餘戸にして、今の兵庫縣加古郡野口村なるべし。

【餘戸】播磨國飾磨郡にありし郷（和名抄）。今の兵庫縣飾磨郡余部村の地に當る。播磨風土記に漢部といふは讃岐國漢人等の移り住めるためなりとみゆ。また峯相記には後嵯峨天皇餘戸莊を書寫山に寄進せりとあり。

【餘戸】播磨國揖保郡にありし郷（和名抄）。今の兵庫縣揖保郡の播磨灘に面する揖保川河口の網干町・余部村の地にして余部はその遺稱。

【餘戸】但馬國美含郡にありし郷（和名抄）。今の兵庫縣城崎郡餘部村の地なり。但馬記に平氏の西海に滅びし頃、その族この地に匿れて餘戸氏を稱し、今日まで子孫存せりとあり。

【餘戸】大和國葛上郡にありし郷（和名抄）。其地いま詳ならざるも、奈良縣南葛城郡葛城村の地なるべし。大和志は、餘戸方廢・小殿村存、とあり。小殿は今葛城村の大字に其名稱遺る。

【餘戸】紀伊國日高郡にありし郷。和名抄刊本は全戸に作る。蓋し餘の略字余を誤記せるものならん。續風土記に「印南切目二莊は余戸の故地ならん」とあり、其地いまの和歌山縣日高郡の西北隅、衣奈村・白崎村の邊に當るか。

【餘戸】紀伊國海部郡にありし郷。和名抄刊本は全戸に作る。蓋し餘の略字なる余か誤記せるものならん。今の和歌山縣海草郡貴志村・木本村の地に當る。仲文集の紀國の郡か詠める歌に「いと、なか、なくさ、あまり、ありた、ひたか、むろいとなかきよはなくさますあきりありたえすひたかんむろにすまはや」

【餘戸里】出雲國島根郡の里。朝酌郷の北、山口郷の東にてほゞ今の島根縣八束郡内本庄村の西半部の地域。出雲風土記・船根郡「餘戸里、說ゝ名如二意宇郡一」

【餘戸里】出雲國意宇郡の里。今の島根縣八束郡の東南部・能義郡の境に近き地域八束郡揖屋町・意東村附近に當る。出雲風土記・意宇郡「餘戸里、郡家正東六里二百六十步」

【餘戸里】出雲國神門郡の里。稻荷郡の西部、出雲郡に接す。即ち今の島根縣簸川郡西田村の大部の地域。出雲風土記・稻荷郡「餘戸里、說ゝ名如二意宇郡一」

【餘戸里】出雲國神門郡の里。其地いま詳ならざるも、出雲風土記・神門郡「餘戸里、坂家南西三十六里、說ゝ名如二意宇郡一」とあれば、今の島根縣簸川郡山口村の邊にあたるか。

【餘戸】周防國佐波郡にありし郷（和名抄）。其地いま詳ならざるも、或は今の山口縣佐波郡島地村・出雲村・八坂村等の邊にあたるか。

【餘戸】周防國玖珂郡にありし郷（和名抄）。其地いま詳ならざるも、或は山口縣玖珂郡柳井町の地に當るか。柳井町はもと楊井庄と稱し、島津系譜によれば元弘二年、島津貞久に賜はりし地なりといふ。其名義も何郷の餘戸なるか、或は海部のアマを餘戸と假借したるものか詳ならず。

【餘戸】周防國熊毛郡にありし郷。和名抄刊本は全戸に作る。蓋し餘の略字なる余か誤記せるものならん。其地いま詳ならざるも、今の山口縣熊毛郡の麻里府村・麻郷村の地なるべし。又一說には同郡上關村長島の地なりともいふ。

【餘戸】阿波國勝浦郡にありし郷（和名抄）。其地いま詳ならざれども、今の德島縣勝浦郡小松島町の地ならんか。小松島の海濱は中世尼子浦といふ。蓋し海人の居邑たり。平家物語勝浦合戰の條に尼子浦の名稱見ゆ。

【餘戸】阿波國板野郡にありし郷。和名抄刊本は全戸に作る。蓋し餘の略字なる余を誤記せるものならん。高山寺本はこの郷を載せず。今の德島縣板野郡撫養町の地に當るか。阿府志に「全戸は廢ぜられ、那東・那西・大寺・矢武・神宅・西分・黑谷の諸邑は蓋し其域ならん」とあり。これ等の諸邑の地は今の板野郡大山村・松坂村に當る。

【餘戸】伊豫國伊豫郡にありし郷（和名抄）。余土の美寧寺舊記に「大化二年、僧道慈、願寺於伊豫郡餘戸郷、勸陽。水田十二町」とあり、元祿檢田帳に「伊豫郡余土村」とあり、伊豫温古錄に、近く余戸・保免・市坪の三邑を併せて余土村と稱すとあり。今の愛媛縣温泉郡余土村はその遺稱か。また同縣伊豫郡の西南なる沿海の上灘町・下灘村の邊ならんとの說もありて今詳ならず。

【餘戸】伊豫國久米郡にありし郷（和名抄）。今の愛媛縣温泉郡余土村・垣生村の地に當り、余土村の大字に余戸の名稱遺る。」に温泉郡小野村の地なりともいふ。安國寺の應永四年の文書に「伊豫國余戸之庄、大野森山」とあり。

アマリベ　餘戸　↓餘戸
アマル　餘戸　↓餘戸
アマルヘ　餘戸　↓餘戸
アマルベ　余部

【余部村】兵庫縣揖磨國飾磨郡の西南部。夢前川の右岸に沿ひて南北に長く（約八粁）東西に狹し（約一・五粁）。姫路市の西約二粁に位し、西は揖保郡伊勢村太市村に隣る。東部に細長き平地ありて農業行はれて米・麥を主產し、また蔬菜・花卉を栽培し、於油製造も亦盛んなり。大字青山は中國街道と作州街道の分岐點に當り、省線姫新線の余部驛（昭和五年設置）あり。本村は和名抄の飾磨郡餘戸郷の地にて、播磨風土記飾磨郡に漢部里とあるもこの地なり。名所圖會によれば聖德太子に仕へし秦川儀は、この余部住を氣有せしも、其裔孫武儀に至り、事につきて儀倉に籠居す、或る月夜に笛を忘れて笛を吹きし為頼家に聞かれ、頼家之を感ぜられ播磨の古里笠寺へ返し給ふとみゆ。〔稻岡神社〕大字青山に鎭座。郷社。祭神豐受姫大神・射目崎大神。創立年代不詳。近郷の產土神として崇敬篤し。例祭十月十五日。

【余部村】兵庫縣播磨國揖保郡の南部。網干町の北、旭陽村の西にて、西南は揖保川を隔てゝ御津村に對し、姫路市を距る西方約八粁。揖保川下流平野の一部にて農業行はれ、米・麥を產し、蔬菜・花卉の栽培も行はる。南は網干町へ、北は龍野町へ縣道を通じ、また省線山陽本線網干驛（旭陽村内）に近し。村名は和名抄の揖保郡餘戸郷の遺稱。

アマルベ　餘戸　↓餘戸
アマルヘ　餘部村　兵庫縣但馬國城崎郡の西北端。城崎町を距る西方約二五粁、香住町の西に接し西は美方郡濱坂町に隣りす。南境に久斗山（六七一米）峙ち、西境にも五〇〇米程度の山地あり、それらの山脚は日本海岸に向つて傾斜す。沈降海岸にて伊笹岬その他の岬角突出し海岸みな深多し。中部には東西に幅狹き低地あり米・麥・蔬菜・花卉の產あり。沿岸には漁業行はる。この附近東方の香住より西方の濱坂に至る間の西但馬海岸は、山陰第一の勝景にして、海蝕作用によりて千姿萬態の形狀を成せる絶岸礁嶼は造化の妙その比少なしといはれ、本村及び美方郡濱坂町に屬する但馬御火浦は名勝並に天然記念物に指定せらる。省線山陰本線東西に貫通し、村の東北部にある大字餘戸に鐵驛（明治四十五年設置）を置く。それより西一粁にして餘部鐵橋あり、漁村の上空に架りて頗る偉觀なり。此地は和名抄、美含郡餘戸郷の地にして天日槍命を祀る式内社伊佐々神社あり、また大字小島に海部神社あり。〔餘部陸橋〕餘部村中部にあり。鐵驛より西方久谷驛に至る間にて東下谷隧道と朝年隧道とを連絡す。我國最初のトレッスル式鐵橋にして高さ四〇米、長さ三〇八米餘。工費三十三萬圓、二箇年の日子を費して明治四十三年竣工せり。宮内御下に小網作漁港の集落を臨下し、又北方に渺茫たる日本海の波濤を望みて風光賞すべく、所謂餘部陸橋と呼ばる。〔但馬御火浦〕日本海の波濤に侵蝕せられたる集塊岩・凝灰岩・花崗岩その他諸種の火成岩より成り景勝の變化に富める海岸なり。色彩の異なりたる斷崖高く迫なりて其最も雄大なるものを鼻風岩となす。數多の岩脈は帶の如く隙處に露はれ洞門・洞窟はこれ等の岩脈若くは斷層に沿ひて生じ舟を入れ得るもの少からず、鈎鑑洞門・十字洞門は其主要なるものとす。岩礁・島嶼は點々として波間に散在し、トラキ安山岩の柱狀節理を成せる大島と朝燒夕陽を背に迎へて景致を添ふる北走鼠岬の朝日洞門とは奇勝中の尤なるものに屬す。

アマルメ　余目町　山形縣羽前國東田川郡の西北部。最上川下流の左岸に沿ひ、川を隔てゝ東は飽海郡松嶺町・内郷村に、北は南平田・中平田二村に對し、鶴岡市の東北約一〇粁、酒田市の東南約八粁に位す。庄內平野の中部にて土地平坦、水田廣く拓け米の產多く、養蠶・牧牛行はる。酒田市より新庄に至る道路は西北より東南に貫き、省線羽越本線は南北に通じて餘目驛（大正三年設置）を置き陸羽西線こゝより分岐して東南に走り、庄內米の集散地、また交通上の一要所をなす。古くは和名抄、餘戸郷の內にて、一に餘部にも作る。もと跡・千河原・塊・

世六木の舊諸村の合併して余目村となり大正七年町制を施行す。本町に吉野朝の頃、高師直の麾下に屬せし阿保氏の館址あり、阿保氏は武藏國兒玉黨の一族にて、秉慶寺に累代の位牌を存す。阿保氏沒落後は最上氏・上杉氏を經て、本庄藩酒井氏の領となりて明治維新に至る。※餘戸（アマベ）〔八幡神社〕大字余目字町に鎭座。郷社。祭神玉依姫命・息長足姫命・譽田別天皇。創立年代未詳なるも、長慶天皇女中帝間余目城主阿保氏城内に遷祀すといふ。降りて文化十一年社殿改造のことあり。近郷の鎭守と崇められる。

アマルメ　餘戸　→餘戸（アマベ）

アマルメ　餘目村　鼠島縣岩代國信夫郡の東北部。鼠島市の北方にて、東は瀨ノ上町につゞき、北は阿武隈川の支流小川を界として伊達郡東湯野・湯野二村に對す。鼠島盆地の中部に位し水田・桑畑拓け、米・繭を產す。省線東北本線は本村の地籍内に瀨上驛（大正十二年設置）を置く。本村の邊は近世まで餘目庄と呼ばれし所。餘目は蓋し餘戸の轉訛か。和名抄に郷名を闕くも、諸郷配置の形勢より推し信夫郷の餘戸なりしものゝ如し。或は山郷の餘戸ならんといふも遽に從ひ難し。大宇宮代に前九年の役源頼義奥羽征討の際鎭けりと傳ふる國府臺城址あり。城名は頼義此處に本陣を置きし當時は事實上陸奥の國府たりしよりかく稱せしものか。國府臺の近傍に日枝神社あり。頼義の勸請せるものといふ。同社の西側に尾上墓あり。傳へいふ、尾上は頼義に從ひて軍にあり、頼義、奥州鳥海山の戰に敗北し、君臣俱に六齡となれり、尾上之を聞き二十餘騎を率ゐて頼義を援け眞任の兵と戰ひて死す。碑は頼義の子義家の從者の裔なる源朝定の子朝明の建つる所なりと。また朝定の母の碑と傳ふるものあり、俗に緣切石と呼ぶ。大宇宮代は慶長六年二月、伊達政宗一萬五千の兵を以て伊達郡にあり、本庄繁長鼠島城を出でゝ兩軍大いに戰へる所（北越軍記）。〔日枝神社〕大宇宮代に鎭座。郷社。祭神大山咋命・大己貴命、社記によれば、永承年中源頼義奥羽征討の際、近江國比叡山より金幣を寄進し來り、初め當村に城を築きその西南隅に小祠を造りてこれを祀る。これ卽ち當社なりといふ。爾來武門武將の崇敬厚し。初め當社は遙隔何の西岸深町にありしも、何時の頃にか現地に遷祀せられしものなれば、里俗深町神社と呼ぶ。例祭五月一日。

アマワ　天和　→天川村（アマノガワ）（奈良縣）

アマンベ　海部

〔海部〕越前國坂井郡にありし郷。和名抄は安萬無倍と訓す。今詳ならざるも、鼠井縣坂井郡の日本海岸に面せる濱四郷村・東村・鹿巢村等海岸の漁村なるべし。

〔海部〕信濃國小縣郡にありし郷。和名抄は安末無倍と訓す。其地詳ならざるも、今の長野縣小縣郡丸子町に當るか。

アミ　安味・阿味　越前國足羽郡の郷。和名抄は阿美と訓す。延喜式の「越前國阿味驛馬五疋」とある地にして、いまの鼠井縣坂井郡春江村の地ならん。

アミ　阿見（阿彌・安見）村　茨城縣霞浦國稻敷郡の西北部、東北は霞ヶ浦に面し、西北は新治郡土浦町との間に東村を隔つ。概れ平坦なる臺地をなし畑地・林地廣く、霞ヶ浦沿岸には水田拓く、社線常南電鐵土浦より本村に延び阿見驛（昭和三年設置）を設く。當村は霞ヶ浦航空隊の所在地たり。本航空隊は大正十一年に設置せられ、當時我國海軍唯一の航空教育機關にて、水陸兩種の飛行隊・飛行船隊より成る。敷地實に八十六萬坪、丘上にある大格納庫は歐洲戰爭の戰利品にて獨逸のユーデルホルゲにありしものを解體輸送し現地に再建せるもの、此地は古くは和名抄、信太郡阿彌郷の地、高山寺本その他は阿彌に作るも彌は彌の誤りなるべし。中世以降は網村・安見村等と書けり。近世に至り阿見村に作りいま之に從ふ。

〔阿彌神社〕大字阿彌に鎭座。郷社。祭神豐城入彦命外數神、創立年代不詳。地方の古社にて延喜式內社に充つる說もあり。近郷の氏神として尊崇せらる。例祭十月一日。

アミイツシキ　網一色　→浦匂村（ウラウ）（神奈川縣）

アミウチバ　網打場　江戸時代同場所の一。深川松村町にあり、全體局見世、將軍御新葬の際、此町よりおろし網を上納する故起りし名稱といふ。但し網（アミ）と綱（ツナ）とを混同し、つな打場とも普通稱せらる。歸美車紫嵐子「深川網打場、此浮土變のふら人がら、大ていどふ店に輯す。引車勝れて甚し」辰巳婦言「折から廻しの女來りてお定りことすみ、船頭も網打場とはづして、跡は寄之助一人り火鉢をかかへ」

アミガサ　編笠

〔編笠峠〕甲信國境にある八ヶ岳の一峯。長野縣諏訪郡と山梨縣北巨摩郡に跨り、八ヶ岳諸峰中最南に位す。標高二五二四米。

〔編笠島〕大阪曾根崎新地西端にありし下等な遊里。今の上鼠島梅田橋北詰の邊。心中二枚繪草紙「編笠島の茶屋の噂」

アミク　天久　→眞和志村（マワシ）（沖繩縣）

アミクボノ　網磯野　豐後風土記に見ゆる地名。今の大分縣大野郡西大野村綿田附近に當るか。宇北平に阿志野（アシノ）の地名あり以て證となすに足るか。景行天皇筑紫御巡狩の際この地にて御饌を召されるとき國人の犀嗅しとて、大雷（阿那美須）と仰せられしため大雷斯と名づけしも、のち網磯野と訛れるものといふも遽に信じ難し。豐後風土記・大野郡「網磯野（在郡西南）。同天皇行幸之時。此間有土蜘蛛。名曰小竹鳥奥（訓志努汙意拘）。小竹鳥奥。此土蜘蛛二人。襲・狗御所。作。生憎屠五左衛門に見咎められて、無理に蓬戻さる。かくするうちに小春・治兵衛は遂に大長寺にて心中を遂げるといふ筋。當時々流に投じ大いに喝傳され、これより心中の流行を來し享保八年には心中なる熟語は禁ぜられ、以後相對死と申すべしとの布令を見るに至りしといふ。なほ大長寺は淨土宗の古刹、本尊は阿彌陀如來にて、境內には前記比翼塚のほかに、元和の役大阪方の戰死者の怨靈鯉と化して天滿川の邊に浮べるを葬りしと傳ふる鯉塚あり。心中天の網島・下「手に百八の玉の緒を、涙の玉に繰りまぜて、南無あみ島の大長寺、藍の外面のいさき川、流れみなざる穗の上を、最期所と著きにける」

アミシリ　網尻（郡）　北海道釧路國にありし郡。明治維新後國郡を制定するに當り、北見國網走郡の南方なる美幌・斜木禽等の六村を網尻郡として釧路國に屬せしむ。後明治十四年に至り、網走・網尻二郡を合併して網走郡に統一しこれを北見國に編入す。

アミダ　阿彌陀

〔阿彌陀嶽〕→和賀嶽（ワガ）

〔阿彌陀嶽〕甲信國境上にある八ヶ岳の一峯。八ヶ岳の主峯赤嶽の西に聳え、標高二八〇七米。長野縣諏訪郡玉川・原兩村の東境に屬す。

〔阿彌陀瀧〕岐阜縣郡上郡北濃村の大日岳南側にかゝる縣內第一の瀧。直下一九〇米。下は絶壁削れるが如く、瀧の左方に屏風岩あり。右に深さ約一一米、幅二九米、高さ二米餘の岩窟ありて中に觀音の小祠あり。往昔、長瀧寺の道猷法印洞中に護摩を焚きしに彌陀の像映ぜしより阿彌陀瀧と名づくと。

〔阿彌陀山〕比良山塊北端の一峯。滋賀縣高田郡の中部、廣瀨・水尾の二村に跨り、全山秩父古生層より成る。安曇川その北麓を東流す。標高四五四米。

〔阿彌陀峯〕京都市東山區東大路通七條の東方の山。標高約一九三米。東山三十六峯の一。一に豐國山。山腹と山麓との二箇所に阿彌陀堂ありしも元弘・建武の亂に廢滅す。頂上に豐公廟あるかもつて名高し。慶長三年八月十八日豐臣秀吉伏見城に薨ずるや遺言により其喪を祕し卽夜近親の人々のみにて阿彌陀峯に葬り、山麓太閤坦に神社を建て世には大佛修築と稱し、主として木食上人墳墓・社殿の經營にあたり、翌年四月社殿完成し、朝廷より豐國大明神の神號を賜ふ。豐臣氏滅亡後德川氏山上に廟所あるを歎ぜず、元和元年六月その神號を停め社殿を毀ち江戸時代を通じて荒廢するに任せたりしため山上の廟所に至る道さへ失ひしといふ。明治元年豐國神社（同六年別格官幣社に列せらる）を再興せしも、その位置は舊方廣寺大佛殿址の西方にして全く舊位置に非ず。明治三十年秀吉の三百年忌を行ふに際し大いに山上の豐公廟を修築し瓦大な五輪塔を建て太閤坦より約五百級の石段を作り豐公廟に達す。

〔阿彌陀池〕大阪市西區北堀江上通四丁目、和光寺境內にある池。アミダガイケともいふ。土地にては通常アミダイケと稱す。此地古くは欽明天皇の朝、物部尾輿・中臣鎌子等論奏して小墾田向原寺の佛像を流棄せし難波堀江の古蹟と傳ふ。池は元祿十一年信濃善光寺大本願智善の募命により和光寺開創の際に開鑿せるものにして、池の中央の小島に放光閣ありて內に阿彌陀三尊を安置す。また和光寺の寺前に寶暦頃阿彌陀池前と呼ぶ岡場所あり、のち單に堀江ともいへり。曼蛾々亭梅日記・下「羽織もぼいと堀江中、佛浮き出る阿彌陀池、人の浮氣はさぞあらん」

〔阿彌陀村〕兵庫縣播磨國印南郡の中部。加古川町の西方、姫路市の東方にあり、南は伊保村を隔てゝ曾根町に近し。北境に高御位山（三〇四米）あり、東部西部にも低き山地あるも中部より南部にかけては平坦にて耕地拓け、米・麥・葉煙草・雜穀等の產あり。明姫國道と省線山陽本線並行して東西に走り、後者の曾根（明治二十一年開業）ありて交通は便利なり。縣社生石神社あり上代の遺蹟を傳ふ。明治天皇阿彌陀御小休所は指定史蹟。此地に和名抄、大國郷に屬せるもの如く、古より阿彌陀驛・阿彌陀道と呼ばれ山陽道の驛次として著はる。今省線山陽本線

の曾根肆（明治二十一年設置）あり。延元元年五月足利高氏九州より攻上り南朝の忠臣兒島範長此地に戰ひて討死せしこと太平記に見ゆ。〔生石神社〕大字生石字寶殿山に鎮座。縣社。祭神少彦名命・大穴牟遅命。往古の鎮座にて生石子大明神・高御位大明神、石寶殿。靜が窟とも稱す。神代の遺蹟として世に知らる。萬葉に「大なむち少彦名のおはします靜か岩屋は幾世經ぬらん」と見え、播磨名所巡覽圖會に「石殿なる以て神體とす、大きさ二丈三尺四方、高さ二丈六尺云々」と見ゆ。古來領主・藩主等上下の尊信篤し。例祭十月十九日。〔時光寺〕大字阿彌陀にあり。淨土宗西山派。阿彌陀堂ともいふ。遍照山と號す。建長元年西山上人の弟子時光の創建。建長六年後嵯峨上皇の勅願寺となる。初め曾根天神の側に建立、文永十一年現地に移る。

アミツ　網津村　熊本縣肥後國宇土郡の東北部。和名抄の宇土郡大宅郷の內か。東は宇土町との間に緑川村・舊村を隔て、北は緑川口南岸にて島原灣に臨み、西は網田村に隣りす。南境には大岳の山嶺、東西兩境にも小山地あり。中部より北岸は平低にして田畑廣く米・麥を主產物とし、其他蔬・水產物少なからず。省線三角線北部を横ぎり住吉驛（明治三十二年設置）を置く。海岸兩部には奇礁亂立し、笠岩・宇土小島・鳳流島等あり。鳳流島は一に櫻島といひ、古來歌の名所として知らる。伊勢物語「名におはば伐にそあるべき鳳流島渡の濤衣著るといふなり」（住吉神社）縣社。祭神、表筒男命・中筒男命・底筒男命・氣長足姫命。社傳に後三條天皇の御宇、國司藤池則隆攝津住吉神を勸請せしに創まるといふ。細川家の崇敬厚し。例祭陰曆九月十三日。

アミノ　網野　〔網野〕丹後國竹野郡の郷（和名抄）。今の京都府竹野郡網野町及び郷村・鳥津村に當る。東大寺天平勝寶四年の文書に竹野郡網野郷封五十戸と見ゆ。名稱の起原は此地の網野神社の明細帳に「垂仁帝の御代天湯川板擧命當地に來り浮べる白鳥を取らんとて澄ノ江の水笑松原村の邊津袖に御新營ありて此の水江に網を張りしによりて後水の江網野とは稱するなり」とみゆるに據る。

〔網野町〕京都府丹後國竹野郡の西北部。北は日本海に臨み北境に小濱湖を擁し淺茂川河口に淺茂湖を抱く。省線宮津線の網野驛（昭和元年設置）あり、また淺茂湖の海口に淺茂川港（指定港）の小舟地を有し水陸の交通便なり。丹後縮緬を以て名ある峯山の北方約九粁に位し絹織の產額多く外に米・麻・竹製品・水產物等も少なからず。明治三十二年町制施行。同三十七年本町及び淺茂川村を廢し其地籍を以て更に網野町を置く。郡制廢止以前郡役所の所在地たり。此地は和名抄、網野郷に屬し古くは日下部首等の住める所いま日下部首の祖彥坐命を祀る式內網野神社あり。小濱湖（離湖）は面積〇・五一方粁の淡水湖。この小濱湖より淺茂湖に至る一帶の海濱は水江浦と稱する白砂青松の景勝地にして海水浴の好適地、俗に浦島太郎の故事を傳ふ。淺茂川港の入口に瓶島と呼ぶ小島あり、頂上に小祠ありて曾浦島の親なる人子なきを悲しみ天に祈り百日にして浦島太郎を得たる所なりと。萬葉集の浦島子を詠める歌に水江・住吉と見ゆるは共に此の邊一帶を指せるものか。萬葉・九・水江浦島子を詠める一首「春の日の　霞める時に　住吉の岸に出て居て　釣船の　とをらふ見れば　古の　事そ念ほゆる　水江の　浦島兒か　堅魚釣り　鯛釣り矜り　七日まで　家にも來すて　海界を過きて榜き行くに　海若の神の女に　邂に　い榜き向ひ　あひとふらひ　こと成りしかば　かき結ひ　常世に至り　海若の　神の宮の　內の重の　妙なる殿に　携はり　二人入り居て　老もせず　死もせずして　永き世に云々」〔銚子山古墳〕指定史蹟。網野町の南方に連なる丘阜の上にあり。長徑約二〇〇米、前方後圓の大車塚にて三段に築かれ、後圓部の背後に淺址あり、幅二〇米、墳上に礎の葺石遺存し、埴輪圓筒を繞らせるもの。崇神天皇の御代四道將軍の一として丹波地方に遣はされたる丹波道主命の墓とも或は道主命の御親彥坐命（村社網野神社の祭神）の御墓とも傳ふ。また後圓部の南六五米に小銚子塚と呼ぶ小墳あり。長さ六〇米、葺石及び埴輪圓筒を繞らす。前方部の北二〇米にも一墳あり、墳上に石室を露出し、宇多法皇を祀るといふ寶平堂と呼ぶ小祠あり。〔網野別神〕祭神浦島太郎。浦島大明神・淺茂川明神ともいふ。もと日下部首の祖彥坐命を祀りしものか後世誤れるならん。松風村雨東帶鑑、五「抜浦島の翁が昔日本紀を引かせられ、更に疑ふべからず生きながら神に齋ふべしと、あみの明神と神號を給はり、丹後風土記に載せられ」

アミノウラ　網の浦・留鳥浦　萬葉集に見ゆる地名。その地いま詳かならず。恐らくは讃岐の內なるべしといふ。萬葉・一、讃岐國安益郡に幸せる時、軍王、山を見て作れる歌「霞立つ　長き春日の……網の浦の海處女らか　燒く鹽の　含ひそ燒くる　香か下こころ」また萬葉・一一（或本）「なかなかに君を戀ひすは留鳥浦の海人ならましを玉藻刈る刈るし」また一說につぬのうち（綱能浦）にて讃岐國鵜足郡津野郷の海濱なるべしともいはる。もし果して然らば古の津野郷はいまの綾歌郡字多津町・土器村の地に當る。

アミハリ　網張　→西山村（岩手縣）

アム　阿武　→阿武郡（山口縣）

アムチ　淹知・奄智　大和國にありし地名。其地今の何れの地なるか詳ならず。奈良縣磯城郡川東村に大字海知あり、今カイチと訛るも往昔はアマチと訛ぜしものか。また山邊郡二階堂村にも大字奄治あり。この二地が郡境を隔てゝ相近接せるより見れば、或ひはこの邊の稱呼なりしか。要するに奄知氏の居邑この邊にありたる事は明かなり。姓氏錄「奄智造、額田部湯坐部同祖、天津彥根命十四世孫建凝命之後也」

アムツ　網津　薩摩國の古肆名。延喜式に納津肆、肆馬五疋傳馬五疋と見ゆ。網津は式に納津、延開本細津に作るも何れも網津を誤りしもの。今鹿兒島縣薩摩郡水引村大字網津に當る。この地は古くは高城郡に屬し川內川の河口の右岸に位し國府の津頭たる京泊あり。のち川內灣といふ。

アムロ　阿室島　沖繩縣慶良間列島の一小島。島尻郡座間味村に屬す。東は慶良間海峽を隔てゝ渡嘉敷島に、西は阿嘉海峽を隔てゝ阿嘉島・慶留間島に、北は座間味島に對す。

アメ　雨　〔雨ヶ嶽〕靜岡縣駿河國富士郡と山梨縣甲斐國西八代郡に跨がる山。駿州中道往還の西に聳ゆ。標高一七七一・七米。東は龍ヶ嶽に連なり、その東北麓に本栖湖を湛ふ。

〔雨濃〕鳥取縣岩美郡大茅村にある瀧。袋川の上流蘇谷にかゝり、高さ約三九米、幅約一・八米。飛流直下岩角を劈きて來りその聲百雷の墜つるが如く、奇觀壯絶を極む。傍に笞瀧・布引瀧の二瀧あり。この附近一帶楓葉濃丹碧潭と相映じ、秋光頗る絶佳なり。

アメザクラ　雨櫻　靜岡縣小笠郡にありし村。昭和七年同郡垂木村と本村を以て櫻本村を新設す。

アメタキ　雨瀧山　香川縣讃岐國大川郡富田村の北部。東方津田町との境上にある山。標高二五四米。頂上に天瀧城址あり。城は長祿年中讃岐國の守護細川氏の被官安富盛長の築く處にして、孫盛方に至りて城廢ぜり。

アメノオシコロワケ　天之忍許呂別　隱岐之三子島の一名。天は天上、忍はオホジの約、許呂別は尊稱。古事記・上「次生二隱岐三子島一、亦名天之忍許呂別」

アメノカクヤマ　天香具（天香）山　高天原にありて神祭に深き關係ある山。古事記・上「內二拔天香山之男鹿之肩一抜而、取二天香山之天波波迦一……天香山之五百津眞賢木一矣……天宇受賣命手次繫二天香山之天之日影一而」この山高天原より磯つゝ、一片は大和に墜ちて天香山となり、一片は伊豫に墜ちて天山となりしといふ傳說あり。大和風土記「天上有レ山分而墮レ地、一片爲二伊豫國之天山一、一片爲二大和國之香山一」※天香久山

アメノモリ　雨杜　山城國にありしといふ杜。歌枕。所在いま詳ならず。夫木・二二「ありとてもとふ人なくてふる さとに雨のもりくる音ぞかなしき　和泉式部」

アメノヤスカワ　天安河　高天原にありといふ傳說的の河。實在の河を指すこと能はず。古事記・上卷に天照大神と素戔嗚命の、此河を間にして誓ひを立てられ、天照大神窟屋戸を閉ぢて籠りましゝ際、八百萬神は此の河原に集まりて大神の御心を慰むる策を講じたり。

アメノヤスノカワラ　天安之河原　天安河の別稱、天八十河中・天八湍河原。古事記・上「是以八百萬神、於二天安之河原一神集集而」

アメノヤセノカワラ　天八湍河原　八湍は多くの瀨の義。天安之河原に同じ。古語拾遺「高皇產靈神、會二八十萬神於天八湍河原一議二奉謝之方一」

アメノヤソノカワラ　天八十河中　八十は安の轉。天安河原に同じ。書紀・神代紀・一書「其血激越墮二於天八十河中所在五百箇磐石一」

アメヒキ　雨引山　和歌山縣伊都郡の北部にある山。九度山町と見好村との境に峙ち、標高五〇四米。その北麓を紀ノ川西流して、南岸に河原なる。

アメフリ　雨降山　神奈川縣愛甲・中の二郡に跨る大山の別稱。

アメマス　阿女鱒岳　北海道後志支廳余市郡の東南方赤井川村に屹つ山。赤井川カルデラ東南部の一峯にて小樽市の南約一七粁に位す。標高一〇一四米。

アメミヤ　雨宮　→笛更村（北海道河東郡）

アメミヤガタ　雨宮縣村　長野縣信濃國埴科郡の西北部。千曲川の右岸に沿ひ、西は屋代町、東は清野村を隔てゝ松代町あり、北は川を挾みて更科郡篠井町に對す。東北境には妻女山（五四六米）あり山嶺南方に延び東部は山地なるも西半は低平にて田畑多く、米・麥を產す。社線長野電鐵通じ雨宮驛（大正十一年設置）を設く。古くは和名抄、埴科郡屋代郷の地なるべく。大字雨ノ宮には中世桓武平氏村上氏の族と稱せらるる雨宮氏の居邑たり。對岸の更級郡の横田・篠井に至る渡津を雨宮渡といひ、川中島合戰の際の主要なる地點たり。雨宮氏は風間・風祭・藤巻と共に甲州の四姓と稱し、甲陽軍鑑に先方衆屋代七十騎・雨宮七十騎とあり。村名は雨宮・土口・生萱の三部落を合併し、生萱は古く埴科縣といひしに因み、雨宮縣と命名す。〔雨宮坐日吉神社〕大字雨宮に鎮座。縣社。祭神大山咋命外數柱。舊稱日吉山王宮。例祭四月二十八日・九月二十三日。

アメヤマ　雨山　三河國の歌枕。いまの愛知縣額田郡宮崎村の大字雨山に當る。戰國の頃には奥平氏の城塞のありしところ。夫木・八「雨山に來つつ鳴けはや子規聲の色さへぬれわたるらん　鶯忠」

アモー　天生　→河合村（岐阜縣

吉綾郷）

アモリ　安茂里村　長野縣信濃國上水内郡の南部。長野市の西南に續き、南は更科郡青木島村・川中島村に接す。西部に富士ノ塔山（九九八米）、北部に旭山（七八四米）あり、その山脚東部・南部に降り大部分山地なるも東南部は犀川左岸の平地に屬し水田多く、山地の南部には桑園拓け、米を產し蚕糸盛んに行はる。長野市より松本平の北部に至る大町街道ぼゝ西南に走る。〔無當院〕大字小市にあり。浄土宗。開創年代不詳。昔天台宗たりしも、天正二年慶喜和尚のとき改宗す。即ち和尚を中興開山となす。本尊一光三尊の阿彌陀如來は聖德太子御作の銅佛なりと傳へらる。境内の觀音堂は當國三十三番札所の第十二番靈場にして、祐天上人の名號を藏ぜり。

アヤ　亞椰・亞耶　日向國の古郡名。延喜式に亞椰郡馬五疋とあり。和名抄の諸縣郡山鹿郷の地といふも詳かならず。いま宮崎縣東諸縣郡綾町に大字綾町あり。恐らくはこの地にありしものならんか　※綾町

アヤ　阿野（郡）　讃岐國の古郡名。和名抄は綾と訓じ新居・山田・羽床・甲知・鴨部・氏部・山本・林田・松山の九郷に分つ。景行紀・五十一年の條に「日本武尊子、武卑王、是讃岐綾君之始祖也」とあり。延喜式に當國より種々の綾を貢進せる記載あるより見れば、其織工の住みたるに據りて地名の起りたるものならん。高野集軍王歌序にみゆる「安茂郡」また播磨風土記にみえる「漢郡」及び僧馬樂に見える「阿夜米郡」等は皆本郡を指せるもの。中世南條・北條の二郡に分れしも、寛文年中書に復せり。後世土俗誤りてアノといひしも貞享元年アヤと訂正す。明治三十二年鵜足郡と合して綾歌郡となり現今に至る。※綾歌郡

アヤ　綾

【綾（郡）】　伊賀國の古郡名　→阿拜（郡）

【綾川】　香川縣讃岐國綾歌郡にある川。一に櫃川・北條川といふ。郡の南部粉所村に發源し、北流して櫃宮村を過ぎり、林田村に至りて海に入る。流程凡そ三六粁。櫃宮村中部の邊には花崗岩の瓦石河身の所々に累積し、河水激湍深淵を成す。この川古より歌枕として知られ「瀬なはやみ岩にせかるる櫃川のわれても末に逢はむとそ思ふ　崇德院」「おのつから岩にせかれて諸人に物思はする櫃川の水　西行法師」等の歌を殘せり。

【綾町】　宮崎縣日向國東諸縣郡の南西部。大淀川の支流本荘川上流の地にて、宮崎市の西北方約一六粁を隔つ。東西約一〇粁、南北約一六粁（共に最廣部）の地を占むるも、東境には掃部岳（一二二三米）・鞍掛岳（八三一米）等の山嶺連なり西境中部に大森岳（一一〇九米）、南部に七熊山の東嶺等ありて山地深し。綾北・綾南の二川（共に本荘川の上流）西隅西諸縣郡より町を西北——東南に流れ、その合流點に近き町の東南部に伸延平地をつくり田畑よく拓く。北浦・中尾・大口の官有森あり、木材・薪・炭等の林產を主とし、また米・麥等の農產あり。本町は和名抄、諸縣郡山鹿郷の地といひ、延喜式に賀伽瓦郷古驛のありし處にして大字南俣に綾宿の遺名あり。昭和十年町制を布く。※亞郷　〔綾神社〕　大字南俣字大工園に鎮座。郷社。祭神、瓊瓊杵尊・彦火火出見尊・鸕鷀草葺不合尊・倭建命・神武天皇・應神天皇・仲哀天皇・神功皇后。

アヤイ　文井　丹波國何鹿郡の郷（和名抄）。其地いま詳ならず。地理志料は文井は久井の譌にて、今京都府何鹿郡志賀郷村の大字内久井あり。本郷を此邊に假定せんとするも如何にや。

アヤウタ　綾歌郡　香川縣（讃岐國）二市七郡の一。縣の中部に當り、東は香川郡、西は仲多度郡、南は德島縣美馬郡三好郡に界し、北は瀬戸内海に濱す。東西約一五粁南北約三〇粁、面積三九八方粁餘。南部は讃岐山脈の山地にして、その南境には大川山（一〇四三米）・龍王山（一〇五七米）等の山塊聳え、土器川・綾川等この山間に發源、北流して瀬戸内海に注ぐ。中部以北は主として花崗岩より成る臺地と、これを貫ける安山岩の孤立峯多く、中にも飯ノ山（讃岐富士、四二二米）・青ノ山（二二四米）・律ノ山（一八七米）・火ノ山等は郷高大ならざるも圓錐形の山容を呈するを以て著はる。これらの山峯と臺地の間には所々に第四紀層の小平地あり、河流は短く水量多からざるを以て到る處に灌漑用池堵の築造せらるゝあり稻作盛んに行はる。海岸は波靜かなると降水量少なきと海深大ならざるとを利して鹽田よく發達せり。高松市より西する國道は北部を、縣道は中部をかいづれもほぼ東西に通じ、また省線琴讃本線は前者に、社線琴平電鐵は後者に沿ひて走り、琴平急行電鐵は郡の北西部を横む。製鹽業盛んにしてその產額は縣下郡市中の首位を占め、農產また榮えて米・麥・大豆・甘藷等を產し、また麥稈及び鯉木の織田・麥粉等の工產を出す。本郡は明治三十二年もとの阿野・鵜足二郡の合併して綾歌郡となりしもの。※阿野（郡）・鵜足（郡）

アヤオリ　綾織村　岩手縣陸中國上閉伊郡の西南部。釜石街道に沿ひ花卷町（稗貫郡）を距る東方約二四粁。遠野町の西に隣りす。北上山地の中部にて南境には檜澤山（八二〇米）、西境には笠通山（八六九米）、北部には石上山（一〇三八米）、東北境には高清水山（七九八米）ありて臺地狀山地廣く、北上川の一支猿ヶ石川北部よりの小支を容れて南部を東西に貫き其川沿ひに輻狹き平地をつくり水田・耕地拓け、米の產多し。近時、養蚕・牧畜盛んに、牛・馬を出し、百合の栽培・蕈栽工の副業行はる。省線釜石線・遠野街道は釜石街道の南を猿ヶ石川に沿ひて通じ、前者は岩手二日町・綾織二駅（共に大正三年設置）を置く。村内に縄文土器關係の遺蹟多く、古くより學界に紹介せらる。村名は應神なる大沼ありて蛇多し、こゝにある時天女天降りて蛇の絲をもつて綾を織りしといふ傳說に因むといひ、本村光明寺に其遺物と稱するものを存すといふ。またアイヌ語にて水理ある器物の意なりともいはる。寛永の初年宇夫方清左衛門なる者、本村の大字新里に平地あれども水利に惠まれざるを慨き、角鼻より猿ヶ石川を分水して水田を得たり、その測量に於いて水準を求むるため角鼻の窓風西風曾に夜提灯を點じて其光を利用せしといふ。この用水は今も尚ほ利用せらる。

アヤキ　綾木村　山口縣長門國美禰郡の東部。太田町の東南隣にて、東は山口市と阿武郡佐々並村に界す。東境に西風廻山（七四二米）、北境に矢櫃山（六五三米）ありて村の東北部は山地原野廣く、西南部には厚東川の支流大田川上流にそひ細長き小低地ありて米・藺・牛乳等を產す。縣道太田町及び小郡町へ通ず。古くは和名抄、作美郷の地に當るといふも詳ならず。大内義隆記に「大内殿は山口を出て、綾木と云ふ所にて、夫馱馬二疋寄ひ取り、岩永の御心庵に着き云々」と見ゆ。〔八幡宮〕大字宮ノ峯に鎮座。郷社。祭神應神天皇・仲哀天皇・神功皇后。創立年代未詳なるも室町時代の古社にて文安四年の大般若經、永祿四年の緣起篤藏す。江戸時代には藩主毛利氏の崇敬あつく、社殿造營・寄進等の事あり。例祭三月十五・十六日、九月十五・十六日。

アヤサト　綾里村　岐阜縣美濃國不破郡の東南部。西濃平野の西部にて、東は揖斐川に入る杭瀬川を限りとして大垣市に隣る。土地低平、水田よく拓け米の產多し。縣道通じ、大垣市に近く交通不便ならず。大字野口は西尾豐後守光教の居邑たりし地。光教初め氏家卜全に屬しのち織田・豐臣二家に仕へ、遂に德川氏に歸す。

アヤシ　愛子　省線仙山東線の駅（昭和四年設置）。宮城縣宮城郡廣瀬村上愛子にあり。

アヤシ　阿也志浦　常陸國又は武藏國にありといふ。歌枕。其地いま何處にあたるや詳ならず。名寄「立しきりこれも一つにさわくなりあやしのうらのなみの心や」

アヤセ　綾瀬

【綾瀬】　埼玉縣南埼玉郡にありし村。昭和九年蓮田町となる。

【綾瀬川】　武藏國の東部にある川。元荒川の支流。埼玉縣南埼玉郡平野村にて分れ南埼玉・北足立兩郡界をなして東南に流れ、草加町の東を過り南に流れて東京市に入り、足立區・葛飾區を經て隅田川に注ぎ、一部は荒川放水路の東側を流れて中川放水路に入る。流程約四〇粁。昔の「錦そと見るや心のあや瀬川彩る紅葉をいかで折らなむ　戸田茂睡」

【綾瀬】　武藏國東部の地名。元荒川の分流綾瀬川下流沿岸の地にて、江戸時代將軍の折々鷹狩を催せし所。その南部は南葛飾郡に屬し、堀切・小菅・柳原・千葉の部落ありしも、後合併して南綾瀬村（後に町）となり、また北部は南足立郡内に屬し、伊藤谷を中心に附近の新田を合して綾瀬村といひしも、昭和七年南葛飾・南足立二郡は共に東京市に編入せられ、南綾瀬町は葛飾區、綾瀬村は足立區の一部となる。綾瀬村の地は五反野南町・五反野北野・伊藤谷西町・四家町等となる。

【綾瀬村】　神奈川縣相模國高座郡の中部。相模野臺地の中部にて、西方は愛甲郡厚木町との間に海老名村を隔て、南は御所見村、北は大和村、東は溝谷村に隣る。概ね平坦にて到る處桑畑拓け、麥・甘藷を產し、養蚕盛んに行はる。大字早川の村社五社大神（祭神）は國頭に石あり、日本武尊の東征の時御休息し給ひし遺蹟なりと傳ふ。

アヤド　綾戸　→荒崎村（岐阜縣不破郡）

アヤノコージ　綾小路　平安京の東西に通ずる道路の一。幅四丈。四條大路の南。五條坊門小路（今の佛光寺通に當る）の北にありて今に其の名稱を存す。宇多源氏にして諸大夫家の一たる綾小路家の名稱は此の通に因む。

アヤノマツヤマ　綾野松山・綾松山　讃岐國の古地名。阿野又は綾は古郡名、松山は郷名にて綾川の下流の地を稱せしもの。今の香川縣綾歌郡松山村はその一部の稱。此處の白峯には崇德天皇の御陵あり。※白峰

アヤハタ　綾幡　豐前國築城郡の郷（和名抄）。今の福岡縣築上郡下城井村の東部、及び葛城村邊の地ならん。下城井村の赤幡八幡宮は綾幡の訛ならん。

アヤベ　文部　美濃國不破郡の郷（和名抄）。今の岐阜縣不破郡靜里村・綾里村の邊に當るといふも詳かならず。文部の文は、高山寺本は大に作り、諸本丈に作るも今温古堂本に從ひて文部とす。往古漢部の居りし所か。

アヤベ　漢部

【漢部】　丹波國桑田郡の郷。和名抄には注を闕くも、漢人初めて綾を織りしゆゑに漢をまた綾と訓ずるを以てまさに安夜信と訓むべきならん。その地未だ詳ならざるも、或はいまの京都府南桑田郡東別院・西別院二村の邊ならん。また一說に、漢を天と訓み漢部を倉部に假り同郡篠岡町の大字倉部に擬すれどいま遽に信じ難し。

【漢部】　丹波國何鹿郡の郷（和名抄）。今の京都府何鹿郡綾部町の邊に當る。往古漢部の居りし所。貞觀八年紀に何鹿郡の人漢部郡刀自賣、仁和三年紀に何鹿郡の

漢部銘刀自賈と見ゆるも亦此地の人なり神鳳抄に内宮丹波漢部御厨とあるは此地を稱せるものか。一説には桑田郡漢部郷に當るとも云ひ詳かならず。漢部とは秦氏の部屬にして機織の業を業とする民なり。雄略天皇の御代其技に秀でたる者を長とし漢部直の姓を賜ふ。

【漢部】 播磨國飾磨郡にありし里。播磨風土記・飾磨郡「漢部里、右稱漢部者、讃岐國漢人等、到來居於此處、故號漢部」とあり、即ち讃岐國の漢人等が此處に來り住みし故の名なるべし。和名抄の播磨國飾磨郡餘戸郷の地にして、今の兵庫縣飾磨郡余部村の邊ならん。

【漢部】 佐賀縣肥前國三養基郡にありし地名。一に綾部に作る。肥前風土記に「昔者來目皇子、爲征伐新羅、勅忍海漢人、將來居此村、令造兵器、因曰漢部郷」とあり。和名抄の三根郡千栗・財部三郷の地にあたり、今の中原村是なり。中原村に大字綾部あり。近世費父郡の所管となり、今は三養基郡に入る。

アヤベ　綾部

【綾部町】 京都府丹波國何鹿郡の西南部。福知山市の東方約一〇粁、南は天田郡川合村に界す。南半は山地なれども、北半は由良川のつくれる福知山盆地の東端にして土地平坦、田畑拓けて米を產し、養蠶製絲の業特に繁昌す。省線山陰本線東西に走りて綾部驛（明治三十七年設置）を置き、舞鶴線これより岐れて東北に向ふ。古くは和名抄の漢部郷に屬し、秦氏の部屬にして綾織を業とせる漢部の居住せし處。のち九鬼氏の城下町として賑ふ。郡制廢止まで郡役所の所在地。いま養蠶製絲の業盛んにして、農林省蠶業試驗場綾部支育所・京都府蠶業試驗場を始め製絲工場多く鼎る活況を呈す。また昔ては大本教の本部ありし處、一時豪壯華麗を誇りし幾多の社殿も今は取拂はれて其跡を留めず。〔綾部藩〕 元和元年別所吉治大阪陣の功により當地二萬石を領し綾部を居所とす。後逝獄を事とし參府せざるを以て寛永五年二月二十八日改易せらる。寛永二十年志摩國鳥羽城主九鬼守隆の次子隆季此處に封ぜられ二萬石を食み子孫相承けて明治維新に至る。四年綾部藩廢せられ綾部縣となりしも、久しからずして廢せられ京都府に入る。藩校、鶯信館（舊遵德館）は天德五年九鬼隆祇の創立せるもの。〔八幡宮〕 大字井倉に鎮座。郷社。祭神、應神天皇・仲哀天皇・仁德天皇外二神。創立年代未詳なるも江戸時代には藩主九鬼家累代の氏神として尊信篤し。〔若宮神社〕 郷社。祭神仁德天皇。創立年代詳ならざるも江戸時代には綾部藩主九鬼家の崇敬を受け、社領の寄進・新願等のことあり。〔正勝寺〕 大字寺にあり。古義眞言宗。那智山と號す。高野山寶城院末寺。天慶五年、空也上人が須知山々頂靈山々嶽に聖觀音像を安置せるが本寺の濫觴と傳ふ。のち正勝年間正勝寺號を許され勅願寺に準ぜらる。絹本著色佛涅槃圖一幅は國寶。

【綾部】 美作國苫東郡の郷（和名抄）。今の岡山縣苫田郡神庭村邊に當り、神庭村大字綾部は郷名の遺稱なりといふ。和銅六年紀に備前國に令して始めて綾錦を織らしむとあり、當時この地は備前國に屬せしかば、綾部は漢部にして、漢部の居りし所か。

アヤマ　阿山郡　三重縣五市十五郡の一。伊賀國の北半部にて、縣の中央の西部に位す。東は鈴鹿・安濃・一志の三郡に、南は名賀郡に、西は京都府相樂郡に、北は滋賀縣甲賀郡に隣る。東西約二八粁、南北約一六粁（いづれも廣き部分にて）の地を占む。東境の北部は鈴鹿山塊の南端、その南は布引山塊の山地にて、前者に油日岳（六九四米）、後者に笠取山（八四五米）あり。西部は笠置山塊の一部、北部は水口丘陵の地、中央南部は伊賀川支流の會合する伊賀（上野）盆地に屬す。省線關西本線は東北境の加太越より入り伊賀川に沿ひて京都府相樂郡に出で、加太越の西麓柘植驛にて草津線と連絡し、社線參宮急行電鐵の伊賀線は名賀郡西名張驛より北上して關西本線の伊賀上野驛に達る。また以上諸線に沿ひてそれぞれ縣道を通ず。本郡は明治二十九年阿拜・山田の二郡を合併して建てしもの。参阿拜・山田

アヤメザワ　菖蒲澤　京都市にある古蹟。市の西部嵯峨の大覺寺の邊ないふ。一に菖蒲谷に作る。文治元年北條時政、この地に匿れし平維盛の子六代を捕へしこと東鑑に見ゆ。元和年中吉田光由、寶山の水を此地に引き爲めに嵯峨の民庶その利を蒙ること多し。

アヤラギ　綾羅木　山口縣豐浦郡川中村の大字。省線山陰本線の綾羅木驛（大正三年設置）あり。

アユ　鮎川　↓鮎川

アユカイ　鮎貝村　山形縣飽海郡西置賜郡の東北部。馬蹄の如き形をなし、東境は最上川上流によつて限られ、川を挾みて荒瀬町と界し、南は置賜村、西と北は西村山郡西五百川村に隣る。出羽丘陵南部の山地に當り、北境に暖日山（九九〇米）、西境に頭殿山（一二〇三米）、南境に柳ヶ澤山（七九五米）、大實潟山（一〇三七米）等聳え、最上川の一支實潟川それらの間の山谷を彎流し、東南境にて本流に合す。多くは山谷ふかく、實潟川の下流と村の東南部最上川本流の左岸とには平地ありて水田・桑畑拓け米・繭・蠶絲を產す。省線長井線の鮎貝驛（大正十一年設置）東南部の平地にあり。本村に鮎貝城あり。伊達家の臣鮎貝藤太郎盛宗の居住し、後に蒲生氏の臣高井權右衛門これに居る。上杉氏領となりて廢す。〔八幡神社〕 大字鮎貝に鎮座。郷社。祭神應神天皇。源義家奥州征討の時勅請したりと傳ふ。屬來城主落主守護神として尊信し、殊に寛永年間上杉定勝社殿を改造し、二十五石の社領を寄進せり。其のほか附近十八箇村の總鎮守として衆庶の崇敬を受く。

アユカエリ　鮎歸

【鮎歸瀧】 愛知縣三河國南設樂郡長篠村寒縁川谷の瀧。夏季豐川よりの登鮎は此處から引返すより起りし名。

【鮎返瀧】 宇和島市にある瀧。市の東北方仙波ヶ峠の渓を流るゝ水の柿原川に注ぐ所にありて上・下二つの大瀑を作る。これを鮎返瀧といふ。この邊松柏森々として茂り、附近一帶は斷崖絶壁を成し、塵外仙境の感あり。

【鮎歸瀧】 長崎縣南高來郡有家町にある瀧。社線口之津線道東有家驛より西北に隔たること、約二五〇米。溫泉小地獄へ通ずる里道より數百米入り込みたる標高三〇〇米の地點に位す。見岳と稱する小峰の麓、山と山との相迫る谷間數百米に一枚岩の如くなりてその障壁とも見るべき部分を玉の如き清澄なる水敷條流れ、下流に於いて一所に集まり、高さ約一五米の懸崖より幅約一米の瀑布となりて落下す。この瀑布は溫泉瀑布中最も著名なるものにて瀧壺は縱約一七米。横約一五米あり。瀧壺の水は河流となりて廣き小石の磧かすぎ鬱蒼たる溪林の中に流れ去る。瀧の上部に皆上神社を祀る。この邊は最も野趣に富み、一枚の巖かも數きつめたる如き岩の間を清流つたはり、躍すれば手に掬され、坐すれば盃を洗はれ、舊落時代領主は屢〻こゝに角水の宴を催ほせりといふ。また瀧の上部に飯雲泉の雅捨岩といふ奇岩あり。高く屹立して妙趣深く雲泉をして其雅筆を投ぜしめしと傳ふ。

アユカワ　鮎川

【鮎川村】 秋田縣羽後國由利郡の西部。本荘町の南方にてその間に子吉村を隔つ。子吉川の支流鮎川の流域にて、東西約四粁、南北約一二粁の地を占む。南より北に緩やかに傾斜する林野にして、北部の子吉川岸の近くには田畑拓け米・繭を產す。省線矢島線通じ羽後鮎川・羽後黒澤の二驛（共に大正十一年設置）を設く。此地に往時鳴瀑館（一名鳴瀑館）ありて由利仲八郎政春の居城たりしといふも今その館址詳ならず。また曹洞宗瑞光寺あり。慈雲山と號す。開山は明峯和尚。本尊に釋迦牟尼佛を安んず。

【鮎川】 秋田縣由利郡西部の川。鳥海火山北麓の裾野多師山幅野に出で、北流して鮎川村に入り、由利ノ原を經て、大谷地瀧の餘水を容れ、村の中部を北に流れ子吉川に合す。

【鮎川村】 宮城縣陸前國牡鹿郡の南端。北は大原村に接し、東南には金華山瀨戸を隔てゝ金華山島、西南には網地島の二屬島あり。石巻市を距ること東南約三〇粁。牡鹿半島の南端にて山地多く、黑崎は南方に清崎は西南方に突出し、其間に溺谷の鮎川港を擁す。主として漁業行はる。石巻・塩釜より汽船の定期航路開かる。金華山島は東西四粁、南北五粁。ほゞ中央に聳ゆる金華山は標高四四五米、全山殆んど花崗岩より成り、怒濤狂亂してその方位節理に沿ひて發達せる海崖は壯觀を極め千巻數等の勝景を現はし、山腹以上は赤松・樅・樅・樅等の鬱蒼たる密林に蔽はれて滄溟に照映し、約四〇〇頭の鹿徘徊し、猿も亦棲息す。西岸の棧橋より參道を辿むこと約一粁、有名なる縣社黄金山神社は金山毘古命・金山比賣命を祀る。お山巡りに表廻りと裏廻りとあり、表廻りは社背より大海祇神社の祠のある山頂の無雙峯に達するものにて眺望よく、裏廻りは此處より急坂を下りて東海岸の大面崎に出で、更に阿彌陀峠を越えて神社に歸著す。〔黄金山神社〕 鮎川濱金華山に鎮座。縣社。祭神金山毘古神、金山毘賣神外二神。式内社。天平年中丸子連等この山より黄金を採掘せし時始めて鎮祭すといふ。通稱金華山神社。例祭九月二十五日。

【鮎川村】 茨城縣常陸國多賀郡の南部。河原子町の北、助川町の南に隣り、西は久慈郡河内村に界し、東は太平洋に面す。阿武隈山地の東南端をなす多賀山塊の東麓南にて西北境にある高鈴山（六二四米）の山脚東に傾き、その東麓をなす浜岸に幅狹き海岸段丘の平地あり。農を主業とし、米・麥・煙草・野菜等を產し、また石灰岩・硅石を出し、眼鏡鐵山よりは硫化鐵鑛を產す。陸前濱街道・省線常磐線共に東部を南北に走る。村の中央を流るゝ鮎川あり、延寶六年德川光圀多摩川の鮎を放つといひ傳へ、明治二十二年村制施行の際この故事に因み鮎川村と命名せり。大字大平田に石灰洞あり。

【鮎川】 ↓鮎河村（滋賀縣甲賀郡）

【鮎川】 ↓鮎川村（和歌山縣西牟婁郡）

アユカワ　愛甲　相模國愛甲郡の舊稱。

アユサワ　鮎澤　又麥澤・合澤にも作る。駿河國駿東郡にありし驛名。庄名にもあり。往時の足柄峠の西麓。今の静岡縣駿東郡足柄村の地。この邊を流るゝ川を藍川といひ、酒匂川の上流なり。東鑑に「嘉禄四年正月二十八日、將軍御出門、西麥著御酒匂驛、二十九日、今夕入御藍澤驛」とあり。

アユチ　吾湯市・年魚市・阿育智・愛智

【吾湯市・年魚市・阿育智・愛智】 ↓愛知郡

【年魚市潟】 尾張國愛知郡熱田の入江。今の名古屋港の一部なる舊熱田港は其遺跡ならん。今熱田市街の東なる卑潟の田野は即ち鳴海潟の北に連なる汐干潟にして後世漸次變じて田野となりしもの。所謂熱田新田等はその一例なり。年魚市潟は古來歌枕として知られ、汐干・夕立・月・雪・櫓・霜・鶴などの名所。萬葉・七「年魚市潟潮干にけらし知多の浦に朝拾く舟も沖に寄る見ゆ」夫木・二五「波

の上に夕立すれとあゆちかたくももかからぬうちのとほ山　政時」

アヨー　阿用村　島根縣出雲國大原郡の東南隅。大東町の南に隣り、地西北より東南に延び、東は能義郡山佐村、南は仁多郡鳥髭村・布勢村に界す。南境には三郡山（八〇六米）の山嶺東西に延び、北境中部に清久山（五六五米）あり、微丘山地なるも西北部と東南部には細長き低地ありて農業行はれ、米・木炭・薪・蠶種を主産物とし、外に松茸・朴笠の特産あり。省線木次線は山陰本線宍道駅に起り、西南隣木次町を經て村の西南部を掠め、大字下久野に下久野駅（昭和七年設置）を置き、南隣布勢村に出で八川村方面に至る。本村の地は和名抄の阿用郷の一部にて中世は大東南庄或は阿用庄などの名あり。實暦の檢地帳には東阿用村・下阿用村・西阿用村とあり。明治二十二年村制施行の際、現在の地域を以て阿用村を建て阿用下分・東阿用・岡・川井・下久野・上久野の六大字を設く。村内に古墳あり、石棺石郭土器など發掘され、古くより開けたるを推し得ると共に須佐之男命に關する傳說多く傳はる。即ち命は大蛇退治の後造宮すべき地を此地の清久山にて選定し給ひし事、當地の川上神社はもと命の鎮座あらせられし地を記念して建てられし事、阿用神社の地も亦、命の鎮座あらせられし地なる事等傳承さる。中世には土屋氏此地を領せるものゝ如く、出雲大社文書・建長元年に「大東南北地頭、土屋彌次郎・飯沼四郎・土屋六郎左衛門云々」と見ゆるが最初の記錄とす（藤し大東南庄はほゞ今の阿用の地とす）。一族に土屋式部あり。元弘二年護良親王に從ひて義兵を擧げ戰功ありしといふ。また正平年間阿用庄地頭土屋勝長の弟土屋四郎左衛門尉の一族は蓮花寺別當伊藤彈正左衛門尉と共に蓮花寺に籠りて兵を擧げ三刀屋の諏訪部貞扶と戰ひて破れ、四郎左衛門尉は降參、後諏訪部氏に仕へて忠勤せしといふ。其後阿用庄は三澤氏の領する處となりしも永正十五年倒レ磨石山城主櫻井宗的（三澤氏の族）京極氏の舊宦により尼子經久に從はず遂に滅亡さる。天正二十年毛利輝元、口羽久三郎をして阿用の内五百四十四石を知行せしむること古文書に見ゆ。江戸時代この邊は富田城の堀尾氏、次いで松江の京極氏を經て松平氏領たり。村名の起原等につき風土記の記するところ左の如し。出雲風土記・大原郡「阿用郷、郡家東南一十三里八十歩、古老傳云、昔或人此處山田伺而守之、爾時目一鬼來而、食之伺人之男、爾時男之女母竹原中隱而居、之時、竹葉動之、爾時所レ食男云。動々、故云ニ阿欲一（神龜三年改ニ字阿用一）」（磨石山城）大字東阿用の蓮花寺山の南に小丘あり。此處に中世磨石山城あり。永正十五年城主櫻井宗的は尼子經久の長子政久の軍に圍まれしが容易に降らず、依りて政久持久戰術に出で民家を燒ちて高櫓を作り此處に近習と共に昇りて自慢の笛を吹鳴らし管絃に興ず、宗的笛の音を的に矢を放ちて政久を射しも、遂に尼子勢の爲に陷れらる。一說に宗的は逃れて仁多郡布勢に至りて死せりといふ。（蓮花（華）寺）大字東阿用の蓮花寺山にあり。曹洞宗。本尊は十一面觀音にて賢問子作と傳ふ。寺傳によれば、お蓮なる女かさかを病み觀音を念じて全治しかくて堂宇を建つ、これ永延元年なりといふ。もと天台宗なりしを寶永元年現宗に改む。明治六年廢寺となり同十二年再興す。雲州三十三箇所中第十四番靈場にして參詣者頗る多し。詠歌「蓮華寺へまゐる心は佛なりはちすの上の露の身なれば」瀧山樹木繁茂して幽邃、その頂上に觀音堂あり、庭前に四季咲の櫻あり、名づけて不斷櫻といふ。渓流山麓を洗ひて景色よし。

アラ　安良　播磨國西生郡の郷（和名抄）。一說に河内の讃良郡を佐良良と訓するを以て安良はアララと訓むべきものならんといふ。御手印緣起に荒陵郷とあるは此地にして、和名抄は荒陵の文字を忌みて之を安良と改めしものならんとの說あり。其地今詳ならざるも大阪市の天王寺及びその附近の地か。

アラ　安羅　日本書紀に見ゆる朝鮮の地名。書紀・神功皇后紀の日本武將荒田別・鹿我別の新羅を攻略する條に、比自㶱・南加羅・加羅・滅國・安羅・多羅・卓淳の七國を平定して百濟に與ふとあり。他ふに安羅は百濟を界とする新羅の南西に當る國の一にて、今の慶尙南道の中部咸安郡の邊か。

アラ　荒

【荒川】山形・新潟二縣を流るゝ川。山形縣西置賜郡の北境朝日嶽南側に發源して西南流し、東方より小國谷の水を集めたる横川その他の支流を合せ西に折れ、越後山脈を横ぎりて新潟縣岩船郡に入り西神納村に至りて日本海に入る。流程約八〇粁。水勢急にして舟運の便少なきも、冬季鮭の遡上多く、北方の三面川と共に鮭漁場として著名なり。

【荒山】群馬縣利根郡と栃木縣上都賀郡に跨る日光白根山の別稱。

【荒川】↓荒川（埼玉縣）

【荒岬】↓荒岬（神奈川縣）

【荒川】新潟縣中頸城郡を流るゝ川。上源二あり、貫川は黑澤岳の黑澤池に出で、氷澤川は高妻山の北麓に發し、合して關川となり、赤倉山・黑姫山の間の谷にて信越國境を劃しつゝ東流、關川在に於いて野尻湖の餘水を容れ、それより北に下り、片貝・矢代等の諸支流を合せて郡内中央を北流し、高田市の東を繞り、直江津に至り保倉川を合せて日本海に入る。流程約八〇粁。河口は直江津港をなし流域には沃野拓けて水田相連なり、米産甚だ多く、下流は骨逗の利あり。慶長十七年高田城に際し頻朝をなして新川と呼び、後これを荒川に作れりといふ。

【荒川】山梨縣の北部にある川。中巨摩郡の北境、長野縣界に峙つ金峰山の南谷より發源し、中巨摩・西山梨兩郡界を畫しつゝ南流して甲府盆地に出で甲府市西南部を貫き西方二川村に至り笛吹川に合す。流程約四〇粁。河水清冽を以て知られ、上流の峽谷に御嶽昇仙峽の奇勝あり。この川は古書に見ゆる忘川なりと稱せられ、大雨には氾濫すれども常時は水涸れて川あるを忘れたるが如きより、その名出づといふ。

【荒山】和泉國の和歌の名所。大阪府泉北郡久世村大字和田にあり。夫木・四「和泉なる荒山櫻さきぬらし槙の葉しのぎかかる白雲　權僧正公朝」

【荒山】山城國相楽郡にありといふ山。瑞原村のあたりの一峰を稱するなるべし。歌枕。萬代「まきのたつあら山いつる程ときす悲仁の都にさつきさくなり行能」

【荒山】歌枕。周防國玖珂郡にありといふも其の何れの山なるか詳ならず。新六帖「あら山の程とりならはぬいはつたひ手向の神にまかせてそゆく　光俊」

アライ　荒井　福島縣岩代國信夫郡の中部。吾妻山の裾野の中に屬し、これより出づる荒川北境を東流し地形は東北に低し。福島より會津に至る若松街道村の中部を貫く。米・薪・木材を產す。村の西部の地蔵原（慈藤原、或は滑拂地原）は古の信夫原の地に當るか。村名の起原に就き、昔時、西隣土湯村の領主某は聖德太子自作の育像の目を傷つけたりしに其の目より血出たれば上流に於て之を洗ひし水の此村を流れしゆゑ、洗村と稱したり。のち洗村か荒井村に改めたりといひ傳ふ。延元元年八月二十六日の相馬文書に荒井城の記事あり、今その城址は明ならざるも、小田谷館跡あり、慶長の初め上杉氏の臣、島津玄蕃利忠の居館なりと傳ふ、或はこれ荒井城の地か。

【荒井村】福島縣岩代國北會津郡の西北隅。會津盆地の中部を占め、東は大川を隔てゝ神指村に西は鶴沼川を以て大沼郡新鶴村に北は河沼郡金上村に界す。水田拓け、米を產す。若松市へは東南約五粁、省線會津線新鶴駅にも近く交通不便ならず。本村は往時陸奥國會津郡中荒井組に屬し門田莊の内たり。（蓮華寺址）大字蟹川にあり。眞言宗。松命山と號す。山城國醍醐報恩院末。仁範の開基。莊名直盛の勸めにより鎌倉より此地に來り天授五年（康暦元年）この寺を建立す。仁範老齢のため高野山に詣でゝ臨終を遂げんと旅裝を整へ杖をたよりに蟹川に至りしに岸上に釣する翁あり、仁範の旅行の念願を聽き「高野山僧處にはあらじ下荒井三鈷の松の法の朝風」と詠じて、その行を留めたりと傳ふ。

【荒井磯】遠江國濱名郡荒井の海濱　今の新居町の海岸なり。平安紀行に「ふくぶに波もあらゐのいそのまつ云々」の歌あり。

【荒井蓮】今切渡とも呼ぶ。靜岡縣遠江國濱名郡新井町と同郡舞阪町との間の渡。海上約三粁。明應七年の地震後今切の田來しより創まる。東武紀行「あら井の渡して白須香の海にのぞみ」

【荒井關】↓新居町（靜岡縣）

【荒井村】兵庫縣播磨國加古郡の西北端。東南隣の高砂町と共に加古川とその分流洗川との成せる三角洲を占め、西南は播磨灘に臨む。西北は洗川を隔てゝ印南郡伊保村・米田村と境し、土地平坦にして耕地よく拓け、米・麥を產す。また醬油醸造盛んにしてその產額本村生產中第一に位す。今社線山陽電氣鐵道は荒井駅（大正十二年設置）を設き、高砂・飾磨を結ぶ縣道はほゞ南北に通じ交通便利なり。この地上古は高砂町と共に全く海中の一島をなせし處にて古書・古歌に見ゆる印南・印南津麻等に當るならんといふ。萬葉・一五「吾妹子か形見に見むと印南郡麻自浪高み外にかも見む」

アライ　荒關　武藏國の海濱一部の古稱。往古大森八景坂のある丘陵の東方一帶は海なりしなり。即ち今の東京市大森區新井宿の邊をいふか。夫木・二六「おきつ波あらゐのいその岩に生るまつにも似たる袖のうへかな　秀能」

【荒關崎】武藏國荒關磯（荒井磯）の岬。今の東京市大森區新井宿海邊の崎。江戸砂子には其附近の丘陵を木原山といへり往古は大森八景坂下の東方一帶は海なりしなり。萬葉・一二「草かかの荒關之崎乃笠島を見つつか君か山路越ゆらむ」夫木・二〇「沖つなみあらゐの崎の汐風にふきよせられてなく千鳥かな　今出川院兵衛」

【荒關（荒井）山】今の東京市淀橋區下戸塚の地。江戸時代この邊は鷺宿の名所なりしといふ。

アライ　新井

【新井】もと武藏國豐多摩郡野方町の字今の東京市中野區新井藥師町。梅照院ありて俗に新井の藥師と呼ばるゝより此町名起る。（梅照院）新義眞言宗。松高山藥王寺梅照院と號し、俗に新井の藥師。天正十四年行春の開基。本尊藥師如來は新井の草分宦寺氏の發願せしもの。子育藥師として古くより奠者あり。寛永元年德川秀忠の女、後の東福門院眼病の平癒を祈願し、寺號を附す。これより治眼藥師として崇めらるゝに至る。緣日は正月・五月・九月の八日及び十二日。

【新井町】新潟縣越後國中頸城郡の中央部。高田平野の南邊に位し、荒川（關川）・片貝川・矢代川等町内を並行して北流す。北國街道と飯山街道との分岐點に當り、省線信越本線また南北に貫きて新井駅（明治十九年設置）を置く。農業を主とし

て米の產多く、大字小出雲は大麻煙草の產地として著はる。町內に經塚山公園あり、老樹鬱蔥たる丘陵にして冬季は好スキー場となる。また新井御坊あり、その東裡は明治天皇の新井行在所にて今史蹟に指定せらるる。此地は一に荒井にも作り、和名抄の頸城郡栗原鄕の一部、後世は大崎庄に屬す。明治四十年參賀村と合併して新井町となる。近年この地より變形鍬劍式の石劍の發見せられたることは、此地方の古代研究に注意すべきことゝす。

〔新井御坊〕眞宗。大谷派。東本願寺別院東本願寺十六世　如上人の開創に係る。貞享年中これを掛所とし、上越地方の末寺を統管す。現在の堂宇は明治年間の建立にして、庫裡は明治十一年九月明治天皇北陸御巡幸の際行在所となり、史蹟に指定せらる。〔照光寺〕小出雲にあり。眞宗本願寺派。長祿三年西願の開基。永祿元年信州古見より現地に轉ず。

アライ　新合　あらい　↓新合村（魚沼郡）

アライ　新居　あらい

【新居】　武藏國橫澤郡の鄕（和名抄）。一にニヒキなりとの說あり。その地詳かならざるも、今埼玉縣大里郡明戸村に大字新井存するより見れば、或は明戸村・大寄村及び兒玉郡蒲田村の邊か。七黨系圖に「丹黨有ㇾ荒居氏」とあり。この地の人ならんか。利根川南緣の地にして古來屢〻洪水橫溢の患ありし地なれば地形の變遷も多かりしならん。

【新居町】靜岡縣遠江國濱名郡の西南部。濱名湖の西南岸に東方に突出する半島の先端の地を占め、その東端は今切の湖口を隔てゝ東方鮮阪町に對す。東海道の要衝に當り、昔時の宿驛にしてまた新居關を置かれし地。今省線東海道本線は濱名湖南岸に沿ひて通じ、新居町驛（大正四年設置）を置く。水產に濱名湖及び遠州灘よりの漁獲物頗る多く、また工業行はれ、米・麻・生絲等の產あり。神天鳥水泳場、濱名湖巡り等の來遊客により賑ふ。明治天皇の明治元年初めて東京へ行幸の際駐泊せられ給ひし泉町の新居行在所及び舊址は史蹟に指定せらる。古は濱名湖の南岸を繞りて排水する濱名川口に當る安禮之崎の地にして、太平洋より寄する波浪荒かりしため、荒江・荒井・新井等にも作り舊東海道の一驛（今の大字新居宿）にて舞阪・白須賀兩驛の間にありたり。正倉院文書・天平十二年濱名郡輸租帳に新居鄕ありて「あらゐ」と訓じたれども、和名抄にはこれを載せず、宇智郡に屬せしめたるが如し。書紀通證に「遠州荒井者、和俗、古大蟹無數、自ㇾ山發入ㇾ海、其跡接ㇾ海」一目玉鮮・三「荒井　右のかたの湖邊に御茶屋有家毎に鹽のたき賣げる此所の名所也」丹波與作待友の小室節「白須賀ちよいと越えて、手判どざるか振袖に、やこの〳〵新居、今切舟に召せ〳〵」（新居關址）指定史蹟。此關一に今切關ともいへり。慶長五年德川幕府の設けるもの。箱根と共に東海道の要衝として著はる。三河國吉田（今の豐橋市）城主松平氏代々これを守る。海嘯のために其位置を轉ずること二回、現今の場所は寶永四年以後の地にして建物は安政二年十二月落成のものなり。關址に今新居驛の西一軒、町役場のある所なり。

〔諏訪神社〕　大字新居字中町裏に鎭座。鄕社。祭神、健御名方命外數神。創立年代不詳なれども地方の古社。江戸時代には十五石の朱印領を安堵せらる。附近の總產土神。例祭七月二十六・七日。〔本學寺〕曹洞宗。往昔足利義敎當寺に遊び紅葉を賞す。因て紅葉寺の稱あり。本尊は阿彌陀佛。〔龍谷寺〕臨濟宗妙心寺派。東湖山と號す。貞和元年氣賀之庄石川氏の開基にして、石巖和尙を開山とす。中興は澤翁和尙。

【新居】　正倉院文書に見えたる遠江國濱名郡の鄕。いまその地詳ならず、或は靜岡縣濱名郡新居町の邊に當るものか。和名抄はこの鄕を載せざるも、諸國の新居鄕の例より見れば、ニヒキ・ニノミ等とも訓みたるか。正倉院文書「新居鄕官戶壹佰壹拾、仮若鄕戶陸拾房戶」

【新居】　愛知縣東春日井郡にありし村。明治三十九年印場・八白及び本村の三村を廢して旭村を置く。

アライリ　新磯村　神奈川縣相模國高座郡の西北部。愛甲郡の中心都邑厚木町の東北約六粁を隔て、座間村の北、麻溝村の南にて、西端は愛甲郡依知村に接す。東半は相模野臺地の西北部を占め、桑畑よく拓け、西半は相模川左岸の低地にて水田多し。社線相模鐵道この中部をほゞ南北に通じ座間・新戸（昭和六年設置）上磯部（昭和七年設置）の二驛を置き、また厚木・八王子間の道路南北に走り交通不便ならず。甘藷等の產多く、また厚木町を中心とする蠶業地帶に屬し養蠶盛に行はれ、繭の生產多額なり。村の東部に我國土地測量上の基準たる相模野基線の中心點あり。村名は新戸・磯部の二部落を合併せるより出づ。大字磯部は新戸の北にあり、文明年中長尾四郎左衞門景春この城に據りて兵を奏ひし地なり。新戸はもと新道に作り、磯部と共に武田信玄南下の折この地を通過せりと傳ふ。

アライト　阿賴度島　北海道千島列島の北端にある火山島。幌筵島の西北部にあり。阿賴度海峽（盤城海峽）を隔てゝこれと相對す。南北約一三粁、東西約一五粁、ほゞ圓形の島にして、その最北端は北緯五〇度五五分二四秒に當り我國領域の絕北地點なり。島の中央に聳立するオヤツコバダ山は典型的圓錐型火山にして千島のみならず北海道に於ける火山中の最高峯なれば附近航行の船舶の好標識たり。山麓は一般に低き海扇を以て海に臨み、南東部にある小岬の北側に露地を搖す。土人は島をオヤツコバダ又はチャチャと呼び漁獵の事とす。

アラオ　荒尾　あらお

【荒尾】　愛知縣知多郡にありし村。明治三十九年本村外二村を廢し上野村を置く。

【荒尾町】　熊本縣肥後國玉名郡の西北部北は福岡縣大牟田市に接し、東は平井村南は八幡村・有明村に隣り西は島原灣に面す。村の東北部はやゝ丘陵地を成すも其他は海岸に向ひて低下し、耕地よく拓く。省線鹿兒島本線西部を南北に過ぎり萬田驛（大正元年設置）を置き、また大牟田市と長洲間の縣道は省線と平行して西岸を走る。萬田及び四ツ山（大牟田市に跨る）の兩炭坑は三池炭山七區中最重要の鑛區たり。大字宮內に寶治二年小代平內重俊建立、神智上人の開基に係るといふ淨業寺ありて源家三代の遺髮塚及び小代家代々の墓を存す。四ツ山は一に大鳥山と稱し、山頂に虛空藏堂ありて眺望に富む。古は此邊を古原庄と稱せり。大正八年町制を布く。

アラオ　荒雄　あらお

【荒雄村】　宮城縣陸前國志田郡の西北部古川町の東北に接し、荒雄川は東北端を流れて栗原郡・遠田郡を隔つ。土地平坦にして水田拓け、米・麥の產多く養蠶また行はる。陸羽街道中部を貫きまた省線陸羽東線の陸前古川驛（古川町）に近く交通不便ならず。村名は荒雄川の流域に發達せる村なるより出づ。大字宮袋の鳥井原には建武碑あり。又明治九年七月二日明治天皇行幸あらせられ農業狀態を御覽遊ばされたるを以て、昭和七年記念のために親農碑を建つ。〔宮光寺〕　大字赤埠にあり。曹洞宗。稻荷山と號す。もと天台宗にて如來寺と稱せり。應永元年湖月自貴和尙の開山といはる。境內に象古元軍論死を弔ふの碑あり。

【荒雄岳】　宮城縣玉造郡鬼首村にある休火山。村の中央に聳え標高九八四米、北方に近く山王林（九九五米）峙ち荒雄岳と雙峯をなす。荒雄川その東麓に發し北・西・南と山麓をほゞ一周して南隣鳴子町に出づ。西南麓矢吹澤には有名なる間歇溫泉あり、また宮澤・蟲・神瀧・蟹澤の諸溫泉ありて所謂鬼首諸溫泉と稱せらる宮澤溫泉より東南麓の荒湯溫泉へ通ずる山路は、南面中央部の片山峠（六七三米）を越ゆ。峠の東方に荒雄硫黃礦山あり硫黃を產す。

【荒雄川】　↓江合川（宮城縣）

アラオイ　新生　あらおい　省線總武本線の貴物驛（明治三十三年設置）。千葉縣銚子市新生町にあり。

アラカ　有鹿　あらか　相模國高座郡の鄕（和名抄）。今の神奈川縣高座郡海老名村・綾瀨村の地。相模川の東邊なり。延喜式の高座郡有鹿神社は今も綾瀨村にありて鄕社なり。中世以降、專ら海老名鄕と稱し有鹿の名廢す。

アラカ　荒賀　あらか　紀伊國名草郡の鄕（和名抄）。諸本誤りて八荒賀に作るも、高山寺本は荒賀に作る故に今之に從ふ。息部氏の本居魚香鄕なるべきも今何れの地なるか詳ならず、古語拾遺に「神武天皇、建ㇾ都橿原、經ㇾ營帝宅、仍令ㇾ天富命、率ㇾ手置帆負彦狹知二神之孫、以ㇾ齋斧齋鉏、始採ㇾ山材、構ㇾ立正殿、故其裔今在ㇾ紀伊國名草郡御木麁香二鄕、採ㇾ木、齋部所ㇾ居、謂ㇾ之御木、造殿齋部所ㇾ居謂ㇾ之麁香」とあり。

アラカイ　荒貝　あらかい　↓眞岡町

アラカイ　荒海　あらかい

【荒海村】　福島縣岩代國南會津郡の南部。田島町の西南隣にて西は館岩村、西北は檜澤村、南は新木縣鹽谷郡三依村と界す。帝釋山脈の東部を占め、西南境には荒海山（一五八〇米）ありその脈北方に延び丸山・七ツ岳等となり、東南部に貝鳴山ありて北の冢老岳につゞき、一三四方粁の面積を占むるも殆んど山地ななす。また大川の上支荒海川荒海山に發し東北流して田島町に出で、下流に沿ひて小低地あり耕地拓く。日光街道は川に沿ひて南し、次いで南境中部の山王峠（最高點九〇六米）を陵えて三依村に降る。また省線會津線の會津田島驛（東北隣田島町）開設以來交通の不便著しく緩和せらる。もと何島組と呼びし地にて川島・中荒井・關本・藤生・糸澤・濱原の六舊村に分れしが相合して荒海川の名によりて村名を建つ。〔鷲神社〕大字川島に鎭座。鄕社。祭神天比和志可氣流夜命。例祭八月三十一日。〔龍福寺〕新義眞言宗豐山派。熊野山と號す。長久年中吳庵比丘、熊野權現の夢告に依り龍福山熊野社を勸請して創守となす。寬治四年、惠圓法印更に開基し今に至る。

【荒海山】　帝釋山脈中部の一峯。福島縣南會津郡と栃木縣鹽谷郡とに跨る。一に太郎嶽といひ、標高一五八〇米。大川の支流荒海川はその東北に發して、南會津郡荒海村の中部を東北に貫き、伊南川の支流、館岩川の上支は山の西北に出づ。また北斜面に八總銅山、西南斜面に芹澤鑛山あるも今產額多からず。

アラカネ　荒金　あらかね　↓小田村（島根縣）

アラカヤ　荒茅村　あらかや　島根縣出雲國簸川郡の西部。西は荒木村に接す。簸川平野の一部を占め、北部を堀川西流し、村內振興單調なる平野にして耕地よく發達し、米・麻・菜油を產す。北部を省線大社線通じ、今市町・大社町に近く交通やゝ便なり。木村は往時大海なりしを國引大神によりその基礎を作られしと傳へらる。德川幕府の頃大槻七兵衞によりて開拓せられ、明治二十三年町村制實施に當り荒木・古荒木・茅原を合併し、荒茅村と稱す。

アラカワ　安良川　あらかわ　↓松原町（茨城縣）

アラカリ　安樂川村　あらかり　和歌山縣紀伊國那賀郡の中部。龍門村・奥安樂川村の西北隣にて北にほゞ紀ノ川を界として田中村に對す。柘榴川、村の中部を北西流

し、西隣訓月村に入る。北西部は土地低平にして水田よく拓け、米・麥・繭を産し村の中部最初山の丘陵地よりは柑橘を出す。この地は和名抄の那賀郡荒川郷の一部にて、現今六部落を併せて一村を成す。もと荒川に作り、口碑傳說によれば荒川はアラカの轉訛なりと。美福門院この地に隱住し給ひ、安樂を希ひて荒川を安樂川と改められたりといひ、また鳥羽・近衛兩天皇の陵は伏見竹田の安樂壽院にあるよりこの文字を取りたるならんともいふ。大字市場の附近に五輪の石塔あり、鳥羽天皇の皇后美福門院の御陵墓なりといひ傳ふ。↓荒川（紀伊國）

アラカワ　荒川（あらかわ）【荒川村】青森縣陸奥國東津輕郡の南部青森市の南方に位し、東は横内村、西は高田村に隣り、北方青森市との間に筒井村・大野村を隔つ。地は南北に長く南部の八甲田山西側に廣き飛地を有す。北半は平坦なる沃野なれど南半は八甲田山の西北斜面の裾にて北方に緩く傾く。八甲田山の西谷に出づる荒川北流して青森灣に注ぐ。青森より南津輕の濱岡に至る縣道村の北部を東西に通ず。米を多產し、林檎また有名。八甲田山西側の飛地には赤倉・酸ヶ湯等の溫泉あり、大字荒別は十和田國立公園の一部たり。〔酸ヶ湯溫泉〕村の南部の飛地、八甲田山の西腹、海拔約九〇〇米の高所にあり。貞享元年發見せられ、初めは鹿ノ湯と呼びしも、後に酸ヶ湯と轉訛せりと。泉質酸性硫黃泉。八甲田山登山者の疲勞を慰する地として著はる

【荒川村】秋田縣羽後國仙北郡の西部。北には河邊郡船岡村に境し東は雲澤村、南には土川・蛯吉川の二村、西は淀川村に隣接し、面積一一四方粁。雄物川の支流荒川上流の河谷を占め、本流域に諸支流に沿ひて狹小の平地ある外、多くは山地をなし、奥羽街道村の西部を南北に通じ、省線奥羽本線これに沿ひ羽後境驛（明治三十七年設置）を置き、その他の道路は荒川に沿ひて東方角館町に通ず。產物には米・繭あり。また森林多く、荒川上流には有名なる荒川鐵山ありて金・銀・銅を出す。〔唐松神社〕字下臺に鎭座。郷社。祭神、飼逸突智命・高皇魂命・神皇魂命・豐受姬命。創立年代不詳なるも、古老の傳によれば康平年中、源義家の勸請する處と云ふ。例祭陰曆七月二十三日。

【荒川鐵山】秋田縣仙北郡荒川村にある鐵山。村の中部荒川上流の谿谷に沿ひ、奥羽本線羽後境驛（明治三十七年設置）より鐵山まで專用軌道たる通ず。我國重要鐵山の一。鐵床は第三紀の頁岩及び輝石安山岩中に胚胎せる多數の鐵脈に分れ、黃銅鐵を主とし黃鐵鑛・金銀鑛を混ず。この鐵山は舊稱を歌澤銅山といひ、元祿十三年秋田の商人川村某の創始する所と傳へ、元文三年藩廳これを回收して自ら營行し寬保二年に至る。其後數度の移管あり、明治以後は全く民業に歸す。

【荒川】陳奥（今の磐城）國磐城郡の郷（和名抄）。其地未詳なるも今の福島縣石城郡の飯野・鹿島二村の地なるべし。飯野村の大字荒川は其遺名ならん。磐城郷の西、丸部・神城二郷の北にして飯野郷の南とす。桓武平氏より出でし磐城氏の義この地に荒川氏を稱すと姓氏錄に見ゆ。

【荒川】↓松原町（茨城縣多賀郡）

【荒川村】栃木縣下野國那須郡の西南隅。南は芳賀郡小貝村、西と北は鹽谷郡熱田村・喜連川町に隣る。那珂川の支流荒川東南部の洪涵低地を蛇行して東南隣向田村に出づ。村の東西兩邊は殆んど臺地性の丘陵をなす。農を主業となし米・麥の產多し。省線烏山線東西に貫通し、鴻野山（明治九年設置）・大金（大正十二年設置）・小塙（昭和九年設置）三驛を置く外、東は烏山、西は寶積寺。宇都宮への道路あり。大字高瀨は永祿年中佐竹勢と那須勢と戰ひし古戰場、又大字森田は近世大田原氏分家の陣家のありし地。〔安樂寺〕大字田野倉にあり。新義眞言宗智山派。醫王山と號す。大同二年の草創。もと藥師如來を本尊とせしも、文明十八年賢海大僧都中興し不動明王を本尊とす。藥師如來は行基菩薩の作なり。

【荒川】埼玉縣の巨流。東京市內千住邊より下流を隅田川といふ。埼玉縣の西境關東山脈の主峯甲武信ヶ嶽の東麓飯坂峠邊に發源、東流して中津川を合し三峰山北麓を流れ秩父系岩層を侵蝕割廊しつゝ秩父盆地を貫流、西より赤平川を入れ勝景長瀞の峽谷を作りて關東平野に出づ。それより縣の中央をほゞ東南に流れ、中流にて入間川を合せて東京市に入り、やがて隅田川と呼ばれ東京灣に注ぐ。流域は沃野よく開けて水田相連なり、中流以下は流れ緩かにして舟楫の便多く、下流兩岸には大工場地帶を控ふ。下流は流路曲折多く、且つ沿岸の土地低平なるため、大雨至れば屢〻氾濫し、殊に東京市內江東一帶は常にその害を被りしも、近時玉子區北部より荒川放水路による分水施設完成せられてその患なきに至れり。古來中流以下の流路に變遷あり。古くは熊谷より東方に流れて今の元荒川の川筋により利根川に注ぎたり。その後も多少の變化ありしも德川幕府大いに治水に力を用ひたるより形勢大方定まりて現時の流向をとるに至る。里見八犬傳・九一因りて行德浦に赴きて、荒河を側り關宿より陸路を走らば結城まで八里也、荒河に漕入れては船の通むこと遲からべけれど」

【荒川區】東京市三十五區の一。市の東北部に位し、東は隅田川（荒川の下流）を隔てゝ向島區、北は同じく足立區、西は豐野川・王子の兩區に、南は淺草・下谷の二區に隣る。面積約一〇・五七方粁。本區の大部分は太古入江なりしも、荒川の沖積低地に屬し、土地頗る平坦、南境下谷區に接する部分は僅に道灌山及び諏訪臺の丘地あり。昭和七年十月東京市域大

猶愛の際北豐島郡の南千住・三河島・尾久・日暮里の四町の地を以て新たに一區を設けるもの。舊三河島町は往古は入海にて點々たる島嶼なりしが、江戸時代に入りて三河國の人數氏渡來して島中を開拓せしためこの名起ると稱ぜらる。慈川五代將軍は此地を東叡山寺領とせり。三河島村・町屋村・荒木田の合併して成れるものにて明治二十二年町村制實施の際三河島村となり、大正九年町制を施行す。舊南千住町は往古より荒木田庄納田領にて、舊名を小塚原町・中村町と稱す。元祿・享保の頃隅江領となり、千住大橋附近は當時既に町人街をなし北千住と共に千住宿と稱し、野州日光・奥州・上州への街道の一宿驛として賑はひし地。參覲交代の要路なれば舊幕時代には代官の支配に屬せり。明治維新後・小菅縣より東京府に移管され明治十一年千住宿より分離して千住南組と稱し、箕輪村との聯合戶長役場を置く。明治二十二年町制施行の際一部を三河島町に移し、更に下谷通り・新箕輪村・地方橋場町・三河島村飛地・千束・下谷・箕輪飛地の各部落を合併して南千住を形成す。水運の便よく大工場設置され工業地として發展しつゝあり。舊尾久町は上下尾久村と船方村とを合せたるものにて上尾久村は東叡山寺領、或は知行所にて一部は御料地たり。下尾久村は正保の頃、御料地及び東叡山の寺領となり、船方村も前村と同樣なりしも、明治二十二年尾久村及び船方村の一部を合併して尾久村となり、大正十二年町制を布く。三河島・尾久の地は大部分荒川の洪涵地にて頗る低濕の地たりしも、大正十二年內務省は荒川下流改修工事たる新荒川の開鑿、卽ち荒川放水路の完成を見、爾來水害の根絕を見るに至り工場地帶として急激に發達す。舊日暮里町は日暮里・金杉・谷中本の三村を合併せしものにて正保の頃は何れも寺領なりし處。明治元年武藏縣に入り、後東京府に移管され、明治二十二年町村制施行と共に谷中・坂本・金杉の三村の大部分は東京市に入り、谷中本村及び金杉村の一部は合併して日暮里村となり大正二年町制を施行す。この區は荒川の水運と省線常磐線の隅田川驛（明治二十八年設置）・南千住驛（明治二十九年）・三河島驛（明治三十八年）及び東北本線の日暮里驛（明治三十八年）の新設、大正二年玉子電車の貫通と相俟ちて荒川沿岸一帶は東京瓦斯製造工場・大日本紡績・日本石油・毛織會社・千住製絨・富士製紙・生肥會社・セルロイド工場・旭電化工業・東洋紡績等の諸工場あり、帝都の主要なる工業地區たり。人口約三十三萬。

〔荒川堤の櫻〕指定名勝。荒川左岸の堤防中舊江北村卽ち今の足立區の南部にある一帶の並木にて江北櫻ともいふ。明治十九年の植栽になり櫻種は里櫻を主としこれに染井吉野を交へ、種植品種は約七十餘を算し、中に珍奇なるもの多し。荒川の改修工事のため舊堤防の或部分は櫻並木と共に取拂はれ、現存の櫻並木は新堤防のため斷たれし處あれど並木の南端は沼田に起り北端は埼玉縣境の鹿濱に達し延長約三粁半。〔荒川放水路〕荒川並に隅田川の水害防止とその常水保持の爲に修造せる水路。東京市王子區の北部より、足立・葛飾・向島・江戸川・城東諸區の地內を經、大圓狀に築造し、東京灣に開口す。王子區に設けし開閉自在の水門により洪水量の分流を調節し、五分ノ四を放水路に排疏し、五分ノ一を隅田川に分流す。上流にて河幅約四五〇米それより漸次擴大して河口にては五八〇米に達す。總工費約三千萬圓に及べり。

【荒川村】富山縣越中國西礪波郡の北部小矢部川の中流に沿ひ、川を隔てゝ西南は石動町に接し、東は福岡町・正得村に、南は若林村に續く。面積僅に三・九方粁なるも富山平野西邊の低平なる沃野にありて水利の便よし。從つて農耕を主とし農產物に富み、また菅笠の製造を副業とす。北陸街道に當り、道路四通するを以て交通至便なり。この村は和名抄の礪波郡長岡郷の一部に當り、後綠岡郷と呼ばれしも、明治二十二年町村制施行に當り、正得・大瀧・高波・荒川四箇村に分てるもの。

【荒川岳】赤石山脈の一群峯。靜岡縣安倍郡井川村と長野縣信濃國下伊那郡大鹿村の境界、井川村寄りに聳立す。東方の荒川東岳（悪澤岳ともいひ、三一四六米）、中央の荒川中岳（三〇八三米）並に西方の荒川前岳（約三〇六〇米）の三峯あり。荒川東岳は赤石山脈中の最高峯にて頂上に荒川大明神を祀る。北は大井川の上支西俣の谷を隔てゝ聖見岳（北方の北荒川岳に對して荒川岳とも稱せらる）に對し南は同じく大井川の上支奥西河內を隔てゝ赤石岳に向ふ。東岳の東方に萬之助小屋、前岳の南方に小倉小屋あり。

【荒川中岳】單に荒川岳、また奥西河內岳・魚無河內岳ともいふ。荒川岳山群の一峯。※荒川岳

【荒川東岳】一に悪澤岳。荒川岳山群の東部にあるもの。赤石山脈の最高峯たり。※荒川岳

【荒川前岳】荒川岳山群の一峯。一に西河內岳。荒川中岳と併稱して奥西河內岳といふこともあり。※岳荒川

【荒川】兵庫縣飾磨郡にありし村。昭和十一年姬路市に編入。

【荒川】紀伊國那賀郡の郷（和名抄）。今の和歌山縣那賀郡安樂川村・龍門村・麻生津村等に當る。書紀・崇神天皇紀「又妃、紀伊國荒河刀畔女、適津年魚眼眼妙媛」とあり。古事記荒川刀辨に作る。荒川刀辨は恐らく上古この地を領し、木國造家の祖ならんも系圖には見えず。續風土記に「荒川郷、今號安樂川莊、領二十四村」とあり。中世は安樂川莊と稱せしもの。安樂川の字に關しては、此地中古

美濃門院の領邑となり、門院深く佛教を信じて西方安樂國を欣びし故に安樂川と名づくといひ、また鳥羽・近衛兩天皇の御陵のある伏見竹田の安樂壽院の文字をとりて名づくともいはる。今の安樂川村はその遺稱なり。※安樂川村

アラカワオキ　荒川沖　茨城縣稻敷郡朝日村の大字。省線常磐線の荒川沖驛（明治二十九年設置）あり。附近に霞浦海軍航空隊あり。

アラキ　安樂城村　山形縣羽前國最上郡の西北部。田刈丘陵の山峯神鹿山・二ツ山・丁嶽（一一四六米）等により、西は飽海郡に北は秋田縣由利郡に境を接す。全村殆んど山地なれども鮭川の上支大澤川西北隅に發し東南に下り、其沿岸に平地ありて聚落發達す。交通には東隣貞室川村にある奥羽本線貞室川驛（明治三十七年設置）よりする外、村内の交通は便利ならず、產物には米・蘇・馬の產あり。また村の東北部に日正鑛山あり。天台宗の本覺院、曹洞宗の長泉寺あり、また村内に國文土器出土の遺蹟多し。

アラキ　荒木　【荒木村】埼玉縣武藏國北埼玉郡の北部で忍町と羽生町との中間にあり、東は新郷村南は太田村西は長野村星河村北は須賀村に接す。利根川中流南岸の平地を占め、見沼用水村の中央か略ゝ南北に通じ、星川東流してこれに合す。土地肥沃にして水利また便なるを以て農業廣く行はれ、米・麥等の產多く、養蠶また盛んなり。社線秩父鐵道南部を横ざりて、武州荒木驛（大正十年設置）を置き、また熊谷より忍を經て群馬縣館林に至る縣道通じて交通便利なり。大字小見は荒木驛の西方約一粁にあり、大字白川戸と相接し一群の部落をなし東に見沼代用水を控ふ。また貞言宗の古刹貞觀寺あり、境内に古墳あり主の墓と云ひ、小見の名は主の遺稱ならんかと云はる。また村内天淵寺の木造聖德太子立像一軀は像内に寛元五年正月大佛子法橋慶禪の銘あり國寶に指定せらる（小見貞觀寺古墳）指定史蹟。前方後圓型の墳丘にして俗に觀音狐と稱す。主軸西々北に向ひ封土の左側部及び前後頂部共に削平せられたるも右側部は舊規を存す主軸全長約一〇一米、前方部高さ約六・三米、後圓部高さ約六・六米。後圓部頂部より深さ約二・七米の所に孔口を南面せる石郭露出す、寛永年間觀音堂建立の際發掘せりと傳ふる石郭は粘泥片岩の板石を以て築かれ前後二室より成る。後室には組合せ石棺の置かれたる痕跡あり。此の北後圓の頂部タビレ部にも粘泥片岩を以て築かれたる單室の石郭あり其の孔口北面す。明治十三年の發掘甲冑・刀劍・銅鏡・工器等を出せり。

【荒木】越後國頸城郡の郷。和名抄は阿良支と訓す。諸本原本に作るも高山寺本には荒木とあり。其地いき詳ならざるも今の新潟縣中頸城郡中郷村・原通村の地に當るか。

【荒木】能登國羽咋郡の郷。和名抄は阿良岐と訓す。今の石川縣羽咋郡宮來町・稱造村・東增穩村・西增穩村・福浦村等の地なるべし。三州志に「荒木方廣、今宮木院有。荒木地」とあり。福浦より宮木に出づる海濱に荒木の名遺る。

【荒木】遠江國城飼郡の郷。和名抄は安良崎と訓す。今の靜岡縣小笠郡加茂村堀之内町の邊に當るか。

【荒木】→中澗村

【荒木】→宗堵村

【荒木】伯耆國八橋郡の郷（和名抄）。其地いき詳ならざるも、或は鳥取縣東伯郡上郷村・下郷村・榮村等の邊に當るか。荒木郷の名は諸國に見え、皆墾田の義なりといふ。名和氏紀事に「有荒木氏、屬懷良親王、西下」とあり。或は荒木氏の住せし地か。

【荒木村】島根縣出雲國簸川郡の西部。簸川平野の西部にあり、西は大社町に隣接し、東は遙堀村、南は荒茅村・岡村に續く。その他は神戸川の支流及び堀川村内を西流し、北部獅山の山地以外は概ね平坦にして耕地拓け養蠶行はれ繭を出し米の產また少なからず。大字北荒木に元祿の頃治水・開拓に終身を捧げし大親七兵衛の記功碑あり。また省線大社線の大社驛（明治四十五年設置）は村内にあり、驛より出雲大社・日御碕神社へは夫々自動車の便あり。此地は和名抄、出雲郡狛築郷に屬す。中世中荒木・北荒木及びも と狛築町の一部たりし修理免は何れも大社の氏子區域たりしも明治二十二年以上の三村を合併して荒木村と稱す。

【荒木村】福岡縣筑後國三潴郡の東北部。久留米市の南に接し、南は西牟田村西は三潴村・大善寺村に續き、東は三井郡上津荒木村・八女郡下廣川村と界す。筑紫平野の一部を占め、筑後川の支流村内を西北に流れ、土地撓ね平坦、北半には畑地、南半には水田よく拓け、米を多產す。省線鹿兒島本線村内を南北に走りて荒木驛（明治四十三年設置）を設き、交通の便よろし。此地は和名抄、三潴郡荒木郷の地といはれ、龍造寺系圖に荒木家從この地の地頭職を賜はると見ゆれば恐らくその一族の住せし地ならん。龍造寺系圖に「弘安中、元房來寇、季時擊之壱岐・西死、子家益嗣、加賜筑後荒木村地頭職」とみゆ。今多數の古墳及び史蹟を存し、荒木村館・白口中村館址・古碑等あり。なかにも大字白口字定畳に石室古墳と混在して大形甕合口式甕棺の存在は注意すべく、その彌生式なるより古代は專ら天孫族（アイヌ族に對す）の住居したることを推し得べし。本村には明治天皇荒木行在所及び御講武所あり、共に指定史蹟たり。

【荒木】筑前國宗像郡にありし郷。和名抄は安良木と訓す。今福岡縣鞍手郡に入り、笠松村となる。大字有木はその遺稱。太宰管内志に「今鞍手郡有二有木村一、分爲上中下三邑、是荒木郷也」とあり。

アラキ　荒城　【荒城（郡）】岐阜縣飛騨國吉城郡の古名。何時代に吉城郡と改められしか詳ならざるも、或は室町時代の初めか。持統八年紀に「飛騨國荒城郡人、弟國部弟日、獻二白鳩一」、貞觀四年紀に「荒城郡人、太政大臣家扶日奉部若善、賞二左京職一」とあり。和名抄は阿良木と註し、七郷に分つ。國郡考に、諸郡郷の荒字あるもの大抵之を改む。蓋荒字を忌みしならむ、改稱年時詳ならずと雖も、東鑑に、建久四年、荒木郷地頭職が多好方に命ずとあり、又門前村安國寺、明德元年庚午、一切經上奉文に「飛騨州吉城郡、荒城郷、大平山安國禪寺」とあり、江間系圖「八代、荒城郡司平德盛、永和四年久時則に續ぎ、應永八年卒」とあれば、明德以前に改めしならんとあり。

【荒城】飛騨國荒城郡の郷和名抄。今の岐阜縣吉城郡國府村の地にして荒木川に沿へる邊。東鑑・正治元年「以二多好節一補二飛驒荒木郷地頭職一」とあるは此處なり。

アラグスク　新城島　沖繩縣八重山諸島の一。八重山郡竹富村に屬す。西表島の東南、黑島の西に位し、上地・下地の二小島より成る。俗に離木と稱し、昔時離れ燒とよべる土器を製したるを以て聞ゆ。また上地島の西角、越の頭は琉球音島、鬱の花と節にて著名。「くいのはな上で貞南風向て見れば、貞加が布晒し見ものだいもの」

アラクラ　荒倉　【荒倉山】山形縣西田川郡の西部海岸に近き山。大山町の西に當り、上郷村・豊浦村・加茂町の三町村の境上にあり。標高三〇七米。

【荒倉岳】赤石山脈北部の一峯。靜岡縣安倍郡井川村と長野縣上伊那郡伊内里村との境に跨り標高二六九三米。白峰間ノ岳の西稜三國岳（三峰岳）の南方、北荒川岳の北方に聳え、東は農鳥岳に對して大井川の上流東俣（田代川）の谷を挾み、西は天龍川の上支三峯川の谷に臨み赤石山脈の縱走路に當る。南方の安倍荒倉岳に對して伊奈荒倉岳と呼ばる。（安倍荒倉岳）荒倉岳（伊那荒倉岳）の南方の峯。その間約二粁を隔てゝ北荒川岳の北に聳ゆ。標高二六六七米。北方の伊那荒倉岳に相對して稱せらる。

アラコ　荒子　愛知縣尾張國愛知郡にありし村。大正十年名古屋市に編入、南區荒子町となる。前田利家の出生地にして天平年間創立の天台宗觀音寺あり。

アラサカ　荒坂　【荒坂村】三重縣紀伊國南牟婁郡の東北岸。南牟婁山塊の東北部にて南の鼎嶽、北の南輪内兩村の一部と共に牛島狀に東方熊野灘に突出し、東面は更に神ノ須鼻・稻ヶ崎等の小突角に分れ稻ヶ崎の西方に二木島浦灣入す。海岸は溺れ谷なし斷崖なす處多きも灣奥に小舊地なす。水產なを主とし林產少なからず。鳥嶽村南輪内村へは里道を通ずるのみにて陸上の交通は便利ならず。大字二木島浦は上古の丹敷浦にて神武天皇御東征の時丹敷戸畔を誅し給ひし荒坂津なりと傳へ、また一説には隣村新鹿村の地なりともいふ。神武紀に「逕至二熊野荒坂津一、敵名丹因誅丹敷戸畔者」と見ゆ。（最明寺）大字二木島里浦にあり。曹洞宗。海福山と號す。開基は北條時頼、開山は大和國慶田寺二世和尚。本尊の胎内に黃金の念持佛觀音及び丸殿司筆の涅槃小像あり。境内に時頼手植の松あり。

【荒坂山】大阪府北河内郡北部楠葉村東境の丘陵か。洞ヶ峠の北、男山の南にあり、正平七年楠木正儀等の足利義詮の兵と戰ひし地。

【荒坂濱】因幡國にありしといふ濱。今の鳥取縣岩美郡福部村に往時入海なりしものらしく、湯山池はその跡にて、恐らくこの邊か稱せしものならん。三代實錄にみゆる荒坂濱とあるは此地なるべし。福部村の大字湯山の附近に荒坂山あり。

アラサキ　荒岬　神奈川縣三浦半島西岸の一岬角。三浦郡長井町の西岸、相模灘に突出し、岬邊に蟲城砦と呼ぶ繪岩の集合あり。要塞地帶内に屬す。

アラサキ　荒崎村　岐阜縣美濃國不破郡の東部。大垣市の西方約四粁、これと鈴里村を隔て、西は垂井町表佐村に接し、南は合原村北は青墓村に隣る。面積五・三粁なるも西濃平野西邊の沃野を占め、農業行はれて米の產多く、蔬菜類の栽培・養蠶また盛んなり。大垣乘井間に國道通じバスの便ありて交通至便なり。大字長松に竹中重成の居城なりし長松城址あり、豐臣秀吉猪洲より上番の折この城に一泊せりといふ。また本村の平林莊は植物學者飯沼慾齋の草本圖說全二十卷を著作せし書院とす。荒崎は和名抄、不破郡荒崎郷の地なるべし。近年大字十六字中林より製瓷燒紋の銅鐸の發見せられたることは、本村の古代研究に注意すべく、此處は遲くも青銅文化時代より開け居りたることを證するに足るべし。大字綾戸は齊明天皇の時、本郡に唐國の俘人を置きしことあり、漢人の訛りて地名となれるものか。（等運寺）大字綾戸にあり。眞宗大谷派。佛慧山と號す。延曆年間傳教大師の開創。もと天台宗なりしも、のち法圓住持の時現宗に轉ず。

アラサワ　荒澤　【荒澤巒】恐山火山群の一峯。青森縣下北郡佐井村と大畑町の境上にあり。大畑川の支流仁部川・上狄川は東側に、古佐井川の一支燒山澤は東面より發す。

【荒澤村】岩手縣陸奥國二戸郡の西南部。南境に七時雨山（一〇六〇米）・御月山・前者山・安比岳等聳えて岩手郡寺田

村・松尾村と界し、西北は田山村東北は淨法村と隣接す。東西約一五粁、南北約一九粁、面積二〇七方粁の大村。馬淵川の支流安比川村内を西南より東北に流る。山地多きも、川の兩岸狹小の平地あり。物産は林産を第一とし、農産これに次ぐ。盛岡より來る津輕街道は安比川に沿ひて下り後その一支の谷を遡りて秋田縣花輪方面に出で、省線花輪線これに沿ひ赤坂田(大正十五年設置)・荒屋新町(昭和二年設置)の二驛を置く。名勝には不動滝・安北温泉あり。古昔より鹿角を經て津輕への近路なれども寂寥たる山間の窮村に過ぎざりしも花輪線の開通に依りて面目一新す。法螺山(今の七時雨山)は元慶の昔に鎮守府將軍小野春風の夷俘征伐の砦に向ひたる地として知らる。天喜の頃より安倍氏の領となり、建久二年以來南部氏の領土となる。明治二十二年町制施行の際、字の荒屋・淺澤を合して荒澤村と稱す。〔櫻松神社〕荒屋字高畑に鎮座。鄉社。祭神は瀬織津姫。例祭四月三日。

【荒澤湯】日光寺見滝の別稱。鬼怒川の上支荒澤にかゝる故にいふ。

【荒澤岳】三國山脈北部の一峯。新潟縣北魚沼郡の南隅湯之谷村中部に聳る。標高一九六八・七米。西方は駒ヶ嶽・中ノ嶽と相對し、只見川の支流北ノ又川の南方は平岳との間に中ノ岐川の渓谷をつくる。

アラシ ——山 豪灣花蓮港廳花蓮支廳にある山。花蓮港街の西北、加禮宛山の西に聳え、標高二〇三二米。三棧溪その東北麓に發源して北流す。

アラシ 荒自 筑前國宗像郡の郷。和名抄は阿良之と訓す。今の福岡縣宗像郡津屋崎町に當る。大字在自はその遺稱。宗像社正平七年祭事記に「宗像郡在自郷若宮明神」とあり。荒を在に作りたるものならん。中古廣坊または樽の宿と稱せし驛所なりといふ。

アラシ 嵐山 ↓嵐山(アラシヤマ)

アラシマ 荒島

【荒島嶺】福井縣大野郡の中央に聳ゆる山。この附近に於いて加賀(石川縣)の白山に次ぐ高山にして遠く海上よりも望見され、白山に對し一に越の黒山とも呼ばる。標高一五二四米。山中に延喜式の荒島神社あり、白山權現とも稱せらる。

【荒島村】島根縣出雲國能義郡の西北端。北は中海に面し北方に大根島を望み東は安來町との間に赤江村を隔て、南は飯梨村に接し、西は八東郡宍東村に隣る。西南部に丘陵あるもその他は概ね平地にして農業行はれ、米・繭を產し、工・林・畜產も少なからず。荒くより山陰街道に沿ふ街村として一聚落を成せるもゝ如し。いま省線山陰本線の荒島驛(明治四十一年設置)あり、社線廣瀬鐵道これより起りて南方に延び、伸仙寺(昭和八年設置)・西赤江(昭和三年設置)の二驛を置き交通不便ならず。此地は和名抄、合人郷に屬せしものといふも詳ならず。戰國の頃大内氏富田城を攻めし際この地に陣を布きしといふ。大字荒島の造山古墳は指定史蹟。此地の貝殼山より採取する凝灰岩に赤褐色及び灰色兩種の軟岩にて世に荒島石と呼ぶ。また水稻龜次種の良種を選出せし廣田龜次は此地の人。其家世々松江藩荒島郷藏番を勤めたる關係上龜次は幼時より父に從ひて貢米の出納に從事し自ら米質の良否を鑑別する技能を養へり。廢藩後其の家職を失ひしより農業に從事し專心米質の改良を企て終に良稻龜次種を選出するに至れり。龜次種の特徴は晩稻中、比較的早熟にてその草莖は强剛にして蟲害疾病に堪ふる力强く特に稻熱病に對する抵抗力の强きため、方今全國的に普及さる。荒島驛前に龜次の銅像あり。〔造山古墳〕指定史蹟。丘陵上に築かれたる圓墳。封土の徑約五二米、高さ約七・六米ありて桑樹を栽培し、中央の地下約一・二米のところに石室の上部を露出す。石室の主軸は西北より東南に向ひ長さ約七米、幅約一・二米乃至一米、高さ約一米あり。側壁の厚さ約六糎乃至九糎の割石を以て辣瓦造の如く積み、上に十個の天井石を横架せるものにして、底部には側壁に沿ひて礫石を併べ、中央部には砂及び粘土を敷きたり。更に其底には石室の長軸に沿ひ四方割石にて圍み連續せる內法約三六糎乃至二七糎の石棺あり。其東南部は石室外に延び長さ約一九米に達し封土の東南に存する空壕の底部に近く口を開けり。石室內部より漢式鏡二面・管玉二箇・直刀・刀子・朱塊等を發見せり。

アラシヤマ 嵐山 京都市右京區にある山。古くは荒樓山。京都地方にては一般にランザンと呼ぶ。丹波高原の瀨戸內海斜面の水は保津川となりて京都盆地に出づる谷(世に嵐峽と稱し指定名勝)の末端の右岸に峙つ標高三七五米なるも、古來紅葉名もつて名高く、北麓は嵐峽即ち大堰川(保津川の一部の稱)にて、往昔大宮人船を泛べて遊びし所。のち後嵯峨上皇の龜山の仙洞に在せられし時吉野の櫻を此處に移植せられて以來櫻の名所となる。青松綠樹の間に彩る春の櫻、秋の紅葉の眺めは到底他の追從を許さず。山中に芭蕉の「花の山二町上れば大悲閣」と詠みし大悲閣あり。保津川を開鑿して舟筏を通ぜしめし大土木家角倉了以の木像を安置す。山の東麓に眞言宗の法輪寺あり、本堂に虛空藏菩薩を安置せるより虛空藏堂ともいひ、十三歳に達せる少年・少女の智慧を授かるため盛裝してこゝに詣づ、世に之を十三詣りと稱し有名なり。寺の麓の邊より對岸に渡月橋を架す。長さ約二〇〇米。嵐山鑛泉は嵐山の北麓に位し、無色透明の炭酸冷泉にて加熱浴用。又山中に戸隱瀨織・夢窓國師の坐禪石及び永正年間管領細川政元の將香西又六の板にて建宇せし所と傳ふる城址あ

り。いま此山の森林は風致國有保安林にて、其面積五九ヘクタール餘。大堰川の對岸の龜山に今嵐山公園あり。省線山陰本線嵯峨驛(明治三十年設置)、京阪電鐵嵐山線の嵐山驛は大堰川の右岸、嵐山電氣鐵道及び愛宕山鐵道の嵐山驛は川の左岸にありて京阪よりの交通は便利なり。拾遺・秋「朝またきあらしの山のさむけれはもみちのにしきぬ人そなき 右衛門督公任」夫木・四「大井川おろすいかたにつむものはあらしの山のさくらなりけり 後德大寺左大臣」〔嵐山公園〕渡月橋の西、南は大堰川を隔てゝ嵐山に對し面積約三〇〇〇アールの京都府の經營。もとの中島公園と龜山公園とを併せて嵐山公園と改稱せるもの。舊中島公園は大堰川の中洲を利用せるもの。舊龜山公園は小倉山の南東部を占め、公園的施設完備し、中央松林に角倉了以の銅像あり。

〔千光寺〕黄檗宗。もと天台宗。嵐山大悲閣と號す。後嵯峨帝の御新願所。中世以來衰類、慶長十九年角倉了以は現地に大悲閣を建立し、二尊院道空良椿を請じて中興開山とす。金槌を持てる了以の坐像(木像)を安す。明治以後諸堂やゝ整ふ。寺域は景勝の地を占め閑寂の靈地なり。

【嵐山電鐵】京都市にある地方軌道。京都市中京區四條大宮より起り雜子辻を經て右京區の嵐山方面に通ずるを本線とし雜子辻・上京區の北野間を支線とす。

アラシュク アラシ——アラタ

アラスキ 在次 薩摩國薩島郡にあり。郷。和名抄は訓み同くも阿良須岐と讀めるものならん。此郷今の何れの地に當るか詳ならず。在次の字に關しても數設あり。太宰管內誌に「次恐田字當、今有荒田村」とあり、また在は伊の誤りにして伊須岐と讀めるものなりともいふ。

アラセ 荒西山 鹿兒島縣大隅國肝屬郡の南部にある山。一にプラニシといふ。內之浦町・大根占町・田代村の二町一村に跨り火崗岩より成る。標高八三四米。南東方には六郎館岳(七五四米)聳ゆ。西方には鹿兒島灣の細灣、東方には太平洋の浩波を望む。

アラセ 荒瀨 秋田縣北秋田郡にありし村、昭和十二年九月一日村名を大阿仁と改む。↓大阿仁村

【荒瀨】近世羽後國飽海郡にありし郷。即ち荒瀨川下流の地域にて今の山形縣飽海郡の大澤・一條・觀音寺・上田・本楯及び西荒瀨邊の地域の汎稱。

アラタ 荒田

【荒田】上總國夷瀨郡にありし郷(和名抄)。其地今の千葉縣夷隅郡大多喜町・國吉町の邊か。南總郡郷考に「荒田方廣、新田野村存」とあり。今の東村の新田野邊の地ならんとの說もあり。

【荒田】播磨國多可郡の郷(和名抄)。播磨風土記には荒田村と見ゆ。今の兵庫縣多可郡松井庄村大字奥荒田及び中町の大字安塁田は其の遺稱ならん。松井庄村大字的場に式內荒田神社あり。播磨風土記「賀食里大海山荒田村土下上。右因レ居ニ川上一、爲レ名所ニ以號ニ大海一者。昔刑石郡大海里人到ニ來居於此山底一。故曰ニ大海山一。生レ松。所ニ以號ニ荒田一者。此處在神名荒生日女命。死レ父兩生レ見爲レ之醜ニ黽酒一。作ニ田七町一。七日七夜之間。稻成熟。意乃醸レ酒集ニ諸神一。造ニ其子棒一。酒而令レ喫之。於レ是其子向ニ天目一命一。而奉レ之。乃知ニ其父一。後荒ニ其田一。故ニ荒田村一」

【荒田】豐後國にありし古郡。延喜式に荒田郡馬五疋とあり、今の大分縣玖珠郡北山田村の邊に當るか。

アラタ 新田村 大分縣豐後國大野郡の中部。村內殆んど山地なし、東は三重町、西南は白山村、西北は牧口村、北は百枝村に隣接す。大野川の支流奥嶽川村の西南部を流るゝ峡流にて沿岸平地をつくらず、東北部に水田ありて米・麥を產し、山地よりは林產あり。縣道北部を東西に通じ自動車の便あり。此地和名抄、大野郡三重郷に屬し、今の三重町・百枝村・荒尾村等と共に一境を成せる處。

アラタキ 荒瀧山 山口縣厚狹・美祢二郡に跨る山。標高四四六米。山頂に大內氏の將內藤陸春の城址あり、陸春はのち毛利氏に降り長門の守護となる。

アラタノ 新野町 德島縣阿波國那賀郡の東南部。東部は橘灣に臨み、南部は海部郡赤河內村と界し、北部は鷹敷町と相接す。那賀川の支流桑野川西南部に發源して東流す。村內概ね丘陵性山地を成すも桑野川の沿岸及び東部の海岸には やゝ平地拓け米・繭・麥を產し、蜜柑・柿・梨等を產す、柿は全町開墾山地に栽培し、また木炭・醋酸石灰及び瓦・竹の籠詰等の特產あり。國道と省線牟岐線東部を南北に走り、後者は大字廿枝に新野驛(昭和十二年設置)を設く。また橘港に近く東部は交通至便なり。延喜式に見ゆる室比賣嗣は恐らく大字荒田野の地にありしものならん。天正五年に三好長治、異母兄細川眞之と爭ひし時この地に陣せしといふ。本村は舊荒田野村と豐田村を併合し阿良多野といひ、明治二十二年町村制實施の際、廿枝村を併合し新野村となり、大正四年町制を施行す。〔平等寺〕大字私山にあり。古義眞言宗。白水山醫王院と號す。空海の創建と傳へ、往時は十二支院を擁して寺勢隆盛を極めしも、天正の兵燹後漸次衰類す。現に高野山の末寺、四國八十八所第二十二番の札所。

アラタマ 麁玉川

【麁玉河】一に荒玉に作る。靜岡縣遠江國濱名郡にある天龍川の一支流馬込川の古名。而して流域は舊麁玉郡の地なり。寶龜元年紀「遠江國地震、山崩、壓ニ麁玉河一、水爲ニ之不レ流、經ニ數十日一、潰、沒ニ數曾、長下、石田三郡、民家百七十餘區、并損ニ苗」〔麁玉(郡)〕遠江國にありし郡名。古へ天龍川の一支たりし荒玉川に沿へる地。

萬葉集には阿良多摩と見え、和名抄は「阿良多末、今有玉」と註し、三宅・碧田・穎田・赤狭の四郷を置く。爾後境域に變遷あり、赤狭・碧田は豐田郡（今の磐田・袋井二郡に分割さる）に、穎田は笠上郡（今の袋井郡の一部）に入り、三宅郷のみ亀玉郡（今の亀玉村）として殘りしも、明治二十九年引佐郡に併合せらる。

【亀玉村】 静岡縣遠江國引佐郡の東部。東北は磐田郡下阿多古村に、東南より南は濱名郡赤佐村小野口村に界し、地形南北に長く、北部は山林多く南部は土地平坦にして田畑よく拓け農業行はる。織物類の工產を主とし、薪・米の產多し。本村は和名抄の亀玉郡三宅郷の地なるべく、村名は亀玉郡名の遺稱なり。大字宮口に臨濟宗の瓦刹庚申寺あり、寮者多し。社線西遠鐵道本村を過りて、社線遠州電鐵の遠州貨布繭驛（大正十二年設置）に連なり、其間に下新原・中新原・上新原・段ノ下・宮口（共に大正十三年設置）の五驛を置く。二俣町金指町をつなぐ道路中部を横ざり交通不便ならず。〔六所神社〕大字宮口字土ノ前に鎮座。郷社。祭神、底津海津美神・中津海津美神・上津海津美神外數神。創立年代不詳。中世郡内の式内社六所を勸請したるものか。例祭九月十六日。〔庚申寺〕大字宮口にあり。臨濟宗方廣寺派。俗稱、猿寺。神亀年中の創建と傳ふ。寺境廣闊にして堂宇宏壯、地方の名刹たるに恥ぢず。本尊に庚申尊天を安置す。

アラチ　荒千潟　福岡縣筑前國宗像郡津屋崎町な往古荒自郷（在自郷）と稱し、今大字に在自あり。恐らくはこの地の潟を指せるものならん。萬葉・一二「在千潟在り慰めて行かめとも家なる妹い豐悒せむ」

アラチ　愛發　【愛發村】 福井縣越前國敦賀郡の東南部。東と南は滋賀縣近江國伊香郡及び高島郡に接す。地勢嶮れ山地なるも多少の耕地あり。敦賀より滋賀縣高島郡に通ずる西近江路（縣道）村の西部を南北に走り、省線北陸本線は東境榊ヶ瀬トンネルを越えて村を東西に貫き刀根（大正五年設置）・疋田（明治十五年設置）の二驛を置く。古く江州より越前に出づる要路に當り、高島郡との境なる愛發山（有乳山）には奈良時代三關の一たる愛發關を置かれし所。本村は古くは矢田莊と稱せし地。大字疋田は源平盛衰記に疋壇と見ゆる地なり。又大字刀根の東江州との境にある刀根峠（一名柳瀬峠）は、天正元年朝倉義景の織田信長の軍と戰ひ大いに敗れし古戰場なり。又、明治天皇刀根御小休所ば史蹟に指定せらる。〔愛發關〕 上古の三關（鈴鹿・不破・愛發）の一。また荒乳・荒血等にも作る。村の西南境愛發山にありしもの。設置の期は詳ならざるも文武天皇の大寶年中ならん。天平寶字八年（七六四）惠美押勝の叛せしとき官軍のこの關を守りしこと續日本紀に見ゆ。延曆八年七月通路の便を失ひし爲め廢せり。關址は今詳ならざるも大字山中の邊に當るといふ。

【愛發山】 越前國敦賀郡愛發村と近江國高島郡朽熊村との間にある山。有乳山・荒血山・荒乳山・荒道山・荒道高根等にも作る。荒乳の中山といふも之に同じ。七里半越ともいふ。上古近江より北陸道に通ずる要所に當り、北麓に愛發關ありしもいま其址詳ならず。新後拾遺「あらち山峯のこからしさきたてて雲のゆく手に落つる白雪」

アラツ　荒津　筑前國にありし地名。今福岡市海岸に荒戸町あり、その北部は荒戸山（荒津山）の丘陵なし、北の突角か荒野崎といふ。恐らくはこの地なるべし。古書・古歌に多く見え、古來港泊の地たるを知るべく、一に荒津海・荒津の濱と稱せらる。萬葉・一二「草枕旅行く君か荒津まて送りそ來つる飽足られこそ」同・一二「荒津の海吾帶奉り齋ひてむ早還りませ面變りせず」※荒津崎

アラテ　新手　省線香月線の貨物驛（明治四十五年設置）。福岡縣遠賀郡中間町にあり。

アラト　荒戸山　→荒津崎

アラト　荒津崎　博多灣（福岡灣）南岸の岬角。福岡市福岡港の西北界をなして福岡灣に突出す。荒戸町に屬し、崎の背後は荒津山の丘陵をなし高さ約四〇米、脚下に鵜來島を俯瞰し、西北に殘ノ島・海中道志賀島を隔てゝ遠く玄海灘の蒼波を望む。荒津山はいま西公園となり、黑田孝高を祀る縣社光雲神社あり。福岡市の一名所をなす。此地一に荒戸山といひ古歌に見えたる荒津崎は即ちこの地ならん。萬葉・一五「神さふる荒津の埼に寄する浪間無くや妹に戀ひ渡りなむ」

アラト　荒砥　【荒砥町】 山形縣羽前國西置賜郡の東北部。最上川中流沿岸に位し、米澤盆地の西北端に當り地南北に長く東は白鷹村・十王村、南は東根村西は鮎貝村に隣り、北は西村山郡宮宿町・西五百川村と界す。省線長井線の荒砥町驛（大正十二年設置）あり。養蠶盛んに行はれまた米・木炭・木材の產あり、長井紬を特產とす。古く荒砥郷と稱せし處といひ、荒砥城址（一に八乙女城、又石那田城）あり、往昔は當國屈指の名城たりしといふ。伊達氏の時、寒鳥和泉守・大蓮目遠江守・同修理これに居る。蒲生氏の時、水野三右衛門尉住居しのち上杉氏の香城となる。明治二十三年町制施行す。〔八幡神社〕 大字石那田に鎮座。郷社。祭神、伸哀天皇・神功皇后・應神天皇。一に八乙女八幡宮とも稱す。寛治年中源義家、清原氏征討の時、今の八乙女に至り石清水八幡宮を遙拜し、八人の乙女をして舞樂を奏せしめ、而して本社を創祀せりと傳ふ。いまなほ古例に倣ひ、八人の乙女の樂を奏す

る神事あり。八乙女城主及び藩主上杉氏の尊信篤し。また荒砥外十二箇村の總鎮守と仰ふがる。當地は白鷹山の南方にありて長井最上の邊上の要所にして、四時の眺望甚だ絶佳なり。例祭七月十五日。

【荒砥村】 群馬縣上野國勢多郡の南部。伊勢崎町の北方、大胡町の南に隣り、荒砥川村の西部を南流す。土地平坦、耕地拓け、養蠶盛に行はれて繭の產額著しく、また米・麥を多產す。伊勢崎・大胡間の道路南北に通じバスの便あり。大字下大屋に產泰神社あり、木花開耶姫を祀り附近の衆庶より安產守護の神として崇敬を受く、大字二宮には當國二宮赤城神社鎮座。此村に疏水の址あり、延長約一〇粁。西隣の桂萱村大字上泉附近より廣瀬川の水を導き村を横斷して東方新田郡を流るゝ粕川に入る。開墾及び廢絶の時期は詳ならず。また村内にある前二子・中二子・後二子の三古墳は何れも指定史蹟たり。大字大室の二見山も一大古墳にて明治二十年頃、英人アーネスト・サトー之を研究して、其精密なる論證を公にし世人を驚歎せしめたりといはる。〔二宮赤城神社〕郷社。祭神大穴牟遲神ほか數神。創立年代不詳。元亀年間大胡城主大胡當陸介新顯所として社殿を造營し、且つ供物七石餘を寄進せり。江戸時代には藩主酒井氏の崇敬を受く、一說に國内神名帳所載の「正五位上赤城若子明神」に擬す。近村の產土神として衆庶より崇敬を受く。

アラト　新砥村　岡山縣備中國阿哲郡の西南部。南は川上郡吹屋町湯野村と界し、西は野馳村、東は萬歳村・本郷村に接す。西部に荒戸山（七六二米）ありて疏れ高原性山地を成すも、耕地よく拓け米・麥及び木炭を產す。東隣萬歳村より西隣野馳村を經て廣島縣東城町へ至る道路南部を東西に通じ、また省線藝備線野馳驛（野馳村畑木）に最も近きも（約八粁）交通なほ便利ならず。この地古くは和名抄、阿哲郡野馳郷の一部なり。

アラド　荒土村　福井縣越前國大野郡の西北部。東は野向村に隣り、東南は勝山町との間に村岡村を隔て、北境に大日火山（一三六九米）聳えて石川縣江沼郡西谷村・能美郡新丸村と境す。南部は平坦にして九頭龍川の西方への曲屈部に當り川を隔てゝ淵羽・鹿谷の二村と相對す。福井市より大野町に至る縣道村の南部を通じ、米・薬煙草・繭の產あり。本村は古くは和名抄、大野郡大山郷の地なりしか。

アラトマリ　荒泊　越前國坂井郡の郷（和名抄）。その地いま詳ならず。郡郷考には、延喜式の坂井郡阿治波世神社をひき、荒泊はアラハチと訓むかといへり。今の福井縣坂井郡の九頭龍川口の三國港か。

アラナリ　新成村　秋田縣羽後國雄勝郡西北部。横手盆地の西南部に當り、雄物川の支流西馬音川東境を北流し、東北は平鹿郡雄合村と境し南は西馬音内町に隣る。村内裕んど平野にして西部に丘陵と小湖群あり。本莊街道より岐るゝ縣道湯澤街道は村の中央を南北に通ず。米產最も多く養蠶また村の主業をなす。村は南の西馬音内町北の明治村の地と共に古く田村國雄勝郡雄勝郷に屬し（和名抄）雄勝城跡に雄勝の郡家・驛家を兼ねし處、明治に至りて、足田・錢塚・高尾田・島田等を合併して新成村をなせるもの。

アラニシ　荒西山　鹿兒島縣肝屬郡南部の荒西山の別稱。

アラハカ　荒陵　大阪市天王寺區の南部、天王寺邊の古稱。日本書紀通釋には摂津國東生郡天王寺村とあり、前皇廟陵記には「天王寺舊記、四天王寺在。難波荒陵村、故俗號荒陵寺、西南有荒陵」と載す。その荒陵は今の茶臼山町にある古墳（茶臼山又は茶碑山）にして、この古墳あるよりその附近の地名なも荒陵といひしものなるべし。

アラハカ　荒墓　武蔵國豐島郡の郷。和名抄は安良波加と訓ず。其地いま詳かならざるも、或は今の東京市中野區の野方邊より板橋區石神井の邊か。一說に荒墓郷、後に新墓の里に作り爾比保利と呼び轉じて新堀に作る、故に新堀（今の日暮里）・谷中・上野・下谷・根岸・坂本・田端・中里の諸邑なりといふもいま遽かに信じ難し。

アラハタ　荒幡　埼玉縣武蔵國入間郡にありし村。明治二十四年四月吾妻村に併合。

アラハマ　荒濱　【荒濱村】 宮城縣陸前國亘理郡の東北端。阿武隈川河口の右岸に位し、貞山堀の南端に當り、西は逢隈村、南は吉田村に接し、東は太平洋に面する平坦なる土地を占め、南部に鳥ノ海の湯湖を擁す。產業は水陸に惠まれ水產を主に、米・繭の產あり、西方亘理町に近くこの間バスを通ず、鳥の海に海水浴場あり。舊藩時代には石巻とともに並稱されし重要港なり、幕府領（福岡縣伊達・信夫の二郡）・南部及び米澤の所謂御城米約五萬石を江戸表へ輸送せる處にて、貞山堀を利用し北は鹽釜・石巻及び北上川沿岸に、南は阿武隈川を遡りて福島方面にも至る船舶の繫艤せる港なりしも土砂流出のため僅に小舟を通ずるに止まり、昭和三年河口浚渫を行ひしも、今は單に地方的漁港たるに過ぎずして、また昔日の俤を見ず。

【荒濱村】 新潟縣越後國刈羽郡西北沿海の村、柏崎町の北、高濱町の南にあり、東は刈羽村に隣り、東南西北は日本海に面す。西山丘陵の南西部にて西半は平坦、海岸は平直の砂濱なり。農業行はれまた漁業・製網等を主業とし、殊に鮭・鯡用の漁網は遠く北海道方面まで販路を有し村民の大部分は製網に從事すといふ。北陸街道海濱に沿ひて通じ、隣村刈羽村地籍内に省線越後線の濱荒駅（大正四年設

置）あり交通不便ならず。義經記に見ゆる「かりわ渡」は此邊なるべしといふ。

【荒浦】 省線越後線の一驛（大正四年設置）新潟縣刈羽郡刈羽村にあり。

アラハラ　荒原　愛知縣南設樂郡にありし村。明治三十九年本村ほか八箇村を廢し作手村を置く。

アラハラ　現原村　茨城縣常陸國行方郡の西北端。玉造町の北に隣り、北は東茨城郡橋村に接す。設ヶ浦東岸なる臺地に位し農を主業とし、米・麥の産多し。縣道小川町・鉾田町・玉造町の三方面に通じ、社線鹿島參宮鐵道村内を横ぎり、復本驛（昭和四年設置）を置く。郡鄉考に「芹澤村東邊の原野今も現原の野の稱あり。高敞にして著見の義なりしを荒原に轉ぜしなり」とあり。芹澤は今本村の大字なり。此地は和名抄、行方郡荒原鄉の地にて、風土記には「現原の丘」と見え、和名抄は荒原鄉とあり。常陸風土記に「倭武天皇臨幸海北。行至平海北。當是郡之濱海。臨水洗手。以玉落井。更祭。車駕。幸現原之丘」とみゆ。いま荒原の野あり、村名之による。また大字若海（若梅ともいふ）に上碓塚あり、之に圖して大日本史平貞能傳注に小松寺舊記を引きて「貞能至常陸那珂郡一瘧重盛遺骨納茅行方郡若海村一間居以終云」とあり。即ち平家西海に亡ぶるや小松内府の骨を埋め草庵を結び三墓を安置し、老いて後愛に死せり。上碓塚是なり。後寛永五年堂宇を建立し、三墓を安置し萬願寺といふ。大字芹澤に日の岡あり。往時は荒原鄉日の岡と稱し、日本武尊御東征の時この岡に登り太陽を拜し御勝を祈させ給ひしを以て此名あり。

アラハリ　新治　↓新治郡（茨城縣）

アラヒト　良人

【良人】 筑前國那珂郡の鄉（和名抄）。今の福岡縣筑紫郡の岩戸村・安德村の地ならん。安德村に現人神社あり。一に良人鄉は神功皇后の神數神助を新り給ふ爲に御田を設り給へる所にして、其後も住吉大神の封地となり、ために良人鄉の名を負へるものならんといふ。

【良人】 筑前國怡土郡の鄉（和名抄）。其地今何れなるか詳ならず。那珂郡の良人鄉と同じく住吉現人神に因緣ある名なるべし。

アラヒラ　荒平　省線古江西線の一驛（大正十二年設置）。鹿兒島縣肝屬郡花岡村にあり。

アラビラ　荒平川　↓安平川（北海道勝振國勇拂郡）

アラフ　阿良布池　攝津國川邊郡にありしといふ池。其の蹟いま明ならず。歌枕。後拾遺「川上やあらふの池のうきぬなはうきことあれやくる人もなし好忠」

アラフネ　荒船

【荒船山】 群馬縣北甘樂郡と長野縣南佐久郡に跨る火山。蓼須火山脈に屬す。曾てありし荒船火山の山體は既に甚しく開析されて今はその原形を止めず、幾多の山峯に分割せられたるも、その火口は縣界より東方北甘樂郡（群馬）の中央部に亙り、妙義山はその一部にして熔岩臺地の侵蝕削剝せられて奇形を成せるもの。また今の荒船山（一四二二・五米）は經塚山又は劍ヶ峯とも稱せられ、縣境富岡街道内山峠の南方に聳え、古生層・第三系・石英閃綠岩等を基底とし、輝石安山岩・角閃石安山岩・石英安山岩等より成り、山頂平坦にして浮べる船の如き山容を呈するより山名生ずといはれ、上野國名跡志に「船ノ南ニ行ニ似タリ」とあり。頂上に荒船山神社鎭座。風光明媚、眺望雄大なるを以て古くより探勝者多し。また西南方なる一峯兜岩山（一三六八米）の南麓に發達せる水成岩中よりは多數の植物化石を出せり。荒船山は別に櫃鳳山・碓凡山・碓山等とも稱せらる。拾遺「荒も業も皆みとりなる深芹はあらふれのみやしろく見ゆらん」「荒船の浮て見えけり鎌の海　雲潤」

【荒船】 ↓成船村

アラベ　荒部　丹波國桑田郡の鄉（和名抄）。其地いま詳ならず。地理志料は之を春日部の脩略せる春部の譌となし、今京都府南桑田郡曾我部村の大字春日部に擬定せんとするも如何にや。

アラマガン　Alamagan 仏、南洋諸サイパン支廳管下の島。マリアナ群島中部に位する火山島。離島航路のマリアナ群島線は年十二回寄航す。

アラマキ　荒巻　↓新治村（群馬縣）

アラミ　荒海　下總國香取郡にありし驛名。山方鄉（今の成田町の邊）より香取宮に向ふ通路に當る。日本後紀桓武天皇延曆二十四年十月不要の故を以て驛を廢せる記事あり。今千葉縣印旛郡久仁村の大字に荒海の名稱遺る。

アラメ　荒布橋　日本橋區本船町より小舟町に架せる橋、南方江戸橋に隣接し、舊魚河岸に通ず。現存。舊名六助橋。洛女皮肉論「中橋より右へいり、江戸橋にさしかかり、あらめ橋を打わたり、おやじ橋は入めうるさく」

アラヤ　荒谷

【荒谷峠】 北海道渡島國松前郡の南邊にある峠。東側吉岡村禮髭より白神岬北方の背梁を陸え大澤村荒谷に出づるもの上り下り各〻約二粁の樵路。北方に眺々たる道山を望み南方に津輕海峽の渺々たる海波を俯瞰する景勝の地なり。明治中葉までは東方の福島村・吉岡村方面と西方の大澤村・福山町方面とを通ずる驛路として來往頻繁、當上よりの景色の詩歌に詠ぜられたるもの亦多かりしも、現時は白神岳北方の大澤峠を通ずる縣道開け又背日の販ひを見ず。吉岡峠・茶屋峠・禮内越等の別名あり。東海參觀、吉岡嶺に上る。北に山岳遠く連なりて、雪ならぬはなし。津中に浮ぶ帆影は、胡蝶のつばさより小く……津輕富士も屏然と見ゆ。

【荒谷】 舊鳥州街道の宿驛名。いま宮城縣栗原郡長岡村の字にあり。古川宿と高清水宿との中間にあり、古川を距る一里半。高清水を距る二里六丁。

アラヤ　新屋

【新屋町】 秋田縣羽後國河邊郡西北端。雄物川下流の左岸に位し、川を隔てゝ北は土崎港町に、東は秋田市に對し、西は日本海に面し南は濱田村に接し、南北に長き三角狀の地形をなす。地平坦にして中部に丘陵をなし、東南部桑園よく拓け、沿岸は出入なく遠淺なり。明治二十九年六月町制施行さる。本町は、もと荒屋に作り、海岸の砂地の荒れたる狀態より名づけしものなりも新屋と改めしものといふ。省線羽越本線の新屋驛（大正九年設置）あり。名勝に勝平山・柴の渡・舊砲臺址あり。藩政時代には廣漠たる不毛の砂地にして屋〻墓風の土砂礫を飛ばし人家を埋め歷代の藩主その風害の防止策に惱まさる。時に秋田藩士栗田定之丞藩命を帶び、幾多苦辛の末、有名なる砂留の松林を植立せしため鼓に始めて永年の風害を除くに至れり。定之丞は後に從五位を贈らる。爾後、村人これを德とし祀る、これ今の栗田神社なり。〔日吉神社〕縣社。祭神は大山咋神・大物主命。平城天皇大同元年の創建にして當初山科郡勝平山（今河邊郡）の麓に鎭座せられしといふ。其後村の南方五町地字田中尾敷（今一本木）の地に遷宮、永治年間現社地に遷座。之より新屋山王社と稱す。また往古は坂本の別社と稱せり。古來より代々領主の崇敬篤く、本多上野介この地を知行するや、小野金助守就當社の由緣を本多氏に陳述し社領舊に復し、二千刈を附せられ、秋田藩の領地となるや該藩この地を割きて河邊郡に屬す。時に、小野金助守就は再び秋田藩の代官梅津半右衛門に謀り藩主に陳述し、佐竹氏より社領高米三石五斗を附せられ、爾來藩内の崇敬社たり。例祭五月二十六日。

【新屋】 上野國にありし牧。延喜式左馬寮式に見ゆれども其地いま詳ならず。

【新屋村】 富山縣越中國下新川郡の北部。泊町の西南約六粁、入善町椚山村の南隣にて東は大家庄・野中・愛本三村と南は黑部川を隔てゝ下立・浦山二村と西は小摺戸村と界す。黑部川下流平野の東部に位し其分流入川村の中部を北流し、土地平かに水利よく、耕地拓けて米の産多し。東北は泊町西南は三日市へ道路通じ、交通不便ならず。黑部川電力會社の第一・第二發電所あり。

アラヤシンマチ　荒屋新町　省線花輪線の一驛（昭和二年設置）。岩手縣二戸郡荒澤村にあり。

アラヤマ　荒山

【荒山峠】 實淺山脈横斷山路の一。石川縣能登國鹿島郡越路村より富山縣越中國氷見郡八代村に出づる峠。標高三九四米。兵略上の重要地點にて、戰國時代には屢〻爭奪の地となれり。天正二年九月、上杉謙信、七尾城を攻落し、畠國主畠山の一族義春の功を賞して此地の城砦を守らしむ。同十年六月畠山の遺將等、織田信長の横死を聞き一揆を起して石動山の僧徒を集め、四千三百餘人を以て此地に城を構ふ。佐久間盛政二千五百餘の兵を率ゐて來り、前田利家の援を得て急に攻めて之を陷る。

【荒山】 安藝國にありし驛名。延喜式に荒山驛馬二十疋とあり。その地いま詳ならず、或はいまの廣島縣賀茂郡御薗宇村の邊か。

アラヤマ　新山　↓新山村（京都府中郡）

アラヤマエ　荒谷前　省線釜石線の驛（大正十三年設置）。岩手縣上閉伊郡鱒澤村にあり。

アラユ　荒湯

【荒湯】 ↓鬼首村

【荒湯】 ↓鹽原町

アララ　安良々松原　山城國宇治郡にありしといふ松原。アララはアラアラの約にして稀疎の松原といふ意。書紀に武内宿禰及び武振熊に宇治川の北岸に屯し、忍熊王の軍の先鋒熊之凝と對陣せし時、熊之凝の「這方のあらら松原まつばらに流り行き……」と詠ぜしとあれば、宇治川の北岸にこの松原はありしものなちん。

アラリ　安良里村　靜岡縣伊豆國賀茂郡の西北部。北は宇久須村に接し、西は駿河灣に臨み、漁港安良里港を控ふ。猫越岳西麓の地にて概れ山地を成し、專ら水産業に從事す。道路西岸に近く南北に通ずるも交通なほ便利ならず。この地の桑原山は建築用材としての緑灰色。緻密やゝ硬質の安山岩・安良里石採取せらる。本村は和名抄、那賀郡那賀鄉に屬し、古くは多爾夜ともいへり。多爾夜は谷屋の義にして、入江深く、後方山を控へて谷地を成しその奥地に人家出來せし時の名ならんといふ。永祿の頃、小田原北條氏の臣矢野氏の領地たりしも、後德川氏の領となり、三島代官の支配下に屬し、正德三年旗本下問部氏の知行所となる。明治四年廢藩置縣の際韮山縣、後足柄縣、更に靜岡縣に入る。もと北隣宇久須村の大字たりしも明治二十九年獨立の一村をなす。本村に古へ奉庵法師大谷の山中より移せしといふ不動堂ありしも廢頽し、今僅にその堂址を遺すのみ。

アラレマツバラ　霰松原　攝津國にありし和歌の名所。住吉より泉州堺に至る間にありしも後世これを拓きて今は大阪市住吉區安立町となる。萬葉・一「霰うつ安良禮松原住吉の弟日娘と見れとあかぬかも　長皇子」「世尊の里つゞき、

丸雫松原、朴津を過て境南の鎌の旅籠屋に人留る一夜女の立出、水風呂を見せかけ、も（さの蚊帳もかしませうとまねく」

アラワイ　阿羅波比　島根縣出雲國八東郡法吉村大字末次西邊の古名。後世に愛隈或は浅合にも作る。郷社熊床神社は出雲風土記に見ゆる阿羅波比社に當る。毛利元就は白鹿（白髪）山城に據る尼子軍を攻めし時向城を起せし地。懐橋談に「愛隈は毛利元就白髪の城を攻め玉ふ時、先此處に本陣を取、諸卒は佐陀・末次に充滿せり」とあり。この地今松江市に入り外中原町と呼ばる。

アリ　阿里山　↓阿里山

アリ　有浦（蟻浦）　廣島縣安藝國佐伯郡鎮島町の海濱をいふ。即ち一島の埠頭にして對岸の宮島驛より鐵道の連絡船此處に發著す。廣島江波港へ約一五粁、平家物語には蟻浦とあり。嚴島御幸記「立かへるなごりもありの浦なれは神もめくみをかくるしらなみ　内侍」

アリアケ　有明

【有明浦】越後國西蒲原郡にありし浦。歌枕。今の新潟縣西蒲原郡内野町附近の海岸をいふ。或は岩船郡岩船町・神城村の海濱をいふか。夫木・二五「波のいろにありあけの浦の末みえてしほぜもしろくのこる月かけ　爲實」

【有明村】長野縣信濃國南安曇郡の北部。和名抄の安曇郡八原郷の内が。松本平の西北部、飛騨山脈の前山連嶺の東麓一部を占め、日本北アルプス登山口の一。即ち西境には前山連峯南北に連り燕・大天井・東天井等高度三〇〇〇米に近き高岳聳え、また北境には有明山・清水岳等峙ち松川村・常盤村に界す。中房川村の西北部、燕・清水二岳の溪間より出で、西境より來る諸溪水を集め、村のほゞ中部を東流し、東部松本平の西邊に扇狀地をつくり乳川と合し、東邊み南流して犀川に合す。村の西部は山高く谷深く、中房國有林をなすも、東部は地平に耕地開け、米・麥の產少からず。又天柿蠶繭の產あり。村名は信濃富士の稱ある有明山あるより起る。全村中部山岳國立公園の内。東北部に有明温泉・西北部に中房温泉あり。省線大糸南線の有明驛（大正四年設置）は乳川を隔てゝ對岸の北穂高村にあり。〔有明温泉〕泉質、アルカリ性硫黄泉。村の東北部中房川南岸に近く、日本北アルプスの登山口に當る。中房川の上流谿谷にある中房温泉より引湯したものにて、川の北方に有明神社・不動堂あり。〔中房温泉〕泉質、アルカリ性硫黄泉。無色透明にて硫化水素臭氣を放つ。燕岳と有明山の二峻峰の中間、中房川の谿谷にある温泉は北方及び西方の山側並に山麓の黑雲母花崗岩の裂罅より湧出するもの多く、白濁の湯・御座の湯・濁の湯・小鍋立・蒸湯・新蒸の湯・桑師の湯・小彈正・大彈正・觀音の湯等あり、諸の湯は中房川の河床、河成沈澱層中より湧出す。この温泉は硅華の沈澱盛にして特に鬆狀の硅華が沈澱することに於て世界中稀有に屬す、中房温泉の鬆狀硅酸及び硅華として指定天然記念物たり。〔有明口〕長野縣南安曇郡有明村よりする日本北アルプス登山口の一。省線篠井線の松本驛より發する省線大糸南線の有明驛（大正四年設置）にて下車し有明温泉に至り、中房川の谿谷を遡りて中房温泉を經て先づ燕丘に至る。

【有明山】長野縣信濃國南安曇郡の西北境に聳え、北安曇郡に跨る。また有明山にも作る。標高二二六八米。飛騨山脈（日本北アルプス）中の一峯にして、燕岳の東に位し、中房川の左岸に聳ゆ。松本平より眺めて其の形狀富士山に似たるを以て信濃富士の稱あり。一に戸放岳ともいふ。山頂に有明神社の奥院祠あり、本社は東南麓に鎮座す。古來より歌枕の名所として知らる。「かたしきの衣手寒くしくれつつ有明山にかかる白雲　後鳥羽院」

【有明山】播磨國飾磨郡にありしといふ山。其山いま詳かならず。拾玉・七「月かけに鮑かて有明の山のはや秋なく鹿のたちとなるらむ　慈鎮」

【有明濱】香川縣讃岐國三豐郡にありしといふ濱。今瀬戸内海鹽濱の東海岸にて觀音寺町の北に續く遠淺の濱を稱するか。一目玉鉾・四「有明濱　世の中に有明のはまも有物を人の心の間となしけり。」

【有明】福岡縣筑後國山門郡にありし村明治四十年本村ほか鬱塚村・鷹尾村の二村を廢し新たに大和村を設く。

【有明海】九州の西部にある大海灣。長崎・佐賀・福岡・熊本四縣に囲繞せらる。南部を島原灣といひ、北部を古く筑紫湯と稱せり。南は三角瀬戸・柳ノ瀬戸・本黄瀬戸に依りて八代海と連絡し、西南口は島原半島と天草島との間なる早崎海峡により天草灘に連なる。灣口より一五粁乃至一八・五粁の幅を以て偏東に走ること約二六粁、寒いで北方に灣入すること約六五粁。北部及び東部の沿岸は一般に平坦にして岬灣なく両も遠浸にして天然の良港を缺く。たゞ三池炭坑の石炭搬出のため近年大牟田市海岸に築ける三池港あり。西南部には古くより口之津・島原・三角等の諸港築ゆ。河川の注入するもの多く、就中筑後川・六角川・菊池川・矢部川・本明川等みその主なるものとす。灣内には島嶼・暗礁と稱すべきものなく、海底は概れ泥質若しくは介殼を混じたる泥土より成り、神合の深所に至れば沙質または介殼を混じたる沙土なる見る。水深は南部にやゝ大なるも概して小なり。蓋し北部佐賀縣沿岸の地方は北に扇狀し易き粗粒狀の花崗岩地を負ひ、東北部福岡縣大牟田市・柳河町附近の河流は柔軟なる石灰岩或は粗粒にして崩壊し易き地勢を流下し、泥沙を流出する事甚しく、沿岸年々

理害して遠浅となれり。潮汐干滿の差の大なる事は内地沿岸中第一にして、三米に達す。外海に遊きを以て大海性を有する暴轉魚の群來甚だ尠なく神合漁業は見るべきものなきも、廣漠たる干潟・干洲延長するを以て、貝類の繁殖多く鮑角貝・ミロク貝・メカウヤ貝・ホヒラギ貝・海筍貝・淺蜊貝・潮吹貝等を產し東海岸の一部には海苔の養殖行はる。此海は八代海と共に毎年八月朔日、節句頃の夜中には提灯の火の如きもの數百千海上遙に轉々明滅し所謂不知火、または千燈籠とよばるゝ現象を呈す。古の火國の稱はこれより起るといふ。

【有明山】長崎縣對馬國下縣郡嚴原町の西境にある山。別名を島根山または對馬嶽ともいふ。

【有明村】熊本縣肥後國玉名郡の西北部。大牟田市の南方約七粁。荒尾町の南清里村の北にて西は有明海に臨む。東部に低き丘阜あるもその他は土地低平、地味肥沃にして耕地發達す。西部海岸に沿ひて縣道南北に走り、大牟田市に通じ、省線鹿兒島本線これに平行す。當村は古くは府本村・八嬬村等と共に野原庄と稱せられし地なり。龍造寺系圖に「貞和四年、龍造寺家平、爲野原西郷、增永地頭」とあり、增永は今大字名に殘り、もと本村名たり。

【有明灣】九州南部東岸の灣。宮崎縣南那珂郡の南部都井岬と鹿兒島縣肝屬郡東部の火崎との間に灣入し、廣さ約二〇粁、灣入約三〇粁やゝ方形を成し、南岸東部に内之浦灣の支灣を有す。南北兩岸海岸なし、岩石多く、小屈曲あるも、西岸は約一五粁の間は殆んど直線狀の沙濱なり。福島川・前川・安樂川・菱田川・田原川・肝屬川等注入す。泊船地として北岸の福島川口・志布志町及び西岸の肝屬川口等あるも、何れも和船の碇繫地に過ぎず。赤灣内に枇榔島あり。熱帶性植物枇榔樹を以て蔽はる。蓋し黑潮にて其種子を齎らせしものなるべし。

アリイ　有井村　三重縣紀伊國南牟婁郡の東海岸。木本町の西に隣り、神志山村の北に隣る。南牟婁山塊の中部にて村の西部に丸尾山（八六一米）・長尾山（七八三米）等ありて東方に下り東南部は熊野灘に面し七里御濱の一部をなし、東南流して沿海にある耕地を潤す。主產物に米・水產物あり。此地に神代の遺蹟俗に花窟（大字有馬）と稱するものあり、伊弉冉尊を葬り奉りたる處なりと傳ふ。又大字有馬は、古野熊野國立公園の一部なり。村名は有馬・井戸の二村を合併して建てしもの。有馬の名は古く神代紀に見え、また古來多く詩藻に入る。夫木・三一「神祭る花の時にやなりぬらん有馬のむらにかくるゆふして　光俊」〔熊野油ノ鄕子晨〕指定名勝天然記念物。一に花窟といふ。井戸川ノ河口に近く峠立せる奇晨にして高さ約一六米、上部は灰色の石英粗面岩・下部は白色の凝灰岩より成る。曾て海岸に峙立したる斷崖の遺物にして其麓子の口に當れる凹みは木本の鬼ヶ城の洞窟と同じく往古の波蝕洞窟の一部の殘存せしものなるべく、其形の奇なると同時に土地隆起の遺蹟としても亦見るべきものあり。傳によれば花窟は即ち伊弉冉尊を葬り奉りたる窟なりと。いま岩下に小祠あり。〔產田神社〕大字有馬に鎮座。郷社。祭神伊弉諾命・伊弉冉命・祠遇突知命。創立年代未詳なるも日本書紀神代卷に「伊弉冉尊生火神」時、被灼而神退去矣。故葬於紀伊國熊野之有爲村」焉。土俗祭此神之魂者、花時以花祭、又用鼓吹幡旗」歌舞而祭矣」といへる有馬を以て本村に充て、何時の世にか伊弉冉尊を祀る本社の創立を見るに至りしものといはる。三十三所國會に「七里濱有馬村の花窟は日本紀所謂伊弉冉尊を祀り奉りし所なりしとぞ、例年此瓦葺の上より濃松の梢に注連縄を引渡し、鏑を以て旗を作り是に付る。祭禮は二月十月の二日にして、神官始め村中の男女花を備ふること恰も丘の如し、是神代よりの風なりと。故に花の窟と云ふなるべし。尤窟と稱すれども岩窟の類にあらず、只だ高さ二十四五間計りの瓦葺なり。然れども此地に神の鎮りましますに依り、則ち此祭を以て御屋と崇むれば祭屋と稱するならんか、王子岩屋ほど、花の岩屋に對ふ。此所は、大神伺遇突智を葬る地といふ。伊弉冉命化去まして時伊弉諾尊十拳の劍を以て伺遇突智を斬給よし神代紀に見ゆ」とあり。永正十八年有馬莊司榎本忠親此殿を造營し、江戸時代には藩主堀田氏・淺野氏等は社領を寄進す。又近郷の產土神として衆庶の崇敬篤し。

アリイエ　有家町　長崎縣肥前國南高來郡（島原半島）の東南部、雲仙（温泉）岳の南麓に位し、西は有家川を隔て西有家町に隣り、南は島原灣に臨む。北半は山地を成すも、南半は平地にして耕地拓く。縣道南部を東西に走り、社線口之津鐵道の滿家驛（昭和七年設置）・有家驛（大正十五年設置）を置く。有家川の上流、見岳の麓に鮎歸ノ瀧あり。高さ約五米、幅約一米、雲仙の瀑布中最も著名なり。瀧の上部に電工創雲泉の筆捨石屹立す。大字尾上は雲仙國立公園の一部をなす。※鮎歸瀧（温泉神社）山川名字大苑に鎮座。郷社。祭神白日別尊・豐日別尊外三神。創立年代未詳なるも往古温泉岳に鎮座せる温泉神社を勸請せりと傳ふ。寛永十四年基督教徒の亂に遭ひて島原に歸せしも、翌十五年再建せりといふ。又もと四面宮とも稱す。近郷の產土神として崇めらる。〔專念寺の構〕專念寺は寛永十六年島原城主高力攝津守忠房耶蘇教禁斷の爲め建立せるものにして構は其際忠房の手植になるものと傳ふ。根元に高さ〇・六米ほど盛土し六角形の平坦を以て囲み、樹高約一七米、幹圍目通約

五米。地上約一・五米の所に於いて互大なる支幹二本出でゝ枝條を四方に伸ばし、樹勢頗る旺んなり。

アリイチ　有市　↓笠置町（京都府）

アリウラ　有浦村　佐賀縣肥前國東松浦郡の西部。唐津市の西北約一〇粁。その間佐志町切子村を隔て、西は入野村との間に風光明媚なる假屋灣を抱く。小流村の中央を西流し、其沿岸に小耕地を見る外は概れ山地にて交通なほ不便なり。明治二十二年小賀倉外八箇村を合して本村を建つ。〔東光寺〕大字有浦下にあり。曹洞宗。瑞泉山と號す。永享年間愛岐守日高入道宗任赤木に戰ひ、敗れて有浦村に隱れし際、新念佛たる藥師如來を本尊とし小字を建立し、後天正二十年當寺を建立せりといふ。本尊木造藥師如來坐像は藤原時代の作にして國寶。

アリオー　有王山　京都府山城國綴喜郡井出町と多賀村の境にある山。背後に高岡山とあるも之に同じ。橫諸兄の傳領地に屬し其曾孫にあり王あり、山名はこれに基づくといふ。元弘元年、後醍醐天皇笠置山の行在所を出で赤坂に潛幸したまはんとして此地まで落ち給ひ、さして行く笠置の山を出しより云々の御製を詠ぜられし處。太平記・三・主上笠置を御發落の事「兎角して夜畫三日に、山城の多賀郡なる有王山の麓まで落ちさせ給ひけり。藤房、季房も、三日まで口中の食か斷ちければ、見たゆみ身疲れて、今には如何なる目に逢ふとも逃げぬべき心地せざりければ、せん方なくて、岡谷の岩を枕にて君臣兄弟諸共にうつゝの夢に伏し給ふ。梢を拂ふ松の風を雨の降るかと聞召して、未除に立ち寄らせ給ひたれば、下露のはら〳〵と御袖にかゝりけるを主上御覺ぜられて「さて行く笠置の山を出でしよりあめが下にはかくれがもなし」藤房卿泪をおさへて「いかにせん還む除とて立よればなほ袖ぬらす松のしたつゆ……」

アリオカ　有岡　↓伊丹町

アリガ　有賀　〔有賀村〕宮城縣陸前國栗原郡の東邊。若柳町大岡村の北、金成村の東にて、北と東は岩手縣西磐井郡花泉村・油島村と界す。北半は南に緩傾する丘陵、南半は東流する迫川の支流夏川沿岸の平地にて水田よく拓け、米を主產し繭を出す。南隣大岡村若柳町を東西に走る本吉街道これに沿ふ此線栗原軌道の大岡・若柳驛に達からざるも村内よりの交通はなほ不便なり。村内に二つの古墳址あり、一は延喜中、藤原利仁將軍の陣營址、一は田子屋城といひ、天文年間藤原右馬之介金長の居城なりしと傳ふ。

〔有賀峠〕長野縣信濃國諏訪郡の西南部上伊那郡との間にある峠。諏訪湖の南畔豐田村大字有賀より上伊那郡朝日村大字平出に至る間にあり。高度一〇七三米。湖南地方より上伊那郡に出づる捷路こゝに臨る。

アリカベ　有壁　舊奥州街道の宿驛名。今宮城縣栗原郡萩野村の大字。陸羽街道より少しく東に離れ、北上川の支流有馬川に沿ひ、いき省線東北本線の有壁驛（大正十三年設置）あり。古墳址あり、中世葛西氏の臣有壁尾張以下三世こゝに居住したりといふ。

アリカワ　有川町　長崎縣肥前國南松浦郡、五島列島中通島の中部東岸。西部小山脈を以て青方村・濱ノ浦村・若松村に接す。半島狀をなして東方に突出し東端は相崎瀬戸を隔てゝ平島に對し、西部の北岸に有川浦・南岸に鯛之浦灣入す。縣道北隣魚目村に通じ、長崎市及び北松浦郡平戸町へは汽船を通ず。村内は概れ山地にして專ら漁業に從事す。古くより五島唯一の鯨漁場として知られし處。この地の鯨は、寛永三年紀州湯淺の漁夫來りて突捕業を起せるに始まり、正保・慶安年間には十組の捕鯨隊組織せらる。後大大村領・平戸領に數十組の同業起りてより大いに漁場を妨げられ、一時此邊への通鯨絶え、休業の已なきに至れり。明暦元年五島家、その一族に知行分地の際、魚ノ目・宮江・字久島の内神ノ浦の三村に分けらるゝに及び、爾後終始兩村間に紛爭絶えず。而も當時は通鯨の數甚だ多く、年捕獲の最高百六十頭にも及べりといふ。今鯨首浦に鯨の供養塚あり、百六頭塚といふ。〔鯨骨岩神社〕郷社。祭神伊邪那美大神。創立年代未詳なるも、慶長年間今の地に遷祀せらるといふ。爾後藩主五島氏の崇敬を受け、社殿並に鳥居の建立及び社參・代參等のことあり。又近郷の飢守と仰ふがる。〔天滿神社〕郷社。祭神天穗日命。創立年代不詳。江戸時代には藩主松浦氏の崇敬を受け、又近郷の氏神として崇めらる。例祭九月二十五日。

アリキ　有木　〔有木山〕岡山縣苫田郡吉備郡鶴金町にある山。吉備ノ中山の山續きにして其嶺に小祠あり。吉備津神社の攝社にして有木山神社といふ。治承元年、藤原成親鹿ヶ谷事件に坐して配流せられし處。その居所は有木の別所と稱する地にして、成親幾許くもなくして此地に病歿せりと傳ふ。備中名勝考に「中山續きある有木は狹き處なれども、成親卿の配所にて遙にそこにて身まかり給ひし事など、あはれなるものから世に名高きにや、大祭會の歌などに詠まれ云々」とある如く、吉備中山・鯛谷川と共に吉備名所として知らる。平家物語・阿古屋の松「さる程に新大納言成親の卿は、備前の兒島におはしけるを、是は猶舟著近うてあしかりなんとて、他へ渡し奉り、備前備中の境、庭瀬の郷、吉備の中山、有木の別所といふ山寺に置き奉る。それより少將のおはしける備中の瀨尾と、有木の別所の間は僅か五十町に足らぬ所なれば、少將さすがに其方の風も懷かしうや思はれけん、或時暫康を召して是より父大納言の御渡りあるなる有木の別所とかやへは、いか程あるそと問ひ給へば、暫康すぐに知らせ奉つてはあしかりなんとや思ひけん、片道十二三日候と申しければ、其の時少將涙をはら〳〵と流して」同書・御大納言死去「さる程に同じき八月十九日、大納言入道殿をば備前備中の境、庭瀨の郷、吉備の中山有木の別所にてぞ失ひ奉る。その最後の有樣やうやうにぞ聞えける。始は酒に毒を入れて參らせければ叶はざりければ、二丈ばかりありける岸の下に菱を植えて、突き落し奉れば、菱に貫かつてぞ失せられける」

〔有木〕廣島縣神石郡にありし村。明治三十年本村外上豐松・下豐松・中平・笹尾の四箇村と合併し豐松村を建つ。

アリコー　阿里港　里港庄の舊名。

アリサ　有佐村　熊本縣肥後國八代郡の西部。八代町の東北方約八粁。東は宮原町に隣り、西は文政村を隔てゝ八代海あり。此地和名抄の八代郡肥伊郷の内か。八代平野の中部を占め土地低平にして水田拓け米を多產す。縣道北部を東西に走り、省線嵐兒島本線は南北に通じて有佐驛（明治二十九年設置）を置き交通便利なり。

アリサン　阿里山　〔阿里山脈〕臺灣中部、新高山脈の西側を南北に走る山脈。北は臺中州竹山郡の東北部、濁水溪谷の南側に起り、鳳凰山（一六九七米）・松山（一五五一米）となり、所謂阿里山の諸峯（大塔山・塔山・對高山・萬歲山・兒玉山）等を經て霞山となり、臺南州新化郡東境の邊に低爽す。阿里山の南部兒玉山よりは東方に石山・鹿林山等の山嶺ありて東方新高山に連なり、東側北方には濁水溪の支流たる陳有蘭溪、南方には楠梓仙溪上源の峽谷をなし、また西側には濁水溪の一支清水溪（阿里山溪）曾文溪等を分水す。高度は脊梁山脈（臺灣山脈）・新高山脈等に比して小なるも、第三紀層の所謂阿里山層より成り、針葉樹の美林を以て藏はるゝ阿里山塊あるを以て著はる。

〔阿里山〕臺灣阿里山脈の盟主たる山塊。臺南州の東境に位し、主なる諸峯を北より擧ぐれば大塔山（二六六三米）その西南方の塔山（二四八〇米）東南方の對高山（二四四四米）萬歲山（二四六七米）兒玉山（二五六八米）等あり。兒玉山の東麓は石山（二六五八米）鹿林山（二八六〇米）等につゞき東方の新高山脈の西部に連なる西邊の塔山は大斷崖をなして屹立し南西側阿里山谿谷に臨む。濁水溪の支流なる陳有蘭溪及び阿里山溪（清水溪）は此の山中に發し、前者は東方の谿谷を、後者は西谷か共に北流して本流に合し、曾文溪の上流は南側より發して南西に流る。有名なる阿里山森林地帶は此山中一帶の地に亙り東西八粁、南北二〇粁、面積一二、〇三二〔ヘクタール〕海拔九二四米より二六、〇〇米に及ぶ。樹木の分布は海拔一八一八米邊までは闊葉林、それより二一二一米邊までは紅檜を混じ、それより上は紅檜ノ扁柏の純林にして、二四二四米邊に至れば檜・松を混じて靈骨ほ時き密林となる。木材として最も價値あるものは扁柏と紅檜にして長大木多く、胸高直徑一米内外を普通とするも、老大木には六米以上、樹齡三千年に達するものあり。橿原神宮・桃山御陵・明治神宮等の御用材中には此山の檜材を加へられ、明治神宮大鳥表兩柱の一は樹齡一千九百五歲、他は一千九十三歲を算する老幹なり。この森林中に包含せらるゝ樹種は針葉樹に扁柏・紅檜・亞杉・椹子松・檜、闊葉樹に楓類・柯・樟・赤楊及び其他の雜木あり。この大森林を實地踏査せしは明治三十二年にして同三十六年臺灣總督府はその研究に就き調査せしも間もなく起れる日露戰役に妨げられて著手するに至らず、民間に貸附け、同三十九年大阪藤田組は森林鐵道を敷設して伐採を開始せしも收支償はず同四十一年これを中止す。翌年官營研究の議起り同四十三年第二十六議會に於いて豫算の協賛を得、阿里山作業所官制の發布と共に事業經營の歩を進めたり。伐採を實行せしは大正元年にして、爾來米國西部林業地の作業方法に倣ひ、架空式鐵索集材機その他の機械力を應用し、阿里山鐵道を延長して搬出を行ひ、萬全の機構を以て業績を擧ぐ。伐採の跡には順次に松・檜・廣葉杉等の植林を行ふ。森林事業の中心地たる沼の平は、盛夏と雖も最高華氏七〇度、冬季最低三六度、年平均五五度内外の氣溫を有し理想的なる健康地なり。阿里山鐵道の阿里山驛（大正七年設置）此地にあり。東方の兒玉を經て新高口に至る支線と西方の塔山に至る支線その他の林内支線の接續點に當る。附近に阿里山神社・阿里山寺・高山觀測所等あり、此邊一帶には數百本の吉野櫻植ゑられ、陽春四月開花の頃には遊覽客により賑ふ。また神木驛の傍に阿里山神木あり、周圍一八・八米、高さ四五・五米、樹齡三千年と稱せらるゝ檜の巨木なり。〔阿里山神社〕大山祇命・迦具土命・彌都波能賣命・志那都比古命・大國魂命・小彦名命・北白川宮能久親王を來祀す。ララチ・イムツ・タツバン等の諸蕃社を氏子として四月二十五日例祭を行ふ。大正八年の創座なり。〔阿里山寺〕曹洞宗。和口驛迦牟尼佛を本尊とし大正八年の建立なり。〔新高登山阿里山口〕沼の平の阿里山驛より東方の兒玉を經て新高口まで一〇・七粁は阿里山鐵道の支線通ず。阿里山驛前より兒玉・ターダカ鞍部・新高山を經て新高主山に至る間の登山路は二八・八粁にして徒歩約十五時間を要す。途中の鹿林山中に臺南州の經營に係る鹿林山莊あり、百名の宿泊人を收容し得。〔阿里山〕總督府鐵道阿里山線の一驛（大正七年設置）。臺灣臺南州高義郡蕃地

飯包服にあり。

【阿黒山鐵道】 臺灣總督府營林所管の鐵道。臺南州にあり。嘉義市より嘉義郡の竹崎庄を經て阿里山に達す。七一・九粁。更に阿里山驛より兒玉を經て新高口に至る支線あり。本鐵道は阿里山の木材輸送と新高山登山者とのために利便を與ふること多大なり。

アリジ　有道　丹後國加佐郡の郷（和名抄）。今の京都府加佐郡有路上村・有路下村の地なり。藤原道隆の孫伊行より出で、武藤七雲系圖に見ゆる有道氏は、或は此地より出でしものか。

アリジカミ　有路上村　京都府丹後國加佐郡の西南部。和名抄の加佐郡有道郷の内。大雲川（由良川）に沿ひ、何守町何東村の東北、有路下村の南、東南は何庶郡志賀郷村・物部村と界す。北部及び南部は概ね山地にして、中部由良川の沿岸に小平地ありて田畑拓け米・麥の產あり。養蠶行はる。福知山市より舞鶴町に通ずる縣道大雲川の左岸に沿ひて通じ、社線北丹鐵道の何守驛（何守町内）に近く交通不便ならず。本村にある才の神の醫は瓦葺として全國的に有數のもの、いま天然記念物に指定さる。

アリジシモ　有路下村　京都府丹後國加佐郡の西南部。有路上村の北岡田上村の南に接し、大雲川（由良川）に沿ひ、東南は何庶郡志賀郷村に境す。概ね山地にてたゞ川に沿ひて小低地あり米を產し養蠶行はる。福知山市より舞鶴町への縣道由良川左岸に沿ひて走るも交通なほ便利ならず。古くは加佐郡有道郷の内（和名抄）、村内に一色修理之亮義政の城址あり。

アリスガワ　有栖川　また有巢川とも書く。平安京の郊外にありし河。二箇所あり。一は嵯峨野齋宮の野宮の東を流れて桂川に入る小流。一は紫野の齋院の野宮の附近船岡山の東麓に發して、安居院を經て一條邊に至りて堀川に入る小河を稱すといふ。有栖川宮の稱號は此川の名に因めるものなるも二者の内何れを取りたるものか詳ならず。千載「千早振いつきの宮のありす川松とともにぞかけはすむべき」

アリソ　有磯　富山縣越中國射水郡伏木港より氷見郡氷見町の邊までの海岸一帶をいふ。古來より有磯海・有磯埼・有磯渡等といひ、風光明媚なるより歌の名所として知られる。名稱は氷見郡論谷の荒磯に基づきしもの。堀川百首「思ふこと荒磯や荒さむ」新古今・一一「わが戀は有磯の海の風ないたみしきりによする波のまもなし」萬葉・一一「大崎の有磯の渡りはふ葛のゆくへもなくや戀ひわたりなむ」

アリタ　有田

【有田村】 新潟縣越後國中頸城郡の西北部。荒川の河口に位し直江津町の東南に位す。飯田川北境を西流し、土地平坦にして米の產多く、省線北陸本線北部を通過し、又東方中魚沼郡十日町に至る縣道通ず。明治維新まで津有郷・新田郷の二郷ありしも、明治二十二年町村制實施の際二郷の一部を合一し有田村となる。本村には實暦年間より創業せる馬市あり、御運上の馬市と稱し、佐竹領藩内生產の馬實捌きの爲め、同藩の御取立市たり。今に猶その市存す。大字春日新田には由良港千軒長者・三莊太夫五人嫁等の浮瑠璃にある逢岐橋（應化橋・扇橋）あり、永保元年の多、東州岩城の領主、岩城判官正氏の二子姉の安壽、弟の津志王は母と共に越後逢岐橋にて直江津の惡篤山岡大夫のために誑かされ佐渡の人買に賣られし處といふ。又天正十二年蘆田能登守信吉佐渡へ攻め入りし際、逢岐の橋を渡り馬間屋原に進みしといふ。また春日新田の北に福島城址あり、堀左衛門貞忠後・總川忠輝等の居城なりしも慶長十九年福島の地水災多きため高田に移され福島は廢城となる。幕末尊王の大義を唱へ、明治元年戦後に進みし官軍の先鋒隊に加はり武功を建てし儒者笠松謙吾（贈從五位）はこの地の人なり。

【有田郡】 和歌山縣七郡の一。紀伊國に屬し、縣の西北部に位す。東は伊都郡及び奈良縣吉野郡に、南は日高郡に、北は海草・那賀二郡に界し、西は紀伊水道に面し、面積四六七方粁。地勢北部は長峰山脈東西に連亙し、南境東部には紫ヶ森山（一二六九米）、水ヶ實形山・白馬山等聳え、西部には白馬山脈あり。郡内山岳重疊し殊に東部は高峻にして、耕作に適せず。海岸は屈曲に富み、北に宮崎鼻、南方に日高郡の白崎に對して湯浅灣を抱き灣岸に湯浅港を控ふ。灣中には黑島・毛無島・鹿島・刈藻島等の小島點在す。有田川は修理川・湯川川の二支流を集めて、郡の中部を紆餘曲折して西流し、その下流沿岸には耕地拓け、またその兩岸の丘陵地は最も蜜柑の栽培に適し、所謂有田蜜柑の本場にして其產額は縣下第一位たり。其他農產物は米・麥・大豆・大根・甘藷・除蟲菊・楮・藺等にして、工業品に織物・生絲・清酒・醬油・木蠟・和紙等あり。宮中湯浅町の醬油、八幡村の紙、箕島町の蠟燭は最も著名なり。道路は海草郡より來り箕島町・湯浅町等を經て日高郡の御坊町方面に通ずる熊野街道那賀郡より來り郡の東部を南北に走り城ヶ森山頂を越えて日高郡に入る龍神街道、其外西偏箕島町より有田川に沿ひて東走し伊都郡に入る街道あり。鐵道は省線紀勢西線北方和歌山市より來り西部を南北に走り、其一驛藤並（大正十五年設置、藤並町）より社線有田鐵道を分ち御靈村に通ず。本郡古へは阿提と稱し、また阿氏・安諦・足代とも作りしも、日本後紀大同元年七月「改二紀伊國安諦郡一爲二在田郡一、以二同郡一天皇諱也」とありて、此時より在田郡と改められる。和名抄は阿利太と訓し吉備・淵笠・英田・奈郷・須佐の五郷を載せる。續日本後紀承和十五年五月の條に「在田郡管二上郡一、以二戸口增益課丁多少數一」とあり、戸令を照すに、上郡は十二郷以上ならざるべからず、然るに和名抄は五郷を載するのみ、惟ふに和名抄の郷數は承和以前の數ならん。中世在田・有田と混用し、正保圖には有田に作り、天保圖は在田となせしも、明治に至り有田に一定せらる。

【有田村】 和歌山縣紀伊國西牟婁郡の東南部。串本町の西田並村の東に隣り、北は東牟婁郡明神村に界し、南は熊野灘に面し、前方に潮岬を望む。峯ノ山（四八二米）の山嶺東南に下り、小流その谷より發し、南流して南岸の小洲に入り、漁港を擁す緩ね山地にして農耕に適せず專ら漁業に從事す。縣道（熊野街道）南部を東西に走る。「實生寺」有田村上にあり。臨濟宗妙心寺派。知足山と號す。仁治元年の開創。開基光孝帝第二皇子の開基。開山は源仁和尚。當時は城の森と稱する地にあり、のち現地に移る。

【有田鐵道】 和歌山縣西部の地方鐵道。有田郡西部海岸の湯浅町海岸驛（大正四年開業）より東方の紀勢西線藤並驛（大正十五年設置）を經て御靈村金屋口驛（大正五年七月開業）に終る。延長九・一粁。

【有田川】 和歌山縣西北部にある川。古名は安諦川。一に在田川とも書く。紀伊山脈中の一支谷の川、上流御殿川は高野山の南麓の水を集めて、谷を西南に下り、下支湯川川を併せて西に流れ、箕島町にて紀伊水道に注ぐ。流程一〇〇餘粁。下流二〇粁迄は小舟を通じ川口に有田港あり指定港灣たり。此川は古來鮎の產を以て名高く、また其の下流流域は有名なる紀州蜜柑の本場にて、箕島町より各地へ送らる。拾遺「世ないとふ心ばかりはありた川岩にくたけてすみそわつらふ慈鎮」

【有田】 廣島縣甲奴郡にありし村、大正元年本村及び太郎丸村・知和村・安田村我湯村を廢し、その區域を以て上田村を置く。

【有田】 ↓八重町

【有田町】 佐賀縣肥前國西松浦郡の南部。伊萬里町の南方約一〇粁。東は祚島郡住吉村に界し、南は有田村に接す。南部に金山岳（三五二米）、北境に黑髮山（五一八米）あり、街區はその中間有田川の源泉地に發達す。國道ほゞ東西に走り、省線佐世保線の上有田驛（明治三十一年設置）を置く。縣立有田工業學校・第一窯業試驗所あり。此地方は夙く製陶地として著はれ、一に皿山の稱あり。慶長二年佐賀藩主鍋島直茂朝鮮より凱旋の際、數多の陶工を隨へ來りしも、其一人李參平なる者本町の泉山より白磁鑛を發見して製陶業に從事す。これ有田燒の初めなり。正保年間に至り東島德右衛門支那人より彩畫著色の法を習ひ、是を酒井柏右衛門に傳ふ。柏右衛門は奚洲樓長衛と共に幾多の研究を積みて遂に著色法に成功し、藩主の保護を受く。これより有田燒の製造は頓る盛大となり、終に今日の發展を見るに至る。製品の多くは伊萬里町を經て諸方に搬出されしより何時よりか世に伊萬里燒と稱せらるゝに至れり。工場の一なる香蘭社第八代の主深川榮左衛門は鋭意製品の改良に忠しその製品は深川燒として海外に迄喧傳され、功績甚大たり、大正五年從五位を贈らる。また江戸末期より明治にかけての漢學者谷口中秋も此地の人にして正五位を贈らる。町の名所たる日子神社境内の公孫樹は目通り周り七・六米、高さ三六米餘の巨樹なり、古くより神木として崇められ、いま指定天然記念物にて「有田ノ公孫樹」と呼ばる。黑髮山（五一八米）は森林鬱谷の美に富み、殊に楓秋の景色は寂然一大畫幅を展げたる感あらしめ、カネコシダやイアキシヤカウヤウ等の珍植物の族生あり。また鐵西八郎爲朝大蛇退治の傳說ありて名高し。

【有田村】 佐賀縣肥前國西松浦郡の南端有田町の南に隣る。東は祚島郡住吉村中通村に、南は長崎縣東彼杵郡上波佐見村に界す。北部及び南部は山地なるも中央部は有田川上源の灌漑を受けて小耕地拓け米・麥を產す。有田町より南方川棚町方面への縣道南北に走り、省線佐世保線西北部を掠め有田驛。明治三十年設置）を置く。村内の白銀ノ山は約三百年以前に採掘したる古木場金鑛跡なり。此邊もと有田と稱し、後有田町・新村の二村に分けられしも、明治二十八年新村を逐て現村名に改む。

【有田川】 佐賀縣西松浦郡にある川。有田町・有田村南境の山地に發源して北西流し、曲川村邊にて右折して北流し、大山・二里諸村を經伊萬里町にて伊萬里灣に入る。流程約一六粁。沿岸諸村の灌漑に利せらる。川筋は省線伊萬里線の通路に當る。

アリタ　在田

【在田村】 兵庫縣播磨國加西郡の中部。多加野村の西、西在田村の東に接し北條町の東北に隣る。北部と西南部に丘陵性山地あるも、中部より東南部にかけては耕地拓け、主產物に米・麥・林產物あり。北條町より東北加古川中流に出づる縣道南部を横ぎる。古くは和名抄の賀茂郡上鴨郷の内。赤松記に在田殿とあるは足利氏の一族この地を領して在田氏を稱せしものにて其祖は赤松範資の子貞範守朝行なりといふ（播州古城記）。いま大字殿原の殿原山に其城址あり。〔石部神社〕大字上野に鎮座。郷社。祭神、市杵島姫命・田心姫命・湍津姫命。創立年代不詳。延喜式内社。舊稱、磯部明神。江戸時代には五石の社領を有し、近郷の產土神と仰がる。例祭十月十二日。

【在田】 豐後國日高郡の郷(和名抄)。今の大分縣日田郡西有田村・東有田村・小野村等に當る。延喜兵部省式に見ゆる豐田驛は荒・在いづれも郡調相近きにより減ぜば此地にありしものか。

アリタマ　有玉
【有田】 靜岡縣遠江國濱名郡にありし村。明治四十一年本村・中郡村及び小野田村大字平田を以て積志村を設置す。

アリタマ　有玉(郡)　遠江國の古郡名。→龐玉(郡)

アリチ　在千潟　→荒千潟

アリト　有戸
【有戸】 北海道後志支廳管内歌棄郡の舊村名。明治三十九年歌棄村に改め大字に其名を留む。現役場の所在地。
【有戸】 青森縣上北郡野邊地町の大字。省線大湊線の有戸驛(大正十年設置)を置く。

アリナレ　阿利那禮河　日本書紀に見ゆる河名。即ち書紀・仲哀天皇九年條に「新羅王重誓之曰、非三東日更出レ西、且除、阿利那禮河逆以之逆流、及河石昇、焉星辰二云々」とあり。神功皇后新羅征伐の記事中に新羅王の降服して誓詞を述べし始末を記し、その誓詞の中に阿利那禮河はよし逆流するとも此誓ひを變へずとみゆ。此の阿利那禮河は新羅の大河ならんとも、また朝鮮と滿洲の境をなす鴨綠江なりとも指せるものともいひ定論なし。後者の說によればアリは即ち鴨綠の韓音の韓訛、今外國人は鴨綠江を稱してヤルー(Yalu)といひ、ナレは何の意なりと。

アリノ　有野村　兵庫縣揖津國有馬郡の南部。有馬町山口村の西、八田村の東に隣り、南は武庫郡御影町・山田村及び神戸市に界す。和名抄の有馬郡春木郷の内か。六甲山北面の地にて高丸山(五〇九米)・蓬ヶ山(七二二米)・天下辻山(四五六米)等ありて山地を成すも、たゞ中部を北流する武庫川の支流有野川に沿ひ小耕地拓く。西部の唐櫻山より水晶を出す。神戸市中部より來る有馬街道中部をほゞ南北に走り、また社線神戸有馬電鐵ほゞこれに沿ひ、大池六甲登山口・唐櫻・新有馬・五社・岡場・田尾寺・二郎の八驛(總て昭和三年設置)を置く。〔有馬神社〕大字有野字西尾に鎭座。郷社。祭神大己貴大神・天御中主大神・少彦名大神。創立年代不詳。延喜式內社。江戸時代には武州岡部藩主安部氏は新願所として崇事し、又筑後國久留米藩主有馬氏はその發祥地なるを以て當に本社の神助を仰ぎ、又神恩に報賽する所あり。本社は安產の靈驗に著しく、馬場先に見安の森と稱する森あり、又同地に子安石・子安草といふものありて庭蓐その草を採りて服する時は如何なる難產も安產し、母子共に健全なりといふ。久村民平月磯れを忌む。故に婦人產期に當るや出でゝ水涯の小舍に就く、而も未だ嘗て產死者なしといふ。例祭十月十日。

アリノキ　有ノ木鑛山　→大嶽村(山口縣)

アリノト　蟻戸渡　山形縣羽後國飽海郡の鳥海山と稻倉嶽(一五五四米)の間にある絕壁。鳥海山の火口原より出で千蛇谷火口瀑より下る鳥越川の左岸にある斷崖絕壁にして奇觀を呈す。山家「さゝふかみきりこすくきか朝立ちてなひきわつちふありのとわたり」

アリフク　有福
【有福村】 島根縣石見國那賀郡の北部。概れ丘阜起伏するも石見村・今福村の北、川波村・跡市村の南に隣り濱田町を距る東北約一〇粁。高度一〇〇米內外の波狀の臺地をなし、北部と西南部の低地には水田拓く。產物に米・繭・木炭あり。國道舊山陰道西部を南北に通ずるも交通はなほ便利ならず。古くは和名抄の都農郷の內。東部の大字上有福に有福溫泉あり。三方山を繞せる跡市川の谿谷に湧出、御前湯・樋湯・早月湯・彌生湯の四湯あり、無色透明の單純泉にて溫度四五度。附近には周圍約八米、高さ約二七米の神代銀杏と稱する巨木あり。
【有福】 廣島縣備後國甲奴郡にありし村。明治二十八年二森・小塚・小瀨の三村を合し吉野村を建て、有福は大字名となる。東鑑「文治二年、賀茂社領、備後國有福庄」とあるは此地を云ふか。
【有福島】 長崎縣南松浦郡の中部。日島村に屬する島。若松島の西方にあり、東は日ノ島に隣る。周圍約六粁。海岸出入多きも崖岸をなし、西にイノタラ鼻、南に小田崎突出す。島頂二三〇米。日ノ島との間を宮田ノ瀨戸といふ。

アリホ　有帆川　山口縣厚狹郡にある川。萬倉村の北部に出で南流して船木町を過ぎ、小野田町と高千帆村の境をなし、周防灘に注ぐ。流程二二粁。緩流なれば舟運の便あり。殊に沿岸近く船木・有帆の炭田あるをもつて、船舶の出入頗る多し。

アリホ　有保村　廣島縣安藝國高田郡の南邊。南部は豐田郡竹仁村・賀茂郡志和堀村に接し、東境に麥ノ巢山(九二二米)ありて山嶺南境上に延び村內山地多きも中部より北方に小平地あり。米・麥・大豆・等を產し、栗・松茸・楮・日本紙の特產あり。西隣井原村・北隣向原村に出づれば三篠川に沿ひ縣道・省線藝備線の便あるも村內の交通はなほ不便なり。古くは和名抄の高田郡風速郷の內。村名は有留・保垣の舊二村を合併して建てしより出づ。往時は風早郷帆懸と稱し、毛利氏の頃穗掛と書き、今の大字保垣は此地なり。毛利城は毛利師親の末弟、有富越後守直衛の居城址たり。龍城は毛利氏の麾下、羽仁又右衛門の居城址。

アリホ　有穗　長門國厚狹郡の古郷名和名抄に厚狹郡九郷の一として見穗郷の名見え、これを載せず、誤り見穗は有穗の誤なるべし。いま、高千帆村に有帆の地あるは、この郷名の遺稱ならん。その地域は船木町・高千帆村・厚南村(もとの須恵村を含む)なるべく、即ち高千帆川下流の流域を占めたるが如し。

アリマ　有馬
【有馬】 上野國群馬郡の郷。和名抄は安利萬と訓す。今の群馬郡古巻村・豐秋村・染川町・伊香保町に當る。古愈村大字有馬はその遺稱なるべし。延喜式に上野國有馬島牧とあるも此郷の山野なり。
【有馬村】 神奈川縣相模國高座郡の西部厚木町の東南に近く、北は海老名村、東は綾瀬村御所見村、南は愛川村に隣り、西はほゞ南流する相模川を挾みて中郡相川村に對し、東半は相模野臺地の西緣にて桑園畑地廣く、西半は相模川左岸の平地にて水田よく拓けて米の產多く、畑地には麥・甘藷・馬鈴薯・苺・蔬菜・豆類等を出しまた養蠶盛んに行はる。社線相模鐵道村內を縱貫して門澤橋・社家(大正十五年設置)の二驛を置く。道路は相模川に沿ひて南北に走り茅ヶ崎の方面より甲州街道八王子市方面に通じ、また東南方の藤澤町に通ずる街道と分岐す。此地は和名抄の高座郡渭堤郷の地ならんか、今大字に本郷あり、近世恩馬郷と稱せられし地にして永祿役帳に「東郡恩馬、廿五貫文、少地に附無役」と見えたり。村名は郷社有馬神社の有と恩馬郷の馬を取りて有馬と名づけしといふ。

【有馬郡】 兵庫縣二十五郡の一。揖津國に屬し、縣の東南部に位す。東は川邊郡、南は武庫郡・神戸市、西は明石・美嚢・加東三郡に、北は多紀郡に界し面積三七一方粁餘。地勢は四境山岳を以て圍まれ、南部は六甲山・金剛童子山等の武庫山脈、北部は三國ヶ嶽・虛空藏山等の愛宕山脈に連なり、郡內亦山地多し。河流は郡の中部三田町附近に於ていま多紀郡に出でし武庫川とその支流羽束川・有馬川・有野川等相集まりて東南流し、其沿岸に小平地を見る。農を主業とし米・麥・大豆・大根・果實等を出し、工產に清酒・和紙・筆・寒天等あり。縣道三田町をほゞ中心として四方に通じ、鐵道は省線福知山線南方尼ヶ崎より來りほゞ武庫川に沿ひて北西走し、福知山方面に走る。また三田町より南方有馬町に至る省線有馬線及び神戸市に通ずる社線神戸有馬電氣鐵道とを分つ。有馬町の有馬溫泉・藍淵村の武田尾溫泉に著名なり。建郡の期は詳ならざるも、舒明天皇三年紀に「天皇幸二于三摠津國有馬溫湯一」と見え、古くは馬を間に作りたるものゝ如し。延喜式。拾芥抄以下は皆有馬に作る。和名抄は阿利萬と訓じ泰本・幡多・羽束・大神・忍壁の五郷を置く。中世赤松則村の第二子義祐本郡の地頭職に補せられ有馬氏を稱せり。
【有馬町】 兵庫縣揖津國有馬郡の南部。神戸市の東北部につゞく六甲山(九三二米)の北側山腹にある溫泉町。有馬川の上源地。もと湯山町といひしも明治二十九年改稱。古くは有間とも書く。古來從內地方唯一の溫泉地として著はれ、舒明天皇及び孝德天皇の行幸せられたることあり。また豐臣秀吉の入浴等を以て知らる。土地高燥、盛夏の候と雖も二四度に上ること稀にして、氣澄み水清く幽邃閑雅なる保養地にて、京阪神に近き爲め浴客頗る多く、北方三輪町より省線福知山線の一支有馬線通じ(本町所在の有馬驛は大正四年設置)、神戸市湊川より神戸有馬電鐵の便あり、福知山線賀塚驛(川邊郡小濱村)よりは乘合自動車の便あり。町は所謂有馬六景(鼓瀑松風、落葉山夕照、溫泉寺晚鐘、功池山秋月、有馬富士暮雪、有明櫻春宮)を初め、溫泉神社・清涼院・善福寺・鳥地獄・蟲地獄の噴氣孔等の名所、舊蹟多く、有馬筆・竹細工を名產とし、炭酸煎餅・松茸・昆布・山椒等を產す。町內には豪商などの別莊も少なからず。また有馬氣象觀測所あり。千載集「めづらしく御幸を三輪のかみならはしるしありまのいでゆなるらん」 賚賢
〔有馬溫泉〕 地は六甲山の山支湯槽山の中にあり、海拔三六三米・東南に愛宕山を仰ぎ、西に落葉山を控へ、南に鐵砲山の槃礴あり、三面山を環らして北の一方のみ展け土地高燥にして閑雅閑靜の境をなす。溫泉の起原は遠く神代にありと傳へ、夙く舒明天皇・孝德天皇の行幸ありしこと日本書紀に見ゆ。降りて、白河法皇も度々行幸遊ばさる。のち仁西上人(西暦九世紀)野禮現の神託によりて溫泉を再修し、藥師如來の十二神將を表はして十二坊舍を建つ。即ち湯戸坊名の起原にて今も旅館の名に坊名遺る。その後幾度か火災に罹りて衰へしも、豐臣秀吉の庇護によりてまた隆盛に向へり。有馬溫泉志に「この溫泉の熱度、豐公以前のことは考へ難けれど、慶長元年の大地震によりて微かに熱湯となり、豐公、誓願を命ぜられし後再び普通の溫泉となりたり。しかもなほ頗る高熱にして浴するもの動もすれば眩暈を起すことあり。手扰を冷水にひたし、これを頭に載きて入浴したるほどなりし」とあり。古より湧出量豐富にして治病に效驗あり。泉質は鐵を含める鹽類泉にて昔より鹽湯と唱へ、胃腸病・呼吸器病・婦人病・神經系諸病に効ありといふ。浴場は町の中央にある宮殿造のものを本溫泉といひ、外にラヂウム新溫泉、炭酸泉の浴場あり。〔鼓瀑〕 有馬町南ノ澤にあり。有馬川の上流・六甲山の北側に懸る。高さ約一〇米。上下二瀑あり。夏季の納涼地にて河底の岩に一入の涼味を覺ゆ。〔湯泉神社〕 字愛宕山に鎭座。郷社。祭神少彦名命・大己貴命・熊野久須美命。創立年代未詳。地方の古名社にて湯山明神・湯泉三和社・三輪明神とも稱し、崇神天皇七年始めて神戸を定め置かれしこと天慶八年文書帳に見ゆといふ。醍醐天皇延喜の創には大社に列し、新年・月次

新嘗の案上官幣に預る。又千載集に、有馬の湯に思ひて御幸侍ける御ともに侍ける湯の明神をば三輪の明神となん申侍なる物にかきつけて侍ける按察使資賢「めづらしく御幸か三輪の神ならは忘るし有馬の出湯なるへし」と詠まれたるは汎れく人口に膾炙せらる。また傳ふる所に依れば温泉底に石佛あり。「永徳年中雷雨洪水以後不レ泰見レ登容」といふ。舞楽朝野上下の崇敬篤く、著名な社として世に知らる。社寶中熊野曼荼羅図一幅（絹本著色）は國寶に指定せらる。例祭十月三日。

〔温泉寺〕ウンセンジともいふ。行基の開基と傳ふ。建久二年仁西上人これを中興し寺院となし衆徒十二坊を設きしも、のち兵燹に罹る。豊臣秀吉は有馬湯泉に入浴するに及び伽藍を改修せりといふ。附近に清涼院・蘭若院・阿彌陀房及び施薬院の舊址あり、嘗て行基はこれ等の院内に薬園を設き薬草を植ゑ、その薬草を病者に給し、温泉寺を貧病者の入浴に便せしといふ。〔清涼院〕黄檗宗。霊泉山と號す。昔稱温泉寺又は藥師堂。行基の開創。病者の宿泊所となす。建久二年仁西中興。本尊丈六藥師佛、傳空海作日光・月光、傳運慶作十二神將を安置。十二神將中、木造波夷羅大將立像一軀は鎌倉末期の作にて國寶。〔善福寺〕曹洞宗。光德山と號す。もと温泉寺に屬し阿彌陀坊の本坊。行基の開創？仁西中興して現稱に改む。のち興聖寺第五世英甫住持となり法祖宗より現宗に改む。

【有馬線】省線東海道線の一部。同線福知山線の三田駅（兵庫縣有馬郡三輪町高次）より分岐して有馬町乙倉谷にある有馬駅まで一二・二粁の線路。有馬温泉は駅より約一粁。古来有名な霊泉にて附近には紅葉の名所多し。別に神戸より社線神戸有馬電鐵の便あり。

【有馬口】省線有馬線の駅（大正四年設置）兵庫縣有馬郡山口村にあり。

【有馬山】歌枕。兵庫縣有馬郡にある山嶺の總稱。有間山にも作る。何山と限定し難し。古歌に多く猪名野に詠み合す。

萬葉・七「しなが鳥猪名野を来れば有間山夕霧立ちぬ宿はなくして」類聚郡源平盛衰記・四「身にもたしなむ旅勝笥、おやしの笛も立てとほす、心の操有馬山、かたわれ月のいく夜かも、夢さへあだに鳴尾が」

【有馬】長崎縣肥前國南高来郡の古地名。いま南有馬町・北有馬村に分る。中世豫掾藤原純有の後と稱し、遠江權守經澄建保中この地に移りて氏を稱せるものといふ。貴純に至り近隣に威を振ひ其孫晴純數郡を領せしも、豊臣秀吉九州を定むるに及び有馬氏の封を削減して島原半島に限れり。慶長十五年有馬晴信、阿瑪港船を焼き、國を除かれて甲斐に流され、其子直純、日向延岡に轉封、子孫更に越後糸魚川・越前丸岡に移され明治維新に至る。一方この地は寛永年間天草に蜂起るや此地の住民耶蘇教を信ずるもの多くこの亂に加擔せと爲め、幕府の厳酷なる處置を受け亂後は大いに衰微す。

アリマ　有其　紀伊國名草郡の郷（和名抄）。今の和歌山市鳴神町附近に當る。中世本有馬郷・新有馬郷と稱せり。

アリマ　有間

【有間濱】津輕地方の古地名。齊明天皇の朝阿倍比羅夫水師を率ゐて蝦夷を伐ち郡田・渟代の蝦夷を降し渟代・津輕二郡に郡領を定め、更に進みて渡島の蝦夷等を此の地に召集し大いにこれ等を撫慰して歸せしこと書紀に見ゆ。いま有間濱の位置を何れに定むべきかに就きては未だ定說なきも蝦夷との交通の便なる津輕半島の邊に求むべきならん。中世安倍貞任の裔なる安藤氏の津輕地方に威を振ひし頃には津輕は大別されて内郡・外郡といひ外郡はまたこれを十三湊郡とも稱し更に江流末・馬・興法の三郡となれり。此三郡中の江流末は或は齊明紀の有間濱の有間の遺稱の轉訛ならんか。津輕半島に於いて碇繫地を求むれば先づ十三湖の北岸の北津輕郡の相内村の邊を擧ぐべきならん。この地は北に山を負ひ西に砂嘴を控へて西北風を防ぎ好箇の碇泊地たりしならんか。いまは長年月の間に湖は淺くなりしも往時は蝦夷地渡航の要津たりしなるべし。※相内

【有間山】關東山脈の一峯。埼玉縣武蔵國入間郡名栗村と秩父郡の誼山村との境上にある山。天目山の東方に位し、標高一二一四米。全山秩父古生層より成る。

アリマ　有磨村　廣島縣備後國深品郡の西南隅。府中町の南方約六粁、北は栗生・福相二村に隣り南は沼隈郡神村・本郷村と西は御調郡原田村・菅野村と界す。南西北の三方は山を背ひ、有地川の小流村の西南端に發源し東流して流域に平地を作る。此地は備後絣の創始者宮田久三郎の出身地にして備後絣の產額多く、また米・繭・麥及び特產物に栗・梨・柿・蒟蒻等あり。府中町より南方松永町への道路通ずるも交通なほ便利ならず。古くは和名抄、葦田郡左味郷の地か、明治二十二年上有地・下有地・桙廚の舊三村を合併して建てしもの。村内の諸所の塚より瑪瑙の曲玉・土器等を出土す。永觀の頃、大字上有地・下有地はもと一村にて有地村と稱せられ鈴道郷と呼ばる。

アリマカ　有其香　→有其香村

アリマツ　有松町　愛知縣尾張國知多郡の北端。北は愛知郡鳴海町に隣接し、名古屋市の東南部へは僅に三粁餘を距つるのみ。町の中央に小丘陵あり南北に平地を分つ。舊東海道は北部の平野をほゞ東西に通じ、社線名古屋鐵道の東部本線これに沿ひて走り有松裏駅（大正六年設置）を置き、また南方龜崎・米田方面に至る縣道南北に走りてバスを通じ交通便利なり。農業行はれて米・麥等を產し

養蠶また盛んなり。特產に有松絞あり、もと鳴海に於て賣出せるより鳴海絞とも呼ばる。この絞染は慶長年間知多郡英比庄の民の創めしものにして昔時は舊東海道の鳴海駅を中心として數町に亙り街道の兩側に小賣店の大屋根を並べる盛況なりしも、鐵道開通してより後は店頭の小窓に變ぜられて製造或は卸問屋業に轉じたり。町の東南部に大字桶狭間あり、古戰場として知られ、その北部なる田楽狭間は今川義元敗死の地なり。有松町の地は和名抄、愛智郡成海郷の内にして後世知多郡に編入せられたるものなるべし。村名の起原に就いては、慶長十三年いまの東海道を布設の爲め、伊奈備中守檢地せし際、この地に松樹の多くありしなもつて有松と名づけしと傳ふ。藍染毛・四上「有松にいたり見れば、名にしおふ絞の名ぶつ、いろいろの染地、家ごとにつるしかざりたてて、あきなふ雨かはの見世より旅人を見かけ、おは入〳〵、あなたおはいり、名物有松しぼり、おめしなされ」

アリミネ　有峯　富山縣越中國上新川郡大山村南部の大字。立山連峯の西南麓に接し、常願寺川の一支前川の水源地にして、北東の折立峠（一四五七米）と西南の大多和峠（一三〇七米）とを連ねる山脈に沿ふ。最近までは前川河谷に部落ありて、原始生活を營む孤立山村の一例として知られたるも、今は定住者なし。東北登すれば藥師岳に至り、こゝにて南方太郎兵衛平、北ノ俣岳等、北方越中澤岳・立山等への縱走路に連絡す。

アリムラ　有村　→東櫻・島村

アリヨシ　在良村　三重縣伊勢國桑名郡の西南部。東は桑名市に界し、南は町屋川を以て桑部村と對し、西は員弗郡に隣り、奠老山脈の南端の斜面を占め、地勢北部に高く南半は平地。主產物米・麥。社線北勢電氣鐵道の西別所・龍花寺・坂井橋の三駅（ともに大正三年設置）を置く。此地は和名抄、餌田郷の内にて大字餌田は郷名の遺稱。式内餌田神社あり、餌田部氏の祖神を祀る。大字脇田は東鑑に「嘉禎四年、從五位下行隱岐守藤原行村法師、法名行西卒、年八十四、于ノ時在ニ伊勢國益田庄」とあるものに當る。※餌田

アリワキ　有脇　愛知縣尾張國知多郡にありし村。明治三十九年本村ほか龜崎町・乙川村の一町一村を廢し新たに龜崎町を置く。

アルシタリ　下哆唎　日本書紀に見ゆる任那國の縣名。任那は西北部にて百濟國境に近し。皇極天皇の六年百濟王上表して百濟に賜はらんことを請ひたる四縣の一。其地宋だ詳ならざるも今の慶尙南道の西北部の地方か。アルシは朝鮮の古音。國語のオロシに近し。

アルトリ　——岬　北海道膽振國有珠郡伊達町大字有珠の南二粁に突出せる岬角、北方約二粁に有珠灣あり。南東エントモ岬との間は弓形の砂濱にて海岸と鐵道線路との間は低平なり。

アルノ　Argno I.　南洋諸ヤルート支庁の屬島。マーシャル群島の東南部にある環礁。離島航路マーシャル群島線は年七回この島に寄航す。

アルプスギンザ　——銀座　日本北アルプス燕岳（長野縣南安曇郡有明村）にありて標高二七六三米より南に蛙岩・鷲右衛門吊岩を經て大天井岳（二九二二米）に至る約八粁の尾根をいふ。路は尾根通しにて多少の起伏あれど歩行し易く、また北アルプスにて有數の展望地たり。高度は二六八〇米前後。燕岳より西に降れば中房温泉に至り、また大天井岳より東南行すれば東天井岳・横通岳を經て常念岳方面に至り、又大天井岳より西南行すれば西岳小屋を經て槍ヶ岳方面に至る。→有明口

アルミ　有海原　三河國の古戰場。愛知縣南設樂郡東郷村大字有海の地。新城町の東北約六粁、寒狭川と三輪川との合流點にありて長篠村の南に接し、波狀の國境なるより有海原と名づけしものといふ。天正三年五月長篠の役に、武田勝頼此處に討つて出で織田・德川の軍と戰ひしも敗る。今この地に鳥居强右衛門勝高の墓と其磔死の舊址を傳ふ。

アレ　安禮埼　あれの　遠江國濱名郡にある新居埼にて、舊名を阿禮といふ。大寶二年十月太上天皇（持統天皇）の參河國に行幸の時、從駕せる高市連黑人の歌あり。萬葉・一「何所にか船泊すらむ安禮の埼こき回み行きし棚無し小舟」

アレ　阿禮　對馬國下縣郡にありし村。日本後紀に「延暦二十四年、遣址使船、五月十八日、於ニ明州下鄽縣二雨船悉纜、六月五日、一船到ニ對馬島下縣郡阿禮村」とあり。今の長崎縣下縣郡佐須村大字阿連の地なり。對馬編年略に古へ對州海賊長に彌藤次と號する者あり、こは阿連濱の住民なりと見ゆ。

アレン　阿蓮庄　臺灣高雄州岡山郡の北東邊。東は旗山郡に接し北は二層行溪を境として臺南州新豐郡に對す。東境を小山嶺南北に走りて其の南端に大岡山（大崗山・三一二米）を聳起する外は一面に平地にして海岸大平野に續き、水田廣く開けて米產多し。大岡山はその南方に小岡山（小崗山・二五〇米）を從へて庄の東南端に屹立し、往時匪徒の此の山中に據りて跳梁せし所。平原中に屹立して山容秀麗、頂上に立てば東北方に臺灣春巢山脈の峻嶺を仰ぎ、西南方は脚下に岡山・新豐の大平原展開して遙かに海波を望み眺望絶佳なり。山中到る處に石灰洞窟あり、又龍目泉と呼ばるゝ靈泉を始め所々に清水の湧出を見る。また山腹には古刹超峰寺その他の寺廟多數あり。〔超峰寺〕大岡山の中腹にあり。觀音菩薩を祀る。雍正年中清の名僧紹光禪師この地に一亭を建てたるを乾隆二十八年臺灣知府蔣元君之が修築して寺廟となす。臺灣府志に

超峰石鹿音寺とあるは即ち此寺にして信者は遠近全土に亘り、遠近より参詣する者年々数萬を数ふ。雲皇龍目泉は寺前に湧出して四時絶ゆることなし。附近にある尼寺龍湖庵は超峰寺の別院なり。

アワ　安房

【安房(國)】　東海道十五箇國の一。一に房州とも稱す。房總半島の南端を占む。北は上總國に接し、東・南・西の三方は太平洋に面す。北境東部の清澄山、西部の鋸山等を始めとし國内丘陵起伏し、氣候温和、冬時積雪を見ること殆んどなく花卉・果物の早生に適す。神武天皇海内を統一したまふに及び、天太玉命の孫天富命は阿波の忌部を率ゐて此地に移住せしより國名出づと。のち阿波齋部の居る所に天太玉命を祀らしめ殿して安房神社と稱す。景行紀に車駕東巡して上總國に至り海路に從ひて淡水門を渡るとあり、古事記に東の淡水門と見ゆ、阿波・淡と稱するは皆安房に同じ。成務天皇の時阿波國造を置き大伴直大瀧を國造に定めたまひ(國造本紀)、古事記には神八井耳命の裔を長狹國造と爲し給ふとあり。阿波とは後の安房にして長狹とは後の安房國長狹郡の邊を稱せしもの。大化改新の時に二國造を停めこれを郡として上總國に屬せしめ、美老二年には上總國平群・安房・朝夷・長狹の四郡を割きて始めて安房國を置く。美老三年始めて按察使を置き、當陸守藤原宇合をして安房・上總・下總三國を管せしむ。天平八年安房國を上總に合せしも天平寶字元年に舊に復し、安房國府を平群に置く(今の國府村)。治承四年源頼朝の本州を徇ふるや土豪安西景益・神餘光秀・麻呂信俊・東條秋則來り屬す。よりて頼朝本州を四分して之を與ふ。正平年間鎌倉管領足利基氏はその執事上杉憲顕を守護とし、爾後子孫世襲す。嘉吉初年憲顕の玄孫清方に至り、州内の諸豪その制に從はず互に相攻擊す。安西景春・神餘・麻呂二氏の地を併有す。是時に當り里見義實本州に流寓し、前記二氏の餘衆皆これに歸す。文安二年義實は兵を擧げ景春を降し東條定政を滅して本州を併呑し安房郡白濱に居る。その子成義に至り上總を併せ房總二州の主となり、孫義堯に至り下總の西境を略取す。其子義弘に至り兵勢日に盛んとなり相模の北條氏と連戰熄まず、然るに義弘の孫義康に至りて國勢頓に衰へ、遂に天正十八年豊臣秀吉の東征の際、上總・下總の地を削り盡に本州を與へ、德川氏に至り義康の子忠義封を奪はれ伯耆に流さる。是ゝ以て德川氏は酒井忠國を勝山に、稲葉正明を館山に、屋代忠政を北條に、西郷正員を東條に封す。のち屋代氏は除封せられ、西郷氏は上野に移され、平岡道弘船方に封ぜらる。明治維新に至り勝山を加知山となし、本多正路を長尾(北條)に、西尾忠篤を花房に移封し船方の地を收めしめ、長尾(北條)・花房・館山・加知山の四藩となし、これら諸藩はのち何れも縣となりしも、明治四年十一月に廢して木更津縣に併合、その管轄下に入り六年五月木更津縣の廢止と共に千葉縣に入る。明治二十九年安房・平・朝夷・長狹の四郡を合し安房郡とし一國一郡となる。記・中「此之御世、定二田部一、又定二倭屯家一、又作二坂手池一、即竹二植其堤一也」景行紀・五十三年八月「天皇詔二群卿一曰駿顕二愛子一、何日止乎、寄欲レ為二狩小碓王所平之國一、是月乗興幸二伊勢一、轉入二東海一、冬十月至二上總國一、從二海路一渡二淡水門一、里見八犬傳・一ノ一「安房は原、總國の南邊なり、上代には上下の分別なし……かくて總の南邊に、居民鮮かりしかば、南海道阿波國なる、民をここへ遷し給ひて やがて安房とぞ呼び給ひぬ。日本書紀景行紀に、所云淡の水門は是也、安房は僅に四郡にして、平郡といひ、長狹といひ、安房といひ、朝夷といふ」

【安房郡】　千葉縣十二郡の一。今安房一國の地域を占む。縣の南部、房總半島の南端部にして、その先端は西南方に突出し、西北方の神奈川縣三浦半島と相對し東京灣の門口を成す。北は夷隅、君津二郡に界し、その東部には清澄山(三八三米)、西部に鋸山等東西に連互し、これに直交して峯岡山(三六〇米)、愛宕山・伊豫嶽・富川等の諸峯南北に走り、南端の野島に至りて海に盡く。就中鋸山は山狀の秀峻を以て、清澄山は森林の美を以て著はる。河川は加茂川・丸山川等あるも皆小流なり。海岸出入多く良港乏しからず。殊に内房州(西岸)の館山灣は洲崎と大房岬との間に深く灣入し、好錨地として知られ、東京・横濱・横須賀・浦賀及び上總・下總の諸港灣へ日夜貨船往復す。地勢は概して平地に乏しく地質は殆んど第三紀層よりなり、凝灰質にして地味良好ならざるも、氣候温暖なるを以て蔬菜花卉の促成栽培盛んにまた枇杷・蜜柑・柿・梨等の果樹多く、その他米・麥・大豆・小豆・蠶豆・甘藷等を產す。沿海は漁業盛んにして、主產物は武鯛・香黒鯛・鰹・鮪・鯖・鰺・鮫・鯛・黒鯛・鮃・鯵・秋刀魚・鮑・柔魚等なり。其中鮫・鮃・秋刀魚・鮑なのぞく以外は殆んど内海にて漁獲さる。海岸一帶は風景美に富み、且つ海水浴に適する地多きを以て到る處都人士の別莊を營むもの多く、また遊覽者多し。縣道は沿岸を一巡する外諸處に通じて交通の便よく、鐵道は省線房總西線、西部海岸を南下し、安房北條より東に走りて千倉を經、外房州(太平洋)海岸に沿ひて北に向ひ鴨川に至る。房總東線は鴨川より更に北走して夷隅郡勝浦町方面に通ず。本郡は明治二十九年安房・平・朝夷・長狹の安房國全四郡を合して安房郡とせしため境域は安房國全部を含むことゝなる。→安房(國)

【安房(郡)】　古郡名。大化改新の時阿波國造を停めて之を郡とし上總國に屬せしむ。文武天皇の四年上總國安房郡とあり郡名はじめて見ゆ。元正天皇の養老二年安房國の設置により其管下に屬す。延喜式民部省式には「安房國安房郡爲二神郡一」とあり、これ天太玉命を祀れる安房神社鎮座せるなもつてかく稱せしものならん和名抄には大田・磯海・麻原・大井・河曲・白濱・神戸・神餘の八郷を置く。後白濱郷は朝夷郡に入り平群郡の餘戸郷を本郡に併合す。鎌倉時代には郡を二に分けて安東・安西と稱す。室町時代には私に本郡を山下郡とも稱せしが江戸時代の初め慶安年中舊に復す。明治二十九年安房國内の平・朝夷・長狹の三郡と合して更に安房郡を置く。→安房郡

【安房天津】　省線房總本線の驛(昭和四年設置)。千葉縣安房郡天津町にあり。驛名は伯場電鐵天津驛などと區別するため安房を冠せしもの。附近に天津海水浴場ありて夏期賑ひを呈しまた日蓮によりて著名なる清澄寺(新義眞言宗智山派)まで五粁乘合自動車を通ず。

【安房小湊】　省線房總本線の驛(昭和四年設置)。千葉縣安房郡小湊町にあり。小湊海水浴場・日蓮宗本山誕生寺・指定天然記念物妙ノ浦・おせんころがし等あり。

【安房鴨川】　省線房總西線の一驛(大正十四年設置)にして房總東線との接續點。千葉縣安房郡鴨川町大字横渚にあり。鴨川町の鴨川海水浴場は名高く、附近の海面には鯨天島・海鹿島・鵜島等の島嶼點在し頗る景勝なり。又附近の東條村には日蓮上人小松原法難の蹟を傳ふる鎧忍寺・御松寺等あり。

アワ　阿波

【阿波】　當陸國那珂郡の郷(和名抄)。今の茨城縣東茨城郡の坪・澤山・岩松の三村に當る。いま坪村の大字に栗あり、澤山村の大字に阿波山あり、何れも舊郷名の遺稱とす。常陸風土記に那珂川を指して栗河といへるも此地を過ぐればなりとあり。この地は清和源氏より出づる佐竹氏の族、栗氏を稱して居りし所。

【阿波村】　三重縣伊賀國阿山郡の東部。鈴鹿山脈西側の山村にして上野より津に至る伊賀街道に沿ふ。伊賀街道は鈴鹿山脈を越え東方の安濃郡に出づる所を長野峠といふ。服部川は此の水を集めて西流し沿岸に小低地あり。主產物米・麥・繭、林產物等。特產物に鮎、山地に自然薯、蕨・薇・栗等を產し、式内阿波神社及び古刹新大佛寺あり。古くは和名抄山田郡川原郷の内。中世阿波莊といひ、東大寺の寺領にて東大寺要錄に「承久三年官符、寺領、伊賀國阿波莊」とあり。村内に芭蕉翁の遺蹟あり。村の南部、安濃郡との境上にある笠取山には航空燈臺あり。

【阿波神社】　郷社。祭神稚日女神・猿田毘古神。中世當村の郷士阿波越後なる者、阿波より松尾白鬚神を遷坐せしもの當社なりと。例祭十月二十日。〔新大佛寺〕

同郡大字富永にあり。古義眞言宗。五寶山と號し、一に神龍寺といひ、大覺寺の末寺。建久七年源頼朝は佐々木秀義追善の爲め建立せしもの。建久年間東大寺再建にて有名な俊乘坊重源の開創、重源を開山とす。伊賀大佛造場と稱せられ一時隆盛なりしも、のち衰微し殊に天正年中兵火に罹り、現今の大佛殿は享保年中、中興の祖陶瑩の再建にかゝると稱す。所藏の寶物中、紺本著色興正菩薩像一幅は室町初期の作、開山堂安置の木造俊乘上人坐像一軀は東大寺俊乘堂の像と同時のものにして鎌倉時代初期の作。木造僧形坐像一軀は鎌倉後期の作と稱せられ、また建仁三年造東大寺大勸進大和尚の銘ある板彫五重塔一面等は何れも國寶に指定さる。

【阿波島】　廣島縣豐田郡の海上に浮ぶ島。大乘村の南方約一粁にありて、大乘村に屬す。周圍約五粁。

【阿波國】　南海道六國の一。四國の東對面に位し東は紀伊水道、西南は土佐、北は讃岐に接す。いま全部德島縣の管下にて德島市及び名東・勝浦・那賀・海部・名西・板野・阿波・麻植・美馬・三好の十郡に分る。地勢は中央を東西に走る劍山脈によりて北部と南北の二部に分る。北部に吉野川の中流及び下流に分る。偖に北郡と稱し、更に上郡・下郡の二に分つ。古の粟國の地是なり。南部は那賀川及び勝浦川の流域にして、南方又は山方といひ、その南方沿海の海部と共に古の長國に屬せり。而して海部は倭り太平洋に面し、氣候・風俗・氣質・物產等自ら他郡と異れり。阿波は古事記、神代卷に見ゆる伊豫二名島(四國島)の一部をなし、粟國ともいひ傳說的の名稱を大宜都比賣と稱す。蓋し宜は食なり、粟穀の生ずるより起れる國名なりと。即ち神武天皇の朝には既に天富命は天日鷲命の子孫を率ゐて此國に來り穀麻を植ゑしと。蓋し此國の文化は吉野川の流域より漸次ひらけしものか。國造本紀に「粟國造、輕島豐明(應神)御世、高皇產靈尊九世孫千波足尼定二賜國造一」「長國造、志賀高穴穂(成務)御世、觀松彦色止命九世孫韓背足尼定二賜國造一」とあり。この粟・長二國は何れの頃にか合して阿波と稱し國府は今の名東郡國府町に置けり。名東郡とはもと名方郡を貞觀年間に東西に分けしもの。壽永年中州人、田口成良平氏に應じ州内を掃へ次いで正治二年には小笠原長清守護となる。貞應二年には土御門上皇土佐の香美郡より此國の板野郡池谷の地に遷幸、寛喜三年此處に崩御あらせらる。文永中、長清の子長房守護を襲ぎ三好郡池田に居り子孫三好氏を稱し漸次勢力を得。建武中、細川和氏守護となり足利高氏の旗に應じて四國を略し、其弟頼春代りて守護となり板野郡勝瑞に治し代々こゝに居る。のち細川同族に内訌起り、之に乘じ其の臣三好長慶(長房九世の孫)威勢漸く盛んとなり、足利時代の末長治の曾孫

三好長慶出でゝ主家を凌ぎて全盛を極め遂に京都にまで進出す。のち長曾我部氏の土佐に起るや其の侵略する所となる。天正中豊臣秀吉四國を征服して蜂須賀家政を封じ德島に治せしむ。關ヶ原の役至徹(家政の子)東軍に屬ぜし爲め江戸時代に至るも更ることなく大阪の役後には淡路を加封され爾後子孫相承け明治維新に至る。明治四年德島縣を德島に置き、十月名東縣と改め、九年八月これを廢して一旦土佐の高知縣に併合せるも、十三年三月德島縣を復活し阿波一國を管し以て今日に至る。

【阿波郡】 德島縣阿波國十郡の一。縣の北部に位す。東は板野郡に、南は麻植郡に、西は美馬郡に、北は香川縣大川郡に界す。北部縣境は讃岐山脈の山地にして南に向ひて傾斜す。吉野川郡の南部を東流し、其支流日開谷川中央を南流し郡を東西の二區に分つ。吉野川沿岸は土地低平にして水田拓け、產物は米・麥・大豆・甘藷・蒟蒻。撫養街道南部を東西に走る。阿波は卽ち國名の起る所なり。神功紀は淡郡に作る。和名抄は高井・秋月・香美・拜師の四郷を置く。爾後變遷なく以て今日に至る。

【阿波鳴門】 德島縣板野郡の東北端、孫崎と淡路島の西南端門崎との間の狹い水道をいふ。鳴門は一に鳴戸・鳴渡とも記し、古來單に鳴門とも稱せられ、潮汐の干滿に伴ひ瀨戸內海の水は急流激湍をなし豈々の音をなして渦卷くを以て知らるる名所。書紀神代紀上に見ゆる粟門も亦この鳴門を指せるものか。盛衰記・三九「雷に聞く阿波の鳴戸の神な潮さわたり、紀伊路なさして排な取る」→鳴門海峽。

【阿波水門】 またあはのみなとともいひ阿波鳴門附近の稱。土佐日記「卅日、あめかぜふかず…舟をいだして阿波のみとをわたる。夜なかなれば、にしひんがしも見えず。みとこ、女、からく神佛をいのりて、このみとをわたりぬ」

【阿波山】 德島市の西に峙つ眉山の別稱。歌枕。萬葉・六「眉のこと雲井に見ゆる阿波の山かけて漕船とまりしらすも船主」

【阿波赤石】 省線牟岐線の驛(大正五年設置)。德島縣那賀郡立江町にあり。社線谷波鐵道の赤石驛などゝ區別するために阿波を冠せしもの。

【阿波赤座】 省線土讃線の一驛(昭和十年設置)。德島縣美馬郡西祖谷山村にあり。祖谷渓探勝の門口驛を成す。

【阿波池田】 省線土讃線の一驛(大正三年設置)にして德島本線の接續點。德島縣三好郡池田町にあり。

【阿波市場】 省線德島本線の一驛(大正五年設置)。德島縣板野郡堀江村にあり。

【阿波大宮】 省線高德本線の一驛(昭和十年設置)。德島縣板野郡板西町にあり。

【阿波加茂】 省線德島本線の一驛(大正三年設置)。德島縣三好郡加茂村にあり。

【阿波川口】 省線土讃線の一驛(昭和十年設置)。德島縣三好郡山城谷村にあり。

【阿波川島】 省線德島本線の一驛(明治三十二年設置)。德島縣麻植郡川島町にあり。

【阿波川端】 省線高德本線の一驛(昭和二年設置)。德島縣板野郡板西町にあり。

【阿波橋】 省線牟岐線の一驛(昭和十一年設置)。德島縣那賀郡見能林村にあり。

【阿波富岡】 省線牟岐線の一驛(昭和十一年設置)。德島縣那賀郡富岡町にあり。

【阿波中島】 省線牟岐線の一驛(昭和十一年設置)。德島縣那賀郡平島村にあり。

【阿波牛田】 省線德島本線の一驛(大正三年設置)。德島縣美馬郡牛田町にあり。

【阿波福井】 省線牟岐線の驛名(昭和十二年六月二十七日設置)。德島縣那賀郡福井村大字下福井にあり。

【阿波富士】 德島縣麻植・美馬二郡の境上にある高越山の別稱。

【阿波島】 香川縣木田郡屋島の海邊にありし小島。今この名亡びて傳はらず。仙覺萬葉集注釋・三「讃岐國屋島北去百步許有ㇾ島、名曰ニ阿波島一」

【阿波小島】 讃岐國ニ豐郡の海岸にある島。歌枕。今の香川縣三豐郡粟島村の主島をいふ。萬葉・九「百傳ふ八十の島みをこきくれと粟の小島は見れとあかぬかも」とあり。從來この島は淡路島の別名なる粟島と混同されしも、粟の小島は讃岐の此の島と解するを以て妥當とす。

アワ 淡島・淡洲 →淡島・淡洲

アワ 粟

【粟河】 茨城縣東茨城郡の那珂川の古名。常陸風土記・那珂郡「自ㇾ郡東北、挾ニ粟河一而設ㇾ驛家、本近ニ粟河一謂ニ河內驛家一、今隱ㇾ本名ㇾ之」とあり、この粟河は卽ち那珂川を指し、粟を以て名とせるは、此川下野(栃木縣)より常陸に入りて數里の間右岸は那珂郡阿波郷(今の東茨城郡の坪村の大字粟に郷名殘る)となるを以てなり。

【粟嶽】 新潟縣越後國中蒲原郡と南蒲原郡との境上にあり。村松町の南に位し、標高一二九三米。加茂川の水源をなす。西方山腹に粟藥師あり(南蒲原郡森町村の內)一に藥王寺と稱す。新義眞言宗智山派。寶龜十一年、仙眞法印阿波國より來り、本尊藥師瑠璃光如來を粟嶽に安置、粟藥師と唱ふ。後藥王寺に移安す。古來より標の名所として知らる。

【粟崎】 →粟島

【粟島】 →粟島

【粟嶽】 靜岡縣遠江國小笠郡東北境の山。同郡倉真村・東山村と志太郡五和村の界に跨る。淡々嶽また阿波嶽に作り、或は無間山とも稱す。高さ約五〇〇米に過ぎざるも山頂には林木繁茂し鬱蒼を極るが如く、遠州灘を舟行する者の好目標となる。山上に阿波神社あり。東南斜面より遠川南流して掛川町に至る。「あつま路は衣手さむし白雲の淡々か嶽の秋のはつかぜ」(詞花)※粟本村

【粟島】 出雲國意宇郡にありしといふ島。今の島根縣能義郡島田村邊の海邊にありしものならん。出雲風土記・意宇郡「門江濱、伯耆與ニ出雲一二國堺、自ㇾ東行ㇾ西、粟島、有ニ椎・松・多年木・小竹・眞埼木葛一」とあり、門江濱は伯耆と出雲の境、卽ち今の能義郡島田村の海濱の事にて、粟島は此門江濱にありたるもの。古の意宇郡は今の能義郡をも含み居りしも、延喜式「出雲國意宇、爲ニ神郡一」とあり、神郡を定める際に東部を割きて能義郡を置きしものなるべし。

【粟島】 出雲國島根郡にありしといふ島。其地今詳ならざるも島根半島東端(八束郡)の北部に位する美保關町より野波村に至る海邊にありし小島なるべし。又一に片江村惣津北方の海中にある青島なりとの說あり。出雲風土記・島根郡「粟嶋、周二百八十步、高百一十丈」

【粟島】 出雲國出雲郡にありしといふ島。其地今詳ならざるも、島根半島の西北部の日御碕村より北濱村までの海邊にありし小島なるべし。出雲風土記・出雲郡「粟島」

【粟島】 周防國にありしといふ島。歌枕。萬葉・一五に、周防國玖珂郡麻里布浦を行きし時作れる歌八首として「粟島の邊はしと思ふ妹にあれや安宿も寢すて吾か戀渡る」とあれば、今の山口縣玖珂郡麻里布町の附近の島なるべし。

アワ 鳴波 →播磨國賀古郡の古地名。鳴波里に同じ。

アワイ 粟井

【粟井村】 岡山縣美作國英田郡の中部。西は勝田郡に接す。林地・原野廣くたゞ西南部に耕地あり。主產物米・蘭・酒類。米炭を特產とす。古くは和名抄、粟井郷の地。中世は粟井莊といひ粟井氏(一に淡相氏に作る)の居邑。粟井氏は菅公二十代の後風羽賀美濃守祐房の子孫舞和美作守助盛、粟井の城主となり其子筑後守貞盛その子景盛淡相氏を稱せるものと稱せられ、子孫室町時代に榮ゆ。いま淡相山にその居城淡相城址あり。また和歌の名所館。登香山あり。萬葉・一一「紐鏡館登香の山は誰ゆゑそ君來ませるに紐あけす寢む」(奉日神社)大字粟井中に鎭座。郷社。祭神天兒屋根命・武甕槌命外二神。創立年代不詳。大和の奉日神社を勸請せるものと稱せらる。例祭十一月四日。

【粟井村】 香川縣讃岐國三豐郡の南部。觀音寺町の東南方約八粁。南は讃岐山脈の一峯雲邊寺山の東嶺を以て德島縣三好郡に境す。北部の一小部に平地を見る外中部に蓉提寺山(三一二米)等峙ちて概ね山地を成せり。縣道東北方琴平地より來り村の北部を過ぎりて西南方豐濱町に通ず。此地は和名抄、刈田郡紀伊郷の地にて延喜の制名神大社に列せられたる粟井神社あり。(粟井神社)縣社。祭神天太玉命。式內名神大社。讃岐國二十四座の一。社傳に依れば本國の忌部等天太玉命を阿波國より迎へて豐田郡を神田に充つ、故に往古は豐田郡をも刈田郡とも稱せしといひ、此社を刈田大明神とも稱せしといふ。例祭十月二十六日。青銅文化時代の遺物たる銅鉾一箇を藏することは、此社の非常に古きことを立證し得ると共に、粟井村邊は古くより開け居りたることを合せ證するに足る。

【粟井村】 愛媛縣伊豫國溫泉郡の北西部。松山市の北方約一〇粁西は瀨戸內海の齋灘に臨む。村內は概ね丘陵地を成し、西部沿岸小低地あり、主產物は米・麥・蘭等。瓦を特產とす。縣道西部を南北に走りて松山市に通じ、省線豫讃本線また之に沿ひて粟井驛(昭和二年設置)を置く。此地は和名抄、風早郡粟井郷の地。村名はその遺稱にて、安波井と訓す。瑞章記に越智深躬を粟井御館と呼ぶと見え、東大寺要錄に「伊豫國風早郡粟井郷五十戶、天平勝寶四年永配封」とあり。粟井は元明帝の和銅六年諸國の地名を定めらるゝに當り、往古より粟井の梟と稱する清泉あり、湧き出づる水泡恰も粟粒に似たるより粟井の名生ずと傳ふ。大字菊本に河野左衞門尉通久四男、須保木五郎通成の居城たりし須保木城址あり。建武年間に通成の居城たりし横山城址あり、又粟上左衞門尉の築城せし宅並城址あり。のち二神信濃守之に據り、横山城主の爲に陷る。文明十一年細川氏侵入の時は南蕊四郎二百騎を率ゐ此處に據りて防ぐ。「宇佐八幡神社」大字磯河內に鎭座。郷社。祭神譽田別尊・市杵島姬命外數神。創立年代未詳なるも、豐前國宇佐八幡宮を勸請せし地方の古社、松山藩の祈願所として崇敬を受けたる外、粟井郷二十五箇村の總社と崇められる。例祭十月一日。

アワオロ 安波乎呂

萬葉集に見ゆる地名。常陸國那珂郡に阿波郷和名抄)あり。阿波郷は今の茨城縣東茨城郡の坪・澤山・岩船の三村に當るを以て此の邊の岡を稱せしならんも今詳ならず。萬葉・一に「安波乎呂乃ゑろ田に生はるたはみ葛ひかばねるねる吾を言な絕え」とあり。乎呂は岡、丘にて古東國の方言。

アワガ 阿和賀山

播磨國宍粟郡にありしといふ山。今の兵庫縣宍粟郡神野村・河東村・山崎町邊の山を稱せしものならん。播磨風土記・宍粟郡「石作者、土下中、所ニ以名一ニ石作一者、石作者管轄居ニ於此村一、故庚午年爲ニ石作里一、阿和賀山、伊和大神妹阿和加比賣命、在ニ於此山一、故曰ニ阿和加山一」

アワガ 粟鹿

【粟鹿村】 兵庫縣但馬國朝來郡の東北隅。北は梁瀨町に接し東は山嶺を以て京都府天田郡、兵庫縣氷上郡に境し、南隅に粟鹿山(九六三米)聳え、西北部に遠坂峠ありて田石より柏原に至る縣道を通ず。山地多きも西北部に多小の耕地あり、米・蘭・蔬菜・花卉を產す。此地は舊山陰街道の宿驛として發達せるものにて古

くは延喜式に栗鹿郡馬八疋とあり、いま大字栗鹿の地は古郡址に當る。和名抄の栗鹿郷の地にて中世は栗鹿荘ともいふ。

〔栗鹿神社〕大字栗鹿に鎮座。縣社。祭神彦火々出見命。創立年代未詳。延喜の制名神大社に列せられ、但馬國二ノ宮と稱し、江戸時代には徳川幕軍家より歴代三十三石の朱印領を寄進せらる。例祭十月十七日。〔大歳神社〕大字山根に鎮座。郷社。祭神、大歳神・雅產靈神・宇氣母智神。創立年代未詳なるも、寛文年間に再建せりと傳ふ。

【栗鹿山】兵庫縣朝來郡と京都府氷上郡に跨る山。朝來山・愛宕山とも稱す。標高九六二米。

アワガ　栗賀村　兵庫縣揖磨郡神崎郡の中部。北は大山・越知谷二村に接し、東は多可郡に隣り、其界に笠形山（九三九米）あり、北東南の三方は山地、中部及び西部栗鹿川の流域に平地開け、主產物米・蒟・蒟製品等。栗鹿川・越知川・根宇野川は越知谷村の北部に發し南流して本村に入り西に向ひ大字福本を過ぎて大山村より來る猪篠川と合して南流し村の南端にて西より來る生野川と合し市川となる。此栗鹿川の流域越知谷村・栗賀村の邊は揖磨風土記・神崎郡に栗鹿川内と錄し「所以號栗鹿川内者彼自但馬阿相郡栗鹿山流來故曰栗鹿川内」とあり。然し栗鹿の山中に發する川は生野川にして栗鹿川にあらず、此地は栗鹿山の南方に位する爲め風土記は栗鹿川を栗鹿山に發するものと誤りたるものならん。古くは和名抄、埴岡郷の内。大字福本は江戸時代に鳥取藩主池田侯の支族池田氏の寛文以後陣屋を置きし所。明治元年藩屏に列し一萬五百石を食む。〔福本藩〕明治元年六月藩を廢して鳥取藩に併せ四年七月に鳥取縣の管下に移り、同年十一月舊福本藩の地は飯路縣の管下に入り次いで飾磨縣となり、間もなく兵庫縣の管下に屬し以て今日に至る。學館時習館（元乾々館）の創立年代は詳ならざるも安政二年中興す。

〔法樂寺〕大字栗賀町にあり。古義眞言宗金樂山と號し犬寺の稱を以て著はる。元亨釋書によれば、往古蘇我入鹿の臣枚夫なる者從軍して不在の際、其僕枚夫の妻と通じ枚夫の歸宅を待ちて殺さんとせしも、却つて枚夫の飼犬二犬に殺され、犬の死後その冥福の爲めに枚夫はこの寺を建てしといふ。のち桓武天皇勅して官寺に列し田數頃を寄進せしと傳ふ。慶長年間領主池田輝政寺領三十石の永代黒印を附す。

アワガコーチ　栗鹿川内　石川縣石川郡の西北端にある岬。河北潟より流れ出でゝ日本海に入る大野川の西側の地、東及び南は大野川を以て限り、西は日本海に臨み其形宛も岬狀をなすより此名あり

↓栗賀村

アワガサキ

省線北陸本線の金澤驛の北約八粁に位し金澤驛より北線淺野川電鐵の便あり風に遊覽地として知らる。海は水淺く波穏かにして海水浴の好適地たり。また淺野川電鐵經營の栗ヶ崎遊園あり、又附近には舟遊釣魚に適する河北潟あり。此の地はもと栗崎村といひしも、昭和十年金澤市に編入さる。義經記に見ゆる「あながさき」は此地に當り同じく「あながさきの橋」は大野川に架けられしもの。義經記・七「加賀の國宮のこしに出でて大野の渡し給ひてあながさきの橋を越えてたけの栗毅山を經て」

アワクニ　栗國島（あはくにじま）↓栗國村（神戸縣）

アワザ　阿波座　【阿波座】大阪市西區の地名。今の阿波座・阿波座上通・同中通・同下通・阿波堀通の邊に當る。慶長中蜂須賀氏は其領國なる阿波より商人を連來りて阿波座に居を組織すといふ。大阪冬陣に阿波座に居る阿波の商人城兵に包圍せられしも十一月蜂須賀至鎭（東軍に屬す）の援多崎を取るに及びて竊に逃げ出で城兵の守備手薄なることを告ぐ、至鎭乃ち包圍の大阪方を攻め一旦は敗れしも遂に阿波座を占領す（日本戰史大阪役）。

【阿波座】大阪新町遊郭内、新京橋町・新堀町の俗稱。阿波座筋の略。中央凱旋町の北、現今西區新町北通に當る。下級妓樓のありし所。好色二代男・二「阿波座は明石屋の辻まで、人魚の海のごとくなりて」淀鯉出世瀧徳・上「九軒阿波座の野良良島」男作五郎金「おれは阿波座の濱屋へ往て」又、もと大阪にありし投入形芝居の興行地も阿波座といふ。

【阿波座堀】大阪西區の堀割の名。西横堀川より分岐し西に入り百軒堀に通ず、北に京町堀、南に立賣堀と並行す、慶長五年開鑿。阿波堀橋・花屋橋・松葉橋・岡崎橋等を架す。現今は阿波堀といふ。綿久末絵山・下「住みうかりける此の浮世、ただ渡られぬさつま堀、とへども君に阿波座堀、さこそ安治川鳳島や」心中宵庚申・下「阿波座堀の丹波屋から栗おこせと言うてくる」男作五歴金「文七が親里とは、人も知つたる阿波座堀、水商賣に勝手よき、濱にもがりの竹結渡し、掛けて干す間もやるせなき」

アワジ　淡路　大阪の町名。現今東を東横堀川に接し、平野橋と思案橋の中間を西へ通じ一丁目より五丁目に至る。江戸時代には三丁目まで。火矢數・四「詠めこす入日の末の淡路町」緋鹿鳴卯月尾・下「三途の瀬戸の淡路町、越ゆれば親の古里の、名にも別るる平野町」冥土の飛脚・上「みをつくし浪速に咲くやこの花の、里は三筋に町の名も、佐渡と越後の間の手な、通ふ千鳥の淡路町」

【淡路國】南海道六箇國の一。淡路島、單に淡州ともいふ。兵庫縣に屬し、律名・

三原の二郡を置く。瀬戸内海の東部に浮人鞋の如き形をなして横はり、東は大阪灣、西は播磨灘に面し、北は明石海峡を隔てゝ明石郡に、東南は紀淡海峡を以て和歌山縣海草郡に、南は紀伊水道に、西南は鳴門海峡を以て徳島縣名東郡に相對す。周圍約一四三粁。面積約五九三方粁。本島はもと本州及び四國島に續きしも、地質時代に於いて紀伊水道・大阪灣・播磨灘の大陷没の結果成生せるものにて、海岸線は殆ど直線的なるを以ても一見その斷層海岸たる事を首肯せらる。地體は島の中部をほゞ東西に流るゝ洲本・三原二川の川口を連ぬる線を分界として南北の二部に分かる。北部は所謂西南日本の内帶に屬し、主として花崗岩・花崗片麻岩より成り、南北に細長く、郡家町附近の岡陵を界として中斷せられ、南部に先山、北部に常隆寺山（五一六米）あり。東西兩側には第三紀層及び沖積層多少發達せり。南部は西南日本の外帶に屬し、曾つては和泉山脈・讃岐山脈に連なりしものにて、諭鶴羽山脈とよばれ、中生代の新期に發生せし和泉砂岩及び頁岩より成り、其主峯を柏原山・諭鶴羽山といひ洲本・三原二川の流域に沖積層の低地あり。海岸は概ね斷層海岸に屬し出入少なく、海崖高き處多し。西南部阿波に對する海岸は岩層海水に蝕まれて材木を揃きたる破口の如く、一角長く突出して門崎となり、阿波の孤崎との間に數多の岩礁を連ね、この海門は即ち鳴門海峡なり。門崎の南東押登岬以南の沿岸は低下して砂濱を成し、吹上濱の佳域あり。其南角潮崎より東北方生石崎に至る間は殆ど出入なく、その南方海上に屬島沼島うかぶ。生石崎の東方には友ヶ島諸島ありて大阪灣と紀伊水道を界し、淡路島東南部陷落の名殘を示す。洲本・三原二川は沿岸平地を灌漑するも其他は何れも小流にして、且つ傾斜急なるため灌漑に便ならず、されば山谷を利して用水池を築造せるもの多し。港灣は岩屋・洲本・福良を主なるものとし、神戸・大阪・明石及び播磨へ毎日汽船の往來繁し。道路は國道四國街道南北に走りて幹線を成し、それより縣道四方に通じバスの便あり。鐵道は社線淡路鐵道南西方福良より東部の洲本に通ず。主生業は農業にして漁業之に次ぐ。農產は米・麥・甘藷・煙草等を主とし、鳴門蜜柑を特產品とす。漁獲物に鰆・鯛・黑鯛・鮗・鮪等あり、洲本の乾鰮、福良の鳴門鯛・鳴門和布等は名產として著はる。近時紡績業盛んにして、酒類・醬油・淡路焼等の工產多し。〔沿革〕淡路とは淡（阿波）に至る路の義。所々に太古の史蹟を言傳へ、その名夙く神代紀に見ゆ。いま津名郡多賀村には多賀大明神即ち官幣大社伊弉諾神社あり伊弉諾尊・伊弉冉尊を祀る。國造本紀「淡道國造、藤波高津朝御世、神皇產靈尊九世孫矢口足尼定」「國造」とあり。古の國府は三原郡神代村の地に置かる。天平寶字八年には淳仁天皇廢せられ淡路に遷され給ひしも翌年三原郡野逢宮にて崩ぜさせ給ふ。鎌倉時代の初め佐々木經高この國の守護となり正治二年長沼宗政之に代る。足利高氏の叛するや細川頼春の弟師氏を國守に任じ南海を經理せしむ。永正年中其六世の孫尙春、三好氏に弑せられ終に三好氏の領有となる。天文の末三好長慶の弟安宅冬康由良城に居り國主と稱し又洲本城を築く。天正九年冬康の子貴康織田信長に降り、同十一年豐臣秀吉仙石秀久を封じて洲本城に居らしむ。同十三年秀久を讃岐に徒して脇坂安治を以て之に代へ、又三原郡志知を加藤嘉明に賜ふ。慶長年中に至り安治・嘉明轉封、池田輝政の三男忠雄封ぜらる。元和元年蜂須賀至鎭加封されて全州を領し部將稲田氏を以て城代となし以て明治維新に至る。明治四年名東縣に屬せしも九年以後兵庫縣の管轄に移り。所管の郡は延喜式に津名・三原二郡を載せ爾後變化なく以て今日に至る。萬葉・一二「住のえのきしに向へる淡路島あはれと君を言はぬ日ばなし」金葉・四「あはぢしま通ふ千鳥のなく聲に幾夜ねさめぬ須磨の關守　源俊昌」

【淡路沖】淡路國の海邊をいふ。歌枕。夫木・一七「はるばるとあはぢの沖にうく鵜なあまの小舟にみそまかへつる親佐」

【淡路潟】淡路國の北方明石海峡に臨む海邊をいふ。歌枕。鶴・月・鹿・時雨・多月・鴨・秋沙・鶴・鶴・神・島・浦・迫門・沙・舟等詠ぜらる。山家「淡路潟いそわの千鳥聲しけくせとの鹽風さえまさる夜は」

【淡路島山】淡路島をいふ。歌枕。霞・花・鶴・夕立・雁・鹿・月・霧・時雨・鴨・秋沙・雪・松・鶴・雲・烟等の名所たり。古今・一七「わたつ海の巻にさせる白妙の浪も結へる淡路島山」夫木・四「すみよしのむかひの雲は花なれや汐かぜかをるあはぢしま山　中務卿」

【淡路鐵道】淡路國の南部を横ぎる地方鐵道。兵庫縣津名郡洲本町の船場町にある洲本驛より三原郡福良町の福良驛に至る二三・一粁の線路を有す。軌間は一・〇六七米にて蒸氣列車及びガソリン車を運轉す。洲本は要津にて、神戸及び大阪との間に便船あり、島民の必要物資は概ねこの港に集まる。

アワジノホノサワケノシマ　淡路之穂之狭別島（あはぢのほのさわけのしま）　穂之狭別はその島に人格的の命名をせるもの。即ち淡路島をいふ。阿波に行く途上の島なるより、淡道の名を得。古事記・上神代卷「如ゝ此言寄而、御合生二子淡路之穂之狭別島」

アワシマ　淡島・淡洲　【淡島】靜岡縣伊豆國田方郡内浦村の屬島。大字重寺の西岸を僅に去る海上にあり。周圍約一・五粁。全島殆んど飛鹿絶壁、頂上に淡島神社あり。眺望絶佳。

【淡洲・淡島】 古事記・書紀に見ゆる島の名。古事記に伊弉諾尊・伊弉冉尊は大八洲國を生みたまふ前、水蛭兒に次ぎて淡島を生みたるも此二者は何れも子の列に入らずとあり、書紀の一書にもほゞ同一の記事見ゆ。この島に就いては古來諸說あり。或は由良海峽なる友ヶ島の離島なる神島、或は淡路島の岩屋浦・津名郡岩屋町〕附近の一小島粟島なりとし、これに擬するもいまゝ何れとも定め難し。

アワ　粟島（アワシマ）

【粟島】 ↓粟島浦村（新潟縣）

【粟島】 鳥取縣伯耆國西伯郡彦名村の古稱。上粟島・下粟島の兩字を存す。往古は出雲國宮字郡に屬する中海の一小島たりしも、いまは夜見ヶ濱と地續きとなり伯耆國に屬す。少彦名命この地より常世國に渡り給ひしといふ傳說あり。今字上粟島に此神を祀る。村名の彦名はこの命の名に因むといふ。釋日本紀に引く所の伯耆國風土記に、有二粟島一。少日子命蒔レ粟秀實離々、即載レ粟彈渡常世國一。故云二粟島也一」

【粟島村】 香川縣讃岐國三豐郡の北西部。瀨戸内海上に浮ぶ粟島・志志島の二島より成る。瀨戸内海國立公園の内。多度津町の西方約一〇粁。詫間灣の北隅を成す。志志島は東にありて周圍約三粁の小島。粟島は西にありて本村の主部を成し周圍約一〇粁。海岸出入多く、北部に陸繫島の阿島半島あり。西部の城山は最高所にて標高二二二米。島内概ね丘陵地を成す。漁業專ら行はれまた瓦・煙草を特產とす。多度津港より毎日數回の定期船往來し、對岸の詫間港よりも發動機船通ず。島民は古くより海上生活を營み遠洋にも航行せしも、江戸時代に至りて大船の建造禁ぜられしより一時衰微せり。明治以後再び隆盛に赴き一時は手石積以上の船舶七八十艘を所有するものありしといふ。いま縣立粟島航海學校（明治三十年創立）あり。村名は少彦名命を祀れる粟島明神より出づ。また、往時本村は海賊（海軍）の根據地たりしと。（梵音寺）眞言宗大覺寺派。滿濤山と號す。理源大師の開基。本堂に聖德太子像を安置す。

アワシマ　粟島・阿波之廡・安波思廡　淡路國津名郡岩屋町にありしといふ小島。歌枕。或は淡路島の一名なりといひ、或は香川縣讃岐國木田郡庵治村の西北海上にある大島なりともいふ。萬葉・七「粟島に漕ぎ渡らむと思へども明石の門波いまだ騒けり」萬葉・三「武庫の浦を漕ぎ回む小舟粟島を背向に見つつともしき小舟」赤人」

アワシマウラ　粟島浦村（あはしまうらむら）

新潟縣越後國岩船郡の北西端。下海府村の西方約二〇粁の海上に浮ぶ粟島より成る。粟島は東北より西南に狹長にして南北約六粁、第三紀層の圓礫島の中軸をなして連り、最高點は小柴山にて二六五米に達す。東北端を島崎、東南端を矢ヶ鼻、西南端を八幡鼻と稱す。對岸岩船町の岩船港と本島内浦との間には定期船の往來あり。丘陵地多きも亦耕地また少からず、魚介類・竹類等を產し內地へ移出す。西海岸の海蝕段丘は美しき柱狀節理をなし、其立岸礁上に群棲する白鷺の亂れ飛ぶ光景は眞に莊美なり。本島は、一に粟生島に作りアチ島とも呼ぶ。島の四面は暗礁極めて多く舟行危險なるも東側の內浦は小錨地にして、西風及び南西風を避くるに適し新潟・船川間航路の好避泊地たり。此島と飛島とを連續する一線以內は、海流に感ぜざるも、該線の外側は海流北々東に向流し、久六島に近づくに從ひ大速力をなして津輕海峽に流入す。大同方に粟島藥を載せ、粟生蝦夷等の家傳といへり。萬葉・一二に「浪の間ゆ雲居に見ゆる粟島のあはねものゆゑ吾に依する兒等」とあるは此地を歌ひたるなり。外交志稿によれば、嘉永元年四月、異國船四隻羽州飛島に至り、尋いで粟島に至る、警報米澤に達す。これ本島は米澤藩越後預所の內にあるを以てなり。藩主上杉齊憲・兵三百を發し往いて之を戍らしむ。此の時松代藩主眞田幸貫人を越後に遣はし、其形勢を視察せしめて、之を江戸に報じ、兵を勵し命を待たりしも既にして黑船粟島を去り、列藩警を解けりといふ。

アワズ　不逢山　御坂山塊の一峯。山梨縣東八代郡上芦川村と南都留郡大石村に跨り、標高一五六三米。南面には何口湖の彼方に富士山聳え、北面は釋迦ヶ岳に對す。西方尾根に大石峠南北に通ず。

アワズ　粟津（あはづ）

【粟津村】 石川縣加賀國能美郡の西端部。北は笛代村・御幸村に接し東は大杉谷村に、西は江沼郡月津村・矢田野村に、南は那谷村に隣す。地形南北に延び東南一帶は丘陵地なるも中部以北は土地低平。北部にある木場湯湖畔は地味肥沃にして米・繭の產あり、湖水は淡水魚類多く、村內また機業行はる。省線北陸本線の粟津驛（明治四十年設置）を置き、此線溫泉電氣軌道これと接續し、馬場（大正四年設置）・粟津溫泉（大正三年設置）の二驛を置く。勝地に奠老公園・日月十二ヶ瀧・帶山・牧嶽塚あり。往時この附近一帶は粟津郷と稱せられ、村名は其遺稱なり。明治二十二年町村制實施の際、馬場・粟津・西原・牧口・西荒谷・日月・白山田・小山田・井口の九舊村は合して粟津村となり、津波倉・木場・島・荷津・矢崎の五舊村及び袋輪地方を合して木津村と稱したる。明治四十年この二村を合して更に粟津村と稱す。（粟津溫泉）省線粟津驛の東南約三・五粁。微かに褐色を呈せる硫黃泉にて硫化水素臭を放つ。溫度一一六度。元正天皇の朝、奠老二年に泰澄大師の發見するところと傳へ、金平・尾小屋の二鑛山の通路に當る。（白山神社）大字粟津に鎭座。郷社。祭神、伊弉諾命菊・理菊命・伊弉冉命、創立年代未詳なるも、江戸時代には藩主前田氏の崇敬を受け、社參・新願・寄進等の事あり。

【粟津】 近江國琵琶湖畔の地名。大津市の馬場町より東方瀨田川に至る一帶の平地を稱せしもの。いま同市の膳所・粟津町は名稱の名殘なり。舊東海道に沿ふ粟津松原は所謂粟津晴嵐として近江八景の一たりしも近時人絹工場建設されて僅に堤上の老松によりて往時の面影を偲ぶに過ぎず。古くは禾津・粟津市・粟津岡・粟津原・粟津野・粟津濱・粟津莊・粟津里・粟津森等と其名諸書に見え、歌枕としても著名。此の地は壬申の變以來兵馬の巷となりたること多く、特に木曾義仲の戰死を以て名高し。壬申の變に村國男依等粟津岡の下に軍し近江の將犬養五十君と粟津市に戰ひて之を斬る（書紀）。天平十二年十二月聖武天皇、伊勢・美濃・近江を巡幸して悲仁宮に至るの途次粟津の頓宮に至らせ給ふ（續紀）。和名抄の津賀郡古市郷の地にして、其の本據なりしものゝ如く、粟津市といふもこれに基づくものならん。嘉永二年七月木曾義仲の先鋒太田兼定この地に平家の軍を破り、翌元暦元年正月義仲京都の軍に敗れ、此地まで逃れ來りしも及ばずして其將今井兼平と主從二騎遂に粟津原の露と消ゆ。いま義仲の墓は大津市馬場町の義仲寺に、兼平の墓は田歌の中にあり。天文二十二年近江國司佐々木高賴、石山寺に詣づる途次、義仲の墓の煙草條の中にあるを見て、源家大將軍の古蹟守るものなくんばあるべからずと稱し、一字を建立し義仲寺と名づく。義仲の墓の側に俳人芭蕉の墓あり、元祿七年十月大阪に歿するや其遺命に依りて、此處に葬りたるもの。「木曾殿と背中あはせの寒さかな」は俳人芭蕉が瀕上の風光を愛で此處に無名庵を營みし時の句なり。粟津莊は其名東鑑の建久三年の條に見え、將軍妹實門室家領とあり。また歌枕粟津森は膳所明神の森を指ぜるものといふ。後撰・一二「關越てあはつの森のあはすとも淸水に見えし影をわすれじ」夫木・三一「關の風夜寒むに吹くやささ浪の粟津の里に衣うつなり」金盛集「粟津野のあはてかへるは瀨田のはしこひてわたれとおもふなるへし」「金平が塚渺々と苅田かな　鬼貫」

【粟津村】 愛媛縣伊豫國宮多郡の西部。長濱町の東南方約七粁。肱川の下流に跨る。村內山地多くたゞ肱川沿岸に僅に小耕地を見る。縣道肱川に沿ひて走り、南方大洲町方面に通じ、省線豫讃本線の八多宮驛（大正七年設置）を置く。此地和名抄の宮多郡新屋郷の內か。八多宮・手成・米津の三村を併せて粟津と稱し、中世郷名たり。大字米津に鑑ノ城址あり。津々宮谷遺江守藤原行風の子行興より代々こゝに住みたりしも、天正年中高盛に至りて亡び城廢せり。（粟津森神社）大字八宮多に鎭座。郷社。祭神素戔嗚命・奇稻田姫命・神屋楯彥命・吉良宮命外二神。創立年代不詳。もと瀨國社と稱す。又何時の世にか大友皇子の裔といはるゝ吉良宮命及び妃を併せ祀りしといふ。江戸時代には藩主加藤氏は代々新願所として崇敬す。前に肱川の淸流潺々として流れ、後に粟津城址を負うて森々たり。例祭六月十三日。（西禪寺）大字手成に在り。臨濟宗瀨國寺派。米津城主津々木谷氏の開創に係り、眞空禪師を開祖とす。中興は蘭岩和尙。

アワリ　阿波曾（あはそ）　↓躰和村（三重縣飯南郡）

アワタ　粟田（あはた）

【粟田】 越前國坂井郡の郷。和名抄は安波多と訓す。其地域いま詳ならざるも福井縣吉田郡森田町及び坂井郡春江村・磯部村即ち九頭龍川の北邊に當るならん。天平寶字元年の越前國司解に粟田人麻呂また天平神護二年の越前國司解に足羽郡野田郷戸主粟田廣足等と見ゆるは春日氏の族にて此地に住し、粟田氏を稱せしものなるべし。

【粟田】 山城國愛宕郡の郷。和名抄は阿波多と訓す。今の京都市の東山區より左京區に亙る。賀茂川の左岸、後の白河の地に當る。上下二郷に分れ、下粟田郷は岡崎の邊より以南四條の邊に至り、上粟田郷は聖護院・吉田・鹿谷・淨土寺の邊をいひたるもの。その東國に至る三條通の末を粟田口、附近の山を粟田山といふ。此地は奈良時代に著はれし粟田氏の起り地にて、其祖に孝昭天皇の皇子天足彥國押入命の三世の孫彥國葺命より出づといひ、支族は大和・近江・越前等にあり、朝臣・臣等を稱し、稀に直・忌を稱せり。中世粟田莊と稱せしも、のち白河の稱呼起るに至り粟田の名稱は漸次滅ぶに至る。いまの東山區粟田口町は、その名殘りなり。※粟田口

【粟田山】 京都市東山區にある東山の一峯。粟田口の南にあり。貫・鶯・紅葉・松・煙・雲・・松火の名所たり。夫木・二〇「ゆきて見よ霞やけさはたなびくとあはたの山のすそのこまつを　上總」ひらがな盛衰記・三「都のうちにおのづから、傾く笠の打ちしられ、今落人の身の上も人にしられし白川の、水も淀みて粟田山」

【粟田口】 京都市の賀茂川の東、三條通の白河以東蹴上に至る間の稱。古へ東海道の京都の入口に當る。和名抄の山城國愛宕郡粟田郷の內にて、いまの東山區粟田口町に當る。青蓮院・粟田神社・粟田燒の窯元等あり、粟田口國家以下の刀工も此邊に住せしならん。粟田口氏は其の祖、國家大和より移住し、地名を負ひて氏と爲し、子國友・國綱は後鳥羽天皇の番鍛冶と爲り、子孫相傳へて刀工たりしもの。世に粟田口鍛冶といふ。粟田燒は元和、寛永の頃、瀨戸の三文字屋九右衛門が粟田口三條縣上今道町の南側なる字華頂畑にて茶器を燒きたるに始まる（本朝陶器攷證）といひ、寛永・正保頃愈〻

發達せり。淡黄色にヒビ釉を掛けたる陶器にて釉澤軟滑、彩畫攝金せるもの。工人の主なるものに餘光山宗兵衛・高橋與兵衛・寶山文蔵等あり、同系統中にては野々村仁清最も著はる。また栗田口は江戸時代所刑場のありし所、江戸に於ける鈴ヶ森に同じ。長町女殺切・中「慮外ながら親も許さぬ女房とは栗田口へ往きたいか」大鏡師昔暦・上「ナイ間男しのいたづら者、栗田口へ行きたいな」御所櫻堀川夜討・二「都の出口來て見れば、愛宕參や伊勢參宮、引きもちぎらぬ往還も、夜は旅行の跡絶えて、人音まれに栗田口」

【栗田山陵】後嵯峨天皇中宮大宮院姞子の御陵。京都市上京區南禪寺鹿地町にあり。正應五年、中宮崩御、南禪寺に御骨を葬りしも中世荒廢に歸す。明治九年現所に御治定、同二十七年御陵號を栗田山陵と稱せらる。

【栗田神社】栗田口町に鎮座。郷社。祭神、建速素盞嗚尊外數神。朝廷及び武將の崇敬篤き名社。舊稱、栗田天王社・感神院新宮。例祭九月十五日。此の祭禮は栗田祭といひ、氏子は鉾十七本を捧げ持ち、南禪寺門外の板橋を渡りて北へ鳥居小路を練り歩く、此板橋絶めて狹小なるため鉾を捧ぐる者或は轉倒し或は鉾を落し或は河に落ちて溺る等、見る者をして思はず嘆息せしめるを以て名高し。

【青蓮院】栗田口町にあり。天台宗。延暦寺三門跡の一。栗田御所・青蓮院宮ともいふ、もと叡山塔頭の一にして青蓮房といへり、天慶元年行玄これを中興、仁平三年覺快法親王以來、法親王相續いで門主として明治維新に至る。第三世惠鎮和尚は和歌を以て聞え、伏見天皇の皇子入道尊圓親王に書道に秀いで、御家流即ち青蓮院流の元祖たり。殿舍は近代のものにて、宸殿の濱松の間の襖及び壁貼附繪十七面は國寶。その筆者は住吉具慶と傳ふ。

【栗田院】栗田口町の北、平安神宮の南。建武年月は不明。もと藤原良相の山莊たりしが、清和天皇此處に御し後寺となして圓覺寺と號す。

アワタベ　粟田部町　福井縣越前國今立郡の西部、武生町の東方約七粁。西北部は山地にて東南部は土地平坦。紙織物・和紙の產多きを以て知らる。武生町へ縣道通じ、又社線南越鐵道の粟田部驛（大正三年設置）あり。大正十五年町制を布く。本町は和名抄の越前國今立郡味眞郷の地なるべく、越後國誌に「味眞野在二郡中央一、亘二五箇莊一、及栗田部、池泉、五部一、眞柄諸邑」とあり。橋南鄕の東韮記に「栗田部は田舍ながら町作りにて此邊の眼なる里なり、昔櫻井天皇の皇孫（大迹皇子）にて當國に潛み渡らせ給ひし時、此所に御座ありし故に、地名を大迹部といひしを、後に栗田部といひ誤りたるとぞ」と見え、栗田部は大迹部より轉訛せるものなり。また天神町佐山に皇子ヶ池あり、玉垣を廻らし大石を以蓋てなせり。昔櫻井天皇の皇子、即ち後の安閑天皇・宣化天皇は此池水にて御產湯なつかはせられたるにより其名ありといふ。

【岡太神社】縣社。祭神、健角身神・國狹槌尊・大己貴命・（相殿）櫛豊天皇。埴崎天皇の御宇、大迹皇子の勸請し給ひし所。皇子都に上り登極し給ひし時人民墓奉りて止まざりしかば御名代として大迹部を定めらる。百姓その恩賚を仰ぎ來り、男大迹天皇の相殿を齊き祀る。歷朝の御崇敬厚く、金幣・勅願を納めさせ給ふ。中世武將・國主の信仰淺からず。應仁年間の兵燹、その後數度の水難に遭ひ、更に明治六年の大火に罹り神寶・寄進狀散佚せり。例祭十月十三日。

アワツ　粱津　常陸國多珂郡の郷（和名抄）。原書は粱とあれど粟の誤ならん。あはつと訓みて大津に擬せらる。今の茨城縣多賀郡の大津町・平潟町・圓本村の地なるべし。郡郷考云、粱津郷は粟栗の誤にて今大津村なり、粟の大に轉ぜしは、那珂郡（東茨城郡）阿波山大山の例に同じと。

アワデ　粟手浦　尾張國海部郡にありし浦。歌枕の名所。いま愛知縣海部郡蒲目寺町の邊にて往昔は海の入り込みたる所。神馬藻・うつぜ貝・千鳥・みるめ・蜃舟・杜等の名所。藻鹽草に阿波手浦を尾張といひ、名所圖會に「昔は此邊まで入江淺込みしを、後世堤をつき、田み開き海に遠くなりたるならん、變易の例まのあたり見る心地す」とあり。金葉「名に立てる阿波手の浦のあまたにもみるめはかつく物とこそきけ　源雅光」

アワナシ　淡奈志　播磨國揖保郡にありし里。和名抄の播磨國揖保郡林田鄕の地にして、今の兵庫縣揖保郡林田村に當る。播磨風土記によれば林田里は舊名淡奈志なりといふ。播磨風土記・揖保郡の條に「林田里、本名淡奈志、所以稱二淡奈志一者、伊和大神占二國之時、御心植二檜於此處一、遂生二檜樹一故國名二淡奈志一」とあり、此の淡奈志の里をまた談奈志ともいふ。こは古寫本淡を、談に誤まりたるものなるべし。

アワノ　阿波野　大和國高市郡にありしといふ野。歌枕。其地いま何れに當るか詳ならず。書紀皇極紀にみゆる謠言の一に「なちかたのあはぢ野の蝶とよもさすわれは寢しかと人そとよもす」

【阿波野原】歌枕。名所栞はこれを大和國にありしといふも、夫木集はこれを近江國とす。その地いま詳ならず。夫木・七一ほとときす今きなけとやかかみなるあはのの原に匂ふたちばな　行家」

アワノ　粟野

【粟野村】鳥取縣岩代國伊達郡の中部。阿武隈川の中流に沿ひ、鳥取市の東北約一二粁、東は梁川町、南は大田、西は伊達崎、北は森江野・大枝の諸村に隣る。鳥取盆地（信達平野）の東北部にて土地概ね平坦、桑園よく開け蠶業村落として名

高し。南は保原町を經て福島市へ、東は保原・梁川を過ぎて角田町方面へ、西は悉折・藤田兩町へ道路通じいづれもバスの便あり。源頼朝の時、伊達氏の祖朝宗鎌倉より下る。のち伊達宗村の二男蔵人大夫義廣、寶治年中この地に居り粟野次郎と稱し、その居館を粟野大館といへり。

【粟野町】栃木縣下野國上都賀郡の南部。鹿沼町の西南方に位し、柏尾川・南摩川等と合して思川に合する粟野川の谷地を占む。西北より東南に長く、長さ約一六粁幅約三粁。略ど山地にして粟野川の下流に小平地あり、口粟野の小市街を成す社線東武鐵道の横山驛（昭和四年設置）へ約七粁、南方栃木市へ縣道を通ず。米・麥を產す。明治三十九年町制施行さる。北陽加蘇村との境上に石裂山聳え、その南麓大字入粟野に郷社賀蘇山神社（俗に粟野尾鑒といふ）あり。下野國誌に、天正十二年七月、皆川廣照の將齊藤秀隆、兵を率ゐて口粟野に入り登に粟野城（城主佐野宗綱）を攻め激戰衆刺、大將秀隆は戰死せしも城は終に皆川氏に零ちるとあり。

【加蘇山神社】大字上久我に鎮座。縣社。祭神、磐裂神・根裂神・武甕槌命。創立年代は未詳。地方の古社。武運及び五穀の神として上下の尊信を蒐め、天文年中皆川城主廣照の外崇敬し、神馬・太刀等を納めしといふ。本社は檢校なる山中にあつて仙境にあるの思ひを起さしめ、中ノ宮・下ノ宮等を有し境内約六十四萬坪（約二一三ヘクタール）あり。例祭十月十日。

【粟野村】山口縣長門國豐浦郡の西北部。東は大津郡菱海村に界し、北は油谷灣に臨み、村を南北に貫流する粟野川これに注ぎ、兩岸に耕地あり。西浦街道また川に沿ひて通ず。省線山陰本線の長門粟野驛（昭和五年設置）あり。主要物產は米にして、木材・竹材・木炭これに次ぎ、水產に鮎・青海苔あり。古くは和名抄大津郡神戸郷の內といふ。（八幡宮）大字下村にあり。郷社。祭神、應神天皇・仲哀天皇・神功皇后・仁德天皇、創立年月不詳、一說に明應年間の創建と傳ふ。江戸時代には藩主毛利氏の崇敬を受け、又近郷部落民の崇信を蒐む。

アワノト　粟ノ門　↓阿波ノ鳴戸

アワノホ　粟ノ保村　石川縣能登國羽咋郡の西部。羽咋町の南に隣り東より南は志雄町に接し、西は日本海に臨む。西半は沙丘發達するも東半は邑知地溝帶の南部を占め水田多し。主產物は絹織物にて米・繭これに次ぐ。外に畜產・林產・水產等を擧げ得るも其額は多からず。古くは和名抄の邑知郷に屬せるもの。邑知郷は三州誌によれば、もと二院（羽咋正院・邑知院）・二莊（志雄莊・菅原莊）・五保（粟ノ保・太田富永保・尾長保・志々見保・若部保）に區別さる、村名は五保の一なる粟ノ保の轉ぜしもの。

アワノミナト　淡水門　安房と相模との間の灣口。千葉縣安房郡と神奈川縣三浦郡との相對する間、即ちいまの浦賀水道の古名にて、淡は安房の義、水門は海河の水の流るゝ戸口。景行紀・五十三年秋八月「幸二伊勢一。轉入二東海一。冬十月至二上總國一、從二海路一渡二淡水門一」

アワハラ　粟原　大和國磯城郡の古地名。粟原寺と稱する瓦剎あり。今廢絶して寺址なきも、其の三重塔の露盤銘なるものを多武峰に傳ふ。即ち持統天皇の御代、早世したまひし皇太子草壁皇子の菩提を弔ふ爲めに中臣朝臣大島の建立せしもの。二十二年を費して和銅八年に竣成せり。今多武峰村の大字に粟原の名遺れり。

アワヒロ　粟廣村　岡山縣美作國英田郡の西部。東は粟井村・江見町に接し西は勝田郡に界す。村內原野廣く、西部と西南部は梶並川沿ひて僅に耕地あり。產物米・繭。古くは和名抄の英田郡廣井郷の地なり。蓋し土俗弘山郷と傳ふるより見れば或は廣井は廣山の誤りならん。明治二十二年町村制施行の際、舊粟井庄の內、馬形村・長谷內村・宗藤村の三村廣山庄に合し兩庄名の頭字を取りて現村名を建つ。大字馬形は江戸時代丹後國久美濱代官田口五郎左衛門の支配所にして往古は馬形・勝部の二村なりしも寛文年中合せて馬形勝部村といひ、更に元祿三年馬形村上分下分と分れ、明治六年上・下の稱を廢す。大字長谷內は馬形と同じく大字宗藤（宗藤）は但州生野代官黑田新八郎の支配所たり。大字田殿も生野代官支配所にして此地に鮫嚴城址あり。吉野時代赤松氏の族佐用貞久築城して此處に居る。のち後村上天皇正平十六年山名時氏來り攻むるに當り、貞久能く防戰せしも時氏遂に遠攻重圍の策を用ひて糧道を絶つに及び、佐用氏の兵遂に城を棄てゝ遁る。後時氏暫く部將を置きて之を守らしめしも幾許もなく廢城となる。

アワフ　禾生　上總國山邊郡の郷名（和名抄）。其地いま詳ならず。或は今の千葉縣山武郡の南部の鶴岡・增穂の二村及びこれに隣れる長生郡豐岡村大字粟生野邊の地ならん。房總志料に「禾生郷廢、粟生村存」とあれば同郡の豐海村の大字粟生を始め、片貝町等の地にこれを擬するものあるも以上は九十九里の沿海低濕の地村にて和名抄時代に郷の存在せしことは疑はし。

アワモト　粟本村　靜岡縣遠江國小笠郡の北部。掛川町の北に接す。東部北部は丘陵、中部西部は平野をなし、米・茶・繭・畜產・林產等あり。掛川町へ約二粁、道路を通ず。同村の北端に粟ヶ岳（五一四米）あり、一に無間山とも、また阿波々山ともいふ。頂上に郷社阿波神社あり、社の下段に無間山觀音寺あり。掛川志稿によれば粟岳は山勢白光山・大悲山と對峙し、昔阿波神社の社領なりし

故に其名を負ふ者ならん、觀音寺の金鼓の銘に「文祿三年、佐夜郡西山村、粟岳山觀音寺」と刻せり、絶頂に至るまでは老杉樹鬱茂し、雜樹交加し、嵐氣雲を蔽ひて、晝日も炎熱を知らず、絶頂に至り始めて巨石あり、其形立つが如く伏すが如く崩るゝが如く、恰も人造に出るものに似たり、遠くより此山を望めば山頂の林木の髮を梳るが如く、數十里の外と雖も山形の見ゆるまでは一瞥して知るべし故に遠州洋海を舟行するもの此山を以て標識とす。又無間山とも云ふは浮屠氏の名づくるものなりと。同村名は粟ヶ岳の麓の義にあらざるか。舊の日根郷の内なり。※粟ヶ嶽〔阿波々神社〕大字初馬字阿波々山に鎮座。郷社。祭神阿波比賣命。創立年代不詳。延喜式内社。例祭四月三日。

アワヤ　粟屋村　廣島縣安藝國高田郡の東北隅、東と北は可愛川（江ノ川の上流）に依りて雙三郡酒河村・十日市町・三次町・河内村と相對す。村内嶮ね丘陵起伏し、北部に僅少の耕地を見る。此地は和名抄の高田郡粟屋郷の地にして、粟屋は一に青屋に作れり。治承三年高倉天皇の御宇民部大夫平景弘補任せられて當地に來り粟屋氏を稱すといふ。大字勝山は三吉新兵衛隆信の青屋城を築きし地なり。三吉隆信は、一に粟屋隆通とも稱せり。村内の加伊津女の地は三吉氏と尼子氏との合戰のありし處。安西軍策に、大永元年高橋大九郎備後の三吉修理大夫と互に青屋城を爭ひしも、倆〻高橋父子遽か手廻十騎許にて床几に倚り居りし處に敵百許一丸に成て詰寄せ、父子の首をば青屋入道友梅の家來討取りしといふ。また除德太平記に青屋出羽が高橋大九郎と此處に戰ひ高橋自殺し、其後毛利氏弔合戰ありしといふ。

アワラ　蘆原町　福井縣越前國坂井郡の北部。金津町の西隣にて市ば本莊村に接す。北部は山林地ななし北潟・加戸の二村に接し、東南部は福井盆地の北部に當り、土地平坦にして田地よく拓け肥沃にして米・甘藷・葉煙草を產し、また機業行はる。村内に省線三國線の蘆原驛（明治四十四年設置）あり、此線三國蘆原電鐵これに接續し、別に番田（昭和三年設置）・蘆原の二驛を置く。此地はもと和名抄の坂井郡堀江郷の内。昭和十年二月町制を施行。もと此邊一帶は蘆茫生ひ茂りしも明治十六年偶〻川水の堀井戸を發掘せしところ溫泉湧出せしより地名を蘆原と稱するといふ。〔蘆原溫泉〕蘆原驛附近。明治十六年の發見に係り、同十七年開湯の式を擧ぐ。無色透明の鹽類泉。溫度は三二度より七七度を昇降す。附近に公園・鴨の池あり。〔願成寺〕十樂に在り。眞宗山元派。佛國山と號す。初め圓光寺と稱す。一時大谷派となりしも、再び山元派に復す。〔專光寺〕井江菱に在り。眞宗高田派。瑞應山と號す。天德年中惠惠大師の草創に成れるもの、初め新郷山松木寺と號せしが、中興願明法師の時勅宣に依りて專光寺と改む。本尊阿彌陀如來は運慶の作。寺寶に、親鸞上人の自畫自讃・聖德太子像・惠心僧都作來迎佛その他あり。

アワワ　鴨波・粟々　播磨國賀古郡にありし里。國郡考に和名抄賀古郡住吉郷は風土記の鴨波里なるべしといへり。今の兵庫縣加古郡二見町・阿閇村の邊なるべし。一に同郡野口村・平岡村の邊なりともいふ。播磨風土記・賀古郡「鴨波里、昔大部造等始祖古理賣、[illegible]此之野、多種ゝ粟、故曰ゝ粟々里」

アンエイ　安永諸島　鹿兒島灣内櫻島の東北岸に近き小島群。新島（燃島）・硫黄島・中ノ島・猪ノ子島等より成る。安永八年櫻島の噴出の際形成されしより この名あり。

アンカ　奄可　隱岐國周吉郡の郷。和名抄は安無加と訓す。今の島根縣周吉郡東郷村の地に當る。奄可は後世訛りて大久と稱す。大字大久は其遺稱なりと。

アンガ　奄我・庵我　丹波國天田郡の郷。和名抄は訓を闇くも、隱岐國の奄可郷と同じく、安無加と訓むべきならん中世には奄我莊といひ、近世には庵我村と呼びしが、昭和十一年區知山町（いま區知山市）に入る。賀茂四年紀に「丹波天田郡奄我神社、有ゝ盜竊ゝ神物ゝ、而獎ゝ社中、因移ゝ社於十丈外地」とあり。丹波式社考に「今在ゝ奄我莊中村ゝ、稱ゝ星明神」と見ゆ。

アンガウル　Angaur I.　南洋諸島パラオ支廳に屬する島。西カロリン群島パラオ諸島の南西四〇浬の海上にあり、全島殆んど燐礦より成り現在盛んに採掘せらる。燐礦採掘用鐵道敷設せられ、礦石積み出し、施設を完備せるアンガウル港より移出し、食料品・日用品・機械類・材料藥品類を移入す。島内に公學校・小學校・郵便局等あり、内地・群島間の命令航路の西廻線は年二十回、東西連絡線は年十回の寄航あり。本島の燐礦は西紀一九〇三年ドイツ學術探檢隊の發見せるもの、著積埋藏量約三百萬噸と稱せらる。ドイツは一九〇八年ブレーメンに南洋燐礦株式會社を設立し翌年より採掘に著手せり。世界大戰後我國の委任統治となりや南洋經營組合・海軍の手を經て大正十一年以來南洋廳これを經營せしが、昭和十一年南洋拓殖株式會社の設立されファイス島の燐礦と共に同社の所有となる。

アンガク　安岳　【安岳郡】朝鮮黃海道十七郡の一。道の西北邊にあり。北は大同江を隔てゝ平安南道龍岡郡に對し、東は大同江に注ぐ、載寧江によりて黃州・載寧二郡に隣り、南は信川郡、西は殷栗郡に接す。面積約六六七方粁、人口約八九・三〇〇。西南境には三峰（六一四米）、西北部には高南山（三九五米）等聳え丘陵起伏するも東部及び東南部はいはゆる載寧平野の西部に屬し低平にして耕地廣し。載寧より安岳・溫井里を經て鎭南浦の對岸に二等道路通じ外に三等道路ありて交通不便ならず。また大同江による水運の便は多大なり。米穀類・蔴草・煙草・棉・麻等を產し、牛・馬・豚・雞等の飼養も多く、また龍門・文山附近よりは鐵鑛の產あり。いま安岳・大遼・龍順・銀江・大咨・西河・安谷・龍門・文山の九面を含む。〔安岳鑛山〕郡の東部、載寧平野西部の小丘陵地にある鐵山。鐵區は龍門・文山二面に跨る。京義本線沈村驛（明治四十一年設置）の西南約一五粁。北西の平安南道鎭南浦府へは載寧江により汽船を通ず。礦石は古生層及び中生層中より產する輝鐵礦と黃鐵礦を主とす。福岡縣の八幡製作所に送りて製鍊せらる。

【安岳面】朝鮮黃海道安岳郡の首邑。郡の南部に位し、載寧平野の西部を占め、西部・東部に低丘あるほか土地平夷、水田畑地多く、米をはじめ農產多く、養豚・養雞等盛んに行はる。安岳の市街は面の南部の平地に位する地方の中心地にして米穀取引所あり。また郡廳の所在地。此處より東南の載寧及び西北の鎭南浦南岸方面に至る二等道路通じて交通また便なり。〔安岳溫泉〕往時は洞院溫泉と稱す。治革は詳ならざるも今より、約五百年前の發見に係るものといふ。泉質炭酸泉、鑛量豐富にして近時浴客多し、朝鮮鐵道黃海線の信川驛より約二〇粁。自動車の便あり。

アンギ　安義面　朝鮮慶尙南道咸陽郡の東北端。東北二境は居昌郡に接す。東部、南部及び西北境は山地なるも、西南部は洛東江の一支、南江の曲流部に當りその支流またこゝに會して平地をつくり、米穀類の產多く木器を製產し染織業も行はる。二等道路南江に沿ひて通じ、また北方の居昌方面に分岐す。

アンギ　奄藝　→奄藝

アンキョー　安峽面　朝鮮江原道伊川郡の南端。東南は鐵原郡に西南は黃海道金川郡に隣接す。地は太白山脈の支脈起伏する山地にして臨津江の支流平安川中部を西流し、南西境の一部を畫する本流に合し、その沿岸に耕地開けて農業行はれ、米穀類を產し麻を栽培す。東南方の鐵原邑と三等道路を以て連絡す。面内に萬景山あり、奇岳怪峰天に聳え平安川の清流その麓を圍流して勝景をなす。山腹の巖下に寶月庵あり、讀經の聲四隣の閑寂を破りて山間に響す。安峽面はもと隣接する東面及び西面と共に安峽郡たりしが大正三年伊川郡に併合せられ、その一面となりしもの。

アンギョー　安行村　埼玉縣武藏國北足立郡の東南部。草加町の西北に接し鳩ヶ谷町の東北に隣る。鳩ヶ谷町へ約五粁。東武鐵道竹之塚驛（明治三十三年設置）へ五粁。東半は水田連なり、米の產多く、西半は臺地にて同村を中心として西は神根村・北は戸塚村に亘り果樹・用材樹・桑などの苗木・蔬菜・園藝植物を栽培し、全國四大苗木產地の一にて、年產額百萬圓を超ゆ。此地は往古安行領といひ、中世安齋入道安行といふ人の領地なりしと。村名これに依る。大字領家にある貝塚は、土偶を始め多くの繩文土器關係の遺物を出土し、殊にその土器は關東地方石器時代末期のものとして著しく「安行式土器」の名は關東地方繩文土器の末期樣式のものを代表す。

アンゲ　奄藝（郡）　伊勢國にありし郡。延喜式に郡名見え、和名抄は阿武義と訓し、奄藝・田井・壁屋・服部・黑田・窪田の六郷を管す。中世には安藝郡・扇窪田の六郷を管す。近世安濃津の藤堂氏の治下なりしも、明治四年廢藩により安濃津縣の管下となり、同縣の同五年三重縣と改稱するに及びて其の管下となる。明治二十九年奄藝・河曲二郡を合せ河藝郡となる。散木「伊勢に侍りける頃都の方より扇にそへておくり侍ける歌の詞、鈴鹿山は扇の郡にあり　ふりすてて越えさらましや鈴鹿山扇のかせの吹きこましかば　後撰」両して奄藝郷は和名抄、安無支と訓す。今の三重縣河藝郡榮村及び上野村の地なるべし。奄藝郡郡家のありし所なるによりて名づく。

アンケー　安溪面　朝鮮慶尙北道義城郡の西部。東部・北部は丘陵起伏するも、南部は洛東江の支流消川西流し、其の流域に所謂安溪平野と稱せらるゝ廣闊なる平野にして水田一面に續き、米を主として穀類の產多し。

アンコー　安康　朝鮮總督府鐵道東海中部線の驛（大正七年設置）。慶尙北道慶州郡江西面にあり。この邊慶州平野に續く沃野を兄山江貫流し、早くより東洋拓殖會社の移民地たり。安康水利組合あり、灌漑面積一千五百町歩餘。驛の北方約三粁の地に代興德王の陵あり。新羅四十二周圍の石人、陵體等は考古學上珍重せらる。また江西面玉山里に玉山書院あり、朝鮮中期の碩學晦齋李彥迪を祀りし處。驛の西北方約六粁。

アンコー　安興面　朝鮮平安北道定州郡の西南端。南は黃海に面し、南西海上に身彌島あり。西と北は東葉江を隔てて宣川郡に對す。地は低平なる海岸平野を占め、總督府鐵道京義本線西の東北部を東南より西北に掠む。農を主業として米穀類を產し、沿岸よりは太刀魚・鯛・鮑等の漁獲多し。

アンコク　安谷面　朝鮮黃海道安岳郡の北東端。東北二境は大同江（載寧江）を隔てゝ黃州及び平安南道龍岡郡に對す。南部には低丘あるもその他は一帶の平地にして水田及び畑地開け米穀類の產多し。大同江の水運により北方の鎭南浦方面への交通便利なり。

アンコク　安國山　沖繩縣にある國

比屋武岳の舊稱。

アンサ　安佐面　朝鮮全羅南道の西邊、務安郡の南部。東は海南郡に接す。安昌・箕佐・八禽の三大島の外に慈岩・朴只・牛月・外湖・下沙嶼・瓦文・龍島・不務起等多數の島嶼より成る。島内に耕地開けて農業行はれ穀類を產するも、主業は漁業にして黃海の黑山島方面に出漁して捕鯨を行ひ、また沿海よりは石首魚・鯛・蝦等の漁獲物あり。八禽・箕佐兩島間に好適なる鹽地ありて漁業の根據地をなし、箕佐島の邑洞里、安昌島の安昌里等を首邑とす。北方の岩峯・慈恩、南方の長山等の諸島間に水陸を交互に連絡する道路開け、物資は主として東方の木浦府と交易をなす。

アンザイ　安西　【安西(郡)】安房國安房郡にありし郡名。安房國は中世平群・朝夷・長狹・安房の四郡に分る、安房郡は鎌倉時代に安東・安西に二分さる。今の丸重村大字安東はその遺稱たり。平群氏の族と稱する安房の豪族安西氏は此地名を負ひしものにて祖武平氏と稱す。東鑑・治承四年の條に安西三郎景益の名見え、其子孫繁衍し、文安年間までこの地方の豪族たり。東鑑・治承四年九月「一日、庚戌、武衛可レ有レ渡二御干上總介廣常許一之由、被二仰合一、北條殿以下、各申二可レ然之由一、愛安房國住人、安西三郎景益者、御幼稚之當初、尋寄二疑惑一者也」

【安西】駿河國安倍郡にありし郷。和名抄以後の稱にて淺間社所藏の天文・文祿頃の古文書に安西郷見ゆ。蓋し安倍市によりて東西に分ち、東を安東郷、西を安西郷と稱せしものなるべし。安西の義は安倍市の西郷の意。いま靜岡市の町名に安西の名殘る。靜岡市は往古安倍市と稱し、また國府のありしところなれば府中とも稱せらる。

【安西(郡)】伊勢國の古郡名。もと安濃郡なりしを中世私に東西二郡に分ち、安東・安西といへり。その境界は詳ならざるも凡そ今の安濃村の邊なるべし。近世に至り再び合して安濃郡と稱し、今これに從ふ。※安濃郡

【安西村】三重縣伊勢國安濃郡の北部。北は河曲郡に界し、西南部は鈴ヶ峯(八二〇米)に續く丘陵地なるも、東部は安濃川中流の流域にして耕地廣く、主產物に米・麥あり。社線安濃鐵道の安西驛(大正三年設置)あり。古くは和名抄の安濃郡内田郷の内、中世安西郡に屬し、村名もこれに因めるもの。大宇岡本は東鑑に「文治六年、伊勢國岡本御厨」とみゆる地にして、東鑑・元久元年四月伊勢平氏謀叛の條に、「於二安濃郡一攻二撃岡八郎貞重及子息件類一ことあり。伊勢軍記に岡氏は卽ち岡本の邑主なりと見ゆ。また岡本の西に大宇荻野あり。東鑑・文治三年四月の條に「伊勢國荻野莊」とある荻は萩の誤りにて此地を指せるものならん。

アンザン　安山面　朝鮮咸鏡南道豐山郡の中央南部。南は北青郡に隣接す。長白山脈中の高原地帶なる所謂蓋馬臺地に位し、四周は希砂峰(一七六〇米)・厳防洞嶺(一三九五米)・厚峰嶺(一三三五米)・大德山(二一一三米)等の諸峯によりて圍繞さる。南境を東西に走る厚峰嶺山脈は日本海斜面と鴨綠江斜面との分水嶺に當り、虛川江の一上源これより發し、西方より來る本流に合して面の東部を貫流し北方の里仁面に入る。玄武岩の熔岩より成る此の臺地は周邊に森林を有するも、中部の窪地は火田民によりて耕地開かれ特殊なる開墾狀景を呈す。麥・粟等を主として穀類の產多く、大麻の栽培行はれ牛・馬・豚等の飼養また盛んにして北境附近よりは金・銀等の鑛產を出す。道路は面の中央部を二等道路縱貫してバスを通じ、南部の黃水院里より二派に分れて一は南方の北青郡に、一は西南方の安水面方面に至る。もと北青郡の管下なりしも、大正三年安水面と共に豐山郡に編入せられたるもの。

アンジキ　安食　→作岡村(茨城縣)

アンジキ　安飾　→安飾村(茨城縣)

アンシュー　安州　【安州郡】朝鮮平安南道の北西端。東は价川・順川二郡に、南は平原郡に接し、西は黃海の一支流たる西朝鮮灣に臨み、北は清川江によりて平安北道の博川・寧邊・定州三郡に對す。馬鼠山(五三六米)の連嶺郡のほゞ中部を南北に走り東西の二地區に分つ。東部は概れ丘陵起伏の地、西部は一帶に低平廣闊にして所謂安州平野をなし、數條の河川郡内に發して夫々西北流或は西流して清川江及び黃海に注ぐ。北境を西流する清川江は朝鮮有數の大河にして水利水運の便多し。一等道路郡の中央を縱貫し、京義本線はやゝこれに沿ひて走る。北邊の安州邑を過じて東方の价川方面に二等道路通じ、鐵道价川線またこれに沿ふ。農業盛んに行はれ米の產は道内第一に位し、其他の穀類・棉花・煙草等の產あり、東部には牛の飼養多し。西南部の立石面東南部の雲谷面よりは石炭を出す。沿海よりは太刀魚・鯛・鰯・鯔・鰕等の水產物多く、工產には織布・刺繍細工等あり。安州邑は郡の首邑たり。郡は高麗時代には息城郡、新羅時代には會盤郡と稱す。

【安州邑】朝鮮平安南道安州郡の首邑。郡の北部清川江に跨り、北は平安北道博川郡南面・東面、寧邊郡獨山面に接す。南境に馬鼠山(五三六米)、東界に西山峯峙ち地西北に傾斜す。北部は清川江に沿ひ一面の平地をなし、道路また縱横に通じ、鐵道价川線は東西に走り安州・北松里の二驛(共に大正五年設置)を置く。安州平野の東北邊に當り、米の產多く棉の栽培も行はれ、牛その他の家畜飼養また盛なり。安州市街は清川江に臨み。古來の要衝にして形勝の地に位し、今尙ほ城存す。西鮮に於いて平壤府に次ぐ大市場町として知られ、物資の集散活潑なり。郡廳・法院支廳・實業學校等あり。また百祥樓・七佛寺誤渡灘城・忠愍祠・七星龜等の名勝あり。高句麗以來屢〻戰鬪の巷となれる處、古くは影原府・安北府・寧州城・衛州等とも稱せられしことあり。日清戰役には我軍に占領せられ、市街は兵火に罹り、また日露戰役に露軍の來襲せるに對し、我軍は平壤よりの援兵を得て奮戰擊退せる處、今その記念碑建てり。

【安州城】新羅の太祖の時より不完全ながら城郭の設けられしは疑ひなし。李朝の宣祖これを修築して周圍三千四十三歩高十三尺、門四箇所、水門四箇所を有する城體を完成す、其後新城を增築したるも數次の兵火により城門・城壁の大部分は破壞し、今はたゞ城體のみを殘す。【百祥樓】安州驛前の小丘上にあり。斷崖を以て清川江に臨む。藥山・妙香山等の秀嶺を望みて眺望絶佳なり。創建年代は詳ならざるも高麗の忠惠王の登樓詩により其の建築年代の古く、また勝景の地たりしことを察し得らる。今より二百餘年前兵使金潤錫類破せるを修築し、大正六年朝鮮總督府更にこれを改修す。【七佛寺誤渡灘城】舊北安滿道に沿ひ岩壁上に建つ。昔時隋兵來寇の時、城下薩水に迫り、七人の異僧の清川江を渡渉徒涉するを見て流水漫しと誤認し、大軍を指揮して江中に入るや高句麗支文德に挾擊せられ大半は溺死し大敗逃走せり。よりて一寺を建立し、此の七僧を象どる七石像を置きしより寺名出づと傳ふ。【忠愍祠】新城内の松林中にあり。仁祖の五年清兵襲來の時、部下と共に守城殉死せる節度使南以興の忠魂を記念する爲に建立ぜられしもの、今尙ほ享祀を行ひて廢せず。

【安州炭礦】朝鮮平安南道安州郡の西南部立石面にある炭田。京義本線萬城驛(明治四十一年設置)の西南約一二粁、新安州驛(明治四十一年設置)の西南一六粁所謂安州平野の西南邊に位す。咸鏡北道の諸炭田、慶尙北道の迎日、黃海道の鳳山の炭田等と共に朝鮮に於ては稀なる第三紀夾炭層に屬す。炭質は低度瀝青炭又は褐炭に屬し、年產約六萬瓩(約三〇萬圓)炭質良好ならざるも燃料に乏しき西朝鮮に於ては誠に天與の賜物たり。

アンジュー　安中村　茨城縣常陸國稻敷郡の東部。半島狀に東方霞ヶ浦に突出し、東南方浮島に對し、西は木原村に接す。村の東端なる大字大山は霞ヶ浦航行の汽船發著所をなす。大字上新田より潮海岸に沿ふ間道は隣村木原村にて縣道に連なり土浦町に至る。千鳥・不動堂・花見塚・ふく〳〵水等の名勝あり。ふく〳〵水は大字大山の國平なる丘上にある清泉にて間斷なく湧出す。郡郷考に常陸風土記を引きて「信太郡、郡北十里、碓井」とあるをこれに擬するも定かならず。大字馬掛は村の東北端にて湖水に面し、延喜式の信太馬牧の遺名ならん。【安中陸平貝塚】大字馬掛西方の丘陵陸平にあり、霞ヶ浦に臨み、畑地及び畦の傾斜面約三〇米四方に亙り貝層を露出す。明治十二年東京帝國大學によりて發掘調査の際、土器・土偶・石器など發見せらる。東京市内の大森貝塚に次ぎて早くより學界に知られたる石器時代の遺蹟たり。本村の地は隣接の木原・舟島・高田大須賀等の諸村と共に圓東地方に於るけ屈指の貝塚遺跡なり。

アンジュン　安順庄　臺灣臺南州新豐郡の北西部。南西は海に面し、南は鹽水溪を境として臺南市に對す。東北は新化郡に接し、北西は曾文溪及び鹿耳門溪を挾みて北門郡に對す。庄内は土地低平卑濕にして、殊に南西部海岸一帶の沼澤地は昔時の臺江灣たりし地域にて今埋立られ、その南部の鹽水溪口は臺南市の門戸なる安平港をなす。東部には畑地開けて穀類・甘蔗等を生產し、南部には製鹽行はる。道路及び其上を走る軌道は庄の東部を縱貫して臺南市と北方の麻豆街・佳里街方面とを連絡す。

アンショー　安昌島　→安佐面(全羅南道)

アンジョー　安城　【安城町】愛知縣三河國碧海郡の中部。古くは安祥に作る。岡崎市を距る西方約七粁、三河平野の東部に當る洪積層の平坦面にて、東西約七粁、南北約九粁(共に

正十五年設置）の四郡を置き交通に利便なり。町に縣立農事試驗場・同採種園・同安城農林學校・同安城高等女學校・同實業教員養成所・明治用水水利組合事務所・滿鐵飼料研究所等の外、また組合社・紡績會社・動力農具製造及會の工場等あり。此の地古くは和名抄の大岡郷に屬せるものとも或は大市郷の地なりともいはるるも詳ならず、中世は志貴之庄と呼ばれしものゝ如し。安祥の名が始めて見ゆるは大同三年傳教大師開基の甲山寺の本尊不動明王の銘の裏の銘「當國碧海郡志貴之庄安祥村」なり、安城と改めしは天文十五年正月なりと傳ふ。此地はもと梁田播摩守直教の領地たり。後織田氏の所領に屬し、文明十一年七月十五日松平和泉守信光は奇策（西野に於いて盆踊を催し巧に城中の將士を誘引す）を講じ、夜襲を決行して安祥城を陥れて之を領し、三男松平左京之進親忠をして此處に居らしむ。以來長親・清忠・清康・長家之に居り、實に德川氏の發祥地とも稱すべき地なり。天文九年織田信秀安祥城を襲へる時、長家刺あらずして自刃し、將士亦悉く戰死し、城は遂に織田氏の有に歸し、庶子信廣（信長の兄）城代として之を守る。天文十四年九月清康の子廣忠（居城は岡崎にあり）安祥城を復せんと志し自ら兵を率ゐて來り清田堰に戰ひ大いに織田氏の兵を破り安祥城に至る。時に信秀自ら將として大舉して來り援け、城兵も亦機を得て大いに戰ふ、廣忠の軍旗背に敵を受けて遂退谷り、廣忠身を以て逃る。天文十八年三月廣忠卒す。是より先廣忠の世子竹千代（家康）質となりて尾張の織田氏の許にあり。駿河の今川義元、廣忠死後その家臣等の織田氏に從はん事を患ひ、僧雪齋を將とし先づ岡崎城を攻めて之を陥れ次いで安祥を攻めしむ。信廣防ぐ能はず、城陥いり信廣捕虜となる。雪齋即ち使を信長の許に遣はして說き、信廣と竹千代を交換し兵を引きて還る。これより遂に廢城に歸す。址は現今了雲院の寺域と村社八幡社の境内に當り、僅に土塁の形と間道と傳へらるるものを存す。元祿十一年久永内記重利、安城村・米津村及び西加茂郡の加納村に於いて四千三百餘石を賜はり、安城に陣屋を置き子孫相承けて明治維新に至る。明治二十二年村制施行。同三十九年安城、平貫・里・今・箕輪・龜釜・赤松・古井の諸村及び長崎村の内篠目を合して安城町を建つ。尙大字龜釜は松平長親の二男親盛の住して龜釜松平を稱せる處。大字高木は清和源氏經親流の高木氏の起りし處にて經親七世の孫歳人判官代信光を始祖とす。※ 明治用水（ヘイジヨウヨウスイ）〔義人中川豐右衛門〕享保五年大字東尾の地に生まる。安永八年夏矢作川堤防決潰し水田悉く粉らす。豐右衛門上書して年貢を減ぜられん事を乞ふも許されず、村民擧りて哀願す。豐右衛門衆に代り熱誠を卓めて百方懇願するも亦許されず。豐右衛門固く決する所あり、一日郷倉の番命に入り血書を以て上書を認め更に願意をこめたる和歌一首を殘し、佛に積みたる饌米六十俵の上に坐し腹十文字に掻切りて絶命す。時に安永八年十月十七日。地頭久永内記深く感動し、遂に當年の年貢を全免し、倉庫内の不淨米全部を村民に與ふ。村民今に至るまで豊右衛門を德とす。自刃の場所は了雲院庫裡北東の御蔵なりといふ。〔自山神社〕大字大岡字宮東に鎮座。郷社。祭神伊弉諾命、伊弉冉命・菊理姫命。創立年代不詳。三河國有數の大社にして、江戸時代には德川幕府より百三十八石の朱印を安堵せらる。近郷の惣鎮守。例祭九月十九日。〔明治川神社〕大字今字縄原に鎮守。郷社。祭神大水上命（オホミナカミノミコト）・水分神（ミクマリノカミ）・高龗命（タカオカミノミコト）・都築彌厚。明治十八年の創立。始め本村の住人都築彌厚餘て郡内荒蕪にして灌漑の水利乏しきを患ひ、矢作川を分岐して疏水を通ぜんと計畫し、幕府の充許を得、工事著手の所、不幸病に罹りて殁す。時に天保四年。彌厚五組の負債を生じ一家倒產の悲運に陷りしが多年經營の遺業は伊豫田與八郎・岡本兵松等の後繼者を得て遂に明治十三年に完成し、爰に七千五百餘町歩の良田を得たり此の大工事に當り、彌厚等は一に神明の加護を蒙らざれば到底成し難かるべしとなし、水神三神を勸請して其成功を祈りしを本社創立の起因とす。大正二年彌厚は贈位の恩命に浴し、のちまた本社の祭神として配祀せらる。

【安城面】 朝鮮黃海道平山郡の北部。北西二機ば端興郡に接す。南部は滅惡山脈に屬する金剛山（五二四米）・春嶋山（五二五米）・天掛山（四七〇米）等東西に連り、面内略んど丘陵より成る。たゞ禮成江の一支南川は西南部に出で中部を東流し沿岸平地あり。一等道路並に京義本線東南より北西に貫き、面の中央に物開驛（明治四十一年設置）を置く。穀類・林檎等を產し、山地より薪炭を出す。家畜の飼養また所々に行はれ、特產物に物開附近の磐石あり西北邊の古驛安城里に史蹟として知られ、東南部に玉流泉の勝景あり。〔安城驛〕いま物開驛と西北方の永興驛新幕驛（明治四十一年設置）との中間なる小部落（安城里）にして文祿の役に加藤・小西兩將は國を引きて互に其の道路を決したる地點。加島・鎭島の聯合軍は東北方成鏡道方面に、小西軍は北西方平壤方面に向ひたりといはる。〔玉流泉〕東南邊にある惠秀山にあり。幣使朱之蕃この地の山水を賞し玉流泉の三字及び玉乳靈岩片泉仙福の八字を岩上に刻したり。夏季は避暑地として、秋季は觀楓の勝地として名あり。

【安城郡】 朝鮮京畿道二十郡の一。道の南端にあり、東南は東嶺山脈によりて忠清北道陰城郡に、西南は忠清南道天安郡に隣接す。郡内は概れ丘陵性の山地なれども、西方は郡の主邑土浦町へ縣道下す。安城川は北隣龍仁郡より來り西南流して振威郡に入り、東北部に漢江の一支流ありて東流し利川面に入る。平地は西南部に多く開け、東北部にも小平地あり。農耕を主業とし米穀類・白菜・大根等の蔬菜類・莞草・梨等を產し、牧牛・養蠶また多し。道路は中央の安城面を中心に四方に通ず。社線朝鮮京南線道西南より來りて安城に至り、それより幹線道路に沿ひて東北に走る。本郡は高句麗奈麟恕の地域にして忠清道に屬し、新羅朝には白城郡といひ、高麗の初めに至りて安城縣となる。恭愍王の時に郡となし、李朝太宗の世に忠清道より割きて京畿道に移屬せしむ。大正三年行政區域の改更に當りて安城・陽城・竹山の三郡を合併して新たに安城郡を成す。いま十二面を含み郡廳を安城邑に置く。

【安城邑】 朝鮮京畿道安城郡の中央部。概れ丘陵性の臺地をなし、西南部には平野拓けて安城川西流す。水利良きを以て耕地開け、米穀類・大根・白菜等の蔬菜類の產多く、牧牛・養蠶また盛んなり。二等道路東西に貫通する外、南方の鎭川・成觀方面に通ずる道路も此處より分岐す。社線朝鮮京南線道西南より來り二等道路に並行して東北方の竹山方面に走り安城（大正十一年設置）・安城邑内（昭和六年設置）の二驛を置く。邑の主部なる安城市街は安城川に沿ふ水陸交通の中心地に當り、古くより朝鮮四大市場の一と呼ばれたる市場町にして物資の集散盛んなり。郡廳・地方法院出張所・穀物檢査支所出張所等あり。昭和十二年邑制施行きる。日清戰役の古戰場として知らるゝ安城渡は此地より遙か西南方、安城川下流の忠清南道天安郡成歡面の地内なり。

【安城川】 朝鮮京畿道南邊を流るゝ川。上源は龍仁郡遠三面に發し、南流して西北・東南より來る諸水を合せ、安城郡に入り西に向ひ更に南東流し孔道面にて忠天安郡界をなし、再び京畿道振威郡に入り京釜本線に並行して西北に向ひ、漸く河幅を擴げて西に轉じ彭城・稻城二面の境界を劃し、喇叭狀河口を作りて牙山灣に注ぐ。流程約五〇粁。舟運の便あり。なほ日清戰役の始め大鳥旅團の松崎大尉の戰死せる古戰場として名高き安城渡は忠清南道天安郡成歡面地内の一等道路との交叉點にして今此處に忠魂碑建てり。

【安城面】 朝鮮全羅北道茂朱郡の南端。東南境は小白山脈の一部に屬し慶尙南道居昌郡に界す。面は小白山脈の西北麓に位するを以て山地廣く、たゞこれより出でゝ西北流する錦江の二支流に沿ひ、中部北方に小耕地あり。地は北に向ひて傾斜し、錦江の二上源これより發して一は北流し一は西流す。面内概れ山地なるもこの邊に穀類を產し家畜の飼養行はれ、薪炭の產多し。三等道路西部を南北に通ず。

アンジョー　安靜村（あんじやう）　茨城縣下

總國結城郡の中部。東北部に鬼怒川の支流流れ、西は飯沼に面し、飯沼川（利根川の一支）により猿島郡に境す。土地低平にして田畑よく拓け米・麥・煙草の產あり。西瓜・白菜を特產とす。武蔵郡下妻町より猿島郡境界に通ずる縣道本村の北部を東西に走る。この地は和名抄の下總國豐田郡大方郷の内に屬す。天文三年山川尾張守・平塚某、磯・松本・村貫等の土兵を率ゐて大方原に陣し、多賀谷家重の地を侵し、家重は平塚の兵を逆襲して大いに之を破る（下總舊事考）とある磯はいま本村の大字たり。〔弘德寺〕大字新地にあり。眞宗大谷派。新堤山宗智院と號す。圓東二十四聚第五番の靈蹟。開基信樂上人（俗稱相馬次郎師常の子）の開基。信樂は親鸞の面授口訣の眞弟なるも法門に就きて自我僻見の失あり、遂に親鸞の許を去りて一寺を建つ。後年本願寺三世覺如に說伏されてその非を悟り、即ち許されて弟子の列に加へらる。八世蓮如東下の際に弘德寺の寺號を授け、東本願寺第十三世宣如の代に二十四聚に列せらる。寺寶に親鸞上人筆蹟方便法身尊像・和讃等を藏す。

アンショク　安飾村　茨城縣常陸國

新治郡の東南端。南は佐賀・西は志士庫の二村に隣り、北東は霞ヶ浦に臨む。大字柏崎は霞浦西浦筋の水驛にて霞ヶ浦舟運の便あり。西方郡の主邑土浦町へ縣道通ず。米・麥・大豆・繭の產あり。本村は和名抄の茨城郡安飾郷の地にして、後世に至り安飾は專ら安食に作る。のち此地は南野庄安飾郷と稱し村名これによるもと小田氏の知行所たり。大字岩坪に貝塚三所あり、また安食・柏崎の間の丘上に古墳散在す。中にも富士見塚は高さ約六米、近時削夷せられ僅に石標を遺すのみといふ。幕末、水戸の尊攘の志士竹内百太郎（贈從四位）は同村の產にして夙に豪農を以て聞え、而も慷慨時事を憂ひ移に元治元年、藤田小四郎等と討幕の義旗を筑波山に擧げしも、事敗れて西に走り越前（福井縣）敦賀にて武田耕雲齋等三百五十餘人と共に刑死さる。

アンシン　安心面　朝鮮慶尙北道

山郡の西北邊。西境は連城郡に接す。北部に醴禮山聳え山地をなすも、中部以南は南境を西流する琴湖江流域の沃野を占め、耕地開け米穀・林檎等の產多し。二等道路西方の大邱府より來りて面の中央を東西に貫き、東海中部線これに沿ひて通じ半夜月驛（大正六年設置）を置く。物資集散の中心地たる主邑半夜月の地名の起原に就き種々なる附說行はるゝも、實は琴湖江中のパロウル（葱の瀨の義）を漢字にて表音せるに過ぎず。

アンジン　安針町　江戸日本橋にあり

英人ウィリアム・アダムス歸化して德川家康の顧問となり相模國三浦郡に領地を

受けて名を三浦安針と改む。その住宅ありしに因りて町名起る。いま日本橋區本町一丁目の邊に當る。此町に鳥市場あり魚河岸に對し鳥肉を賣るを以て有名。和合人・二下「おらがうちは安針町のはきだめのよふだ。ナセ〳〵。コウ又はれが集るものじやアれへ」（鳥の羽とはれ者との洒落）柳樽・八五「鳥の啼く安針町の軒の下」

アンスイ　安水面　朝鮮咸鏡南道豐山郡の南西端。西南新興郡に、東南は北青郡に隣接す。蓋馬高臺の一部に當り、南境には厚峙嶺山脈ほゞ東西に走りて三峰（一九六七米）・希沙峯（二一一七米）・禁脾嶺（一六一六米）・火鐵嶺（明堂峰）（一八〇九米）等連なり、西境には白山（二三七九米）・玉蓮山（二一六四米）等聳ゆ。虛川江の上流黃水院江これに發して面内を北東に貫流して東北隅安山面に入る。面は東北より西南に長く四〇粁を越え、幅廣き處約一六粁に及ぶ。北部の平坦部に於いては火田耕作行はれ粟・稗等の穀類を產し、大麻の栽培行はれ、山地よりは木材の產多く牛豚等の飼養また盛んなり虛川江上流の河谷に沿ひて二等道路貫通し、バスの運轉あり。安山面と共に大正三年北青郡より豐山郡に編入せらる。

アンセン　唵川面　朝鮮全羅南道康津郡の北端。東は長興郡に、西と北は靈巖郡に隣接す。月出山の連嶺なる黃峙は北境を走り、耽津江の一支その南側に發して東流す。土地概して平坦、農耕行はれ米穀類の產あり、また牛豚等の飼養行はる。二等道路南より北西に貫通して東南方の長興と北西方の靈巖とに連絡す。主邑は中部にある鳳林里。

アンソーリ　安倉里　↓天摩面（平安北道）

アンダイ　安代　↓平穩村（長野縣）

アンタロマ　安足間　咸鏡南道北青郡愛別村大字安足間にあり。驛より約一二粁の處にスキーの好適地大雪山（旭嶽）あり、中腹に愛山溪溫泉あり。

アンツー　安通　總督府鐵道臺東線の一驛（大正十三年設置）。臺灣花蓮港廳下撫墾にあり。

アンテー　安定　【安定庄】臺灣臺南州新化郡の西端。南は新豐郡に接し北西は曾文溪を境として北門・曾文二郡に對す。地は曾文溪下流左岸の平地、東邊に沼澤あり附近に水田拓け西部には畑地おほくして農耕業行はる。米穀・蔬菜類を主とし家畜の飼養も盛んなり。道路は西部を縱貫して南方の臺南市と北方の佳里街とに通ず。

【安定面】朝鮮慶尙北道榮州郡の中部。榮州面の西に隣り、西南部は山地をなす。乃城川支流西川その東境を南流し、面内を東南流する二川を合す。西南部を除けば概ね平坦部肥沃にして耕地開け、米穀の產多く養蠶も行はれ牛豚の飼育また多し。二等道路面の中央を東南より西北に通じ、東方の榮州面より北西方の忠淸北道方面に至る交通路をなす。

アンド　安堵　【安堵村】奈良縣大和國生駒郡の南部。和名抄、平群郡他波郷の地、中世は他波庄・安堵庄ともいふ。南は大和山を隔てて北葛城・磯城の二郡に境し、西は龍田町・法隆寺村に隣る。大和盆地の西邊にて土地平坦、水田多し。社線大阪電氣軌道の大和安堵驛（大正五年設置）を置く。幕末の側醫にして勤王家たる今村文吉（贈正五位）は此地の人。〔極樂寺〕大字東安堵にあり。古義眞言宗。草創年代及び沿革は詳ならざるも、現に御室末たり。本尊木造阿彌陀如來坐像一軀は國寶たり。〔大福寺〕大字笠目にあり。融通念佛宗。草創年代並に沿革は詳ならず。地藏菩薩立像（木造）一軀は國寶。

【安堵山】紀伊山脈の一支果無山脈の一峯。和歌山縣西牟婁郡二川村と奈良縣吉野郡十津川村の境に跨る。標高一一一八四米。

アントー　安東　【安東】鮮岡縣駿河國安倍郡にありし村。昭和四年大里村と共に廢して其區域を靜岡市に編入す。

【安東村】三重縣伊勢國安濃郡の東部。東南部は津市に接し、東北部河曲郡の境に低き丘陵あるも他は安濃川下流々域にて土地平坦、水田多し。主產物は米・繭にて工產物之に次ぐ。社線安濃鐵道の納所（大正十三年設置）・庶毛（大正四年設置）安東（大正三年設置）の三驛あり。古くは和名抄の跡部郷に當り、中世安東郡に屬し村名これより起る。富豪三井家の祖高利の父八郎兵衛高俊、高俊の父越後守高安は大字一色の地に住み、津城主富田氏に仕へしといふ。高俊は慶長・元和の頃の人にて、高利に至り現在の基礎を築く。大字淀見は勢陽雜記に「青やきのしふみの山のうしろ田にのりすりおけと鳥の啼く　西行」とある地にして淀見八幡宮あり。式内の安濃郡志夫彌神社は之なりといはる。〔大長寺〕大字河淀にあり。臨濟宗相國寺派。平著山と號す。天平三年僧行基は火之迦具土命の神靈を感じて創建すといふ。本尊木造地藏菩薩半跏像（俗稱火之迦具土命の本地佛像）は鎌倉時代初期の作と稱せられ現に國寶たり。

【安東】伊勢國にありし郡名。もと安濃郡なりしが中世私に東西二郡に分ち、東郡を安東、西郡を安西といふ。近世に至り再び合して安濃郡となす。この境は恐らく今日の安濃村の邊なるべし。

【安東郡】朝鮮慶尙北道二十二郡の一。道の北部にあり。東は奚陽・青松二郡に南は義城郡に、西は醴泉郡に、北は榮州・奉化二郡に隣接す。大白山脈の支脈郡内に亘り丘陵起伏して山地多きも、洛東江の上流郡の北東部を南流し、やがて中部を西方に折れ、東南部より來る中邊川南部よりの眉川等の支流を容れて西に流れ川の沿岸所々に耕地開く。米麥・豆類・麻草・棉・葉煙草等を作り、山地よりは松丸太を伐採す。牛豚等家畜の飼育も所所に行はれ、工產には麻布・綿布・燒酒・紙等あり。郡のほゞ中央部に位する安東邑を中心として一・二等道路四通し、朝鮮鐵道慶北線また西部より安東邑に通じ、慶尙北道北部の交通の中心點をなす。本郡は三韓時代の辰韓の地、其後南部は新羅に北部は高句麗に屬す。高麗の太祖の時郡人の金宣平・權幸・張吉等功有りたるより安東府となし、李朝に至り現在の奉化・英陽・青松・榮州・醴泉・義城・軍威・盈德等と合し、府又は都護府・大都護府等を置けり。爾後鎭を併置し、或は分割して縣となし府に復す。明治三十八年八月觀察府を置きて十七郡を統轄せしも、後これを廢して安東・禮安の二郡に分割す。大正三年行政區劃の改更に方り安東郡を置く。いま安東邑外十五面を含み、郡廳を安東邑に置く。

【安東邑】朝鮮慶尙北道安東郡の主邑。郡のほゞ中部。洛東江中流右岸の盆地中に位す。西部・北部は低き丘陵あるも耕地開けて米麥・麻草・棉・葉煙草等の農產、麻布・綿布・燒酒・紙等の工產あり。本道北部交通上の樞軸に當り、此地を中心として一・二等道路四通す。京釜本線金泉驛を基點とする社線朝鮮鐵道慶北線の終點慶北安東驛（昭和六年設置）を置く。安東市街は前記諸物資の外に附近各地の松丸太・牛豚等の家畜・繭・金その他の鑛產物等を集散し、市場町として繁榮し、郡廳・裁判所・穀物檢查所・道立醫院・銀行等あり。また太子扇・圓王廟・嗅湖樓・西丘寺（安東公園）・法龍寺・法興寺址・法林寺址等の名勝舊蹟あり。此地は古くは古昌・綾羅・瓮州・永嘉・地平・一昇・石陵・古寧・花山・古蔵・昌寧等と呼ばれ、新羅時代の重鎭にして今なほ其時代の古刹・寺址等を存す。高麗の恭愍王の南巡地、また慶愛錄その他の著者として著名なる李朝の文臣柳成龍の生地といはれ其の祠を存す。〔太師廟〕邑内東部洞にあり。朝鮮中宗の三十五年（天文九年）府使金光祖の建廟。麗朝統一の功臣金宣平・權幸・張吉を祀る。三太師は安東金・安東權・安東張三氏の祖先にして、その遺物として玉笛・金帶・荔枝・朱紅木杯・玉貫子等を存す。例祭陰曆二月・八月中の丁の日。〔圓王廟〕邑の西部、西岳寺の東麓にあり。始め宣祖三十一年（慶長三年）西門北麓に建てたるも鄕人、文廟と對峙するを嫌ひ現地に移す。規模雄大、彫刻精巧なり。〔嗅湖樓〕邑の西南、洛東江岸にあり。新羅時代に建築せし名樓にして高麗恭愍王辛丑（正平十六年）十一月亂を避けて瓮州（安東邑の古名）に至り此の樓に駐蹕せらる。翌年還京の後も追想已まず嗅湖樓の額を賜ふ。〔西丘寺〕圓王廟の西に位す。李朝初期の建築にて圓王廟と共に規模の雄大・彫刻の精巧を以て知らる。大正十五年林泉の設備をなし安東公園となす。〔法龍寺〕邑内にあり。新羅時代の創建（崇神天皇四十一年）義湘祖師の建立。今大雄殿及び附屬建物一棟を殘す。古來儒邑の古刹なりと傳ふ。〔法興寺址〕邑内新世洞にあり。約千餘年前建造の甎塔の基礎あり。蒙古式古塔にて基臺の四圍に羅漢佛を陽刻す。法林寺址にも同樣のもの存す。〔法林寺址〕慶北安東驛の西側にあり。法興寺址のものと同じき甎塔の基礎を存す。また鐵橋あり、韓國の基礎と認めらる。〔鷲飛寺彌勒大佛〕邑の市街より西北約四粁、泥川岸にあり。五圓峰山王建峰の南麓、乃城・榮州道路の傍に屹立せる大花崗岩に彫刻せられ、總高四十二尺六寸、頭部九尺六寸にてその明朗端嚴の佛顏は行人をして自ら禮拜の念を起さしむ。新羅善德女王三年（舒明天皇六年）の作と傳へられ、古來朝鮮全道に亙りて流行せる南道雜歌「成造辭」は其の起原をこれに發す。

アントー　安島　【安島郷】一に安東に作る。福井縣越前國坂井郡の西北角。三國町の西北なる雄島村の西岬にて三國港の北約二粁。この崎の邊は約〇・五粁四方の平原をなし、千疊敷・陣ケ岡等と呼び、濱木のほか樹木生ぜず。崎の前面に雄島あり、高さ約三〇米、樹木繁茂す。此島と崎との間は岩礁散布し小舟も通じ難きも風光絕佳なり。

【安島】朝鮮全羅南道の東南端、靈水郡南面に屬する一小島。西北に金嶼島・南に所里島あり、沿海は鯖・鰒・蝦の漁場にして外に海苔を產す。此島は附近漁業の根據地をなす。公立小學校あり。

アントー　鞍島　朝鮮忠淸南道の北西端、瑞山郡に屬する小島。島上に燈臺あり、仁川港に出入する船舶の標識たり。明治四十四年設置、閃白光にて毎三秒一閃光。光達距離十四浬。

アンドー　安道面　朝鮮咸鏡南道安邊郡の東北端。北は日本海の永興灣に面し、西は德源郡に東は江原道通川郡に隣接す。西半の地は南大川の流域にして安邊平野の北邊の平地を占め、東北部には大白山脈の一支脈走りて、その北端は海中に沒す。二等道路西北方の元山府より來りて北部を東西に貫き、總督府鐵道東海北部線は京元本線の安邊驛（大正二年設置）より來りて東北部に裕興驛（昭和四年設置）を置き東方の江原道に通ず。耕地廣く開けて米穀を產し、大豆は安邊大豆の名によりて知られ、北部の地よりは苹果の產多し。また東北部の裕興驛附近及び南部よりは金・銀等の鑛產を出し、北方の沿海よりは鯛・鱈・鮃・鰈・鯖等の漁獲物あり。主邑は面の中央なる仲坪里とす。

アンドー　安藤峠　鳥取縣岩瀨郡湯本村と北會津郡東山村との境上にある

峰。會津布引山（一〇八一米）の西方にて最高點一〇二七米。湯本村大平より東山村中津川に出づる峠にて、北面すれば猪苗代湖を俯瞰し、北方遥に磐梯山安達太郎山等を望む。

アントーグン　安東軍山　臺灣脊梁山脈（臺灣山脈）中部の一峯。臺中州能高郡花蓮港廳鳳林支廳の境界に跨り標高三〇八八・三米。東側より花蓮溪の一支マルバシ溪發源し、西南側より濁水溪の一上源發す。

アンドージ　安堂寺町　大阪の町名。東區東堀川安堂寺橋西詰より西へ一丁目より五丁目まで、現今は四丁目に改められる。今宮心中・上「ほのかに見ゆるあの舟の屋形には貞法樣おへ樣樣に」は安堂寺町の由來書」雀搨子・五「安堂寺町は安養寺の舊地なり、日本紀に云、孝德天皇大化五年己酉秋七月、是法師臥病於安養寺、於是天皇幸而問之」とあり、今安堂寺町道具屋すぢ東北の角なる石地藏を油掛の地藏と呼んで、諸人信をなすに靈驗あり、此地藏、往昔安養寺の頃より有て、凡千五百年餘りに及べり」※安養

アントク　安德　【安德村】福岡縣筑前國筑紫郡の西南部。福岡市の南方約一〇粁。南部は丘陵あるも中部より西北部那賀川沿岸にかけ耕地開け、米・麥等の農產少なからず。九州鐵道線下大利・春日原驛に各約四粁にて達す。此地は和名抄の那珂郡良人郷の內にして、中世大宰少貳原田氏の居りし處。その居城を岩戸館ともいふ。靈永二年原田種時の時、安德天皇平家と共に此國に下り暫らく此地に駕を駐め給ふ。其行宮の址を御所原といふと傳ふ。一說に御所原の名は天皇此地に坐しし故か旬日に過ぎず、恐らく齊明天皇の磐瀨行宮により御所原の名起りしか、何時よりか安德天皇の皇居の事に附會せしものならんといふ。また大字安德に逢鷺岡あり。神功紀に皇后神田を潤さんとして此地に至りしに大磐石ありて工事沮まる、よりて武內宿禰をして天神地祇に祈らしめたるに霹靂忽ち起りて、其磐を裂き水雷然として通ぜり。故に逢鷺岡といひ、その溝を裂田溝と稱せしと傳ふ。村名は安德天皇の御名に因めりとも、また東鑑に見ゆる安德三郎政廉の氏族に出づともいふ。なほ本村より近年廣鉾銅鉾十二箇發見せられたるも、こは本村の少なくとも推定し得べく本村地方古代史研究に注意すべき事とす。〔現人神社〕大字伸に鎭座。郷社。祭神表筒男命・中筒男命・底筒男命。此地は橋の小門之濱原の遺址、或は住吉神（現人神）の初めて出現し給へる地なりともいふも、恐らくは住吉神の封地なりしを以て現人の名稱起れるものなるべく、古來本村及び西隣岩戸村の產土神として土俗の崇敬厚し。例祭九月十九日。

【安德】　↓安中村（長崎縣）

【安德西面】　朝鮮全羅南道濟州島の西南邊。南は海に面す。漢拏山西南斜面の地を占め、北部より次第に低下し緩かに傾斜す。海岸に近く東に軍山（三九五米）、西に山房山（三九五米）屹立し、南西海上に兄弟岩の二岩嶼あり。農耕行はれて米穀・蔬菜類を產し、北部に於ては牛馬の放牧行はる。沿海は鯛・黑鯛・鰒・鮪等の漁獲物あり。首邑は軍山西麓の柑山里。

【安德面】　朝鮮慶尙北道青松郡の西部。西境は安東郡に隣接し西部・北部は山地。山脈は此地より東方に走り郡內を橫斷す。牛邊川の上流吉安川南方より來り西北に山地を貫流して水利の便を與ふるも、雨季に氾濫して耕地を侵すことあり。米穀類・麻等を作り、牛豚を飼養す。特產に楮を原料とする朝鮮紙あり。

アントツ　安突鎭山　↓南面（平安北道）

アンナイ　安內面　朝鮮忠淸北道沃川郡の北端。北は報恩郡に界し、東南は安南面に、西南は錦江を挾みて沃川面に對す。面內丘陵起伏するども、東部及び南部錦江岸に小耕地あり。穀類・棉・麻等を產す。三等道路南方の安南面より來り東部の洗季里を經て北部の報恩面に通ず。

アンナカ　安中　【安中町】　群馬縣上野國碓氷郡の東部。東は坂鼻町に、西は原市町に隣る。東北境に天神山（三二三米）あり、北部一帶は丘陵地を成すも、九十九・碓氷の二川村內を東流して其沿岸に平地を作り桑畑・水田拓く。省線信越本線南部をほゞ東西に走り安中驛（明治十八年設置）を置く。縣立安中高等女學校・縣立蠶絲學校あり。也と中山道の宿驛として發達せる處にて街道に沿ひて長き市街をなし、西隣原市町との約二粁の間は兩側に老杉亭々として列立し、今もなほ舊中山道の面影を存す。往時は安中並木とよばれ、徒步馬背の行旅者は樹陰に憩ふに便宜を得たり。今指定天然記念物たり。また天神山の西麓、前面に九十九川を臨みて湯澤鐵泉あり。泉質はカルシウム含有泉。發見年代は不明なるも明治初年には已に旅館營まれ、閑靜なる湯治場たり。明治時代東京三田の慶應義塾と相對して、東西の二大私學たりし、京都の同志社の創立者の一人新島襄はこの地の人。また江戸末期の俠賊として一世にその名を謳はれたる安中草三郎も亦この地の人なりといふ。この地は和名抄、碓氷郡石井郷の內にして、古くは野尻と稱せしも、永祿二年安中越前守忠正、この地に住せる宮庭氏を逐ひて築城するに及び安中と改む。江戸時代、中山道の一宿驛にて今の大字中宿の名は東の板鼻驛と西の松枝驛との中間なるより起りし名なるべし。〔鷹巢城〕碓氷川に臨む絕壁數仞の鷹巢山上にあり。この地もと箕輪城主長野氏の所領たりし

も、永祿年中武田信玄之を侵略し此城を築きて其將依田六郎をして守らしめ、西上州の守備に當らしむ。武田氏亡ぶに及び北條氏の手に歸せしも、小田原役後廢城となり、今僅に其遺址を留む。〔安中城〕町の西部字西町・扇町・東町一帶の地に當る。永祿二年安中越前守忠正、此地の住人窪庭氏を逐ひて築城し、其子左近將監忠成を居らしむ。同六年武田信玄其の鋒先を西上州に向けるに及び、城主忠成屈息を上杉謙信に通ぜしも武田方に機先を制せられて攻略せられ、衆寡敵せず終に之に降る。翌年武田氏に屬して諸處に轉戰せしも天正五年勝頼に從ひて長篠の役に出陣し、一族殆んど之に死す。武田氏亡ぶに及び城亦廢せらる。天正十八年德川家康江戸入部と共に井伊直政箕輪城主となり、次いで近江彦根に移りしも、安中附近は猶ほ直政の領有する所たり。慶七年直政卒して長子直勝遺領を繼ぎしも、同十九年大阪役起るに當り、偶〻直勝病に罹りしより幕命に依り弟直孝を從軍せしめ、直勝は安中に來りて碓氷・牧の兩關を警固す。元和元年に至り封を直孝に讓り、直勝は上州の領地三萬石を領たれて再び安中に城邑を營みて之に居り、碓氷・牧の兩關を管す。〔安中藩〕井伊直勝の後水野氏・堀田氏・板倉氏・內藤氏等を經て寛延二年板倉勝清こゝに封ぜられ二萬石を含み明和四年一萬石の加增あり、以來子孫相繼ぎ明治維新に至る。勝尙の子勝明は賢君の聞え高く、老中に擧げらる。また學を好み西征紀行・東遊日記等の著あり。明治四年安中藩は一旦安中縣となりしも、間もなく群馬縣に併合さる。藩校、造士館は文化年間板倉勝尙の創立せるもの。〔安中原市の杉並木〕指定天然記念物。安中町より原市町に亙る舊中山道にあり。近世伐採せられたる所あるも延長一粁餘に及び樹數三百餘株、樹幹の最大なるものは目通幹圍約五—六米に達す、杉並木として有數のもの。〔妙光院〕新義眞言宗豐山派。久光山と號す。應永年間權僧正慶秀法印の開創に係り、數喜寺と稱せり。縣下屈指の大伽藍にて、本尊金剛界大日如來を安す。中門は幾嚴工の作といふ。寺寶慈覺大師作地藏菩薩像・東京護國寺等附愛染明王等。〔西廣寺〕眞宗大谷派。本臨山と號す。慶長年中井伊兵部少輔直勝の開創。開山は秀通和尙。秀全和尙を中興開山とす。本尊阿彌陀如來。寺寶に聖德太子木像（行基菩薩作）・親鸞上人筆六字名號掛軸等。〔東光院〕天台宗。十輪山と號す。開基不詳。開山は慈覺大師中興開山は宜海上人。本尊阿彌陀如來。什寶、開山筆十三佛畫像を藏す。〔龍久寺〕日蓮宗。法昌山と號す。安中出羽守忠親の母法昌院の開基に係り、開山は本龍院日聖上人。本堂に十戒曼陀羅を安置す。

【安中村】　長崎縣肥前國南高來郡の東部。北は島原町に隣接し、東は島原灣に臨む。西方に雲仙岳・野岳、島原町との境上に眉山峠ち、村の大部は山地なるも、東部海岸に沿ひて平地拓け、水田・桑園發達す。縣道東部を南北に走り、社線口之津鐵道の秩父ヶ浦公園（明和七年設置）・安中村（大正十一年設置）の二驛を置く。大字安德は遙に九十九島を臨む絕勝の海岸に位し、今秩父ヶ浦公園といふ。大字本場は雲仙國立公園の內。本村古くは安德と稱し、東鑑寛元四年の條に、肥前國御家人安德三郎右馬允政廉の領となると見ゆ。また天正元年有馬氏薩州島津氏の加勢を賴み深江城を攻むるの際、此地の住人安德入道宗泉、初め深江方に加擔せしも、幾許もなく心を翻して有馬方に走り此地に於て激戰すといふ。

アンナン　安南　【安南】　↓安藝郡

【安南面】　朝鮮忠淸北道沃川郡の北部。東北部は金積山（六五二米）によりて報恩郡に接し南西二境は錦江の曲流によりて限らる。四境丘陵起伏すれども中央部は錦江の支流々れて耕地開け、穀類特に大豆・棉・麻等を產す。三等道路南西方の沃川面より來りて一は西邊を北に貫きて安內面に通じ、一は中央の首邑淸亭里を經て北東境より報恩郡に通ず。

アンノー　安農面　朝鮮咸鏡北道慶源郡の北部。西境は概山連嶺に依りて鏡城郡に接し、東境は南流する豆滿江に限られて滿洲國間島省琿春縣に對す。西部に山地なれども東部豆滿江岸には平野開け所謂慶源平野の南部をなす。二等道路北方の慶源面より南下して東部を縱貫し、總督府鐵道北鮮線また其の東側に並行し、農園・永良二驛（共に昭和五年設置）を置く。農園驛附近は慶源平野中最も肥沃にして農園川これを灌漑し、米穀の產多く、また此地に東洋拓殖會社の編羊牧場あり。豆滿江よりは鮭・鱒・鱈等の產あり。琿春縣を流るゝ琿春江は永良驛附近に於いて豆滿江に合流す。此地の交通は水運にのみ依りし時代には、永良淵は琿春との來往頻繁に行はれ物質の集散交易の中心地たりしも鐵道開通以來慶源・淸流等にその繁榮を奪はる。いま稅關出張所あり。永良驛の東方約二粁に松林密生せる小山あり、龍堂と呼ばれ展望の佳秀を以て知られ、李朝太祖の時代には馬術・弓術の練習所ありしといふ。首邑靈洞は古くは蠶多老といひ李朝太宗の時に慶源府治の置かれし地、また安原洞には城址・關防址等あり。

アンノコーリ　安郡　山口縣長門國阿武郡の別稱。從つて本郡より伐り出す木材の稱にも用ふ。藻鹽草・一七「長門なる阿武の郡の檜板は唐人もすまさりけり」

アンバ　鞍馬　【鞍馬橋】　長野縣西筑摩郡王滝川に懸る橋。兩岸絕壁峙ち、濃藍の淵の上へ約三〇米に懸る。風趣甲斐の猿橋に似たり。

【鞍馬群島】 朝鮮全羅南道の北西部の一島群。靈光郡落月面の一部をなす。鞍馬島を主島として北に石菱島、南西に横島あり、其他二、三の小島を含む。鞍馬島西南岸に好錨地あり、捕鯨を始め鯛・石首魚・鮗等の沿海漁業の根據地をなす。

アンパチ　安八郡　岐阜縣十八郡の一。美濃國に屬し、縣の西南部に位す。北は揖斐郡、東は本巣・稲葉・羽島三郡、南は海津郡、西は養老郡・不破郡及び大垣市に接す。西濃平野の中部に位し、長良・揖斐・杭瀬・大縄等の諸川南北に貫き支流また互にこれらに連なり、土地低平、一帶水田をなし米の產多く、また麥・豆・甘藷等を出し、養蠶行はれ、柿・梨の特產あり。國道は中部を東西に過じ、縣道また大垣市より諸方に至り、諸川の水運よく、省線東海道本線、社線參宮電鐵養老線・揖斐線ありて交通利便。古來水利の大なる反面に、氾濫洪水の被害また屢〻あり、住民はこの水害に備へるため所謂輪中を組織せし處にて、大垣（今市となり郡部より分離す）・福東・森部・結の舊四輪中の地に當る。建郡の期は詳ならざるも、天武紀に美濃國安八磨郡の名初めて見え、東大寺文書に御野國味蜂間郡とあり。續紀和銅元年の條に安八郡の人國造千代の妻加是女一時に三人の男子を擧げたるを賞し稻四百束、乳母一人を給せりとみゆ。郡名に磨の字を缺くに至れるは和銅の制地名を二字と定めしに因る。文德實錄仁壽の二年の條に、天長四年藤原高房は美濃介となり、前代の國司の爲と異はざりし治水工事に手を染め大成功を收め、爲に郡民今に至る迄これを德とすとみゆ。其址いま詳ならざるも、古より治水を以て郡の大事となせし事を窺ふに足る。延喜式は安八郡に作り、和名抄は郡珂・大田・物部・安八・服織・長女の六郷を置く。而して河道の變遷當ならざりし爲め郡界も屢〻變化す。中世アハチ・アンパチ兩樣に調ぜしも、今は專らアンパチと調む。大正七年大垣市分離し、次いで隣接の町村も併合せしため、現在郡の區域は大いに縮少す。尙ほ安八郷は郡家の置かれし地にて、凡そ今の神戸町及び北平野・南平野・下宮の諸村に當る。

アンビン　安平　朝鮮慶尙北道義城郡の中部。東は郡の首邑義城面の西、北は安東郡に隣接す、大白山脈中の丘陵性山地に位し、面の中部に鷹峯山（三九六米）あり。渭川の支流南に流れ、その沿岸に平地あり。穀類・綿・麻等を產し牛の放牧亦盛んに行はる。

アンベー　安平面　↓臺南市

アンベージ　安平路山　一に二ッ藤山。木曾山脈丘陵の一峯。長野縣飯田市の西北境上に位し、花崗岩より成り、標高二三六三米。東北尾根は越百山（二六一三米）に、西南尾根は摺古木山（三又山）連なり、東麓は天龍川の支流松川の水源をなす。

アンベツ　安別　↓名好村

アンベン　安邊　【安邊郡】 朝鮮咸鏡南道の十六郡の一。道の東南端を占む。北の一部は日本海に面し北西は德源郡に、東南西の三境は江原道の通川・淮陽・平康・伊川四郡に界す。大白山脈の北部に當り、東境に黃龍山（一二六八米）、西境に白岩山・猪頭峯・南西界に秋愛山（一三三〇米）、南界に風流山等峙つ。南大川（浪城江）は江原道淮陽郡附近に其源を發し三防峽の勝地を作りて北流し北部流域に安邊平野を開く、一等道路京元街道は郡の中央を南北に貫きて南方の淮陽郡淮陽方面と北方の元山府とを連絡し、二等道路江陵街道北部を橫斷して元山府より東方の江原道海岸方面に通ず。總督府鐵道京元線は南大川の河谷に沿ひて北部の平野に出で、その安邊驛（大正二年設置）にて同東海北部線を江原道東岸に通じ同じく東海北部線更に北上して元山府に至る。安邊平野には耕地廣く開け、米穀類の產多く安邊大豆は特に著名なり。米果・松茸・蜂蜜等の產も多く、養蠶・養雞・牧牛も盛んなり。また南部の山地及び北東部の丘陵地には金・銀等を產す。本郡は高句麗の比列忽又は薩城の地新羅と比列郡となり後に朝庭郡と稱せらる。高麗朝に至りて登州と改め、朝宗王の九年登州を安邊都護府となす。地形恰も鶴翼を張るに似たるより鶴城の名を生じ、安邊郡は今鶴城面となる。大正三年行政區劃改定の際に元十一面なりしが廢合を行ひ今七面を包含す。郡廳の所在地安邊は李朝時代の殷盛なりし金剛山の探勝口として又交通產業の要地たるを失はず。

【安邊】 總督府鐵道京元線の一驛（大正二年設置）にして東海北部線の接續點。

【安邊平野】 朝鮮咸鏡南道の南部、安邊郡の北部にある平野。東南西は大白山脈の北端部なる黃龍山（一二六八米）・風流山（一〇二四米）・白岩山等の諸峯に圍繞され、其間を北流する南大川洪涌地に拓けたる平野。北邊は元山府を中心とする永興灣岸の海岸平野に續く。南大川及び其支流による水利良きを以て耕地廣く拓け米・麥・大豆・苹果等の農產物多く安邊大豆は特に著はる。京元街道・鐵道京元線はその西邊を南北に通じ、江陵街道及び鐵道東海北部線中部を東西に走る。鶴城面の鶴城里（安邊邑）はその中心都邑たり。

アンポー　安豐面　朝鮮江原道淮陽郡の北部。北は通川郡に接す。大白山脈に屬する山地に位し、東北境の鷹山（一二三一米）・南境の白庵山（一二四一米）・西境の鐵馬嶺（一〇四七米）・北境の古尹山（一二二五米）等の諸峯によりて圍繞され、北漢江の上源此の東境に發して面內を北西に貫流す。二等道路西隣淮陽面より來り面の中部の化川里を過じて北方に走り通川面に通ず。農林牧畜を主業となし金鑛を產する安豐鑛山あり。

アンポク　安北　↓安樂郡

アンミン　安眠

【安眠面】 朝鮮忠淸南道瑞山郡の南端。淺水灣の西に南北に長き安眠島と其の附近にある看月島・竹島・大也島・沙島等の小島を含む。安眠島は沈降海岸の特徵たる屈曲多き海岸線を有し、島上は略ど赤松の純林を以て蔽はれ、本道中他に比類なき美林をなす。海岸に沿ひて耕地拓け、農牧行はれ、沿海は捕鯨を始め石首魚・太刀魚・鮗等の漁業行はる。首邑は北部の承彥里。

【安眠島】 ↓安眠面

アンモン　暗門瀧　靑森縣陸奥國中津輕郡の西南隅、西目屋村大字河原平の西奥にあり。岩木川の上支暗門川の上源目屋・野津二川の谷に墜る。瀧は三段落にて第一段は約七米、第二段は約六米、第三段は約四米、一段毎に其形勢を異にす。幅約四〇米。雄大壯絕。麓に縣下第一の瀑布なるも、交通不便なれば訪客少なし。

アンヨー　安養　總督府鐵道京釜本線の驛（明治三十八年設置）。朝鮮京畿道始興郡西二面にあり。京城驛より二四粁、山間の一驛なるも京城郊外の行楽地として知らる。驛近傍に果樹園ありて梨・桃・葡萄・果等を出す。また驛より北約二粁の處に安養水泳プールあり、冠岳山西麓の溪流を堰止めて施設せるもの。環境の風致と相俟ちて夏時こゝに至るもの多く朝鮮鐵道局は夏季特に假停車場を設く。本驛はまた冠岳山登攀の基點地として利用せらる。

アンヨージ　安養寺　↓治田村（滋賀縣）

アンラク　安樂

【安樂川】 三重縣にある鈴鹿川の支流。郡の西部野登村西境、鈴鹿山脈の東麓に出で東南に流れ川崎村を經、井田川村にて本流に合す。長さ約一六粁。

【安樂】 省線志布志線の一驛（大正十四年設置）。鹿兒島縣囎唹郡志布志町の大字安樂にあり。

【安樂】 ↓牧園（鹿兒島縣）

アンラクジ　安樂寺　↓南谷村（富山縣）

アンリュー　安立　大阪府東成郡にありし町。大正十四年大阪市に入り住吉區の町名となる。

アンリュー　安龍面　朝鮮京畿道水原郡の東部。北は水原邑に隣接す。面內殆ど平地にて水原平野の一部をなし安城川の一支流面の中央を南流す。農業盛に行はれて米麥・蔬菜類を產し、また牛豚等家畜の飼養多し。一等道路及び總督府鐵道、京釜本線東部をほゞ並行縱貫す。東南邊、豪章面境に近く花山（華山）丘陵あり。松樹鬱蒼と繁茂して盡尙ほ晴く、朝鮮にては稀有の大植林たり。山中に李朝正祖王と其御生父追尊莊祖王の御墓所あり、一名健陵、他名隆陵と稱す。此地は春秋散策の好適地にして遠く京城方面よりも訪客あり。また名刹龍珠寺あり。（龍珠寺）朝鮮佛敎三十一本山の一。李王家の菩提寺。李朝第二十二世正祖王の十四年（寬政二年）、王その父思悼世子のために花山葛陽寺の舊墓に當寺を報し資福の齋社となす。湖南長興郡迦智山寶林寺の僧實鏡堂八道に勸募して王の造營を發く。同二十年（寬政八年）王更に思悼世子追考のため父母恩重經の木・鐵・石の三板本を作らしめ、領議政蔡濟恭これを書し、當寺に納めて今に藏せらる。

アンリョー　安良面　朝鮮全羅南道長興郡の東南部。南は多島海に面し東は寶城郡に隣接す。東部は山地にして西方に傾斜し西邊の平野は耽津江流域平野に續く。農漁相半ばし、農產は米・大豆等、水產に魚類の外海苔・海藻（布海苔）等あり。三等道路海岸の主邑海倉里を中心として北西方の長興面その他の地に通ず。海倉里は好錨地にて沿海漁業の根據地となり、また近海航路の寄航地。

イ

イ　井島　瀬戸内海にある島。香川縣香川郡の北方海上にある直島の東北約四粁に位し、行政上北半は岡山縣兒島郡胸上村に、南半は香川郡直島村に屬す。周圍約九粁。此島は直島の屬島にて兩島とも幕領たり、古くより高原氏直島の庄屋として之を管せしも、文久元年備前國の者、井島は備前のものなりとて幕府に其使用權を願ひ出づ。之に對し直島の當時の庄屋三宅氏幕府に反訴す。然るに幕府の吏、公務多忙なロ實に實地檢分を延ばし居る間に數年を經たり。胸上の者は井島に移住して、自派の立場を有利ならしめんとす。よりて三宅氏再び幕府に訴ふ。この時初めて幕吏の實地檢分あり、島の北半を備前領に、南半を直島領と裁定す。此島は諸種の遺物より考察するに太古より住民ありしごとく、神武天皇の御東征、日本武尊の熊襲征伐、神功皇后の三韓御征伐等の際何れも御寄港あり、島民は進みて之に從軍し忠勤を勵みしと傳ふ。其後保元の亂後に、崇德上皇讃岐に配流の際、一時村内の泊浦の假屋に御住ひあらせらるといふ。

イ　伊島　紀伊水道にある島。古名を揚島といひ、現在は德島縣那賀郡椿村の主部を成し、龍生田崎の東方海上約六粁に浮ぶ。周圍約一六粁。島民は專ら漁業採藻に從事す。島の尖峰を觀音山（約一二〇米）といひ頂に一樹圃あり。其尾嶺北東に延びて野逢崎となる。西方に櫛子島・前島等あり、其間に一開灣ありて北風なき時は小船を泊し得。龍生田崎との間は危礁散在し、舟行甚だ危險なり。島内に怪岩奇石多く狡通岩・御成瀧・潮吹・鮑石等の勝景あり、四望は快闊にして風光明媚なるを以て、近年暑を避けて來り遊ぶ者絶なからず。

イーアイ　飯合川　奈良市の東南を流れる川。俗に伊夜川といふ。高圓山の南より出で大安寺前にて能登川と落合ひ、更に西流して佐保川に入る。

イーエ　飯戸岡　播磨風土記・宍粟郡の條に見ゆる地名。いま何れの地に當るや詳ならず。大汝神の飲事をせられし故に飯戸といふと。播磨風土記「飯戸岡、占ニ國之神饗ニ於此處一、故曰ニ飯戸阜一、阜形亦似ニ檜・箕・竈一」

イーオカ　飯岡　【飯岡村】岩手縣陸中國栗波郡の西北隅を占む。北部と西部は岩手郡と境し南は燻山村に東は見前村に接す。西境には箭ヶ森山（八六六米）峙ち、村の西半はその東麓に當る丘陵地なるも、東半は地麻ね低平、北西隅の岩手郡太田村より來る大麻麦溝の灌漑により沃野拓け、米・麥・馬鈴薯・煙草を產す。本村は交通便利ならず。東北本線仙北町驛に七粁餘にして遠す。村内の飯岡館址は、文治五年源頼朝の藤原泰衡を討ちしとき飯岡某を此處に置きて儀護すといふ。村名之に因るか。傳に大館址・小館址・萬福院址あり。大麻妻溝は岩手郡太田村にて雫石川を堰入れ、分流して飯岡・見前・燻山・德田の各村の田に灌ぐ、その利益する所廣大なり。本村の農民鎌津田甚六は常に岩手郡の南より紫波郡に亘り、其土地肯腴なるも多く水田にして水田少なきを慨き、岩手郡上太田村（いま太田村の大字）に至りて雫石川を檢見するに、巖岩嶮を以てす、甚六これに隧道を作り以て水を引かんとし、落主に建白して許され、慶安二年に工を起し同四年成る。これ即ち大麻妻溝なり。

イーカ　飯岡　【飯岡村】岩手縣陸中國栗波郡の西北隅を占む。北部と西部は岩手郡と境し南は燻山村に東は見前村に接す。西境には箭ヶ森山（八六六米）峙ち、村の西半はその東麓に當る丘陵地なるも、東半は地麻ね低平、北西隅の岩手郡太田村より來る大麻麦溝の灌漑により沃野拓け、米・麥・馬鈴薯・煙草を產す。本村は交通便利ならず。東北本線仙北町驛に七粁餘にして遠す。村内の飯岡館址は、文治五年源頼朝の藤原泰衡を討ちしとき飯岡某を此處に置きて儀護すといふ。村名之に因るか。傳に大館址・小館址・萬福院址あり。大麻妻溝は岩手郡太田村にて雫石川を堰入れ、分流して飯岡・見前・燻山・德田の各村の田に灌ぐ、その利益する所廣大なり。本村の農民鎌津田甚六は常に岩手郡の南より紫波郡に亘り、其土地肯腴なるも多く水田にして水田少なきを慨き、岩手郡上太田村（いま太田村の大字）に至りて雫石川を檢見するに、巖岩嶮を以てす、甚六これに隧道を作り以て水を引かんとし、落主に建白して許され、慶安二年に工を起し同四年成る。これ即ち大麻妻溝なり。

イーカ　飯岡　【飯岡村】岩手縣陸中國栗波郡の西北隅を占む。北部と西部は岩手郡と境し南は燻山村に東は見前村に接す。西境には箭ヶ森山（八六六米）峙ち、村の西半はその東麓に當る丘陵地なるも、東半は地麻ね低平、北西隅の岩手郡太田村より來る大麻麦溝の灌漑により沃野拓け、米・麥・馬鈴薯・煙草を產す。本村は交通便利ならず。東北本線仙北町驛に七粁餘にして遠す。村内の飯岡館址は、文治五年源頼朝の藤原泰衡を討ちしとき飯岡某を此處に置きて儀護すといふ。村名之に因るか。傳に大館址・小館址・萬福院址あり。大麻妻溝は岩手郡太田村にて雫石川を堰入れ、分流して飯岡・見前・燻山・德田の各村の田に灌ぐ、その利益する所廣大なり。本村の農民鎌津田甚六は常に岩手郡の南より紫波郡に亘り、其土地肯腴なるも多く水田にして水田少なきを慨き、岩手郡上太田村（いま太田村の大字）に至りて雫石川を檢見するに、巖岩嶮を以てす、甚六これに隧道を作り以て水を引かんとし、落主に建白して許され、慶安二年に工を起し同四年成る。これ即ち大麻妻溝なり。

イーカ　飯岡　【飯岡村】岩手縣陸中國栗波郡の西北隅を占む。北部と西部は岩手郡と境し南は燻山村に東は見前村に接す。西境には箭ヶ森山（八六六米）峙ち、村の西半はその東麓に當る丘陵地なるも、東半は地麻ね低平、北西隅の岩手郡太田村より來る大麻麦溝の灌漑により沃野拓け、米・麥・馬鈴薯・煙草を產す。本村は交通便利ならず。東北本線仙北町驛に七粁餘にして遠す。村内の飯岡館址は、文治五年源頼朝の藤原泰衡を討ちしとき飯岡某を此處に置きて儀護すといふ。村名之に因るか。傳に大館址・小館址・萬福院址あり。大麻妻溝は岩手郡太田村にて雫石川を堰入れ、分流して飯岡・見前・燻山・德田の各村の田に灌ぐ、その利益する所廣大なり。本村の農民鎌津田甚六は常に岩手郡の南より紫波郡に亘り、其土地肯腴なるも多く水田にして水田少なきを慨き、岩手郡上太田村（いま太田村の大字）に至りて雫石川を檢見するに、巖岩嶮を以てす、甚六これに隧道を作り以て水を引かんとし、落主に建白して許され、慶安二年に工を起し同四年成る。これ即ち大麻妻溝なり。

イーカ　飯岡　【飯岡村】岩手縣陸中國栗波郡の西北隅を占む。北部と西部は岩手郡と境し南は燻山村に東は見前村に接す。西境には箭ヶ森山（八六六米）峙ち、村の西半はその東麓に當る丘陵地なるも、東半は地麻ね低平、北西隅の岩手郡太田村より來る大麻麦溝の灌漑により沃野拓け、米・麥・馬鈴薯・煙草を產す。本村は交通便利ならず。東北本線仙北町驛に七粁餘にして遠す。村内の飯岡館址は、文治五年源頼朝の藤原泰衡を討ちしとき飯岡某を此處に置きて儀護すといふ。村名之に因るか。傳に大館址・小館址・萬福院址あり。大麻妻溝は岩手郡太田村にて雫石川を堰入れ、分流して飯岡・見前・燻山・德田の各村の田に灌ぐ、その利益する所廣大なり。本村の農民鎌津田甚六は常に岩手郡の南より紫波郡に亘り、其土地肯腴なるも多く水田にして水田少なきを慨き、岩手郡上太田村（いま太田村の大字）に至りて雫石川を檢見するに、巖岩嶮を以てす、甚六これに隧道を作り以て水を引かんとし、落主に建白して許され、慶安二年に工を起し同四年成る。これ即ち大麻妻溝なり。

イーカ　飯岡　【飯岡村】岩手縣陸中國栗波郡の西北隅を占む。北部と西部は岩手郡と境し南は燻山村に東は見前村に接す。西境には箭ヶ森山（八六六米）峙ち、村の西半はその東麓に當る丘陵地なるも、東半は地麻ね低平、北西隅の岩手郡太田村より來る大麻麦溝の灌漑により沃野拓け、米・麥・馬鈴薯・煙草を產す。本村は交通便利ならず。東北本線仙北町驛に七粁餘にして遠す。村内の飯岡館址は、文治五年源頼朝の藤原泰衡を討ちしとき飯岡某を此處に置きて儀護すといふ。村名之に因るか。傳に大館址・小館址・萬福院址あり。大麻妻溝は岩手郡太田村にて雫石川を堰入れ、分流して飯岡・見前・燻山・德田の各村の田に灌ぐ、その利益する所廣大なり。本村の農民鎌津田甚六は常に岩手郡の南より紫波郡に亘り、其土地肯腴なるも多く水田にして水田少なきを慨き、岩手郡上太田村（いま太田村の大字）に至りて雫石川を檢見するに、巖岩嶮を以てす、甚六これに隧道を作り以て水を引かんとし、落主に建白して許され、慶安二年に工を起し同四年成る。これ即ち大麻妻溝なり。

イーアイ　飯合川　奈良市の東南を流れる川。俗に伊夜川といふ。高圓山の南より出で大安寺前にて能登川と落合ひ、更に西流して佐保川に入る。

イーエ　飯戸岡　播磨風土記・宍粟郡の條に見ゆる地名。いま何れの地に當るや詳ならず。大汝神の飲事をせられし故に飯戸といふと。播磨風土記「飯戸岡、占ニ國之神饗ニ於此處一、故曰ニ飯戸阜一、阜形亦似ニ檜・箕・竈一」

イーオカ　飯岡　【飯岡村】岩手縣陸中國栗波郡の西北隅を占む。北部と西部は岩手郡と境し南は燻山村に東は見前村に接す。西境には箭ヶ森山（八六六米）峙ち、村の西半はその東麓に當る丘陵地なるも、東半は地麻ね低平、北西隅の岩手郡太田村より來る大麻麦溝の灌漑により沃野拓け、米・麥・馬鈴薯・煙草を產す。本村は交通便利ならず。東北本線仙北町驛に七粁餘にして遠す。村内の飯岡館址は、文治五年源頼朝の藤原泰衡を討ちしとき飯岡某を此處に置きて儀護すといふ。村名之に因るか。傳に大館址・小館址・萬福院址あり。大麻妻溝は岩手郡太田村にて雫石川を堰入れ、分流して飯岡・見前・燻山・德田の各村の田に灌ぐ、その利益する所廣大なり。本村の農民鎌津田甚六は常に岩手郡の南より紫波郡に亘り、其土地肯腴なるも多く水田にして水田少なきを慨き、岩手郡上太田村（いま太田村の大字）に至りて雫石川を檢見するに、巖岩嶮を以てす、甚六これに隧道を作り以て水を引かんとし、落主に建白して許され、慶安二年に工を起し同四年成る。これ即ち大麻妻溝なり。

【飯岡村】　千葉縣下總國海上郡の中部。東北に丘陵を繞らし南は太平洋に面す。九十九里濱の北に盡くる所に位し、縣道は本町のほゞ中央を東西に走り、一路東は銚子に通じ、西は旭町に通ず。省線房總本線飯岡驛（明治三十年設置）は本町の西北約四粁半の嚶鳴村の地籍にあり。岬角に永井崎・行部岬あり、是より南、大東崎に至る間を九十九里濱といふ。市街地を距る數町にして海水浴場あり、眺望絶佳、避暑・避寒に適す。また漁業の中心地として知らる。本町は和名抄の海上郡横根郷の地にして、大字横根はその遺稱なるべし。横根は祖武平氏、千葉東氏の族、海上次郎胤方の孫、教胤が横根郷主と稱して居住せし地、また天保水滸傳中に仁侠の名を天下に轟かせし下總國飯岡助五郎は此地の人とす。（玉崎神社）郷社。祭神、玉依姫命。社傳に景行天皇四十年、日本武尊御東征の際、海上の難に紀弟橘姫を失ひ給ひ、御上陸後御船印を留め給ふとあり。或は正親町天皇永祿五年に、里見義頼、上總國（長生郡）一宮城主内藤久長と謀あり、義頼、土岐組春・正木盛賢等七千餘人をして之を攻めしむ。時に一宮國幣中社玉前神社の神官等久長に與し、神器を奉じ一宮城に據守すること數箇月なりしも城遂に陷る。神官等は神器を擁し、一族なる海上郡々司海上忠常の許に到らんとして當地に來る。當社はその際の建立なりといふ。例祭、陰曆四月四日。

イーカ　飯岡崎　【飯岡村】千葉縣下總國海上郡にある岬。飯岡町南岸の突出點。志に長生郡大東崎と相對し、其の間は一大弓狀灣をなす。その海岸は所謂る九十九里濱なり。大東岬より弓狀をなし來りし九十九里濱は飯岡崎以東は銚子に至る。海岸の狀態一變し峭壁をなす。

【飯岡村】　岡山縣美作國勝田郡の南部。吉井川の上支倉敷川と津山川に挾まれ、また勝田・英田・和氣・赤磐・久米五郡の交會點に位す。地勢北は丘陵地なるも他は耕地拓け、主產物に米・藺等あり。社線片山鐵道の美作飯岡・吉ヶ原・横原（何れも昭和六年設置）の三驛を置く。横原山あり。鐵區は西隣の南和氣・久米郡吉岡の二村にも亘り、硫化鐵鑛・沈澱銅を產す。此地は和名抄の飯岡郷の地、飯岡郷は刊本に調を岡くも高山寺本には以保加と訓註す。（本經寺）大字吉ヶ原にあり。顯本法華宗。永昌山と號す。往古は桂昌寺と稱せしも、のち久成寺・本門經王寺等の寺號を經て現在號に至る。

【飯岡村】　愛媛縣伊豫國新居郡の北部。西條町の東に隣接す。南部はやゝ丘陵地なるも、北部一面は土地低平にて室川西北流し水田拓け、米・藺・麥を產す。國道は豫讃街道中央を東西に走り、省線豫讃本線ほゞ之に并行す。大字野口の往至森寺の門外西側に金木犀の瓦樹あり。樹の南側は石壁に密接し、北側に石壁を繞らす。根元には盛土を施し其周圍約三米、樹高約一五米。花季には香氣約二粁の遠きに達するといふ。往至森寺の金木犀として指定天然記念物たり。此地は和名抄の新居郡島山郷の内か。中世は新居西條庄の屬地にして、江戸末期には西條藩の支配下たり。村名は此地に飯積神社あり、西して地勢岡狀を成せるにより飯岡と名づけしものといふ。

イーグラ　飯倉　東京市麻布區の町名にて麻布區六本木以東芝公園に至る。往昔、伊勢の神供貢稻を納むる屯倉を置きし處なるゆゑ、此地名ありといふ（新編武藏風土記）。東鑑・壽永三年五月武衾被ゞ來ゞ寄附ニ兩村於二所太神宮一、件兩所者、内宮御分、武藏國飯倉御厨、被ゞ御ニ付當宮一。

イーザカ　飯坂　【飯坂町】福島縣岩代國信夫郡の東北端。阿武隈川支流の摺上川の中流に臨み、南部は田圃拓け、小市街地をなし、對岸の伊達郡湯野村湯野と共に溫泉町として知らる。南方福島市へ約一〇粁、東方伊達驛へ約三粁、社線福島電鐵の飯坂溫泉驛あり。米・藺の產あり。鐵道省療養所・仙臺陸軍病院分院あり。對岸湯野村へは鐵鋼を以て懸垂して架せる十綱橋あり。往古は兩岸に瓦木を建てこれに藤綱十條を曳き、綱上に板を架して橋とせり、何れの頃よりか兩岸に大綱を張り、船を浮べ綱を操り渡せしも、明治七年、東京城（今の宮城）吹上御苑の釣橋を模倣して作れるもの。千載・一二「陸奥の十綱の橋に縫る綱の絶えずもくるといひわたるかな　親隆」新續古今・一五「おのつからくると見し間に陸奥の十綱のはしの中は絶えにき　爲明」（大鳥城址）同町の館山（一名丸山）にあり。往昔、信夫莊司佐藤基治の築きし大鳥城の址と傳へらる。附近よりは古瓦の殘片發見さる。西北は群巒を廻らし、東南は平野に臨み、摺上川の清流を帶び頗る險要の地にて風景また好し。いま鹿公園たり。（飯坂溫泉）町の北端に位す。福島驛の北二粁、伊達驛よりは西三粁半、共に交通の便あり。鯖湖湯・摺上湯・波來湯・瀧ノ湯・赤川湯・赤川端湯・金瓶湯・天王寺湯の八湯あり。古はこれ等を總稱して鯖湖湯といへり。無色透明なるアルカリ性の弱鹽類泉。近年ラヂウム・エマナチオンを含有せることを發見すといふ。上古、日本武尊の東征の砌、この溫泉に浴して御病を平癒し給ひしと傳へらる。奥の柳道「月の輪のわたしを越えて瀬の上と云ふ宿に出づ、佐藤庄司が舊跡は左の山際一里半ばかりにあり、飯塚の里鯖野と聞きて尋ね〳〵行くに丸山といふに尋ねあたる」同「その夜飯塚に宿る、溫泉あれば湯に入り宿をかるに土座に蓆を敷きてあやしき貧家なり……なほ夜の餘波心すゝまず馬かりて桑折の驛に出る」飯塚とあるは飯坂の舊名ならん、瀬の上は、飯坂町の東南なる瀬上町、鯖野は南隣平野村の字に井佐野あり、舊名を佐場野といふ之なり。（八幡神社）字上飯坂に鎮座。郷社。祭神、譽田別命・神功皇后・玉依姫命。創立年代は未詳なるも、愛和年間又は壽永年間佐藤氏の勸請と傳ふ。爾來近郷庶民の尊信篤し。（天王寺）臨濟宗妙心寺派。米澤市法泉寺末にして、法螢國師の開基。天正三年春齋西堂これを中興し、飯坂布近將監宗康の位牌を安置す。境内に香積觀音堂あり。境内藥師堂の後に鎌倉時代の供養碑三基あり。此裏山より嘗て承安元年の銘文ある銅製經筒發見せられ、之と同時に奏三箇發掘さる。

【飯坂村】福島縣岩代國伊達郡の東南部。川俣町の東に隣り、東は花塚山（九一九米）の北麓にて相馬郡と界す。廣瀬川は村の西北部を北流す。川俣町より相馬郡原町へ至る道路は村を東西に通過す。川俣町と共に羽二重機業盛なり。同村は川俣陣屋と稱へ寛文より慶應四年まで幕府の代官所のありし所。明治九年南隣小綱木村と共に村の一部を割きて川俣町へ編入。其後小綱木・大綱木の二村と共に組合村たりしも同四十四年分離獨立す。

イーシ　飯土山　新潟縣越後國南魚沼郡の南西部。湯澤村の東北方に位し、中之島・石打・土樽・神位四村の境界に跨る。全山石英角閃石・安山岩より成る。中之島村の東隣上田村方面より見れば山容、富士に似たるより一に上田富士とも呼ばる。標高一一一二米。その東斜面の山路を奥湯地越といひ、また東麓を信濃川支流魚野川北流す。南西麓には湯本溫泉湧く。

イーシ　飯石　【飯石郡】島根縣十六郡の一。出雲國の西南部を占め縣のほゞ中部に位す。北は益川郡に、東は大原・仁多の二郡に接し、南は中國山脈の山地を以て廣島縣備後國比婆・雙三の二郡に隣り、西は石見國邑智・安濃二郡に境す。面積約五三〇方粁にして出雲國第一の大郡。地勢は全郡概ね山塊にて南部に高く北するに從ひて漸く低く、南境に鋼巢山・六日迯山（一二七三米）・大萬木山・琴引山及び女龜山等あ

れど中國山脈の特徴として峻險ならず。郡の西境に三瓶火山、中部に八重山火山あり、其北に矢ノ峯山・島屋ヶ丸山・神馬山等あり。河川の主なるものは斐伊川・三刀屋川・神戸川にして、斐伊川は郡の東境大原郡の界を北流し、三刀屋川は八重山附近に發して東北すること約三六粁にして斐伊川本流に會し、下流に三刀屋盆地の沃野を作り、神戸川は郡の西南隅に發し北流して簸川郡に入る。また地形上、郡の中部に位する八重山より餅に兩分し、西南を奥飯石、東北を口飯石といふ。奥飯石は出雲の西南邊隅の地にして石見・備後に挾まれ之と關係深く其言語も口飯石と趣を異にし、口飯石も亦三刀屋川流域と斐伊川流域とにては自ら別に一區域をなす。廣島街道、三刀屋川に沿うて來り奥飯石に入り郡の西南隅赤名村を經て廣島縣雙三郡に向ひ、また赤名町より石見國に通ずる街道あれど鐵道未だ通ぜず。郡民は概ね農耕に從事した山地多き故、鐵・鋼・薪炭の產多く、牧牛も亦旺盛、其他抄紙業も行はる。出雲風土記は飯石郡に熊谷・三屋・飯石・多禰・須佐・波多・來島の七郷あり、和名抄は伊比之と訓じ風土記の七郷の外に田井・草原の二郷あり、之は三屋郷より草原郷を、多禰郷より田井郷を分置せしもの。郡家は多禰郷にあり、舊郡役所の所在地の掛合村は舊多禰郷の内にて、古の郡家のありし處。出雲風土記・飯石郡「所以號飯石者、飯石郷中、伊昆志都幣命坐、故云飯石」。

【飯石村】島根縣出雲國飯石郡の東北部。北は三刀屋町に接し東は斐伊川を以て大原郡に境し南は田井村中野村に隣り、其界に高瀬山（四四六米）あり、斐伊川の沿岸及び村の中部を北流する飯石川の兩岸に多少の平地あれど、他は概ね山地。主產物は米・麥・大豆・木炭・繭・製糸にして和紙も特產す。飯石川は中野村と吉田村の界の邊なる佐久礼山に發し、本村中部を北流し三刀屋川に注ぐ小流にて、出雲風土記に「飯石小川、源出郡家正東一十二里佐久礼山、北流入三刀屋川、有鰍」とある飯石小川なるべし。本村の地は隣村中野村と共に出雲風土記・和名抄に見ゆる飯石郷の地にて、風土記によれば郡家の東十二里、伊昆志都幣命の天降りしため伊昆志と名付け、神龜三年飯石と改むとある。いま飯石村に縣社飯石神社あり、伊昆志都幣命を祀る。中世尼子氏は毛利氏との間に屢〻蹤あり、此城も毛利氏によつて落城せしめられしものなるべし（恐らくは義久の時毛利の將吉川元春・小早川隆景等に攻落されしか）。出雲風土記・飯石郡「飯石郷、郡家正東一十二里、伊昆志都幣命、天降坐處、故云伊昆志（神龜三年改字飯石）」〔飯石神社〕大字多久和に鎮座。縣社。祭神伊昆志都幣命。此神は大國主命に獻國を勸めし正使たりし神にて、此地に土著し飯石郡開拓の產土神となれるもの。この社は出雲風土記に飯石社と見え、延喜式内の小社に列せらる。上古より郡の總社たり、歷代國守の尊崇篤し。例祭十一月十五日。〔壽福寺〕大字多久和にあり。曹洞宗。飯石山と號す。本尊阿彌陀如來は觀音堂に安置する觀世音と共に春日の作といふ。當國三十三箇所十二番の札所。御詠歌「壽福寺へまゐればむかういひしの富み榮えゆくいまのもろ人」〔雲見ノ瀧〕指定名勝。飯石川の上流にあり、峰雄二湯あり。湯布の懸る花崗岩丘は互に直角をなせる東西及南北の二方向に極めて明晰なる節理發達す。雄瀧は東西の節理面に懸り高約二〇米、雌瀧は其直下にて南北の節理面に懸りて高さ稍〻劣り前者と方向を異にすること九〇度、雌瀧の下流は南北の方向を取りて北流し、其右岸に高一〇〇米に及ぶ畳風岩の大絶壁あり、これ赤花崗石の直立節理に沿ひて生じたるもの、湯布と共に節理と水蝕との關係を極めて明確に示せる好個の天然資料たり。

イージマ　飯島

【飯島村】秋田縣羽後國南秋田郡の西南部。土崎港町の北に續き、北隅は下新城村、東界は外旭日川村、西は日本海に面す。國道海に沿ひて砂丘發達し荒地をなすも、中部以東は新城川と其支流の劃す平地にて、東南部は低濕の沼田をなし米を主產物とす。羽州街道・奥羽本線南北に通ず。此地は和名抄秋田郡高泉郷の内。

【飯島村】茨城縣下總國猿島郡の東部。東は結城郡菅原村に隣り、その間、飯沼（周圍約二八粁）を挾む。西南方にある菅生沼より來り飯沼を通ずる飯沼川は本村を南北流し、土地低卑にして沼地多し。主產物米・麥・蠶絲・大小豆。本村は和名抄鹿島郡伊島郷の地にして、中世に吉田清幹の子成幹地頭職に補せられて鹿島氏を稱し、源頼朝の時に成幹の子政幹は鹿島社の總追捕使となり、子孫繁榮し、天正の末に至り郡司を兼ぬ。當時の鹿島郡は郷十八を管する大郡なりしため南條・北條に分け、本村は北條に屬す。村名は此地の飯沼の沿岸なれば飯沼の飯と猿島郡の島とを採り飯島村と命名す。

【飯島村】長野縣信濃國上伊那郡の南部。木曾山脈の東麓、伊那谷の中部に位し、天龍川上流右岸の地を占む。西境には木曾山脈の前駒ヶ岳（二八六四米）・南駒ヶ岳（二八四二米）・越百山（二六一三米）等の峻嶺南北に連りて、西筑摩郡大桑村に界し、東側は山麓次第に低下して天然河岸に臺地を成し桑園拓け、養蚕發達す。北は中田切川、南は與田切川によりて赤穂村と七久保村に接す。村の東部を三州街道・社線伊那電鐵共に南北に通じ、後者は田切・伊那赤坂・伊那本郷・飯島（共に大正七年設置）の四驛を置く。西部は森林深く駒ヶ岳御料林に屬し、東部に米麥を產し、養蚕行はる。此地より清和源氏、片切氏の族飯島氏出で、江戸時代（寛文十二年）には駿府代官の出張陣屋ありて、信濃に飯在せる幕領（一萬石）を支配し、以て明治維新に至る。なほ近年本村より磨製石鏃を出せしことは此地の古代研究に注意すべきことゝす。

イーシロ　邑代　遠江國佐野郡の郷。和名抄は伊比之呂と訓す。此地は今の靜岡縣小笠郡櫛木村・和田岡村の邊に當る。郷名邑代の義は飯代にして、大神宮の神封なるより斯く名附くといふ。櫛木村に家代と稱ぜる地あり、蓋し郷名の遺稱なるべし。

イーズカ　飯塚

【飯塚村】山形縣羽前國南村山郡の北部。山形市の西境に接し、南は南沼原村、北は椹澤村に隣る。山形盆地の南西部にて最上川の支流須川西境を北流し、土地平坦、水田・桑畑あり米・繭を產す。もと山形市の西に連なる城西村の一字なりしも明治二十二年分離して飯塚村を建つ。

【飯塚】岩塚村（新潟縣）

【飯塚】正院村（石川縣）

【飯塚市】福岡縣筑前國にある炭坑都市。嘉穂平野の中部に位し、遠く南方に鬱ノ山・古處山・三郡山等を望む。郡の東南境嘉麻峠より來る嘉麻川と、その穗波川は本市の北部にて合流し、遠賀川となりて北流す。縣道は東方の京都郡行橋町、西南方の久留米市、西方の福岡市、北方の直方市に通ず。江戸時代には諸侯江戸參勤交代の要路に當り、筑前六宿の一たりし處。鐵道は省線筑豐本線南北に走り、飯塚驛（明治二十六年設置）・鯰田驛・新飯塚驛（明治三十五年設置）・芳雄驛・鯰田炭坑驛（貨物）を置き、新飯塚驛よりは漆生線を分岐して上三緒驛（明治三十五年設置）を置き、飯塚驛よりは上山田線を分岐す。本市は筑豐炭田の中部に位し、地下には數層の石炭を埋藏し、鯰田・芳雄・愛宕等幾多の大炭坑を有し採掘盛んに行はれ、年產額六百萬圓に上る。また石鹸製造その他の工業盛んにして工場多く、生產年額百五十萬圓を超ゆ。中學校・高等女學等あり。また大字鯰田に鯰田火力發電所（出力一萬キロワット）あり。本市は和名抄の穗浪郡鹿田郷の地、字宮田はその遺稱。市名飯塚の起原に就いては、神功皇后三韓より御凱旋の砌、蹕を嘉穗郡大分村に駐めて從軍兵士の功勞を賞し、各々を郷里に還させ給ひ皇后も亦帝都に還りまさせる時兵士等騎隊して何時また天孫を拜し奉らんと深く歎き慕ひしより、イツカ（飯塚）の里と名づけしといひ、一說には七百數十年前、隣村飯西村に明星寺建立の際、此地にて飯を炊きしに其飯は積りて、恰も塚の如し、依りて飯塚村と名づくともいふ。江戸時代には筑前六宿の一に定められ、代官所その他の役所設けられ、旅館商店軒を並べて市街を形成し、商工業また殷盛に赴く。幕末に至り福岡藩六大區の調所を置き、明治十一年には嘉麻・穗波の二郡役所の所在地となり、同二十二年飯塚・德前・菰田の三村を合して飯塚町と改む。明治初年頃より鑛區したる石炭礦業は同十五年の鯰田炭坑開鑿以來數多の大炭山勃興し、町勢急に進展し、同四十二年隣村笠松村を併合す。爾後鐵道の發達と共に地理的並に地勢的に惠まれ益々發展し、昭和七年市制を布く。今や嘉穗郡二十餘萬民衆の商工業並に經濟上の中心となり、筑豐炭田地方有數の都市たる榮價を認めらるに至る。〔納組八幡宮〕本市の飯塚に鎮座。縣社。祭神、應神天皇・仲哀天皇・神功皇后・武内宿禰・天神地祇諸神。社傳に據れば仲哀天皇九年神功皇后三韓より御凱陣ありて當地に來り給ひ、翌年皇后大和に發軔し給ふの時、納組ノ森に於て群臣と共に別離を惜しみ給ふ。此時皇后此地に齋壇を築き給ひ、遙組天神地祇の諸神を勸請し給へるに創まるといふ。例祭九月二十九日・三十日。〔眞福寺〕本市の飯塚にあり。浮土宗。松月山と號す。開山は本宗第二祖大紹正宗國師。天正八年兵燹に罹り沿革不明。慶長十年章譽上人之を再興し、現堂は明治二十九年法譽宣暢の重建になる。〔萬古洞〕本市の飯塚西町にある洞窟。入口は狹少なれど奥は十疊敷位。往古蓄族首長の住みし處と傳へ、先年洞窟中より金環數箇を發見す。〔勝負坂〕本市の鯰田と立岩の境にあり。神武天皇御東征の途次、鹿毛馬（今の嘉穗郡頴田村）に駐まらせ給ひ、新たに軍容を整へ沼田の丘より川島ノ里に至らせ給ひしに、敵徒供に蜂起して皇軍の道路を阻み徹戰起りしも、遂に之を誅滅し給ふ。其時大いに皇軍を助けたる手力雄命を祀れる官祠ありと伝ふ。〔土師山〕飯塚西町と二瀬町との境にあり。元龜天正の頃、大友氏の秋月氏と大いに戰ひ戰死せる處。戰死將士の古墳多く散在すと云へど今は其邊一帶住宅地化す。〔勝守公園〕市の西北に位する小丘。園内到る所懷古の史料に富む。嘉穗盆地の眺望を極め、東は遠く福知山を望み、西は龍王山・三郡山の雄姿を仰ぐ。丘麓一帶は松樹榮え、春は櫻花この間を點綴して風光頗るよし。脚下に池ありて滿々たる碧水を湛へ、短艇こゝに浮ぶ。實に炭都第一の行樂地たり。

【飯塚山】宮崎縣東臼杵郡の東北部。北浦村と南浦村の境界にあり。標高五七七米。東南に日向灘を望見し、風光佳し。東方陣ノ峰（四三一米）との間の山路を古江越といひ、北浦村大字古江より村の中央部下塚川谷の歌糸・佛越へ出づる通路ななす。

イーズナ　飯綱　↓飯縄山

イーズミ　飯泉　↓豐川村（神奈川縣）

イーズメ　飯詰

【飯詰村】青森縣陸奥國北津輕郡の南部。松島村を挾みて、五所川原町の東北に位す。同町まで約四粁。東部は津輕山脈南

北に走り、慶ノ岳（四七四米）・馬神山（五四九米）等連なり、西麓は傾斜緩き林地をなす。東境に發する飯詰・大園の二川相合し、村の西部にて西北流し岩木川に入る。村の西部は津軽平野の東部に當り、水田開く。社線津軽鐵道は津軽飯詰・下岩崎（共に昭和七年設置）の二驛を置く。米・林檎を產す。名勝に二ツ森・不動瀧あり。〔八幡宮〕大字飯詰に鎮座。郷社。祭神、誉田別尊。創立年代は詳かならざるも、寶曆元年愛宕堂建立に際し、八幡宮を相殿に遷祀せしも、天保十五年社殿を新築して鎮祭し、爾後、一郷の產土神として村民の尊信を蒐む。例祭、五月十五日。

【飯詰村】 秋田縣刺後國仙北郡の南部。東及び南は金澤町。西は藤木村・金澤西根村に接し北は六郷町に境す。南部に大森山（一二一米）と西沼ある他は耕地なな、米・藺・麻を產す。省線奥羽本線の飯詰（明治三十八年設置・後三年（大正十年設置）の二驛を置く。〔西沼竪穴住居址〕後三年驛の東約一粁、大森山南麓、西沼の西岸にあり。住居址は方形の平面にて石器・土器を出土す。

イーソ　飯曾村　編鳥縣磐城國相馬郡の西部。阿武隈山地の中央部に位し西境は花塚山（九一九米）・犹石山等によりて伊達郡飯坂村小綱木村・安達郡山木屋村に堺す。南部は新田川の上支飯曾川の谷、北部は他の一支飯曾川の流域にて耕地拓く。交通不便。野史に「天正十七年新館守將四條但馬、附：伊達氏」、其弟織部在：飯曾」とあり。新館は本村の東北隅なる新館村にありしもの、飯曾とも飯土江にも作り、比曾と合し飯曾村を作る、村名は各一字をとりて名づけしもの。

イータ　飯田

【飯田】 芳野村（芙蓉縣）

【飯田】 北郡珂村（芙蓉縣）

【飯田】 江戸時代の奥州街道の宿驛。野木宿と小山宿との間。今の栃木縣下都賀郡間々田町に當る。

【飯田川】 江戸時代に於ける江戸川下流の稱。江戸川は東京府北多摩郡井之頭池の餘水にて東流して江戸に入り、今の飯田橋邊に至り東南流して平川に入り、江戸城の外濠をなして日本橋方面に通ず。而して飯田川はその飯田坂（今の九段中坂）下附近を稱せるもの。のち神田川に舟通ずるに至り此川は堀留まで埋められたるも、明治年間、再びこれを掘りて外濠と神田川とを連絡せしむ。

【飯田坂】 江戸の田安御門外、飯田町の上の坂をいふ。九段坂の北に隣り、また中坂とも稱す。九段坂と餅之木坂の中間にあるを以て此名あり。もと神田方面より田安邊番町に登る道路なりしも、近年俎橋の西方なる右折し、九段坂とほゞ並行に登り九段上に至る。

【飯田】 相模國にありし地名。いま中田・和泉等と合し、神奈川縣鎌倉郡中和田村となる。もとは高座郡の領域なりしものゝ如く、のち鎌倉郡の管轄となる。源平盛衰記に相模國の住人飯田三郎家能とあるはこの地名を負へる豪族の一人なるべし。鶴岡我是院文書に、飯田三郎能信あり、本郷の地頭職たり。

【飯田】 相模國足柄下郡にありし郷。和名抄は訓を岡くも恐らく伊比多と訓ずべきもの。此地名は往古大飯田を修し、大饗祭にて用ふる春米を搗めし故に起りしものならん。中世は成田莊に屬し、今の神奈川縣足柄下郡足柄村の地。足柄村の大字に飯田岡あり、郷名の遺稱とす。

【飯田川】 新潟縣越後國中頸城・東頸城二郡を流れる川。東頸城郡と長野縣下水内郡との境なる牧峠の北側に發し西北流して、三方ヶ岳（一一三九米）に源を發する保倉川と、中頸城郡諏訪村の北部にて合し、西流して朝日池の餘水を大潟村の西端にて入れ、直江津に至り海に注ぐ。流程約二八粁。

【飯田町】 石川縣能登國珠洲郡の東北部。若山川の谿谷を占め、南東は富山灣に面す。本郡の中心地にて、舊郡役所のありし處。いま飯田警察署・飯田中學校・金澤地方專賣局飯田出張所等の官衙學校あり。町内概ね丘陵にて北境地に馬緣峠・鞍坪岳（三六六米）、南境に寶立山（四六九米）、西界に八太郎峠（二二四米）あり。西は鳳至郡に境す。中部若山川の流域に僅に田畑拓け米・藺の產あり。また南部海岸には漁業行はる。縣道はほゞ若山川に沿ひ輪島町方面に通じ、また南方七尾方面に至るものは富山灣岸の長濱浦を南下す。この邊は（飯田町より南方本郎村に至る間）海上遙かに越中立山を望み、風景絶佳の地にして避暑に適す。此地は夙くより開け、江戸時代には既に日本海を往來する和船の寄船港として繁昌せしも、今は其名殘なも留めず。本町は和名抄、珠洲郡若倭郷の内にて、明治九年飯田村ほか六箇村とともに戸長役場を置き、明治二十年村名町と改め、二十二年分離して飯田町となる。〔春日神社〕郷社。祭神、武甕槌命・經津主命・天兒屋根命・比賣大神。創立年代未詳なるも、地方の古社にして、江戸時代には藩主前田氏の崇敬を受け、新願・寄進等のことあり、又飯田郷の總社として附近村民の尊信篤く、殊に五十年式年の大祭には諸村より祭祀料を獻進す。〔乘光寺〕眞宗大谷派。一千有餘年の古刹。初め眞言宗にて乘智寺と稱せしも、覺海法師の代、永正四年眞宗に改む。本尊阿彌陀如來。寺寶に弘法大師筆六字名號・尊圓親王筆天滿天神像等あり。

【飯田灣】 石川縣能登國珠洲郡東岸の灣入。富山灣の一支灣にて、その西北岸に本郡の中心地飯田町あり。本郎村の岬赤崎の根元に當る大字松波までの海岸を長濱浦と稱し、富山灣を隔てゝ東南方遙に越中立山を望み、風景絶佳の地。

【飯田市】 長野縣伊那郡谷の中心都會。安平路山（二三六三米）・猪古木山（二一六九米）等、木曾山脈の連峰西に聳えて西筑摩郡に境す。風越山（一五三五米）・虚空藏山（一一一三米）により北隣上郷村に接す。西北部は殆んど山林地帶にして安平路山麓より源を發する松川は安平路山・本高森山（一八九〇米）間の山谷を南流し、風越山麓にて東に折れ、ほゞ大平街道に沿ひて東南流し天龍川に注ぐ。東部後に田畑拓け、酒造業・養蠶業盛んに行はれ、又菓子・木製品・元結の產多し。三州街道本市の東部を南北に貫き、大平街道これより岐れて西に走り、西境の大平峠（一三五八米）を越え、西筑摩郡吾妻村に出で中山道に連なる。中央線の辰野驛に發し天龍川の右岸に沿ひて南に走る社線伊那電氣鐵道は本市に櫻町・飯田（共に大正十二年設置）の二驛を置く。此地は天龍川に沿ふ臺地上にあり、信濃高原の南部に位するため氣候温和なること信州第一にして既に鎌倉時代より開け、豪族坂西氏永く居住せしため坂西の稱あり。飯田・秋山・毛利・京極・小笠原・脇坂の諸氏を經て堀美作守この地に移封され、子孫相つぎて明治維新に至る。明治二年落藩を奉還し、城郭を撤し、堀を埋め城址は大部分市街となり、明治の初め飯田縣となりしも、のち廢して筑摩縣に入り、筑摩縣の廢止とともに長野縣に入る。明治二十二年上飯田町の一部を編入して町制施行、昭和十二年更に上飯田町と共に市制を布く。いま飯田區裁判所・飯田稅務署・飯田測候所及び中學・高女・商業等の中等學校あり。また長姫城址・大宰松・山口お蘆の墓・今宮公園等名所舊蹟に富む。〔飯田城〕鎌倉時代飯田郷より興右衛門、別府村より助右衛門の二人鎌倉に上りて將軍頼朝に謁し、地頭を請はし一郷を治められんことを願ひしに、幕府之を容れ、平家追討の際、義經に從ひ武功を建てし阿波國坂（板）西の住人近藤六郎周宗を遣はして治めしむ。周宗よりて上飯田に居館を構ふ。其舊址今に存す。近藤氏斷絶の後、小笠原信濃守貞宗の孫、坂西孫六郎宗滿の時に飯田に移り築城す。即ち飯田城にて後十數代の居城たり。應永年間飯田基國この城に居り、天文十六年甲斐の將秋山伯耆守晴近は伊奈郡を討平、晴近は飯田城に居りて三千貫を領知し城代と稱し武田氏の宿將たり。のち保科氏城代としてこゝに治し、天正十年二月織田の軍は木曾・伊奈郡道より進擊し、諏城皆陥り武田氏遂に亡ぶ。織田氏は毛利河内守秀頼を飯田城に居らしめしも、六月本能寺の變あり。甲・信の地大いに動搖し秀頼西走す。德川家康甲・信二州を收むるに至り本城に復歸し豐臣秀吉に仕へ伊奈侍從と稱す。天正十九年秀頼卒し京極修理大夫高知此處に封ぜられ八萬石を食む。慶長五年關ヶ原役に高知東軍に應じ、功を以て加封せられ丹後宮津に移る。翌年前筑摩郡深志城主小笠原兵部大輔秀政、唐子役の功を以て伊奈郡五萬石を賜はり下諏古河より移り、堤を築き石を疊みて城壁を修む。其子信濃守忠修三萬石を加封せられ慶長十八年深志の故領に移る。〔飯田藩〕小笠原忠修、深志に移りて後、元和三年脇坂淡路守安元、伊豫大洲より此處に移り五萬五千石を食む。その子中務少輔安政に至り、寛文十二年播州龍野に移り、後に堀美作守親昌、野州烏山より二萬八百石をもつて移封せられ、その子周防守親貞より子孫相傳へ寛政年間に至り堀氏は讀書場を創立す。石見守親義の時明治維新に遭ふ。〔今宮公園〕風越山の麓長姫城址にあり。長姫城は堀氏累代の居城にて其址に舊藩主の靈を祀る三靈社あり。天然の形勝に富み、瓦松老梅多く此地方唯一の遊園地。又風越山は古來歌の名所たり。「手向にも結びてゆかん風越の榊野の尾花穂に出てにけり　源顯仲」〔大宰の松〕荻生徂徠の高弟大宰春臺の宅址にあり、春臺は飯田藩士、長じて仙石侯に仕へ、後江戸に赴きて徂徠の門に入り古學を研究すること數年、學大いに進む。徂徠の残後は服部南郭と共に物門の儼緻者として尊敬せらる。〔勝負平〕永祿五年飯田城主坂西伊豫守長忠の松尾城主小笠原信貴と戰ひて敗死せし處。〔日御上人の墓〕白山神社境内にあり。上人は武藏（今の東京市）池上本門寺の第十六世にて不受不施の教義を唱導し、三代將軍家光の怒にふれ此地に來り寛永十五年病死せりといふ。〔大宮諏訪神社〕字上飯田に鎮座、郷社。祭神健御名方命。創立年代未詳なるも、蓋し諏訪本宮の社領に發生せし地方の古社にして、爾來本宮との關係密接なるものあるに加へ、中世を通じ武神としての信仰を蒐む。また領主・藩主の崇敬を受け、慶安年間脇坂安元社殿を修理し、後堀氏赤戸藩・太鼓・甎等を寄進す。尙ほ飯田町の產土神として町民の尊崇篤し。〔正永寺〕江戸町にあり。曹洞宗。圓悟山と號す。應永十五年坂西兵庫由政の開創。のち寺門衰へたるを永祿十年龍雲自果禪師再興す。本尊釋迦如來。〔善勝寺〕眞宗大谷派。開山は源海法師。蓋祿二年の開創。天正年中飯沼村にあり、同十八年本市の地に移る。本尊阿彌陀如來。〔大雄寺〕臨濟宗妙心寺派。百丈山と號す。文明十六年一溪和尙の開建。中興は克馬和尙。本尊十一面觀世音。〔長源寺〕箕瀬町にあり。日蓮宗。田島山と號す。興國五年（北朝康永元年）の創建。開山は日靜上人。初め當郡松尾にありしを慶長十四年中興開山日泉上人現地に移す。飯田の烈婦阿藤の墓あり。阿藤は飯田藩士山口彈次の女、藩主の壁妾豐浦が寵に乘じ私に藩政に干與して之を亂すを憤り、豐浦を刺して對側を清む。天保十年處刑

ぜられしも世人彼女を賞す。

【飯田峠】 長野縣南西部、飯田市の西部にある峠。最高點一二三五米。峠路は大平街道の一部をなし、西すれば阿知川上流の谷に下り、更に西に上りて大平峠を越え、西筑摩郡吾妻村に出で中仙道に合し、東すれば飯田市に出で三州街道に合す。

【飯田村】 靜岡縣駿河國庵原郡の南部。清水市の北に隣る。北部は丘陵地にして南境には巴川東流し、其北方は土地低平にして耕地拓け米・茶の産多し。本村は和名抄、駿河國盧原郡盧原郷の地にして大宇高橋は正治二年に梶原平次左衛門尉景高の自殺せし處(東鑑)。太平記にも六波羅よりの早馬、駿河國高橋にて登りの人と行き逢ふと見え、曾我物語に「宮藤助經はやがて駿河國高橋につきて、船越・木津輪のひとひとをかたらひ、本領進退の本意を遂げんと企てける所に、伊藤次郎助親さきだちて、このよしを聞き知りて、要心きびしくするあひだ、力およばずやみにけり」とあり。往時、東海道は此地を通り、巴川に沿ひて西に進み、大内(今、高部村の大字)、瀬名川(今、西奈村の大字)を經て府中(靜岡)に至りしものなるべし。又この地は紀區の旅、大宅氏の裔、光延は高橋・油比・西山の領主たり、子孫高橋氏を稱せしものち石見に移る。〔鵜田神社〕大字山原字下ノ谷に鎮座。郷社。祭神、大山祇命・木花開耶姫命。もと淺間社と稱す。又諸郡神階帳の「正四位下石原明神」に充つる說あり。地方の古社にて、附近村民の崇敬篤し。例祭九月十九日。〔善慶寺〕大字蜂ヶ谷にあり。臨濟宗妙心寺派。補陀山と號す。文永二年開創。開山は滿傳和尚。天正元年貞愛和尚再興す。本尊如意輪觀音は行基の作と傳へらる。山門の額は因州刺史越智直郷の筆といふ。〔崇壽寺〕大字下野にあり。臨濟宗妙心寺派。醫王山と號す。開山は佛光圓滿常照國師。本尊藥師如來は弘法大師の作といふ。寺寶として十二天像の織田藍幅を藏す。十二藥師の第五番。詠歌「つくりおく願をはらふや崇壽寺十二の神の歌へあらたに」

【飯田村】 靜岡縣遠江國濱名郡の東部。濱松市の東に位し、東は天龍川により磐田郡掛塚町及び十東村に對す。東部は天龍川の分派によりてなれる中島にて砂地多きも、川の右岸の地は平地多く、米・麻の產あり、特に織物類の盛んなるを以て著はる。省線東海道本線天龍川驛に近く交通不便ならず。本村は和名抄の、遠江國長下郡鵜多郷の內ならん。〔稻荷神社〕大字上飯田字山之內にあり。郷社。祭神倉稻魂命。創立年代詳ならざるも、式內社子倉神社に充つる說あり。江戸時代には德川幕府より四石八斗の朱印を安堵せらる。例祭十月二十八日。〔龍泉寺〕曹洞宗。稻荷山と號す。享德三年太亭寺道悟和尙の開基にして、龍湍禪師を開山とす。初め東光山龍泉庵と號し、朱印領三十石。寺內に範鎭の碑あり。

【飯田村】 靜岡縣遠江國周智郡の南部。森町の南に接し、東は小笠郡原田村・原谷村に接す。本村の東北部は丘陵地なるも、その他は三倉村及び天方村に源を發し、森町を經て村の中央を南流する太田川流域に屬し田畑拓け米・麻・茶を主產す。森町より袋井町に通ずる間道は太田川に沿ひ本村を南北に走り、北部に森町より小笠郡掛川町に至る縣道通ず。また社線靜岡電氣鐵道秋葉線の飯田驛あり。本村は和名抄の山名郡山名郷の內なるべく、中世飯田莊と稱し、長講堂領の一たり。〔飯田城址〕大字飯田の東一帶は丘陵にして天方城主山內對馬守道美こゝに飯田城を築く。永祿十二年德川家康、道美の孫通泰を此城に攻めて之を擒ひしも更に元龜三年武田信玄に擒はる。〔崇信寺〕大字飯田にあり。曹洞宗。應永八年開創。飯田城主山內對馬守を開基とす。開山は知仲八間禪師。境內に對馬守の墓あり。

【飯田山】 熊本縣上益城郡飯野村の東南部にある山。熊本市より東南約一三粁。標高四三一米。全山第三紀層より成る。高度大ならざるも熊本平野の東邊に聳ゆるを以て、山上展望廣く西方遙に島原灣を臨む。明治十年役の一戰場にして、山上に天台宗當樂寺とて推古天皇の御代日羅の草創と傳ふる古刹ありしも、今は僅に一草堂を存するのみ。

イータカ　飯高

【飯高村】 千葉縣下總國香取郡の南部。東南部は匝瑳郡匝瑳村に境し北は當野村に隣り、その境界は沼澤地をなす。地勢概れ平地にして田畑拓け米・麻の產あり。社線成田鐵道下總吉田驛へ三粁。大宇飯高に小田原北條氏の臣平山刑部の居城址あり。本村は和名抄、匝瑳郡厚郷(或は金原郷か)の地なるべく、中世は飯高郷と稱し、桓武平氏、千葉氏の族、逸見當廣の子政嵩この地に住し飯高氏を稱す。〔飯高寺〕大字飯高にあり。日蓮宗。妙雲山と號す。初め日祐は法輪寺を松崎村に建立す。これ本寺の草創にして、永祿年間小田原北條氏の臣平山刑部の城址なる現在の地に移る。天正十九年、德川家康寺領三十石の朱印を付與せしも、その朱印狀に飯高寺とありしを以て爾後寺號を飯高寺と改むといふ。其際、榎林の設置を許可せられ、大講堂並に諸堂を造營し、敎藏院日生これが開講の祖となる。宗門最初の檀林と稱せらる。飯高檀林卽ちこれなり。

【飯高(郡)】 伊勢國にありし郡。明治二十九年本郡と飯野郡とを合し飯南郡となる。いま飯南郡のほゞ西半、櫛田川中游以上一帶の地にあたり、西は大和國吉野郡に隣り、別に坂內川附近をも含めるものの如し。孝安天皇の皇兄天押帶日子命の裔この地に封じ飯高君と稱せらる(古事記)。後姬世記に飯高縣造の乙加豆知命、その居邑は意須比飯高國と稱し神田神戸を獻ぜしこと見ゆ。此事に關し內宮儀式帳には忍飯高國とあり。意須或は忍は飯の冠詞にして比飯高・飯高は械(飯)田盧の義にあらざるか。なほ後考に俟たん。建郡の期は詳ならねど大化改新の頃なりしか。續紀、天平十三年の條に郡名初めて見え、和名抄は伊比多加と訓じ上枚・下枚・丹生・英太・立野・神戸の六郷及び郡家を置く。のち丹生郷は多氣郡に入る。延喜式に飯高郡馬八疋とみゆ。其郡は和名抄の飯高郡郡家とあるに當り、今の三重縣飯南郡花岡町大宇郡田部は古郡名の名殘なるべし。

【飯高】 ↓平野村(奈良縣)

【飯高】 ↓日高郡(和歌山縣)

イータガワ　飯田川　秋田縣羽後國南秋田郡の西部。北と東は下井河・上井河二村に隣り、南は豊川村・大久保町に續く。東部はやゝ丘陵の林野をなすも、西部は八郎潟東岸の平地にて水田多し。羽州街道・省線奥羽本線共に南北に通じ、後者は羽後飯塚驛(昭和二年設置)を置く。產物は米を第一に、林產・畜產これに次ぐ。もとの下虻川・金山・和田・妹川・飯塚の諸村を合して建てし村にて昭和十年十二月町制を施行す。大宇和田の地に雲尾館ありて、三浦黨和田五郎盛末居城せしといふ。

イータニ　飯谷

【飯谷】 福島縣岩代國河沼郡にありし村。大正十年柳津・倉戸の二村と合併し新たに柳津村を建つ。

【飯谷山】 福島縣河沼郡の西南部にある山。柳津村・睦合村・下谷村の三舊村に跨り、標高七八三米。東側の只見川、西側の長谷川この山にて兩河谷を分つ。

イータバシ　飯田橋　東京市麹町區飯田町より神田上水に架せる橋。牛込區下宮比町に通ず。橋の南方、飯田町の地藩に中央本線の飯田橋驛(昭和三年設置)あり。

イータマチ　飯田町　東京市麹町區の町名。麹町區の最北部に位し、北は神田川及び外濠を以て小石川區に、東は神田川の一分流を以て神田區に、南は內濠によりて代官町に對し、西北は牛込區に、西南は神樂坂通を東南に進み九段坂に進む道路を境として富士見町に接す。中央本線は本町と牛込區・小石川區との境を走り本町內に飯田橋驛(昭和三年設置)・飯田町驛(明治二十八年設置)を置く。もと日比谷にありて神前結婚を以て著はれし日比谷大神宮卽ち神宮奉濟會本院は今此處に移りて飯田町大神宮と呼ばる。また八犬傳の著者として有名な文豪瀧澤馬琴の居住地にて今も當時の井戸遺る。此町はもと千代田村と稱せられしも、飯田喜兵衛なる名主居りしに因り町名起れりといふ。御府內備考に求

淺雜記を引き「往古は千代田村とて田安に續く田畑なり。御入國の時初て田安邊に御成の時、この所の百姓をめさせられしに、その頃は民家十七軒ならでなく、皆々田畑へ出て、ただ飯田喜兵衛と云ふもの一人出で所の事ども申上げければ、此後この所の名主たるべきよし命ぜられ、此所を飯田町とよぶべしと也」とあり。好色一代女・四「中間買の安部茶、飯田町の鶴屋がまんぢゅう、女ばかりの一日暮し何の詳もなく、心にかかる山の手の月も霞なく」

イーチ　飯地村　岐阜縣美濃國加茂郡の東南隅。八百津町の東、大井町(惠那郡)の西、各〻約一二粁を隔つ。木曾川の右岸にて東は惠那郡笠置村・武並村に隣り、南は川を界に土岐郡大湫村・日吉村に對す。東濃山地の中部に位し五〇〇乃至六〇〇米の高度を有するも概して平坦面をなし木曾川は南邊に峽谷をなす。中部・東部に多少の耕地ありて養蠶行はる。省線中央本線大井驛へ約一二粁。

イーテ　飯豐

【飯豐村】 岩手縣陸中國和賀郡の中部。黑澤尻町の北方、花卷町の南方に位す。北上平野の中部を占め、飯豐川・尻平川等ほゞ東西に流れて北上川に注ぎ、水田・沃野廣く、米の產多し(昭和十年は約八千五百石)。また麥・豆類これに次ぎ、養蠶(人工孵化)盛んにして年產約五萬羽に達す。奥羽街道と省線東北本線は同村の東部を通過す。黑澤尻村と花卷町へ國道通じ、鐵道の便は黑澤尻驛へ最も近し。勝地飯豐ノ森には觀世音堂あり、附近風光に富む。飯豐城址と傳ふるもあれど、今その城主・時代を詳にせず。この地は平安朝時代安部氏の領なりし頃、すでに成田・飯豐(何れも現在同村の大字)の部落發達せしものゝ如し。村崎野・藤澤(いづれも現在同村の大字)は寛文年中に南部の臣、奥寺八左衛門定愨により開拓せられたる所にして、今なほ奥寺用水の名を存す。明治二年江刺縣に屬し同四年盛岡縣に入り、同五年岩手縣に屬し成田・飯豐・村崎野・藤澤を合併し戶長役場を設けられしも、同二十二年以後の四村合併して飯豐村を建つ。

【飯豐山】 越後山脈中部にある一大山塊。飯出山にも作る。新潟縣北蒲原・東蒲原二郡、山形縣南置賜・西置賜の二郡、福島縣耶麻郡の三縣五郡に跨る。飯豐山(二一〇五米)を中央に西に西ヶ岳(二一〇一三米)・大日岳(最高峯にして二一二八米)・牛首山(一九八二米)、東南に種蒔山(一七九一米)・三國岳(一六三一米)・地藏山(一四八五米)等の諸峯逶立して東北有數の深山地帶をなす。この山嶺によりて四方に分水され、北側よりは荒川の支流玉川(小玉川)・鐵川・白川(十津川)等、南側よりは阿賀野川の北支たる一ノ戶川・奥川・實川等、西側よりは加治川等發源して夫々谿谷を作る。飯

豊山頂に鎮祉飯豊神社の本殿及び遥拝小屋あり。また三國岳山頂は簑ノ王子と稱せられ、小祠と小屋場あり。簑ノ王子は五所王子とも呼ばれ、共に越王（大彦命）の訛りにして祠は越王を祀れるもの、即ち越王祠なりといふ説あり。草本帶の岩場には高山植物多く、殊にミヤマウスユキサウは名高く、飯松の樹も美觀たり。飯豊山頂に立ちて四顧すれば東方に吾妻火山群と米澤盆地、南東方に會津盆地と磐梯山・猪苗代湖、南方に大日岳南方の蝙蝠たる越後山脈の連嶺、西方に越後平野と遙に佐渡島を浮べたる日本海の海波、北方に小國谷を隔てて聳立する朝日岳連峯の大障壁等、展望廣く開けて壯觀歎賞に値すべし。山麓の溪谷中最も著名なるは北部の小國谷（玉川谷）にして、溪間に梅花皮瀑・小玉川温泉あり、村民は毎年冬季此山中に熊狩りを行ひ、其の獲物を以て重要なる収入となす。西方の加治川谷には不動瀑・湯ノ平温泉あり。南方の一ノ戸川谷の一ノ木村一ノ戸部落に飯豊山神社遙拝所あり、此處より上流の川入部落附近まで約八粁の間蒼林蔚道敷設さる。前記三國谷は登山路の主要なるものにして、一ノ戸川谷迂行は本道なり。此外に南方の彌平四郎を經由する奥角谷、北東方の米澤市方面に出る白川谷（岳谷）等あり、夫々磐越西線・羽越本線・米坂線等を利用するものなり。山中に雪田・雪渓甚だ多く、また冬季は積雪甚だ多くスキー登山は最も興味あり、熊狩りと共に著ばるゝに至れり。近年登山者の増加するにつれて、山小屋は數箇設けられ、また南置賜郡南小國村其他に登山案内所を開設するに至れり。西側新潟縣北蒲原郡赤谷村には飯豊鑛山ありて亞鉛鑛を產す。山名は飯豊青巒、物部臣に幣を奉らしめたるより起るとも稱せられ、昔時は宇惠惠山・飯田山等とも呼ばる。會津風土記「四時雪有て寒氣甚しく、七八月の間登山するもの櫻花を見、杜鵑を聞き、黄葉を踏み、四時の風物一時の佳觀に入る、里俗四季の山と稱するもさる事にや、滿山大樅他木なく、五葉松のみ奇岩怪巖の下に蟠り、萬古の色を改めず、西端の絶頂を大日岳といふ、大已貴命を祭れる石窟あり、巍巍にして、躋攀するもの稀なり。」事跡考「飯豊（伊比天）山は、米澤四郷第一の大山なり、秀拔險絶いふばかりなし、四時雪白く玉を削るが如し、絶頂に大標現を祝し、毎年八月、農家の老壯、浮行別火して之に詣ず、年穀の豐を祈るなり、山上人至れば必雨降す、山下の岩倉村民、毎年六月、氷雪を採りて之を府に獻ず。」

イートミ　飯富（いゐとみ）

【飯富村】　茨城縣常陸國東茨城郡の北部。波里村に北隣し東は那珂川流れ、西は山根村に北は石塚町に接し西部は原野多し。米・麥を產し、牛蒡・里芋等の栽培行はる。社線茨城鐵道は飯富・藤井の二驛（共に大正十五年設置）を置き、水戸市より石塚町に至る縣道南北に通過す。村内に親鸞聖人田植の舊蹟、源義家の十萬の兵を集めし處と傳へらるる十萬原あり。此地和名抄の那珂郡那珂郷の地に當るか、郡郷考には大井郷なるべきかともいへど詳ならず。中世以來は大部郷の稱あり。明治に至り岩根・藤井・大部の三村を合して飯富村を建つ。

〔眞佛寺〕　眞宗大谷派。廣林山受法院と號す。建保の頃親鸞東國を巡錫したるも其際常陸國那珂郡大部の平太郎なるもの上人に歸依す。両して彼は弘長元年逝去せしも、本寺は卽ち其遺跡にして寺號は平太郎の法名眞佛に由來す。永應三年堂宇故ありて破却せられ、のち再建せらる。時に水戸城主より二町六段歩の田園を給せらる。寺寶に阿彌陀如來木像一軀・聖德太子像一軀・平太郎木像一軀あり。寺内に眞佛の墓あり。

【飯富】　↓根形村（千葉縣）

イートヨ　飯豊（いゐとよ）

【飯豊村】　福島縣耶麻郡田村郡の南部。常葉町の南部。小野新町に北隣し夏井川の上源に當る。阿武隈山地の中部に位し、山林・原野廣きも川に沿ひて小耕地あり。米・小麥等を產し、特農產に煙草あり。また馬・木炭を出す。縣道は北方郡山市より來り南方小野新町へ通ず。大字小戸神に東塔觀音堂あり、天同二年の創立にして縣下屈指の靈場として知らる。大字浮金は戊辰役の時、會津攻撃に向ひたる官軍の通過せし處。卽ち明治元年七月二十六日、官軍は仁井町（今の小野新町）にして午飯後、直に三春攻撃の手配をなす。一手は廣瀬通（同村の東南にある街道）へ向ひ、一手は浮金通へ進み、柳橋（同村の北部）へ宿陣し未だ攻撃せざるに三春歸順せるため同二十七日三春城下へ繰込めり。同村は古書に飯土居に作れり。また日碑によれば往昔坂上田村麻大遺根山（いま東隣遠根村の東境にあり）の賊魁大竹丸を攻めし時、矢盡き糧食乏しく官軍の意氣阻喪せしも、異形の男子忽然として現れ矢を拾ひ、また大いに飯米を出して官軍に給す。よりて官軍は氣勢を挽回し遂に兇賊を平定し得たりといふ。飯豊の名これより出つと傳ふ。

【飯豊村】　福島縣磐城國相馬郡の東北部。中村町の東に隣り、南は磯邊村・日立來村に接す。字多川北境を東流して東岸の湯湖松川浦に注ぐ。地形平坦にして水田拓け米の產多く外に海苔・牡蠣の產あり。大字柏崎・岩子は松川浦に両し、最も風光に富む。本村は隣接の中村町・磯部村と共に凡そ和名抄の字多郡飯豊郷の地に當り、村名は郷名の遺稱なるべし。

【飯豊】　磐城國字多郡にありし郷。名和抄は伊比止與と訓し、今の福島縣相馬郡の東北部に當り凡そ中村町・飯豊村・磯部村を含む地、卽ち松川浦と八澤浦（八十浦）の間の地なるべし。蓋し飯豊村は

郷名の遺稱とす。

イーナシ　飯梨（いひなし）

【飯梨村】　鳥根縣出雲國能義郡の北西部。廣瀬町の北に位し、東部は飯梨川北流し沿岸に水田拓け、西部一帶は丘陵にして八束郡意東村に隣り境界に京羅木山（四七三米）あり。主產物は米・繭の外に梨・牛皮・鷄卵等。社線廣瀬鐵道の田頼（昭和三年設置）・小原（昭和八年設置）・飯梨（昭和三年設置）・雲ノ湯（昭和三年設置）・植田（昭和四年設置）・温泉前（昭和四年設置）の六驛を置く。本村は明治二十二年廣瀬町の北に位する舊諸村を合併し、この地が出雲風土記の飯梨郷に當り、且つ飯梨川に沿ふの故を以て飯梨村と名づけしもの。飯梨郷は出雲風土記意宇郡の條に郡家の東南三十二里に位し、大國魂命が天降りし時御勝を取られしため飯成といひ、神龜三年飯梨と改むとあり。また大宇石原の邊は永祿年間毛利氏が、尼子氏の富田城（廣瀬町）を攻むるために飯梨川を堰き止めたる處なりといふ。出雲風土記・意宇郡「飯梨郷、郡家東南卅二里、大國魂命天降坐時當此處而御膳食給、故云飯成」（神龜三年改宇飯梨）。

【飯梨川】　鳥根縣能義郡にある川。上源二流あり、一源西比田川は郡の西南部、仁多郡界の玉峯山に發し、他の一源東比田川は同郡猿隠山に出で共に北流し、布部村にて合一して布部川となり、更に大原・仁多・能義三郡の間に位する三郡山より發する山佐川と會して東北に流れ、廣瀬町を過ぎ富田川と呼ばれ、飯梨村に入りて飯梨川となり、赤江村に至り中海に入る。流程凡そ二九粁。土砂を流出すこと夥しく水淺くして舟楫の便を缺く。出雲風土記・意宇郡「飯梨川、源有ル三、（一水源、出ニ仁多、大原意宇三郡堺田原、一水源、出ニ枯見、一水源出ニ仁多郡玉嶽山）三水合、北流入ニ于海、有ニ年魚伊具比ニ」

イーナミ　飯南郡（いひなみ）　三重縣十五郡の一。伊勢國に屬し縣の中部に位す。北は一志郡及び奈良縣字陀郡に隣り、西は奈良縣吉野郡に界し、南は多氣郡に接し、東は伊勢海に臨む。面積約四七四・八方粁。地形は東西に長く南北に狹い。西部は鈴鹿山脈と紀伊山脈の接續部に屬し、吉野郡の境に高見山（一二四九米）・池ノ木屋山（一三九六米）、多氣郡との間に白倉山・迷嶽（一三〇九米）等の高山峰つ。東部は所謂伊勢平野の一部にして、西部諸山の水を集めて東流する櫛田川これを濃厚して伊勢海に注ぐ。海岸は遠淺なるため松阪港あれども大船を入るゝに足らず。參宮街道海濱に近く南北に走り、また松阪より岐れ櫛田川に沿ひて大和に入り紀州和歌山に至る和歌山街道あり、いま省線參宮線及び社線參宮急行電鐵・伊勢線等參宮街道に沿ひて走り、省線名松線は松阪より起り北方一志郡に入る。物產は米を第一とし材木・薪炭これに次ぐ。明治二十九年飯高・飯野の二郡を合併し飯南と名づく。昭和八年松阪町市制を施くに及び本郡より分離す。※飯野（郡）・飯高

イーヌマ　飯沼村（いひぬま）　茨城縣下總國結城郡の中部。北東は大形・岡田、北は安静、南は菅原の四村の間に位し、西は猿島郡に接す。土地平坦、西半は低卑の沼地をなし、飯沼川その中部を南流す。米・麥を產す。飯沼（沼澤）の水中に鴈鳥なるものあり。常には水上に見えず、初秋鴻鴈の渡り來る頃に自然と水上に浮び出で鴻鴈去るに及べば其鳥また火葬に沈む、故に鴈鳥といひ、一に浮沈の鳥ともいふ。平將門の亂には此邊一帶は兵火に罹りし地。もと岡田郡（明治二十九年に豐田・結城二郡と合し改めて結城郡となる）と猿島郡の間なる瓦澤たり、北は名崎村字尾崎より起り南は豐岡村字横曾根に盡き、延長約二三粁、幅約二粁に亘りしも、享保年間に排水開墾し、その新田は結城・猿島二郡の沿岸諸村に從屬せしむ。

イーヌマ　飯猪（いひ）　下總國豐田郡にありし郷名（和名抄）。凡そ今の茨城縣結城郡の水海（ぬま）町及び飯沼・菅原・豐岡・大花（はな）羽の四村に亘る地を稱せしもの。卽ち同郡の南端に當り、往時は飯沼川の流江を以て猿島・相馬の二郡を分ちしならんも、後世、その何道に幾多の變革を經て現在のものとなれり（豐田郡は明治二十九年に結城・岡田二郡と合し改めて結城郡となる）。猪をヌマと訓するは猪（沼）の水編を省きしもの、猪は水とどまり溜へたる所の義なるに因るか。說文「猪、水所ノ停也」周禮地官「稻人、以潴畜水」とあるを以て解せらる。

イーノ　飯野（いひ）

【飯野村】　福島縣磐城國石城郡の東南部。平市の東南隣、東は高久村、南は鹿島村に接續す。低き丘陵地多く、北部・東部に水田拓く。平町より小名濱町への縣道中部を南北に通ず。同村は入山炭鑛・内郷炭鑛の鑛區の一部に當る。大字上荒川に龍門寺あり、曹洞宗、青岑和尚の草創にして應永十四年岩城朝義此處に葬られ、以後親隆に至る九代の墓所とす。岩城氏は文治年間より此地に住し、後、田村國龜田（今の秋田縣由利郡龜田村）に封を徙さる。佐竜久嶺神社、大宇中山に鎮座。郷社。祭神五十猛神。式内の古社。俗稱木舟明神。例祭四月七日。

【飯野村】　福島縣岩代國伊達郡の西南部。福島市の東南約一五粁、西南は阿武隈川を以て安達郡下川崎村に隣る。低平の麥地にして養蚕行はる。陸羽街道に沿ふ松川より富岡街道に當る川俣町に至る縣道の中間に位し、また省線川俣線東西に通じ岩代飯野驛（大正十五年設置）を設け交通不便ならず。此地は和名抄磐城郡荒川郷の内。もと安

達郡に屬し、大同二年木幡山に厳島神社を奉祠し、其地を建野と稱し、神饌を供する地を飯塚といふ。延喜六年建野・飯塚を合して飯野と稱し伊達郡に屬せしむ。

【飯野】 磐城國磐城郡にありし郷（和名抄）。其地凡そ今の福島縣石城郡の平市・内郷村・好間村に當る。今の飯野村の地は和名抄荒川郷の内にて荒川郷は飯野郷の南方に接し居たる如し。中世此地に藤原伊賀氏の族飯野氏あり、伊賀守藤原朝之（秀郷十世孫）は北條義時の舅にて鎌倉幕府に仕へて評定衆たり。朝光の次男光宗功を以て好間庄の預所職となる。のち好間庄は飯野庄ともいへば相當領域擴大し今の飯野村迄にも及びしか。とまれ光宗後には飯野氏を稱するに至る。

【飯野村】 千葉縣上總國君津郡の西部。富津町の東に隣り、低平なる沃野を占めて耕地廣く拓く。米・麥を產し養蠶盛んに行はる。省線房總西線西邊の地を通過し、道路は村の中央なる大字飯野を中心として四通す。飯野の地は近世保科氏の陣屋ありし處、今物資集散の中心地なるべし。本村の地は和名抄の周淮郡湯坐郷の内なるべく、今大字に本郷あり。北部の大字二間塚にもと二つの古墳ありしより地名起るといひ、いま其塚は二間塚又は内裏塚と呼ばれ甕形たり。頂上に石棺を發しき瓦石現はる。近傍に九箇の古墳あるも、かの二間塚は須惠國造の墳墓なるべし。また一說には、古墳の一は豆州三島に配流せられたる天武天皇の後裔永上川繼（永上親王）此地に渡來して殁せられたる墓所、また一は間々の手兒名と並び稱せられたる此國の美人周淮の珠名の墓なるべしといふ。〔飯野藩〕譜代藩。寛永年中より保科彈正忠正貞、上總國君津郡飯野の地に陣屋を置きて二萬石を領す。飯野陣屋は廣壯にして城壘に同じく、世襲して明治維新に至る。四年廢藩して飯野縣となりしも、間もなく廢して木更津縣に入り、六年更に千葉縣に入る。

【飯野村】 富山縣越中國下新川郡の北西端。黑部川河口右岸の三角洲上に位し北は日本海に面す。平曾川の小流、西境の黑部川に並行して村の中央を北西に流る。海岸及び河岸に砂地多く山林また處所に點在すれど、大部分は水田にして、產物は米を主とし蔬菜類之に次ぐ。北陸街道は村の東南部を縱貫して南方の三日市町と北方の入善町とを連れ、省線北陸本線は北西部を海岸に沿ひて通過す。本村附近は古來營多きを以て知られ、舊幕時代藩主に營を獻上したることありといふ。此地は和名抄の新川郡佐味郷（調佐比）の内にして後に三位と訛りて大三位・小三位の二郷に分れ、本村はその大三位郷に屬し、後世には佐美庄とも稱せられたり。延喜式に本國罪馬各罪五疋とするも佐味のみ八疋とあり、蓋し越後との境に線路あれば馬疋の數を加へてそれに當へたるものなるべし。〔國家山〕新潟にあり。黑部川口の砂丘にて高さ約二〇米松樹これを覆ふ。附近に池沼あり、海上・河口の眺望よく、また東南遙に日本北アルプスを望みて展望雄大、古く松露の產を以て知らる。新潟說教所庭前の老櫻樹は根際周圍二・二米、双幹に岐れて枝條擴がり、東西一六・五米、南北一四・五米、その周圍約五〇米に達す。花時眺に美觀たり。〔相生の松〕大字神子澤なる諏訪神社境内にあり。約五百年を經たる古木にして周圍六米餘、高さ約二八米、地上約八米のところより岐れて双幹となる。相思の男女の盡せし連理の松なりと傳へ、社頭の額面に「相生の松に契りしねしやたれ問へと答へし神子澤の森」の歌を載す。

【飯野村】 山梨縣甲斐國中瓦摩郡の中部。甲府盆地西邊の沃野を占め、北部に水田多く、南部に桑園拓く。主產物米・繭、特產物メロン。社線山梨電鐵に通じて飯野・倉庫町の二驛あり。この地は和名抄、瓦摩郡等力郷の内ならんか、中世には八田の御牧と呼ぶ。また古史に馬相野といへるは此地に當るか。往昔日蓮上人本村の一部落鰍小路區に來り寺を作り區民その寺に飯を盛り上げし故、飯塚の名起り、區民その姓を稱へしも後それより東方の野に住み飯野の姓を用ひ、村の名稱も飯野と呼ぶに至れりと傳ふ。〔妙善寺〕日蓮宗。光明山と號し寶龜五年當郡鹿尾寺僧尊の開創と傳ふ。慶長八年穂川氏より黑印三百坪を附せらる。

【飯野（郡）】 伊勢國にありし郡名。明治二十九年飯高郡と合して飯南郡となる。今の飯南郡の東部、櫛田川下流の地に當る。地は多氣郡の北、舊飯高郡の東に位し、所謂伊勢平野の一部にて古くより米の產地として知らる。郡名も恐らくこれに關聯して起りしものなるべし。飯野の名は倭姫世記に見え、垂仁帝二十二年、倭姫、皇大神に奉仕し飯野高宮に遷り居ること四年、時に飯高縣造乙加豆知命が神戸神田を神宮に寄進すとあり、建て郡となりしは天智天皇の御代にして、延暦儀式帳に天智帝甲子年、多氣郡の四郷を割き飯野高宮村屯倉を立て公の郡と爲すとあり、飯野は多氣の分地にて多氣はまた度會の分地なるゆゑ、のち此の三郡を大神宮の神郡とし神三郡と稱せらる。續紀・天平勝寶四年の條に、伊賀國飯野郡飯麻等十七人に秦部の姓を賜ふと見え、秦部は卽ち服部にて毎年織物を神宮に獻ずる神麻續殿（飯南郡機殿村）の民部を指す。平安時代の中期、宇多天皇の仁和五年詔して御一代の間飯野郡を神宮の神領とし、更に寛平九年再び詔して本郡を長く神宮の神郡とす（神宮雜例集）。從ひて延喜式には「三神郡、度會多氣飯野爲神郡、飯野郡内十一町六段神田、其餘封戶也」とあり、爾後永く神三郡或は道後三郡（東海道の西隅）と稱す。和名抄は伊比乃と訓し乳熊・兄岡・黑田・長田・

須代・神戸の六郷あり。後世兄岡郷は多氣郡に、黑田郷は飯高郡に入り、多氣郡の流田郷・櫛田郷の地を本郡に併す。※飯高（郡）・飯南郡

【飯野村】 三重縣伊勢國河藝郡の北部。神戸町の西南に隣り、古くは和名抄河曲郡神戸郷の内。地は伊勢平野の一部にして米の產額多し。大字西條に澤城址あり、正平二十二年國盛澄城を築き、子孫神戸氏を稱せるも、のち今の神戸町の地に神戸城を築きてこれに移り、天正の頃織田信長の第三子信孝神戸友盛の嗣となり神戸城に居り、友盛は澤城に歸居せりと傳ふ。〔金生水沼澤植物群落〕指定天然記念物。大字地子町字金生水の低濕なる處にあり。すゐらん・みづぎく・さはぎきやう・はなしやうぶ・さぎごけ・かものはし・あんぺらゐ・しらたまほしくさ・がうそ・みづすぎ・みづごけ等發生し、殊にまうせんごけ・こまうせんごけ・いしもちさうは其他種々の肉食植物を產するにより天然記念物として著はる。〔太子寺〕大字三日市にあり。眞宗高田派。轉法輪山上宮皇院と號し高田派養帶所。聖德太子の御開創と傳へ、往時は天台宗に屬し僧侶六百餘年を經て伽藍荒廢せるを高祖元年親鸞上人巡錫の際堂宇を再建せるものといふ。同二年其弟子善然及び願智當寺に住し、のち本山第十一世應眞本山の養帶所となせりと。いま願智禪然兩上人の墓所あり。所藏の木造善然上人坐像は鎌倉時代の作にして國寶。境内に如來寺あり。光明山無優光院と號す。宗派同じく、條起等、殆んど全く太子寺に同じ。

【飯野村】 香川縣讃岐國綾歌郡の西北部。和名抄、鵜足郡二村郷の地。丸亀市の東南方約二粁。土器川の右岸に沿ひ、東南に讃岐富士の稱ある飯ノ山（四二二米）峙つ。その山麓の山地を除けば概ね平地にして水田拓く。產物は米・麥・叺・麥稈眞田等。社線琴平參行電鐵南北に走りて琴平町に通じ、津ノ郷・池ノ下の二驛（何れも昭和二年設置）を置く。〔飯神社〕大字東一一に鎭座。縣社。祭神飯依彦命・延喜の制式内小社に列し當國二十四座の一たり。祭神は一に神櫛主また は少彦名命等といふも詳ならず。例祭九月十六日。

【飯野山】 香川縣讃岐國綾歌郡の西北部にある火山。また嘘悲山の名あり。丸亀市の東北方約四粁に孤立し、飯野・川津・坂本の三村に跨る。古稱安山岩に屬する所謂讃岐岩より成る美麗なる圓錐形にして一に讃岐富士と呼ばる。標高四二二米。頂上よりの展望は極めて好く、北方遠く中國の連峯より瀨戸内海の青螺白帆を望み、また麓下には坂出町・丸亀市・多度津町の港灣街衢を指顧すべし。頂上松林の間には峯の藥師堂あり、其西南隅は噴火口址といふ。山頂より少しく降りたる邊には奇岩怪石多く、西方には柱立岩・不動岩・獅子岩・船底岩・鼓り岩・胎内潛等の巨岩突兀として聳え、東方には朝日岩・頭巾岩等あり、また南方一帶は觀音岳の名あり。

【飯野村】 熊本縣肥後國上益城郡の西部。熊本市の東南方約一〇粁。東部に飯田山（四三一米）・給野山（三〇八米）あり山地をなすも西北半部は緑川の支流西流し、熊本平野の東部に當り、土地低平水田拓け米の產多し。縣道北方木山町より來り中部を過ぎりて南方御船町に通ず。此地は加藤清正以來瓦の製造行はれ、土山瓦と稱せられ、熊本城の瓦もこれなりといふ。現在も本村特產物の一なり。飯田山は西南戰爭の際官軍の第三旅團の一部こゝに陣し、大いに賊軍を擊退せし地。山頂には推古天皇の朝、僧日羅の開基に係るといふ天台宗常樂寺あり。今僅に草堂を遺す。

【飯野村】 宮崎縣日向國西諸縣郡の西部。北は熊本縣球磨郡に、南は鹿兒島縣姶良郡に境す。東西幅廣き所約一二粁、南北約二〇粁に亘る。南部は霧島國立公園の一部にして、霧島火山群の白鳥山（一三六三米）・飯岳（一三〇一米）等の火山麓ゆ。北部も亦九百米内外の山岳連亘し中部は低平にして川内川の上流西流して水田・耕地拓け、桑落發達す。米・麥等の農產を始め林產も少なからず、また馬の飼育盛んなり。縣道川に沿ひて東西に走り、省線吉都線ほゞ之に平行し飯野驛（大正元年設置）を置く。白鳥山には硫黃を產する白鳥鑛山及び硫黃性礦黃泉の白鳥溫泉あり。また西隣加久藤村に亘る約七九ヘクタールの地は珍奇海棠の原種卽ち野海棠・山海棠が春旋爛の花を開き、麓兒島縣姶良郡牧園村を除きては本邦に於て他になき海棠自生地として名高く、指定天然記念物たり。大字末永は霧島國立公園の指定區域とす。〔白鳥神社〕白鳥火山の北麓大字末永に鎭座。縣社。祭神日本武尊。創建年代詳ならざるも、社傳に依れば性空上人霧島の靈窟を巡視し、白鳥山頂の池畔に坐して誦經せるに、老翁忽然として來り、我は日本武尊なり、白鳥と化して此峯に住む事久し、願の讀經苦行の德に感じて身を現はすといへり。依りて當社を創建すと傳へ、古くは白鳥六所權現と稱せり。今猶ほ近郷に於いては白鳥を殺すことを禁ず。また古來軍神として上下の崇敬篤し。例祭三月二十一日。〔飯野城〕大字原田に址あり。眞幸院は日下部氏代々郡司の住せし地にして、建久の初め眞幸太郎日下部重俊飯野を居城とす。重俊より五代を經て貞房に至り北原右兵衛佐泰幸代りて領主となる。永祿年中泰親の時島津貴久に降り薩摩國伊集院に徙さる。貴久島津義弘を眞幸院の領主として當城を守らしむ。〔羽山積神社〕大字大河平村字木屋ヶ野に鎭座。郷社。祭神伊弉諾尊。創立年代未詳なるも、江戸時代には藩主島津氏の崇敬を受け、また近郷村民の尊信を蒐む。〔稲

个平）大字原田にあり。永祿七年飯野城主義弘、大隅國菱刈城主菱刈隆秋を攻む。伊東義祐その虚に乘じ飯野及び其外衛加久藤を襲はんとして蟲を桶个平に築く。義弘之を聞き急より歸り大いに之を破る。此時島津の軍中より「伊東めが眞幸の陣は桶个平飯野欲しさに帶のゆるさよ」との狂歌を詠めりと。翌年五月菱刈城陥り、同時に伊東桶个平を焼きて三夕山の城に退けり。〔木崎原〕飯野城の西南約四粁にあり。元亀三年伊東義祐、飯野城を襲はんとして相良義陽の援を得て、先づ義弘の臣川上三河忠智の居城加久藤城を襲ひ木崎原に陣す。義弘これを窺ひ知り城兵三百人許りを三手に分け、一手は木崎原の東の谷に、一手は白鳥山麓の民屋に伏せて敵の背後を襲はしめ、諸處の山林に多數の旗を立て大軍の狀を示し、殘る一手を義弘自身率ゐて加久藤城に向ふ。敵は腹背挾撃をうくるを悟り、白鳥山を越えて退かんとす、此時白鳥山の別當僧光嚴謀に紙旗をつくり僧侶と寺戸三百餘人を從へ大いに鬨を發してこれを脅かす。敵木崎原に下り、義弘の孤軍なるを察し、猛然としてこれに迫る。義弘の軍一時狼狽して陣伍を亂ぜしも義弘沈著よくこれを制し、衝戰して敵の大將伊東新次郎以下を斬り大捷を博す。

イーノウラ　飯浦　島根縣美濃郡小野村の大字。省線山陰本線の飯浦驛（昭和二年設置）あり。

イーノガワ　飯野川町　宮城縣陸前國桃生郡の中央部。西はほゞ北上新川（北上川を北方の本吉郡柳津町西邊の曲流部より直に南方に向ひ飯野川町の西邊を過ぎるやう近年改修せる部分）を隔てて桃生・大谷地の二村に對し、南は北上川の分流追波川を挾みて二俣村大川村に對す。東は橋浦村に隣る。石巻市を去る北方約一〇粁。中部只北と南部追波川に沿ふ東西の地は一般に丘陵なれども、町の中部は平地東西に綿きて水田拓け、米の産多く、藺・麦また少からず、茶を特産す。一ノ關街道西部を北上新川の東岸に沿ひて南北に通じ、追波川・北上川下流への水運ありて交通は便利なり。明治三十四年町制を施行す。此地は舊桃生郡役所の在りし地。往昔の二股川（追波川の二股村に沿ふ邊の稱）は北方柳津町の西部より西南に流れ太田（今桃生村の大字）を過ぎ、飯野（今西隣大谷地村の大字）を經て、飯野（今西隣大谷地村の大字）を過ぎ、東南に向ひ相野谷（飯野川町の大字）に至りしものにして、卽ち北上川の舊河道と推せらる。飯野川の地名もこれより出づと。大字馬鞍の丘陵を鞍掛島といひ、源義家東征の砌此處に憩ひし處と傳へらる。大字相野谷の小丘に龜ヶ森八幡宮あり。境内はいま公園となる。その西に水道貯水池を設けありて町内に飲料水を供給す。此地はもと寫西氏の領地にして、其臣須藤氏中島館（大字中島に址あり）を築きて此地を取む。備前守須藤義通の時その子貞通と謀りて主家寫西氏に叛きしが却つて敗れ、館を捨てゝ逃る。天正十八年に至り（寫西晴信の時）豐臣秀吉の爲に領邑を沒收せられたるも、寫西氏は古來の豪族なればとて、のちに至り晴信の孫重俊を高城莊に封じて二千石を賜ひ、以後伊達氏に屬す。重俊の子、伊蛟俊信は馬術の名人にして、元和中、禁裏に於いて曲馬を演じ名譽を謳はるといふ。

イーハマ　飯羽間（岐阜縣惠那郡）→木郷村

イービツ　飯櫃（千葉縣山武郡）→千代田村

イーフリ　飯降山　福井縣大野郡の北西部にある山。大野町の西方、乾側・小山・上味見・羽生の四村界上に聳立す。標高八八四米。乾側村大字丁より約四粁にして山頂に達す。山頂の展望廣く開けて壮觀、西方に草間岳を望む。別名大岳・御岳・伊猛岳。

イーホ　揖保　→揖保村（兵庫縣）

イーボ　粒丘　→中區山

イーミチ　飯道山　滋賀縣近江國甲賀郡にある山。水口町の西南方、北柚・三雲・雲井三村の境上に跨り、花崗岩質より成る。標高六六四米。山中に飯道神社・飯道寺あり。西南麓より大戸川の一上支源流す。

イームロ　飯室　→坂本（滋賀縣滋賀郡）

【飯室村】　廣島縣安藝國安佐郡の北部。太田川の左岸。地勢概ね丘陵性の山地なるも南部太田川の小支流に沿ひて水田あり、主産物は米・藺・林産物にして牧畜も行はる。省線可部線の安藝飯室驛（昭和九年設置）あり。古くは和名抄の安藝郡河内郷の内か。

イーモリ　飯盛

【飯盛山】　山形縣羽後國南置賜郡と福島縣岩代國耶麻郡に跨がる。一に飯森山にも作る。標高一五九五米。飯豐山塊東方の一峯にして、北は綿峯・鳥帽子山、西は大塚山に連なる。南置賜郡中津川村大字廣川原より約七粁、耶麻郡熱塩村より約九粁にして山頂に達す。全山火山岩より成る。

【飯盛山】　福島縣岩代國北會津郡一箕村の東南、若松市郊外約二粁の地點にある丘陵。會津平野・會津城下を一眸に收むる眺望よき處にして白虎隊の墳墓あり。（白虎隊）戊辰役（明治元年）に十五歳より十七歳の會津少年により編制せられし白虎隊は孤軍奮鬪官軍に抗したるも終に力及ばず、八月二十三日滝澤村（今の一箕村）より退却する際この山に上り悉く會津城の火焔に包まるるを見て悲憤の涙を拂ひつつ或は戰友と刺違へ或は屠腹して君恩に殉じたる壯烈さは、維新戰史を彩る。順逆の區別を神へざるは少年として假にこれを許し、世は可憐にして慨壯なる武士道精神に降ひて其行動を賞す。いま山麓に巨大なる石碑あり當年の事蹟を彫す。なほ少年白虎隊の行跡は古代巖馬の武士道精神に相通ずるものありとて伊太利國の首相ムッソリーニは昭和三年、伊太利國の名を以て記念碑を寄贈す。また墳墓の下方に榮螺堂あり、寛政年間の建立にして其構造は六段三層、高さ約一六米、旋回して昇降する狀は恰も榮螺の殼中の如きより此名あり。此堂の西側に字賀神社あり、社内に白虎隊勇士の木像を安置す。その東に清泉ありて洌々として洞窟を流れ遠く猪苗代湖に注ぐ。此洞窟は白虎隊の通りし處として知らる。

【飯盛山】　福井縣若狭國大飯・遠敷二郡に跨り、小濱灣の南に峙つ。山形飯を盛りたるに似たるよりこの名出づと。標高五八五米。

【飯盛山】　整科山（長野縣）の別稱。

【飯盛山】　岐阜縣美濃國揖斐郡久瀬村にあり。揖斐町の西北方に位し、その東麓を揖斐川南流す。標高七九三米。西方に日坂越通ず。

【飯盛山】　和泉山脈西部の一嶺。大阪府泉南郡孝子村の北部に位す。山容よりして、この名生ず。標高約三〇〇米。西麓は大川の谷にして、和泉より紀伊和歌山に通ずる山路ありて孝子越といふ。山頂に役ノ行者開基飯盛寺ありしといふ。

【飯盛山】　大阪府北河内郡四條畷村大字北條東方の山。生駒山脈の一山嶺にして標高三一八米。山頂に飯盛山城址あり。地は枚方町の南方約一〇粁大阪市の東北約一五粁にあり、東高野街道の要路に當り、古來屢〻兵戰の地となれり。卽ち吉野時代には正平四年楠木正行が山下の四條畷に足利尊氏の將高師直と戰つて敗死し、室町時代には天文元年管領細川晴元が畠山氏の兵を此地に破りて城を陷れ、更に永祿年中三好長慶こゝに移り、のち織田信長に攻滅され遂に廢城となる。いま山下の北方に別格官幣社四條畷神社あり。

【飯盛嶽】　兵庫縣加西郡の東部富合村地内にありしといふ嶽。その南麓を飯盛野といふ。古は賀毛郡「飯盛嶽、右號〻然者大汝命之御飯盛〻於此嶽〻故曰〻飯盛嶽〻」

【飯盛山】　兵庫縣揖保郡の北部、香島村地内に存する山の古稱。今この名亡びて傳はらず。背は香山里に屬す。讃岐國字達郡の飯神を奉ぜし部族の來住によりてこの名起ると傳ふ。播磨風土記・揖保郡「飯盛山。讃岐國字達郡飯神之委名曰〻飯盛大刀自、此神度來古〻此山〻而居〻之、故名〻飯盛山〻」

【飯盛山】　和歌山縣那賀郡麻生津村と穴村との境界にある山。標高七四六米。粉河町の東南に位し、東麓に麻生津峠あり。高野山登山の高野街道に當る。又北麓並に南麓に含鋼硫化鐵の採掘場二、三あり。山上に飯盛城址と傳ふるものあり。建武元年十月、北條氏の殘黨六十谷定尙等、北條氏の一門なる佐々目憲法僧正を奉じて兵を起し此山に據りしも、楠木正成、高野山の大衆と共にこれを攻め翌年正月之を陷るといふ。また山下の寨址は天正年中、織田氏の兵が高野山を攻めし時、僧徒の之に據りて拒ぎし處といふ。

【飯盛山】　福岡縣早良郡金武村大字飯盛の西部にある山。其形圓く高く、恰も飯を盛りたるが如きを以て此名あり。山頂に飯盛城址あり、康安元年菊池武光征西將軍の宮を奉じて博多に出陣せる時、松浦黨の探題方一色直氏を助けて之に據りしも、菊池の將城慈南守の爲に攻落さる。

【飯盛山】　宮崎縣西諸縣郡加久藤村の南部にある山。標高八四六米。南東方に霧島國立公園の白鳥山その他の火山を望む。此山何れの方角より見ても其形狀異ならず、美しき圓頂峯をなす。故に一に奇峰の稱あり。

イーヤマ　飯山

【飯山】　→小鮎村（神奈川縣）

【飯山町】　長野縣信濃國下水内郡の西南部。千曲川の西岸に位し、川を隔てて東は下高井郡に對し、西は新潟縣中頸城郡に境し、境上に斑尾山（一三八二米）聳ゆ。概ね山地・丘陵地にして東部川岸に市街發達し、本郡の商業中心地にして、舊郡役所の所在地たり。區裁判所・警察署・營林署・長野測候所氣象觀測所及び中學校・高等女學校等あり。北は一條の縣道を以て新潟縣高田市に通じ、また千曲川に沿ひて走る谷街道東部を南北に通ず。社線飯山鐵道は飯山（大正十年設置）・北飯山（大正十二年設置）の二驛を置く。

〔飯山城〕　上杉謙信善光寺平・河中島の押へとするため天正五年工を起し七年成る。家臣、奈良澤・上倉・小佐原・南條・中曾根・小境・北城・今井・頼今戸等の諸氏交〻之を守る。同十年森長一之を領し十八年間家臣等交代して守り、慶長に至る。北國街道の要衝にて、上杉謙信此地に飯山城を築き、其後幾多の變遷を經て天正十年森氏の領となり、家臣交〻之を守り、德川家康の時、更めて森氏に賜ふ。慶長十五年以後堀氏・佐久間・松平・永井・青山氏等を經て享保二年本田若狭守三萬五千石を以て此地に封ぜられ以て明治維新に至る。此地は從來城下町として榮えしが、信濃線の開通により交通の大系に離れしためやゝ衰へしもスキー場としては長野縣に於ける最古の歴史を有し近時スキー場として著はる。〔飯山藩〕慶長五年德川家康更めて此地を森氏に賜はる。慶えて八年德川忠輝に賜ひ、家臣皆川廣照之を守る。十五年越後堀氏の族、奥田丹後守直寄、飯山三萬石を賜はり舊城を修理して之に居り、元和二年舊機田家の部將佐久間信盛の族藤佐久間備中守安次、三萬石を以て移封ぜらる。孫三十郎勝長に至り、後嗣なきを以て除籍ぜらる。寛永十五年（一本十八年に作る）松平大勝亮忠重四萬石を以て入部、曾孫忠爲に至る。寛永三年永井伊賀守直敬、三萬二千石、同八年青山太勝亮幸秀幸利

矢いで本城に治す。享保二年本多若狭守助芳、三萬五千石を以て封ぜられ、子孫相繼いで明治に至る。明治戊辰役に藩府の浪士、古屋作左衛門、江戸脱走の兵を率ゐて信州に入り越後の東軍に連合せんとし、急遽飯山城を襲ふ。本多氏屈せず、援を松代に請ふ。官軍至り本多氏を援け作左衛門を走らす。明治四年藩を廢し、長野縣となせしも間も無く之を廢し、長野縣に併さる。藩校、長遊館は文化年間本多助實の創立せしもの。〔正受庵〕上倉山の麓にあり。白隱禪師の師、惠端禪師の結庵たり、草庵今尚存す。庵に城主松平遠江守忠喬等遊の天然石の水盤並に禪師の鉄座せる座禪石、禪師の自骨を飲めたる栽松塔、禪師の母孝雪尼の無縫塔あり。〔英岩寺〕曹洞宗。長巖山。永仁年間草創。初め天台宗に屬せしを文祿四年通庵和尚現宗に改む。本尊釋迦如來。境内に觀音堂・護國堂等あり。觀音堂には傳聖德太子作の觀音像及び西國三十三箇所觀音像を安置す。また護國堂には、和光護國菩薩と稱し、嘗て飯山城の守護神たりし靈像を安す。〔西敬寺〕眞宗大谷派。倉科山と號す。建長八年開創。開基は岩倉刑部少輔親經入道浮觀。初め埴科郡倉科村にありしを寛文十二年惠性法師現地に移す。本尊阿彌陀如來。また太子堂ありて聖德太子像を安す。寺寶に、親鸞上人筆十字名號・傳聖德太子作阿彌陀如來木像・蓮如上人筆六字名號等あり。〔眞宗寺〕眞宗本願寺派。安泰山と號す。文永年中の開創。開山は教念上人。初め高井郡笠原村にありしを、天文八年宮日村に、更に寛永十一年現地に移す。〔大聖寺〕曹洞宗。照陽山と號す。元魚元年創建。開山は天柱和尚。初め飯笠山の北にありて前松寺と號せしを元和二年現地に再轉して大聖寺と改む。〔大輪寺〕愛宕町にあり。新義眞言宗豐山派。康治元年興教大師開創。文治二年尾崎城主泉小次郎親衡再建よつて、親衡を中興開山とす。本尊大日如來。〔忠恩寺〕淨土宗。松壽山松覺院と號し永祿二年長沼城主島津淡路守の開創にて開山は誾譽秋應。松江遠江守十六石の黑印狀を附す。

【飯山鐵道】 長野縣北部より新潟縣南部に至る地方鐵道。省線信越本線の豐野驛（長野縣上水内郡神郷村豐野）に起り千曲川の西邊に沿ひ、飯山町を經由して省線十日町線の十日町驛（新潟縣中魚沼郡十日町谷内）に終る七五・四粁。軌間は一〇六七米、蒸氣及びガソリン車を運轉し、省線と連帶運輸す。沿線の主要發送貨物は米・鐵及び鋼製品・生野菜・木炭。到著主要貨物はセメント・丸太類・石炭・木材類・人造肥料及び大豆粕。沿線の主要都邑たる飯山附近にはスキーの好適地多し。また上境より三軒餘に野澤温泉あり。

イイ　伊井　かい　鶴井縣越前國坂井郡の中都。金津町の東南に隣り、南半都は土地平坦にして田地拓け、北部は傾斜面をなし概ね山林地、九頭龍川の支流村内を流れ、米・清酒・絹織物の産あり。省線北陸本線本村の西部を南北に走り、社線永平寺鐵道の雲野・伊井（共に昭和四年設置）の二驛を置き、金津町より丸岡町に至る道路、また西部を南北に通ず。本村は和名抄の越前國坂井郡坪江郷の内なるべく、中世春日社の社領たり。

イイ　渭井・謂爲　おい　遠江國引佐郡の郷。和名抄は爲以と訓す。諸本には渭井に作り、高山寺本は渭爲に作る。其地は今の濱岡縣引佐郡井伊谷村・奥山村・伊平村等に當る。式内社なる渭伊神社は井伊谷村にありて祠頭に清泉湧出し、郷名は之に因るといふ。文和年中笹野新宮の領たり、井伊郷また井伊莊と稱す。正暦年中藤原共資遠江守に任ぜられ、子孫此處に居り井伊氏を稱す、これ卽ち後の彦根侯の祖とす。延元中、宗良親王井伊城に據り、東國を經略す。井伊・奥山の諸侯、心を傾けて之を輔け、のち奥山城にあり遂に奏じ、龍潭寺の後山に葬る（太平記）。これ卽ち井伊谷宮の地なりといひ、いま親王を祀る官幣中社井伊谷宮あり。

イイガネ　猪位金村　がねむら　福岡縣豐前國田川郡の西部。後藤寺町の南に隣り、西は猪鉢山（二一四米）・金國山（四二二米）等ありて嘉穗郡に界す。村内飛れ山地なるも東邊は遠賀川の上支に沿ひ耕地拓く。縣道ほゞ中央を南北に通じ、西南は嘉穗郡大隈町へ、東北は香春町方面へ通ず。本村は筑豐炭田の中部に位し、山田・上山田の二炭礦あり、また豐州炭礦・三井山野炭礦の礦區の一部を成す。此地和名抄の田河郡位登郷の内か、大字位登は其遺稱なりといふ。また此地は神功皇后御凱陣の碑、暫時駐り給ひ、應神天皇の御卽位を告宣ありし最初の地なるが故に位登と稱せりといふ。〔白鳥神社〕大字猪國に鎮座。郷社・祭神、日本武尊・景行天皇・稻田姫命。創立年代未詳なるも、上古日本武尊熊襲征伐の時この地に於いて天神地祇を祀らせ給ひ、里人その御威德を慕ひ社殿を建て之を祀りしと傳ふ。もと鎮守大明神と稱せしを、維新の際現社名に改稱す。末社弟彦社あり弟彦公を祀る。美濃國の人にて善く射技に長ぜしにより日本武尊に隨從し來りしもの、此處にその墓と傳ふるものあり。近郷上下の尊信篤し。〔位登八幡神社〕大字位登に鎮座。郷社。祭神豐日別命・足仲彦天皇・豐田天皇・神功皇后・筑紫三柱神。創立年代詳かならざるも、もと豐日別神社と稱せしを、後八幡神を勸請するに至り、現社名に改稱せりといふ。地方の古社にして、古來近郷上下の尊信篤し。

イイダ　伊井田　いだ　鳥取縣八頭郡にありし村。大正七年本村及び大江村を廢し其區域を以て大伊村を置く。

イイノヤ　井伊谷村　やむら　靜岡縣遠江國引佐郡の南部。無名湖の北東方、都田川の一支流の流域を占め村内は概ね赤石山脈の餘脈に屬する丘陵性山地にして北境に三嶽山（四六七米）あり。川の流域に耕地拓け、道路またこれに沿ひて南隣の金指町及び氣賀町に通ず。社線濱松鐵道西南線に通じて正樂寺驛（大正十二年設置）を置く。產物は米を主とし養蠶、家畜の飼養行はる。此地は和名抄の引佐郡渭爲郷の内にて井伊氏發祥の地。また後醍醐天皇の皇子宗良親王（妙法院宮尊澄法親王）御陵故の地にして、親王は御兄護良親王と共に足利氏と戰はれ、のち井伊城・三嶽山城に據りて東海の經略に盡され、遠信その他各地に奔走し、具さに艱苦を嘗められしも御志遂に成らず、元中二年城陷り、井伊城に薨ぜらる。〔井伊城〕城山の下にあり。井伊家累代の城館にして、山上の小平地は宗良親王の御座所跡なりと傳ふ。李花集「延元四年の春の頃遠江の國井伊の城に侍しに……夕暮は誰もそことしらすけの入海かけて霞む松原　宗良親王」。〔三嶽山城〕大字三嶽にあり。延元四年宗良親王これに據りて高師泰の軍を防ぎ給ふ。後永正十一年尾張守護斯波義達籠城せしが今川勢の劫比奈泰以に攻略せらる。いま此地に三嶽神社あり、式内大[illegible]神社の遺址なりといはる。背後の三嶽は西遠第一の勝地といはれ、四周の展望雄麗なり。〔井伊谷宮〕大字井伊谷にあり。官幣中社。祭神宗良親王。親王延元二年初めて井伊城に入り給ひ、爾來長馬怪信各地に流離して具さに艱苦を嘗め給ひしかども、南風競はずして御志寛に成らず、元中二年此地に歿じ給ふ。御墓は本宮の背後にありて冷淡寺御墓と稱し來れり。明治五年本宮を創立し同六年官幣中社に列せらる。所藏の國洲の太刀一口は國寶。〔渭伊神社〕大字井伊谷に鎮座。郷社。式内社。祭神、息長帶姫命外數神。三代實錄「從五位下」舊稱八幡宮。境内老樹鬱蒼、河水その三方を繞りて風致よし。例祭八月十四・十五日。〔龍潭寺〕大字井伊谷にあり。臨濟宗妙心寺派。萬松山と號し、もと冷淡寺・安泰寺とも稱す。寺傳に據れば元中二年八月十日宗良親王此地の井伊館に薨ぜられ、其追福のため翌三年本寺を創建、法諡に因みて冷淡寺と號す。永祿三年燒失、再建して龍潭寺と改む。本堂は傳行基作地藏菩薩。本堂板欄の彫刻の精巧と後庭假山の優雅を以て諸國に聞ゆ。庭園は指定名勝たり。〔龍潭寺庭園〕指定名勝。寺傳によれば小堀遠江守政一の作といふも詳ならず。本堂北方に南面して築かれたる築山の麓に東西に長き池を穿ち、山上に守護石風の石を立て其の東方瀑布に擬したる石組より池に向ひて谷谷を造る。池の北岸は汀線屈曲して石組また變化に富めるも、南岸は單調にして殆ど一直線に近く、池の東西兩端に二神石風の石組を構へたる等、江戸時代中期に著く造庭家間に行はれたる所謂郎傳書類に數ふる所の形式を最もよく傳へたるものといふを得べし。

イイン　伊院面　いんめん　朝鮮忠清北道沃川郡の南端。東南境は永同郡に、西南境は全羅北道錦山郡に界す。西境は大聖山（七〇五米）の山地、東北部は丘陵起伏するも錦江の上流東方より來りほゞ中部の地を曲流して北隣東二面に出で、その沿岸耕地拓け、街道また中部を東西に通ず。總督府鐵道京釜本線これに並行し伊院里に伊院驛（明治三十八年設置）を置く。產物に米穀類・麻・絹等を出し、養蠶も行はれ、叺の製產多し。首邑伊院里は錦江に沿ひ物資集散の市場をなす。もとの伊内・伊南の二面を合併して建てし面。昔時は伊原と稱し京山府に屬す。

イウ　意宇　おう　↓**壹宇**

イウチ　井内峠　ちう　愛媛縣温泉郡と上浮穴郡との境上にある峠の一。石鎚山脈西方山脊の坂路北方川上村より三内村を經て川瀬村に出づる間道の一にて最高點一〇八八米。東方約三粁に白猪峠、西方約四粁に上林峠あり。

イエ　伊江

【伊江村】 沖繩縣琉球國國頭郡の西部。沖繩島西岸の本部半島の西北方、約五粁にある伊江島の地を占む。島は算盤狀をなし東は伊江水道を隔てゝ本部半島の先端備瀬埼に對す。伊江城山（約一八五米）東部中央に峙ち、山頂よりは沖繩島・北方諸島を望み展望雄麗なり。沿岸に珊瑚礁發達するも南岸の川平に小鎮地を有し、本部・名護等の諸港へ發動機船による交通あり。島の西端海岸に豐泉あり。甘蔗を栽培し黑糖を出す。伊江は古くは移山・椅山等にも作り、乾隆帳に初めて東江・西江・川手の三新村を載す。東江・西江は東伊江・西伊江の略なり。〔權現堂及び照太寺〕字西江前にあり。浮龜山と號す。明の嘉靖（大永）年間の創建。天文二十三年此地毎夜奇光を放つ、尙清王、人をして之を檢せしめて一古鏡を發見し、老僧等に考證せしむ。諸僧これを天照大神の垂跡なりと答ふ。よりて權現堂を建立して此鏡を奉安し、堂側に照太寺を營み觀音菩薩を祀る。寺は臨濟宗妙心寺派に屬し、首里市安國寺より住職を選任す。

【伊江水道】 沖繩縣沖繩島の西海岸。本部半島と其の西方海上の伊江島の間にある海峽。幅約五粁、水深きを以て船舶の航行自由なり。

イエキ　家城村　いへ　三重縣伊勢國一志郡の西部。雲出川（家城川）中部を北流し、その兩岸に耕地あれど他は概ね丘陵地、主產物は米・蒟蒻及び工業これに次ぐ。初濱新街道に當り、省線名松線の家城驛（昭和六年設置）あり。古くは和名抄の岩野郷の内。仁德紀に華別皇子・雉鳥皇女の屍を埋めし蟲狩河邊は此地に當るといふ。古事記傳に「川を隔て北家城のあたりに、石を疊みて造れる

窟ありて、里人夫婦窟と云り、是れ隼別雄女の御墓なるべし、其窟の上に塚あり、是下方崩れて内なる岩構への顯はれたる者なるべし」とあり。家城とは家に似たる石城あるに因めるものか。中世は家城荘といひ、東鑑文治三年に家城荘地頭官陸六郎と見ゆ。また雲出川の流域に瀬戸淵と呼ぶ勝地あり。瀬戸淵は南家城の雲出川流域に属し、奇石怪岩多し、鮎な名産とし、年々盛賀の客あり、津藩主藤堂氏常に之に至り御殿場の字を遺す。寛文四年藤堂の家人山中弥綱此地の水理を修治したることあり、文政中郡宰碑を建てて其事を記せしも、碑石今なし。仁徳紀・四十年春三月「納二雌鳥皇女一、欲レ爲二皇后一、時皇子密親愛、而久之不二復命一……則欲レ殺二隼別皇子一、時皇子準二雌鳥皇女一、欲レ納二伊勢神宮一而驕、於是天皇聞二隼別皇子逃走一、即遣二吉備品遊部雄鳥、播磨佐伯直阿俄能胡一曰、追之所レ逮即殺、……雄鳥等追之至二菟田一、迫二於素珥山一、時歴二草中一、僅得免、急走而越レ山、……以急及子伊勢齊代野一而殺レ之……乃以二王屍一埋二于處梓河邊一而復命」

イエジマ　家島町　飾磨郡の南方、播磨灘にあり家島群島を占む。家島・男鹿・防勢・西ノ島を主とし附近の小嶼二十數箇より成り、風光明媚。主生業は漁業なるも農耕も行はる。特産物は石材・引網（藁草）等。交通は家島の東北部宮浦に鎮地あり、飾磨港とは毎日汽船を通ず。古くは萬葉集に伊敵之麻と見え一説に播磨風土記揖保郡の條に伊刀島とあるは家島群島の總稱なりといはれ、同書には家島は人民家を建てて居住せるより名付くとあり。また延喜式には此島に於て馬を飼養せりとの記事あり。昭和三年町制施行。町名は正しくはイヘジマなるが土地の人エジマと發音す現在土地に傳はる傳説として、家島の名は神武天皇御東征の砌、家島の港に入り給ひし時風なく波穏かにて家に居るが如くなりしため斯く名づくといふ。然し此地は御東征の道順に當るゆゑ御船を寄せられし事はあり得るも、かの傳説が果して事實なりしや否や今謎に斷じ難し。萬葉・一五「伊敵之麻は名にこそ有けれ海原をあかこひ來つる妹もあらなくに」播磨風土記揖保郡家島、人民作レ家而居レ之故號二家島一、生二竹黒島等一」延喜式・左馬寮式「見放二播磨國家島御馬、寮直移レ國放繁二雲別三十疋、從二當年十月一始放飼。來年三月繋取。其路次之國、各充二使等食并乘夫、遣送」（家島神社）大宇宮浦に鎮座。郷社。祭神大己貴命・少彦名命。創立年代詳かならざるも、仁明天皇承和七年既に官社に與かり醍醐天皇延喜の制名神大社に列して迎年の國幣を受く。宮浦明神・檜島明神・白鷺大明神とも稱す。近世近郷の氏神たり。例祭七月二十五日。

イエナカ　家中村　朝木縣下野國下郡賀郡の北部。栃木町の正北、壬生町の西北、下都賀郡の鹿沼町への舊例幣使街道に沿ひ、もとは標茅駅の東偏に位し小倉川東境を流る。土地概れ平坦なる洪積層の土壌にして農耕に適し米・麥・大麻を産す。社線東武鐵道日光線の合戸場駅・家中駅（共に昭和四年設置）を置き、栃木町・鹿沼町へも交通便利なり。大宇合戸場は近世は例幣使街道の一宿駅にて、大永三年皆川宮内少輔宗成と宇都宮忠綱の會戦せる地、地名これに因る。升塚は當時の死屍を集めて葬りし供養塚とす。建長八年百首歌合「下野やしめちか原の草かくれさしもはなしにもゆる思ひそ光俊」（光明寺）大宇家中にあり。新義舊言宗豐山派。延喜三年觀賢法印の草創。再度の炎上に所蔵墨く島有に歸す。

イエヌチ　家内谷　一にヤヌチ谷・カキヌ谷と訓む。兵庫縣揖保郡の北部、香島村大字香山字家氏にある谷の古稱。揖保川の西岸にあり。古へ香山里に屬す。播磨風土記「家内谷　即是香山之谷、形如二垣廻一故號二家内谷一」

イエノオク　家奥　↓社村（鳥取縣）

イエノコ　家之子　↓公平村（千葉縣）

イエン　委延面　朝鮮平安北道雲山郡の東邊。北は楚山郡桃源面・松面に隣に、東と南は寒邊郡泰平面と南松面に隣接す。西北境に東林山（一一六五米）聳え、西内地など山地をなす。たゞ清川江の支流九龍江は西南邊を東南に流れて、其流域に平地を有し耕地を拓く。二等道路南北に走り、東北境の牛峴嶺を越えて桃源面に入る。南部苦下洞に温泉湧出す、温井と呼ばれ往昔より名高く、湧出量は一畫夜に約一三・一竏。四時浴客絶えず。また上院洞に古延州城あり、高麗朝に築かれたる土城にして長さ四八一米餘、今は城壁頽破してたゞ其の基趾を殘せるのみ。

イエン　威遠面　朝鮮平安北道義州郡の西南部。南は三橋川を隔てゝ龍川郡楊先面に對す。北境に白馬山（四〇九米）聳え、其山支東南及び西南部に延び丘陵地をなし、たゞ南邊の三橋川の沿岸及び中部に平地ありて耕地拓け米穀の産あり。また家畜の飼養盛んに行はる。三橋川より冬季に採取する天然氷は良質を以て知られ鮮内第一と稱せらる。總督府鐵道京義本線は面の西南部を通じて白馬駅（明治四十一年設置）を置き、三橋川鉱横附近の川邊は水泳場の設備整ひ、安東・新義州等の諸市より來遊する者多し。「白馬城」白馬駅より北方約六粁、白馬山の中腹にあり。内城と外城とより成り、内城は高麗時代、外城は李朝時代何れも外敵に備へて築城せられしもの、四方に城門の設あり。城の西北隅たる北斜台は、三橋川流域平野を臨てて南は遠く多獅島朝

近の碧海、西は安東・新義州の市街を遠かに望み展望佳秀の地。また城内は櫻花・紅葉の名所として知られ、訪客多し。

イオー　硫黄　【硫黄山】岩手縣登の別稱。
【硫黄山】跡佐登山の別稱。
【硫黄山】那須火山脈の一峯。秋田縣鹿角郡と山形縣飽北郡とに跨る。標高一三六六米。焼山ともいふ。北方に硫黄鑛山あり。西麓に温黒川流れ河畔に能湯湧く。
【硫黄山】安達太良山の別稱。
【硫黄島諸島】硫黄列島・火山列島とも呼ばる。東京府に屬する小笠原諸島の南南西約一五〇粁の太平洋上に連る三火山島の總稱。最北の北硫黄島より南方一直線上に約八〇粁の等間隔を以て中硫黄島（單に硫黄島とも呼ぶ）・南硫黄島列なる。何れも圓錐型火山にして硫黄島を主島となし、北硫黄島これに次ぐ。硫黄島は周囲約二四粁、南西端に尖れる楔形の島にして北部に主體たる元山火山（一一一四・八米）あり、南部に摺鉢山（一名パイプ山）の小火山噴起す。元山は山頂平滑にして六階乃至十階の段丘を有し、摺鉢山は小微頭圓錐型火山にして山頂に北西に開ける火口を有す。兩火山とも略ゝ同時代に形成され、元山に十餘箇所の硫氣孔あり、摺鉢山火口よりも硫氣を噴出す。北・南硫黄島も同様の活火山とす。東京府に屬し硫黄の採取盛んに行はれ、硫黄島には約千百人、北硫黄島には約百人の居住者あり。
【硫黄澤】富山縣下新川郡にある澤。白馬槍ヶ岳の東麓より源流し、黒部川の一支組母谷川に左岸より注ぐ。
【硫黄岳】八ヶ岳火山の一峯。長野縣諏訪郡豐平村と南佐久郡南牧村の境上に聳え、山骨露はな錐狀峯。標高二七四二米。横岳（二八三〇米）の北に續き、北麓に夏澤峠（二三九二米）あり。
【硫黄岳】飛騨山脈の一峯。長野縣北安曇郡の南西隅、槍ヶ岳の北方約四粁に位し、標高二五五三・六米。南西の赤岳（二四二四米）と尾根續きにして南麓は千丈澤、北麓は硫黄澤をなし、兩澤は東麓にて合し、高瀬川の上流をなす。
【硫黄澤】信飛國境に跨る槍ヶ岳にある澤。長野縣北安曇郡南西隅。源を赤岳の西麓に發し、北走して高瀬川上支湯俣川に右岸より注ぐ。この出合の東方に硫黄岳（標高二五五三・六米）聳立す。源流地より西南に登れば硫黄澤乗越に達す。
【硫黄澤乗越】長野縣南安曇郡と岐阜縣吉城郡の境、槍ヶ岳と硫澤岳の中間部に位する乗越。東北方に降れば湯俣川に注ぐ硫黄澤に至り、西南に降れば蒲田川の上流左俣谷に至る。登山者北方より尾根を南走する際は往々此處を野宿所となす。槍ヶ岳に近く、それへは西鎌尾根を經て行く。
【硫黄岳】乗鞍火山脈帯唯一の鐵鉄活火山。長野縣南安曇郡安曇村・岐阜縣吉城郡上寶村南村界に跨り、標高二四五八米。硫黄岳とは飛騨側にての稱呼にして、信州側にては燒岳と稱せらる。山頂に楕圓形火口あり、中に數箇の小火口を有し盛んに噴氣す。この火口の南北兩側に下堀谷・中尾峠谷あり、馬蹄形の爆裂火口とす。山は明治四十年の爆發以來盛んに活動を續け、大正四年の大噴火に際し、泥流東麓梓川の水を堰塞して上高地（神河内）に大正池を形成す。昭和七年にも小爆發あり。なほ此火山の北東側なる割谷山及び南西側の白谷山は何れも舊時代に於ける噴火の中心たりし處。また硫黄岳は淺間山と活動系統に於て關係あるものゝ如く、淺間山の靜止時には硫黄岳の活動盛んとなり、淺間山の活動時には硫黄岳靜止するが常とす。登山路としては信州側に上高地・中ノ湯よりするもの、飛騨側に蒲田よりするものあり、何れも三時間前後にて達頂す。
【硫黄灘】↓伊豆灘
【硫黄島】鹿兒島縣薩摩國大島郡の北部。琉球火山帯に屬する火山島にして、十島村に屬す。東は竹島に南は永良部島・屋久島に對す。東西径七粁、南北径二粁、周圍約一二粁、東北部に硫黄島（約七五〇米）峙ち、山腹の諸處に温泉及び噴氣孔あり。其餘は概ね平地にして、島南の港口に集落あり。男子は專ら漁業（鰹釣）に、婦人は耕作に從事す。硫黄島より硫黄を産し、其上品な鷹ノ目、次品な鶏ノ目といひ古來著名。其他の産物に蕃・甘藷・蕃薯等あり。本島往時は謫人配流の地たり。治承年間僧俊寛・平康頼・藤原成親等平氏の專横を憤り、秘かに京都鹿ヶ谷に會合して討滅の策を議す。事露はれて共にこの島に流さる。のち成親・康頼の二人は京に歸るを赦されしも、俊寛のみはその恩惠に浴せず、憂悶絶せんばかり。さる程に舟出さんとしければ僧都船に乗つては降りつ、下りては乗つつ、あらまし事をそし給ひける……既に纜解いて舟押出せば僧都綱に取附き、髪になり脇になり、長の立つまでは引かれて出づ。長も及はずなりければ僧都船に取附きさて如何に各ゝ、俊寛なほ終に捨てはて給ふか。……取附給ひつる手を引きのけて船をは終に漕ぎいだす。僧都せん方なきに胸に上り倒れ伏し少き者の乳母や母などを惹ふ縋に足摺をして云々」（平家物語）。其時の足摺石といふもの今なほ存すと。其後俊寛の童僕有王師を本島に尋ねしも、數十日にして俊寛卒す。村内の法勝寺に俊寛の墓あり。有王の建立に係るといふ。また正嘉二年には平内左衛門尉俊職、元徳元年には文覚法師本島に配流せられしこと哲史に見ゆ。延喜式に太宰府別貢とみゆるは即ち本島の硫黄を指せるものにして、島名また之に起るといふ。本島を一に鬼界島（平家物語）・神小島（千載集）・鉢洟小島（和漢三才圖會）に作り、東藻愛には伊王島・硫黄灘等に

作る。又本草綱目に「引庚辛玉册云、石硫黄生南海硫球山中、僞硫黄赤佳」とあるは、琉球人硫黄を薩摩に得て琉球硫黄と稱し唐土に渡せるを斯く記せるならんいま島人曾に海邊の水の硫黄汁にて黄なるを以て黄海島の字を用ふ。當地熊野神社の社司長濱氏の系圖を見るに、其祖先は平氏の苗裔にして京師の亂を避けて此地に落來り、遂に島の守護となれりといふ。薩摩歌・下「硫黄が島は一國、流され人のあの島で、流す卒塔婆も立つ波に、寄り來る〳〵よりくる絲は國性爺合戰・四「多く群れあるは白石が島、此方に煙の立ち登るは硫黄が島」（熊野神社）村社。祭神、伊弉冉尊・事解男命・速玉男命。治承元年僧俊寛・平康頼・藤原成親が本島に流されし際、赦免を願ひて建立せるものといふ。島津義弘再び修覆せりといふ。祭事は年數度あるも、特に九月九日の神事は盛んにして、島中の婦女美粧を施して笠杖扇子等にて歌舞を奏し舞踊を成す。疱瘡流行防止の祈願なりといふ。

〔御祈神社〕僧俊寛・平康頼・藤原成親の三柱を祀る。神體は三箇の自然石にて、社は俊寛山といふ小丘の上にあり。俊寛を御所神といふは成親・康頼の二人歸京の後俊寛獨り此島に殘り、我靈を此島に留めんと祈誓せしに依れりといふ。例祭十二月二十八日。

イオー 醫王山・夷王山 いを

【醫王山】 北海道渡島國檜山郡上ノ國村の州根子岬上にある山。標高一五九米。江差・上ノ國等の港に寄泊する船の好目標たり。東北麓に於いて天ノ川日本海に注ぐ。一に夷王山・成王山に作る。松前藩祖蠣崎信廣を葬りし地にて山上に廟あり、夷王・成王の當字これに因るといふ。

【醫王山】 石川・富山二縣に跨る山。河北郡浅川村と西礪波郡西太美村境上に聳え金澤市の東南方約一三粁に位す。標高九三九米。一に硫黄山にも作る。淺野川は此山の西麓より發源す。山麓に大池あり。山腹一帶に附近の諸山と共に冬季スキー場として賑ふ。醫王はまた硫黄にも作り、この地方にてはつゞめてヨーセンと呼ぶ。山中に藥草多く、往時山上には寺院僧房多かりしが僧徒の放恣を憎み、佐久間盛政これを撃滅すといふ。

イオージ 【醫王寺】 醫王寺 いを

石川縣河北郡にありし村。明治四十年本村及び金浦・湯ノ谷の二村を廢し浅川村を建つ。

【醫王寺山】 愛知縣南設樂郡長篠村の西南部の峯。天正十三年五月長篠合戰の時武田勝頼の陣せし所。此山の南方に長篠城あり、また此山の麓には醫王寺あり。

イオージマ 伊王島（硫黄島）村 いおうじま

長崎縣肥前國西彼杵郡の西南部。長崎市の西方海上約一〇粁。南東は大中瀬戸を隔てゝ香焼島に對す。北の伊王島・南の神之島の二島よりなる。伊王島の西北端に眞鼻（伊王鼻）突出し伊王島燈塞あり、長崎港出入船舶の標識をなす。本島は三部落に分れ、二部落はカトリック教徒にして宇船津のみ佛教徒なり、船津民は純漁業、カトリック教徒は農業を主とす。村名古くは硫黄島に作る。蓋し硫黄を產せしより因ると。此地俊寛僧都の流されといはれし處其古蹟多く存するも、未だ詳なら得ず。また有馬晴信、德川家康の命に依り奇楠香を求めんがため商船を艤して亞墨港に遣はせしに、船人、亞墨人と評論し悉く殺さる。晴信之を聞き大いに驚きて家康に訴へ、亞墨港の船長崎に入らば加比丹を誅し其罪を斷ずべしとの指令を受く。既にして慶長十五年冬、亞墨港の商船長崎に入る。晴信之を駕たんとす。然るに耶蘇教徒密に之を亞墨船に告げたれば、亞墨船は逃げ去らんとせしに西風起りて船進まず、十二月晴信漁船數十を以て襲ひ遂に之を焼くといふ。一に時に西風大いに起り船漂ひて硫黄島にかへる。玆晴信卽ち火箭を射て之を焼き拂ふと。〔熊野神社〕大宇宮ノ馬場に鎮座。郷社。神伊邪那美命・速玉男命。治承年間平泰頼邸此の地に流謫せられし時勸請せるものと傳ふ。獨來名社として聞え、藩主島津氏は累代社殿の造營、太刀等の寄進をなせしと。例祭二月十一日。

イオーダニ 硫王谷 だに 牧國村（鹿兒島縣）

イオーノ 伊王野村 いおの 栃木縣下野國那須郡の東部。東は福島縣東白川郡に界す。八溝山の西北麓にて山地多く、那珂川上流の余笹川・黑川及び其の支流屈折して谿谷を作り南に下り、鹿ヶ山林原野の地。社線東野鐵道黑羽驛へ約一二粁。米・麥・繭を產す。此地は那須七騎の一なる伊王野氏の舊邑にて、古くは宵王野・靈王野・庵野などにも作る。野史によれば近世伊王野氏この地にあり卽ち那須宗隆の孫資永は宵王野次郎左衞門尉といひ伊王野氏の家祖とす。豐臣家に仕へて二千七百石を食みしも、其孫資馬資房早世し寛永十年絶家す。北條重野町に至る間の部落唐來田（古くは唐來）は新羅國の歸化人の住居せし地なりといふ。持統紀「元年三月…以投化新羅國人十四人、居下毛野國、賦田受稟、使安生業」。大宇稻澤は馬川・余笹川・板室川の合流地點邊にあり。もと、稻澤里といへる處にて、宵王野資永の弟稻澤の五郎資家、此處に住して那須氏を稱す。〔正願寺〕大宇伊王野にあり。新義眞言宗智山派（もと法相宗）。補陀洛山と稱す。弘仁年中德一國師の草創。文永年中新町に移轉せしが、寛永十年伊王野資朝之を下町に移し、寺域を城郭内に編入せるため、宿照法印之を怒りて資朝を呪詛し其子房幼折して伊王野家斷絶す、依りて聖十一年再び現地に移ると傳ふ。〔真福寺〕大宇伊王野にあり。時宗。阿彌陀如來立像一軀（金銅）は高さ一尺五寸餘、鎌倉時代

中期金銅像の優品にして國寶たり。背面に、文永四年丁卯五月日下野國北條郡須庄伊王野郷、願主佐衞門尉藤原資永也、佛師藤原光高の銘あり。佛師の光高も此地方の工匠ならんか。

イオキ 伊尾木村 いをき 高知縣土佐國安藝郡の西部。安藝町の東方約二粁。西南は土佐灣に臨む。村内纒ね山地なるも西部川北村との境を西流する伊尾木川に小鉄地を見る。國道海岸に沿ひて走り、西方高知市に通ず。大宇丸山にある穴御の洞穴中には羊齒の群落あり。洞穴は第三紀層の砂岩が水の侵蝕によりて成れるもの、高さ三米、幅二米餘あり、壁面及び水底よりは貝の化石を出す。洞は外界と斷絶され、溫度・溫度及び陰影など良く熱帶性羊齒類の生長に適し、ほうびしだの純群落、ほうらいしだ・しろやまぜんまい密生し、くりはらんの繁茂せるあり、又ころもしだ・こもちしだ・のこぎりしだ等も混生す。此等の群落の間には蔓性植物も多く、ふうとうかづら等上部より懸垂す。いま伊尾木洞の羊齒群落として指定天然記念物たり。此地は和名抄安藝郡丹生郷の内にて中世は有井庄と稱す。古書に有井又三郎の名見ゆ、蓋し有井氏は當地の豪族なりしなるべし。また幕末の勤王家横山英吉（贈從三位）は此地の產。なほ本村の切畑山より裂裟禮紋式の銅鐸（二箇）を出したることは此地方の古代史研究に留意を促すものにして、恐らく此地は古洞文化時代より開け居りたるものなるべし。〔八幡宮〕大宇伊尾木字内原に鎮座。郷社。祭神應神天皇。もと六社八幡宮とも稱す。創立年代未詳なれど、天正年間長曾我部親泰等大願主となり社殿を造營せりといふ。江戸時代に入りては藩主山内氏の崇敬を受け、社參等の事あり。尙ほ近郷の氏神たり。

イオキ 伊福 安藝國佐伯郡の郷（和名抄）。今の廣島縣安佐郡久地村の邊に當るか。鎌後紀「天長十年、安藝佐伯郡人、伊福部五百足」とあり往古伊福部の居りし處。また書紀安閑天皇元年の條に廬城部連枳莫喰が安藝國邉戸、廬城部屯倉を獻ずとあり。廬城は卽ち伊福を指せしもの、邉戸屯倉は安藝郡の地にありといふ。

イオキ 廬杵（廬城）河 いを 伊勢國一志郡雲出川の上流家城川ならんといふ。仁德紀・四十年「乃以二王屍埋子廬杵河邊」。雄略記・三年「武彦之父枳莫喰。……誘率武彦於廬城河」。※家城村

イオキ 井荻 ぬか 東京府豐多摩郡の舊町名。もと井草・荻窪を合して井荻村といひ大正十五年町制を布き井荻町となりしが、昭和七年東京市大擴張の際市に編入し杉並・和田堀・高井戸の三町と共に杉並區を建て、荻窪外十數箇の新町名に分れ井荻の町名を失ふ。中央本線の荻窪（明治二十四年設置）・西荻窪（大正十一年設置）の二驛あり、市民の住宅地。

イオサキ 庵崎 いを 古歌にある角田川は紀伊國にあり、其附近に歌枕として庵崎ありたるを以て武藏國にある隅田川附近に庵崎を設定せるものか。江戸名所圖會に「請地秋葉權現の邊なしか唱ふれど定かならず」とあり。卽ち東京市本所區隅田公園の東請地町・須崎町の邊に當るか。江都近郊名勝一覽「寒崎・木母寺の北の方、あるひは請地村といふ、その在所定かならず。今專ら木母寺の北なさしていふゆゑ、ここに列ぬ」大洪御覽「下つふさの國庵崎にいたる時分もよしと高西太郎曾、ここにやすらひて鯉の漁飽までくらひ……ここは牛島牛の御前、あちらに白髭こちらの森岸へそひしは梅若なり」

イオサキ 廬前・廬崎 いを 紀伊國の古地名。歌枕として著はる。その地いま詳かならざるも、今の和歌山縣伊都郡隅田村邊の紀ノ川を一に角太河といひ、孚生川・眞打川と紀ノ川との合流點を稱せしものならん。萬葉・三「赤打山夕越え行きて廬前の角太が原にひとりかもねむ 鮒基」

イオスナ 魚緒 だを 備中國小田郡の郷。和名抄は伊乎須奈と訓す。緒をスナと訓ずるは少しく難あり。恐らく緒は潜の誤ならん。潜は小洲の義なればスナと訓ずること必ずしも無理ならず。其地いま岡山縣小田郡笠岡町邊に當るといふも詳かならず。

イオスミ 魚住濱 すみ 播磨國明石郡海濱の古稱。歌枕。今の兵庫縣明石郡魚住村の海岸をいひしもの。名寸隅ともいふ。夫木・二五「朝なきにつりするあまのなければやいをすみの濱かすもしられぬ」

イオチ 岩内 ↓伊勢寺村（三重縣）

イオチ 廬道 いを 上總國夷隅郡の郷（和名抄）。一本に廬道とあるも廬の字恐らくは盧の誤なるべし。房總志料に盧道廢せられ伊保田村存すとあるも、今の大原町はもと中魚落と稱す。地は凡そ今の千葉郡夷隅郡大原町・御宿町・浪花村・東海村の地に當る。

イオノ 魚野川 いを 新潟郡南・北魚沼郡を流るゝ川。一に魚沼に作り、また大野川とも訛り、上田川ともいふ。三國山脈の西南部の北側に位する南魚沼郡樽村に源を發し郡の西部を北流し、右岸に登川五十澤川・三國川・小無川等の支流を容れ、北魚沼郡に入り、小出町にて西北に折れ佐梨川・羽根川・破間川・孝川等を合せ川口村に於て信濃川に合す。流程約六〇粁。省線上越線は上越國境の清水トンネルを潜り、ほゞこの川に沿ひて北上す。

イオノ 五百野 いを ↓高宮村（三重縣安濃郡）

イオノイ 廬井川 いを 近江國栗太郡にありといふ川。歌枕。延喜式に栗太郡廬井神社見ゆ（廬井に作るものあれどそれは誤なるべし）。今滋賀縣栗太郡治田村大宇下戸山の五百井神社が之に當る。

五百乃井川とは此附近を流れる川、即ち草津川の上流を指せしものなるべし。夫木・二四「近江なるいほの井川の水すみて千年の數の見えわたるかな」

イオノショー　伊保庄村　山口縣周防國熊毛郡の東南岸。柳井町（玖珂郡）の南に隣り、阿月村（もと伊保庄南村）の北に續き、東は海に面し、前面に大島郡屋代村を望む。西南境に大星山（四三一米）あり、地は西に高く東に傾斜し、海浴ひと傾斜面の谷に耕地拓け米を產し、また石材（花崗岩）を出す。なほ東北部海岸には鹽田あり鹽を產す。往昔の伊保庄、今の阿月村迄をも含む。村名の起原は往昔この地より三羽の赤鳥を志賀都に獻ぜしに、寄個感あらせられ鳥王莊と呼び給ひしも、のち伊保庄と稱稱するに至りしものといふ。〔賀茂神社〕大字保庄字近長に鎮座。鄉社。祭神、玉依姫命・三毛入野命・別雷命外一神。山城國賀茂社より勸請せし古社にて小早川氏の崇敬を受け、江戸時代元禄十四年には藩主毛利吉廣社殿を再建す。〔專稱寺〕伊保庄にあり。淨土宗。毘沙門山と號す。天正三年中瓶巻行善大德、富士山に練行して彌陀三尊を感得し、當地に一字を草創す。これ即ち當山の起原とす。

イオノショーミナミ　伊保庄南　山口縣熊毛郡にありし村。明治三十四年阿月村と改稱。

イオハラ　蘆原　↓庵原

イカ　伊香

【伊香郡】滋賀縣十二郡の一。近江國に屬し縣の北端。北は福井縣の敦賀・南條二郡に、東は岐阜縣揖斐郡、東南より南は東淺井郡及び琵琶湖に、西は高島郡に隣る。東西約二三粁、南北凡そ二七粁。面積約三五〇方粁。地勢東北西の三方は山脈々以て限り餘脈遠亙して郡中概ね山地々なし、平地は東南部の東淺井郡に接する地方のみ。本郡は地質時代の瀨戸内陸沒地帶の東部に位する地方にして琵琶湖岸は陸沒海岸の特徴を呈し段丘々以直ちに湖に臨む。河川の主なるものに高時川あり、北部に發して南流し東淺井郡に入りて琵琶湖に注ぐ。また湖畔の山中に余吳湖あり、其南嶺は有名なる古戰場賤ヶ岳なり。北國街道及び北國脇街道東淺井郡より來り木之本町にて合し北に進み北塩の樣ノ木峠を越えて越前に出づ。いま省線北陸本線ほゞ北國街道に沿ひ柳ヶ瀨トンネルを潛りて敦賀方面に向ふ。物產は蠶業を主とし、米・林產物・水產物等これに次ぐ。三代實錄・貞觀七年の條に伊香郡名見え、和名抄には以加古と讀じ柏原・安曇・淺井・揖野・余吳・片岡・伊香・大此の八郷を置く。郡家は伊香郷にあり、郡名は伊香郷より取りしものなるべし。また古くはイカガとも訓みしもの丶如く、中世にはイカコ・イカ兩樣に訓み、今は專らイカと呼ぶ。明治三十年西淺井郡（郡の西南部）を併合す。

【伊香】近江國伊香郡の郷。和名抄は以加古と訓ず。今の滋賀縣伊香郡七郷村の邊に當る。此地は物部氏の祖伊香色許雷命の族の河內國交野郡伊香郷より移住せし所といふ。七郷村の大字に物部あるはそれを證するに足るべし、古くは郡名と同じくイカガ・イカコと訓みのちイカと訓む。伊香郡の郡家置かれし地なるより中世は郡庄といへり。

イカ　威化面　朝鮮平安北道、義州郡の西北部。鴨綠江中の中島なる威化島を主郡とす。西南は新義州府に對し、西北は滿洲國安東縣に對す。面內北部の上端洞と南部の下端洞とを結ぶ道路通じ、農耕行はれ、また新義州の名物として知らるゝ白魚燒干・筏燒（白魚蒲鉾）の材料たる白魚の漁撈を初め、鴨綠江を流下する筏の繫留業多く、經濟的には多く新義州・安東の二郡會に依存す。威化島はまた歷史上著名の地にして、李成桂は高麗王辛禑の命を受けて明の定遼衛討伐のため出軍し、國境なる此島に至りしを、叛旗を擧げて急に兵を班し遂に高麗を滅し後朝鮮の太祖となれり。

イカ　猪鹿　信濃國にありし牧。延喜式・左馬寮に信濃國猪鹿牧とあり。今の長野縣南安曇郡穂高町の邊と思はる。之は同町の穂高神社にある穂高宮造營文書に「穂高村・白金村・深草……降幡牧・猪鹿牧・荒戸・多々井云々」とあり。これ等は何れも安曇郡內の村々なり。また東鑑・文治二年三月「陽草御知行國國內、乃貫未濟庄庄、召下家司等、注文被下之、可加催促、給之由云云、今日到來、注進、三箇國庄庄事（下總・信濃・越後等國國注文）」の中に「信濃國、左馬寮領、綿鹿牧」とあり、綿は猪の字の誤と見るべし。

イカ　伊賀

【伊賀國】東海道十五箇國の一。北は近江國、東は伊勢國、南と西は大和國・山城國に隣る。東西約二八粁、南北凡そ三六粁。三重縣に屬し、阿山・名賀の二郡を含む。地勢は鈴鹿山脈と笠置山脈の間に挾まれたる狹地にて世に伊賀盆地と呼ばる。上代は伊勢國に屬し飯田彦神の治めし所にして其女伊賀津の屠邑といふ。孝靈天皇の朝、伊勢の西隅を割きて此國を置き伊賀津彦の名に因み伊賀國と稱す。成務天皇の朝國造を置きしこと國造本紀に見ゆ。孝德天皇の大化改新に際し、廢して伊勢國に合せしも天武天皇の白鳳九年七月更に伊勢の四郡を割きて伊賀國を置き、尋いで國府を阿拜郡（今の阿山郡府中村）に置く。和名抄は以加と訓じ阿拜・山田・名賀・伊賀の四郡を置く。中世伊賀・伊勢の地は平氏の領地にして鎌倉時代以後は大內惟義その子惟信相次ぎて守護となり、吉野時代には足利氏その將仁木義長をして伊賀・伊勢を治めしめ、子孫相次ぎしも永正の末仁木氏衰へ北畠氏之に代る。天正七年、織田信雄其

將蒲生賢秀を送はして守護となし上野城に居らしむ。十一年信雄、羽柴秀吉と隙あり、秀吉、藤堂安治をして上野城を襲はしめ以て雄利を遂ひ、翌年信雄和を乞ひ、秀吉、藤堂安治をして上野城を封す。慶長十三年他川氏その封を收め之を藤堂高虎に賜ひ、世襲して明治維新に至る。明治二十九年阿拜・山田の二郡を併せて阿山郡、名張・伊賀二郡を併せて名賀郡とし、伊賀四郡は独に二郡となり以て今日に至る。

【伊賀（郡）】伊賀國の古郡名。天武壬申紀に郡名始めて見ゆるも建郡の期は大化改新の頃か或はそれ以前とも推せらる。壬申紀に天皇伊賀郡伊賀縣家に至りし時伊賀郡郡司數百の衆を率ゐて來り投ずとあり、伊賀縣家は今の名賀郡阿保町に當るといふ。當時本郡は伊勢國に屬し、天武天皇の白鳳九年伊勢の四郡を割きて伊賀國を置きしものにて、本郡はその四郡の一なり。和名抄には阿保・阿我・神戸・猪田・大內・長田の六郷あり、然して郡家は阿我郷に置き、のち何れの頃か長田郷及び大內郷の一部は今の阿山郡に入れり。中世藤原秀郷の裔公季伊賀守となり、四代朝光より伊賀氏を稱し本郡を領せしも、朝光の子光季京都守護となり承久の亂に官軍に殺され伊賀氏は滅亡す。また中世は國名と同樣なる郡名を改稱する議起り本郡も郡家の所在たる阿我郷の名を取り阿我郡と稱せしも寛又年中再に復せり。明治二十九年名張郡と合併し名賀郡となる。いま名賀郡の北部、長田川流域は舊伊賀郡の地に當る。

【伊賀盆地】近畿地方中部の一盆地。三重縣伊賀國（阿山・名賀二郡）の中部を占む。伊勢海岸面と瀨戸內斜面との分水嶺をなす東部の鈴鹿山脈と、西方を南北に進なる笠置山脈との中間に位する窪地にして東部は高く西方に傾斜す。柘植・服部・長田の三川東部の山脈中に發し盆地の北西部に於いて合流し伊賀川となり、西方京都府に入りて木津川となる。また木津川の一支流たる名張川は東南部の山地より出でゝ盆地の南西邊を貫き西隣奈良縣の東北部を掠め京都府に入る。四周に山地を繞らし自ら別地區をなすも、近畿東海地方の交通路に當るを以て古來道路はよく發達し北部の柘植川に沿ひて東海道に連絡する大和街道、中部の上野町より津市に通ずる伊賀街道、奈良縣磯城郡初瀨町より南部の伊賀名張町を經て津市に通ずる初瀨街道等は東西に橫斷し、上野町より名張町に至る名張街道南北に通す。鐵道は省線關西本線は大和街道に、社線參宮急行電鐵は初瀨街道に、同電鐵の伊賀線は名張街道に沿ひて通ず。盆地の氣候の一特徴として寒暑の差比較的に著しく、夏季は溫度高きを以て伊賀米を始め穀類・蔬菜類の產多く、又養蠶も行はる。また山地よりは松・杉等の用材を出す。上野町を中心として製絲機業行はれ、北部の地よりは伊賀燒の特產あり。

【伊賀川】三重縣伊賀國にある川。木津川の上流。上源柘植川東北部東柘植村に出でゝ西南流し、河合村にて西北より來る川合川を合し、伊賀盆地に於いて東境より來る服部川、南邊より發する長田川を合せて伊賀川となり、大和に入りて名張川と合して木津川となる。

【伊賀越】平安時代以前の東國より大和に至る官道。現今の三重縣關町より鈴鹿山の西に並ぶ油日岳、南方の加太越を越え、伊賀國柘植・佐那具・上野・島ヶ原の諸郡を過ぎ京都府笠置に出でゝ奈良に通ずる街道。今省線關西本線は大體この途を通ず。寛永十一年十一月備前國岡山の城主松平宮內少輔忠雄の家臣渡邊數馬は、その姉婿荒木又右衛門の助太刀にて、伊賀上野小田町に於いて同藩の士河合又五郎及び又五郎を庇護せるその伯父河合勘右衛門・櫻井半兵衛等を邀擊し、弟源太夫の傷を報ず。世にこれを伊賀越仇討と稱す。巡上野町

【伊賀山】伊賀國伊賀郡にありしといふ山。歌枕。今の三重縣名賀郡の內、名張町附近の山を稱せしものか。家集「伊賀山のいはねつたひのまくすこそかたきつちさかうちみはつらめ　丹後」

【伊賀青蕊】伊賀國の古地名。雄略天皇の十八年、朝命により物部莵代宿禰・物部目連の伊勢の朝日郎を伐ちし時、朝日郎は官軍を此處に進へ戰ひたり。其地いま詳かならざるも、青は大に通じ大塚な稱せるもの。今三重縣阿山郡府中村佐那具の邊ならん。また青は阿保に通ずるゆゑ三重縣名賀郡阿保町に振るもあり。日本書紀・雄略天皇の條「十八年秋八月己亥朔申、遣物部莵代宿禰、物部目連、以伐伊勢朝日郎、朝日郎聞官軍至、即逃戰於伊賀青蕊」

【伊賀中山】伊賀國の古地名。天武紀、急行到伊賀郡、焚伊賀驛家、證子伊賀中山、兩當國郡司等率數百衆、歸焉」と見え、天武天皇此處を御經由遊ばされしと。其地は今の三重縣名賀郡阿保町の大字岡田の附近なりといふ。書紀通證に「在伊賀郡岡田村下河原村（今上津村大字）之間、今中山寺之名存」とあり、管笠日記に「明はててやとりを出づ。十町ばかり行て、道の左に中山といふ山のいはほ、いとあやし。何つちの伊賀の中山なかなかに見れば過きうき岸の岩むら」金葉「なかむれは伊賀の中山きりはれて月に數ふる雁かれの歌　源三位頼政」と見ゆ。

【伊賀上野】省線關西本線の一驛（明治三十年設置）にして社線參宮急行電氣鐵道の接續點。三重縣阿山郡三田村にあり。

イカガ　位賀　三河國額田郡の郷名。和名抄は訓を闕くも韋加と讀むべきならん。今の愛知縣岡崎市西北部の地に當る。同市に併合せられし元廣幡町の大字に伊賀あり、蓋し位賀の訛りにてその遺稱なるべし。

イカイ　猪養・猪飼

【猪飼山】 大和國磯城郡にありしといふ山。今の奈良縣磯城郡初瀬町の大字吉隈（吉魚張）の附近にありしものなるべし。猪養岡等と稱し古來より歌の名所たり。萬葉・八「吉名張の猪養の山に伏す鹿の標呼ぶ聲を聞くかともしさ」

【猪飼野・猪養野】 兵庫縣播磨國加東郡市場村地内草荷野の古稱。古、賀毛郡山田里に屬す。仁德天皇の世、日向肥人朝戸君ばこの野に猪を放ち飼ひたりと傳ふ。播磨風土記・賀毛郡「猪養野。右號二猪飼一者。難波高津宮御宇天皇之世。日向肥人朝戸君。天照大神坐二舟於猪持來一之可レ飼所來也。仍所レ號二此處一而放二飼猪一故曰二猪飼野一」

イガイ 伊ヶ谷 ↓三宅島伊ヶ谷村（東京府）

イカイシリ いかいしり 義經記に見ゆる地名。治承四年八月源頼朝兵を伊豆に起し石橋山の戰に一度は敗れしも海を航して安房に至り海岸に沿ひて北上して此地に至る。地は今下總國君津郡の邊と思はるゝも類似の地名なし。或は千葉縣君津郡中郷大字井尻の邊か。

イカイズ 猪甘津 往昔の難波江の一部。仁德天皇の十四年猪甘津に橋を架し小橋と稱す（紀）。當時の難波江は今の大阪市の東部の邊まで入込み、これを猪甘津と稱し後には小橋江とも玉造江とも稱せり。此入江に橋を架し以て河内・大和に通ずるに便せり。今の平野川はその名殘を留むるものなるべく、また今東成區鶴橋町に猪飼野、玉造の邊に小橋の町名殘り、往時の大體の位置を示す。書紀・仁德天皇の條「十四年冬十一月、掘二橋於猪甘津一。卽號二其處一曰二小橋一也」

イカウシ 伊香牛 北海道石狩國上川郡當麻村の大字。省線石北線の伊香牛驛（大正十一年設置）あり。

イカカ 伊加賀 大阪府北河内郡枚方町大字伊加賀の淀川に突出せる地。古來歌の名所として知らる。續後拾遺・七「我はただ風にのみこそまかせつれいかかささぎさ人は待ちけり 和泉式部」

イカカ 伊香 河内國交野郡の郷。和名抄は以加加と訓す。今の北河内郡枚方町邊に當り、その大字伊加賀は郷名の遺稱なり。この地は物部氏の祖伊迦賀色許男命の居りし所といふ。

イカカ 五十河村 京都府丹後國中郡の東端。北は竹野郡、東及び南は與謝郡に境し、東境に成相山（五六九米）あり、北東西の三面は山を以て圍まれ、竹野川の上流の一支その水を集めて南流し南部に水田拓け、產物は米を第一とし林產物これに次ぐ。古くは和名抄、丹波郡三重郷の內。此地に長者屋敷といふ地あり、俗に億計・弘計二王子の牛飼となりて潛み給ひし舊蹟なりと傳ふ。

イカガサキ 如何崎 近江國琵琶湖畔の地名。石山より瀬田に至る間の瀬田川の邊なるべし。古今・物名「かちにあたる涙のしつくを春なればいかかさきなる花とみさらん 彙覽玉」鎖鈴日記「いかが崎、山吹の崎などいふ所所見やりて鹿の中より漕ぎ行く」枕草子「崎は、かち崎、いかが崎、みなか崎」

イカグ 伊香具村 滋賀縣近江國伊香郡の南部。南は古保利村、北は余吳村に隣り、西は琵琶湖に臨み、湖畔に沿ひて賤ヶ山の南麓迄なり、丘陵多なるも東部に平地ありて、米・薯・林產物等の產あり。古くは和名抄、大社郷の內にして今の大字大音は郷名の轉訛せるものか。縣社伊香具神社鎭座す。有名な賤ヶ嶽の戰に此地は兵馬の巷となりし處。大字大音に粉掛地蔵と呼ぶ地蔵尊あり、婦女の手足の皮膚の荒れし時、米麥の粉を此地蔵に振掛くれば癒ゆるといふ。また大字山梨子は賤ヶ嶽の南麓に位し、夫木・三一に「外ようりも光さびしくさやけきは月のかくるる山なしのさと 津守國基」とある地。〔伊香具神社〕縣社。大字大音に鎭座。一に大音大明神といふ。祭神、伊香連の祖神、伊香津臣命。延喜の制名神大社に列せる名社。吉野朝以降武家の崇敬厚く、足利氏・淺井氏等各〻社領を寄進せり。本社の社司は世々伊香氏を稱せりといふ。例祭四月六日。

イカコ 伊香・伊香胡 【伊香（伊香胡山）】 萬葉集に見ゆる山。近江國伊香郡（古くはイカコ）の山を指せしものならんも、其何れの山に當るやいまし詳かならず。一說に伊香郡伊香具村北部の山を指せるものといふ。萬葉・八「伊香山野邊に咲きたる藤見れば君が家なる尾花しぬ恋ほゆ 笠郎臣金村」

【伊香湖】 滋賀縣近江國伊香郡にある余吳湖の舊稱。夫木・二五「いかこかた余胡の浦わに引く網のめなならへてもあはてやめとか 權中納言長方」

【伊香小江】 滋賀縣伊香郡余吳湖の古稱。※余吳湖

イカコ 伊香古浦 近江國伊香郡の湖岸。歌枕。いまの滋賀縣伊香郡伊香具村邊の琵琶湖岸なるべし。散木「近江の伊香古と云所へまかりける人のもとへつかはしける いはやなしらでや人の袖くらむいかこの浦はみるめなしとも」

イカサ 井笠鐵道 岡山縣西南部にある地方鐵道。省線山陽本線の笠岡驛（岡山縣小田郡笠岡町）に起り、岡山縣後月郡高屋町の高屋驛まで二三・五粁と、岡線中小田郡北川村の北川驛より分れて川面村東川面の矢掛驛まで五・八粁、合計二九・三粁の線路を有す。軌間は〇・七六二米、蒸氣及びガソリン車運轉にて省線連帶運輸をなす。沿線の主要發送貨物は、菜油・葉煙草及び果物・野菜等の食料品にして、到著貨物は僅少の米の外特記すべきものなし。高屋に於いて神高鐵道（元の兩備鐵道）に接續す。また矢掛の東一粁には鬼ヶ嶽溫泉あり。

イカザキ 五十崎町 愛媛縣伊豫國宮多郡の中部。大洲町を去る東方約一〇粁。內子町の南に隣接し、肱川の支流中山川東境を南流す。西境に神南山（七一〇米）峙ち、村內殘れる山地を成し、川に沿ひ僅少の耕地を見るのみ。國道北部を過ぎり、また省線內子線の五十崎驛（大正五年設置）あり。五十崎は往時の郷名なるも何時しか村名となり、江戸時代大洲藩に屬せり。大正九年町制を布く。〔字都宮神社〕 大字吉田に鎭座。郷社。祭神、大己貴命・建御名方命・事代主命・摺賀末能之御魂天疎向津媛命。元弘元年大和守紀房永男薩摩守・下野國字都宮を勸請して大津城の守護神となし、且つ五十崎郷の總鎭守と仰ぐといふ。天正四年城主伊賀崎修理大輔綱實社殿を造營す。古來近郷十二箇村の產土神として尊崇ぜらる。

イカザワ 五十澤村 新潟縣越後國南魚沼郡の東部。六日町東隣の山村、東南境は三國山脈によりて群馬縣利根郡に界し、境上には中ノ岳（二〇八五米）・丹後山（一八〇九米）・下津川山（一九二八米）・牛ヶ岳（一九六二米）等の高峯連なり、北境は阿寺山（一五〇九米）・高倉山（一一四四米）等、南部は割引山（一九三一米）・金城山等の三國山脈の山支によりて圍まる。東西約一八粁、南北約一二粁の大村なるも山嶮しく谷深く、東部三國山脈より發して西流し、魚野川に合する三國川・五十澤川の下流（村の西部）に水田・桑園やゝ開け、米・繭を產し、山地よりは木炭を出す。〔正法寺〕 大字永松にあり。新義眞言宗智山派。成就山と號す。層應元年黑見治郎信春の開基にかゝり、本尊は弘法大師作聖觀世音菩薩並に親鸞上人作阿彌陀如來。文祿二年炎上し當村の武家永松某之を再建せしも、安永五年再び災火に遭ひ、天明二年營成法印之を再興して正法寺と號す。

イガシマ 五十島 新潟縣東蒲原郡下條村の大字。省線磐越西線の五十島驛（大正二年設置）あり。

イカズチ 雷 【雷峠】 越後山脈北部の山支を橫ぎる峠。山形縣羽前國西田川郡福榮村と新潟縣越後國岩船郡中俣村との境上にあり。最高點三〇五米。北流に鼠ヶ關川、南流に小俣川共に西流す。

【雷岡】 奈良縣高市郡飛鳥村大字雷にある丘。一に神名備山・神岡・三諸山ともいふ。飛鳥川の東方にありて、甘樫岡と相對す。雄略天皇の時、少子部蜾蠃の勅を奉じて雷を捕へし所と傳ふ。飛鳥神社ももと此處にありしも天長六年今の鳥形山に移す。 ※飛鳥村

【雷山】 福岡縣糸島郡雷山村と佐賀縣小城郡北山村に跨る。標高九五五米。伸哀天皇九年神功皇后この地より羽黑鷲を討伐し給ふ。山中に御遺蹟多し。古、水火雷電の神をまつる祠ありしに依り此名出づといふ。別稱、層々岳山。

【雷瀨戶】 平戸海峽の舊名。

イカタ 伊方村 愛媛縣伊豫國西宇和郡の西北部。佐田岬半島の頸部を占む。南は宇和海に臨み中央部にその支灣伊方灣深く灣入して良泊をなし。北は屈曲をなして伊豫灘に面す。村內概ね丘陵地なるも、桑園よく拓け薯の產多し。また含銅硫化鐵鑛を產出する大峯鑛山の鑛區の一部を成す。南方海上に浮ぶ黑島・鳥島の二島は景勝の地を以て知らる。此地は和名抄の宇和郡石野郷の內にして、中世以降は保內郷と稱す。古今著聞集「安貞の頃、伊豫國矢野保の內に黑島あり、人里より一里ばかり離れたるを、彼所にかつらはざまの大工と云網人有、魚を引んとてうかべひありきけるに、魚の在所より光りて見ゆるに、彼島邊の磯每におびたゞしく光りければ、喜びて網をおろし引たりしに、若干の鼠を引あげたり、其鼠引上られて皆ちり〳〵に失けり、大工あきれてぞ有ける、すべてかの島には鼠みち〳〵て、烟物を喰失ひて、得作り侍らぬとかや、陸にこそあらめ、海底まで鼠のはべらん事、不思議なり」〔八幡神社〕 大字伊方浦に鎭座。郷社。祭神、誉田別命・足仲彥命・息長帶姬命。創立年代不詳。吉野時代、正平年間今の地に神宰のことありしといふ。伊方浦の總鎭守として近村の崇敬篤し。

イカタ 膽形 ↓膽形

イカダ 筏川 木曾川下流の一分流。愛知縣尾張國海部郡鵜宮町・鍋田村の間にて本流と分流し、十四山村・飛島村の西南邊を東南に流れ海に注ぐ。流程約九粁。

イガタ 伊形 宮崎縣東臼杵郡にありし村。昭和十一年延岡市に編入。

イカダチ 伊香立村 滋賀縣近江國滋賀郡の中部。比良山脈の東側に位し、地形は西に高く東に從ひて低し。北に龍仙山（七五一米）、花折峠（五九一米）あり、西は比良山脈を取てゝ京都府愛宕郡大原村に隣り、其界に途中越（三七四米）あり。和邇・葛野の二川西部に發し東流し沿岸に耕地を拓く。物產は米を主とし、外に麥・林產物・水產物・薯等を數ふ。村名は古くは淺立とも書きしも、その起原未詳。途中越は一に栃生越・龍華越（龍花越）と稱し、京都より八瀨大原を經てこの峠を越え北國に至る要路に當り、文德天皇の創、その東麓に古の江州三圓の一たる龍花堂（龍華刹）を設く。平治物語に横川法師四五百人は信頼・義朝等の落人を打取らんとして龍華越に逆茂木を立てゝ之を守りしも、齊藤別當實盛衆徒大勢の中に曾を投與へ衆徒をして曾を奪ひ合はしめもつて難を逃れしといふは此處なり。延喜式に近江國志賀郡花氷室とみゆる郡は龍の誤りにて龍華に氷室のありしものならんといふ。またこの地には還來神社・新知恩院・伏龍嶺・慈眼庵の聖觀音像など見るべきもの多し。〔龍花刹〕 古の江州三圓の一。又龍華關

とも書く。文徳天皇の天安元年四月近江國に相坂・逢坂の外に始めて龍花・大石の二關を置く。其址は龍華越の東麓、大字上龍華の南にあり。文徳實錄・天安元年四月「始置近江國相坂大石龍花等三處之關剗、分配國司健兒等、鎮守之、唯相坂是古昔之舊關也、昨屬逆亂、不ノ用ノ門鑰、用入無ノ禁、年代久矣、而今國守正五位下紀朝臣今守上請加二處關、両更始置ノ之也」（續來神社）　大字上龍華より大字途中に至る道の北側に鎮座。社傳によれば、淳和天皇の御生母藤原旅子を祀るといひ傳へ、出陣・旅行等に無事歸還か祈願する者多し。（新知恩院）大字下在地にあり。浄土宗。京都知恩院三世秀譽上人は應仁の亂を避け一時此地に在住せる因緣により後、上人を開基として創したもの。寺寶阿彌陀如來二十五菩薩來迎圖は惠心僧都筆と傳へ、鎌倉時代の作にして國寶たり。伺境内に名木枝垂櫻あり。（伏龍祠）大字南庄の洪積層臺地の畑中にあり。才途の小祠に彩色を施せる長さ約六〇糎の木彫龍首を神體となす。神體は文化年間に、この地點より發掘せられし舊象ステゴドンの化石を龍骨と稱して祀りしもの。化石は現在東京科學博物館に陳列さる。（慈眼庵）　大字北在地にあり。本尊聖觀は國寶にして、木造高さ四尺五寸、兩足善像に鞋を穿ち、頭に天冠を載き、甲に身を固め、更に袈裟を纏ひ一種異様の形相をなす。其彫法よりして貞觀風の作風を襲ひし藤原初期の作ならんといはる。

イガチ　伊陸村　山口縣周防國玖珂郡の南部。柳井町の北に位し其界に高々峰の山嶺あり、北端には永室岳（五六三米）聳えて林野多し。中部は南北の山嶺に挾まれし小盆地にして耕地あり、この盆地の水を集めて東するものは島田川の上流をなす。主産物は米の外に麥・酒・醤・醬油・豆類・茶等。特産物は柿・松茸・椎茸・瓜類。古くは和名抄の由宇郷の内か。室町時代の頃伊賀地と稱し、安土・桃山時代には伊賀道・伊賀路に作り、江戸時代に入り伊加地・伊賀地を用ひ、後專ら伊陸と書くに至りしといふ。村名の起原は口碑の傳ふる所に據れば往古伊賀守と稱する豪族の居りしに因むといふも詳ならず。（高山寺）臨濟宗天龍寺派。日照山と號す。元應二年創建。肥州刺史夫人妙觀尼の開基にして、開山は照覺普濟禪師。當時東山建仁寺末たりしも、のち天龍寺派に改む。（大圓山勝山寺址）　天台宗。勝山寺と稱し山號を大圓山といふ。其起原詳ならざるも往時は七堂伽藍を傳ふる山寺たりしも、吉川氏岩國城へ入城後同氏に服せざりしため破壞せられて廢寺となりしものと傳ふ。また本村西部の百姓は勝山寺の莊園百姓なりしといふ。

イカッコ　五十子→北泉村（埼玉縣）

イカノ　生野　讃岐國多度郡の郷。和名抄は伊加乃と訓ず。今の香川縣仲多度郡善通寺町に當り、大字生野は其の遺稱。續左丞抄・貞治三年廳宣「留守所、可ノ早以ニ生野郷西畔、准ニ善通寺領ニ、所ノ指四至内、永停ニ止殺生、以ニ境内公田拾貳町ニ、致ニ供守修造ニ事」

イカホ　伊香保

【伊香保町】　群馬縣上野國群馬郡の西北部にある温泉町。西北は吾妻川の支流沼尾川に依りて吾妻郡に境す。町は榛名休火山の東麓、海拔約七〇〇米の邊に位し街路は急坂をなすを以て各旅館は雛段式に建築され其の眺望極めて良し。この地の温泉は古來著名にして、その他伊香保四鑑の名ある七重鑑・神天鑑・大鑑・軸尾鑑等を始めとし探勝の地甚だ多し。縣道東方の澁川町に通じ、社線東武鐵道（電車）伊香保線の伊香保驛を置く。また伊香保鋼索鐵道榛名山上に通じ新伊香保驛・榛名山驛（共に昭和四年設置）の二驛を置く。この地は和名抄、群馬郡有馬郷の地なり。伊香保の名は古く萬葉集に見え、また續日本後紀・三代實錄・延喜式等にも見え、その文字も伊加保・伊香保・伊可抱・伊香抱・伊賀保等種々に記さる。現町域は現在の温泉區域に限らず、今の榛名山を含む附近一帶にして、榛名湖の知きも萬葉集・古今集等の歌集には多く伊加保の沼と詠ぜらる。その名の起りは一説に嚴秀（嚴く秀でたる山）に出づといふ。其他北國紀行・宗祇終焉記等にも伊香保の温泉に關する記述あり、當時既に温泉としても著名なりしものゝ如し。舊記に依れば千百餘年前より儀の村民湯元に住居せしも、天正四年に至りて領主武田氏より地を賜はり現今の地に移り温泉の業を始めしといふ。また上野志には長尾氏の遺臣にして井伊直政に從ひ、關ヶ原の役に功ありし者十二人土著して郷士となり、土地・温泉を所有し執れも大屋と號すとあり。江戸時代の初め三國街道の裏道を守る關所の、南牧（今群馬郡金島村）の地に設けらるゝに至りて、これらの大屋は交替に關所守護に當り、自治の民政を施きて特別の紙幣等を發行しもつて明治初年に及べり。現今も大屋の名を存し同温泉の中心勢力を成し、また宇關屋に關所の門柱の礎石存す。（伊香保温泉）大字伊香保にあり。約八五〇米の高所の岩間に湧出するもの、引湯す。北は吾妻川の清流を隔てゝ小野子山・子持山を指顧し、東北は利根川を隔てゝ赤城の雄姿を望み、東には遠く展開せる關東平野の一部を望み、眺望頗る雄大なり。泉質は鹽類性含鐵炭酸泉にて、湯元には飲湯・御齋黒湯・大關ノ湯・浪上げの湯・黒關湯等あり。これ等の家は土地の匂配急なる爲、石垣をもつて築かれ主要道路もまた石段なり。明治十二年に英照皇太后行啓あらせられ、明治二十三年には御用邸を置かる。この地は避暑地としてのみならず、春の新緑・秋の紅葉共に良く、殊に近年スキー・スケー

ト等の設備、完備してより都人士の來り遊ぶ者多し。また德富蘆花の名作「不如歸」に、伊香保は其作中の主要なる場面として現はされ、浪子の名とともに遍く人口に膾炙せられ、當時の青年子女の憧憬の的となれり。（伊香保神社）町の西南方高地に鎮座。縣社。祭神、大穴牟遲神・少名毘古那神・健御名方神外二神。延喜の制名神大社に列し、當國三ノ宮たり。一に垂仁天皇御宇の創建といひ、一に天長元年の創建といふ。社前に昌子内親王殿下御手植の桜二株あり、今記念碑を建て名を千代ノ桜と命ぜり。例祭十月十九日。（水澤寺）大字水澤にあり。天台宗。五穀山と號す。坂東三十三所第十六番の札所。寺傳に依れば推古天皇の御宇、上野國司高光中將、菩提所として建立し高麗の僧惠觀を請じて開山とすといふ。江戸時代には二十五石の朱印あり。中世屢〻火災に罹りしも、本堂は天明年間の創建に係るといふ。御詠歌「組みくる心も清き水澤のふるき願みうるぞうれしき」

【伊香保山】　群馬縣吾妻・群馬二郡に跨る榛名山の總稱。一に伊香保嶺・伊香保呂ともいふ。萬葉・一四「伊香保嶺に雷な鳴りそね吾か上には故はなけれとも兒等に因りてそ」「伊香保呂に天雲いつき鹿沼つく人とおたふふいき裏しめとら」

＊榛名山

【伊香保嶺】　→伊香保山

【伊香保呂】　→伊香保山

【伊香保川】　群馬縣上野國群馬郡にある川。一に沼尾川。榛名湖の餘水にて榛名富士の北麓より發れ、榛名山北面を東北流して伊香保町・金島村と東村の境をなし吾妻川に注ぐ。流程約一一粁急流をなす。

【伊香保沼】　群馬縣上野國群馬郡にある榛名湖の別稱。歌枕。萬葉・一四「上毛野伊香保の沼に殖子水葱かく懇ひむとや禰求めけむ」

イカマ　伊加麻川　播磨國宍粟郡にありしといふ川。播磨風土記・宍粟郡の條に「石作里……伊加麻川、天神占ノ國之時、鳥賊在ニ於此川、故曰ニ鳥賊間川ニ」とあり、今兵庫縣宍粟郡神野村の大字に五十波あり、伊加麻の轉じて五十波となりしのか。さすれば今の揖保川の上流、引原川の神野村を流れる部分を稱せしものなるべし。五十波に小流桶川（五十波川）あり、その古稱なるべし。

イガミ　伊上　省線山陰本線の一驛（昭和五年設置）。山口縣大津郡菱海村の大字伊上にあり。

イガミ　鑄釜崎　青森縣陸奥國東津輕郡の北端。一本木村北部にて津輕海峽に突出し三厩灣の北東角をなす。崖岸峭立し、東方高野崎との間に母衣月の小灣を挾む。この邊の漁民は毎年、棒太・北海道へ出稼をなすといふ。

イカム　伊甘　石見國那賀郡の郷（和名抄）。刊本は伊加無と訓ずるも高山寺本には伊加三とあり。今の島根縣那賀郡國分村・上府村・下府村等に當り、上府村の字名伊甘は郷名の遺稱なり。石見國の國府（今下府村）の置かれし地にていま國分村に國分寺存す。また下府村に天足彦國押人命を祀る式内伊甘神社あり。この地は其後裔猪甘首の居住せし所ならん。延喜式に伊甘驛馬五疋とみゆるはこの地に置かれたるものなるも驛址いま詳ならず。八束郡に依れば伊甘郷は後世下府郷といひ、足利氏の本願になる伊甘山安國寺あり、また伊甘の古城址は足利直多の居りし所といふ。

イガヤ　伊賀屋　省線長崎本線の一驛（昭和三年設置）。佐賀縣佐賀郡兵庫村にあり。

イカラ　伊唐島　鹿兒島縣出水郡東長島村の屬島。八代海の南西部に位し、北は獅子島に、西は諸浦島に、西南は長島に對す。島形南北に狹長にして、南部に伊唐浦深く灣入す。周圍約一六粁。島中は機樹・鹿蹄生茂して花時は美觀を呈す。

イカラ　育良　→伊賀良村

イガラ　伊賀良村　長野縣信濃國下伊那郡の中部。飯田市の南に位し、阿知川の上流村の西部を南北に流れ、地勢概ね山岳地なるも東部臺地に耕地やゝ拓け米・麥・繭の產あり、三州街道東部を走り飯田市と豐橋市を結ぶ。南境にある高鳥屋山の北を通ずる間道が西隣清内路村に入る處を鳥打峠といふ。伊賀良は舊郡名にして育良にも作る。東鑑・文治二年條に「信濃國伊賀良庄惣勝寺領」とあり。今の飯田市の南、阿知川以北の松尾村・川路村・龍丘村・山本村・會地村の邊は總て伊賀良庄に屬せるもの、本村はその遺稱ならん。また延喜式に信濃國育良驛馬十疋とみゆ。往時この附近に驛を置かれたるものなるべし。なほ本村の大字大瀬の古代遺蹟より近年三角無窠有孔式の磨製石鏃を出したるも、近隣にも此種石鏃の出土せるもの多く、之によりて此邊は石器使用時代より住民ありしことを推察し得べく、此邊の古代史研究に於いて注意すべきことゝす。

イカラシ　五十嵐

【五十嵐】　新潟縣越後國南蒲原郡の萬庄名。五十嵐川上流、卽ち今の森町村・鹿峠村・長澤村の地。式内伊賀良志神社は鹿峠村大字飯田に鎮座。東鑑・建暦三年五月和田合戰に戰死せる五十嵐小豐次はこの地の人にして、五十嵐氏中興の祖なりといふ。

【五十嵐渓】　新潟縣越後國西蒲原郡内野町の海濱をいふ。西南は越前濱・角田濱に連なる。又此濱は一に有明浦といはれ歌の名所として知らる。

【五十嵐川】　信濃川の一支。一に下田川ともいふ。新潟縣越後國南蒲原郡の東部、越後山脈に屬する中ノ又山・駒形山の西

豊に發し、西北に流れ、大谷川守門川を合し、三條市に至り信濃川に入る。流程約四〇粁。上流に八木ヶ鼻の勝地あり。三條市より南會津に至る縣道はこの河道に沿ひ、森町に於いて支流守門川の谷を上り、鞍掛峠・八ッ里越を越ゆ。

イカリ 五十里 ↓湯根町（新潟縣）

イカリ 伊加利・猪狩・伊加梨）村 兵庫縣淡路國三原郡の西部。福良町の西北隣にして、東は志知村、西は阿那賀村に接す。概ね山地なるも中部に小低地あり。農産に米・麥を出し、特産に松茸あり。多摩山麓に清泉湧出し、井の神座神社を祀る。座摩神は伊賀須利神ともいふより村名に加ひられ、何時しか伊加利と省略されしものなりといふ。また平通盛の室小宰相局と從者とを祭りしといはるゝ平家七塚あり。江戸時代の國學者にして神道家たりし伸野安堆（賜從五位）はこの地の人、元祿七年に生まれ庄屋として村事に盡くす所多く、また旅行を好む。その著に常磐草（淡路の山川古蹟を編述し、名所圖繪の先驅をなせるもの）あり。同書に伊加利村は或びは猪狩に作る。八幡宮あり。正應又曰「永正元年壬申四月伊加梨庄八幡宮再興」とあり。（八幡神社）大宇伊加利に鎮座。郷社。祭神譽田別命。創立年代詳ならざるも、地方の古社にて、室町時代永正九年社殿造營の事あり、又至德二年十月二十五日の奥書を有する大般若經六百卷を藏す。例祭九月二十五日。

イカリ 沈石丘 播磨國飾磨郡伊和里の地名。大汝神は御子火明命の所業粗暴なるを愛ひ給ひ、命を因達の神山に棄て去らんとなし給ひしが、父神は命に逐はれて難船し、其折沈石の落ちたる所といふ（播磨風土記）。今の姫路市の西南郊と思はるゝもその所在明ならず。

イカリイシ 碇石村 熊本縣肥後國天草郡。天草下島の東部にて本渡町の南西約一〇粁（直線距離）を隔つ。東は宮地、南は中田、西は新合・宮地岳の村々に隣る、東西約二粁、南北約三粁の小村。概ね一〇〇—二〇〇米位の高度を有する臺地狀の林地をなし、中部は幅狹き平地あり耕地をなす。今南隣の中田村と共に飯合村を成し、役場を中田村に置く。

イカリガセキ 碇ケ關村 青森縣陸奥國南津輕郡の南部。東南は秋田縣鹿角・北秋田二郡に界す。坂梨峠（四五五米）、北秋田郡境には矢立峠（二五八米）あり。鹿角郡界には津刈・大落前の二川東南部山地に發し、西流合一して平川となり北隣館町に入る。概ね山地なれど河道に沿ひて多少の平地あり、米・林檎を產す。刈州街道矢立峠を經て北に走り、奥羽本線また之に沿ひて碇ヶ關驛（明治二十八年設置）を置く。村内に碇ヶ關營林署あり。大字古懸は謎の東北なる部落にして國上寺のある處、なほ明治戊辰役に奥羽鎮撫に向へる官軍の通過せる地なり。維新史料に「慶辰年八月十七日、鎮撫使醍醐忠敬朝臣南部に抵る、津輕氏乃ち兵を發し、軍を秋田の國境に進む、杉山某之を督し鎮關（當村に）陣し、別に一隊を唐竹村に置き東方を捲ふ、醍醐卿は佐賀藩兵を宿驛となし、古懸に行營を建つ」とあり。南部矢立峠（二五八米）は津輕南方の咽喉にて、古へ奥州路並に秋田路より津輕への旅行者は專ら此處を過したり。明治天皇御野立所跡あり。また相馬大作の津輕侵を邀撃せる地として知らる。（國上寺）大宇古懸にあり。新義眞言宗智山派。古懸山と號す。推古天皇の御宇、僧圓智阿闍梨、山中に不動堂を建立せしを、其後この地に移すといへど詳ならず。後世、津輕氏の崇敬を受け、二代信牧、田地山林を寄せ規格を定めたり。寺領二百石。領内眞言宗五山の一。明治三十年の火災にその莊麗なる堂宇は灰燼に歸し、殘れるは護摩堂の一宇のみ。本尊は木金土三體三體不動明王像、丈各六尺餘、共に脇侍二童子あり、中央木像は圓智作、右方土像は春日作、左方銅像は空海作と傳ふ。附近の波不寄八幡宮祠は坂上田村麿の自刻像を傳へて名あり。（温泉）碇ヶ關温泉は縣の東南〇・八粁にある奥類泉。湯の澤温泉・新湯の澤温泉は共に縣の南方約六粁にありて、湯の澤は鹽類泉。新湯の澤は鹽食鹽泉。續泉志云「碇關鹽類泉は、縣の北方平川の畔、赤粘土より涌出す、二泉あり、甲は熱の湯（百四十一度）といひ、乙を冷の湯（百三十八度）といふ、共に浴室をその側に設く」と。

イカルガ 何鹿郡 京都府十七郡の一。府の中部に位し丹波國に屬す。北は丹後國加佐郡、東は福井縣大飯・遠敷二郡、南は北桑田・船井二郡、西南は天田郡に隣る。東西約三六粁、南北凡そ一四粁。主邑は由良川に沿ふ綾部町にして、もと郡役所を置く。本郡は所謂丹波高原の一部にて、地勢概ね山地にて特に北部には三國ヶ岳・彌仙山等の山嶽東西に走りて國境を成す。何波は和知川船井郡より來り、郡のほゞ中部にて東部より流れ來れる上林川を合し由良川となり西流するも蜿蜒く平地に乏しく僅に綾部町の附近に平地を見るのみ。道路は舞鶴街道和知川に沿ひて船井郡より來り綾部町を經て北方加佐郡に至り、また福知山街道は西に向ひて福知山に至りて山陰道に合し若狹街道山家より分れて上林谷に沿ひて福井縣大飯郡に至る。また山陰本線和知川に沿ひて船井郡より來り綾部町を經て天田郡に入り、綾部驛より舞鶴線を分岐す。主產物は雲竜・製絲。古くは三代實錄・貞觀五年の條に郡名見え、和名抄は伊賀留加と訓じ賀美・拜師・八田・吉美・物部・香雀・小橋・高殿・私部・栗村・高津・志麻・文井・漢部・三方・餘戸の十六郷あり、郡家は三方郷に置く。郡名はこの地斑鳩多きより起るといふ。（丹波志）

イカルガ 斑鳩 【斑鳩町】 兵庫縣播磨國揖保郡の南部。揖保川の左岸に位し水田多く、業落は町の東部にあり。舊中國街道と南方網干町より來り北方の龍野町に至る縣道の交叉點に發達す。古くは和名抄の大宅郷の内、昭和六年町制を施く。大和法隆寺の別院たる古刹斑鳩寺あり、町名はこれより起る。播電自動車會社經營の太子山遊園地は町の南端に孤立せる高さ六〇米の小丘にありて公園施設を備ふ。また阿賀（今阿曾・下阿曾に分れ共に大字名となる）の地は阿曾君の祖岡化天皇の皇子日子坐の裔孫息長宿禰王・息長日子王（神功皇后の御弟）の居住の地と傳ふ（古事記）。（斑鳩寺） 大字鵤にあり。天台宗。寺地は推古天皇の御世聖德太子勝鬘經講説の時、播磨國揖保郡の水田三百六十町を賜はりし故地と傳へ、聖德太子に關係深き寺として名高し。現存の寺塔は太子殿・講堂・三重塔婆等。講堂は仁王門を入りて正面にあり、五間五面單層屋根入母屋造、本瓦葺、江戸時代の建築なり。本尊釋佛釋迦・藥師・觀音の三互像はいづれも木造し奈良時代彫刻の手法を存する鎌倉時代の優作にて國寶たり。太子殿は仁王門を入りて左手にあり聖德太子の像を安置す。また三重塔婆は仁王門を入り右手にあり室町時代の建築にして國寶たり。寶物中、釋迦三尊・十六羅漢像（粗袒金泥五輪）・聖德太子勝鬘講説圖（絹本著色一幅）・日光月光菩薩立像（木造二軀）・十二神將立像（木造八軀）は何れも國寶にして京都博物館に出陳す。【鵤田神社】 大宇鵤に鎮座。郷社。祭神、阿禮比賣命・須佐之男命。創立年代不詳なるも地方の古社なり。國内鎮守大小明神社記に「鵤田明神」と見ゆ。尚ほ近郷十二箇村の氏神として衆庶の尊信を蒐む。例祭十月十四・十五日。

【斑鳩】 大和國の古地名。今の奈良縣生駒郡法隆寺及び其附近に當る。此地ばも斑鳩の群棲せしより此名起ると傳ふ。書記・推古天皇、九年春二月、皇太子初興二宮室于斑鳩」と見え、斑鳩寺・鵤寺或は伊珂流我大寺とも稱する。法隆寺をはじめ法起寺・法輪寺等あり。この地は佛法興隆の靈地たると同時に推古時代美術の淵叢として著名。中世は斑鳩莊と稱す。三才圖會に「斑鳩里、今法隆寺東院之地是也太子居住宮跡也」とあれど、かゝる狹範圍に限られず、恐らく法隆寺・富郷二村の遠一帯を總稱せしものならん。萬葉・一二「斑鳩の因可の池の宜しくも君を言はねば念ひそ吾かする」

イカルガ 鳩里 兵庫縣加古郡にありし村。昭和四年加古川町に編入。

イカワ 井川村 靜岡縣駿河國安部郡の西北部。大井川の上流田代川の山谷を占め、東西廣き所約一六粁、南北實に五四粁、殆ど郡の北半部に當る大村。東は白根山脈によりて山梨縣中・南巨摩二郡に、西は赤石山脈を以て長野縣下伊那郡と榛原郡に界す。白根山脈にはその主峯間ノ岳（三一八九米）をはじめ、笹山・黄ヶ岳（二六二九米）・青薙山等、赤石山脈には聖見岳（三〇四七米）・赤石岳（三一二〇米）及び大無間山（赤石山脈の支脈）等の連峯高嶺相連なり田代川の谷は深く森林密生し、北部約四粁の間は全く人煙を絶つ、所謂井川谷にて林產多く、金澤鎮山よりは金・銀を產す。村の南部河谷に沿ひて小耕地開け部落發達し僅に藷・茶を出す。（諏訪神社）大宇田代諏訪山に鎮座。郷社。祭神建御名方命。永祿二年安信氏の勸請と傳ふ。爾後同氏の崇奉する所となり、又附近の總產土神として衆庶の崇信篤し。

イカワ 猪川村 岩手縣陸前國氣仙郡の中部。南は盛町大船渡町の西北部に相隣接す。東端に今出山（七六七米）峙ち、西は米上山（八七五）に限られ、東西約一二粁、南北廣き處約四粁、狹き處は僅に一粁に過ぎず中窪みの横長き山村にして、その中央を大船渡灣に注ぐ盛川縱貫す。概ね山地にして中央河邊に僅かの平地を殖す。米麥・大豆・馬鈴薯・木炭・蔬菜・藷を產す。同村はもと隣接の盛町より分離して一村を建てし地なり。同村の北端に長谷寺あり、眞言宗。境内の觀音堂は大同年中、坂上田村麿の創建と傳ふ。堂内に十一面觀世音を藏す。

イカワダニ 伊川谷村 兵庫縣播磨國明石郡の東南部。明石市の東北に接し、東境一部は神戸市須磨區に隣る。伊川須磨區の北部に出で西南流して明石市に入る。村名はこれに因む。然して何名ばは其流れのイの字形なるに因むといふ。主產物は米・蔬菜及び花卉・葉煙草等にて蕃薯の副業あり。中世は井川莊といひ、のち上下に分けしものならん。太山寺の古文書に伊河上庄の名見ゆ。太山寺は天台宗の名刹たり、吉野時代、大塔宮天台座主の資格を以て特に令旨を此寺に賜ひ數千の衆徒を率げて勤王に盡きしめしといふ。近年本村大字白水の藤師山には前方後圓墳ありて埴輪圓筒合口式の甕棺を藏し棺内より勾玉・管玉・櫛等發見せられ、また大字上脇の鬼神山にも合口式甕棺（獨生式）發見せられたるも、こは古くより此地の開け居りたるこを物語る。而して少なくとも窮記遺物を遺したる古代住人は天孫族（アイヌ族に對する）なりしことをほゞ推定し得べし。但し大字小寺の頂高山より出土したる石劍の殘片は何れの族のものなるや明ならず。（惣社）大宇上脇字鬼神山に鎮座。郷社。祭神、大己貴命・素戔嗚尊・櫛津主命・武甕槌尊。創立年代未詳なるも、後三條天皇の延久年間の勸請と傳ふ。古來郡中の惣社と仰ふがれ郷民の尊信篤し。（太山寺）大宇前開にあり。七佛藥師道場の一。露原錄足の子定藝の開基、錄足の孫宇合の創建

と傳ふ。靈龜二年字合樂師像七軀を作り國内七箇所に安置す。當寺はその一にて元正天皇の勅願所となり、更に白河・後字多二天皇の勅願所となり、元弘元年護良親王の令旨を賜ふや直ちにこれに應じて偉功を樹つ。本尊阿彌陀如來像（木造金箔押）は室町時代の作にして國寶。現存の堂宇は本堂・能堂・護摩堂・地藏堂・大日堂・釋迦堂・三重塔・權現社・仁王門・八脚門等。本堂の再建年代不詳なるも鎌倉時代中期の特徴を現はし、仁王門は室町時代の建築に係り共に國寶。尚境内には男體・女體・乾體・明明體等の瀑布あり。寺寶の刺繍曼荼羅圖二幅（鎌倉時代の作品）・法華經曼荼羅圖一幅（鎌倉時代の作）・愛染曼荼羅圖一幅（室町初期の作）・不動二童子像一幅（室町初期の作）・不動四童子一幅（室町時代の作）・釋迦三尊像一幅（鎌倉末期の作）・白衣觀音像一幅（室町時代の作）・十一面觀音像一幅（室町時代の作）・地藏菩薩像一幅（室町時代の作）・大塔宮令旨及び注進狀四通・武器鎧八領（何れも當寺の衆徒の使用せしものか）・十六羅漢像十六幅（室町時代の作）は何れも國寶。

イカンダイ　井塞臺　北海道日高國浦河郡浦河町の海岸にある丘陵。西界は鵡川、東界は向別川（向地川）にして東西約四粁。この邊一帶に中生代白堊紀の最上部層なる浦川統發達し、菊石類・三角貝等の化石を産出す。もと井塞村の地なるも、のち浦河町に併合せられし處。井塞寒の原名「イカンラニ」はアイヌ語にて「迂廻して通る坂」の義なりといふ。

イキ　牛島　兵庫縣赤穂郡坂越灣内の小島。坂越町の海岸を距る約三〇〇米、周圍約一六粁、面積凡そ七九三アールの小島にして、縣社大避神社の所有にて、古來神地として濫りに俗人の侵入せざりしため原始狀態の比較的よく保たれ居ることは有名なり。全島密林を以て覆はれ。いま天然記念物に指定され、生島樹林と稱せらる。其大部分は常綠樹にて、種々の落葉樹と草本が混生して基性植物多し。常綠樹は櫟木・しろだも・たぶのき・藪肉桂・かごのき・とべらもくこく・椿・榊・ひさかき・いす・柘榴・白樫・椎木・あべまき・かなめもち・かくれみの・南天・れすみもち・蔦蘿葉・しやしやんぼく・絶・棕櫚等あり。古くは和歌の名所。夫木・二三「朝夕にさためなき世をなげくにはいきしまにこそすむべかりけれ」

イキ　壹岐　【壹岐村】福岡縣筑前國早良郡の西北端。東は福岡市に隣接し、西は糸島郡に界し、北は今津灣に臨む。西半は郡境に聳ゆる叶嶽（三三九米）の尾嶺南北に走りて丘陵を成すも、東半は土地低平にして室見川の流域を受け水田拓く。社線北九州線室北部を東西に通ず。本村は早良炭礦の一部を成す。海岸に沿ひて東西約一粁半に瓦り生松原あり、風光明媚を以て知らる。古へ神功皇后御征韓の碑、松の枝を遠きに挿されて、若し悉なく異國を平げたる時は此枝生くべしと祈られしに果して御凱陣の際その松生きたりし故に生の松原とよばるといふ。村名壹岐も単竟生より起りしものならん。なほ本村大字戸切字西方より近年合日式の大形要棺發見せられたるも、之は彌生式なるより少なくとも之を遺したる古代住民は天孫族（アイヌ族に對す）なることを推定し得。この外に大字十六町・高木・野方・生松原等より要棺の破片出土し、殊に野方より別に箱式棺發見せらる。要するに本村の地は之等古代遺物の散布地として、餘程古くより開け居りたる事を證明するもの、此邊の古代史研究には十分留意すべきものとす。新古今・九「涼しさは生のまつ原まさるともそふる扇のかぜなわすれそ　紀貫之太后宮」（壹岐神社）生松原に鎮座。村社。祭神、壹岐眞根子神。應神天皇の九年、武内宿禰を筑紫に遣はして百姓を觀察せしむ。時に弟甘美内宿禰、讒を構へて、武内宿禰は常に天下を望むの情あり」といひしに、天皇怒り使を遣はして武内宿禰を殺さしめんとす。是時、壹岐眞根子、宿禰に「今大臣忠を以て君に事へ、既に異心無きは、天下共に知れり、願くは速に朝に謁して罪無きを辯じ、後死するも晚からず、時人僕が形の大臣に似たりといふ、故に今我代り死して以て大臣の丹心を明かにせん」といひて自殺す。後世その忠節を傳へんが爲に小祠を營む。初め遺松の邊にありしも延寶八年現地に移す。（元寇防塁址）鎌倉時代に東は糟屋郡多々良村より、西は糸島郡今津村に瓦る博多灣一帶に築かれたる石塁。文永十一年蒙古襲來の後、幕府は蒙古の再寇に備へんため少貳經資にその築造を命ず。建治二年三月十日經資は部内の地頭・御家人等に幕命を傳へ、二十日を期して人夫を率ゐ博多津に會して各自の部署に就かしめ、各〻其所領面積の一反歩毎に一寸宛の築造を課し、八月に至り工ほゞ成れり。その規模構造は場所と地勢に依りて一樣ならざるも、概ね基底部の幅二五米、高さ二・五米の土塁上に幅三米餘、高さ二米の石塁を積み上げたるものにて、石材は殘島の玄武岩・愛宕山の砂岩及び荒津山の礫岩より成るといひ、いま發掘を經て復土・砂を除きて石築のみ露出す。外側に急斜し內面に緩かにし騎馬のまゝにて駆上り敵を射下げる如く造りしものといふ。弘安四年の襲來には我軍これに據りて防ぎ、遂に蒙古軍の上陸を許さず、閏七月朝日の大風に乘じて之を潰滅せしめたり。いま所々に其の址存し、指定史蹟たり。

【壹岐國】西海道十一箇國の一。對馬國と肥前國との間に横はる大島。一島一國を成す。本國は孤島なれど朝鮮への航路に當るを以て、往古より其名著はれ神功皇后征韓の際には路を此處に取らる。今その遺跡を住吉神社に留む。國郡設置の際、壹岐・對馬・多嶽は西海九國の外に特立せしめ、島司を置き治せしむ。その島司は卽ち國司に準じたりし故、また壹岐國とも稱せり。壹岐の名義は詳かならざるも、往古は種々の字に作り、記・上「次生二伊伎嶋一亦名謂二天比登都柱一」延喜式・民部省式・上「壹岐島、下、皆壹岐石田郡」和名抄「由岐島、壹岐郡七郷、石田郡四郷」魏志「一支島」等と見え、記傳・五の條に「伊伎島は、萬葉十五に由吉能之麻と見え、和名抄にも壹岐の島は由岐とあるに由りて、由岐を古訓と思ふ人あれど、書紀繼體ノ卷の歌に以祇とよみ、此記にも、伊の字をかき、壹の字も由の假字にあらねば、本は伊伎なること明けし、然れども懷風藻に、伊支逮と言ふ姓名、目錄には雪逮と書き、又かの萬葉に由吉とあるなどを以て思ふに、必ず由伎とも通はし云べき故ある名の義と見えたり」といふ。一に神嘗の齋忌に依れる島名なりとも、又此島に雪の白潮といふ地ありて、遠方より望むに雪の如く見え、是により國名起るともいへど、何れが正しきや詳ならず。國造本紀「伊吉島造、弊余玉穂朝（繼體）、伐石井使者新羅海邊人二天津水凝後上毛布直造」姓氏錄「右京神別、壹岐直、天兒屋根命十一世孫、雷大臣之後也」等と見ゆるも、顧宗紀・三年春二月の條に「阿閉臣事代病ヒ命……壹岐嶋獄管種田、壹伎縣主先祖押見宿禰侍ヒ側」とあるより見れば、縣主とも稱せるものゝ如し。後一條天皇寛仁三年倭ヶ刀伊の賊この地に來寇し、島守藤原理忠これを防ぎて戰死し、殺害せられし者二百五十人、掠奪せられし婦女二百三十九人を數ふといふ。鎌倉時代小貳氏島事を管し、肥前松浦黨志佐・佐志・櫛津留・呼子・鳴打の五氏に島事を掌らしめしも、就中志佐氏最も强盛にして、少貳氏衰ふるや終に守護となる。亀山天皇の文永十一年蒙古來寇し守護代平内左衛門尉景隆奮戰して國に殉ず、弘安四年五月蒙古再び大擧して來り犯せし時には松浦黨の諸士防戰し死傷者多く其被害甚大たり。賊船は鉾先を轉じ筑前に向ひしも、七月一日颱風附近に遭ひ、兵船覆沒し軍兵溺死算なし。後土御門天皇の文明四年肥前岸岳城の城主波多泰來襲して悉く五氏を滅し、全島を併せて武生水町に龜尾城を築き自ら守護と稱せり。天文中泰の孫盛平して子なきを以て、肥前有馬義直の子親を迎へて嗣とせり。然るに族人これに服せず、盛の從子隆を奉じて主となす。弘治元年、隆その部下に弑せられ、親之に代りて守護となる。既にしてその臣日高喜等、その邑に據りて叛き、永祿六年平戸の松浦隆信に敗を通じ、終に波多氏を逐ひ、全島松浦氏に屬せり。爾來松浦氏の封故の如くして明治維新に至り明治四年平戸藩に屬し、のち長崎縣の管下に移さる。同二十九年石田郡を廢して壹岐郡に合し、一國一郡となる。

【壹岐郡】長崎縣九郡の一。壹岐國の全部を占む。玄海灘の西部に浮び、南は壹岐海峽（壹岐水道）を隔てゝ肥前の東松浦郡に、西北は對馬海峽を隔てゝ對馬に對す周圍約一七七粁、面積約一三九方粁。郡内概ね高原性臺地を成す。地質は基部は玄武岩より成るも上部は火山屑・火山玻璃及び第三紀層なる以て覆はれ全島到る處に耕地よく拓く。沿海には多數の島嶼蒲布し、海岸また出入多く漁釣崎・龍神崎・長者原崎・筒城崎・細崎・鳥帽子崎・戸屋崎等斗出し、其間に多數の浦灣を擁し郷野浦・勝本浦等の良港を控へ、長崎・平戸・博多等に汽船の往來あり。生業は農業を主とし米・麥・大豆等を產し、漁業また行はれて鮑・鰒・海參・雲丹等を出す。又耕牛盛んにして福岡・長崎等に移出さる。和名抄には風本・可須・那賀・田河・鯨伏・潮曲・伊宅の七郷を置く。明治二十九年石田郡を廢して本郡に合し、一國一郡となる。いま長崎縣壹岐支廳の管下。

【壹岐海峽】壹岐島と佐賀縣東松浦郡加唐島・馬渡島との間にある水路。一に壹岐水道ともいふ。東は玄海灘、西は外洋に續く。

イキサ　生佐　肥前國松浦郡の郷。和名抄は伊岐佐と訓ず。其地いま詳かならざるも、佐賀縣東松浦郡久里村の大字伊岐佐は其の遺名と見るべく、從つて久利郷の遺稱たる久里村の一部より相知町に亙る地を稱せしものならん。伊岐佐には大瀧あり、伊岐佐瀧とも見返り瀑ともいふ。高さ約七〇米。

イキサン　一貴山村　福岡縣筑前國糸島郡の西部。前原町の西南方約八粁。南は佐賀縣東松浦郡に界し、北は海に臨む。南部一帶は脊振山脈山支の山地にして、北部深江村に接する部分は土地低平にして水田拓く。縣道福岡市より來り、村の北部を過ぎりて海岸線に沿ひて西南方佐賀縣に走り、社線北九州鐵道また之に沿ひ、一貴山驛（大正十三年設置）を置く。此地は和名抄怡土郡石田郷の內か。石田を伊之木と訓ずるより見れば田は卽ち木の誤にして、一貴は石木の轉訛ならん。一に南部一貴山に夷巌寺と號する古刹あるによりてこの村名起るともいふ。大字波呂に曹洞宗の龍國寺あり。萬歲山と號し本郡怡土城主原田種直の創建に係り徳慶を開山とす。

イキス　伊岐須　省線幸袋線の貨物驛（明治三十三年設置）。福岡縣嘉穂郡二瀬町にあり。

イキス　息栖村　茨城縣常陸國鹿島郡の中部。鹿島町の南方にて其間に高松村を隔つ。東は鹿島灘に面し、西は北浦の南口鰐川・外浜逆浦・利根川を隔てゝ行方郡延方村・潮來町・千葉縣香取郡豐浦村・小見川町等に對す。東部・西南部は林

野、西北部は水田多く、農業行はれて主産物に米、副産に西瓜・砂利を出す。また日本三大原蠶飼育地の一に数へらる。鹿島町へ縣道を通じ、大字息栖と對岸小見川町間に渡船の往來あり。本村はもと中島村といひしを大正十四年息栖社名に因みて息栖村と改む。新和歌集「鹿島湯神洲の森のほとときす舟をとめてそ初音ききつる　笠間時朝」何時の頃に詠まれしものか詳らざるも、今の息栖は息栖と讀み誤り、神洲とも書きたるものと思はる。寛政中香取日記云「いきす、古くは神洲と稱へしとなん、此わたりは、川面いと廣く、そこより鹿島がたかけて、十あまりの島々ありて、小さき家どもところどころに見ゆ、これらも古へは洲にてありつらん、夕つかた西の空晴れたり、入日輝きて、平らかに廣うなる水の面ににほひ、たゞむかへる香取わたりも、過去し海上のかたも、霞ゐに見ゆるさまいとなかし、暮過るこゝろ鹿島の大舟津に舟はつ」と見ゆ。村の東岸大字居切堀あり、いま堀割川といふ。西岸の大字深芝との間、東西に長さ約五粁の溝渠を穿ち以て利根川の瀦水を鹿島灘に通ぜしめんとせしも容易に通水の自由を得ず、更に修理を加へ、僅に湖畔の田圃に灌漑するといふに止まる。鹿島郡志云「居切堀は明治年の新鑿に係り、其長四十四町、是地濕潤沿岸の稻田、毎年夏秋の際洪水あり、洪溢して禾稼を害す、因て此溝渠を開通し、水患を除かんと欲したり、雨も役成りて害除かず、測量の精からざりしにや、惜むべし」と。之に依りて土木工事の未だ幼稚なりし當時の苦心の程を推し得べし。これより先、同大字賀村に貧村堀割といふもの計畫せられたるまゝ實現せられざりしこと見ゆ。後年の居切堀はその再現と思はる。舟橋氏利根川考云「下利根、卽常陸川を快通するには、布佐・布河の高崖を抉り猶又其下流、香取郡津宮の對岸、鹿島郡加村といふ地より、東海へ奏落せば、必定水勢滯らず、自然と快流すべし、此策は水戸侯の扶持人、大原左金吾の心づきて、既に建言せんとせしかども、故障有て止みぬとぞ、津宮・加村より銚子口迄は水程七八里もあるべし、眼前近き鹿島浦の外海あるをさしおき、遠方の銚子口迄おとすは、迂遠の事なり、加村海岸より鹿島浦へ凡一里半程にすぎず、此策は常陸川一筋につきての治術なれど、返るも大改革を以て新川を掘りたきことなり」と。此事は天明年中なりといふ。この舟橋氏は治水制田の法に精通したる人なりしも、惜しいかな興宿落士とのみにて其評傳あらず。（息栖神社）同村の利根川左岸、鹿島神宮の南約一二粁。鎮社。鹿島神宮摂社。祭神、岐神・天鳥船神。岐神は武甕槌神及び經津主神の嚮導を勤められし神として名高し。當社は縣下鹿島、千葉縣香取兩神宮と並び稱せられ、兩宮と共に東國三社の一たり。その創建また鹿島・香取と同時なりと傳ふ。往昔は同村東南隣の經野村大字日川にありしも、平城天皇大同二年、藤原内麿の勅によりて現社地に遷す、光孝天皇仁和元年に神位を正六位上より從五位下に陞せらる。後鳥羽天皇建久年中の津波に社頭荒廢し、後更に火災に罹り社殿は鳥有に歸し、社寶・古記錄の多くを散逸す。中御門天皇享保八年に社殿造營さる、現在の社殿これなり。明治元年社僧を廢し、同六年郷社に列し同十年縣社に昇り、且つ鹿島神宮の摂社に定めらる。舊稱、於岐郡設神。例祭四月十三日。

イキタ　池田　上野國邑樂郡の郷。和名抄は伊岐太と訓す。那波郡にもまた池田郷ありて伊介多と訓するに此郷か伊岐太と訓するは方言に從ひしものならん。其地いま詳ならずと雖も群馬縣邑樂郡小泉町・大川村・高島村・永楽村等の地に當るか。この地は上毛野氏の族、池田朝臣の居りし所にして、また藤原秀郷六世の孫足利兼行の孫成光の此處に居り古海氏を稱せり。

イキツキ　生月（生屬）村　長崎縣肥前國北松浦郡の北部なる生月島の地を占む。東北方に大島・度島浮び、東南は生月瀬戸（辰ノ瀬戸）を隔てゝ平戸島に對す。島形狹長にして南部に茂崎斗出す。概ね山地なるも東側及び南部に平地ありて耕地開け、米・甘藷等を產し、また漁業に從ふもの多く殊に捕鯨は古來著名にして、古より世に平戸の捕鯨と稱せられしものは實に本村の漁夫によりて行はれしものなり。東岸の生月港は指定港灣たり。延喜式兵部省式「肥前國生屬馬牧」錄日本後紀・仁明天皇承和六年八月「遣唐大使藤原常嗣朝臣等、率二七隻船一、廻二着肥前國松浦郡生屬島一」等と見ゆる生屬は卽ち本村の地なり。

イキナ　生名村　愛媛縣伊豫國越智郡の東北部に位し、生名島全島を占む。周圍約一二粁。東の弓削島、南の佐島・赤穂根島、西の岩城島、北の因ノ島（廣島縣）等によりて圍繞せらる。主產物は麥・甘藷・除蟲菊・大根・柑橘・西瓜等。壬生川町及び弓削村に發動機船通ず。此地往昔は村上氏の割據せし地にして、現今も村上姓を名乘る者多し。

イキヌ　生野　但馬國朝來郡の南部、生野町地方の古稱。もと死野と稱せり。播磨國神崎郡御國里に屬す。播磨風土記「所以號生野者、昔此處在荒神、牛殺往來之人、由此號死野、後品太天皇勅云、此爲郡名、改爲生野」。

イキノ　生野島・活野島　廣島縣豊田郡大崎上島の北にある島。東野村に屬す。周圍約一二粁。

イキノマツバラ　生松原　※壱岐村（福岡縣）

イキミ　五公　越後國頸城郡の郷。和名抄は以支奈と訓す。上古は能對郷と稱し、中世は五十公野郷となし、後世、山五十公・里五十公の二郷に分つ。五公は初め五十公なりしを、地名はすべて二字となす例により十の字を省きしもの。舊事紀・天孫本紀「宇摩志麻治命八世孫、物部印岐美連公」とあり、本郷に物部郷あり、物部氏の裔孫の居りし地なれば、此郷も物部印岐美の裔孫の居りし地ならん。上杉村に五十公神社あり。今の新潟縣中頸城郡里五十野村・上杉村及び東頸城郡にも及びしものか。

イキメ　生目村　宮崎縣日向國宮崎郡の中部。大淀川の右岸に沿ふ。東は宮崎市に隣り、西は東諸縣郡に界す。南半は丘陵にて林野を成すも北半は土地低平にして水田拓け、米・麥等の農產を始め林產少からず。縣道北部をほゞ東西に走りバスを通じ、また大淀川の舟運の便あり。此地或は和名抄の宮崎郡田造郷の西か。往古は宇佐宮領たりし地なり。日向風記に依れば延元元年宮方國藤圓等、池内城に籠據りし際、之に呼應して肝屬豪酋の餘黨浮田の莊（いま大字浮田の地）に據りしが、土持新兵衛宣榮のために攻略せらるといふ。（生目神社）大字生目に鎮座。縣社。祭神、藤原景清・品陀和氣命。古來一に生目八幡宮とも稱せられ、惡七兵衛平景清の兩眼を齊祀せりといふ。景清、平氏の讐を報ぜんとして頼朝を窺ひしも成らずして捕へらる。頼朝その忠勇を愛し麾下に屬せしめんとせしも、景清肯ぜず、終に自ら兩眼を抉り以て復讐の念を絶つ。頼朝益〻其義膽を愛し、日向の勾當となし三百町を給せり。後その兩眼を飾めて祠を建て永く義士の龕鑑とせりと、これ當社創建の由緣なりといふ。今も眼病に靈驗ありとて參者少からず。例祭十月十五日。

イキリキ　伊木力村　長崎縣肥前國西彼杵郡の中部、長崎市の北方約一二粁。大村灣の南岸に沿ふ。村内丘陵に富み、概ね山林地帶に屬す。その餘波は二見瀉鼻となりて北部に斗出し、また東北岸に近く鹿島・竹ノ島の二小島あり。温州蜜柑の栽培盛んにして、村民の收入の大部分は之に依る。省線長崎本線中部を東西に走り、西部のトンネルを潜りて西隣長與村に出づ。維新前は大村領なりしも、明治四年長崎縣に屬す。

イギリボリ　居切堀　茨城縣鹿島郡息栖村にある溝渠。※息栖村

イグ　伊具郡　宮城縣十六郡の一。磐城國に屬し、縣の南部に位す。東は亘理郡、南は福島縣相馬郡、西南は伊達郡、西北は刈田郡、北は柴田郡に界す。阿武隈山地の北部に當り、東南西の三境は低山性の山岳を以て圍まれ、阿武隈川は郡の西部の山地を破りて横谷を作り、中部に出で、南部に發する内川・雄子尾川等の水を集め北折して柴田・亘理二郡界に出づ。其流域に地味肥沃なる平野を作り米・麥・大豆・馬鈴薯の農產を出す。また養蠶盛んに行はれ繭・機物を產す。縣道北方仙臺市より來り郡の中央にて二分し、一は阿武隈川に沿ひて福島市方面に、一は東方に走りて陸前濱街道に接續す。兩も交通稍〻不便なり。古くは伊貫にも作る。本郡は往古の伊久國にて、國造本紀に天湯津彦命十世孫登島命を伊久國造となす由見ゆ。仁明紀・承和七年二月の條に「伊具郡擬大穀陸奥貢成等戸二烟、賜二姓阿倍陸奥臣一」とありて、此時初めて郡名見ゆ。和名抄は以久と訓じ、粹槃・廣伴・靜戸・麻續・倉戸の五郷を管す。一に天長七年亘理郡を割きて置けりともいふ。陸奥話記に伊具十郎平永衡の名見ゆ。安信頼時の女婿にして當時國中の名族たり。文治以後は亘理武石氏伊具の郡庄なも兼知せしものゝ如く、伊具庄の名は後宇多院御領目錄に見ゆ。天正中に至り全く伊達氏の占有に歸せり。以後變遷なく以て今日に及ぶ。

イクカノミネ　いくかの峯　甲斐國の金峯山の別名。金峯山は甲信二國に跨り、標高二五九五米。北麓の水は信濃の南佐久郡へ出で千曲川の上源を爲す。此山をいくかの峰と稱するは、風雅集・春・上に見える順德院の御製「ちくま河春行く水はすみにけりきえていくかの峯の白雪」といへる御歌より出でしものなるべしといふ。

イグサ　伊草村　埼玉縣武藏國比企郡の東南部。古くは井草にも作る。越辺川の左岸に位し川越市の北方に當る。越辺川は本村の西南部にて入間川に合し南流を東流して荒川に入る。村内土地平坦にして田畑拓け米・麥・繭の產あり。村の西北部を川越市より松山町に至る道路通ず。村名は往昔蘭草生ふる濕地なりしに因むといふ。本村は和名抄の武藏國比企郡淵後郷の内にして、吉野時代は法恩寺領なりしも、のち小田原の分國に屬し、岩槻城主太田源五郎氏資の時小田原と和睦し、氏資討死の後に氏政の子十郎氏房を養子とし、此邊は悉く岩槻領となる。江戸時代初期は井草宿と稱せり。（大聖寺）黄檗宗。蘭草山鳥之坊と號す。創建年代不詳。本尊は大日如來。また千手觀音像一軀あり、此金剛官能員の守本尊なりしといふ。中興の祖は後鶴。徳川秀忠・家光この地方に遊獵の時、この寺に休憩せりといふ。

イクサカ　生坂

【生坂村】長野縣信濃國東筑摩郡の西北隅。犀川上流の右岸に沿ひ、東は岩殿山（一〇〇八米）により坂北村に接し、西は犀川を隔てゝ北安曇郡廣津村・陸郷村に對す。川の東岸に沿ひて村落あり。主產物は小麥・繭・特產物に柿・木炭・石炭・日本紙・竹あり。此地は和名抄の更科郡麻績郷の内かの。天文三年の頃より小笠原氏これを領し、獨後武田氏、石川氏これに代り後再び小笠原氏の所領となれり。元和三年より戸田氏これを領し、のち松平

氏、堀田氏等を經て寛永に至り松本侯戸田氏の預りしも明治元年より尾州徳川氏の取締る所となる。明治二年伊那縣管轄となりしも同四年筑摩縣の管轄となり、同九年筑摩縣の廢止と共に長野縣の管轄となる。小笠原氏の家臣丸山肥後守の城址あり。附近に曉寺切新道・山治路の勝地あり。曉寺切新道は東北の麻績村より本村の北境を經て北安曇郡に通ずる道路にて、麻績川の急湍に臨み斷崖絶壁をなし、山窮りて源をなし、源綿まりて瀑となり、山は梨溯の湧く如き、水は蜿蜒の變を盡むに似たり。この奇勝の畫くる所茫然として犀川の大江に臨む。之より遡ること僅にして山治路の勝地あり。南岸は生坂村にして鎮飛石・水神岩・獅子岩・河伯の窟あり。北岸は北安曇郡廣津村にて菩薩山・二十五菩薩峙立し、兩岸相迫りて絶壁峭立、梨松これを點綴し山姿水容その奇を恣にす。〔照明寺〕大字上生坂にあり。新義眞言宗智山派。生寶山と號す。開創年代不詳。もと阿彌陀堂たりしを、建長三年泉福寺弘阿法印これを興して一寺を建立す。本尊阿彌陀如來・脇立大日如來・不動明王は共に弘法大師作と傳ふ。寺寶は寶鏡二面その他。

【生坂】→↓管生村（岡山縣）

イクサガワ　軍川

【軍川】→↓豐原市（稀太郎）

【軍川】北海道渡島國亀田郡七飯村の大字。面積本線の軍川驛（明治三十六年設置）あり。

イクサト　生郷村　兵庫縣丹波國氷上郡の中部。柏原町の西北に位し東北部は丘陵地なるも西邊に加古川の上流佐治川流れ西南部に水田多し。產物は米を主とし、雞卵・瓦等これに次ぐ。省線福知山線は村を南北に貫き石生驛（明治三十二年設置）を置く。本村は明治四十年石生・本郷の二村を合併して置けるもの。古くは和名抄の石生郷に當り、大字石生はその郷名の遺稱なり。村社祇部神社は石生にあり。祭神譽田別命外二神。例祭は八月十五日。一に式内祇部神社なりと稱せらる。また石生は延喜式の屋角驛の地に擬せらるゝもいま詳ならず。なほ石生に領家方・地頭方の小字を存するは中世の莊園制度を物語る一資料たり。

イクシ　生櫛　美濃國武儀郡の郷（和名抄）。元和の頃は伊串にも作り、また後世猪串にも作る。今の岐阜縣武儀郡下有知村・中有知村・瀬尻村の地に當る。中有知村大字生櫛はその遺稱なり。

イクシ　生地町　富山縣越中國下新川郡の西北部。三日市町の北方に當り大布施村を隔つ。黒部川デルタの西部に當り、其岬端を生地鼻と稱す。町民の六割は漁業に從事し、毎年北海道・千島・樺太に出稼するもの千二百餘名に及び其收入は本町の一大財源たり。他は商工業に從ひ清酒・醬油の醸造も行はる。古は和名抄新川郡布勢郷の内にしてもと新治村と稱す。久壽元年海嘯の爲め一旦荒廢せるも、其後舊村民復歸し個來生地と稱するに至る。省線北陸本線の生地驛（明治四十三年設置）は北隣の椿村に、社線黒部鐵道石田線の生地口驛（昭和五年設置）は本村内にあり。また生地氣象觀測所あり。海邊は魚津町と共に蜃氣樓の現出にて名高く、また海水浴場の好適地にして附近に越湖濱・生地臺場・新治公園・生地鐵泉等あり。越湖濱は縣の西北部にありて、海濱一帶の白砂は、松樹の綠と相映じ雅趣いふべからず、近く白帆點々碧波に浮び、遠く能登半島を望み眺望雄大なり。濱に庚申の松あり、上杉謙信の手植の松にして守本尊毘沙門天をこの樹下に祀り、庚申佛と稱ぜしより此名あり と傳ふ。越湖濱の西南に生地臺場あり、天槍ヶ崎と稱す。富山灣東北の要點なれば文化年間に至り外國船の北邊侵略頻發せしより嘉永三年加賀藩主幕府の命により臺場を此處に築き、越湖濱に於いて兵士を訓練せりといふ。元治元年更に修築し今も原形を存す。新治公園は大正天皇東宮に在しませし時明治四十二年鶴駕を本郡に進めさせられしを記念として設置せしもの、園内に新治池あり、往古、城の湖と稱せられたる一大湖湖の跡なり。池中の月見島には毘沙門天を祀れる松廼宮五重塔あり、上杉謙信越中攻略の時、此島に來り金星を拜し天文を考究せりと傳ふ。〔生地鐵泉〕皇貴、弱發鐵泉、加熱浴用。天文年間、上杉謙信が新治八幡宮の御神託によりて發見せりと傳へ、一乘上人の浴場開設に係る由緒ある鐵泉なり。

イクシ　生路　愛知縣知多郡にありし村。明治三十九年本村及び藤江村・緒川村・石濱村・森岡村の四箇村を廢し、新たに東浦村を置く。

イクジ　活道山　山城國にありし山。一に活路山にも作る。古の慈仁京の東北、卽ち今の京都府相樂郡西和東村大字白栖にある聖武天皇の皇子安積親王の御墓地を指させるものといふ。萬葉・三山　木立の繁に　咲く花も　移ろひにけり　家持」

イクシナ　生品村　群馬縣上野國新田郡の中部。西の伊勢崎町と東の足利市の中央に位し、笠懸野の南邊に當る。土地平坦、南部に水田、中部に桑畑拓け、北部は林野をなし米・麥の產あり、養蠶行はる。太田町と伊勢崎町を結ぶ道路は南部を東西に走り、又足利市と伊勢崎町を結ぶ間道は中部を東西に通ず。この地は和名抄の新田郡驛家郷の地にして古來東山道の一要地たり。村名は生品神社に因む。大字市野井（一井・市之井とも書く）は往昔市野井郷と稱し東海道の驛家にして清和源氏新田氏の裔、家貞八郎日孫二郎と稱す）の子貞政この地に居り一井氏を稱し、太平記に一井兵部大輔義時とあるも亦この地の人なるべし。大字村田は岩

殺遠江太郎時兼の長子頼兼此處に居り村田氏を稱せし處。又大字反町には反町城址あり、元德年中新田義貞これを築き、吉野時代の半以後は大館氏こゝに居り、天正年中は反町大膳居り武勇を以て著はる。今の照明寺の寺域は其址ならんといふ。〔生品神社〕郷社。祭神、大穴牟遲神・品陀和氣命。國内神名帳「從三位生階明神」とあり、社傳によれば天喜年中、源義家の奥羽征討の礎、當社に戰勝を祈りし事ありといひ、元弘三年五月八日新田義貞は大塔宮護良親王の令旨を奉じ此社頭に於いて北條高時討伐の義旗を擧げし處と傳へらる。いま生品神社境内は新田義貞擧兵傳說地として指定史蹟たり。例祭五月八日。太平記に、「地藏寺の湯れ開えぬ前に打立てとて、同五月八日の卯の刻に、生品の明神の御前にて旗を擧げ、綸旨を捧いて三度是を拜し、笠懸野へ打出でらる。相隨ふ人々、氏族には大館七郎宗氏、子息孫次郎幸氏、二男彌次郎氏明、三男彦二郎氏兼、堀口三郎貞滿、舍弟四郎行義、岩松三郎經家、里見五郎義嶌、脇屋次郎義助、江田三郎光義、桃井次郎尙義、是等を宗徒の兵として、百五十騎には過ぎざりけり」〔照明寺〕大字反町にあり。眞言宗高野派。享保十九年祐泉法印の開創に係り、木彫に行基菩薩作藥師石像を安置す。傍に六基除の藥師と稱す、殊に正月四日には四歳に當れる幼兒の厄除に靈驗ありと稱し、飯る墓踏を祓む。

イクシマ　生島　摂津國川邊郡の舊莊名。今の兵庫縣川邊郡立花村大字栗山・大西・上ノ島の邊に當る。古くは和名抄の大神郷の一部。郷社生島神社あり、莊名はこれより起るか。平清盛の弟經盛の子經正、後鳥羽院の院宣によりて生島莊を賜はり子孫生島氏を稱すといふ。

イクシユンベツ　幾春別

【幾春別】省線幌内線の一驛（明治十五年設置）。北海道石狩國空知郡三笠山村にあり。

【幾春別川】北海道石狩國空知郡の南部を流るゝ川。三笠山村の東端、空知・夕張兩郡境に聳立する幾春別岳（一〇六八米）の西側に發して、村の中央を東西に貫流し、西隣岩見澤町の南西邊に至りて幌向川に合し石狩川に注ぐ。流程約六〇粁。沿岸山中には幾春別・市來知等の炭坑多く、市來知の市街は右岸に、岩見澤市街は左岸に發達す。原名イタシユンベツはアイヌ語にて「被方の川」を意味するといふ。

イクタ　以久田村　京都府丹波國何鹿郡の西部。由良川の右岸に位し、川を隔てゝ綾部町に隣る。此地は所謂る丹波高原に屬し東北部一帶は丘陵起伏せるも機業地綾部を控へ養蠶業者しく發達しその產額は村の生產物總額の大半を占め、南部及び西部の由良川沿岸は土地平坦にして水田多し。古くは和名抄の栗村・小

綾二郷の地にあたり、大字栗は栗村の遺稱、大字大縄は小縄に關聯ある名稱か。東鑑・文治二年の條に、栗村庄は愚德院御領、故宰相光能卿家領とみゆ。大字館には式内赤國神社及び古刹栩嚴寺、また大字位田に式内御手禊神社ありしといふ。なほ位田とは中古親王及び諸王・諸臣の五位以上の位階に對して給與せる田地にして、大字位田は古代の田制を物語る一資料たり。〔赤國神社〕大字館に鎭座。郷社。祭神、天津日高彦火瓊々杵尊・猿田彦命・天鈿女命。創立年代不詳なるも延喜式内社にて、近世領主の崇敬に加へ、郷民の尊信篤し。もと正一位赤國大明神とも稱し、赤國はまた丹國とも書すといふ。例祭十月十五日。〔御手禊神社〕大字位田に鎭座。村社。祭神不詳。延喜の制小社に列す。例祭九月九日。〔栩嚴寺〕大字館にあり。眞言宗高野派。天平勝寶八年行基の開創と傳へられ、現存の堂宇は寛文年中領主久鬼氏の建立。寺寶中、鎌木著色不動明王像一幅は國寶。

イクタ　生田・活田

【生田村】神奈川縣武藏國橘樹郡の北部。東北部に多摩川の一支流れ之により稻田町に接し、西北部は東京府南多摩郡に、西南は都筑郡に境す。多摩丘陵の一部に當り、東北部の外は概れ林野にして、梨・桃・栗・柿・蔬菜・筍の產あり、副業に養蜂・養蠶行はる。川崎市より八王子市に至る道路は本村の東北部を走り、また小田原急行鐵道は東生田・西生田（共に昭和二年設置）の二驛を置き、交通至便の地にして日本高等拓植學校あり。本村は和名抄、橘樹郡縣守郷の内なるべし。もと菅生・五反田・高石・細山等の諸部落なりしも、その中、菅生・五反田は大部落なりしを以て各一字を取りて生田村と命名せるもの。大字細山の香林寺觀音堂に古碑あり、永仁三年と銘す。

【生田村】長野縣信濃國下伊那郡の東北部。和名抄の伊那郡伴野郷の地なるべし。天龍川の左岸に沿ふ伊那谷の一村。西は天龍川を隔てゝ大鳥村に對し、北は小盆川により上伊那郡南向村に境す。赤石山系の前山をなす伊那山脈の西斜面に當り、村内殆んど山林原野をなし、東北部に馬原山（一〇四四米）あり、西部の天龍川に沿ひ幅狹き河岸段丘ありて耕地あるも主生業は養蠶業にして、また木炭・茸類の特產物あり。福與村・部原村・峠村・中山村・長峰村・柄山村の舊六箇村を併合し生田村を建てしもの。

【生田（活田）】摂津國の古地名。今の神戸市の東部、神戸區の生田神社の邊より葺合區の生田川邊に亙る地。いま葺合區に生田町として其名殘る。神功記に「稚日女尊謂之曰、吾欲居活田長狹國、因以海上五十狹茅、令祭」とみゆる活田長狹國は、この地にして長狹は長き岡の義にて地形によりて名づけしもの。祭祀・天武天皇九年「摂津國言、正月活田村桃李

實也」とあり、活田は和名抄に八部郡生田郷とあるに當る。姓氏錄に「摂津國神別生田首、天兒屋根命九世孫雷大臣命之後也」とみゆる生田首の居りし所。中世は生田莊といふ。官幣中社生田神社、壽永・延元の古戦場生田森、菟原處女の傳説を持つ生田川あり、また生田浦・生田海・生田池・生田小野・生田里等、古來多く詩藻に入る。生田浦・生田海は生田川口の邊を指せるものと見るべく、生田池は生田川の川邊にありしものといふ。なほ此地にありし古墳より銅鏃・鏡・刀劍(身)・鐵器・土器片等を出し又別に鋼・貝輪等を出土したることは、此地の古代研究に見逃すべからざることゝす。萬葉・九「後れては生田の海のかひもなし沈むみくつと共になりなん　鮒乳女」夫木・二三「月やとる生田のいけのあしのはに霜ふきかゝる秋の風かな　康光」後撰・九「夢度か生田の浦に立歸る波に我身を打濺らすらん」同・返し「立歸りぬれてはひぬる沙なれは生田の浦のさかとこそ見れ」（生田神社）神戸市神戸區下山手通一丁目に鎮座。官幣中社。祭神、稚日女神（天照大神の御妹或は御子といひ、機業を家る神にして素盞嗚尊が天斑駒を剝ぎ機屋に投入れたる爲め尊は機侍より落ちて死ぬりと）。神功皇后韓國を征服せられて凱旋の途次、務古水門に於て、吾れに活田長狹國に居らんといふ神諭を下されしに依り海上五十狭茅なして祀らしめたりと傳ふ。延喜の制名神大社に列し、所年・月次・新嘗の案上官幣及び所雨の幣帛に預かる。村上天皇應和三年七月所雨の幣帛使を遣はし、一條天皇の正暦五年四月疫癘火災の變に依り、中臣氏人をして幣帛を奉らしめらる。爾後地方の名社として武家・領主・藩主の崇敬篤く、明治五年官幣小社に、同二十九年に官幣中社に列せらる。例祭四月十五日。なほ社殿の後には謂ゆる生田森あり。（生田森）生田神社邊にありし森。今は境内に僅にその名殘を留むるに過ぎざるも往時は境内及び附近いまの瀧道と呼ばれる邊に及べりといふ。壽永・延元の古戦場として名高く、また詞花・三「君まさはとはましものを津の國の生田の森の秋の初風　僧都情嵐」と歌はれたる名所。平家物語に「西は一ノ谷を城郭にかまへ、東は生田の森を大手の木戸口とぞ定めける」と見ゆる如く、壽永三年、一且は海に逃れし平氏は東上し、摂津一ノ谷に城を構ふるやこの地を以て東門（大手口）とし源氏の軍に備ふ。須磨郡源平鵯塚・二「それで此石いくた川、かう出る石に打逃れて、やがての内に生田の森」

【生田川】神戸市葺合區を流るゝ川。源を摩耶山の北麓に發し南流すること凡そ六・五粁にして布引の雄瀧・雌瀧となり、雄瀧の下は堰堤によりて水道の貯水池をなし、その餘水以下は暗渠となり約一・五粁にして神戸港に注ぐ。往時瀧の下流は生田森の邊を流れしも明治四年河床を整理して之を東遷し新生田川と名づけ、近時これを全部暗渠とし、現在河道の上は小公園を中央に有する大街路となる。また舊河道は同八年埋立てゝ市街地となる。いま之を瀧道と呼ぶ。生田川に就きては古傳説あり。萬葉集・巻九・高橋蟲麻呂作「菟原處女の墓を見る歌」に始めて現はれ、更に大和物語にも綴られ、後考の筋は後世に多く傳はる。即ち昔、津の國に住める一人の處女は菟原・血沼（茅渟）の二人の男に慰されて悩み、處女の親は生田川の鵠を射中てたる方に娶を與へんと約せしところ、二人共射中てたりしため、處女は「住みわびぬ我身投けてん津の國の生田の川は名のみなりけり」と詠み川に投じて果て、男二人もその跡を追ひたりといふ。千載・慰二「慰ひ怜びぬ茅渟のまちをならなくに生田の川に身をや投けまし　藤原通經」

【生田村】山口縣長門國厚狭郡の西南部。周防灘に臨む。地勢北部は丘陵起伏するも南部は土地概ね平坦にして水田拓け、産物は米を主とし水産これに次ぐ。舊中國街道に沿ひ、延喜式に埴生驛馬二十疋とみゆるは、大字埴生の地に置けるものか。いま省線山陽本線の埴生驛（明治三十四年設置）を置く。此地は和名抄の小幡郷に屬せしものゝ如く、明治二十二年埴生・津布田・厚田の三村を合せ各村の一字を採り生田と命名す。偖に埴生の海濱は往昔神功皇后征韓の際御船を寄せられし所といふもいま詳にするを得ず。明治二十七年、日英對等條約を締結して條約改正に功勞ありし青木周蔵はこの地の出身なり。

イクタ　飯田　讃岐國香川郡の舊郷名。和名抄は育田と訓じ、高山寺本もまた育田と註す。一に飯田は以比多と訓すべく、育は即ち以日の二字を一字に誤れるものなりと解するものあるも、恐らくは初め育田と訓ぜしを後世何時しか以比多と轉訛せしものならんといふ。今の香川郡香川郡弦打村に當り、大字飯田はその遺稿なり。足利時代諸家紋帳に讃州飯田氏あり、この地の人か。

イクタノナガサ　活田長狹國　↓生田（摂津國）

イクタハラ　生田原村　北海道北見國紋別郡の東南部。網走支廳の管下。東南二境は常呂郡に隣接す。東南西の三境は山地を以て圍繞され、西境に上武峠（五八二米）・瀬戸瀬山（九〇一米）・背谷牛山（六二四米）等の諸山連る。この山地より發する諸水は集まりて生田原川となり、村の中央を北流して北部の低地を過ぎ遠軽町に入り湧別川に合す、道路は河谷に沿ひて北方の遠軽町に通じ、省線石北線は村内中央を南北に貫通して上生田原・下生田原の二驛（共に大正三年設置）を置く。河川の流域には耕地開けて農業行はれ畜類の産あり、また林産・畜産あり。

最も重要なるは鑛産にして北ノ王・生田原・昭和等の鑛山より金・銀・銅・水銀等の産出多し。村名はアイヌ語イクタラ（候の義）より出で、生田原川筋は候の密生せるより此名出づといふ。本村はもと遠軽村の内なりしを大正十四年分離して一村を立つ。（北ノ王金山）大字生田原にあり。上生田原驛附近。鑛區面積約一〇方粁、本道有數の金屬山にて金・銀・金銀鑛を出す。昭和及び生田原の二鑛山は共に金銀鑛を産し、その鑛區は隣郡常呂郡置戸町に跨る。

イクダマ　生玉　大阪市天王寺區西北部地區の稱。上町丘陵の中部にて夕陽丘（夕日岡）の北、高津の南をいひ、いま生玉町・生玉前町・生玉寺町等の町名あり。古くは和名抄の西成郡讃揚郷の内なり。もと東生郡生玉荘小阪（今の大阪城址の地）にありし生國魂神社を慶長の初めこの地に遷せしより地名起る。神社門前の馬場先きは當時大阪城の警士の射御の練習をなせる處なりと傳へ、今も馬場先の稱を存す。生玉の西面崖下は古き寺院多く今も下寺町とよばる。曾根崎心中「これかちいくつ生玉の本誓寺ぞと伏し拜む」生玉心中・上「扇脇して神々詣で、安井生玉清水坂なしやならし心中寿庚申・下「死にに行く身も暫くは、ここ生玉の馬場先に法界無縁の勸進所」。駒筭用「寄合座敷も色ちかき所み去て生玉下寺町の客庵を借りて」

イグチ　井口　舊出羽國府の所在地。三代實錄・仁和三年五月の條に、出羽國司奏して曰はく、國府は出羽郡井口の地にあり、これは去る延暦年中陸奥守小野岑守が坂上田村麻呂の奏に基きて建つる所、去る嘉祥三年の大地震の爲めに地形變動し海水近きに迫り、且つ附近を流るゝ大川（最上川）は國府の澄を去ること一町に至り、これを防ぐに由なきにより府を最上郡の地に遷さんと。朝儀慎重に審議せしも許さず、附近の高燥の地に遷すべきことを命じ給ふ。國府の地は今の山形縣羽前國東田川郡の最上川の南岸廣野村の邊に求むべし（日本地理志料）といひ、一説には或は其地は最上川の河道の變により、これを河北なる今の酒田市の東部、又は他海郡西平田村の邊に求むべく、廣野の地は或は新に府を遷されたる地ならん（大日本地名辭書）といひ、何れとも定め難し。

【生口島】廣島縣豊田郡東南部の島。海岸を距る八粁。高根島・佐木島・因ノ島・岩城島・伯方島・大三島等によりて圍繞せられ、周囲約二七粁、山容東北より西南に延び、東部に鵜山（四〇八米）、西部に觀音山（四七三米）あり、島をほゞ東南・西北の二斜面に分つ。瀬戸田町・北生口・名荷・東生口・南生口の五村を含み、漁業・製鹽行はる。

イクトラ　幾寅　北海道石狩國空知郡南富良野村の大字。省線根室本線の幾寅驛（明治三十五年設置）あり。

イクノ　生野

【生野】丹波國の歌枕。地は今の京都府天田郡上六人部村の大字歌野に當る。舊山陰街道に當り、延喜式には驛名見えざるも古驛のありし處といふ。式内生野神社はいま同村大字三俣の地籍に鎮す。金葉・九「大江山いくのの道の遠けれはまたふみも見ず天の橋立　小式部内侍」

【生野町】兵庫縣但馬國朝來郡の南隅にある鑛山町。東は氷上・多可二郡、南は神崎郡に山嶺を以て隔り、但馬の最南の關門たる極要の地を占め實に山陰山陽の交會に當る。市川は源を東境三國岳（八五三米）の西麓に發して西南に流れ、神崎郡に入る。播磨より但馬に通ずる街道市川に沿ひ神崎郡より來り、街村式集落を貫き、北方の谷峠（三二〇米）を越え朝來川の斜面に出づ。いま省線播但線の生野驛（明治二十八年設置）を置く。生野氣象觀測所・縣立生野高等女學校あり。此地は古來銀山を以て名高くその採掘の始めは詳ならざるも、延喜雜式に但馬の銀の名あるは此地の所産を獻ずしものならん。織田信長但馬を征して此地を得るに及び生熊左兵衛を代官とし、次いで豊臣秀吉、伊藤石見守を奉行とす。江戸時代生野は幕府の直轄地となりしも、そは有名なる銀山の所在地なりしゆゑのみならず、地理的に重要の地にありしこと亦その一因たり。文久三年平野國臣、殷走公卿の一人澤宣嘉を奉じ兵庫に生野銀山に舉ぐ。之を生野の變といふ。（生野銀山）銀銅鑛・銀銅亜鉛鑛・金銀銅鉛鑛・亜砒酸を産す。古來銀山として名高く、生野銀山の稱あり。その開始は大同の頃といはるゝも詳ならず。豊臣秀吉の時には、伊藤石見守を奉行とし、慶長年間に至り江戸幕府は代官を置けり。而して鑛山の盛時は天文より慶長・元和の頃なり。現在は三菱鑛業株式會社の經營。鑛夫約一千人。鑛區は市川の上流にありて、北岸の太盛區は現今稼行を中止し、南岸の金香瀬區を採掘し鑛石は一部は直鳥製錬所に、一部は明延鑛山に送り合併製錬せらる。（生野の變）文久三年八月、尊王攘夷の志士數百人侍從中山忠光を奉じて兵を大和五條に舉ぐ。時に福岡藩の志士平野國臣・長州藩士河上彌一等、忠光の舉を助けんとし、國臣長門に至り七卿を說く。七卿の一人澤宣嘉これに應じ、十月共に兵を生野銀山に舉げ、代官川上德太郎の陣屋を占領し、檄を四方に傳へ遂に忠光に應じ勢頗る盛んなりしも、忠光の敗報到るや士氣沮喪し兵衆四散す。國臣事の成らざるを悟り、先づ宣嘉を遁れしめ己もまた奔らんとせしも遂に捕へられてのち獄死せり。河上彌一はその徒十三人と妙見山に自殺し、生野の義舉は空しく潰ゆ。（大明寺）大字黒川にあり。臨済宗妙心寺派。正平二十二年秋、月庵宗光（勅諡正徹大銀禪師）此地

に註錄し、領主山名宮内少輔時熙これに歸依して本寺を創し宗光を開山とす。永享以後堂塔衰頽し天文年中兵火に罹り現存の祖堂を費して悉く灰燼に歸せり。その後澤庵之を修し、正保年中大愚再興して中興の祖と、これり。いま境内に山名時熙の墓、宗永入道の墓碑等を存す。

【生野】 山口縣豐浦郡にありし村。大正十年下關市に編入。

イクノヤ　生屋　長門國都濃郡の郷（和名抄）。今の山口縣都濃郡花岡村・末武南村・久保村等に當る。延喜式に長門國生屋驛馬二十疋とあるは本郷に置かれしものにして和名抄にも生野郷に驛家の註あり、いま花岡村大字生野屋は郷名の遺稱にて且つ故驛址に當るといふ。

イクハ　生葉（郡）　筑後國の古郡名。景行紀・十八年秋八月の條に「到二的邑一、兩巡食、是日膳夫等遺レ盞、故時人號二其忘レ盞處一曰二浮羽一、今謂レ的者訛也、昔筑紫俗號レ盞曰二浮羽一」とあり、釋紀所引筑後國風土記に「昔景行天皇巡二國既畢、還レ都之時、膳司在二此村一、忘二御酒盞一、云云、天皇勅曰、惜乎、脫之酒盞、（俗語云二酒盞一爲二宇枳一）因曰二宇枳波夜郡一、後人誤號二生葉郡一」と見ゆ。卽ち本郡名此時初めて見ゆ。和名抄は以久波と訓じ大石・山北・姪浦・物部・椿子・小家・高西の七郷を管す。文永年中三善康信、小板井城に居して本郡を領し問注所氏を稱せり、子孫相傳へて天正年間に至る。元祿地圖は生葉郡に作る。爾來以て明治に至り、二十九年一村を八女郡に分ち他は竹野郡と合併し古稱によりて浮羽郡とす。卷浮羽郡

イクハノムラ　的邑　筑後國の古地名。豐後風土記に生葉行宮とあり、景行天皇九州御巡幸の時膳夫の御盞を忘れしため惜哉脫酒盞と仰せられし事より出でしものといひ、いきはやの浮羽となり訛りて的となりしといふ（景行紀・筑後風土記）。和名抄に生葉郡とあるも大體この地を稱せしもの。今福岡縣筑後國の郡名浮羽はこれに因む。

イクハベ　的部　播磨國神埼郡の郷（和名抄）。今の兵庫縣神崎郡中寺村・香呂村等に當り中寺村大字岩部は郷名の轉訛か。和名抄刊本は訓を闕くも高山寺本には以久波とあり、のち文字に從ひてイタハベと訓む。播磨風土記に的部里と見え、的部の居住せしよりこの名ありと見ゆ。的部は仁德紀に「的臣祖眉人宿禰、舟二艘的レ通焉」とあるによれば的臣の部屬ならん。播磨風土記・神前郡「的部里（石坐神社・高野社）、土中々、有的部等居。於此村、故曰二的部一、云云。石坐山者、此山號レ石、又在二石坐神山一云云。高野社、此野高、於他野、又在二玉依比賣命一、故曰二高野社一（生レ槐、社）」

イクヒナ　生比奈村　德島縣阿波國勝浦郡の東部。東南は那賀郡に界す。北部に中津峯（七七八米）峙ち、四周概ね山地なるも、中央に小盆地あり、勝浦川これを東北に流れ、水田拓け、米・麥の產あり、養蠶行はる。この地は和名抄、勝浦郡託羅郷の內にして、中世には生比奈郷と稱せり。岩松氏文書に「寶治二年いくいなの庄」、「弘安元年生爲庄」等とあるより見れば同氏の領有たりしものゝごとし。大字星谷に生不動ノ樟あり。周圍約七米、樹高凡そ二二米、樹齡四百年を經ゆといふ。幹部に空洞あり、洞中南面して半身の不動尊を生木に彫み、背に燒皮ありて自ら火焰の形狀をなせり。腰部以下の病氣に利益ありとて新願する者多し。また星谷の山中に星ノ窟あり。往昔弘法大師この下にありて七日間護摩修行せし處と傳ふ。瓦岩高く聳りてその下數十人を容るゝに足る。岩の一端より落下するを裏見瀧といふ。岩屋の前の瓦石の上に小祠あり、昔時惡星の妖を成せし時弘法大師法力にて之を地上に下し封す、星の窟これより起るといふ。〔大宮八幡神社〕大字星谷にし。郷社。祭神、譽田別命・氣長足姫命。創立年代未詳なるも地方の古社で、近郷の產土神として村民の崇敬篤きものあり。例祭九月十五日。〔鶴林寺〕大字生名にあり。古義眞言宗。靈鷲山寶樹院と號す。高野山末寺にして四國八十八所第二十番札所たり。寺傳に據れば、延暦十七年空海當地巡錫の砌當時靈樹の梢に一寸八分の地藏菩薩金像を感得し、靈樹を以て自ら三尺の地藏尊を刻みて金像を其胸間に納め、一宇を建立して安置す。これ卽ち當寺の濫觴なりといふ。粗武天皇の御宇その勅願所たり。本尊木造地藏菩薩立像一驅は空海作と傳ふるも、樣式手法等全く藤原時代の特徵を示し、現に國寶たり。御詠歌「しげりつる鶴の林をしるべにて大師ぞゐます地藏尊釋」

イクホ　生穗　→生穗町（兵庫縣）

イクマ　生馬　大和國生駒山の古稱。

【生馬山】 和歌山縣紀伊國西牟婁郡の中部。田邊町の東南約六粁、側來村の東に隣り、富田川西部を流る。地東西に長く、南境中部に城ノ森山（三七二米）あり、一帶に山地なし、西端部富田川に沿ふ地には絣地拓く。米・繭を主とし林產これに次ぎ、また柑橘類の特產あり。省線紀勢西線の側來驛（西隣側來村內）に近く交通やゝ便なり。

イクミ　生見　筑前國鞍手郡の郷。和名抄は伊無美と訓するも、高山寺本に依りて之を訂す。今の福岡縣鞍手郡宮田町の地か。同町の地名に生見の遺れるを見て知ることを得べし。また延喜式兵部省式に「筑前國御見驛馬十五疋」と見ゆるも、或は本郷を指せるものか、獨見は卽ち活見の誤にして、此郷は驛傳をも兼ねせしものならんといふ。

イクミ　伊久見村　靜岡縣駿河國志太郡西部の山村。大井川の左岸に沿ふ。東に菩提山（五七七米）、楠峠（四三二米）

ありて瀬戸谷村に接し、西は大井川によりて藤原郡に境す。大井川の支流本村の北部に發し東部を南流す。全村山林多きも川岸に近き丘陵には茶を產し、又米・麻の產あり。社線濱松磯道の笹間渡驛（昭和五年設置）を置く。本村は和名抄、志太郡大長郷の內なるべく、改正三河紀行に「永祿十二年武田信玄は山縣三郎兵衛昌景に二千五百人の兵を附し、鞠子といふ所に砦を構へ、花澤・藤枝・伊久美山の敵を押へしめ、旗本は久野山に城郭を築きて居る」とあり伊久美山は卽ちこの村の地を指せるもの。村名は明治二十二年伊久美・身成・笹間渡の舊三村を併合し、伊久身村をなす。

イグミ　居組　兵庫縣美方郡西濱村の大字。山陰本線の居組驛（明治四十四年設置）あり。

イクモ　生雲村　山口縣長門國阿武郡の中部。中國山脈の山支四境に延び北に大碁山（六四四米）あり、東部村に接し、東は地福村・篠生村に隣り篠生村の界に黑猫子山（七一七米）峙ち、南は阿武川を以て隔り、西は川上村・福川村に縁く。地勢概ね丘陵性の山地なるも、この邊に發し共に南流して阿武川に合する生雲川及び藏目喜川の流域は農耕に適す。阿武川幹流及び生雲川・藏目喜川の溪谷は所謂長門峽の主部にして頗る錦谷美に富み本流には千湯洞口・龍宮淵・天狗岩、生雲川の谷は生雲瀑と稱し晴がり淵・猿渡、藏目喜川の谷は金鶴瀑と呼び猿瀑等有奇勝絕景枚舉に遑あらず。主產物は米、外に繭・林產物等あり。交通は隣村地福村にて山陰街道に岐れ西して萩市に達する街道篠生村より來りて村を東西に貫きバスの便あり、主邑はこの街道と生雲川の交會點に位し出雲中と呼ぶ。山陰街道を南下すれば山口市に達し、大內家壁書には「從二山口一行程日數、阿武郡生雲一日」とあり。〔八幡宮〕大字出雲中村字市にあり。郷社。祭神應神天皇・仲哀天皇・神功皇后・多紀理比賣命・市杵島姫命・多岐都姫命。社傳に依れば貞和五年豐前國字佐より勸請し本村千古宮に創建、元祿八年今の地に遷祀せりといふ。地方の古社にして近郷衆庶の尊信篤し。

イクラ　井倉　岡山縣阿哲郡石蟹郷村の大字。省線伯備線の井倉驛（昭和三年設置）あり。

イクラ　生倉

【生倉山】 信濃國の歌枕。延喜式、信濃國に育良驛あり、イクラは育良を音讀したものならん。育良は今長野縣下伊那郡伊賀良村と思はる。古今六帖「わかれてはいくらの山をこえぬれはあふことかたくなりもてくらむ」

【生倉】 長門國豐浦郡の郷（和名抄）。高山寺本は伊久良と訓す。刊本に伊久とあるは良の字の脫落ならん。その地は川中村及び安岡町等に當り、いまの山口縣豐浦郡川中村大字伊倉は郷名の遺稱なるべし。

イクラ　伊倉町　熊本縣肥後國玉名郡の南部。菊池川の左岸に沿ひ、北は高瀬町に隣る。東部はやゝ丘陵を成すも、その他は土地低平にして水田拓け米の產少なからず。鹿兒島本線北部を東西に走る。明治三十二年町制を布く。本村古くは島原灣岸に沿ひて船津村と稱せられ、また韓人東泊の津頭にして入唐僧も多くこの地より發船せりといふ。慶長年中國主加藤清正朝鮮陣の時の出入港たり。海上安穩を祈願せりといふ石碑現存す。町名の起原は此地上代貴津（丹借津）としての移出港にして、飯倉の所在地なりしを爲め飯倉より伊倉と轉訛せるものか。本町にはこの外名所舊蹟多く往時唐との貿易盛なりし頃この地に唐人町繁榮し、明人郭氏の墓ありて俗に唐人墓といふ。又、伊倉五山とは、肥後國誌に「伊倉は舊邑なり、土俗伊倉五山と呼べる古刹あり、伊倉山太平寺・櫻井山安住寺・海福山瀧音寺・大寒山長福寺・中尾山報恩寺これなり」とあり。皆現存せず。報恩寺は僧行基の建立なりと。太平寺は唐人四位官、茅氏の息、父の死に當り伊倉町民の手厚き看護に對し謝恩のため香木を持ち來りて建立せりと。〔伊倉北八幡神社〕大字北方村にあり。郷社。祭神應神天皇・仲哀天皇・神功皇后・田心姫命外三神。創立年代未詳なるも、宇佐八幡を勸請せる古社にして、一に正平年間南八幡宮と共に勸請せりとも傳ふ。爾來菊池氏・加藤氏・細川氏等の武家・領主・藩主の尊信篤かりき。南八幡と共に伊倉町及び附近の鎭守と仰がる。例祭、十月十五日。〔伊倉南八幡神社〕大字宮原にあり。郷社。祭神、品陀和氣天皇・帶中日子天皇・息長帶比賣命・田心比賣命外四神。創立年代未詳なるも、宇佐八幡を勸請せし古社にして、一說に正平年間南北兩八幡を勸請せりとも傳ふ。爾後菊池氏・加藤氏・細川氏等の崇敬篤かりき。北八幡とともに全町及び附近の鎭守と仰がる。例祭十月十四日。

イクラ　居倉　→川崎村（岐阜縣）

イクラ　伊久里森　歌枕。萬葉集に見ゆ。今の新潟縣越後國南蒲原郡井栗村の伊久禮社の杜を稱せるものといふ。→井栗村

イクリ　井栗村　新潟縣越後國南蒲原郡の北部。三條市の東北にあり。信濃川の左岸に位し、信濃川と其支流五十嵐川に挾まれし平坦部に位し、米の產多し。信越本線村の南端を通過す。本村は和名抄、蒲原郡勇禮郷の遺稱にて、村內の八幡宮は延喜式蒲原郡の伊久禮神社なりと傳へらる。明和年中に建てし石碑あり。其銘に「井栗村東端爲藤樹丘、有藤樹神祠、兩與井栗神祠隣焉、其藤最古」とあり、また越後野志の以久禮神社の條に「以久禮郷大面荘井栗村に在、萬葉集に伊久里杜藤花の歌を載せ、今尙紫藤の

大樹あり、古へ社司別當二十四家ありしが今盡く衰廢して空しく田名に其名を存する耳」と見ゆ。この薩樹丘は八幡宮の東北にあり、萬葉集十七卷、越中にて大伴卿錄に其屬僚の詠める歌の中に伊久禮の森を詠じ「妹が家に伊久里の森の藤の花今來む春も常斯くし見む」右の一首傳へ聞むは僧玄勝なり。また萬葉集古義に、越後國蒲原郡伊久禮神社あり、それなるべし」とあり。この地の歌なるべし。本村は江戸末期の北海道開拓者、松川繁助（贈從五位）の生地たり。繁之助名は重明、世々此地の大庄屋たり、父重基は地方の恩人として知られ、北海道開拓の大志を抱きながら果さずして終る。重明六男に生れ、家督を嗣ぎ大庄屋となる。幕府の允許を得て安政三年北海道に渡り開拓事業に從事し、幕命により榊天卿の亀臺、五稜郭の築を經營す。更に漁業を開設し移民を誘導して國防の實を擧ぐべき旨を受けそのために遂に累代の家産を蕩盡せり。晩年郷里に歸り明治九年歿す、年七十五。（來迎寺）新義眞言宗智山派。寶珠山と號す。應德年中北島時定の創立、寛正の開創に係る。弘治年間戸隠の變に罹り、榮華律師中興す。本尊の聖觀世音は寛正の作なり。

イクレ　勇禮　越後國蒲原郡の郷。和名抄は以久禮と訓じ。高山寺本は伊久例とす。今の新潟縣南蒲原郡井栗村・大崎村・下條村・長澤村・森町村・鹿峰村・大面村・新潟村等の邊なるべく井栗村、はその遺稱なり。卽ち今の三條市の東部及び五十嵐川の南方にて中世の大面莊・五十嵐莊の地も亦この邊なるべし。延喜式の以久禮神社は井栗村にありしといひ、萬葉集の伊久里の森もこの社ないひしものなりと。

イグロ　伊黒　↓高島村（滋賀縣）

イクワ　育波村　兵庫縣淡路國津名郡の西北部。北は播磨灘に臨む。東は淺野・仁井の二村に接し仁井村との界に常隆寺山（五一六米、眞言宗常隆寺あり）峠ち、西は宮津村に隣り同村にて海に入る宮津川は本村南部に發源す。地形東南に高く西北に低し。平地少なき階段式に水田拓け、產物は米を第一とし、水產物これに次ぐ。村名は和名抄、育波郷の遺稱。城址あり、永正の頃細川氏の家來伊久志摩守此處に居り、大內義興に攻められ、城中にて自刃すと傳ふ。育波郷は本村及び宮津村淺野村等に當るものゝ如し。上古的氏の居りし處か。的氏は仁德天皇十二年八月、眞人宿禰の高麗より歸上せる鐵的を貫通せし功に依り名を的戸田宿禰と賜はりしに始まるといふ。（八幡神社）大字育波にあり。郷社。祭神應神天皇。創立年代詳かならざるも、地方の古社にして古來近郷の產土神として崇められる。例祭九月十五日。

イケ　伊計島　伊計嶋とも呼ばる。沖繩縣沖繩島の中部東岸に近き島。中頭郡與那城村に屬す。周回約七粁。西南の宮城島（高離）・平安座島等と金武灣口の東岸をなす。島上に伊計城と稱する自然の岩山屹立し、山麓一帶に濃木繁茂す。人口約一千人あり半農半漁にて甘藷の產多し。飲料水は北方海岸の絶壁より湧出する「イシナ川」と呼ぶ泉より汲み採る。「イシナ川」は土語にて「犬川」の義にして、犬の此泉を發見したるに因める名なりといふ。この島の上陸地にはイチヤマノハーメーと呼ぶ高さ二米程の石あり、島の守護となす。卽ち無名の石敢當にして人々この石を撫して海上平安を祈願すと。民風淳朴にして他國よりの訪客に對しても慇懃なりといはる。小學校あり。「伊計離縁やなりぼしややあすが、いんな川の水の汲みあぐで」

イケ　伊氣　伊勢國度會郡の郷。和名抄は伊介と訓す。今の三重縣志摩郡鳥羽町に當る。大宇堅神に伊氣浦の名存す。伊氣は池にして卽ち停水の義なり。僕姫記に依れば僕姫此地を通りしに海潮穩和にして恰も池水の如く、因りて伊氣浦と名づくといふ。姓氏錄に見ゆる伊氣氏は蓋し此地に住せしならん。伊氣の名は神宮雜例集・神領目錄・神鳳抄・世記講述抄等にも見ゆ。

イケ　池　↓吉井町（群馬縣）

【池】　信濃國更科郡の郷。和名抄は以介と訓す。郷名二字の例に反し池の一字となすは或は訓の以介と譌寫せしものにて以介郷とすべきか。その地今の長野縣更級郡小島田村・西寺尾村・舊島村の邊に當る。延喜式、更級郡の顯氣神社は小島田村にありて池宮明神といふ。この附近は武田・上杉の古戰場として知らる。

【池山】　飛騨高原北邊の一峯。岐阜縣飛騨國吉城郡船津町と富山縣慈中國上新川郡蘇澤村の境上に跨り、標高一三六九米。神岡鑛山鑛區の一部に當る。東北方は高幡山（一三三二米）・横岳（一六二三米）を經て大多和峠に連なる。南麓に神通川の上支跡津川西流す。

【池山】　靜岡縣田方郡西部に聳ゆ。箱根以南に於ける最高峯にして、標高七九九米。西南斜面に池あり、故に名づくといふ。一に池山・玄岳・黑岳とも稱せらる。北方には日金山聳え、南方には烏石峠通す。また東北面は熱海・網代の浦曲を見降し、沖に初島を眺み、風光明媚なり。

【池島】　長崎縣肥前國西彼杵郡神浦村の屬島。村の西方海上約七粁に浮ぶ。東南は母子島に、西南は大碁（沖ノ島）・小碁の二島に、北は松島に相對す。橢圓形の島にして東南に長く、長さ約一・八粁、幅〇・八粁あり。島內丘陵をなし、東部に鹹湖鏡ヶ池あり。本島と松島との間は長崎・平戸間往來船の常航路に當る。

イケウチ　池內　京都府加佐郡にあり。昭和十一年八月舞鶴町に編入せらる。

イケガミ　池上

【池上】　東京市大森區西北部の汎稱。もと東京府荏原郡の町なりしも、昭和七年東京市域大擴張の際市に編入、いま大森區に屬し池上本町外十一町に分る。日蓮宗の大本山本門寺あり、弘安元年宗祖日蓮入寂の地。近世この邊は千束郷といひ千束池ありて、その池の上に位する村落なるより池上の名起るといふ。この地は畠山重忠七代の孫宗仲より出でし池上氏の居邑にて、弘安五年宗祖日蓮は池上右衞門太夫宗仲の家にて遷化せしといふ。

〔本門寺〕　池上本町にあり。日蓮宗。長榮山大國院と號す。同宗四大本山の一たり。建長年中幕府の工匠池上宗仲日蓮宗に歸依しその采邑を捨てゝ一寺を建立す。嘗いで文永十一年開堂し、日蓮親名して長榮山本門寺と號す。弘安五年日蓮病みて甲斐身延山を下り宗仲の邸に入りて寂す。弟子日朗遺命により當寺及び鎌倉妙本寺を兼帶し文保元年堂宇の造營成りて東國有數の巨刹となる。爾來朝廷及び武家の尊崇篤く以て今日に至る。寺寶中日蓮上人座像は當寺の本尊にして高さ約八六糎、鎌倉時代の育像彫刻中の優秀なる作なり。五重塔は慶長十三年德川秀忠のその乳母の冥福を祈るために建立せしものにして各層三間三面、屋根第一層、第二層は本瓦葺、その他は銅板葺、總朱塗の塔婆なり。また仁王門は慶長十三年に德川秀忠の五重塔婆と同時に建立せしものにて江戸時代初期に於ける此種の樓門の典型的遺構なり。これ等は共に現に國寶たり。境內には日朗・池上宗仲夫妻・狩野探幽・同元信及び松平・細川・上杉等諸侯の廟墓散在せり。十一月一日より三日間に亙る日蓮忌祭會式は遠近を問はず參者雲集し、萬燈全山に輝き古來東都の一大名物として知らる。

【池上】　臺灣臺東廳新開園區の地名。總督府鐵道臺東線の池上驛（大正十三年設置）を置く。

イケガミ　池神　萬葉集に見ゆる地名。その地今詳かならざるも和名抄に見ゆる大和國十市郡池上郷の地にして舊金池址に當る奈良縣磯城郡安倍村大字池內及び香久山村大字池尻の邊に探ねべきものか。萬葉・一六「池神の力士像かも白鷺の柃咮び持ちて飛びわたるらむ　長忌寸意吉麻呂」

イケガワ　池川町　高知縣土佐國香川郡の西部の山村。西は山脈を以て愛媛縣上浮穴郡に界す。東境には雨ヶ森（一三九〇米）等の高山連立し、村內概ね山地を成し、仁淀川の小支東南流するも、殆んど水田を見ず、畑地よく拓けて蕎・麥・芋・大豆・小豆何れも多產し、殊に楮・三椏及び茶は縣下有數の地位を占む。この地往古は池川郷と稱せし地にして高知より伊豫松山への官道に當り大宇用居に當時の關所址ありといふ。町內の椿山部落は、源平時代、根浦の殘黨、安德天皇を奉じて、密かに逃れ來りて住みりと傳ふ。また天明年間全國に亙る大饑饉の際、此地の住民製紙の重稅に堪へず逃亡して伊豫に走り、また高知市街の小民相率りて黨を結び、豪富の家を襲ひ米穀を掠奪する等の不穩事起れるより、時の藩主山內豐雍江戸より歸りて幕府に請ひ十萬を限りて割賦會同の儀を十萬石格に下し、專ら諸費を節減し、程なく藩政を更始一新するに至れり。之を以て此地方今もなほ和紙製造の業盛んなりといふ。明治初年徴兵令を誤解せる人士は、竹本長十郎を首領として一揆を起し、事漸く大ならんとせしも危く鎭撫さる。（池川神社）大字土居字總合地山にあり。郷社。東殿・西殿より成り、明治五年東殿に三所神社・石土神社・神明宮を、西殿に當社大明神（大己貴命）・高賀茂神社を併合し、地名にもとづき池川神社と改稱す。池川郷十二箇村の總鎭守として村民の崇敬篤し。（河內八所神社）大字用居にあり。郷社。祭神、迦毒迦鳴命・八島士奴美命・布波能母遲久奴須奴命外數神を祀る。もと八社川內高加茂大明神とも稱す。創立年代詳かならざるも附近の產土神として村民の崇敬篤し。

イケグチ　池口岳　赤石山脈光岳山塊中の一峯。靜岡縣遠江國榛原郡上川根村と長野縣信濃國下伊那郡和田村の境上にあり。標高二三七六米。光岳（二五九一米）の西南に聳え、北方は加々森山（二四一八・九米）・南西方に鹿窪山（二二四八米）・中尾根山（二二九六・四米）あり。針葉樹林を以て掩はる。

イケクワ　生桑村　廣島縣安藝國高田郡の西北隅。西は山縣郡に、北は島根縣邑智郡に界す。東部に大伏山（七九一米）あり、その強西方に延び、村をほゞ南北の二斜面に分ち、その南斜面の低地には小鉢地發達し農業行はれ、米・麥等を產し、林業これに次ぎ木炭の產多し。本村はもとの生田村・桑田村の合併せるもの。生田はもと池田と書きしも、地頭池田右馬頭と一致するため生田と改めしものといふ。通志によれば大字生田智敎寺址の南に將軍足利義昭の墓（卵塔）ありて、土人天下墓と稱す。天正の頃義昭漂零して毛利氏に寄せし事あれば、智敎寺にて葬去せしなこの寺に葬りたるならんといふ。また安西軍策に依れば天文九年毛利元就の尼子晴久を襲ひし際、晴久は大字池田の地より北方島根縣邑智郡の方に敗走せりといふ。

イケシンデン　池新田村　靜岡縣遠江國小笠郡の南部。南は遠州灘に臨み中部は丘陵地、沿海は砂濱をなすも、東北部と西南部に鉢地拓け、米・繭・茶を產す。東方榛原郡地頭方村より西方濱松市に至る縣道村の中部を東西に走る。本村は慶長年間新野池よりの疏水によりて開墾せる村にして、有名なる櫻池（佐倉池）は本村と東隣の佐倉村に跨がる。大

宇合戸は往古郡家のありし處といふ。〔高松神社〕大字門屋にあり。縣社。祭神事解男命・伊弉冉尊・速玉男命。大寶元年の創建と傳ふ。近古源頼朝ふかく崇敬し、治承五年に下せる社家補任狀はいまも當社に藏せらる。關東國主地頭の崇敬厚く寄進尠なからず。永祿元年今川氏眞の寄進狀その他の文書の遺れるもの多し。神領、三十石。例祭十月十三日。

イケシマ　池島　大阪府中河内郡にありし村。昭和四年四月枚岡南村と合併して縄手村を建つ。

イケジリ　池尻

【池尻】美濃國の古池名。荒中山道に當り、杭瀬川の渡のありし處。戰國の頃飯沼勘平長盧の居城あり。飯沼勘平長盧は信長に仕へ元龜元年近江の姉川合戰・堅田合戰その他數度の合戰に一族郎黨と共軍して功あり、天正十一年秀吉の柴田勝家と合戰の時秀吉に屬し軍功を建つ。今大垣市の大字に池尻の名遺る。

【池尻】一→寅山村（大阪府）

【池尻】一省線田川線の一驛（明治三十二年設置）。福岡縣田川郡川崎村にあり。

イケシロ　池代山　靜岡縣庵原郡の北方、小島村と南河内村に跨る。山梨縣南巨摩郡萬澤村との南境に近し。標高八〇四米。

イケズキ　池月　宮城縣玉造郡一栗村の大字。省線陸羽東線の池月驛（大正三年設置）あり。

イケダ　池田

【池田町】北海道十勝國中川郡の中部。十勝支廳に屬し、東は浦幌郡、西は河東郡に隣接す。十勝平野の東部に位し、町の中央を利別川北より南に貫流し、南邊に於て西方より屈曲しつゝ流れ來れる十勝川に合す。東部及び西北部には丘陵性山地あり、十弗川及び居辺川この山地を流れて何れも利別川に入る。十勝川・利別川・十弗川の流域に拓けたる廣闊なる耕地には、千代田・下利別・東臺等の土功組合による灌漑水路が縱横に整設せられ、南部に池田農場、北部に高島農場の二大農場あり。米を主として麥・大豆・小豆・亞麻等の農産物をはじめ、牛・馬・羊・雞等の畜産物多く、東部・西北部の丘陵地には木材・薪炭等の林産また少なからず。製麻の大工場ありて麻布の工產多し。道路は十勝川に沿ひて東西に通ずるもの、利別川に沿ひて池田より高島を經て更に北方中川郡の本別町に通ずるもの等あり、省線根室本線は西方の帶廣市より來りて南部に通じ利別・池田の二驛（共に明治三十七年設置）を置き、また池田驛より利別川に沿ひて北上する鉄道本線は、高島驛（明治四十三年設置）を置く。なほ東南部に殖民軌道ありて池田より東方に通ず。池田の市街は十勝・利別二川の合流點に當り、商業・交通・教育等の中心地をなし、森林事務所・高等女學校・各種工場・商店等あり。池田農場は池田驛を去る東北方約四粁、面積約一六方粁、これを市街宅地・畑地・水田・會社・工場地等に區割し、施設整備せる大農場にして農・畜産多し。また池田驛の北方約三〇〇米に清見臺（展望臺）と呼ばるゝ高地あり、近くは池田の市街・池田農場・屈曲蛇行する十勝・利別二川の流路を、遠くは十勝連峯の雄姿を眺望して風景佳良なり。山上に鈴蘭咲亂れ薫香快き運動場、中腹に鐵泉あり恰好の保養地なり。本町はもと測寒村と呼ばれ、アイヌ語セイオロサム（貝傍の義）より起れる地、明治十二年初めて内地人の來住し、その後鐵道開通し、池田・高島二大農場、各種工場等の開設せらるゝに及びて急に發展し、大正二年川合村となり、大正十五年町制施行に方り池田侯爵家の經營になる池田農場に因みて池田町と改稱す。

【池田村】群馬縣上野國利根郡の中部。沼田町の北に隣り武尊山（二一一五八米）の南西麓山谷を占め南北に狹長なる村。北境には武尊山の一峯劍ヶ峯山（二一〇〇五米）及びその連嶺鹿ノ俣山（一六三七米）・尼ヶ禿山（一四六六米）等連なり、また北部中央に迦葉山（一三二二米）聳え、その山脚南に下り、東の發知川谷と西の四釜川谷の二部に分る。之ら二川の流域には小耕地拓けて農業行はれ、米麥を產し、養蠶行はれ、林產また少なからず。發知川筋谷の發知部落は沼田太郎の子發知三郎景宗の發祥地、又迦葉山中に瓦剌彌勒寺あり。〔迦葉山彌勒寺〕大字發知、迦葉山の南麓にあり。海拔一三〇〇米の高所にして、山中の老杉鬱蒼たる間にあり。迦葉山彌勒寺龍華院と號し、曹洞宗の瓦剌にして慈覺大師の開基なり。遠近より參詣者多し。

【池田】上野國那波郡の郷。和名抄は伊介多と訓ず。その地今詳かならざるも恐らくは群馬縣佐波郡豐受村或は上陽村の邊なるべし。姓氏錄「池田朝臣、上毛野朝臣同祖、豐城入彦命十世孫、佐太公之後也」とあるは郷名を負ひしもの。

【池田】下總國千葉郡の郷。和名抄は訓を闕くも和泉の池田郷の例により以介多と讀むべきならん。今の千葉市内に當る。蓋し上毛野朝臣の同族、池田朝臣の居りし地なるべし。天平寶宇三年紀「從五位下池田朝臣足繼爲下總介」とあるはその後裔か。今千葉市の猪鼻臺は千葉氏累世の居城のありし地にして猪鼻山に登る坂を池田坂と稱ずるは郷名に因むものか。

【池田谷】福井縣越前國今立郡上池田村の東南部にあり。足羽川の上流の山谷をいふ。水源地を更に南登すれば岐阜縣揖斐郡との境界に跨る冠山（標高一二五七米）に達す。この間に交通路あり。

【池田村】山梨縣甲斐國中巨摩郡の東邊。笛吹川の支流荒川東境を限り、川を隔てゝ甲府市に對す。甲府盆地の北部に位し、土地平坦にして耕地一面に拓け、米麥の產多く養蠶また大いに行はる。此地はもと志摩庄の內にして、北部は飯田原古戰場の一部をなし、駿河の今川氏の將嶋島正成兵を率ゐて此地に武田信虎と會戰し、敗れし地なり。〔長松寺〕大字長松寺にあり。臨濟宗妙心寺派。甘露山と號す。武田安藝守信滿の開基。本尊は蓮華不拾觀世音。延寶中二溪庶元これを中興し現在に至る。

【池田町】長野縣信濃國北安曇郡の南部。東は廣津・會染二村に隣り南北に長き地を占め、東北部は丘陵性山地なるも西南部一帶は高瀬川東岸の沖積平野にして、水田を始め耕地拓けて農業行はれ、米麥その他の農產物多く養蠶また頗る盛んなり。南方大糸南線の安曇追分驛より起りて、本町に至る私線池田鐵道の南池田・信濃田・北池田（共に大正十五年設置）の三驛を置く。町內に區裁判所出張所・縣蠶業取締所支所・縣商檢查所支所等を置き、また池田古城址・花岡山古城址・堂山鬼の笹等の名勝あり。此地は和名抄、安曇郡村上郷に屬せしものか。もと糸魚川街道に沿ひて發達せゝ街村にして有明里と稱せられ、中世に至り仁科氏の一黨此地に居住して一小城下町を形成し、附近の諸村の商業中心地として賑ひし處。なほ本村大字堀ノ內より近年磨製石鏃を出したることは此地の古代史研究に注意を促す。

【池田鐵道】地方鐵道。長野縣にあり。南安曇郡北穂高村にある省線大糸南線の安曇追分驛より北安曇郡の會染村を經て池田町方面に通ず。

【池田（郡）】美濃國の古郡名。正倉院文書・大寶二年の戶籍「御野國、味蜂間郡、春部里戶主春部角麻呂」と見え、味蜂間は卽安八郡の舊號にて春部の郷名なく、和名抄の本郡に春日郷あれば、大寶二年以後に味蜂間郡を南北に分ち池田郡を建てしものなるべし。延喜式にも池田の郡名見ゆ。和名抄は伊介太と註し、頼田・壬生・小島・伊福・春日・池田の六郷を管す。中世市橋・雲門・青柳・庭覺等の四莊となる。姓氏錄に池田首は景行皇子大碓命の後と見え、景行二十八年紀に大碓皇子の美濃に封ぜられし由見ゆ。のち附近に池田氏の多きは蓋しこの後裔か。明治二十九年大野郡と合し揖斐郡と改稱し岐阜縣の管下たり。

【池田村】岐阜縣美濃國揖斐郡の東南部。東は安八郡の北部に隣接す。揖斐川の右岸に位し、所謂西濃平野の北西部を占む。土地低平概ね水田をなし米を始めとして農產に富み、また茶の產あり。參宮急行電鐵は村の南邊に通じ池野驛（大正二年設置）を置く。西隣の本郷村と組合町村をなし、本村に役場を置く。この地は和名抄、池田郡池田郷の內なるべく、また姓氏錄に見ゆる池田首（景行天皇皇子大碓命後也）の由緣の地ならんといはる。本村はもと池田郡のほゞ中央に位し明治二十九年池田郡の大野郡と合併し揖斐郡となり、村名に池田郡の名殘りを留む。なほ江戸末期に於ける關營の大家坪井信道（贈正五位）はこの地の人なり。

〔永泉寺〕大字池田町屋にあり。曹洞宗。石堂山と號す。聖武天皇の勅願により行基の開創に係る。木造聖觀音立像一軀は鎌倉末期の作にして國寶に列せらる。

【池田】美濃國池田郡の郷（和名抄）。今の岐阜縣揖斐郡池田村・本郷村・宮地村の地にして池田はその遺稱なり。池田首の居りし地にして後こゝに郡家あり。中世池田莊と稱す。土岐系國に源頼忠の治承五年に池田莊を賜はり池田氏を稱せし由見え、紀北系國に紀淑冨の子糟實、母は美乃の池田の領主維蓍の女にて、當國に居り池田氏を稱せしといふ。可兒郡の池田郷とともに大碓命の裔孫の繁衍せる地方なり。

【池田村】岐阜縣美濃國可兒郡の南端。東は土岐川を隔てゝ土岐郡多治見町及び笠原町に對し、南西の二境は愛知縣東春日井郡に隣接す。村內略ど愛知丘陵の北部なる丘陵性山地を以て占められ南西境に道樹山（四二八米）あり。北部の地を多治見より名古屋方面への下街道東西に横斷して通じ、東北隅に大字池田町屋の集落を拓き、中央本線は東邊を土岐川岸に沿ひて數箇の隧道を穿ちつゝ南北に縱貫す。耕地總に拓けて農業を行ひ、山地より林產を出す。池田町屋は本村唯一の市街地にして、古く名古屋より中仙道に通ずる下街道の一宿驛たり。本村は和名抄、可兒郡池田郷の地、後世池田郡井頭郷と呼ばれたるものゝ如く、塩古十種に載せたる鐘銘に「美濃國池田郡井頭郷御當藏王權現、明德二年」とあり。いま本村の三倉に藏王を祀れる小祠あり。また此地は池田信輝の先祖代々の居住せる處にて池田町屋の東南なる岩山に池田城址と呼ばるゝものあり。〔永泉寺聖觀音像〕大字池田町屋にある曹洞宗永泉寺境內の大師堂に安置せ。る。木造漆像の立像にて高さ約二尺、相貌圓滿、玉眼を嵌し開きて微笑を湛ふ。鎌倉時代の傑作にて滲惜またよく全身に殘れり。なほ境內の觀音堂にも優秀なる木造千手觀音の小立像安置せらる。〔神明神社〕大字池田町屋にあり。郷社。祭神、天照皇大神。創立年代未詳なるも池田の地は伊勢內宮御廚の御領たるを以て、蓋し同御廚の守護神として發生せしものなるべし。

【池田山】岐阜縣美濃國揖斐郡南東部、春日・宮地兩村境上に跨り、標高九二四米。不破郡垂井町の北方約七粁、不破郡府中村との境界に近し。北麓を揖斐川の支流粕川東流す。

【池田】美濃國可兒郡の郷。和名抄は訓を闕くも池田郡池田の例により伊介太と讀むべきならん。いまの岐阜縣土岐郡多治見町より可兒郡の池田村・小泉村等の

地なるべし。清和源氏、土岐氏の族池田氏の居りし處。

【池田村】 静岡縣遠江國磐田郡の南西部。天龍川東岸の沖積地に位し、西境は川を隔てゝ濱名郡中ノ町村に對す。面積一・五方粁の小村、米穀の產あり、家畜の飼養行はる。天龍川原より採取する砂利・砂の利また少なからず。村内に濱松土木出張所池田工營所あり。また謠曲にて名高き熊野侍從の墓・指定天然記念物たる熊野の長藤等あり。本村は往古は天龍川の西岸にありて、舊鎌倉海道の一宿驛として賑ひし處なるも、その後河道變じてその東岸となり、偖に舊觀を失ひて今日に至る。夫木・三一「そのかみの里は何濱となりにけりここも池田のおなし名なれと　參議爲相卿」〔熊野侍從の墓〕時宗の名刹行興寺の境内にあり、二基の寶篋印塔並び立ち、一は熊野の母の墓なりといふ。熊野は一に湯谷にも作り、平家物語・源平盛衰記・謠曲熊野（湯谷）等に語り傳へられたる平宗盛の愛妾、當時海道第一の美人として、また孝女・和歌の名人として稱へられし女。故郷に殘せし母の病篤しと聞き、再三暇を乞ひたれども宗盛肯ぜず「いかにせむ都の春も惜しけれどなれしあつまの花やちるらむ」と即吟せしに、宗盛もその孝心に感じ、暇を與へしかば、急ぎ故郷に下れりと傳ふ。〔熊野の長藤〕同じく行興寺の境内にあり、長年月を經たる老藤にして、花時長く花房を垂れて頗る美觀なり。幹は根本より二分して二支幹となる。根元の周圍約一・一八米、花房は長き一・五米に達し藤の瓦棚として有數のものなり。〔行興寺〕時宗、塩販山と號す。藤澤二世の法嗣他阿上人の開創にして、本尊は行基著薬師作阿彌陀如來。境内に熊野侍從並に母の古墳あり。その他寺寶に鎌川氏筆謠曲熊野の一卷あり。

【池田】 静岡縣安倍郡の舊郷名。舊豐田村邊に當り大字池田は郷名の遺稱なりしも、豐田村は昭和三年静岡市に編入。鎌岡文書に應長元年北條貞時駿州池田郷内を寄進せしこと見え、延喜式の有度郡池田神社は此地にありしものなるべし。

【池田】 尾張國春部郡の郷。和名抄は訓を阿くも美濃國池田郷の例により伊介多と讀むべきならん。其地今詳かならざるも後の味岡庄の地か。今の愛知縣東春日井郡篠岡村・味岡村の邊ならんか。

【池田町】 江戸時代大阪の町名。天滿池田町、天滿天神宮の西、宮前町を北へ一直線に行ける町はづれの町名。現今北區天神橋筋四丁目附近。女殺油地獄・下「いやいや早う休まれぬ、天滿の池田町へ往かねばならぬ。フヤけうとい、もう宜いわいの、池田町は北の鎗、近所の掛きへ寄つたらば過ぎてのこと」

【池田町】 大阪府攝津國豐能郡の西部。東は箕面村・豐中市に隣り、西は猪名川を隔て兵庫縣川邊郡に界す。東部・北部は丘陵地なるも、南西部はいはゆる武庫平野の東北部に當り、土地低平にして水田拓く。此地は伊丹と共に清酒の產地として著はれし處。また所謂池田炭・一庫炭等と稱せらるゝ木炭の集散地。池田炭は主として兵庫縣川邊郡東谷村一庫邊より燒出さる櫟炭にて、火力は堅炭より弱きも耐久力あるを以て埋火に適す。大字木部は古來牡丹の栽植を以て著はれ苗木庭木盆栽等の栽植また盛んなり。阪神急行電鐵線の池田驛あり。省線福知山線の池田驛は西隣の兵庫縣川邊郡川西町の地内に置く。學校には大阪府池田師範學校・池田技藝學校等あり。舊郡役所の所在地。此地は和名抄の豐能郡秦上郷・秦下郷の地に當り、また一部は古く吳服里と稱せられ、應神天皇の創支那より渡來せし織工・漢織・吳織の居住せし地にて、伊居太神社・吳服神社に祀らる。五月山に構諸兄の後裔池田氏の居りし城田城址あり。細川氏守護の際之に屬せず。永祿十一年織田氏の兵の攝津に攻め入りし際、城主池田筑後守勝政降らず、織田氏の軍に攻略せらる。天正元年勝政放逐せられ芝木村重當城に居れり。江戸末期の國學者にして皇陵の荒廢を慨歎し、また名蹟の破壞を憤れ、これ等を考證してその所在を明かにし、その保存に盡力せし山川菲園（贈從五位）は此地の人なり。國取千兩幟・一「池田の國取、難波の名取、勝負は秋の相撲までおさらば」筆拾子・一「伊丹池田の造り酒は、生諸白といふ、元來水のわざにや造り上たる時は酒の氣甚だからく、鼻をはじき何とやらんにがくあるやふなれ共、遙の海路を經て江戸に下れば……其下りし値の樽より呑て、味ひ格別成と賞翫す」西鶴諸國ばなし・二「寛永武年、冬のはじめに津の國池田の里の東、吳服の宮山、きぬ掛松の下に」〔伊居太社〕大字池田に鎮座。郷社。祭神・應神天皇・穴織大神・仁德天皇・吳服大神外一神。延喜の制式内小社に列す。舊稱穴織大明神。例祭七月十七日。〔吳服神社〕郷社。祭神吳服比賣神・仁德天皇。吳服比賣は應神天皇四十一年阿知使主父子の吳國より伴ひ歸りし織工女なり。古來武家の崇敬篤し。例祭十月十八日。〔大廣寺〕曹洞宗。靈智山と號す。應永年間、邑主池田筑後守光正の開創にして曾天嚴を開山とす。天正年間、歌人牡丹花肯柏本寺に寄寓せしことあり。境内は清淨にして風致に富む。〔久安寺〕大字伏尾にあり。古義眞言宗。大澤山安養院と號し、高野山末寺たり。神龜二年行基の開基に係るといひ、天長五年空海之を中興し、久安元年實賢實三度重興せり。近衛天皇久安寺の號を賜ひ、歴代の勅願所と定められる。樓門は室町時代の特徴を備へし建築にて國寶に指定され、また奉安の木造阿彌陀如來座像一軀は藤原時代定印の作に係るものにて國寶たり。

【池田街道】 江戸時代、攝津國中津川（今の新淀川）南岸の本庄（今、大阪市東淀川區南部）附近より、豐能郡池田町に通ずる街道をいふ。

【池田】 河内國茨田郡の郷（和名抄）。今の大阪府北河内郡九箇莊村に當り、大字池田は郷名の遺稱。和名抄は訓を岡くも以介多と訓むべきか。池田首の族の和泉國池田郷より移住せる處といふもいま詳かならず。或は池田は茨田池に關聯ある地名か、茨田池址は大字池田と北方の友呂岐村邊なりといふ。

【池田】 和泉國和泉郡の郷。和名抄は以介多と訓ず。今の大阪府泉北郡北池田・南池田の二村及び北松尾村・南松尾村をも含めるものゝ如し。景行天皇の皇子大碓命の裔、和泉皇別池田首の居りし處にして、いま北池田村の池田神社は大碓命を祀るといふ。中世は池田莊と稱し、また松尾莊或は春木莊（南松尾村大字青木は遺稱）とも呼ぶ。續日本後紀承和六年の條に和泉郡安樂寺を國分寺となすとありいま南池田村に大字國分の名を留む。

【池田】 省線福知山線の一驛（明治二十六年設置）。兵庫縣川邊郡川西町にあり。

【池田村】 和歌山縣紀伊國那賀郡の北部。鈴河町の西方約二粁。南は田中村に接し、北は大阪府泉南郡大土村に界す。北境に和泉山脈の一峯三峯山（五七七米）峙ちその山脚南に延び、中部以北は山地を成すも、南部は紀ノ川の洪涌地に屬し土地低平にして水田良く拓く。また蜜・柑橘の產多し。淡路街道鈴河町より來り西方和歌山市に通じ、鈴河街道紀井川の谷に沿ひ北方より來り村の東南部に於て之に交叉す。大字北大井に車塚あり。昔に紀州大磯の虎女、熊野詣の途中此處にて死し、其車と共に葬るといふも、蓋し上代の墳墓なるべし。此地は和名抄、那賀郡那賀郷の内にして、中世は庄名に呼ばれ尾藤氏の一族池田氏の住せし地なり。池田の名は山中に海神池ありて、其水を引きて田野を灌漑せるより起るといふ。〔海神社〕大字神領にあり。郷社。祭神豐玉彦命・浦上國津姫命。乘仁天皇の御宇忌部宿禰の創建と傳ふ。一說に海神は宇良加美と訓むべく、海神は恐らく浦上の誤ならんと。三代實錄・光孝天皇仁和元年浦上國津姫神に從五位下を授けられしこと見ゆ。例祭十月十五日。〔紀伊國分寺址〕大字東國分にあり。聖武天皇勅願の國分寺の紀伊國に造營されたるものゝ遺址。塔婆址の土壇完存し、その上に礎石遺存し、北に漆の根跡殘る。礎石群の上にはいま鎮天堂が建ち、心礎は堂下にあるも、四天柱礎と共に圓柱座を有する形式のものなり。鐘樓の周圍に自然石の礎石九箇並び存するも、これらは原位置より移動せしものにて恐らく金堂の礎石ならん。また塔址の北に古瓦の堆積する場處あり、西の池の岸にある二箇の礎石は大門址なりと傳ふ。本堂床下の北部には大石をもつて蓋へる古井戸存す。遺瓦は巴瓦及び花瓦にていづれも奈良時代遺存の樣式を具有せり。いま指定史蹟たり。〔鎮琳寺〕大字豐田にあり。舊言宗山階派。金岡山と號す。寶龜年中信行此地にて彌勒像の靈異を感じ、一寺を創して慈氏寺と號せり。即ち本寺の濫觴なりと傳ふ。のち空海自ら不動像を刻みこゝに安置す。寛仁二年堂宇を再興して勅願寺となす。長元年中平忠常の東國に叛するや、勅命に依りて其調伏を祈れり。依りて勅して鎮琳寺と改めしめ、天皇護持の釋迦佛並に宸影を納め給ふ。寺寶に後醍醐天皇宸筆の和漢朗詠集・楠木正成の書簡等あり。〔櫻現寺〕大字池田にあり。眞言宗御室派。仁壽年間の開創。寺記に、曾我兄弟父の仇を復して誅せられし後、大磯の遊女虎なるもの尼となりて兄弟の遺物・遺骨を熊野へ納めんと來りしも、この地に病歿すとあり。寺内に虎尼の墓なりといふ石塔一基あり。その他車路・車池・車塚など皆虎尼のことに因みしものと傳ふ。〔傳法寺〕大字池田新にあり。眞言宗御室派。もと勢田村にありて地藏寺と稱せしも、元祿年中今の地に移る。即ち勢田村の富松助六の建立に係りしものなり。現寺號は覺鑁上人この地に住せしを以て改むといへり。寺寶に興教大師筆兩界種子曼陀羅・惠心僧都筆不動明王等あり。

【池田村】 鳥取縣因幡國八頭郡の東南隅。東及び南に中國山脈の主脈に依りて兵庫縣養父・宍粟及び岡山縣英田郡に界す。他の二方また其支脈に依りて圍まれ村内概れ山地を成せり。八東川の上流村の東部に發源して西北流し、其沿岸に僅少の平地を見る。若櫻街道（因幡街道）兵庫縣姫路市より宍粟郡を經て東境戸倉峠を越えて來り、八東川に沿ひて北に下る。〔岩屋堂〕大字岩屋堂にあり。大同元年の創建に係り、本尊不動明王は弘法大師の彫刻に係る。俗に黑皮不動と稱せられ、目黑不動・目赤不動と共に日本三體不動と呼ばる。堂は山上の奇怪なる岩洞中にありて禍にて上下す。窟は東向にて高さ約一四・五米、間約七・三米、奥行約一八米あり。境内の南の山下に五輪の碑碣十一基あり、參議平經盛一族の墓なりと傳ふ。

【池田村】 岡山縣備中國吉備郡の中部。總社町の北方約五粁。高梁川の左岸に沿ふ。和名抄、賀夜郡日羽郷の内か。村内概れ丘陵地にして林野多なし、中部を高梁川の支流槙谷川南流して其沿岸に幅狹き小低地あり。伯備線南方倉敷方面より來り、村の南部に豪溪驛（もと宍粟驛、大正十四年二月設置、昭和十年五月豪溪と改む）を置く。本村及び西北隣大和村に亙る槙谷川の峽谷を豪溪といふ。約五—六百米の間兩岸は絶壁をなし、石柱巖立し、天柱峯・圭峰・盆子岩・劍岸・雲梯峯等屏立し、矮樹雜松その間に點綴茂

生す。一大岩壁にある「天柱」の二字は文明の頃僧前の碩儒武元登々庵の筆に係るといふ。盆子岩は東西に長く南北に短く故立せる長方形の岩にて、水平節理良く發達し、恰も箱を重ねたる如き形狀を呈せるより重箱岩の名あり。また山椒魚を產す。豪渓は今指定名勝たり。

【池田】 岡山縣淺口郡にありし村。明治三十六年十二月本村と道口村とを廢して富田村を置く。

【池田町】 德島縣阿波國三好郡の西北部。劍山脈を横斷北流する吉野川が讃岐山脈に阻まれ流向を東に轉ずる屈折部の南岸の河成段丘上に位し、四國山脈と上野臺地との間に小低地ある外殆ど山地をなす。產物に米・麥・繭・煙草の產あり。殊に葉煙草（阿波刻）の集散地として古來名高く其年額二百四十萬圓に達す。然しこの地の產品は一種の臭氣を有するも火附よきため專ら「なでしこ」、「あやめ」、「はぎ」等の刻煙草の原料に用ひられ特に船乘に愛好さる。また吉野川上流の鮎は味・香氣優れたるを以て名高し。此地は古く伊豫・土佐方面への交通上の要衝に當り、いま東方德島より來る德島本線と、北方多度津より高知方面に向ふ省線土讃線との接續點なる阿波池田驛（大正三年設置）あり。また伊豫街道吉野川に沿ひて東西に走り伊豫川之江に省營バス通ず。舊郡役所の所在地にして縣工區出張所・池田稅務署・德島地方專賣局出張所などの官衙あり。また含銅硫化鐵鑛を產出する三縣鑛山鑛區の一部を成す。此地或は和名抄の三好郡三縣郷に屬せるか。中世は田井庄大西と稱し大西城（池田城）の在りし地なり。村名は承和十三年阿波介たりし山田古嗣が、當地の沼澤の地を整理し三方の山間より落つる水を貯へて池を剏り田を作らしめしに依ると傳へらる。而して明治三十八年町制を布き以て今日に至る。〔大西城〕 一に池田城と稱す。正治二年小笠原長清阿波守護となり、文永中その子長房守護職を襲ぎ三好郡を領し此地に築城居住す。爾後三好氏を稱し國主細川氏に隨從せり。永正中長輝に至り筑前守と稱し大いに家名を揚ぐ。其子之長同十七年上洛して細川高國と桂川に戰ふ。等いで大永七年その子元長は細川晴元を立てゝ細川高國を攝津に破る。天文元年河內の畠山高政の居城高屋城を攻め其族を遙びて顯本寺に據る。偶〻高政の急襲をうけ戰敗れて遂に自殺す。而も門地益〻盛んにして其子長慶は細川氏に代り京畿に威を振ふ。天文二十一年長慶の弟之康、守護持隆を弑して膳所（板野郡）に據り全州に命令す。永祿三年之康和泉に入り畠山高政と戰ひて敗北し、子長治嗣ぐ。天正五年その臣一宮成助竊に欺き長貴我部元親に送り長治を襲殺せしむ。三好の舊臣等弟の十河存保を迎へ主となせしも、同十年元親再び來り侵し存保遂に敗走せり。のち元親の臣中內安吉之を守りしが、天正十三年に至りて蜂須賀氏の有となり、家宰牛田氏之を守り阿波九城の一に數へられしも、寛永十五年に至りて城廢す。今其址は諏訪公園・池田小學校・池田公會堂・縣立池田中學校等の地となる。〔醫家神社〕 大字池田にあり。郷社。祭神、大國主神・少彦名神。創立年代不詳なるも、延喜式內社に列せる倭大國玉神大國飯神社に充つる說あり。もと醫家大明神とも稱す。寛政十一年祝融の災に遭ひ、享保年間には神官宅並に別當蓬萊寺燒失し舊記を失へりといふ。例祭十月十七日。

【池田町】 香川縣讃岐國小豆郡（島）の西南部。西南は池田灣に面す。地勢東北に高く西南に傾斜す。市邑は西南岸に近き傾斜面に發達し、煙草・麥・米・甘藷等の產あり、また醬油釀造行はれ、素麺の特產あり。島の東南部にある坂手村及び西隣の土庄町にバス通ず。また漁船の出入多し。此地古は池田郷と稱せり。中世備前國に屬せしが、貞治年間細川氏の管領となりて讃岐國に屬し、加子浦といひて無稅地たり。天正年間豐臣氏の直轄となり初めて租稅を徵せらる。元和元年に至り德川氏の直領に移り、大坂奉行に支配せられ、加子浦の稱を廢せり。寛保三年備中倉敷代官所の支配となり、天保九年津山藩の分領となり、明治四年香川縣に歸せり。昭和四年町制を布く。大字中山は瀨戸內海國立公園の內にして北麓に應永年間龜浦信鳳の造營せりといふ湯殿庵あり。堂下に涌泉ありて田丸町飴を謂すに足るといふ。修樹翁碑として閑雅の趣に富めり。「おのつから光も清くたれてすむ月かあるしの山の井の水　信鳳」また建久年間北條時頼、二階堂信濃守を隨へ諸國を行脚せし時、偶〻大字中山の邊にて病に臥し、當村八木氏の主公々佛其だ慈善心に富みしかば、專ら時頼の看護に盡力せり。時頼恢復歸館の後召して雙刀及び朱印地を賜ふ。のち公々佛の玄孫豐吉なる者傳來の朱印を沒取せられしを愁訴し、更に北條時宗より朱印を賜ふ。其書・刀劍共に今なほ八木氏に傳へらるといふ。〔長勝寺〕 大字池田にあり。古義眞言宗。金陵山阿吽院と號す。小豆島八十八所第三十三番の札所にして、第三十五番の札所たる池田八幡本神も遷されて今當寺境內にあり。寺傳に弘仁年間僧空海の草創といふ。本尊傳池田八幡本地佛座像三軀は鎌倉期の作といはれ國寶たり。〔明王寺〕 大字池田にあり。古義眞言宗。洞雲山福生院と號す。寺傳に空海の開創に係るといふ。小豆島八十八所第三十七番札所たり。釋迦堂は天文二年源光安の建立と傳へ、其裝飾・彫刻等よく室町時代の特色を發揮し國寶たり。〔龜山神社〕 大字池田にあり。郷社。祭神、品陀和氣命・中津比賣命・息長帶比賣命。創立年代未詳なるも、地方の古社にして、古來近郷の產土神として村民の尊崇篤し。

し。例祭八月十六日。〔光明寺〕 大字池田にあり。眞言宗御室派。陰雲山と號す。弘法大師の開基にして、元祿年間再興せらる。本尊阿彌陀如來は惠心僧都の作なりと傳へらる。小豆島八十八箇所中第四十五番札所。〔地藏寺〕 大字中山にあり。眞言宗御室派。四明山と號す。行基菩薩の草創にして、貞享年間に再興す。本尊地藏尊は弘法大師の作と傳へらる。小豆島八十八箇所中第四十五番札所。〔長勝寺〕 大字池田にあり。古義眞言宗。金陵山阿吽院と號し同宗御室派末寺たり。小豆島八十八箇所第三十三番札所にて三十五番札所たる池田八幡大神も遷されて當寺にあり。寺傳に弘仁年間空海の草創に係るといふ。本尊傳池田八幡本地佛座像三軀は一種の神像に類し鎌倉期の作と推知され現に國寶たり。〔保安寺〕 大字蒲生にあり。眞言宗御室派。隱光山と號す。また光明院と稱し、弘仁年間弘法大師の開基にして、正安年中義朝上人中興す。本尊十一面觀世音は行基菩薩の作。小豆島八十八箇所中第四十番札所。〔瀧水寺〕 大字蒲生にあり。太麻山と號す。本尊十一面觀世音は弘法大師諸國遊化の砌、當山の岩窟內に安置せるものなりと傳ふ。小豆島八十八箇所中第四十二番の札所。

【池田】 讃岐國山田郡の郷名。和名抄は伊介多と訓す。今の香川縣木田郡西植田村邊に當る。大字池田は其遺稱なり。

【池田灣】 香川縣小豆郡小豆島南西岸にある灣。島の南岸中央に長く突出する白濱崎（地藏崎・釋迦ヶ鼻）と其西方に對向して突出せる黑崎との間に抱かれ、灣岸には斷崖を以て海に臨める長者ヶ鼻・黑崎等の小突出ありて更に多くの小支灣を作り、北西部よりは傳法川これに注ぎ、また灣內に神天島・小豆島・餘島等の小島浮びて景色よく、瀨戸內海國立公園の域內に屬し、神浦・池田・土庄等の各地に漁地あり、鯛・鰯等の沿岸漁業の根據地をなす。

【池田】 伊豫國周敷郡の郷（和名抄）。今の愛媛縣周桑郡丹原町の邊に當る。町の大字池田は其遺稱なり。姓氏錄に池田首の名見ゆ、或は其族の居住せし地か。

【池田】 筑前國糟屋郡の郷（和名抄）。今の福岡縣糟屋郡大川村・仲原村等の邊なちん。筑前續風土記に「今池田郷、飯塚原、下原、原上、立花口、三代諸邑、是其地也」とあり塔原は卽ち今の大川村大字戸原の地なり。宗像社務著座次第記に續橋座主池田民部卿秀賢の名見ゆ。恐らく此地の人ならん。

【池田】 熊本縣飽託郡にありし村。大正十年六月熊本市に編入。

【池田灣】 島根縣隱岐半島の東南端にある灣。提宿郡今泉村の南部に當り、南西方には秀峯蘇摩富士（開聞岳）を望み、東方約二粁に鯉池あり。海拔六六米、灣岸線一四・四粁、面積一一・一方粁。ほぼ圓形の灣にて四圍は安山岩よりなる斷崖に圍まれ天然の排水口なし。深度は二三三米にして本邦第四位で西南日本にて第一位を占む。また底は海面下一六七米にして秋田縣の田澤湖の一七五米に次ぎ第二位なり。成因は數箇の斷層に沿ひて陷沒せるものといはれ、湖底は水面に達せざる小火山錐の山頂部なり。水色は藍、透明度は一五米にて鯉池と共に西南日本にて最も清澄なり。湖中よりは大形のゴマウナギ及び小鮎を產し、目下鰹・公魚の養殖も行はる。湖邊は風趣に富み、近時遊覽船を浮ぶ。土佐の傳に據れば往古枚聞岳湧出の跡なりとて今猶ほ枚聞の御池といふ。墓松詩集に穎娃中に湖水あり、命じて神ノ御池と見えるは卽ち此湖水なり。この湖水古くより龍神の潛居する處なりといひ湖面に風なきに波浪起り或は水五色の文をなし或は水上神燈ん現じ、或は夜陰舟船の往來する聲ある等種々の神變あり。此等の事は近邊の土人往々に見聞する所なりといひ、敬長尊崇し、古くより湖上に舟船を浮ぶる事を禁じ及び舟車漁海等の談話するを忌めり。若し是を犯せば忽ち狂風・暴雨等の異變あり、また湖邊肩輿を禁じ已むを得ずして是に乘りて通行する者は必ず湖水の方には坐を以て挽ひ、肩輿を腰すを例とせり。またこの湖は他より一滴の渓水も注入せざるに、旱魃にも更に減水することなく、また雨なきに水勢俄に增して岸上は水中に沒し陸地七、八町に亞ることありといふ。水は清澄甘美にして湖邊の民家では專ら此の湖水を飲用水にあて、別に井を穿たずといふ。東岸に池主明神と稱する社あり、その岸頭にある瓦松を神體とす。往昔農夫四郎といふ者の先祖、某家の婚禮に赴かんとて池邊を過ぎ、水邊の叢中に臥せる人首龍身の異形のものを見、刀を拔いて是を斬りしに血に染まりしまゝ水中に躍り入れり。然るに其男その夜俄に病みて幾許もなく死し妻もまた病み、狂ひ、我は此地の龍王なり、我を殺せし故に汝の子孫を悉く絕すべしといへり。親族の者逕大いに驚き怖れさまざまに謝し神を崇め社を立て永く祭祀を行ふべき旨を誓ひしに、妻の曰く、我に母あり、母子を共に神に祀らば願を赦すべし、また社を建るには及ばず生樹を以て神體とすべしといひ舉りて病癒たり。かくて池主明神の地に龍出でゝ死す。則ち龍を其處に葬り神社を建つ。卽ち今の池主明神にて神體は被古松樹なり、其側の石祠は龍の母を祀れるものなりといふ。また土人の一說に四郎の先祖農事に出でゝ此の湖畔に來りしに龍臥たり。時に嘗て此農夫の貸主たる土民來り、若し此龍を殺さ

ば卽ち貧したる餘を與へんといふ。農夫より錢を拾ひて龍頭を斬る。龍傷きて木中に隱り入り、其後池王の地に上りて死せり、既にして農夫暴死して其家引續き貧困甚し。因りて其罪を謝し神に祭むといふ。而して其家今なほ存在するもなほ且つ貧窮にしてしかも嗣子なく代々養子なりといふ。祭祀は毎年六月十八日、神酒及び鯛形の餅を日の數三百六十五を供ふ、かくして當日は衆人酒を飲み醉を盡し龍の臥せるに象りて背横に臥するを故事とせりといふ。

イケダ　池多村　富山縣婦中國郡負郷の西北部。西は射水郡に接す。西南部は丘陵なるも東北部は富山平野の一部に當る平地にて水田拓け、米を始め穀類の產あり、また養蠶盛んに行はる。西北部に沼澤あり、その中の古箇池は今貯水池として利用せられ、周圍約四軒、冬季鴨の群集するもの多く、鈴猟の好適地として知らる。和名抄、郡負郷高野郷の内なちんか、近世長澤郷と呼ばれし地。

イケタニ　池谷　↓*塩江村（徳島縣）

イケツガワ　池津川村　↓野迫川村（奈良縣）

イケデラ　池寺　↓東甲良村（滋賀縣）

イケニエ　生贄川　静岡縣駿河國富士郡にある川。一に吉原川。富士山南側の裾野、吉永村の十里木峠に出で西南流して吉原町の東南境を繞り元吉原村の西にて沼川（潤川下流）に合し駿河灣に注ぐ。元吉原村の西部の砂丘を天香久山といひ、昔こゝにて神祇に生贄を奉れるより川名出づといふ。

イケニシ　池西村　香川縣讃岐國香川郡の中央西部。高松市の南西約一〇粁を距て、西は綾歌郡昭和村に隣りす。南より北に緩かに傾くも概して平坦にて田畑よく拓け米・麥の農產少なからず。古くは和名抄、香川郡河邊郷の地に當る。明治二十二年池内に西庄を合併して本村を建つ。

イケノ　池野

【池野村】愛知縣尾張國丹羽郡の東南部。東は岐阜縣可兒郡に、南は東春日井郡に境す。本村は四方山に圍繞せられ、西部に入鹿池あり、池の西に尾富士山（二七七米）あり。東部に黑平山（三二七米）あり。入鹿池はもと入鹿村のありし處、其地低窪なるを利し、寛永十年尾張藩主義直公民家なる他に移轉せしめて池塘を築けるもの、池水は西方尾富士山の麓を走りて羽黑村に出で羽黑川といひ、更に西南流して切川となりて末は五條川に注ぎ專ら丹羽・東春日井・西春日井三郡の水田の灌漑用水に利用せらる。米・麥・繭を產し、茸類・栗・瓦等を特產とす。本村は安閑紀・二年五月「尾張國間敷屯倉、入鹿屯倉」とある入鹿の地なるべく、明治九年富士・安樂寺・神尾・入鹿の舊四箇村を併合して一村を成せしものにて入鹿池あるを以て池野村と名づく。本村の

ひとつばたご自生地は天然紀念物に指定さる。

【池野村】福岡縣筑紫國宗像郡の北部。赤間町の北西方約七粁。東は遠賀郡に界し、西は玄界灘に臨み、北西方海上に大島・地ノ島を望む。東北部と西部は丘陵にて林野を成すも、中部には耕地拓けたり。赤間町にバス通ず。大字池田の地には含炭地層の露頭あり池田層と稱せられ、いま池田炭坑ありて、塊炭・粉炭・粗炭を產し、我國主要石炭山の一に數へらる。

【池野鑛山】長崎縣北松浦郡の南部にある鑛山。佐世保市の北方なる相浦川流域にある炭田にして、鑛區は柏木村を中心として大野・世瀬・世知原等の四箇村の地に跨り、塊炭・粉炭・粗炭等を產し、我國重要石炭山の一。

イケノウエ　池上村　熊本縣肥後國飽託郡の西部。熊本市の西南に接し西は高橋町に隣りす。金峯山（六六六米）の東南麓にて、地西北より東南に低下し、西北半は山地なるもその餘は熊本市との間の小丘陵地を除き低平にて耕地よく拓け、米・繭の產あり。慶長年間此地の味生池を埋沒して坪井川を通じ高橋の津頭を拓く。味生池は一に功德池といひ當時は大なる池なりしも、今は全く田圃となれり。（高橋西神社）大字高橋にあり。鄕社。祭神、天照皇大神・住吉大神・天津兒屋根命・阿蘇十二神。創立年代未詳なるも應德年間の勸請と傳ふ。もと若宮大明神とも稱せり。江戸時代寛文二年藩主細川綱利社殿を造營せりといふ。高橋村の產土神として仰がる。例祭十月二十九日。

イケノタイラ　池平　日本北アルプス劍岳の東北、東方の仙人山と西方の池ノ平山の中間部に位し、小黑部谷・劍澤・劍岳等に到る主要な足溜り場。池ノ平小屋鉉に仙人池あり。

イケノタニ　池谷　徳島縣板野郡瀘江村の大字。省線撫養線の池谷驛（大正五年設置）あり。

イケノハタ　池之端　↓中浦村（新潟縣）

イケノハタ　池端　↓*

【池ノ端】樺太庶線豐原線の一驛（昭和三年設置）。樺太眞岡郡眞岡町にあり。

【池端】東京市下谷區の地名。不忍池の西・南をさしていふが、現今でも七軒町・茅町・仲町は池の端と冠する（茅町に冠するは公稱でない）。西鶴置土產・二「黑門より池のはたをあゆむに、しんちう屋の市右衛門とてかくれなき金魚、銀魚を賣ものあり」辰巳之圖「池の端より米澤丁の村田が所がいい」淫女皮肉論「もしやとがむる人あらばと、忍ばずが池のはたなれど、忍んで通る山下ま」

イケノハラ　池原　上野國吾妻郡にありしといふ原。歌枕。岡國雅記「すむ水はありともみえぬ池の原尾花さきてたかき波かな　慈鳳」

イケノハラ　池之原　播磨風土記印南郡に見ゆる地名。卽ち其地は美保山（伊保山）の西にあり、原の中に池のあるにより池之原といひ、原の南に聖德太子の頃弓削大連の作りしと傳ふる大石ありと見ゆ。今兵庫縣印南郡阿彌陀村の大字南池・北池の邊はそれにて、大石は通稱石賣殿と稱するものならん。播磨風土記・印南郡「大國里……曰美保山、山西有原原中有池、名曰池之原、原南有作石、形如屋、長二丈、廣一丈五尺、高赤如之、名號曰大石、傳云、聖德王御世、弓削大連所造之石也」※阿彌陀

イケノベ　池邊

【池邊】下野國河内郡の郷（和名抄）。今の栃木縣宇都宮市及び河内郡の豐郷村邊の地。今字都宮市の池上町はその遺稱の轉訛ならん。この地は往昔池邊直の居りし地なるべし。

【池邊】下野國塩川郡の郷。和名抄は訓を阿くも讃岐の池邊郷の例により伊介乃倍と讀むべきならん。その地今詳かならざるも、栃木縣下都賀郡の赤麻沼の邊、卽ち部屋村・塩川村・生井村の邊か。河内郡にも池邊郷あり、これは共に姓氏錄に「池邊直、坂上大宿禰同祖、阿智王之後也」とあり、坂上氏は蝦夷征伐に功あり、蓋し其族の此地に居り、姓氏により郷名の生ぜるものなるべし。

【池邊】丹波國桑田郡の郷。和名抄は訓たり。のち黑鴨村に併合され、近年北豐島郡西巢鴨町の大字となり、今は豐島區の町名たり。この地は貝塚多く夥し石鏃を出ぜり。里見八犬傳・三ノ一「軍勢凡一千餘騎、不意に發りて斜々と池袋まで推寄せたり、豐島がたには由斷して敵寄すべしとは思ひかけねど」

イケノ——イケン

イケベ　池邊村　岐阜縣美濃國愛老郡の東南隅。揖斐川下流の右岸に沿ひ、東北は安八郡に、東南より西南にかけて海津郡に境す。西に下池ありてその餘水は村内を流れて揖斐川に注ぐ。土地平坦にして米・麥の產多く特產物に蓮根・里芋あり。本村はもと根古地・大卷・大場等の下池の東北岸の數諸村を合併して設立せるもの。下池の傍に位するより池邊村と名づく。根古地は古くは領地に作り、美濃加茂郡の大地、尾張海西郡（今の海津郡の一部）の氣地等の如く猶が兒童に危害を加へし傳說ある地なり。百錄抄に「久安六年、京內訟言、近江美濃兩國山內、有奇獸、夜陰群入村間、食損兒童、俗稱之猶狐、此事見小野宮右府記、俗言不逸也」とあり。寶曆年間、薩摩義士治水奉行原田親貞は揖斐川・木曾川・長良川の三大川の治水工事を行ひ本村役舍遺址にて責任自刃す。現在二十七義士の記念碑あり。※油島

イケマ　池間島　沖繩縣琉球國宮古諸島中の一小島。宮古島の西北方約二粁に位し、周圍約一二粁、平均高度約三〇米、東南岸にはふかき入江ありて好漁地をなし、西岸には珊瑚礁南北によく發達せり。行政上對岸の宮古郡平良町に屬し、池間・前里の二字に分つ。東南方の宮古島との間の海中には礁脈相連なる。耕地拓けて甘藷其他を產し、樹木は阿旦樹を主とし、他雜稀なり。池間はもと伊奇麻・伊喜麻等にも作り、土人はイチマと發音す。

イケワタ　池和田　↓鶴舞町

イケン　渭原

【渭原郡】朝鮮平安北道十九郡の一。道の北部に位し、北東南は江界郡によりて圍まれ、南西は楚山郡に接し、北西境は鴨綠江を隔て滿洲國安東省に對す。茅蓬嶺に屬する山岳重疊す。卽ち東北境には甑峯（一三五五米）・中枝峯（一二四一米）、東境に淵德山（一七三〇米）、南境に白嶽山（一八二三米）、中部に旬紡德山（一一八八米）等の諸峯聳え、渭原江東北境中枝峯の南側に出で、山地を曲折して貫流し、郡のほゞ中部に於て南部より來る滿浦江と合せ西流して鴨綠江に注ぐ。また禿魯江の下流江界郡より入り來り郡の北部を掠めて鴨綠江に合す。道路は北西邊を江岸に並行して楚山江界郡に通ずるもの、渭原江の河谷に沿ひて東北に向ひ江界郡江界邑に通ずるもの及び東南方の江界郡武坪里に通ずるもの等を以て幹線となす。鐵道は通ぜざるも、鴨綠江の水運はよく之を代償し、冬季は凍結せる河面に橇を通じ交通に便ずること鈴なから

す。渭原江岸その他に拓けたる小平地には農業行はれ米・粟・大豆・大麻・棉等を產す。山地には森林多く木材・薪炭の產少なからず。渭原江の下流なる渭原面は本郡の首邑にて郡役所あり。本郡は李朝五十二年に新設され、當時は兩隣の江界・楚山二郡をも含める大郡なりしも、其後理山郡（現在の楚山郡）・江界郡を割き、間もなく本郡は理山郡に合併せられ現渭原面萬戶洞に口子鎭を設けて統治したるも、交通不便にして支障多きより再び理山郡より分立す。

【渭原面】朝鮮平安北道、渭原郡の北西部。南は楚山郡に隣接し、西北は鴨綠江を隔てゝ滿洲國安東省に對す。面內概ね山地なるも、東より西に流れて鴨綠江に合する渭原江及び北流するその支流流域には平地拓けて農耕行はれ、米穀・粟・大麻等の產あり。山地よりは木材・薪炭を出し、鴨綠江岸に於ては結氷季以外は筏流に從事する者多し。渭原江口より約四粁上流の舊邑洞、卽ち渭原の市街地は渭原郡の首邑にして、郡役所の所在地たり。この地を通じて幹線道路通じ、渭原江・鴨綠江の水運と相俟ち交通・商業の中心をなし、對岸の安東省諸邑との間に交易行はる。昭和十年渭原・密山の二面は合併して渭原面となる。

イゴ　伊古　→宮前村（埼玉縣）

イコー　伊香　→高城村（福島縣）

イコー　伊興　東京府南足立郡にありし村。昭和七年南足立郡全郡卽ち本村ほか千住町・西新井町・江北村・舍人村・梅島町・綾瀨村・東淵江村・花畑村・淵江村等は皆東京市に編入されて足立區を建て、伊興は今町名に其名を遺す。

イコマ　生馬

【生馬】下野國都賀郡の鄕名（和名抄）。今の栃木縣下都賀郡の中村・水代村・穗積村等に當る。今、中村の大字に生駒の遺稱あり。舊位置は小山鄕（今の下都賀郡小山町・桑村）の西、池邊鄕（同郡の部屋村・寒川村・生井村の邊か）の北とす。生馬鄕は中世、中泉庄（今の下都賀郡の一部）の起りし時、その庄內に入る。

【生馬村】島根縣出雲國八束郡の北部。松江市の西北約四粁、南は宍道湖に臨む。島根半島の中部の南側にて東北部に丘陵あるも他は概ね土地平坦にして水田多し。宍道湖の一排水口たる佐陀川、西境を北に流れて惠曇村江角浦にて日本海に注ぐ。主產物は米を第一とし外に麥・繭・疊表、特產物には松茸・芹等あり。私線一畑電氣鐵道の濱佐陀驛（昭和三年設置）を置く。古くは和名抄、島根郡生馬鄕に當り、鄕社生馬神社あり。延喜式に見える古社。出雲風土記に生馬鄕は神魂命の御子八尋鉾長依日子命の平明めて憤しからずと詔り給ひし故に生馬といふとあり。卽ち詔に依りて伊加麻といふべきを誤りて伊古麻と呼ぶに至りしものか。出雲風土記・島根郡「生馬鄕。郡家西北一十六里二百九歩。神魂命御子八尋鉾長依日子命詔、吾御子平明不憤詔。故云生馬」（遍照寺）大字下佐陀にあり。天台宗。寶正山と號す。文明年中の開創にして、寬文年中豪鎭法師中興す。本尊は丈餘の十一面觀世音にして、出雲國中第一の巨座像たり。行基菩薩の作なりと。また安阿彌の作なりといふ持國天・毘沙門天を安す。每月正月十七八日の兩日修正會式あり。

イコマ　生駒

【生駒】愛知縣東加茂郡にありし村。明治三十九年本村は介木村・築羽村・野見村等と共に廢せられ旭村を建つ。

【生駒郡】奈良縣十郡の一。大和國に屬し縣の西北隅。北は京都府相樂郡、東は添上郡、南は北葛城郡に接し、西は生駒山脈を距てゝ大阪府北河內・中河內の二郡に隣る。東邊より東南邊は所謂奈良盆地の一部なるも、西半は生駒山脈の東麓にして丘陵多く平地少なし。その間に生駒川は西部を、富雄川は東部を南に流れ何れも郡の南部にて大和川に合す。大阪より奈良に至る奈良街道は生駒山脈の中部暗峠を越えて東西に通じ、清瀧街道は生駒川の谷に沿ひて南北に走り、また省線關西本線は郡の東南部を掠めて奈良に向ひ、私線大軌電車は生駒山を穿ちて北部を橫斷して同じく奈良に至り志貴生駒電鐵は生駒川に沿ひ關西本線と大軌電車とを連れ交通の便甚だよし。本郡は明治三十年に添下・平群の二郡を合併して置けるものにて、郡名は生駒山に因む。

【生駒町】奈良縣大和國生駒郡の西部。生駒山の東麓に位し、龍田川の上流生駒川の上源地所謂生駒谷に屬す。生駒山の登山口に當り、町は大阪電氣軌道生駒隧道の東口附近にあり、この電車の開通後迅速に發達せり。生駒隧道は全長三三八〇米、生駒山の北部を穿ち、西麓大阪府側より東麓の生駒町に通ずるもの。もと北生駒村（明治二十二年生駒谷を南北生駒の二村に分つ）といひしも、大正十年町制施行の際生駒町と改む。古くは和名抄、平群鄕の內といふも詳かならず。この地は生駒氏發祥の地にして藤原良房この地に山莊を營み、子孫生駒氏を稱せりと傳ふ。（寶山寺）生駒山の東中腹、大字菜畑にあり。眞言律宗。同宗別格本山に列す。俗稱生駒の聖天はもと般若窟と稱せられ、修驗者の行場なりしも、延寶六年寶山律師中興して伽藍を營む。本堂は元祿年間の建立にして本尊不動明王は律師の自作と稱せられ、いま國寶たり。なほ寺寶五大明王像（木造厨子入五軀、元祿十四年湛海の作）・彌勒菩薩像（絹本著色一幅平安末期の作）・愛染明王像（一幅室町時代作）・春日曼荼羅圖（一幅室町時代の作）は何れも國寶。（長福寺）大字俵口にあり。眞言律宗。本尊は阿彌陀如來。聖德太子の御開創と傳へ、往古輪奐の美を極む。本堂は桁行五間、梁間三間、一間の向拜を附し、單層、屋根入母屋造、本瓦葺にして、弘長年間の建物といはれ、寺寶の鍍金銅製能作生塔とともに國寶たり。

【生駒山脈】河內大和二國の境をなす所謂金剛山脈の北部。大阪府中河內郡和歌山縣生駒郡の二郡の境界をなす。南北に延びた地壘山脈にて南は大和川の峽谷に沿ふ斷層線によりて南方の二上火山と隣たる。西側は河內平野に急斜するも、東側大和盆地に向ひては緩かに下る。主として花崗岩と花崗片麻岩より成り、北部の生駒山（六四二米）を主峯とし南部に高安山（四八八米）・鷲ノ巢山（二七八米）あり、高安山の東には信貴火山（四三七米）聳ゆ。暗峠・十三峠等の山路あるも河內・大和間の障壁たり。

【生駒山】奈良縣生駒郡と大阪府中河內郡の境にある山。所謂金剛山脈の北部卽ち生駒山脈の主峯にして、標高六四二米。奈良縣生駒郡生駒町の西に聳え、その脈は南北に延び南に暗峠、北は妙見山となる。生駒山の大字菜畑より山頂まで約四粁、いま大阪電氣軌道のケーブルカー通じ登山容易なり。山頂に航空燈臺・生駒山遊園地あり、遊園地は面積約九、九〇〇アール、最新運動具、高さ約三六米の飛行塔・スケート場・サンマーハウス・食堂・休憩所等を有し、東方に奈良市街・笠置山脈、西方に大阪市街・遙に淡路島等望まれ眺望佳し。東側に延暦年間中興開山寶山律師の開基と傳ふる名刹寶山寺（生駒の聖天）、また西側には興法寺、なほ東麓に行基菩薩の墓など存す。古くは生馬山・膽駒山・射駒山とも書き、史上夙くよりその名見え、和銅五年正月、烽火を置き、天平元年二月長屋王の讒せられて自盡するや其妃吉備內親王の屍と共に生駒山に葬る。名稱の起原は古事記に應神天皇の朝、百濟より貢上せし馬を、此山に放飼せる故事に起因すといふも詳かならず。また有名な和歌の名所。萬葉・一〇「妹許と馬に鞍置きて射駒山うち越え來れば紅葉ちりつつ」

【生駒川】奈良縣生駒郡の川。龍田川の上流の稱。源を生駒山に發し南流して大和川に入る。また平群川とも稱す。

イコリ　伊古利岬・伊久利岬　北海道の南西部、內浦灣（噴火灣）の北岸に突出する岬。膽振國虻田・山越兩郡界なる禮文華峠の南東端にして、絕崖急に海に迫る。高さ約三八〇米。岬の頂上には樹木鬱葱と茂りて天空を摩す。禮文華川は此岬の東側に於て海に注ぐ。また岬端下に高さ約二五米、毛筆を立てたるが如き奇岩あり、イコリ岩と呼ばる。原名をイコリシレトといひアイヌ語にて「高き岬」の義なりといふ。

イサ　石原　京都府天田郡西中筋村の大字。省線山陰本線の石原驛（明治三十七年設置）を置く。

イサ　伊佐

【伊佐】→伊讃（常陸國）

【伊佐村】兵庫縣但馬國養父郡の東北部。八鹿町の東北に隣り、北は城崎郡に、東は出石郡に界しその交會點に須留寳山（四四九米）峙ち、出石郡の界に淺間峠あり・北部及び東部は概ね丘陵にて林野をなすも、西北部は圓山川中流々域にて、水田・桑畑多し。主產物に生絲・繭・米等あり。八鹿より北方豐岡方面への縣道西部を通り、いま山陰本線これに沿ふ。村內に式內淺間神社及び式內葛神社鎭座す。古くは和名抄淺間鄕の內にて大字淺間は鄕名の遺稱とす。大字伊佐邊の田地は延寶年間櫻井氏の開墾にてもと伊佐新田と稱す。（淺間神社）大字淺間に鎭座。村社なれど式內の古社たり。祭神木花開耶姬命。例祭四月十五日。（葛神社）大字淺間に鎭座。村社なれど式內の古社たり。祭神一言主神。例祭九月九日。

【伊佐町】山口縣長門國美禰郡の南部。カルスト地形（石灰岩景觀）を以て有名なる秋吉臺の一部にして全町概ね丘陵にて原野多きも中部は水田拓け、南東は山嶺を以て厚狹郡に隣る。主產物は米・麥を第一とするも北部には石灰・大理石の產多く、外に木炭・木材・瓦・和紙等を產す。舊石州街道に沿ひ街村的聚落として發達し往時はその一驛なり。いま省線美禰線の伊佐驛（明治三十八年設置）は西隣大嶺村にあり、古來交通の便に惠まる。山口區裁判所出張所・縣種畜場・伊佐警察署及び山本實科高等女學校等ありて郡の一中心をなす。古くは和名抄、伊佐鄕の地にして中世佐々木行綱この地に伊佐七郞と稱し子孫伊佐氏を稱すといふ。大正十三年町制施行。杉森石打明神と呼ぶ社あり、三代實錄貞觀十五年の條に長門國武智石打神と見ゆる社なりといふも詳かならず。また幕末尊攘の志士岡崎高楨（贈從五位）は此地の人なり。※秋吉臺（廣濱八幡宮）字宮ノ前にあり。鄕社。祭神、應神天皇・仲哀天皇・神功皇后・外四神。創立年代未詳なるも、地方の古社にして江戶時代には萬治三年及び元祿十五年社殿造營のことあり。なほ近鄕の產土神として一般の尊信を蒐む。（河原ノ大櫻）指定天然紀念物。大字河原にあり。一株の白櫻にして目通幹圍八・五米地上約八米の高さに於いて三大支幹に分る。枝條四方に擴り白櫻の巨樹として有數のものなり。

【伊佐】→淸水町（高知縣）

【伊佐郡】鹿兒島縣十二郡の一。薩摩國に屬し、縣の北端に位す。東は姶良郡・宮崎縣西諸縣郡に、南は姶良・薩摩二郡に、西は薩摩・出水二郡に、北は熊本縣球磨・葦北二郡に界す。面積三九一・五九方粁。四境何れも山地を以て圍繞せらるゝも中部は盆地をなし、川內川は南部を支流羽月川は北部を潤し、水田・畑地拓け地味肥沃、農業盛んにして米・麥・大豆・甘藷・大根・繭・茶等を產し、牧畜また榮えて牛・馬を出し、布計・藤野・

山野等の饑山ありて金・銀を産す。縣道南北に通じ姶良郡より熊本縣葦北郡水俣方面に走り、また郡の中央部大口より西南隣薩摩郡川内方面に至る。鐵道山野東線は肥薩線栗野驛（姶良郡）より分岐しほゞ川内川・羽月川に沿ひて北上し、郡の北境薩摩布計驛に達す。本郡は中世に於て置かれたるものなるも建郡の時期は明かならず。卽ち續日本紀・天平勝寶七年五月「大隅國菱苅村浮浪九百三十餘人、言、欲建郡家、許之」とあり、郡名は恐らくは菱刈郡と稱せしものなるべし。延喜式には菱刈の郡名見え、和名抄は菱刈・大水・亡野（山野）・羽野の四郷を管す。其後この邊の國郡界に多少の移動あり、牛屎院と稱する大體亡野・羽野二郷の地は建久八年の薩摩國圖田帳には既に薩摩國に入る。然るに菱刈郡の西南に連なりて新答院と稱する地方あり、又新篇院にも作る。此新答院と牛屎院とは相合して伊佐郡を建てしも、其時期は詳ならず。明治二十年に至り牛屎院の故域を以て北伊佐郡を建て新答院の地を以て南伊佐郡を置くに及び菱刈郡は僅に菱刈・太良二村の地となる。明治二十九年南伊佐郡を廢して薩摩郡に入れ、北伊佐郡と菱刈郡とを合して伊佐郡を建て以て今日に至る。

【伊佐】 ↓宜野灣村（沖繩縣）

イサ　伊讃

【伊讃村】 茨城縣常陸國眞壁郡の西北部。東に下館町、西方に結城町を控へ其中央に位し、鬼怒川西部を貫流し地勢概れ平坦。水戸線の川島驛（明治二十二年設置）を置き、結城町・下館町へ縣道通ず。米大麥・小麥等を産す。村内に縣立下館高等女學校・製綿工場あり。維新の勤王家にて刀圭家なる越惣太郎（贈正五位）は同村大字の小川の出身。この地は和名抄、新治郡の伊讃郷の内。大字伊佐山は中世藤原秀郷の裔此處に居り伊佐氏を稱す。いま城址を遺す。のち其子孫の伊達行朝、此地に勤王を唱ふ。因にいふ、伊佐氏・伊達氏は同裔なり。〔定林寺〕曹洞宗。玉曳山と號す。創建年代未だ詳ならず。往古は稻野邊にありて弊谷山と號せしも、のち荒廢せしを、文明十三年下館城主水谷伊勢守勝氏之を再興し、良室榮欣和尚を開山となしたり。近世寺領二十石朱印を有し寺門盛んなりき。本尊釋迦如來を安ず。現堂は明治十三年回祿後の再建なり。

【伊讃】 常陸國眞壁郡の郷名（和名抄）。新治郡の伊讃郷と區別するためイササと訓ず。其地は今の茨城縣眞壁郡の筑波山の西北方に當り眞壁町の一部及び長讃村の一部紫尾村の邊に當る。眞壁町大字に伊佐々あるは郷名の遺名とす。新治郡にも伊讃郷あるも混ずべからず。夫木・二四「せきとむる人もなき世にあやしくもいささの川の行きもやられぬ　讀人不知」は此地の川にて、卽ち櫻川の一名なり。回國雜記に「伊佐佐橋、一名筑波川、又呼櫻川」とあり。寛喜元年に將軍賴經の眞壁時幹に下したる文書に、眞壁郡伊佐佐郷の地頭職とあり。

【伊讃】 常陸國新治郡にありし郷（和名抄）。今の茨城縣眞壁郡の西北部の下館町・中村・五所村・伊讃村の邊に當り下野國芳賀郡の地と接壤す。伊讃郷は和名抄には新治郡と眞壁郡とにあり、その地は近世郡境混淆して共に眞壁郡の中に入る。姓氏錄に見ゆる射狹郡は卽ち此地に居りしものにて豐城入彥の裔なりといふ。のち伊佐氏となる。もとの新治郡は中世私に西・中・東の三郡に分ち、西郡は南條・北條に分れ、南條をまた關郡といひ北條を伊佐郡と稱す。中郡は中郡庄と號し東郡は笠間郡となりて新治の郡號を失ふ。文祿檢地の時に關郡は西河內郡となり、伊佐郡は眞壁郡に入り、筑波山の東南の地に新治郡を新設す。のち此地に伊達行朝（朝村）の居りし時の歌あり。新拾遺・一九「常陸國に侍りける時よめる
　かりそめと思ひしほとに筑波嶺の裾わの田井に住みなれにけり　朝村」

イザ　率川（伊邪河・率去河）　奈良市にある川。源を春日社の南方に發し高畑・春日兩寮地の間を西流し鷺池・荒池を通り猿澤池の南より、率川社（俗稱子守社）の前を經て大安寺村に至りて佐保川に入る。一に狹井川俗に子守川ともいひ、また古くは能登川とも稱すといへど詳ならず。開化天皇の伊邪河宮、延喜式の率川坐大神御子神社三座及び率川阿波神社等の名稱は此川の名に因めるもの。また中世率川莊といひしは此川邊にありしものか。記・中（開化天皇）「若倭根子日子大毘毘命、坐春日之伊邪河宮、治天下也」開化紀・元年「冬十月丙申朔戊申、遷都于春日之地。是謂率川宮。率宮。此云伊社箇波」萬葉・七「葉根蘰いまする妹をうら若みいさ率河のおとのさやけさ」

イザアイ　十六合村　山形縣羽前國東田川郡の西北部。藤島町の東北、大和村の南に接す。京田川西南境を流れ、庄内平野の東部に位し、土地平低、東西南北各約四粁、全村殆ど耕地にて水田多く、米產多し。奥羽本線の餘目・藤島驛、陸羽西線の狩川の各驛へは約四粁。十六合の村名は、明治二十二年村制施行の際前田野目・主殿新田・西袋・南野新田・吉方・南興屋・千本杉・中野・返吉・堀興屋・桑田・大眞木・新田目・福島・京島・本小野方の十六村を合せたるに依る。「じふろく」を讀むを正しとすれど、十六夜をいざよひと讀む古人の雅致に倣ひ、斯く稱すといふ。

イサイ　以西

【以西村】 鳥取縣伯耆國東伯郡の西部。大字山川・大父は所謂大山國立公園の一部にして大山の東北部の一放射谷に位し南部に大山火山彙の一峯矢筈山（一三五九米）、西南部に船上山聳ゆ。勝田川北方に流れ、上流の地は原野なるも、中流には耕地拓け主産物に米・麥あり、畜産之に次ぐ。山陰本線の赤碕驛（赤碕町）へ約一二粁。古くは和名抄の八橋郡箆津郷に屬せるものか。船上山は標高約六一六米、山頂は平かなれど東・北・西の三面は斷崖をなし、僅に東坂・西坂に依り攀ぢ登る自然の要害をなし、北方は遠く隱岐島を煙波の間に望み、殆んど密林に覆はれたるうちに土壘を續せる場處を存す。これぞ元弘三年閏二月、後醍醐天皇潛に隱岐の行宮を逃れさせ給ふや、名和長年迎へ奉りて山上の寺坊智積寺を以て行在所とし城郭を構へ、隱岐判官佐々木淸高の來攻を擊ち郤け、主上凡そ八十餘日間御駐輦あらせられし處。土壘址のうちを里俗天皇屋敷と稱し、智積寺の舊址あり、寺は明治維新の際に廢せられ其鎭守たりし船上神社東北二粁の地點に存す。社前に「伯耆國八橋郡船上山碑」あり、東北端稍〻廣き草原を御休場と稱し、その高き部分に閑院宮載仁親王御染筆の行宮碑あり。昭和七年船上山行宮址は史蹟に指定さる。太平記・船上合戰の事「去程に同廿九日、隱岐判官、佐々木彈正左衞門尉、其勢二千餘騎にて、南北より押寄せたり。此船上と申すは、北は大山に續き峙ち、三方は地僻に、峯に懸かれる白雲腰を繞れり。俄に拵へたる城なれば、未掘の一所をも掘らず、塀の一重をも塗らず、唯所々に大木少々伐り倒して、還木にひき、坊舎の蔀を破つて、かい楯にかけるばかりなり。寄手三千餘騎、坂中まで攻上つて、城中をきつと見上げたれば、松柏生茂つて、いと深き木蔭に、勢の多少は知られども、家々の旗四五百旒、雲に飄り日に映じて見えたり、さてははや近國の勢ども悉く馳せ參りたりけり。此勢ばかりにては攻め難しとや思ひけん、寄手皆心に危みて進み得ず」とあり、長年一族約百五十人なりしも奇謀を以て敵を謀り退けてより、出雲・伯耆の武人皆な官軍に應じ、天皇此處にて西方に號令し給ひ、五月七日、六波羅陷落の報に接し、廿三日車駕此所を發し長年を守護とし還幸の途に就かせ給ふ。

【以西】 阿波國にありし郡名。名東郡の西部の私稱にして其初めは遠く鎌倉時代にあるものゝ如く、永仁四年鑄造の山城國愛宕郡花脊村の峰定寺の梵鐘の銘に以西郡名見ゆ。その地は凡そ今の德島縣名東郡國府町・佐那河內村・上八萬村・南井上村・北井上村等の地に當る。正保圖之を載せ寛文年中に至りて廢す。

イザウラ　率浦　羽後國秋田郡にありし郷（和名抄）。凡そ今の秋田縣南秋田郡の五城目町・面潟村・大川村・馬場目村等に當る。この地は八郎潟の東邊の地にて往昔の郡郷制定の限界は此處に盡く。なほ率浦は砂浦の義ならんか。

イサオ　有功村　和歌山縣紀伊國海草郡の北部。和歌山市の東北約四粁。紀ノ川の右岸、舊淡路街道に沿ひ和歌山市へバスの便あり。北は大阪府泉南郡淡ノ輪・孝子二村に界し、境上に和泉山脈の一峯札立山峙ち、その南側一帶は丘陵なるも南部は紀ノ川流域の肥沃なる平野にて水田多し。主產物は米、外に柑橘類・蔬菜等を産す。村名は伊達神社の祭神五十猛命を一に有功之神といふより起るといふ。古くは和名抄、名草郡苑部郷の內にして大字園部は郷名の遺稱。中世この地は園部氏の居邑にて其館址はいま一樂寺伽藍址と傳ふ。園部氏に就いては源平盛衰記に「壽永二年紀の國の住人園部兵衞重茂も源氏に志ありけるが、淡路の安摩六郎は能登殿に追返されて和泉の國吹飯浦に著きたるときゝて、一つに成りて上洛すべしと聞えければ、能登守教經紀伊路へ押渡り園部が館へ攻入て散々に追拂ひ、三十六人が首をきり福原へ進らする」と見ゆ。また大字六十谷には郷士十谷氏居りしも建武元年飯盛山に籠り、官軍の追討を受け敗滅すといふ。北部の山中に鳴瀧あり、高さ約四米幅約一・五米、下流三十歩許にして新鳴瀧あり附近に楓樹多し。〔伊達神社〕大字園部にあり。郷社。祭神、五十猛命・神八井耳命・市杵島姬命。もと吹上濱に祀りしを以て古く吹上社と稱す。承和十一年神位正五位下、貞觀十七年從三位に累進し、延喜の制名神大社に列す。例祭十月十三日。五十猛神は素戔嗚尊の御子にして素戔嗚尊の高天原より逐はれ給ひし時、御父神と共に新羅國に降り曾尸茂梨の地に住み、後に出雲に渡り給ふ。初め天降り給ふ時、樹の種を齎し、筑紫よりはじめて全國に播種せらる。これより有功之神とも申す（紀一書）。此神の名は古事記には見えざれど、記傳は大屋毘古神を此神に充つ。書紀・一一「初五十猛神天降之時、多將樹種而下、然不殖韓地、盡以持歸、遂始自筑紫、凡大八洲國之內莫不播殖而成青山焉、所以稱五十猛命爲有功之神」〔射矢止神社〕大字六十谷にあり。村社。祭神品陀別命・天香山命・息長帶姬命・一言主命・宇賀魂命。勸請年月不詳なるも、本國神名帳に名草郡地祇從五位下伊野土神とある古社にして社傳に射矢止の神は一言主神・天香語山命射矢八幡を祀るなりと。〔圓明寺〕大字園部にあり。臨濟宗妙心寺派。鳴瀧山と號す。役行者小角の開創に係り、その後由良興國寺開山法燈國師鳴瀧川の西に建立せしも、天正の兵火のため炎上し、現在の地に移る。役小角の舊跡たるに由り、毎年三月京都聖護院・三寶院より使僧を遣さる。〔大同寺〕大字六十谷にあり。天台宗。平城天皇の大同年中、傳教大師の創建に係り、本尊藥師如來は一尺八寸の座像にして大師の作と傳ふ。本堂の背後に俗に兩界八萬四千の大日如來と稱せられる泥土の摑佛を安置する摑佛堂あり。その大きさ五六分より一二寸にして蟲毫大

師、雲山にて如法修行の際、泥土を掘り固めしものと傳ふれども、自然に佛體を具ふ。初め四方に散在せるを集めて此堂に安置せるものといふ。

イサカ 井坂 ↓田中村 和歌山縣)

イサカタ 伊坂 ↓鯨村(埼玉縣)

イサカタ 伊佐加多山 歌枕。大和國吉野にありといふ山。何れの山なる指すかいま詳かならず。夫木・一二「さなしかのこえ」きるなりみよしののいさかた山につまやこもれる 登蓮法師」

イサキ 井崎 ↓十村(埼玉縣)

【井崎】 愛知縣幡豆郡にありし村。明治三十九年六郷村・豊田村と共に廢せられ、その區域と大寶村の大字深池・川口・蓑池を合し幡地村を建つ。

イザキ 伊崎

【伊崎村】 茨城縣常陸國稻敷郡の東部。東北は野田奈川(櫻川)を隔てゝ霞ヶ浦の南部にある浮島に對す。南に十餘島村、西に阿波村・大須賀村と接す。西部より中部に續く丘陵の外は全く利根川の舊河道及びその洪溢地に屬し、低平にして水田多く米の產出多く、麥類・叺等の產もあり。交通は河川・湖沼の舟運を以てす。この地は和名抄の信太郡素濃郷の地。大宇阿波崎は浮島の南に當り、西隣阿波村の東方四粁、丘陵地の外れになるより此名ありて阿波崎城址を存す。延元三年、北畠親房常陸國に漂著するや、まづ神宮寺城(阿波村にあり)に入り兵を擧げ、佐竹氏と戰ひ敗れて阿波崎城に入りしも再度敗れて小田城に移る。

【伊崎島】 霞賀縣琵琶湖中の一小島。蒲生郡島村に屬し、島村の主部をなす奥島とその北方湖上の神ノ島との中間に浮び一岩礁をなす。島の北端に不動尊を祀る。伊崎不動とよばれ、もと神ノ島にある奥津島神社の神宮寺たりし伊崎山阿彌陀寺の址なりといふ。

イサク 伊作 薩摩國の古郡名。延喜式に初めて見ゆ。和名抄は以佐久と訓じ利納一郷を管す。建暦及び慶郡の時期は詳かならず。その區域は大凡今の鹿兒島縣日置郡伊作町の邊に當る。

イザク 伊作町 鹿兒島縣薩摩國日置郡の南部、東は鹿兒島郡に接し、西は海に臨む。東部一帶は概ね山地を成し、伊作川・小野川等東部に發して西流し、その沿岸諸處に耕地拓け米・繭・麥を產す。伊作紙は藩政時代に武士の內職として抄紙を奬勵せしに始まり今も猶ほ產す。また日置瓦を產す。社線南薩鐵道西部を南北に走り、吹上濱驛(大正四年設置)・伊作驛(大正三年設置)・南吹上驛(大正五年設置)の三驛を置く。縣道之に沿ひ、一は中部より岐れて東北方鹿兒島市に通ず。縣立伊作高等女學校あり。延喜式及び和名抄に伊作郡の名見え、近世に至り廢せしも町名は其遺稱なり。大字中原に伊作城(一に龜丸城)址あり。島津忠宗の次子大隅守久長此處に築城し本郷の領主たり。子孫伊作氏を稱せり。島津忠良・義久・義弘の三國主は此城中に誕生せしといふ。天正以後廢す。大字湯之浦に田中城址あり。建久年中和田親純の居城なりしといふ。また大字中原字宮內に數十株の老樟繁茂し、倍に千本樟と稱せらる。幹枝盤屈して甚る奇觀を呈す。(大汝牟遲神社)大字中原にあり。鄕社。祭神、大己貴尊・應神天皇外數神。創立年代不詳。もと大汝八幡とも稱す。初め三輪神を勸請し、のち鶴岡八幡宮を迎祀せりと傳ふ。領主伊作氏の崇敬を受け、のち藤主島津氏歷代の尊崇篤し。例祭十一月二十五日。(伊作溫泉)東南に山を負ひ、北に湯ノ浦川の流あり、西に展けて名高き吹上濱に接す。泉質は食鹽含有硫黃泉。地は一に湯ノ浦ともいひ七湯に分れ、古くより知られし溫泉場にて、氣候の變遷なく夏季淸涼の氣溢れ、鹿兒島市民の行樂地として賑ふ。附近の崇邁は鬱樹に圍まれし仙境にして散策に適す。(吹上濱)川邊郡萬世町及び本郷の田布施村・伊作町・永吉村・吉利村・東市來村・日置村・市來町・串木野村に亙る長さ約四〇粁の海濱。繁茂の老松も砂に埋れ、僅に枯幹を露はし殆ど稚松の密林を觀るの感あり。この地方は一朝西北の烈風起れば、白砂は濃霧の如く空に吹き上げられ、遠隔の地にも及ぶ。ために近傍の民家は田畑の埋滅を屢れ含き防砂林を設く。

イサゴ 砂子 神奈川縣川崎市の町名。もと武藏國橘樹郡にありし砂子里の遺稱。太田道灌の平安紀行の川崎の次に「鶏屋るいさごの里を來て見れば蘆に通ふ沖津浦風」とあり。佐々木四郎左衞門高綱が此邊を領せし時に川崎宗三寺を菩提寺と定め砂子一村を寄附せしと傳へられ、また宗三寺の延寶中に鑄られし鐘銘に砂子とあり、寺の緣起によれば此邊は延寶中、本尊藥師出現の當時、すべて海濱にて、然るべき人家もなかりしため砂子をかき寄せ其上に安置す、因つて砂子村といふに至りしと。

イササ 伊笹岬 飯部埼とも呼ぶ。兵庫縣但馬國城崎郡の北西端。飯部村の地內にして、縣の最北點をなし、岬端海崖高く屹立す。岬上の山中には雜木繁茂し、海拔約二九〇米。この岬より東方の香住村及び西方の美方郡濱坂町に亙る一帶の地は海蝕著しく古來西但馬海岸の景勝の地として知られ、いま但馬御火浦として名勝天然紀念物に指定せらる。※御火浦

イササ 伊讃 ↓伊讃

イササノオバマ 五十狹狹之小汀 出雲國の古地名。大國主命が初めて少彦名命と會見されし地。今島根縣簸川郡大社町の海濱といはる。また五十田狹之小汀ともいひ大國主命が國讓りの時武甕槌神・經津主神と會見し使命を奉じた處といふ。古事記は伊那佐之少濱に作る。延喜式出雲國出雲郡の同佐神社(出雲風土記は伊那佐社に作る)の所在地といはる。イナサ、イナサ共にイササの轉呼なれば、同一の地名と見るべきものか。書紀・神代卷の一書に「初大己貴神之平ノ國也、行到出雲國五十狹狹之小汀、而且當饗食、是時海上忽有人聲、……頃時有一箇小男、……隨潮水以浮到、大己貴神卽取置掌中而弄之、……此卽少彦名命是也」同・二・天孫降臨章「二神於是降到出雲五十田狹之小汀、則拔十握劍、倒植於地、踞其鋒端、而問大己貴神云々」

イササワ 伊佐澤村 山形縣羽前國東置賜郡の西北端。北境に鷹戸屋山の西麓松葉澤山あり、東・西二境も山支延びて村內概ね丘陵地をなす。中央より南部にかけての平地には桑園拓け、繭を產す。特產物に凍豆腐・龍鬚あり。省線長井線の西大塚及び長井の二驛へ約四粁。(伊佐澤ノ久保櫻)指定天然紀念物。一名ガ玉櫻。大字伊佐澤の蜂屋敷にあり。幹圍約一〇米、高さ約一五米、白彼岸櫻にて一抱七八輪を著け、餘は淡紅色、花季の偉觀は人を眩目せしむ。この久保櫻に絡る悲戀傳話あり、和武天皇の朝、坂上田村麻呂征の途に此地を過ぎ土蔡久保家に宿す、家に嫁あり玉女と稱す、英雄美女寫氣通ず、則ち伏懼を約す、田村麻呂征成りて再び此處に寄り、嫁が昇戀のうちに遂げるを聞き、一株の櫻樹をその墓所に植ゑ、些か慰む。これ後の久保櫻なりと。

1947~12~1 N. Hikichi

イサザワ 五十澤村 福島縣岩代國信達郡の北部、梁川町の北部に續き、西に大枝村あり、阿武隈川の左岸に位し、北は宮城縣[illegible]に接し、東は[illegible]に接し、南は[illegible]に接し、西は[illegible]に接し、北に高く南に低く[illegible]地形を呈し、[illegible]に沿ひ小[illegible]あり、[illegible]開拓け桑園行はる。西方郡田町より伊具郡絹野村へ、また南西梁川町へ道路通じ交通不便ならず。梁川町および郡田町(縣道通ず。阿武隈川の一處に猿跳また九龍(同村管內)と名づく峰あり、往昔この地點堰止られしため信夫・伊達の二郡は湖海となりしといふ傳說あり。郡村志によれば信達二郡の地昔者湖瀛なりしが、天智帝の御宇、五十澤猿跳を堅固し、初めて湖洩れ陸となるると。或はいふ、日本武尊、東夷征伐の時、鼠賊の時、信夫の浦の毒龍を殺したまひ、湖を決り陸となしたまふ、のちまた猿跳の峽崩れ、奏塞して湖澤となりしを、孝德帝の御宇に堅固すと。

イサト 五郷村 三重縣紀伊國南牟婁郡の北部。北は奈良縣吉野郡に接す。熊野海岸山地の東北部に當り北山川の一支大又川の山谷。東熊野街道この河谷に沿ひ南方木ノ本町に通ず。山深く村木を產す。南方の木本町より バスの便あり。古くは和名抄の大和國吉野郡北山郷に屬せるもの。村名は桃崎・和田・寺谷・鳥屋・大井田の舊五箇村を合併せるに因む。

イサトマエ 伊里前灣 宮城縣本吉郡の中部海岸。三陸リアス式海岸の一部にして、志津川灣北部の一支灣と見るべく、泊崎(歌津埼)によりて外津と隔たり、館ヶ鼻の西方に彎入して南方に開口す。地は歌津村に屬し、伊里前の漁港をなすも、暗礁多きを缺點とす。

イサナミ 伊佐奈美乃瀧 山城國にありし瀧。今何れの瀧か詳かならず。歌枕。夫木・二六「山しろのいさなみのたきいさなへといさともいはすすくせなければ」

イサニワノオカ 伊社邇波岡 愛媛縣伊豫國溫泉郡道後湯之町の東南にある岡。聖德太子の伊豫溫泉に行幸啓ありし記念として湯岡碑を建設し給へるは此地にして、實に本邦最古の碑なり。然るに碑石は何時の頃よりかその所在を失ひて、今僅かに其碑文と稱する課譯まじりの文章を傳ふるに過ぎず。萬葉・三「皇神祖の…伊豫の高嶺の伊佐庭の岡に立ちて 歌思ひ 辭思はしし み湯の上の 樹群を見れば 臣の木も 生ひ繼ぎにけり」

イサノ 鯨野 土佐國幡多郡清水町・三崎村・名抄。今の高知縣幡多郡清水町・三崎村・上灘村等の地に當る。金剛福寺應保元年文書に延陀郷といひ、建長二年岡白道家記に以南莊に作れるもこの地を指せしものなるべし。

イサハヤ 諫早

【諫早町】 長崎縣肥前國北高來郡の中部。東は有明海の支灣諫早灣と西は大村灣を隔つる地狹部の中部に位し、北半は五家原岳の西南麓の山地を成し、本明川中部を南東流し、その沿岸に水田拓け米の產多し。製絲業は盛んにして、長崎縣間一の製絲場あり。長崎本線南部を東西に通じ諫早驛(明治三十一年設置)を置き、省線大村線及び社線島原鐵道こゝより分岐し、島原鐵道は本諫早驛(明治四十四年設置)を置く。もと郡役所の所在地にて、いま長崎刑務所・縣土木出張所・縣立農事試驗場・社線無線電信局等の官衙及び縣立實業補習學校教員養成所・縣立農學校・縣立諫早中學校・縣立諫早高等女學校・諫早女學院等の學校あり。本明川に架せる大石橋は俗に眼鏡橋といひ、天保十年の建設に係り、橋下兩側月形を成し、長さ凡そ四三米、幅五米餘、その結構の美を以て知られる。また舊佐賀藩家老諫早男爵家の庶園內の池は鶯蕉の渡來地として指定天然紀念物たり。池は面積約二十三アール、庶園の中央に「い」の字形を成す。鶯蕉は毎年十月初旬に渡來し、三月下旬に去る。その數は年により增減あるも三百羽ほどの多數に達することあり。此地古くは和名抄の高來郡新居郷の地か。而して延喜兵部省式に船越驛馬五疋と見ゆるは卽ち此地なり。中世は西郷氏の領地となり、のち旗氏此處に居して伊佐早氏を稱せしも、天正中西郷氏と共

に亡よ。のち鍋島氏の領となり家老鍋造寺鐵肇（水隈江氏）に與ふ、石高は一萬石なれど田野廣く、民口繁く物成は三萬石に上りしといふ。子孫諫早氏を稱して明治維新に及ぶ。大正十二年諫早町・諫早村・北諫早村の一町二村を廢して新たに諫早町を置く。〔高城神社〕縣社。祭神、龍造寺家晴。天保年間諫早氏邸内にその始祖を偶祀せるに創る。古くは家晴明神と稱せしが、明治十五年現地に遷し、高城神社と改稱す。例祭十月二日。〔諫早神社〕宇宇都にあり。郷社。祭神、大巳貴神・少彦名神・天照大神外二神。創立年代未詳なるも地方に於ける古社にて、諫早領主の守護神として尊信せられ、また全町の產土神として町民の崇敬篤し。例祭十一月四日。

【諫早灣】有明海の一支灣。長崎縣の東部、島原半島と多良岳との間に灣入し、長さ約一八粁、幅約八粁。灣岸は屈曲尠なく、且つ遠淺にして良港なきも、貝類の養殖盛んに行はれ、また西岸には水田多く發達す。

イサフシ　鯨伏村　長崎縣壹岐國壹岐郡の西北部。西は海に面し湯之本灣を擁す。灣岸に水田發達を見るも、その他は概ね丘陵地を成せり。縣道南方武生水町より來り、北方勝本町に通じ、バスの便あり。含盤鐵泉の湯野浦温泉あり。また式内社阿多彌神社あり。古來湯泉の神として崇敬せらる。本村は和名抄、壹岐郡鯨伏郷の地に當る。仙覺萬葉抄・二「壹岐國風土記云、鯨伏郷、在二郡西一、昔者鯨鯢追レ魚、鯨走來隱伏、故云二鯨伏一、鯨鯢訛鯨化爲レ石、相去一里、俗云レ鯨爲二伊佐一」とあり、大宇立石はこの故事に依りたるものならん。神宮皇后三韓征伐の際、舟師を率ゐて壹岐に御著船ありしが、神の告示に依り大宇本宮の地に三神を祀り給ふ。而して御凱陣の際、產意を催し本宮に御著船ありて御出產遊ばさるといふ。

イサマ　伊參　【伊參村】群馬縣上野國吾妻郡東北部の山村。中之條町の北に隣り東部に蟻川岳（八五三米）ありて其東谷を吾妻川の支流南流し、之により名久田村に接し、南部境上に霧山（七八九米）あり。北は利根郡新治村に境す。中之條より間道本村の中部を南北に走り、東北境の大道峠を經て利根郡の赤石川の流域に沿ふ諸温泉に通ず。全村殆ど農業を以て生計を營み養蠶は年三回にて產物中の首位を占め、農產に米・麥・大小豆等あり。また冬の副業に炭燒あり。村名は和名抄伊參郷の遺稱なり。大宇五反田の鳶山の要害に古城址あり、築城の年代不詳なるも中世宮澤宮內少輔景代の居城にて、次に齊藤日虎丸此處に居り、のち唐澤大炊之助久幸居城せりと傳へ、永祿年間相模北條氏の旗下なる西窪治部・齊藤帶刀齊攻めて城を燒けりといふ。

【伊參】上野國吾妻郡の郷。和名抄は伊佐萬と讀す。相模國の伊參郷と同訓なり。訓義今詳かならざるも疏氷郡の石馬郷は、勇馬の義となし、伊參も之と同語なりといひ、また山中の諸處に温泉ハリ湯の俠庭の義にしてユサバがイサマとなりしにはあらざるか。或はまた伊參の伊は發言、參は谷の義にして、この地山村僅地なるより起れるものか。その地今の群馬縣吾妻郡伊參村及び中之條町の邊にも及び同町の大宇に伊勢町あり、これは伊參路の轉訛ならんといふ。

【伊參】相模國高座郡の郷。和名抄は訓を岡くも上野國の伊參郷の例により以佐萬と讀むべく、今の神奈川縣高座郡座間村の地に當る。蓋しザマはイサマの轉訛なり。寶龜二年紀・十月「今東海道者、從二相模國夾參驛一、達二下總國一、其間四驛、往還便近」と見え、その後伊佐間に作り頭書、伊を省きて座間に作る。その後の古文書には座間郷或は座間宿とあり。新編風土記「伊參方廢、有二座間郷一」延喜式には夾參驛を載せず、濱田を以て之に代へたり、されば延喜式編纂當時は濱田驛と稱せしものか。近世はまた座間郷・座間領と稱し、座間領は座間以北の諸村をも汎稱せしが如し。續紀に四驛とは、店屋・小高・大井・豐島にして、當時東海道は夾參驛より武藏に入り、四驛を經て下總國に達せしものなり。

イサミ　伊佐見村　靜岡縣遠江國濱名郡の中部。濱名湖の東岸の支灣に沿ふ。土地概ね低平にして田畑よく拓け米・繭・茶を產し、白菜・ナンバン・柿等の產額多し。また漁業・牧畜も行はる。湖上交通の便ある外は隣接諸村へは里道を通ずるのみ。本村は和名抄の遠江國敷智郡和知郷の內なるべく、大宇伊佐地は往時伊佐地郷と稱せられしものゝ如く、康永二年東寺文書に見ゆ。村名は伊左地・佐濱・大人見・古人見の四部落の各一字を採りて命名せるもの。また朱印領五石を賜はりし臨濟宗善木寺あり。大宇佐濱は小支灣の北岸に位し斷崖をなせる地にて、第三紀末より第四紀初期に堆積せる礫砂土の互層より成り、數多の貝殼を埋藏す。大正十年六月此處より出土せる象の化石はナルバタ（印度河名）象の兩牙及び上下顎の臼齒四枚を完全に具備せしものにて、本邦發見の舊象化石中最も完全なるものなり。この發見により本村は考古學上有名となれり。

イザミ　去來見山　萬葉集に見ゆる伊勢附近にある山。その所在に就いては古來諸說あり。或は伊勢國多氣郡に伊佐和神社、志摩國答志郡にも伊佐波神社あり。山を此神社の附近に求めんとするが、飯高郡の西端、大和吉野郡との境にある高見山の別稱（伊勢名勝志）ならんとし、後の學者多く伊勢名勝志に從ふ。萬葉・一「わきもこを去來見の山を高みかもやまとの見たむ國遠みかも　石上大臣」夫木抄・一五「たづれつゝいさみの山のもみちはのしくれにあへる色のてこらき　贈大納言廟朝」

イサム　いさむ關　義經記に見ゆる關。金寶吉次が奥州の有樣を牛若丸に物語る條に出づ。即ち前九年役に安倍貞任が源氏の兵に攻められ叶はずしてあつかしあ（厚樫山）の城を出で此關を攻め越えて最上の郷に立籠るとある。今宮城縣陸前國刈田郡七ヶ宿村の大宇關は陸羽の境なる金山峠の東麓に位し往昔は念瀧關と稱せし關所のありし處。吉次の語れるいさむ關は恐らく此處を指せしものなるべし。

イサメ　いさめの里　美濃國揖斐郡八幡村大字片山の地の古名といふ。れざめの里ともいふ。古今六帖・一「東路のいさめの里は初秋の長き夜を鳴りあかすわが名そ」枕草子「里は、あふさかの里、なかめの里、いさめの里」

イサメ　居窟・居醒（ゐさめ）　↓居醒泉

【居窟清水】一に居窟清水。日本武尊東夷御征伐の歸途伊吹山の賊を征伐し給ひし時、その毒氣に當てられ酔ひしが如き心地せられ給ひしが、泉の水を飲み酔ひを醒されしといふ泉。いま近江國阪田郡醒井村の醒井がそれなりといふも書紀通釋は岐阜縣不破郡宮代村にある美濃一宮南宮神社の邊の清泉がそれなりといひ、何れとも定め難い。古事記・中（景行）「故還下坐之、到二玉倉部清泉一、以息坐之時、御心猶惑、故號二其清泉一謂二居窟清泉一也。」書紀・景行天皇四十年、日本武尊更還二於尾張一、卽娶二尾張氏之女宮簀媛一、而淹留旬月。於レ是聞二近江膽吹山有一荒神一、卽解二劍冠一、於宮簀媛家一、而徒行之、至二膽吹山一、山神化レ大蛇一、當レ道、爰日本武尊不レ知二主神化一、其使者豈見レ求乎、因跨レ蛇猶行、殺二主神一、其使者豈見レ求乎、因跨レ蛇猶行、時山神之興レ雲零レ氷、迷霧谷曖、無二復可レ行之路一、乃徒道不レ知二其所一、跋涉、然凌レ霧强行、方僅得レ出、發失意如レ醉、因居二山下之泉側一、乃飲二其水一、兩醒之、故號二其泉一曰二居醒泉一也」

イザヤ　十六夜山　またイサヨ山ともいふ。今岡山縣津山市の北部、縣立津山中學校構內にある丘。永久三年七月、後鳥羽上皇隱岐遷幸の時、風雨を此の丘に駐めたまひ月の清きを賞し給ひ夜の更くるを知らずと仰せられし處と傳ふ。

イザヤ　不知哉川・伊謝耶川　滋賀縣犬上郡にある芹川の古名。源氏物語にはいさら川とあり、また他の物語にいささ川とあるもまたこれに同じか。萬葉・一一「犬上のとこの山なるいさや川いさとなきこせわが名のらすな」

イザヤマ　伊佐山（いさやま）↓伊謝村（天城縣）

イザヤマ　諫山　【諫山】備後國沼隈郡の郷（和名抄）。その地不詳。一說に中世鞆田莊と稱せし今の廣島縣沼隈郡今津・松水の二町、本郷・東・西・高須・山波・金江・藤江・浦崎の諸村に當るとも或は鞆町・山南村の邊ならんともいふも何れも確證なし。名稱よりして往古物部氏の部民廬狹山部の裔の移住せる處か。

【諫山村】福岡縣豐前國京都郡の西北部。和名抄の京都郡諫山郷の內か。西は田川郡に、北は企救郡に境す。東西北の三境は一帶に山地にして林產あり、東南部は平地にて耕地拓け米・麥を出す。東方の行橋町へ約四粁バスの便あり。

【諫山】豐前國京都郡の郷（和名抄）。今の福岡縣京都郡諫山村・久保村・黑田村・稗田村の邊なるべし。また一に苅田町の南原より行橋町・小波瀬村・延永村・稗田村の邊までが此郷域ならんと解く者あり。外記日記・長保元年「京都郡人豐前掾不知山長松」宇佐宮大鏡「豐前掾不知山貞恒」等と見え、豐前志に今南原村（今苅田村の大字）の田の字に長松堀といふ處があるは不知山長松の住みし地にや、されば南原・集（今苅田村の大字）・與原の近隣より檢地村（今稗田村の大字）の方角迄を廣く諫山郷といひしなるべしと見え、また田地方角帳にも本田六町、伊佐山の前より南、宮市の境に跨る、伊佐山下津隈村に屬すとあり。

【諫山】豐前國下毛郡の郷（和名抄）。大凡いま大分縣下毛郡の山口村眞坂村・深耕村邊の地に當る。山口村の大字諫山は其遺稱なり。筑紫廣狹山部の居住せし處なり。續紀天平十二年の條に見える豐前下毛郡猛少領勇山伎美麻呂及び宇佐大鏡の豐前掾不知山貞恒等は或は本郷の人ならん。

イサラ　伊皿山　棒太鶴城丈山群の一峯。西北海岸、泊居支廳鶴城郡內の知來岬（鶴城岬）の東方に聳ゆ。標高一一七〇米。南側より伊皿川發源して西流し、伊皿部落に至りて日本海に入る。海岸に近く屹立するを以て間宮海峽航行船舶の好標識たり。古くはイチヤラ山と呼べり。

イサラゴ　伊皿子（五十子）　東京市芝區の町名。三田臺の西部にして高輪臺・二本榎に接す。よつてまた伊皿子臺ともいふ。此町は往時上高輪村の內にして芝浦に漂著せる明人伊皿子の住みしに因り、伊皿子町と呼ぶに至りしといふ。もとは五十子とも書く。御府內備考・九八「當町起立之義者、上高輪村に而、追々町並に相成年代子細不二相分一、伊皿子と申明人當町に住居致候に付芝伊皿子と相唱申候、尤右伊皿子永應二癸巳年九月八日病死致、同所日蓮宗長應寺地中常詮院地內に墓有之、…寛文二寅年町御奉行渡邊大隅守樣御勤役中町方御支配に被仰付芝伊皿子町と町銘相唱、御代官所之者上高輪町と書上仕候」とあり、また伊皿子は砂子の訛なりとの說もあり。里見八犬傳・八ノ六「扇谷定正は五十子の城に在と聞にき。四五里に見らゐ程なれば、虛實を覘ふ事を易く、寛ふに便り多からず」

イサリ　漁

【漁】北海道膽振國千歳郡石狩支廳管下にありし村。もと伊砂離にも作り、アイヌ語のイチャシ（鮭の產卵場の義）より轉訛せるもの。明治三十九年惠庭村と改稱す。

【漁岳】北海道、後志火山帶中の一峯。石狩國札幌郡と膽振國千歳郡とに跨り、支笏湖の北岸に噴起せる恵庭岳西北方に續く峯。標高一三一八米。南方山麓には小漁山續き、東北方山麓には空沼岳（一二五一米）聳ゆ。夏・冬とも登山に適す。東側より漁川、西側より豐平川發源す。山名は此山より源流する漁川に基づくもの、漁の原語たるアイヌ語イチャシは鮭の產卵場の意とす。

【漁山】中國山脈の一峯。島根縣那賀郡美川・粟東兩村境上に峙つ。標高七一四米。もとこの山名に因み漁山村ありしが、昭和十年大川村と合併美川村を建つ。

イサリヨー　伊佐領　山形縣西置賜郡北國本村の大字。省線米坂東線の一驛（昭和十年設置）を置く。

イサワ　石禾

【石禾】甲斐國山梨郡の郷。和名抄は伊佐波と訓す。高山寺本は以佐和に作る。蓋し伊志河波の急呼なり。今の山梨縣東八代郡石和町・富士見村・英村等の地なるべし。元慶八年紀「山梨郡石禾郷生嘉木」ことあり刺本に石永に作るは誤なり。神亀抄に甲斐國石禾御廚と見え、後世に至り、石和または伊澤・石澤・生澤等に作る。平治物語に井澤四郎信景とあるは石禾の人にして郷名を負ひしもの。また清和源氏、武田氏の族武田信光は伊澤五郎と稱し、此地を領し子孫伊澤氏を稱す。里見八犬傳・七ノ五「抑甲斐州石禾の郷は、八代郡に在り、この地方いにしへは山梨郡に屬たる也、減はいふ石禾郷は武田大膳大夫信光以來、館舎してここに住めり、信光より十世の君、刑部大輔信綱の時、鄙陽が崎へ遷りしとぞ」

【石禾】但馬國美父郡の郷。和名抄は伊佐波と訓す。今の兵庫縣美父郡の大藏村邊に當る。太田文「石禾上郷七十町、地頭土田六郎兵衛尉則直」とあり。しかして土田は今大藏村の大字に其名稱遺る。

イサワ　石和

【石和町】山梨縣甲斐國東八代郡の北部。甲府市の東方に位し、笛吹川と其支流に挾まれ、北は其支流により西山梨郡に境す。甲府盆地の東部にて土地平坦、南部に水田、北部に桑田拓け、米・繭・桑の產多し。甲州街道北部を東西に貫き、西方甲府市に至り、縣道は之より分岐し東南に走り沼津街道に通ず。江戸時代甲州街道の宿驛にて、いま省線中央本線の石和驛（明治三十六年設置）は笛吹川の支流を隔てし對岸の岡部村に置く。もと郡役所の所在地、石和警察署・石和蠶業學校その他の官衙學校あり郡の主邑なり。古くは和名抄の山梨郡石禾郷に屬し町名はその遺稱。中世は小石和舘（和名抄八代郡八代郷・長江郷・白井郷の地をいふ）に對し、この附近は大石和舘（和名抄山梨郡石禾郷・井上郷・能呂郷の地をいふ）と稱せし地にして、武田信光以後、代々その居館伊澤館（石和とも書く）を置きし處なり。應永二十四年信滿が天目山に敗死後伊澤館發へ、信昌の子信綱が應仁・文明の際に當り石和館にあり、その子信虎に至り永正年中、北山舘（北巨摩郡）鵜崎に築城、石和館遂に廢せらる。近世幕府は此地に陣屋を置き代官をして公料八萬石を治めしむ。大宇市部は清和源氏、武田氏の族武田信久の居住せし處、信久は市部七郎と號す。「惠法寺」大宇玉田にあり。日蓮宗。眞光山と號す。永祿十一年惠月院日眞尼の建立。京都の佛師林如水の刺になる尼除厄師を安置す。靈驗顯著にして參詣者多し。「遠妙寺」日蓮宗。山號は鵜飼山、世に鵜飼寺といふ。往昔平大納言時忠卿この地に配流せられたる時夜々石和川に鵜を用ひて魚を捕ふ。殺生禁斷の川なれば法師ども大納言を捕へて河瀬に沈む。その亡靈ここを去らずなほ鵜をつかへりといふ。よつて日蓮上人鵜飼者の亡靈濟度のため一宇を建て鵜飼山遠妙寺と稱すと傳ふ。謠曲鵜飼はこの說話を脚色せるものなり。初め石和川の堤上にありしが明德元年現地に移して伽藍を造營す。慶安元年寺領十石を賜はる。のち二回炎上にかゝり明治十二年再建。創建以來六百餘年、法統連綿としてここに五十代か重ね、現に總本山身延山久遠寺の末寺なり。「觀音寺」觀音寺前にあり。臨濟宗妙心寺派。法城山と號す。草創年代不詳なれど、もと天台宗なる系ぜり。應安年間武田信成堂宇を修し、鐵倉より佛滿禪師を請じて開山となし現宗に改む。本尊正觀音を安置し、甲斐國札所第十五番なり。舊朱印十二石八斗を附せられしが、維新後上地せり。「佛陀寺」大宇鵜飼にあり。臨濟宗妙心寺派。訓御山と號す。文永六年法灯圓明國師の創建にて、本尊千手觀音像は行基菩薩の作なりといふ。天文年間歡堂宗怡禪師再興して一世住持となる。寺寶に雪舟筆蘆葉達磨像・狩野榮川筆釋迦像・探幽筆龍虎之圖等を藏す。「法泉寺」浮土宗。石和山と號す。指月院と稱し、永享二年領主石和五郎信光の開基にして、初め天台宗なりしが、慶長十年曉雲寂春上人再興して現宗に改む。

【石和川】山梨縣甲斐國東八代郡にある川。上流を金川といひ、黑駒村の南部、御坂峠の北側に發して西北流し、一ノ宮村・英村を經て石和町に於て笛吹川に入る。日蓮上人が鵜飼の靈を弔ふため題目を小石に一字宛書いて投込みし處、因つて鵜飼川ともいふ。御樽・四「法華經へ鮎の子をひる石和川」

イサワ　伊澤　志摩國答志郡の郷（和名抄）。今の三重縣志摩郡磯部村大字下之郷より以東的矢灣に至る邊に當る。的矢・灣の一支派く磯部村に彎入しこれを古くは伊雑潟と呼ぶ。伊雑宮・式內粟鳥坐神乎多乃御子神社は本郷にありしもの。

※磯部村

イサワ　膽澤

【膽澤郡】岩手縣十三郡の一。陸中國に屬し、縣の西南部に位す。東は江刺・東磐井二郡に、南は西磐井郡に、西は秋田縣雄勝郡に、北は和賀郡に界す。本郡は奥羽山脈の東側、北上川の右岸に沿ふ。西部一帶は三界山・大森山・東山・桑原岳等の何れも千米以上の山岳逐立し、その山中に發源せる衣川・膽澤川を始め多數の小流何れも東流し北上川に入る。東部北上川沿岸は土地低平、地味肥沃にして耕地よく拓け米・麥・大豆・粟・馬鈴薯・繭等を產す。國道舊陸奥街道北上川に沿ひて南北に走り、東北本線ほゞ之に沿ふ。膽澤は往時夷虜の盤踞せし地にして平安時代の初期、延暦・大同の頃までは奥郡または奥縣と稱せられ、膽澤郡以北津輕の地までの汎稱にも用ひられし如し。寶龜七年紀・十一月の條に「庚辰發陸奥軍三千人伐膽澤賊」とあり、延暦二十年紀には坂上田村麻呂を遣はして此地を平げしめ、明年膽澤城を築き蝦夷地を鎭壓し、これを守る由見ゆ。また延暦二十三年紀に「陸奥國言、斯波城與膽澤郡相去一百六十二里、山谷險阻、往還多艱」とありて、膽澤郡名初めて見え、當時は交通不便の地なりしことを知るべし。延暦年中に北上川の東を以て江刺郡を置きしも、膽澤・江刺二郡は我國の北界にてそれより以北を奥膽澤とよべり。のち安倍氏世々陸奥の俘囚長たりしが、貞時の時代に至り勢益ゝ强大となり遂に膽澤・江刺・和賀・稗貫・志波・岩手六郡を服し衣川の嶮に據りて關を設けて貢賦を輸せず、朝役に服せず兩も國守之を制する能はず遂に叛く。源頼義父子これを討ち滅ぼす。其古據の遺跡今なほ衣川附近に存す。院政時代の初期、藤原清衡後三年の役に功あり、陸奥・出羽の押領使に任ぜられ、江刺郡の豐田の館に居住し膽澤城之により廢せらる。文治以降膽澤郡は葛西氏・柏山氏の所領となり天正に至る。近世に至り膽澤・江刺以南は伊達家の所領たり。本郡は續日本紀以下延喜式・和名抄・拾芥抄は膽澤に作り、和名抄は伊佐波と訓じ、白河・下野・常口・上總・白鳥（郡家）の五郷を管し餘戸一を置く。東鑑には伊澤に作り正保國また之に據り明應年中私かに上伊澤・下伊澤に分ち、寛文年中また舊に復し膽澤と稱し今日に至る。

【膽澤】陸奥國膽澤郡の郷名（和名抄）。地はいま岩手縣陸中國膽澤郡の金崎町・佐倉河村・永岡村等に當る。此地は古への膽澤城下にて郡家なりともあり榮えしものならん。延喜式に「陸奥國膽澤郡馬五匹」とあるは此地なり。

【膽澤川】岩手縣陸中國膽澤郡を東流する川。北上川の一支流。郡の西部若柳村の西境、奥羽山脈に屬する大森山（一一五〇米）・柴澤山（一二四一米）・鶴子ヶ鼻岳（一二九四米）の水を上源とし、東山（一一一七米）等より出づる小出川、大瀧山より發する新川を合し東流し、矢盡山（五七七米）の麓より東微北の方位に進み、南都田村・佐倉河村の北境をなし、永岡村の東境にて黑澤川を容れ、金崎町の南部にて北上川に合流す。流程約四〇粁。若柳村の東部にてこれを東南方の諸村に疏通する灌漑用水三あり、その一を壽庵堰、その二を堀上堰下堰、その三を茂井羅堰といふ。茂井羅堰は東隣水澤町方面へ流さ、堀上堰下堰は水澤町の南隣眞城村方面に流ぐ。壽庵堰は東南方前澤町方面に流ぐ。いづれも水利大なり。就中壽庵堰により最大の恩惠に浴するは若柳村東南隣の小山村なりとす。壽庵堰は、伊達氏の重臣後藤（五島）壽庵の工築するところのもの。壽庵は天主教徒にして天に祈請してこの灌漑工事を完成せりといはる。奥羽史料云、後藤莊兵衛、世人稱して若鉢といふ、若鉢は基督教徒の尊號なるを以て也、また五島壽庵に作る、戰功あり、貞山公、上膽澤郡大迫磯原に於て采地若干を賜ふ、たま〳〵基督宣教師國郡を巡行し、後藤の采地に至り、講談數日に及ぶ、後藤大に其教法を喜び遂に洗禮を受く。時に後藤膽澤川を分派し灌漑に便す、其工事を遂ずに方り、在天の主神に祈請し、費もなくして竣工す、土人乃悅て以て天主の力なりとし、崇信愈深く、稱して壽庵堰と名づく。のち禁教の令法嚴酷を極むるに及び、壽庵用走失踪、其所終を知らず。また盛岡縣史談云、後藤壽庵、舊葛西氏の臣なり、のち伊達家に仕へ、伊澤郡鹽釜村に居り、食祿千五百石、其膽澤川の水を引きて溝堰を造るや、一種の運轉器を以て大石を送致し、兩岸十餘町を築成す、水路梗塞の患なし、郡民永くその德に賴ると。

イサワ　伊澤村　徳島縣阿波國阿波郡の西部。南は吉野川によりて麻植郡に、北西部は美馬郡に境す。南部吉野川沿岸は土地低平なるも、北半の西部及び東部は讃岐山脈の山脚延び中間南北に狹長の谷谷を形成し、小流南下して吉野川に入る。養蠶を主として、米・麥の產あり。鴛淵街道南部吉野川に沿ひて東西に走る。西北境上に妙體山あり、標高約八百米。山頂に女體權現の祠あり。頂上よりは、北方遙かに讃岐の五劍山・屋島を始め、瀨戸內海の靜波を望むべく、景勝雄大なり。本村を始め西隣林村その他吉野川の北岸一帶の山地は土桂の成生せるを以て名高い。土桂とは洪積層中の軟質土が雨水の浸蝕を受けて流れ去り、土岩の石塊または礫層の下部に屬する部分のみ殘せるものにて、柱狀をなすもの屏風狀をなすものなど諸種の奇怪なる形狀を

昌す。此地域は和名抄の阿波郡拜師郷の内か。天正年中伊澤越前守頼俊、此地に伊澤城を築きて據る。同三年頼俊は一宮長門守と共に三好長治に叛きて之を害し細川眞之を擁立せんとせしも、同五年板西城に在りし時、藤原國方及び其族倶後守三好然後守等のために誘殺せらる。大宇伊澤に八幡神社鎮座す。郷社。神功皇后・應神天皇・玉依姫命を祀る。

イサワ　射和村　三重縣伊勢國飯南郡の東部。松阪市の南に位し南は櫛田川を以て多氣郡に對し地形北部は一帯に丘陵、南部櫛田川に沿ひて平地東西に延り水田拓け、米・麻の農産あり、また機業行はる。特産物は柑橘類・輕粉。輕粉は下剤にて奈良平安時代既に製造せられ、室町時代の頃は貿易品なりしといふ、いま廿來と稱するもの。社線松阪電氣鐵道の船路（大正元年設置）・下船路・中万（以上大正五年）・射和（大正元年）・阿波曽（昭和三年）・庄（大正元年）・御巫生園（大正五年）の七驛を置く。式内伊佐和神社鎮座。此地古くは和名抄、飯野郡乳餘郷の内にて伊澤とも書く。明治二十二年村制施行。名稱の起原は詳ならざるも櫛田川の沿岸なるにより磯崎の轉記り、のち射和と轉ぜるものか。神山城址あり、吉野時代勤王の士潮田粉景・北畠親房の教養を受け王事に盡せし處。相州兵亂記に依れば北條早雲（伊勢新九郎長氏）は此地の人なりといふ。また竹川政詳（慶正五位）は此地に生れ天保七年工を興して荒田三十七町を復興し、嘉永中、射和文庫を設けて人智の開發に資し、また幕府の諮問に應じ、江戸・大阪・四日市の舟運に就いて獻策せり。いま射和文庫あり。大宇阿波曽は愛洲氏の居りし所と傳ふ。大宇御巫生園に式内紀伊神社鎮座。延喜儀式帳に「大神機殿、遷二於岸村一、此處立レ社、號二岸社一」と見ゆる古社なり。〔伊龍寺〕大宇射和にあり。浮土宗。萬寶山と號す。天平年間行基菩薩の開創。始め伊福寺と號し、菩薩自ら阿彌陀如來・石地藏を刻して安置す。寺寶に善光寺如來・蟠蛇釋迦如來・熊野權現等を藏す。〔延命寺〕大宇射和にあり。浮土宗。戴龍山と號す。始め地藏と稱し、天平年中行基菩薩の開創にして、文明六年光譽上人、これを浮土宗に改む。國司北畠氏の信仰篤かりしも同氏亡ぶに及び衰頽せるも、のち正保年間再建すと云ふ。〔西弘寺〕大宇阿波曽にあり。眞宗大谷派。龍華山と號す。文明年間願順和尚の開基。本尊には宗祖大師像僧の眞影三ヲ狹間高座の畫像を安す。〔眞生寺〕大宇上船路にあり。天台宗眞盛派。草創年代不詳なるも、開山は圓戒和尚、もと大倉山上にあり、地藏菩薩を本尊とし大倉山地藏院眞生寺と號す。天正中織田信長の兵火に罹り、堂宇・寺寶烏有に歸せしも、永正元年中興開山守悦和尚、現在の地に移して再建す。〔眞福寺〕大宇下船路にあり。天台宗眞盛派。草創沿革等不詳。本尊木造阿彌陀如來坐像一軀は鎌倉初期の作にして國寶なり。〔大日堂〕大宇射和にあり。宗派草創沿革等不詳。本造地藏菩薩坐像一軀は室町初期の典型にして國寶なり。〔本宗寺〕大宇射和にあり。眞言宗大谷派。當派五山の一。岡崎市美合町の本宗寺と同系にして平地御坊と稱す。文明年中蓮如上人の三河國土呂の郷に本宗寺を創ぜしを以て濫觴とす。本寺は寛永年中大谷派本山第十三世宜如、射和の地に本宗寺の廢を興して眞樂寺と號す。寶暦四年稱名寺眞詮本寺に轉住し、同六年三月寺號を本宗寺と改む。縣下當宗屬指の名刹たり。〔惠生寺〕大宇射和にあり。天台宗眞盛派。當派三摩別格寺の一。聖德太子の開基に係り眞盛を開山とす。本尊は後土御門天皇の御內佛たりしを眞盛に賜りし意像なりと云ふ。

イサン　伊山面　朝鮮慶尙北道榮州郡の東部。西北は榮州面に、東北より東南は奉化郡に隣接す。東境は瓊峯山（三八九米）あるも、面內は概ね低き丘陵地をなし、東北部を南北に貫流する乃城川の上流及び西境を流るゝ西川の邊には平地ありて耕地所々に拓け、米・麥・大豆・棉・麻等の農産物あり、養蠶・牧畜もまた行はる。南西境文珠面界に沿ひて二等道路南北に走り、榮州より南方の安東郡安東邑に通ず。

イジ　伊治城　延暦　東夷經略の爲め陸奥國に置きし鎮城の一。續紀稱德天皇の神護景雲元年冬十月、僅に三旬の短日月に工事を竣へ朝廷より褒賞され城柵。次いで翌十一月には陸奥國に栗原郡を置く、これもと伊治城なりとあれど、そは伊治城を廢せし意にはあらずして伊治城の管下に栗原郡を設置すの意なるべし。されば栗原郡設置後も伊治城の名義屢〻史上に表れ、延暦十五年には關東及越後田刑等の民九千人を發し伊治城內に置き屯田兵の如くにして居らしむ。これ史にある伊治村とす。其の故地については古來諸說あれど何論これを栗原郡の中に求むべく、其地を北上川の一支一迫川の左岸の高地卽ち今の宮城縣栗原郡富野村城生野とするを妥當とす。此地は陸羽街道に沿ふ要衝にて一迫川の北の臨崖の上に位し其北には二迫川を控へ頗る形勝の地たり。後三年役の時、源頼義の清原武則と會見せし營岡も亦此地ならん。城址の東方の平地は往時イヂ沼と稱せし沼なりしも今水田と化し、更に其の東南方に伊豆沼あり、何れも伊治の名稱に關係あるものなるべし。伊治は或はコレハルとも訓じ、郡名クリハラは之に因みて建てられしもの、故に伊治城はコレハルノキとも稱せしものなるべし。

イシ　伊師→櫛形村（茨城縣）

イシ　石・五十師

【石・五十師】伊勢國の古地名。持統天皇の山邊行宮附近の地名にして、いま行宮址は三重縣河曲郡河曲村大字山邊に當り、石は山邊に隣る鈴鹿郡石薬師村の名稱にその名を留む。萬葉集に持統天皇の山邊行宮に寄きし給ひし折の、行宮のさまを詠ぜる歌を載す。萬葉・一三、「やすみしし　わご大皇　高照らす　日の皇子の聞し食す　御舟つ國　神風の　伊勢の國は　國見ればしも　山見れば　高く貴し　河見れば　さやけく清し　水門なす海も廣し　見渡しの　島も名高し　此をしも　目細しみかも　掛けまくも　あやに恐き　山邊の　石の原に　うちさす大宮仕へ　朝日なす　まぐはしも　暮日なす　うちくはしも　春山の　しなひ榮えて　秋山の　色なつかしき　百磯城の大宮人は　天地　日月と共に　萬代にもか」反歌「山邊の石の御井はおのづから成れる師を裂れる山かも」

【石川】↓石川村（大阪府）

【石川】石見國にありし川。柿本人麿於焉の地と傳ふ鴨山の附近にありし川。鴨山に就いては諸說ありて一定せざるも、縣社柿本神社のある島根縣美濃郡高津町の高津山を鴨山とせば石川は柿本神社の邊を流れる高津川を指すものならん。柿本人麿が任地石見國にありて殁せる時、妻依羅娘子の作れる歌が、萬葉・二に、「今日今日と吾が待つ君は石川の貝に交りて在りといはずやも」同じく「直の道は遠ひかつまして石川に雲立ち渡れ見つつ偲はむ」と見ゆ。

イシア——イシイ

【石岑】肥前國彼杵郡にありしといふ山。郡の北にあるといふも詳かならず。肥前國風土記・彼杵郡「昔者國內日代宮御宇天皇（景行天皇）詔二誠球磨賊一、親旋之時、天皇在二豐前國宇佐海濱行宮一、……於レ茲有レ人名曰二速來津姫一、此婦女申云、妾弟名曰二健津三間一、住二健村之里一、此人有二美玉一、名曰二石上神之木蓮子玉一、愛而固藏不レ肯レ示、他。神代直等、覓レ之超レ山逃走落二石岑一（郡以北之山）」

【石峠】宮崎縣東西兩臼杵郡界にある峠。最高點九四七米。東臼杵郡北郷村より西臼杵郡岩井川村に出づる山道南北にこゝを通ず。また東方二子山より西方九左衛門峠に至る山路これと交叉す。

【石山】臺灣、阿里山東南部の一峯。臺中・臺南兩州に跨り、西の兒玉山（二五六八米）と東の鹿林山（二八六六米）との中間に位し、標高二六五三米。新高登山の阿里山口の山路に當り、附近まで阿里山線道の支線通ず。山腹一帶は針葉・闊葉の混淆樹林を以て蔽はる。

イシアナ　石穴山　出雲國飯石郡の山。出雲風土記・飯石郡「郡家南五十八里長五十丈」とあり。今詳ならず。この記事によれば、或は飯石郡の南境方面にあるべきか。※琴引山・鯖咋山

イシイ　伊思井　萬葉集に見ゆる地名。萬葉集・一四の信濃國の歌に「人みなの言は絶ゆとも埴科の石井の手兒か言な絶えそれ」とあり。郡郷考にこの石井を磯郡の井かといふ。磯郡は和名抄の信濃國埴科郡の郷名にて、今の長野縣埴科郡戸倉村の邊にあたる。

イシイ　石井

【石井村】福島縣磐城國東白川郡の中部。棚倉町の南方にて、豐里村の北隣、久慈川上流河谷の東岸に沿ふ丘陵地を占め、東は笹原村、西は高城村に接す。米・藷・麥等の產あり。水郡線の磐城石井驛（昭和六年設置）を置く、白河より水戸に至る茨城街道河東を南北に通ず。此地は古への白河郡高野郷の內。大字の中石井は天正中、狐館の城主は小枝左衞門尉（或は江田八右衞門）の居りし處なりと。同字上石井は古くより鐘・鍋・釜などの鑄造を以て聞えし處。東白川・久慈・那須の三郡界に聳ゆる八溝山（一〇二二米）上の觀音堂の鐘に、天文七年、大工石井靜阿と銘あるを初めとし、所々に石井の鑄冶匠の作品遺れり（白河古事考）。

【石井村】福島縣岩代國安達郡の中部。小濱町の西、西北境は阿武隈川を隔てて杉田村鹿下村に對す、概ね丘陵の地。二本松町及び小濱町へ縣道通じバスの便あり。米・麥を主產物とし養蠶業も廣く行はれ、冬季の副業に蓆（約八萬枚）・木炭あり。村名は平石・鈴石・西荒井の部落の名より各一字を採りて命名せるもの。同村の西北、大字平石に島山義經の墓あり、平石の小字栗之須は義經と輝宗（伊達政宗の父）の生誕せし處なり。義經は奥州深隱島山高國の裔にて代々の居城なる二本松城（二本松町にあり）に居りて近隣を治めゐたるも、伊達政宗の勢威强大に壓せられて、天正十三年その旗下に屬す。偶〻伊達氏の義經を時殺せんとの計を知り激怒の折、期する處ありて小濱城（小濱町にあり）に輝宗と會見せし時、之を擒にしての歸路、此地に於いて伊達勢のために迫られ終に輝宗を刺し己も自害し、島山氏ここに滅ぶ。大字鈴石に鈴石と呼ぶ瓦石あり、地名も之に因ると。相生集によれば、鈴石村は盛現明神の社より乾三町許り、畑の土なる岡の叢中に石あり、大さ五間許り、高さ七尺餘、形狀圓にして少しく鈴に類す、中央より左の方によりて二つに割る、村人是を鈴石と稱すと。〔觀音寺〕大字鈴石（寺前）にあり。天台宗。久安山と號す。久安年中の開基とも、また永德年中鈴石城主鈴木六郎久安の開創とも云ふ。寛永年間圓海上人再興す。本尊釋迦如來。境內に觀音堂二あり。一は十一面觀音。他は如意輪觀世音、共に惠心僧都の作といふ。また昆沙門堂ありて緣日に參詣人雜踏す。

【石井】↓平石村（栃木縣）

【石井】近江國滋賀郡の邊にありし井。歌枕。古今集に「志賀の山越えにて、石井のもとにて物云ひにける人の別れけるを折によめる　結ぶ手の雫に濁る山の井の飽かでも人に別れぬるかな　貫之」月清集「手にむすふいしゐの水のありてのみ

春にわかるるしかの山こえ」

【石井村】 兵庫縣播磨國佐用郡の北端。姫路市を距る西北約四五粁、平福町の北に位し、東は宍粟郡千種村・三河村に、西は岡山縣英田郡讃甘村、北は同東粟倉村に隣りす。東北界には目名倉山（一〇四七米）あり、殆んど山地をなすも、西南部には狹小の低平地あり農業行はる。主産物に米炭・繭、特産物に蒟蒻芋・楮皮・楮・三椏等あり。交通は南隣平福町、西方岡山縣英田郡大原町方面に出づる里道あるも交通なほ不便なり。

【石井】 摂津國武庫郡の郷。和名抄は以之爲と訓す。後字多院御領目錄に摂津國石井莊と見ゆ。其地今詳ならず。或は兵庫縣武庫郡良元村の地かと云ふも明かならず。

【石井】 岡山縣御津郡にありし村。大正十年岡山市に編入し、上石井町・下石井町となる。

【石井町】 徳島縣阿波國名西郡の東北部。徳島市の西方約一〇粁。東は名東郡國府町、南井上村に界す。南部は一帯の丘陵を成すも、北方は開けて概ね平坦とす。古くは蓮作を主業とせしも、人造染料に壓倒されしにより、目錄幾役記念として麻名變水組合を組織し、新に用水路を興し、瀧渓持水の便をよくし、大いに水田を拓き、且つ副業的に養蚕をも勵み、また商工業も郡の中枢地點たる天然的地理を強するため近年著しく發展す。舊郡役所の所在地たり。名西高等女學校・町立圖書館等あり。縣道東方徳島市より來り西方に走り、徳島本線また之に沿ひて、石井（明治三十二年設置）・白鳥町（昭和九年設置）の二驛を置く。明治四十年町制を布く。此地或は和名抄の名西郡埴土郷の地か。大字白鳥字鳥坂は阿波・淡路・土佐三國の守護職佐々木經高の居りし地、大字尼寺には國分尼寺址あり。即ち聖武天皇の御宇に建立せし法華滅罪寺の一にして、藤原純友の亂の時兵燹に罹り今は廢寺となりて一小庵を存するに過ぎず。今なほ土中より瓦片を出土す。また大字内谷の氣延山には圓形石塚あり、石實・甕棺の破片發見せらるる。遺物なく未だ時代を推定するに至らず。〔曾我氏神社〕大字城ノ内にあり。村社。祭火火出見尊・木花咲耶姫命を祀る。古くは曾我氏大明神と稱す。創建年代は詳ならざるも、曾我氏の家臣武智磨諸國を巡りて本村に來りし時、祠を建てて曾我氏の氏神たる彦火火出見尊・木花咲耶姫命を祀り、曾我兄弟の靈を配祀すといひ、また一に佐夜の中山寺の住僧その尊信せる曾我兄弟の像を背負ひて納め入れて諸國を廻り、偶ま此地に來りて勤請すとも稱せらる。當社は古來部の神として衆庶の尊信厚く、殊に祭日は群集雑沓し、夏祭の神輿と冬祭の飯盛の式とは頗る珍奇なり。〔奈學寺〕大字城ノ内にあり。真言宗善通寺派。東明山大谷院と號す。寺傳に據れば、初め空海成業の頃、當地にありて書道術法を學ぶ。のち弘仁年間（四十二歳の時）山號に結合を營み、自刻の藥師・彌陀・觀音・毘沙門天・持國天・歓喜天を安置、古條に因みて奈學寺と號し、且つ後山を東明と稱して奥ノ院となし、以て眞言根本の道場とす。これ當寺の濫觴なりといふ。天正年間、長曾我部氏侵入の際兵燹に罹り奥ノ院を除くの外悉く焼亡す。本尊木造藥師如來坐像一軀は鎌倉初期の作といはれ、現に國寶たり。

【石井村】 愛媛縣伊豫國温泉郡の西部。北は松山市に隣り、南は浮穴村に西南は重信川を隔てて伊豫郡北伊豫村に界す。和名抄、久米郡天山郷の地。全村土地低平にして水田拓け、米を多産し、麥・雑穀を出す。社線伊豫鐵道電氣の石井驛（明治二十九年設置）を置き、土佐街道も鐵道と並行し交通便利なり。大字南土居は元寇の勇士河野六郎通有の故墟にして、通有の嫡子通忠より土居氏を稱す。土居は一に河野氏の土豪あるに依りて稱すといひ、一に蝦夷語のトイ（トは沼、イは處）の意にして、沼のある處の義なりともいふ。また大字星岡に一丘陵あり「星岡」といふ。高さ約三〇米、周圍約二粁。天山と共に松山市の南方に屏立す。此地は元弘三年河野の一族土居彦九郎通増、得能又太郎通綱相謀りて勤王の兵を挙げ、長門探題北條時直の兵を破りし古戦場として名高く、通増、通綱は正四位を追贈の子通重は正五位を贈らる。太平記・河野謀叛の事「六波羅には、一方の打手にはと遣まれける宇都宮は千鳥破城へ向ひつつ。西國の勢は伊東に支へられて上り得ず、今は四國の勢を摩耶の城へは向くべしと、詐定せられける處に、後二月四日、伊豫の國より早馬を立てゝ、土居二郎、得能彌三郎、宮方になりて旗をあげ、當國の勢を相附けて、土佐國へ打越ゆるところに、去月十二日長門の探題上野介時直、兵船三百餘艘にて當國へ推渡り、星岡にして合戦数す處に、長門周防の勢一戦に打負けて、手負死人其数を知らず。剩へ時直父子行方を知らず云々。……後四國の勢悉く土居得能に屬する間、其勢已に六千餘騎、宇多津今張の湊に船をそろへ、唯今攻上らんと企て候ふなり。御用心有るべしとぞ告げたりけるる。」〔伊豫豆比古命神社〕大字居相字船山にあり。縣社。祭神伊豫豆比古命・伊豫主命・伊豫豆比賣命・愛日賣命。延喜の制小社に列す。社藏の縁札に據れば、神位正一位と見ゆ。今の社殿は元文二年の造營に係る。例祭十月十四日。〔菩賓寺〕大字朝生田にあり。新義眞言宗豐山派。推古天皇御宇河内國の宿全の創建に係り蟋嶮天皇の勅願所たり。足利尊氏千三百石を附し祈願所となす。

【石井】 伊豫國周敷郡の郷。諸本皆訓を闕くも、高山寺本によりて以之爲と訓す。今何れの地に當るか未詳なるも宍粟村高

髮に依れば石井郷の中に大郷・楠窪・明河・千足山の四邑あり、今の愛媛縣周桑郡樊樹村の大字に楠窪・明河、石根村の大字に大郷あり、千足山は一村を建つ。よりて考ふるに、石井郷は以上三村に亘る邊を稱せしものならん。

【石井】 豐後國日高郡の郷（和名抄）。今の大分縣玉田郡五和村、高瀬村の地に當る。五和村の大字石井は其遺稱なり。延喜式兵部省式「石井驛家馬十疋」とあるは即ち此地にして、太宰府より國府に通ずる路頭に當り、豐後の初驛なり。五和村大字石井に比多國造止波足尼を祀れる石井神祠有りといふ。豐後國風土記・日高郡「石井郷、昔者此村有土蜘蛛之堡、不上用石築以土、因斯名曰無石堡」後人謂石井郷誤也」

イシウチ　石内村　廣島縣安藝國佐伯郡の東部。東は廣島市の西北部に接し、南は八幡村、西は河内村、北は安佐郡伴村に隣りす。北西境に向山（六六六米）あり、村内概ね丘陵性の山地をなし、中部には東北より西南に流れる八幡川の支流あり、その川筋に幅狹き低地ありて田畑拓く。農を主生業とし米麥を産し、副業に養蚕・花卉園藝・林業行はれ、松茸・柿・南・蕨等の特産物あり。東は廣島市に接するもその界に丘陵地あり、却つて南隣八幡村に出づるを交通上便利とす。古くは石道と書き、谷間の道に石多きを以て名付けしものと云はれ、寛文年間石内と改めりといふ。村内に水昌ヶ城址あり、始め佐々木國正の居城にて、のち大内氏の家臣麻生氏の有となれり。

イシウチ　石打村　新潟縣越後國南魚沼郡の西部。塩澤町の西南隅。東は魚野川（信濃川の支流）を境として中之島村に接し、東南境上に飯士山（上田富士、一一一二米）聳ゆ。西は中魚沼郡に境し境上に當間山（一〇一七米）峙つ。村の西半及び東南部は山地多く植林盛んに行はれ、魚野川流域には田畑よく拓け米・繭を産し、叺・木炭の産も尠からず。三國街道東部を魚野川に沿うて南北に走り、奥羽地越は北部を東西に走り、西北の境上なる大澤峠（七二一米）を越え、中魚沼郡水澤村に通じ、省線上越線、村の中部を南北に走り、石打驛（大正十四年設置）を置く。附近は近時スキー場として著る。大字圓は三國峠より上州に通ずる謂ゆる三國街道の要衝に當り、往古關構ありたる爲に此名を生ぜしものか。此處より中魚沼郡田澤村に通ずる境上に十二峠（七二三米）あり。村名は村社石打神社に因めるといふ。なほ村内各所に古墳多く鏃・石斧・曲玉等を出土せり。〔石打神社〕大字宮下に鎮座。村社。祭神、大山祇命外二神。關鄕の惣社と云はれ、附近の崇敬篤し。〔圓興寺〕大字上野にあり。臨済宗圓覺寺派。最上山と號し應永十七年上杉憲顯の創建にして開山は普覺圓光禪師。當時朱印二千餘石末寺三百餘寺を有せり。現に當派別格寺にして本尊は聖觀音なり。

イシウラ　石占　伊勢國桑名郡の古地名。續紀聖武紀の天平十二年冬伊勢國に行幸、十一月車駕桑名郡石占頓宮に至りたまふとあり。其地は今詳にし難し、また書紀景行紀の二十七年に日本武尊の熊襲御征伐に當り美濃國の善く射る者弟彦公と共に徴されし人々の中に石占横芝と稱するものあり。この石占も亦此地の名稱を負ひしものなるべし。

イシウラ　石浦　飛騨國の古驛名。延喜式に石浦驛馬五疋と見ゆ。今の岐阜縣高山市の石浦に當るといふ（斐太後風土記）。然して石浦は石ト（ヒト）にて、石をもて吉凶を卜なひしより出でたる名なりと云ふも明かならず。

イシオカ　石岡（いしおか）

【石岡町】 茨城縣常陸國新治郡の東部。東北は國都川によりて東茨城郡竹原村に隣り、西南流する鯉瀬川を西に帶して南に高浜町を控ゆ。北東部は低平なる丘陵地にて林野をなし西南部は低濕の地にて水田發達す。省線常磐線石岡驛（明治二十八年設置）を置き、社線鹿島參宮鐵道こゝより起り東方小川町・玉造町方面に向ひ、また水戸市を初め土浦・宍戸・柿岡・小川・高浜の各町へ至る東西南北に走る國道（舊陸前濱街道）・縣道・この地に輻輳し、その狀恰も脚長蜘蛛の感を呈するに似たり。南方の土浦町と共に交通上の便宜に恵まる。醤油及び清酒の醸造地として石岡の名は古より高く、製材工場・製糸工場・製氷工場等あり。商業も榮ゆ。縣立石岡農學校の所在地。此地は古く常陸國府の地にして府中とも、府中平村とも稱せり。江戸時代、水戸家の一族、松平播磨守二萬石の領地たり。明治五年、石岡町と名づく。〔石岡城〕市街地の西部に其址を存す、東西約五四五米、南北約四六六米。壘濠の遺形歴々たり、平城なれども西南は水田低く其昇線は斷崖をなす。もと國府所在の故を以て一名府中城とも云ふ。大掾氏の築くところ。大掾氏は平維幹に出で、初め筑波郡の多氣館（平維幹の築くと傳へらる多氣城）に居り、建保三年大掾資幹（馬場石川次郎と稱し、多氣太郎義幹の跡を承く）その居館を府中に構ふ、即ち石岡城なり。後その門族分れて七黨となり、一を國府大掾と稱して此地に居り、子孫相繼ぐ。他の六黨は各々近郡を治む。これを平氏七郡地頭と稱し甚だ強勢なりき。大掾氏の裔、高幹天正十八年佐竹氏と戰ひ、敗れて石岡城を奪はる。のち江戸時代に入り水戸德川氏の支族松平氏の領有となり、明治維新に至る。〔石岡藩〕水戸の支藩。德川頼房の四男頼隆、光圀の所領二萬石を分與され爾後子孫相承けて明治維新に至る。明治四年七月廢して縣を置きしが間もなく再び廢して新治縣に入る。新治縣は八年茨城縣

普下に屬す。〔總社神社〕大字石岡に鎮座。縣社。祭神、伊邪那岐命・迦・藝命・大國主命・須佐之男命・大宮比賣命・布留大神。創建の期不詳なるも社傳に光仁天皇寶龜年間の創建なりと。王朝時代國中の官社を悉く國府に合祀し國司の參向を便にせし總社の一にして、筑波・靜・稻田・大國玉等の總社を祀るといふ。中世以降鹿島神宮の末社たり。後花園天皇、寶德二年當社社人清原詮治鹿島大宮司中臣則廣より經綸宣旨に補せらる。例祭九月九日。〔佐志能神社〕大字石岡にあり。郷社。祭神、日本武尊、高龗神。創立年代不詳。延喜式內社に充つる說あるも異論ありて遽に斷じ難し。然れど古來近郷の產土神として崇められる。〔常陸國分寺址〕驛の西北一粁、今の國分寺地內にあり、天平年間創建の金堂・講堂の址を存す。金堂址は藥師堂の背後に礎く土壇上に礎石十箇を遺し、其北約三〇米を距てし樹林中に講堂址の礎石十數箇を遺す。共に指定史蹟。その他、中門址は藥師堂の南約八〇米を距てし處にあり、此處にはもと寶層年間の再建にかゝる仁王門ありしも、明治年間に焚失し礎石と數石とを遺す。現今の國分寺は新義眞言宗に屬し、江戸時代幕府の朱印地なり。〔常陸國分尼寺址〕驛の西北二粁、國分寺址より西へ七〇〇米を距つ。俗稱尼寺ヶ原と呼ばる、畑中にあり。金堂・講堂・中門の土壇南より北に並び、金堂址に四箇、講堂址に二十箇、中門址に四箇の礎石を遺存す。指定史蹟。〔平福寺〕町の中にあり、本尊は如意輪觀世音菩薩にて承平元年の建立なり。傳に曰ふ、常陸大掾國香野州藥師寺より春林齋と云ふ者を迎へ、寺宇を此處に創め、之に居らしむ。因て春林山平福寺と稱すと。府中大掾氏の廟寺にして、大掾氏累代の墓あり。〔清涼寺〕曹洞宗。興國山と號す。文龜元年佐竹左衞門源義胤の開創にして、開山は寒室永旭和尙。往古佐竹氏の香華院として大いに隆盛なりしも、佐竹氏轉封の後は漸次衰類に傾きたり。本尊虛空藏菩薩。〔萬福寺〕曹洞宗。光林山と號す。文明二年創建。開基は當國在廳官人の稅所貞成にして、月海遠村和尙を開山とす。本尊阿彌陀如來。

【石岡庄】 臺灣臺中州東勢郡の西部。西は豐原郡墨原街に接す。東北部は大甲溪中流溪谷の平野にして南部は一帶の山地なり。平野に豐原街より東隣東勢庄に通ずる道路あり、社線臺中經便鐵道これに沿ひて走り、石岡・九房厝・社寮角・林厝・梅子・學校裏・土牛・貯木場等の諸驛を置く。平地には水田廣く拓けて米の產多く、南部の山地には闊葉樹多く、諸處に放牧行はる。なほ庄內東部に大甲溪を利用する水力發電所あり。

イシオキバ 〔石置場〕 江戸深川の地名。いま大島川の南岸にて、古石場町といふ。石置場は略して石場と稱し、後に生ぜし新石場に對し古石場といふ。國場所の所在地。歸美車紫鹿子「深川石置場、此辺土大がいは新地におなじ、衣しやう髮あまりよくなし」赤石場

イシカ 石加 伊勢國員辨郡の郷。和名抄は以之加と訓じ高山寺本には以之賀とあり。今の三重縣員辨郡阿下喜町治田村東藤原村・西藤原村邊に當る。東藤原村の大字石川は郷名の遺稱ならん。石川に式內石神社鎭座。神風抄に石河御廚とあるは此地に同じ。

イシカ 石蟹 【石蟹】 備中國哲多郡の郷。和名抄刊本は伊波加爾と訓するも高山寺本には伊之加とあり、今これに從ふ。其地は今の岡山縣阿哲郡石蟹郷村・本郷村及び萬歲村邊に當る。中世は石蟹莊と稱し源平盛衰記、一谷築城の條に見ゆる石賀入道の居邑。備中巡禮記には石賀村と見ゆる。

【石蟹】 岡山縣阿哲郡石蟹郷村の大字。伯耆線の石蟹驛（昭和三年設置）を置く。

イシカ 伊可 志摩國答志郡の郷。和名抄は訓を岡くも伊志可と訓むべく、地は今の三重縣志摩郡鵜浦村・長岡村邊に亘る。神風抄に志摩國伊志賀御廚とあるもこれに同じ。いま鵜浦村に大字石鏡あり、其海岸を距る數百間に石鏡と呼ぶ奇岩あり、郷名は之より起れるか。

イシガキ 石垣 【石垣湖】 赤城湖（群馬縣）の古稱。

【石垣山】 神奈川縣足柄下郡早川村の西部の山。下に笠懸山と呼ぶ。墨岳東北の山脚の一高點。標高二五五五米。北は箱根火山の火口瀨早川の溪谷に急斜し、小田原を眼下に望む景勝の地點。明應年中北條早雲の大春重鎭を許きて小田原を攻めし時この山上に陣し、また天正十八年小田原征伐の時、豐臣秀吉の此處に城壘を急造して北條勢を驚かせし處。壘址にはいま大石累々として轉た當時を偲ばしむ。

【石垣】 京都市の町名。賀茂川の東、大佛殿の北に當る。古く男色及び女色を鬻ぎし遊所。說つてイシガタマチとも呼べり。好色一代男・四「世之介樣、我を忘れ給ふか、石垣町の、鰤屋小まんが執心思ひしらせんといふ」好色一代女・五「石垣町に在し時は色白にして全盛の男、しのび慰みの花車座敷、伽羅でかためし御肌豐なる風情」長町女腹切・中「名は壓く人は和ぐ石垣町、前には懸の底ふかき、淵に憂き身をぼんと町、都の四季の月花をここにとどめて通ひ路や」

【石垣村】 和歌山縣紀伊國有田郡の南部。紀伊山脈西部の一脈谷ガ西に流るゝ有田川中流の山谷に當り、全村略ど山地ななし、東端に白馬山（九五八米）峙ち、南は日高郡に隣る。主產物に蜜柑・米・薪・林產物等あり。交通は川に沿ひて下り有田鐵道金屋口驛に出づるを最も便利とす。中世の石垣莊は今の生石・御靈・石垣・鳥屋城・五西月・岩倉の六村に當り、或は有田川を以て分ち何北庄・何南庄と

も云ひ湯淺氏これを領せしものち北畠氏の有となる。村名は莊名の遺稱なり。村內に石垣尾神社鎭座、社地の後方に巨巖列峙し、石垣の神號並びに莊名は之より起ると傳ふ。また此地は明惠上人の誕生地にして其遺跡殆から寸。〔石垣尾神社〕大字吉原字石垣に鎭座。村社。祭神、猿田彥命・國常立命・品陀別命・菅原道眞。

勸請年月不詳なるも古老の傳に、人皇四十代天武天皇の御宇諸國大震動あり、里人大驚し此莊の總社としてこゝに勸請し國司も赤崇敬せりといふ。〔歡喜寺〕大字歡喜寺にあり。淨土宗。聖衆來迎山と號す。寛和二年僧源信の開基、花山院の御願所にして、境內八町四方に餘り、上品堂・中品堂・下品堂あり、堂塔莊美を盡せりと云ふものち衰替す。湯淺宗氏これを復興し、明惠上人の弟子義林房をして住せしむ。もと淨土宗なりしを此時眞言宗に改め、後鳥羽院の御願所となる。元祿年中々興の祖素川再び淨土宗に復せしに其後また衰替し、今は僅に草堂を存するのみ。寺寶の阿彌陀如來及び地藏菩薩像は何れも木造、鎌倉時代の作にて國寶。〔吉原卒都婆〕指定史蹟。大字歡喜寺にあり。明惠上人誕生地にして明惠上人八所遺蹟の一。歡喜寺の西方約一〇〇米。上人の父は高倉院武者所平重國、母は湯淺權守宗重の第四女にして、其邸は此處にありしも今は畑と耕地となり、僅かに約八坪の芝生を見るに過ぎず。その中央に卒都婆あり、高さ一米六五、幅二六糎、厚一八糎、表面の上部に梵字を刻し其下に左の銘文あり。「梵字（あ）普賢菩薩、承安二年癸巳、正月八日辰時、上人誕生之處、嘉禎二年丙申、十一月十九日造立之、比丘喜海謹記」なほ芝生の一部に飯衣塚あり。また附近にありし產湯の井戸と傳ふるものは今跡を失へり。〔袈立卒都婆〕吉原卒婆の南一粁半、大字歡喜寺西原袈立の山腹にあり。明惠上人八所遺蹟の一。今のものは再造にて、高さ一米餘、表面に左の銘文あり。

建久未比製

梵字（しり）功德林菩薩華嚴唯心觀

行式井隱意

別願父之處

右側に左の銘文あり。

嘉禎年中所立之碑

古損之間造立之

享和二年壬戌九月十九日

後方に應永四年の供養塔婆、同六年の銘ある寶篋印塔を存す。ここは建久年に上人自上窮峯より居を移せし處と傳ふ。

【石垣】 大分縣速見郡にありし村。昭和十年九月別府市に編入さる。

【石垣原】 別府市の西北部。大平山（七五二米）の東南麓にある古戰場。慶長五年九月大友義統その臣吉弘統幸の苦諫を用ひずして石田三成に荷して兵を此地に進め、豐前中津の城主黑田孝高と決戰して利あらず、吉弘統幸の「あすは誰が草の一首を遺して惡戰苦鬪の末遂に仆れし處。星霜三百五十年草花萎々として亂石を掩ひ、迷雲離々たる原頭の光景轉た人をして懷古の情に堪へざらしむ。三浦梅園の石垣原懷古の詩「山圍三舊國、鑑岩曉、遺蹟空原鐵半消、鬼哭夜聽三風雨起、寃魂秋入海濤潮、分爭割略指揮失、制據雄圖形勢遙、烈士墳前俘ノ枝立、歲寒松老草蕭々。」

【石垣島】 沖繩縣八重山郡八重山群島東部の島。沖繩島の那覇を去る西西南約四五〇粁の海上にあり。西方は竹富・小濱・黑島等の小島を隔てゝ西表島に對す。面積約二一六方粁。八重山支廳の管下。西半の石垣町、東半の大濱村に分かれ、支廳を石垣町四箇に置く。島內は南部及び西部海岸に僅かの平地を見るも他は概ね山岳重疊し、北部に於茂登岳（五一〇米）峙ち、山勢は長く北東に延びて平久保半島となり、その先端平久保岬は斷崖を以て海に臨む。また北西には石崎半島突出して其の東側類部に川平灣を抱き、西には大崎觀音崎ありて其の間に名蔵灣を擁す。南西岸の竹富島との間なる海峽に面して石垣港あり。また南岸に宮良灣ありて、オモト岳に發する本島第一の長流宮良川南に下りてこれに注ぐ。かく海岸は屈曲多く彎入に富むも至る處に珊瑚礁の發達を見、また崖岸多きため良泊をなすものなし。縣道石垣港より東西の海岸に沿ひて走る。原野廣く開墾耕作可能なれども風土病（マラリヤ）あるため開拓遲々たり。近年風土病禮滅と開拓進捗との考究その歩を進めつゝあり。耕地より米・甘藷・甘蔗等を產し、山地より良材を出す。石垣町・大濱村の諸部落は殆んど海岸の隆起珊瑚礁上に發達し、無病地を選びたるものなれば、氣候溫暖・風光明媚にして南海の樂園たるを失はず。產業に鰹の漁獲、鰹節製造・養蜂・酒造等あり。また八重山上布、八重山燒等を特產す。大正三年西岸名蔵灣內に於て始められし御木本の眞珠養殖事業は、障害多くして中止せしも、其後、川平灣に移りて事業の擴張を圖り、今や頗る有望視せらるゝに至れり。なほ現今盆栽として珍重さるる萬年青はこの於茂登岳の原產なりと稱せらる。川平灣西岸の川平は古くより開け、もと中山王への貢納の發著地たりしと傳へ、その北方約一粁の地にある貝塚は馬來系のものと考證せらる。本島は奈良時代の初めに我國に來朝せる信覺國なり。察度王の四十一年（元中七年）に宮古島と共に沖繩に服屬し蔵元を此島に置けり。後年、石垣・宮良・大濱の三間切に分ちて八重山群島一圓（與那國島を除く）をこれが所管として分割統治せしも、明治二十九年に八重山郡設置せられ、翌三十年特例を設けて一島一間切に改められ各島廳に於て行政を司りしも、明治四十

一年島嶼町村制の施行と共に間切制は廢止せられて一郡一村となり、八重山村の管下に入る。大正三年現在の行政區劃となりて石垣島は石垣・大濱二村に分れ大正十五年郡制廢止の結果八重山支廳の管轄となる。石垣島の歴史上忘るべからざるは尙穆王二十年（明和八年）三月の大津波にて、其溺死者九千數百人、實に當時住民の一半を失ひ、加之、安永五年飢疫流行の厄をうけて三千七百餘人、享和二年・天保二年・嘉永六年の三回惡疫流行して更に三千の人命を損ひしこと等悲慘事多くその上寛永十四年以來三百年間人頭稅を課せられしため、遂に墮胎・壓殺等の惡風各地に行はれ、人口は年々減減せり。琉球藩廳も竟に此の惡習防遏に目覺め、安政六年多子免稅の法を施行して多産を奬勵せしを以て、漸く人心に光明と安堵とを與へ、復活の機運を醸成するを得たり。明和の大津波の以前に於ける本島の人口は、寶暦三年に約二萬六千二百人なりしに、百五十二年後の明治三十八年に至りても猶ほ一萬九千八百人に過ぎず、以て當時の慘狀を察知すべし。いまや石垣島をはじめ八重山群島諸島の天然資源の開發は疲弊の現狀にある沖繩復興の最も重要なる問題としてこれが實現に邁進しつゝあり。また島民は一般に歌舞・繪上に、最畫・彫刻等に秀でたる天分を享有し、古くより詩の島・藝術の島として廣く知られたる所なり、各島各部落に殘る郷土美謳の古歌は、昔日の繁榮を偲ぶ好資料たり。

【石垣町】 沖繩縣琉球國八重山郡石垣島の西半部を占む。東は大濱村に隣接し、南西北の三方は海に面し、西方は竹富島・小濱島・黒島・西表島等を含める竹富村に對し面積九二方粁を占む。海岸は屈曲多く、北端に石崎の半島ありて其の東側に川平灣を作り、西部に大崎及び觀音崎突出して其の間に名蔵灣を抱く。兩灣共に沿岸に珊瑚礁發達して大船の出入に適せず。觀音崎の南東方、竹富島との間なる海峡に臨みて石垣港あり。石垣島の門戸なれども港内水淺きを遺憾とす。町内東北部には山地多くして東端北部に於茂登山（五一〇米）屹立し、西部及び南部海岸に平地あり、また大字名蔵の東部なる山中には廣漠たる原野ありて農耕可能なるも、マラリヤの風土病あるため昔日の如き盛況を見ず近年風土病の撲滅を計りて著々實績を擧げつゝあり。主産物は米・甘藷・甘蔗等にして、東北部の山地よりは良材を出す。沿海よりは鰹その他の漁獲物、鰹節製造行はれまた北部の川平灣内に貝殼製藻場あり。その外煙草・酒造・製鹽の諸業も行はる。縣道は大字四箇より東方の大濱村宮良・白保方面に通ず、四箇は石垣港の上陸地なる登野城・大川（元大濱間切）・石垣・新川（元石垣間切）の四邑を總稱せるものにして、八重山支廳・警察署・稅務所・測候所其他の諸官衙あり、沖繩奇灣觀路の寄航地、八重山郡内の門口にして、また颱下屈指の都邑なり。港内水淺きを以て少シクによりて往來し、また近年設備せられたる假桟橋は長く海中に突出せるが故に納涼觀月に適し、此地の一名所なす。なほ町内に櫻現堂・觀音堂・於茂登岳・川平貝塚・大和墓・御本木貝殼藻養殖所等の名所舊蹟あり。〔櫻現堂〕四箇の小字石垣にあり。慶長十九年尙穆王の允許を得て波上宮座主三光院快雄和尙により同櫻現を分靈し神體寶鏡三個を奉祀す。傍に觀音宗南海山桃林寺を併建し、鑑象和尙を以て開山となす。毎月朔望、諸司役人一同參詣して國土安寧・諸病調伏を祈願し、庶民の迷信を打破せんと努めたれども、島民なほもイリキヤアマリ神の逆鱗に觸るゝものとなして犧牲を供へ祭禮するを止めず、延寶六年恩納親方巡視の際、これを嚴禁することゝせり。社寺は明和八年海嘯に襲はれて壞滅せるも同年再建す桃林寺の仁王像は彫刻の雄壯麗緻を以て知らる。〔觀音堂〕四箇の西方約四粁、宮崎にあり。桃林寺の長老義象禪師が衆生寒暑・海路平安を祈願する爲に妙法蓮華經を謹寫奉納して經塚を建立せしを、寛保二年に順天氏首里大屋子こゝに堂を營みしものといふ。堂宇の建築彫刻には南島獨特の手法ありて美術工藝上研究價値多きものといひ、背後の丘陵は前方海上の竹富・小濱二島を望み、また颱氣樓の出現することありて展望の名所とせらる。毎月八・十八・二十八日の祭例日には參詣者多し。〔川平貝塚〕川平の地に往昔には四箇の方面に比して繁榮著しく、川平灣内には船舶輻輳して中山王への入貢船も此處より出入せりといはれ、川平・仲筋・浮海の三邑より成る川平間切の首邑なりしも、現今は家百戸に足らざる一寒村なり。村の北方約一粁にあるシヅ森・ガアナ森には島居龍藏氏によりて發見せられたる貝塚あり、出土の土器は無紋にして兩端に耳ありて沖繩本島及び内地のものとは異なり、馬來系のものならんといはる。川平灣を隔てゝ東北方に斗出せる平久保半島の頸部北岸の地に船越の溪谷あり、昔時村役人禮謂の鶏龜節・別離の情歌として知らるゝ川平節を產めるは此地なり。〔大和墓〕小字山原にあり。廣さ約二米平方、高さ約一・二米、石にて疊み上ぐ。附近に大和川あり、平家殘黨の遺跡と稱すれども信疑明かならず、長年奚廣のまゝ放置せられしも近年八重山官廳林所これを修して墓碑を建てたりといふ。〔御本木貝殼藻養殖所〕川平灣内にあり。大正三年三重縣御本木貝殼藻養殖所は名蔵灣内にて藻類を試みしも種々障害ありしを以てこれを中止し、其後川平灣内に移して事業の擴張を圖りし所、今日に於ては頗る有望とされ、此地の一名物たらんとす。〔於茂登岳〕石垣島のほゞ中央部、北岸に偏す。標高五一〇米、沖繩縣第一の高山にして、其の支脈は西走して八重山郡北部に殘る。北走して野底岳となる。鍋鳥火山脈最南端の火山に屬し、花崗岩・輝岩を以て基礎となすといふ。なほ鹽我植物たる萬年青は此山の原產なりといはる。〔尖閣諸島〕石垣島の北方約一八〇粁の海上に散在する魚釣島・久場島・尖頭諸嶼及びこれより東方に離れたる赤尾嶼を總稱す。行政上本町の所管なるも、何れも無人島にして、第三紀層を貫きて噴出せる海中火山の頂上なり。最大の魚釣島を以てするも四方粁の小島に過ぎず信天翁の群集するを奇觀となす。

※石垣島

イシガキ　石薩浦　鹿兒島縣薩摩國揖宿郡頴娃村大字御領の海岸。岩壁羅列して石蘭を產れるに似たり。續紀・天平勝寶六年四月「大宰府言、入唐第四船、判官正六位上布勢朝臣人主等、來泊薩摩國石薩浦」とあるは卽ち此地なり。

イシガサキ　石崎　備中國阿哲郡上市村の南なる石蟹郷村のことならん。日本振鈴始「眞がれ吹く吉備の中山なかなかに、ちらせし花を春風の、また吹き溜めて石崎や、いや高山の松が枝も、再び花の盛り見すらん」

イシガセ　石下瀬　愛知縣尾張國加茂郡にあり。明治三十九年本村は中野村・七里村と共に廢せられ、その地域に四谷村の大字元山中及び富貴下村大字松嶺・押澤・藤澤・富田とを合し新に石野村を置く。

イシガセ　石篙瀬川　愛知縣尾張國知多郡の北部にある小川。源を大府町の北境に發し東南流して境川に入る。流程約四粁。永祿元年知多郡緒川（いま東浦村の大字）の水野信元が織田氏に屬し、その明に當る岡崎の德川家康（松平元康）は今川氏に從ひ、此地に於いて戰へり。これを世に石篙瀬川の合戰と呼ぶ。同三年六月・同四年二月の兩度此地に戰ひしものち家康、信長と和し從つて水野氏との戰もやむに至る。

イシガサト　石蟹郷村　岡山縣備中國阿哲郡の南隅。新見町の南方に位し東は高梁川により美袋村・草間村に界し南は川上郡に隣る。上房郡高梁町より伯耆への縣道及び省線伯備線高梁川に沿ひて東部に通じ、後者は石蟹（昭和三年設置）井倉（同）の二驛を置く。村内殆ど山地をなし、たゞ川岸と谷間に耕地あり、主産物は米・繭・雨霜・木炭等。古くは和名抄、哲多郡石蟹郷の内。※石蟹

イシガミ　石上　常陸國那珂郡の郷（和名抄）。其地は詳かならざるも今の茨城縣東茨城郡の石塚町・岩船村の大字高久・西郷村の大字青山などに亘る地なるべし。卽ち那珂郡と入野郷（いま小松村）の北にして、東は那珂川に至り西は鹽子と山嶺を限る。常陸郡郷考に「今青山村の下村に石神（青山の小字名）といふ地あり、是れ郷名の遺りなるべし云々。」とあり。

イシガミ　石神　【石神村】 福島縣耶麻郡相馬郡の中部。原町の西、鹿島町の西南方。西南邊は雙葉郡津島村に界す。西部は阿武隈山地の東麓にして中央に國見山（五六四米）あり、一帶に臺地性の山地をなすも東邊は急傾斜をなす。村の北部に新田川中央に水無川（高倉川）、南部に太田川等ありていづれも東流し、村の東部に段丘平地あり、水田・桑畑等の耕地拓け、米・繭を產す。省線常磐線原町驛へバスを通じ、東部は交通便なり。大字牛越に手長山あり山上に手長明神を祀り、山下に館山といふ廢墟あり、相馬家の牛越城塞なりしも、慶長年間に廢す。相馬長門守義鳳、慶長二年、牛越の城に住みしこと奥相紀聞に見ゆ。大字馬場は牛越の西南にてその五臺山は安政年中、藩府鐵を採掘せし處。大字北新田は新田川の北岸に沿ふ。相馬能鳳の女婿なる新田岩松時兼の上野國（群馬縣）新田郡より來住して庄務を視し所、新田川の名も之に因ると。此地に村社押雄神社あり、祭神は天之押雲根命、式内社。例祭三月二十七日。牛越の西約四粁に大字高倉あり、高倉川の上源にて、文永年間の古書には鷹倉に作る。郷社高座神社鎭座。祭神は伊志許理比賣命。式内社。例祭四月二十日。

イシガミ　石神村　茨城縣常陸國那珂郡の東南部。北はほゞ久慈川を境として久慈郡東小澤村に對し、西は神崎村、東の東と南は村松村に隣まる。省線常磐線は村の南部に石神驛（明治卅一年設置）を置き國道（陸前濱街道）西部を南北に走り久慈町方面へ通ず。米・麥を產し、古くより苗木の產地として知らる。明治維新の勤王家黑澤愛介（贈從五位）は同村大字石神外宿の出身なり。此地は和名抄の久慈郡神前郷の内、古く石神宿といへり。村内にありし石神城は戰國時代に小野崎通老の初めて築けるもの。小野崎氏は友部（多賀郡穗形村大字）の城主平重宗通胤より出づ。延德元年、奥州の諸將の佐竹義治を小里に圍むこと急なり、小野崎通綱（通胤五世の孫）、義治の名を冒し戰死す、爲に義治圍を脫するを得、通綱の節に感じ、其男の通老の幼なるを立て跡を繼がしめ、加藤して石神に居らしむ。通老越前守を稱す。〔願船寺〕大字石神外宿にあり。眞宗大谷派。親鸞二十四輩の第十四定信房の遺跡なりと傳ふ。小松川義明は當郡額田村河鯉陀寺を相續し、弟義照は本寺を繼承すと云ふ。もと願泉寺と云ひしも、德川光圀現在の如く改めしむと傳ふ。〔長松院〕曹洞宗。住吉山と號す。文明十六年の開創。小野崎越前守義忠を開基とし、開山は雪溪道瑞和尙。

【石神】 ↓總元村（千葉縣）

イシガモリ　石盛山　福島縣岩代國北會津郡一貫村大字金堀の北約二粁にあり。山駄蝸牛に似るとて一名蝸牛山とも

いふ。もと沙金を産す。金堀の字名これに因る。會津新風土記云、石盛は金堀小屋は瀧澤村（今の一貫村）の丑寅廿八町にあり、家居一軒、溪流に倚て住す、慶長八年、此地の山より金を探初め、年を累て繁昌し、諸國より人多く集り、小屋凡そ千七百軒に至る。其後盛衰あれ共、寛文の頃までは猶五十六軒、男女二百餘人集れりとぞ、或は曰く、寛永廿年、我肥後守就封後、萬治元年迄、十六年間に一萬六千四百三十八兩、吹金三十八貫四百八十一文目を買す、寛文四年、江戸より遣寄と云ふ者來り、再び坑を穿ち、同十年まで七箇年の間に一萬四千兩を買せりと。また拾要抄云、石盛山は高さ十三丈、螺髻山とも云ふ、山勢孤立、大樹なく奇觀なり、昔は夥しく良金を産し、筆の溪流にも砂金ありしとぞ、坑を穿ちし處蜂房の如し、蒲生秀行の時（慶長八年）より忠鄕の時（元和六年）まで、前後の貢額三百六十萬五百兩、加藤氏の時、南後貢額六百四十萬八千三十三兩に及びしと云ふ。

イシガヤ　石谷峽　廣島縣佐伯郡上水内村にあり。太田川の一支流石ケ谷川上流の溪谷に沿ひ、宇中組より豊明瀧に至る約六粁の峽谷と、峽の中途乙女瀧より龍頭瀧に至る一・六粁の支峽とを總稱せるもの。探勝路は稀有の坦道にて、秀峯、奇岩の勝景に連續す。

イシカリ　石狩

【石狩國】 北海道十一國の一。行政上、石狩・空知・上川の三支廳に分割せらる。本道のほゞ中央部を占め、北は天鹽、東は北見・十勝、南は日高・膽振、西は後志の國々に隣接し、北西部は日本海の石狩灣（小樽灣）に臨む。北海道に於ては口蝦夷を除きて最も早く開發せられたる地域にて政治上の中心たる札幌市、軍事上の中樞たる旭川市を含む。石狩の大平原は大農法による耕作行はれて農産の寶庫と稱せられ、上川盆地の米、中部山地及び諸處に埋藏せらるゝ石炭、海岸一帯の大漁場等を有して無比の富源を貯ふ。寛永三年松前藩の三場所を設くるに當り厚田・益毛と共に石狩場所を設定し之を家臣の場所とす（蓋し場所とは請負制度を以てする組織的漁業區をいふ）。文政四年に藩は石狩國に新たに豊平・發寒・上札幌・下札幌・篠崎・上對雁・下對雁・上樺戸・下樺戸・上夕張・下夕張・島松・苗穂の十三場所を開く。明治二年新政府は北海道に開拓使を置くに及び、當國の札幌の地を卜す。國名は内地第二の長流たる石狩川の流域一帯を中心とするが故に其名をとれるもの。（石狩の語根に就ては石狩川を見よ）

【石狩支廳】 北海道十四支廳の一。北海道の西部に於て石狩國の西部と膽振國の北部を含み、北は留萌、東は空知、南は膽振、西南は後志の各支廳に隣り、北西は小樽灣（石狩灣）に面し、面積約三五一六方粁。地形上自ら北部山地・中部平地・南部山地の三部に分る。北部山地は所謂增毛山塊の一部をなし、主として第三紀層より成り、北境に暑寒別山（一四九一米）西部には圓錐岩・農婦山等の火山を載せ、南するに從ひ概して低下す。中部平地は石狩川下流の廣大なる沖積地にして、この南東に連なる千歳低地は火山噴出物の堆積より成る低き臺地をなす。また南部山地は後志火山群地域の東部に當り、樽前岳（一〇二四米）・惠庭岳（一三二〇米）・札幌岳（一二九四米）等の諸火山巍起し、惠庭岳の南方には大カルデラ湖たる支笏湖を湛ふ。なほ湖東には第三紀層及び洪積臺の地帶が存し、第三紀層はまた火山岩に覆はれざる處に處々露出す。氣候はかなり海洋性にて冬は北西季節風の吹らす温氣のため積雪を見るも、對馬海流の影響により氣温は餘り低くからず。管内の耕地面積は約六萬四千ヘクタールに達しなほ農耕適地として未墾の儘に殘存せるもの約三萬町歩、その他放牧・植樹等に適するもの約五千五百ヘクタールあり。また北部及び南部山地は針葉樹及び闊葉樹の森林に覆はる。主要農産物は燕麥・大麥・米・小豆・大豆・玉蜀黍・馬鈴薯・豌豆にして近年蔬菜の栽培は年と共に盛んとなる。外に苹果その他果實の栽培行はれ、牧畜も頗る盛んにて、牛・馬・豚等の産多く、札幌市外の月寒に農林省畜産試驗場、更にその南方の苫駒に北海道廳種畜場設かる。水産は沿海漁業を主とし、鮭、鱒、鰊等の産多く、石狩河口の石狩町は古來鮭の名産地として知らる。次に工業は最も重要な産業にてその産額は總生産額の六割以上を占め、江別町の洋紙製造は特に著しく、琴似の製麻及び江別町の清酒これにつぐ。鑛産物には、手稲村の手稲鑛山からは金銀鑛、當別より北に連なる地域並に札幌の南東に連なる地域よりは石油を出し、輕川には大規模なる製油場あり。昭和十年度に於ける本管内の生産總額左の如し。

總産額　約三、四〇〇萬圓（單位萬圓）			
工産物	一、八八八	畜産物	一七一
農産物	九六三	鑛産物	二二〇
水産物	一九九	林産物	四九

人口は約十四萬二千人（昭和十年）、豊平・江別・石狩の三町を主要都邑とし、札幌・厚田・濱益・石狩の四郡を含む。交通としては函館本線小樽より來り札幌、江別を經て岩見澤に至る外、札幌より膽振方面に通ずる北海道鐵道並に定山溪に達する定山溪鐵道がある。なほ石狩の名義考に就ては石狩川を見よ。

【石狩郡】 北海道石狩國九郡の一。石狩支廳の管下にして石狩町及び當別・新篠津の二村を含む。石狩國の西部を占め、西は石狩灣（小樽灣）に臨み、北部は厚田・濱益・樺戸の三郡によりて圍まれ、東は石狩川下流を以て空知・札幌の二郡に界し、西南端は僅かに小樽郡に接す。北部は一帯の山地にして北境に暑寒山（五九〇米）東境に地勢根尻山（一一〇〇米）・陰根尻山（九七一米）、西境に別刀岳（六六六米）・阿曾岩山（四一八米）等の諸山あり、當別川北境より發して此山地の中央を南流して石狩川に入る。郡の南部の大部分は石狩平野の北部にして石狩川・當別川等によりて灌漑され、耕地一面に拓けて米・麥その他の農産物多く、石狩川沿岸に泥炭層を含む地あり、また阿曾岩山附近の厚田郡に亙る丘陵地には石狩油田あり石狩・當別等の油井開鑿せらる。また石狩川には鮭、石狩灣岸には鮭・鱈等の漁獲物多く夙に蝦夷地第一の漁場として著はれし所。省線札沼線（札幌・桑園・石狩・沼田間）郡の東南部を貫通して札幌方面と連絡し、また石狩川及び海上の水運は交通運輸に便多く石狩川口に石狩港の築地あり。なほ石狩名義考に就ては石狩川を見よ。

【石狩町】 北海道石狩國石狩郡の西端。石狩支廳の管下。石狩平野の西邊を占め、西は石狩灣（小樽灣）に面し、南は札幌郡及び小樽郡に、北は厚田郡に隣接す。石狩川曲流しつゝ南北に貫流し、河口に近く石狩港の築地を囲きて其の背後に市街の發展を見る。河口に石狩河口燈臺あり、不動紅光、光達距離四浬。石狩川及び海上の水運の便あり。また道路を札幌市・手稲村に通ず。土地低平、米・麥その他の農産物多く、北部の丘陵地は石狩油田の一部に當りて石油の産あり。また石狩灣岸は古くより松前氏によりて開拓せられし本道第一の鮭漁場として知られし處、また鰊の漁獲も多し。町内に郷社八幡神社あり、應神天皇を奉祀し、明治七年の創建。例祭八月十五日。（なほ石狩の名義考に就ては石狩川を見よ）

【石狩川】 北海道の中部西斜面、石狩國を流るゝ川。本道第一、内地第二の長流にして流程約三六五粁。石狩・十勝兩國境上に屹立する石狩岳（一九八〇米）の北面に發源、層雲峡となりて北流し、旭川市附近の上川盆地を過ぎ、西方の夕張山脈を横斷し、其處に當勝神居古潭の峡流を作りて雨龍原野に出で、それより南下して石狩平野の舊中を蜿蜒蛇行し、最後に流路を北西に向けて曲折緩流して石狩灣（小樽灣）に注ぐ。其間多くの支流を合せ主なるものに雨龍・空知・江別等の諸川あり。下流は其の河道を變ずること多く舊河床には幾多の三日月形の河跡湖を殘し、また河岸に沼澤地を伴ふ。流域面積約一四、二五〇方粁、下流約二〇〇粁の間には小蒸氣船を通じ、河口西岸に石狩河口燈臺あり、不動紅光、光達距離四浬。また河口の石狩町より札幌市附近の豊平町に至る約四八粁の河道は改修工事によりて約二六粁に短縮せらる。河中に魚族の棲息するもの多く殊に河口附近は本道第一の鮭漁場として名高しまた流域平野は、上川盆地・石狩平野共に米・麥を始め農産物頗る多く、これ又本道第一の農産地をなし、なほ下流一帯の地は廣大なる泥炭層を有する等、各種の富源を蔵す。なほ石狩川の原名はアイヌ語にて說二三あり。一はイシカラペツ（屈曲岡流する川）にて、始めはこれが必ずしも全石狩川を指すと限らざりしが如し。他の一はイシュカラペツにて、國造神が拇指にて大地を割す、これ石狩川にて其義は美しく作りたる川なりといふ。何れにせよ石狩の國名・郡名等々何れも此川名より出づ。

【石狩平野】 北海道石狩國の西南部にある平野。北方の石狩灣岸より南南東の太平洋に至る石狩凹地帯の中部以北を占むる本道第一の大平原にして、面積約一萬四千方粁。石狩川の下流及び其の支流輕尻川・江別川・豊平川等の灌漑に當る。その東邊には復雜なる押し被せ褶曲を有する第三紀層の山脈南北に連りて炭田地を形成し、南部には江別川の上支流なる千歳・夕張二川の河谷を分つ、馬追山の丘陵ありて森林これを蔽ひ、南西部には樽前火山よりの噴出物の堆積層あり平野には大農法の耕作行はれ、米・麥その他の農産、牛馬を主とする畜産物、大森林地よりは用材、北西部よりは石油等を出し、また醸造・製紙・製材等の諸工業盛んにして本道産業上の樞軸をなす。本道の首都札幌市を始め、美唄・岩見澤・江別・豊平・石狩・苫小牧等の諸都邑發達して各種の産業の發展著しく、省線函館本線・室蘭本線・札沼線及び社線の北海道鐵道・夕張鐵道等の諸線縱横に通じて此等の諸都邑を連れ交通至便とす。

【石狩山脈】 北海道のほゞ中央部を南北に連る山脈。先づ南部、十勝支廳八十勝國）の西北部、雷電・十勝二川の間に隆起し、ラペルサンケ岳（一八七〇米）・ニペソツ岳（二〇一八米）となり、北に延びて上川支廳（石狩國）との境上に聳ゆる主峯石狩岳（一九八〇米）に至り、更に北方は上川・鋼走（北見國）兩支廳界を分なし、石狩・北見・天鹽三國界上に天鹽岳（一五八五米）を起す。これより以北は山勢次第に衰へ、高原性山地をなす北見山脈に續く。延々數十粁の間に連亘し、傾斜は一般に東側は急峻、西側は緩除なり。主として古生層よりなる褶曲山脈なるも石狩岳以北に聳ゆる三國山（一五四五米）・武利岳（一八七六米）・天狗岳（一五六一米）・天鹽岳等の諸峯は石狩山脈の上に噴起せる千島火山帯に屬し新火山岩廣く被覆す。南流する音更・ピリベツ、東流する當別・湧別、西流する石狩等諸川の上源は皆この山脈に發し、源流附近は本道主要の針葉樹の密林地帯として著はる。また石狩岳を中心とするこの山脈の南部一帯は大雪山國立公園の地域に屬し、所々に温泉の湧出あり、南邊

には然別湖の流ふるありて登山行樂の適地をなす。たゞ山頂部は傾斜急にして蔽はれ、また中腹以下は熊笹密生し、連山の縱走は殆ど不可能事に屬するも、諸川の流れは比較的緩流をなすを以て、深歩きの興趣ふかきものあり。※石狩岳・大雪山國立公園、

【石狩岳】 北海道のほゞ中央、石狩・十勝の兩國境に跨る山。石狩山脈の主峯にして標高一九八〇米。南方はニペソツ山に連なる。高さに於ては北西方の大雪火山群の諸峯に劣るも、深山をなすことは本道中隨一にして、平原地よりは全く此山容を眺むることを得ず、附近の高山なる大雪山・十勝岳・ニペソツ山等に登りて始めて之を望見し得る。東北山麓にはユニ石狩岳(一九三二米)・音更山(一七五五米)・三國山(一五四一米)連なり、南山麓にはニペソツ山(二〇一八米)聳き、また西山麓には沼ノ原山(一五〇六米)聳ゆ。山の北西側よりは石狩川發源し、層雲峡を作りて大雪山の東北部を侵蝕しつつ北西に流出し、南東側よりは十勝川の一大支流音更川發して南流す。大雪山・十勝山等の火山なるに反し、石狩岳は大禮古生層より成る褶曲山脈に屬し、山頂附近は大部分傾斜帶をなし、一六〇〇米以下の山腹には熊笹密生し、夏季も連山の縱走は殆んど不可能なり。此山は大雪山國立公園地域の中部に當り、登山路は北方の石狩川谷の層雲峡を遡上するものと南方の音更川に沿ふものとあり、共に深歩きの興味深し。※大雪山國立公園

【石狩炭田】 北海道石狩國中部にある炭田。空知・夕張・勇拂(膽振國)の三郡に跨り、東は南北に連なる夕張山脈、西は石狩平野中央凹地帶との間、南は夕張川流域、北は空知川流域に亘る。東西約一六—二四粁、南北約八〇—一〇〇粁、面積約二〇〇〇方粁の地域。炭田の發見は明治元年なるも、始めて之を調査せるは實に同六年より八年に至る三箇年にて、開拓使廳雇米人ベンジャミン・スミス・ライマン氏と其門下の人々の手によりてなされ、炭田の頗る有望なること確認され、氏の建議により、同十二年幾春別川の支流々域に幌内炭坑を開鑿せるを本炭田開發の濫觴とす。爾來年と共に幾多の炭礦開鑿せられ、今や歌志内・茂尻・砂川・空知・美唄・幾春別・幌内・萬字・夕張・大夕張等の重要石炭山を數ふるに至れり。夾炭層は第三紀始新統乃至漸新統に屬し、十數枚の稼行炭層あり、その厚さ八米に達するものあり、總埋藏量十八億萬トンといはれ、現にその產額は北海道出炭總額の八割以上に上るといふ。

【石狩油田】 石狩國厚田郡以南より石狩郡の北部に亘り、石狩町の東北東約一一粁に當り、延長六〇〇〇米・幅五〇〇乃至一〇〇〇米の背斜帶を成せる第三紀層中、地下五〇〇乃至六〇〇米の深さより產す。其徴候は明治の初めに既に知られ同十二年頃既に少量の產出あり、同三十六年良來機械掘にて產油を加へ、昭和元年七、〇〇七竏、同五年には九、六八〇竏を產せしも、同十一年にはその產額減じ四、二四六竏を產せしのみ。

【石狩灣】 北海道西岸にある日本海の一支灣。石狩國の北西端なる雄冬岬と、其の西方後志國積丹半島の北端なる積丹岬との間に抱かれたる大彎入。灣口は北西に向ひて開け、灣底に高島岬の小突出ありて其の南東側に小樽港を擁す。灣の東南岸には本道第一の長流石狩川流入し、その河口に石狩港の小舟地を作り、なほ北より數へて濱益・厚田・金市・古平・美國の小舟地あり。小樽港は北海道に於ける重要開港の一にして內外航路これに集中す。灣內一帶は鮭・鱈等の漁場として名高く、殊に石狩河口の鮭漁は全國に冠たり。石狩灣は一に小樽灣とも呼ばれ歐人はもと(Barrow bay)と稱す。

【石狩追分】 省線札沼線の一驛(昭和六年設置)。北海道石狩國雨龍郡雨龍村にあり。

【石狩金澤】 省線札沼線の一驛(昭和十年設置)。北海道石狩國石狩郡當別村にあり。

【石狩月形】 省線札沼線の一驛(昭和十年設置)。北海道石狩國樺戸郡月形村にあり。

【石狩當別】 省線札沼線の一驛(昭和九年設置)。北海道石狩國石狩郡當別村にあり。

【石狩沼田】 省線留萌本線の一驛(明治四十三年設置)にして札沼線の接續點。北海道石狩國雨龍郡沼田村にあり。

【石狩橋本】 省線札沼線の一驛(昭和六年設置)。北海道石狩國樺戸郡新十津川村にあり。

【石狩太美】 省線札沼線の一驛(昭和九年設置)。北海道石狩國石狩郡當別村にあり。

イシカワ　石川

【石川町】 青森縣陸奧國南津輕郡の南西部。弘前市の南東方に位す。北は柏木町に、南は藏館村・大鰐町に隣り、平川の中流に當る。南部は緩傾斜をなす丘陵地、中部と北部は土地平坦にして農耕に適し米の產あり、丘陵地には林檎多く栽培せらる。國道(舊羽州街道)及び奧羽本線南北に通じ、後者は石川(大正五年設置)、陸奧森山(昭和十年設置)の二驛を置く、また大字八幡館より北方黑石町に至る縣道分岐す。大正十二年町制施行。石川城址は大字大師森にあり、故に一名大師森城址ともいふ。もと南部右馬頭安信の築きたるもの、令弟左衞門尉高信為して居らしむ。元龜二年五月四日南部高信城主の時津輕爲信のために滅ぼされたり。城の東方は平川の水、岸を打ちて流れ、岩石嶮嶮として峙ち、東に高田大岳(一五五一米)、西に岩木山(一六二五米)を望み、北方に堀越城を眼下に見、其右曳膳の地なり。慶長年間、弘前城建築の時は此地より多く伐採の樹木を運べり。大字八幡館に風吹山あり、此處より產する褐灰色粗粒の角礫質凝灰石は安山岩の碎屑片を含み、黑色の玻璃質物は稀少なることあり、質は軟脆なるも、豐饒その他の雜用石材に供せらる。大字乳井に多聞堂あり、近年神道に改祀す。天正の頃、平賀郡(今の中津輕郡弘前市、並に南津輕郡尾上村以南に當る)に乳井龍王寺といふ領主あり、もとは彼の小角の餘流を汲み有數の碩學なり、妻帶して敎代相續し、猿賀山深沙大壓現(同郡猿賀村)の別當職をも兼ぬ。東奧後亂の頃、衆を懷けて自ら領主となり、慈悲忍辱の衣に惡魔降伏の六具を帶びて、其頃の武門と竝肩したるに、時の人、乳井殿と稱せり。此地に往古より一の井泉あり、多聞天の供水といふ、乳白色を呈す、世に之を乳井と名づけ所の名これに因ると。(乳井神社)大字乳井に鎭座。郷社。祭神武甕槌命・經津主命・天手力男命。創立年代未詳なるも、地方の古名社にして、もと多聞堂とも稱す。平賀莊の鎭護神として領主・藩主の敬篤崇く、津輕郡三莊鎭守の一とせらる。(法圓寺)山形町にあり。黃檗宗。寶殿山と號す。元祿五年加藤勘兵衞の開基にして上州黑瀧不動寺南宗元頼開山たり。堂鐘は江戸より運搬の途次海中に落ち五十七年を經て上りし名鐘なるも明治初年取毀さる。

【石川郡】 福島縣十七郡の一。磐城國に屬し縣の東南部に位す。東は石城郡に、南は東白川郡に、西はほゞ阿武隈川によりて西白河・岩瀨の二郡に、北は田村郡に界す。本郡は阿武隈川地の西南部に當り、西境の阿武隈川沿岸に平地(面積約三六七方粁)を見る外概ね高原性の山地にて、原野と潤葉樹林を成す。北境には蓬田嶽(九五二米)峙ち、其西方に吉野時代北畠顯信の守永親王(尊良親王の御子)を奉じて立籠りしといふ雲水峰(六七七米)あり。また東境に十石山(七一八米)・芝山(八一九米)あり。此等の山地に發源せる小流は何れも高原の凹部を求めて西南に向ひ、西白川郡より郡の南部に入る社川に合し、北流して阿武隈川に注ぐ。產業は農を主とし、產物は米・麥・煙草・楮皮・蒟蒻・菜種・繭・大豆・落麥・馬鈴薯・大根等の農產を主とし、木材・木炭の林產の外、馬の飼育行はる。道路は郡のほゞ中央に位する首邑石川町を中心に、御齊所街道は東南に走りて陸前濱街道に合し、石川街道は北に進み岩瀨郡須賀川町に至りて陸奧街道(奧州街道)に合し、また一は西方に通じて西白川郡に出でゝ茨城街道と合一し、白川町方面に至る。省線水郡線郡の西部をほゞ南北に通ず。本郡は古郡名に非ず。往古は白河國に屬し、一部は岩背國に屬せり。白河國廢せらるゝや白河郡に屬し、和名抄の白河郡の條に石川郷とあるは卽ち今の石川町・澤田村及び山橋村等なるべし。建武年中の文書に石川莊と見え、延元四年に至りて始めて郡名見ゆ。之より先き後冷泉天皇の朝前九年の役あり、源賴義勅命を奉じて之を征す。一族福田安藤守有光軍に從ひて戰功あり、乃ち仙道七郡(石川・白河・安達・安積・岩瀨・田村・信夫)の地を賜はり、石川に駐まりて仙道を固め且つ白河關を守る。有光は八幡山に城を築きて石川氏と稱し、子孫連綿として二十五代昭光に至り、昭光豐臣秀吉の命に從はず、伊達氏に隱ひて此地を去る。此間石川氏の勢力時に消長ありて、その領土に變遷ありしも、石川郡は殆んど常に石川氏の領有たり。石川氏の滅後明治維新に至る殆んど三百年間本郡政治上の沿革は紛亂錯綜を極め、明治元年陸奧を割きて五國を置きし後も或は白河民政所の支配となり、或は諸藩の採りとなり廢藩置縣の際には白河縣に屬し、後、福島縣に、また磐前縣に屬し、幾多の變遷を經て明治九年福島縣の管轄に屬し、以て今日に至る。

【石川町】 福島縣磐城國石川郡のほゞ中央部。須賀川町の南東約二〇粁、棚倉町の北東約一六粁。北須賀川東南部を流れ社川と會し西境を北流して阿武隈川に會す省線水郡線の磐城石川驛(昭和九年設置)を置き、また石川街道によりて北方須賀川町御齊所街道によりて東南方陸前濱街道に、他の縣道によりて西方白河町に通ず。明治二十七年町制施行。縣立石川實科高等女學校・石川營林署あり。土地概ね平坦にて原野多く、耕地は川の沿岸に拓く。此地は郡の中心地にして地方物資の集散し、殊に春季は馬市に賑ふ。もと石川郷の地にて泉村といふ。源義家の臣、福田有光この附近を領し、子孫石川氏を稱す。天正十八年石川大和守昭光、豐臣秀吉の命に從はず伊達氏に隱ひて去る。伊達氏の頃伊具郡なる角田石川氏これなり。明治戊辰の役に官軍の參謀板垣退助が兵を入れて此地を守りし事あり。近くは郡役所の所在地なりき。(石都都古和氣神社)小字下泉に鎭座。郷社。祭神、味鋤高日子根命・大名牟遲命・昌陪和氣命。式內社。例祭九月十九日。味鋤高日子根神は此地の草創の神にして、初め大國主命の功業を贊ゝて此地に降臨し、曠野を灌漑し以て皇化を布くと傳へらる。大化元年に藤原鎌足常陸より此國に入り、創を本社に獻進して奸臣を懲はんことを祈る。延暦十年には征討將軍坂上田村麿當社に祈りて東夷追討の功を奏せり、仍りて社殿を改築して神恩に報ず。康平五年、福田(石川)有光初めて石土子山に築城せんとせしに、山上に水の出づる所なきを以て、當社及び石清水八幡の二神に祈りて井を穿つに忽ち清水を得たり。依りて治暦二年に社殿を造營し石清水八幡宮を合祀し、略して石都八幡宮と稱し、當郡の總社となる。(石川城)石都都古和

氣神社の北にあり。康平五年、福田（石川）有光初めて築き、歴代石川氏の居城なりしも、天正十八年に石川大和守昭光の、伊達氏に隨ひて他臺に遷るに及び廢せらる。（石川山）我國に於ける著名の特殊鑛物の產地。母岩はペグマタイトにて、その中に石川石・サマルスキー石・セノタイム・ホナザイト・コルンブ石の如き放射能を有する鑛物を產し、その中、地名を冠せる石川石は殊に放射能が著大なり。木村健二郎博士の發見及び命名にかゝる。別に黑水晶・綠柱石・電氣石・柘榴石なども出づ。

【石川】 陸奥國白河郡の郷（和名抄）。いまの福島縣磐城國石川郡の石川町・澤田村・山橋村に當る。石川氏白河郡石川郷より出づること姓氏錄および尊卑分脈に見ゆ。この地の石川氏は源姓を傳ふ。近世の封侯たりし石川伯耆（本國は參州）も、此地の石川氏の末流と稱ふ。いま古系を詳かにせず。永慶軍記によれば石川氏は浩和源氏、多田滿仲五代の孫、陸奥守義家より出で、鎌倉幕府より奥羽二州の探題として鼓郷を寃行はれ、石川の郡に居し、其後鎌倉末流次第に分る。また伊達勤王事歴によれば、石川氏の祖は大和守鎮親（多田滿仲の次男）の三男、福原三郎頼遠の子、物津源太有光なりと云ひ、石川系圖によれば、有光は初め播州物津に住せしも、康平元年仙道七郡を領して石川郡泉庄に住するに及び石川氏を稱すといふ。泉庄は即ちいまの石川町なり。

【石刑】 ↓内田村（千葉縣）

【石川島】 東京市京橋區大川の河口に横ばる島。もと森島と云ふ。且つて石川八左衛門三代將軍家光を、宇都宮釣天井の難より救ひ、これを守り宇都宮より走り百里に江戸に着きしも、大門堅く鎖され告ぐるも門番怪しみて開かず、八左衛門怒りて門を破る。釣天井の危難を救ひしは功なるも門を破りしは大法を侵すものなり、ただその功は功として賞し、罪は罪として罰すべしとなし秩四百石を與へて石川島へ遠島とす。よりて此島を石川島といひ、又八左衛門島・鎧島等とも稱す。石川氏移轉の後、寛政二年德川幕府獄制の一たる人足寄場（にんそくよせば）と稱する一種の監視執行に類せる拘留場を此島に置き、明治以後には刑場・懲役場・監獄署と改稱存置されしも、明治二十八年巢鴨刑務所の新築成るに及んで廢止となる。現今石川島造船所あり。

【石川】 武藏國にありしといふ牧。延喜式に武藏國石川御牧、年貫馬二十疋とあり。今詳かならざるも、神奈川縣都筑郡山内村（やまうちむら）の大字に石川あり。これ恐らく牧の遺名ならん。

【石川縣】 本州中部地方の西北部を占む。北は能登半島日本海に突出し、東は富山（越中）・岐阜（飛騨）の二縣に接し、南は福井縣（越前）に境し、西方一帶は日本海に臨む。北陸道の加賀・能登二國を含み、金澤市及び江沼・能美・石川・河北（以上加賀國）、羽咋・鹿島・鳳至・珠洲（以上能登國）の一市八郡を管轄し、縣廳を金澤市に置く。縣名は石川郡より起る。面積約四、一九二粁。人口約七十六萬八千。人口密度一方粁に付一八三人。（以上昭和十年國勢調査による）。全國道府縣中、面積は第三十五位、人口は第三十六位、密度第二十六位に位す。（地勢）地形上加賀・能登兩地方に大別され、王朝時代加賀・能登二國が設置されしは此の自然の形狀に支配せられしものなるべし。加賀地方は縣の南半に當り、その東部及南部に亘る一帶は山嶽地帶をなす。即ち東南隅に位する白山火山脈の主峯白山（二七〇二米）を基點とし、西に延びる一支脈は加賀・越前の國境をなし、其ほゞ中央部に大日山（一三六九米）の火山彙を噴起し、北に走る一脈は大門山脈となり東方、飛騨越中との境を北方に連なり、金澤市東方の醫王山（九三九米）に至りて急に高度を減じ、第三紀の丘陵をなし更に北に延びて、能登半島に達す。一般に此の山地は西北方に向ひて徐々に低下し、淺野川・犀川・手取川・梯川・大聖寺川等の諸川その山谷より出で北西流して日本海に朝宗し、海岸に狹長なる加賀平野（石川平野）を構成し、津幡・金澤・小松・大聖寺の諸都邑を發達せし む。海岸は延長實に七〇粁（能登西南岸を合すれば約九五粁）の間南部鳴立黑崎邊に洪積層の小露出ある以外は眞に一直線をなす砂濱つゞき平滑海岸の一標式を呈し、砂丘連なり砂押へに植ふし松林各所に續く。その内側には河北・柴山・今江・木場等數多の潟湖あり、いづれも砂洲の發達に形成されしものなり。地質もほゞ海岸に平行し沖積層、第三紀凝灰岩第三紀水成岩の順次南北の層をなして露ちはれ、東南部には第四紀の噴出岩あり、また山谷の深く刻まれし部分には中世層・片麻岩等も見ゆ。一方、縣の北半をなす能登地方は、日本海岸に於ける最大の半島にして、其の東側中部に彎入する七尾灣により、口能登と奥能登に別る。奥能登は半島の北半に當り、鳳至山脈（能登山脈ともいひ標高二〇〇米内外）より成り、其東北端は珠洲岬にして、地質構造上東方遙に佐渡島に呼應す。又口能登は能登半島南部の稱呼にて、寶達山脈東北より西南に走り、其西北は羽咋・土尾間を斜に走る羽咋地溝帶となりて遙に佐渡の國中地溝帶に相呼應す。邑知潟はその地溝に浸入せし海の名殘を留む。能登半島の地質は主として第三紀層と古期安山岩より成り、基盤をなす片麻岩・花崗岩等も所々に露出す。海岸は加賀に反して出入多く、また崖岸をなす處あり、彎入中最も大なるは七尾灣にて南岸に七尾の良港を擁す。（交通）國道（舊北陸道）は福井縣より縣の西南境牛ノ谷峠を越えて石

川平野を北に進み、津幡にて東方に向ひ碁波山の北方天田越を通じて富山縣に出づ。縣道は津幡より北に向ひ能登の西岸に沿ひて輪島に至り、途中數波にて分岐せる七尾街道は邑知潟地溝帶の東邊を經て七尾に達し、更に半島の東岸を巡りて輪島に至る。その外金澤より起り手取川の谷に沿ひて白山下に至るもの、森下川の谷によりて東方富山縣福光町方面に至るもの（原谷往來）等あり。また北陸本線はほゞ舊北陸道に沿ひ、富山縣に向ひ、津幡驛にて能登半島の七尾を經て輪島に向ふ七尾線を岐つ。更に七尾線羽咋驛より日本海に沿ひて社線能登鐵道や北陸本線に接續する淺野川電氣鐵道（金澤驛前・粟崎遊園間）・金石電氣（中橋・大野港間）・金澤電氣軌道（白菊町・神社前間）・能美電氣鐵道（新寺井・鶴來間）・白山電鐵（小松・鶴川遊泉寺間）・温泉電軌（山中・山代・片山津及び粟津各温泉間）等あり。其ほか尾小屋鐵道（新小松・尾小屋間）・金名鐵道（白山下・神社前）等の社線發達し平坦部に於ける交通は頗る便利なり。海上は七尾・宇出津・輪島・福浦・鵜・金石の指定港あり。七尾は縣下唯一の開港にて北鮮に至る定期航路あり。（氣象）裏日本に位し、粟都・南部に山地を負ひ、西北は日本海に面し、能登半島は高原低く、且つ加賀地方は海に沿ひて平野連なるを以て、冬季は隣接の福井・富山等の諸縣と同じく、直接に西北季節風の影響を蒙り、曇天多く、降水・積雪量また少からず。されど温度は比較的暖く、ほゞ同緯度に位する太平洋岸の茨城・福島二縣と變らず。山岳地帶にある長野縣等より遙に高温なり。夏季はまた以上諸縣に比して晴天多く温度高く日照時數も長く、水稻の育成に適す。されば平地の比較的廣きと共に所謂加賀米の產地たるなり。試みに金澤に於ける氣象要項の一班を示せば、年平均氣温一三・二度（一月平均二・五度、八月平均二五・五度）。降水量二五六六粍、降水日數二二三・四日、降雪日數五六・八日。（產業）農業は縣の主要產業にして、縣民の大多數これに從事し、その生產額は縣下總生產額の二二%を越え、產物は米（百二十四萬石）を大宗とし、石川・河北・羽咋・能美・鹿島・鳳至の諸郡をその主產地とす。これにつぐ

種別	昭和十年	百分比
總額	千圓 四二、〇三一、一二四	一〇〇
米	三四、一二四	八一
麥	四九一	一
食用農產物	一、五七八	四
工藝農產物	四六五	一
園藝農產物	八三六	二
果實	一、九三七	五
蔬菜・花卉等	二、〇三一	五
繭・蠶蛹等	五六五	一
その他		

は、養蠶にて到る處に行はれ繭の產亦多し。林地は鳳至・能美・羽咋の三郡最も多く、木材・木炭を出す。水產は沿岸の諸郡、特に鳳至・河北・珠洲・鹿島の四郡に盛に行はれ、漁獲物に鰯・鯛・鰤・鮪・鮃等あり。製造物に海鮮・竹輪類・肥料・鹽乾等あり。工業は諸產業中に於て其產額第一位を占め、實に縣生產總額の七〇%に達す。兩してその大部分は實に織物、特に絹織物に屬し、輸出向・內地向を合して年產六千二百萬に近く我國

生產物價額 種別	昭和十年	昭和八年	昭和六年
總額	千圓 一八、〇八八	一九、一二四	千圓 一〇七、七二〇
農產	四三、〇三一	三四、四三四	三一、六七三
畜產	一、八四一	一、九一八	一、九八八
林產	五、〇三五	三、九五三	三、四四九
水產	六、五八三	五、七六八	四、〇八一
工產	一三、〇五三	一一、四四〇	七四、八七四
鑛產	三、五四四	一、七七六	一、〇三三
一戶當り	一、三一九圓		
一人當り	二四二圓		

工產額 種別	昭和十年	百分比
總額	千圓 一三一、〇五二	一〇〇
絹織製品	八八、九三八	六八
機械器具	一四、七八一	一一
化學製品	八、九六九	
食料製品	六、七九三	六
雜製品	一一、五六八	九

に於ては福井縣・京都府に次ぎて實に第三位たり。產地に主として土地貧瘠に、空氣中に瓦斯多く、鑛物の好條件を具備せる能美・江沼兩郡、金澤市等にて、特に能美郡小松町はその中心をなす。陶器も古くより縣の名產にて鳳至郡・江沼郡・金澤市を主產地とし、特に輪島塗・金澤蒔繪・山中漆器の名は世に聞ゆ。陶磁器には有名な九谷燒を初め硬質陶器も少なからず、小松・金澤・大聖寺・山代等をその主產地とす。（沿革）慶長以後加賀・能登・越中の三國は前田氏の所領にして、富山（越中國婦負郡及上新川郡の一部）・大聖寺（加賀國江沼郡及能美郡の一部）は其支藩なり。且つ能登國には德川幕府の領地及旗本土方氏の所領其間に點在せり。明治四十年廢藩置縣の際、金澤藩・大聖寺藩・富山藩を其舊所領に從ひて各々縣を置きしも、同年十一月に至り加賀一國を金澤縣とし、能登一國及越中國射水郡を合して七尾縣、射水郡を除きたる越中國全部をもつて新川縣を置く。同五年二月金澤縣を石川縣と改め次いで同年九月には七尾縣を廢して、能登を石川縣に合併す。此際越中國射水郡は新川縣に移管され新川縣は越中一國を管す。同九年四月新川縣を廢するに及び加賀・能登・越中三國は石川縣の所管となりしも、同年八月更に越前國敦賀郡を除く七郡をも石川縣に編入す。後同十四年三月福井縣の置かれし時、先に石川縣に編入せし越前の七郡が其の管下に移す。同十六年五月

に亟り越中一國を石川縣より割きて富山縣を置くに及び、茲に石川縣は加賀・能登二國を管する今日の狀態となれり。尙ほ能登國に於ける舊藩領及旗本土方氏所領は明治三年十月富山縣の所轄に屬し、明治四年十一月七尾縣の所管に歸す。大正十五年郡制廢止となり、支廳を能登の飯田町に置きしも、これを廢し以て今日に至る。

【石川郡】 石川縣八郡の一。加賀國の一部にて、縣の南部に位し、土地、西北より東南に延び、北は金澤市及び淺野川によりて河北郡に、東は白山火山彙及びその北方につゞく大門山脈によりて富山縣西礪波・東礪波・岐阜縣飛騨國大野郡に、南は手取川とその上支尾川の谷によりて能美郡に界し、西北は日本海に面す。面積約五五〇方粁。東南部は主として大門山脈に屬する山地延び殆ど郡の三分の二の地域を占め、東端に笈ヶ岳（一八四一米）・大笠山（一八二二米）・大門山（一五七二米）等の高嶽連なり、之より山支多く西方及び西北方に延びて、未踏の地多く、尾添川・二又川等その山支間の谷を西北流す。西北部の金澤の南、手取川下流の中部に當る邊は所謂石川（加賀）平野の地をなす。舊北陸道（今は國道）平野の中央を通じ、松任・野々市を經て金澤市に至り河北郡に入る。又越前勝山街道は金澤市より南に走り野々市・松任より下れる縣道と鶴來町にて合し、ほゞ手取川に沿ひて南走し能美郡を經て福井縣大野郡勝山町に至る。省線北陸本線も平野の中央を斜に西南より東北に走り、美川・松任・野々市を經て金澤市に至り富山方面に通ず。農產は米を主とし麥・大豆・小豆・繭を產す。又工產は絹織物を第一とし木製品・藁製品等を出す。本郡は弘仁十四年加賀郡の八郷一驛を割きて置きたるものにて、日本紀略所引日本後紀・弘仁十四年六月の條に「加賀國、加賀郡管二郷十六驛四、割二八郷一驛、更建二一郡、號二石川郡」と見ゆ。延喜式にも郡名見え、和名抄は伊之加波と訓じ中村・富樫・菟部・三馬・拜師・井手・笠間・味智の八郷を管し、弘仁十四年紀の一驛とは比樂驛なるべし。中古加賀郡大桑・大野・玉戈の三郷の地を併せ、私かに拜師・中奥・中村・山島・笠間・富樫・湯涌・金浦・米丸・戸板の十郷及び河内・蝶屋・犀川・石浦・五箇・押野・横江・鞍月・大野の九莊となる。天正八年織田信長此地を徇へ、本郡と加賀郡か前田利家に與へ、のち宮腰・松任・本吉は町奉行の所管となり、諸村は山島・林・河内・中奥・富樫・米丸・戸板・鞍月の八組に分かる。今五町二十八箇村を含む。

【石川村】 石川縣加賀國石川郡の北西部。手取川口にある美川町の東に隣り、南は手取川下流北岸にある能美郡川北村に接す。北部に大慶寺川水西北流し、土地平坦にして田畑よく拓け米の產多し。北陸道は南北に貫き、石川郡美川町と鶴來町とを結ぶ道路と南部に於て交はり、また省線北陸本線加賀笠間驛（笠間村）に近く交通至便なり。本村は昭和九年比樂島村と廢留村を合して置けるもの。比樂島は延喜式に加賀國比樂、驛馬五疋とある古驛の遺稱にて、蓋し古驛も此邊にありしものならん。三代實錄・貞觀十一年二月の條に「詔二加賀國一、比樂河置二牢籠渡子二十五人一」と見え、比樂河とは手取川の古名にて、昔時は今の大慶寺川水が其河道なりしといふ。卽ち手取川は今の山島村より石川村を經て海に注ぎしものゝ如く比樂島は河名によりて名づけしものならん。比樂湊は比樂河の河口にありて能美・石川の二郡の界たりしなり。三代實錄・貞觀十三年十二月の條に「渤海國入覲使楊成規等百五人着二加賀國岸一」とあり、此着岸の津も比樂湊なるべしといふ。

【石川村】 京都府丹後國與謝郡の中部。東南部は宮津町に接し、東北部は宮津との間に吉津村を隔す。東半は山地なるも西半は山田・市場・三河内等の諸村に連る平坦地にて水田多し。主產物は米、外に織物及び清酒の產あり。西隣の山田村及び、宮津線丹後山田驛、加悅鐵道の水戸谷驛また縣道にも近く交通不便ならず。古くは和名抄、物部郷の内、いま延喜式物部神社及び同式矢田部神社あり。また三家物語には天正の頃明智光秀の產國にて河北石見なる者手兵二三百を率ゐて、丹後國を從へんとして來り、先づ與佐郡石川谷に打入り係桑二三箇所陷入れしも國侍强く諸所にの合戰に敗々に打敗られ丹波に逃げ歸りしといふ。矢田部神社〔大字石川に鎭座。村社。祭神伊香我色男神。延喜の制小社に列す。例祭十月十八日。〔物部神社〕大字石川に鎭座。村社延喜の制小社に列す。例祭九月九日。

【石川（郡）】 河内國の古郡名。往昔紺口縣の一部。紺口は又感玖にも作る。金剛山及葛城山脈より發する東條・西條二川此地に會して石川と稱するより、郡名起る。蘇我氏の祖石川宿禰の居りし所。のち西部を錦部郡に割きしも其期は詳かならず。和名抄は以之加波と訓じ佐備・紺口・新居・大國の四郷を置く。一說には四郷の外に石川・磯長の二郷がありしものといふ。のち錦部郡と混同して本郡を東條郡と稱せしことあり。中世源義家の孫義兼本郡を領し子孫石川氏を稱す。本郡は大忠臣楠木氏の郷貫にて、吉野時代に著はれたる金剛山千破窟城を始め赤坂城・水分神社・南祇座等の史蹟に富む。明治二十九年廢して南河内郡の一部となれり。本郡は東南は大和國舊葛下・忍海・葛上・宇智の四郡、西南は舊錦部郡、西北は舊丹南郡、北は舊安宿郡・古市の二郡接し、その地は今の南河内郡富田林町及び新堂・喜志・大伴・石川・磯長・山田・白木・河内・中・赤阪・千早・東條の十

二村に當る。

【石川村】 大阪府河内國南河內郡の中部。富田林町の東方に位し、その間南北に大伴・新堂二村を挾む。東部は葛城山脈西麓の山地につゞき、丘陵をなし林地多きも西半は北流して大和川に合する石川の流域にて、地平かに水田拓く。主產物は農產及び工產。西は富田林町に近く、東北は竹ノ内街道に達からず交通は不便ならず。この地古くは和名抄の石川郡の内なるも何れの郷に當るかいま詳かならず。明治二十七年、大ヶ塚・東山・山城・一須賀の舊四箇村を合併す。蓋し村名は此地を流るゝ石川に因む。大字大ヶ塚に延喜式の降幡神社あり、大伴氏の祖天押日命を祭る（名所圖會）。大字一須賀に式內壹須賀神社あり。いま其址は不詳なるも往昔石川城あり、淸和元年源義基こゝに據りて源頼朝に應ず、のち壽永三年源行家は此處に據りしも源義仲の碁樹口彙光に攻められて走る。〔大念寺〕大字大ヶ塚にあり。融通念佛宗。浴室不詳。寺寶の木造十一面觀音像は藤原時代初期の作にして、丈高く形態整美、技巧優秀を極む。〔得生寺〕大字山城にあり。淨土宗。本尊阿彌陀座像（木造）は大佛と稱し、定印の彌陀なり。鎌倉時代の作にして國寶。

【石川】 大阪府南河內郡にある川。金剛山脈の藏王嶺に發する西條川と同山脈の金剛山に發する東條川が石川村にて合し石川となり、北流して駒ヶ谷村・古市町を經て道明寺村にて大和川に注ぐ。流程約二八粁。また惠我川・博田川ともいふ。仁德紀に「堀二大溝於感玖一、乃引二石河水一、而潤二上鈴鹿・下鈴鹿・上豐浦・下豐浦四處郊原一、以樂之得二四萬餘頃之田一」とある石河水は此川を指せるものなるべし。新千載「石川やはなたのおびのとけやらてあふせにもなほぬるる袖かな國冬」

【石川】 大和國高市郡の地名。今の奈良縣高市郡畝傍町大字石川はその遺稱。三代實錄に蘇我氏の祖石川宿禰が河內國石川郡より大和國に移りしこと見ゆるも、そは此地にして石川の名もそれより起りしものならん。蘇我氏の自宅に營みし我國最初の佛寺石川精舍の故址今は淨土宗本明寺となる。また孝元天皇の劍池島上陵及び式內大歲神社存す。〔石川精舍〕我國最初の佛寺。敏達天皇十三年、大臣蘇我馬子が石川の自宅を佛寺となし、百濟より貢獻せる彌勒菩薩の石像を安置せしに始まる。今は廢寺となりしも舊地に淨土宗本明寺建立され、寺內に馬子塚と稱する高さ丈餘の五輪塔あり。なほ日本書紀敏達天皇の條に依れば、馬子はこの精舍成るや、司馬達等、池邊直永田等を四方に派遣して、佛法修行の者を索れしめ、播磨に還俗僧惠便を得、之をして招き事に當らしむ。司馬達等の女島は惠便に就きて出家し名を善信尼と改む、これ我國に於ける女人出家の嚆矢なりといふ。次で漢人夜菩の女豐、錦織壺の女石等は共に善信尼について出家し豐は禪藏尼、石は惠善尼と名を改む。聖平馬子は塔を大野丘の北に築き司馬達等所持の舍利を納む。當時惡疫流行し、勢ひ猖獗を極めたるため、物部守屋・中臣勝海等奏請して佛法を禁斷し、精舍等は悉く燒き拂はる。〔劍池島上陵〕孝元天皇の山陵。大字石川字劍池ノ上にあり。池畔の丘の上に設けられし前方後圓墳。卽位の五十七年九月二日崩御。開化天皇の五年二月六日奉葬。古事記は陵所を、劍池之中岡上」と記し、書紀・延喜諸陵式は陵名を、劍池島上陵」といひ、式は堺城東西二町、南北一町、守戶五烟とし、這陵に列す。中世陵所を失ふに至りしも元祿の檢討以來、その所在の推定を誤まらず、元治元年修補しその雄工に當り慶應元年三月十一日、巡檢使廣橋右衞門督を遣はして奉幣せしめらる。〔大歲神社〕大字石川に鎭座。村社。祭神大歲神・大山咋命。式內社。例祭九月八日。大歲神は素戔嗚尊の御子にして御母は大山津見神の女、穀物の守護神なり。

イシカワ　石河村　大阪府攝津國三島郡の北部。茨木町を距る北方約七粁、丹波高原の南緣部に當り、神崎川・茨木川の上游に挾まれし山村。林野多く耕地少し。主產物は工產を第一とし農產之に次ぎ特產物に寒天あり。古くは和名抄の鳥下郡安威郷に屬せるものゝ如し。大字桑原の地は日本書紀に三島縣主飯粒・上桑原・下桑原の地を安閑天皇に獻納せりといふ。上桑原・下桑原に當るものなるべし。眞言宗の大門寺あり、舊名を青龍寺といひ文祿四年豐臣秀次の將木村常陸介重茲この寺にて自刃し、いま其墓を存す。

イシカワノオートモ　石川大伴　日本書紀に見ゆる村名。敏達天皇紀の十二年百濟より召されたる日羅が、他原等の手に殺害せられし時、その眷屬等變を生ずることを恐れ、日羅の妻子を石川の百濟村に置き其の水手等を此處に置けり。今大阪府南河內郡の大伴村を以て其の地とす。

イシカワノクダラ　石川百濟　敏達天皇十二年に百濟の軍因日羅の妻子を置きし地。和名抄「錦部郡百濟村」今の大阪府南河內郡被方村・長野町・千代田村等の地に當るか。書紀敏達紀・十二年「於是大伴糠手子連議曰、聚二居一處、恐生二其變一、乃以二妻子一居二于石川百濟村一、水手等居二于石川大伴村一」

イシキ　一色

【一色村】 岐阜縣美濃國本巢郡の南部。岐阜市の西北約八粁、根尾谷の南口山添村の南に當り、席田村の西、土貴野村の北、揖斐郡富秋村・大野町の東に隣る。糸貫川（根尾川）その東境を、分流藍川その西界を南流し、西濃平野の北部にて土地平坦全村田園よく拓け、米・麥を產

す。交通は名古屋鐵道揖斐線（電車）の美濃北方（廓田村）・黒野（大野町）等の諸驛に出づるを便とす。本村は和名抄の本巣郡美濃郷の地なり。一色は美濃郡の小字なりしも後村名となりしもの。大字見延は王朝郡家のありし地ともいはる。また美濃國造の治所たりし地ともいはる。〔白山神社〕大字屋敷に鎮座。郷社。祭神伊弉冉命・伊弉諾命・菊理媛命。嘉吉年中の勧請と傳ふ。永正二年・慶長十六年社殿造營のことあり。又附近七箇村の產土神として村民の崇敬篤し。〔長屋神社〕大字長屋に鎮座。郷社。祭神楊名田比賣神・建速須佐男神・須賀八耳之神。創立年代不詳。天文年間相羽城主長屋大勝亮景興の造營といふ。もと牛頭天王社と稱す。近郷の產土神として崇めらる。

【一色】 ↓一色（愛知縣）

イシキ　伊敷村　鹿兒島縣薩摩國鹿兒島郡の中部。東南は鹿兒島市に、西と北は日置郡に接す。甲突川中央を東南流して鹿兒島市に入る。北部に火山三重岳（四八七米）聳え、山地をなすもその他は概ね丘陵起伏し其間處々に耕地發達す、畜產業盛んに行はれ、また米・麥・薯を產す。鹿兒島街道甲突川に沿ひて走り、鹿兒島市と西隣の伊集院町とを運絡し、電車軌道鹿兒島市より村の南部聯隊前迄通ず。歩兵第三十六旅團司令部・歩兵第四十五聯隊兵營の所在地。甲突川上流の紫閣に無色透明單純泉の河底溫泉あり。また大字小山田より產する黑色玻璃質の安山岩は黑色石基に白色の長石斑晶を存し、俗に黑みかげと呼ばる。垂仁天皇の第二皇子印色入日子命諸國を巡遊して池溝を掘らしめ、農事に御心を盡し、偶〻此地に來りて懇稼を勸め給ふ。里民其恩德に感じて命を祀り伊邇色神社といふ。菱し村名伊敷の名はこれに因む。〔伊邇色神社〕大字下伊敷ノ内に鎮座。縣社。祭神伊邇色入彦命。創建年代詳かならざるも、三代實錄・貞觀二年三月の條に「薩摩國……正六位上伊爾色神從五位下」と見ゆ。古くは年之宮、年之神と稱せり。年は祝詞にて稲穀の能く稔るないふより見れば、伊邇色入彦命の故事に依れるものならん。古來領主地頭の崇敬せる社として聞ゆ。例祭四月二十八日。〔桂庵禪師舊址〕南海朱子學派師弟桂庵玄樹の祖たる桂庵禪師が晩年住したる東歸庵の舊址にて、墓を存し佐藤一齋撰文の碑銘あり。今その墓は指定史蹟たり。桂庵は山口の人にて、應仁元年明に渡り、朱子學を學びて文明五年歸朝す。同十年島津忠昌、桂樹院を建てゝ居らしむ。のち諸所に轉住せしも晩年この地に隱棲し、永正五年殁す、齡八十二。

イシキリ　石切峠　奈良市外春日山の奥、添上郡田原村に通ずる峠。石窟あり。窟内の壁面に佛・菩薩・天部等を半肉彫にて表はし、保元二年大歲丁丑二月二十七日佛造、開眼四月二十一日の銘刻あり。故に俗に石切峠の穴佛と稱す。

イシキリドコロ　石切所村　岩手縣陸奥國二戸郡の北部。一戸町の北西方約六粁、福岡町の南西に隣る。馬淵川中部を東北に曲流す。地勢概ね山地、中央北部に桑畑拓く。舊奥州（陸羽）街道、省線東北本線共にほゞ馬淵川筋に沿ひ、後者に北福岡驛（明治二十四年設置）を設く。米・麥・豆類・繭を產す。村内に馬淵川電氣大淵發電所あり。此地は名の如く石工多く住みて古くより石臼を產す。鄙地の三十三番の札所なる朝日觀音堂も岩屋内にあり、この附近は熊住窪穴を以て知らる。南隣の浜打村との境に、末の松山、通稱は浜打峠（三〇二米）といふ坂路あり。その檢路阻道に臨める岩層中に海產動物貝介類の化石を多く含有す。即ち第三紀層の砂岩露出し、岩壁に波濤の痕跡を存す。

イシクラ　石倉・石富

【石倉】 北海道渡島國茅部郡森町の大字。省線函館本線の石倉驛（明治三十六年設置）あり。

【石倉岳・石富岳】 青森縣の南東部、八甲田火山群八峯の一。青森縣東津輕・上北二郡に跨る。標高一二〇五米。巡八甲田山。

【石倉】 ↓桃野村（群馬縣）

イシクラ　石廩村　山梨縣甲斐國東八代郡の東北部。地形西北より東南に細長く笹子峠の西部に位す。本村と東南隣黑駒村との境上に京戸山（一四三九米）聳え、村内概ね山地にして山林多く、西北部に僅かに耕地拓け、繭・桑を產す。また土木用材・建築用材として知らるゝ所謂甲州みかげを多產す。本村は和名抄、山梨郡能呂郷の內なるべく、近世の大石和筋の內なり。いま西隣の御代咲村と組合町村をなし、役場を御代咲村に置く。〔地蔵寺〕大字地蔵堂にあり。臨濟宗妙心寺派。法光山と號す。曾て里人に美女ありて尾興大臣に寵し、守屋大臣を生む。推古帝の時、守屋の追福の爲め地蔵三軀を造らしめ、その一軀を當地に建つ。即ち是なりと。

イシクレ　石榑村　三重縣伊勢國員弗郡の西南隅。南は三重郡、西は鈴鹿山脈を以て滋賀縣愛知郡東小椋村に界す。縣境に龍ヶ岳（一一〇〇米）峙ち、地形は西に高く東に向ひて次第に低下して林野をなし村の東半は所謂伊勢平野の一部にして耕地多し。主產物は米・麥・菜種・繭。特產物は茶。石村・木村・椎茸。巡見街道東部を南北に通じ、南は瀧野を經て四日市方面に、北は阿下喜方面に至る。もと石榑と稱せしを和名抄、石加郷に當るとなし、明治二十二年村制施行の際、これを北石加・南石加の二村とせしも明治三十九年また二村を合併して舊名に復す。願光寺〔大字石榑南にあり。武宗本願寺派。長崎四郎照光の開基。初め禪宗を奉ぜしも、正嘉年間本宗に改む。もと末寺二十餘伽藍を有ぜり。

イシグロ　石黑

【石黑村】 新潟縣越後國刈羽郡の南部。南と西は東頸城郡に境す。東隣高柳町の境上に鮮ノ黑嶽山の南斜面を占め、藍石川の水源をなす。高柳村大字門出より西隣鵜村に通ずる間道は村の中部を過ぎ、また北接の鵜川村に至るものは境上の地藏峠（六四〇米）を越ゆ。地概ね村の中央に向ひて傾斜し林野をなすも、その谷谷には田畑拓け、米の外に大豆・小豆・繭の產あり。また季節的の出稼が行はれ村の收入の重要な一部をなす。村の西南隅に蛇岩と稱する岩石（高さ五七二米の側所にあり）あり。遙に望めば黑色に輝く。往昔江戸等へ出稼するもの往復毎に碓氷峠にて此の黑色に輝く蛇岩を眺見して故郷を懷しみ、遂に村の名を石黑と呼ぶに至れりと傳ふ。城山と稱する小丘あり、頂上を御殿と稱す。戰國の頃烽火臺のありし處といふ。

【石黑村】 富山縣越中國西礪波郡の中部。編光町の西に接し、西は大門山脈の北部につゞく丘陵性山脈の東側に當る。東半は富山平野の西部南部に當り、耕地よく拓け、米の產多し。また賣藥の製造行はる。編光町より金澤市に至る高宜街道は村の北部東南より西北に通ず、本村は和名抄、礪波郡川上郷の內にして、平安時代は石栗庄とも稱せられしもの、如く、東大寺要錄・長德四年注文「越中國礪波郡埴城庄・石栗庄・桜田庄・井山庄」と見ゆ。此地は藤原北家、齋藤氏の族、石黑氏の居處にして、源平盛衰記に見ゆる有名な石黑太郎光弘は即ち是なり。天文の頃に石黑藤兵衛、天正年間に石黑右近等出づ。石黑郷は後分裂して編光・吉江・東石黑・石黑の四と爲る。〔光德寺〕大字法林寺にあり。眞宗大谷派。瑞雲山と號す。蓮如上人北陸巡錫の砌郷士高坂治部尉法弟となりて道乘坊と稱し、河北郡井上家の庄砂子坂に一宇を草創し、のち現地に移りしもの。

イシゲ　石下町　茨城縣下總國結城郡の東南部。北部の下妻町（眞壁郡）と南部の水海道町との中間に位す。鬼怒川の東岸にて地低平耕地よく拓け米・麥・繭を產す。社線常總鐵道は町の西部を縱貫す。鐵道と鬼怒川の水運とを兼有する一市邑にて、常總鐵道の石下驛（大正二年設置）・南石下驛（昭和六年設置）を設き、また下妻町・水海道町へ馬道通ず。此地は天正年中に石毛次郎政重の領地にて、地名も之に因るか。古書には石毛に作る。石毛氏は桓武平氏・大掾氏族にて豐田郡石毛より出づと姓氏家系に見ゆ。豐田郡は明治二十九年今の結城郡に併合す。常陸大掾系圖に紫偉・政幹（石毛荒四郎）とあり、政重は政幹の末なり。日本名勝志によれば、石下八幡宮は、豐田政幹牙城の址にて、殘壘遺址を存し、壘高さ二米許りに及び、二の丸の遺址は其東南にあり、今は既に耕地となり、墻圍に一古井を存す、政幹の始めて此城を築きしより、子孫相繼ぎて之に居りしも、元亀元年第十九世四郎政高の時に至り、其臣飯富大膳、謀に多賀谷政經に通じて之を刺す、是に於いて政經の叔父經明代りて此に居る。後天正十三年、其子經光叛心あり、重經即ち之を殺し城塞に廢す。惟ふに本社は當時城中に鎮守として拜祀せしものなるべしと。曹洞宗廣正寺は政重の墓所にて、永正年中に政重の建立するところ。近世は寺領三十石を有したり。大字大房に眞宗東弘寺あり、圓東二十四輩巡詣記には、石下・大方村に東流東弘寺あり。文永年中、領主豐田治親の子周親、親鸞上人に伴從し、剃髮入道して善性といひ、此寺を建立すと傳ふ。即ち二十四輩の一弟子とす。〔興正寺〕大字本石下にあり。曹洞宗。石毛山と號す。明德四年の開創に係り、慈均和尚を開基とし、開山は能山奎藝和尚。末寺六箇寺を有す。〔西福寺〕大字本石下にあり。淨土宗。雲廣山と號す。寛永九年絲山十七世了學上人の開創にして、開基は名主山口孫兵衛。慶安元年德川家光寺領十石の朱印を賜ふ。本尊阿彌陀如來。

イシコシ　石越村　宮城縣陸前國登米郡の西北部。石森町の西北に接す。西は栗原郡若柳町に、北は岩手縣西磐井郡に界す。南は迫川、北と東はその支流夏川に依りて圍まれ、中央部に丘陵東西に連なるも四圍は平坦なる沃野にて米を多產し、所謂本石米として著名なり。其他繭・麥の產も亦多し。本吉街道東南石森町より西北若柳町に通ず。東北本線西部を南北に走り、石越驛（明治二十三年設置）を設き、栗原軌道これに接續す。此地は和名抄、新田郡具沼郷の內なるも、中世は葛西氏の領邑となり、栗原郡高倉庄に屬せるものゝ如し。〔遠流志別石神社〕大字石越に鎮座。郷社。祭神倭建命。祭神に就きては一說に、陸奥蝦夷邑良志別君の祖神を祀るといふ。又もと建部大明神とも稱す。創立年代を詳にせざるも延喜式內の古社にて、爾來郷民の崇敬篤し。保田氏新風土記に「式內遠流志別石神、三迫石越村……古來大石小石二つ有る故に大石小石村といふと、後石越村と改む。此石即其神也」とあり。例祭陰曆四月九日・十月九日。

イシサカ　石坂櫚　奥州の俘囚安倍氏の據りし處。其址は今詳ならざるも凡そ岩手縣西磐井郡山目村大字赤荻の邊りなるべし。一關町の西南にして磐井川の左岸に位す。康平五年九月源頼義官軍を率ゐて磐井川を渡り之を攻め、貞任敗れて衣川に郡く。

イシザキ　石崎

【石崎村】 茨城縣常陸國東茨城郡の東南部。水戸市の南方約一〇粁、南は涸沼に臨み、沼の南方鹿島郡大谷・沼宿三村に對す。地勢平坦なるも概ね林野をなし、

潟沼沿岸に耕地拓け米・麥の他に野菊(ふぢぎく)麥の產出多し。西隣長岡村に出づれば國道(陸前濱街道)南北に通じ水戸市方面へ至るべし。また製板工場・製綿工場あり。此地は中世には石崎保といひ、また石前にも作る。古來上中下の三區に分る、今の大字なる上石崎・中石崎・下石崎は其遺稱なり。此地は漁人の所領なりしか詳かならず。村の西南部、潟沼川の潟沼に注ぐあたりに、ひとつ松と呼ばるゝ一老松あり「子を思ふ涙ひめまのひとつ松なみに捲られていく世經ぬらむ」とは水戸黃門の此地に詠める歌なりと傳ふ。近時、新興農場なるものを企畫す。政府の協贊の下に獨立農家を經營し、農作物は勿論、荒野の開墾・拂水・伐採等をもなし、全村を一大沃土たらしめんことを期す。

【石崎村】 石川縣能登國鹿島郡の北部。七尾町の西北約四粁、東北は七尾灣の南灣と西灣に臨み、中央に石崎突出し屏風瀨戸を挾みて能登島に對す。七尾町及び西隣和倉町和倉温泉に縣道通じ、省線七尾線の和倉驛(大正十四年十二月設置)を置く。農產物は米・繭を主とし、また水產物も多し。本村は中世の鳥原保の內にして、明治二十二年町村制施行の際、石崎を以て一村を組織す。

イシザワ 石澤(いしざは)

【石澤村】 秋田縣羽後國由利郡の中部。本莊町の東南方約一〇粁、子吉川の支流石澤川の下流に跨る地。本莊街道は川に沿ひて東方横手方面に通ず。北境に日住山(六〇二米)・鬼倉山(六〇一米)、南界に繪葉山(三一〇米)ありて地高く、いづれも村の中部に向ひて下り、川に沿ひて水田・耕地拓け、米・繭を產す。此地は戰國の頃由利十二騎の一なる石澤氏の領有にして、大字館に石澤館址を遺す。

【石澤川】 秋田縣の西南部を流るゝ川。本莊町にて日本海に入る子吉川の一支流。上源を仙道川といひ雄勝郡の西南部、仙道村の南境なる蛯井戸山(九二七米)の北側に發源し、北流して田代川といひ由利郡下郷村にて西北に折れ高瀨川とよばれ石澤村に入りて石澤村の名を得、石澤・鮎川・小友三村境の邊に於て子吉川に合す。流程凡そ五〇粁。流域は出羽丘陵の一山谷にして、狹長なる河谷平地には水田拓けて米の產多し。

イシジ 石地町(いしぢ)

新潟縣越後國刈羽郡の北端。北は三島郡出雲崎町に、南は高濱町に接し、西北一帶は日本海に面し海上約五〇粁の北方に遙かに佐渡島を望む。概ね丘陵地にして林野をなすも所々に谷地ありて其中に田畑拓け米・繭の產多く、漁業も盛に行はる。西山石油山・尼瀨石油山の鑛區に屬す。海岸に沿ひて北陸道(今は國道)走る。往昔その一驛として發達せし所なるも、今は省線越後線より外れしため、やゝ衰退せしも町民の一致結束農產に努めし結果、近來また町勢の復興を期待せらる。越後線の石地驛(大正元年設置)は隣村の內郷村にあり。この地は知名抄、越後國三島郡多岐郷の內なるべく、天正十二年藤田能登守の佐渡を攻むる時、海上波靜まるを待ちし處。また明治戊辰五月、官軍が海路に入り、一旦出雲崎に退きし東軍が海路の回復を謀りてまた椎谷・宮川驛(共に今の高濱町)に進出せるを討ち、椎谷・石地を取り途に出雲崎に進みし處なり。本町の明治天皇石地行在所は史蹟として指定さる。町名は上古天香語山命御弟可美眞手命と共に物部を率ゐて紀伊より海を航し越に來り大礎の岩を賞し「堅石橋きの岩地」と稱し給ひしより岩地の稱起り、中古以降石地と書くに至れるものといふ。(懸橋寺)新義眞言宗豐山派、開基不詳。本尊な岩石の地藏と稱し、越後四十八地藏の一。寺は濱に臨み、海中に懸橋百間岩の勝あり、傍に鳥石尊なる天然石な祀る一祠あり。腰下の疾病に靈驗顯著なりと。(形藏院)新義眞言宗豐山派。獄照山と號す。文久三年同縣に寄り古記錄等悉く烏有に歸せり。本尊は延命地藏菩薩。

イシシマ 石島(いしじま)**→久下田町**(くげたまち)(栃木縣)

イシズ 石津(いしづ)

【石津】 武藏國多摩郡にありし郷。和名抄は伊之豆と訓す。其地今詳かならざるも東京府南多摩郡日野町の大字に石田あり、石津の轉摩か。ともあれ恐らくは日野町忠生村の邊がその郷域なりしものなるべし。

【石津村】 新潟縣越後國古志郡の西南部。長岡市の西南方約八粁。信濃川に沿ひ、六日市村の西に接す。信濃川の砂洲上に發達せる部落にて、耕地よく拓け、米・繭を產す。省線魚沼線の片貝驛(三島郡片貝村)、省線上越線の越後濱谷驛(六日市村)へ近し。

【石津(郡)】 美濃國の古郡名。齊衡二年紀「分ニ美濃國多藝武義兩郡一、爲ニ多藝・石津・武義・郡上四郡一」と見え、齊衡二年多藝郡を分て本郡を置きしもの、されば延喜民部省式に既に郡名見え、和名抄は伊之郡と訓じ、櫻樹・山崎・大庭・建部の四郷を管し、のち櫻樹・大庭の二郷は多藝郡に入りしも、多藝郡の物部・垂穗・立野・佐伯の地を併せ地域前よりも廣くなれり。明治維新の初めに上石津・下石津の二郡に分ち(多良谷を下津郡となす)、明治二十九年下石津は海西郡と共に石津郡を建て、上石津郡は奠老郡に合併し遂に郡名を失ふ。

【石津村】 岐阜縣美濃國海津郡の南端。揖斐川の右岸に沿ひ、川を隔てゝ西江村に對し、西南二方は三重縣伊勢國桑名・員弁の二郡に接す。奠老山脈南部東側の地にて西半は山地なるも東半は濃尾平野の西南部に當り田畑拓け米・柑橘(ゞ柑)・繭の產多し。桑名市より北方高須町を經て大垣方面に至る縣道東部を南北に走り、社線參宮急行電鐵また南北に貫き

石津(大正八年設置)・美濃松山(昭和四年設置)の二驛を置く。揖斐川は本村の太田以南にて遠勢緩漫となり、大江狀をなし太田川といふ。太田より桑名郡多度村大字香取に一條の川跡あり、蓮し揖斐川の分派せしものなるべし。或はもと本流なりしも近世東に轉じたるものなりともいふ。本村は和名抄、石津郡櫻樹郷の地なるべく乱石津郡の遺稱とす。近世太田・吉田・田鶴・松山境の諸村を合併して石津村を置きしもの。兩して石津は石多き舟着場の意にて往古は伊勢海深く彎入して此邊に及べりといふ。大字太田は元龜二年五月織田信長が長島の一向一揆を討たんと柴田勝家・市橋九郎左衛門・氏家常陸介(卜全)・飯沼勘平等を從へ、其勢二萬餘騎。一方長島一揆へは長島附近の海賊五六十艘が早船を推し立てゝ之を援け、太田村附近の一揆も之に應じて蜂起し、勝家・常陸介な苦しめ卜全は遂に此地に討死す。太田の北、近江に卜全塚と稱する寶篋印塔ありて貞治五年如月一結衆敬白の文字あり、貞治五年は元龜二年より二百十餘年の昔なればこの印塔は卜全とは關係なきことな知るべし。また本村圓城寺境內に、寶暦治水薩摩義士十三靈合葬の墓あり。(太田城址)太田の中島の山にあり。慶長年間原隱岐守長頼三萬石な領し、長島の福島掃部頭に對して此處に居城し、關ヶ原役に西軍に應じて滅ぶ。(移生神社)大字太田に鎭座。祭神須佐之男命。外數神創立年代不詳なるも建久年間河戸七郎の造營と傳ふ。地方の古社たり。

【石津】 和泉國大鳥郡の郷。和名抄は良之津と訓す。今の石津川下流の邊、卽ち大阪府泉北郡神石村大字上石津より濱寺町大字下石津に亙る邊ないふ。卽ち東は百舌鳥野にして海濱は堺浦と高石濱に續き、石津川此處にて海に入る。また石津原は石津川流域一帶の汎稱にして仁德、履中・反正三帝陵のある百舌鳥野も亦これに包括されしものゝ如し。延元三年五月北畠顯家高師直と阿部野に戰ひ軍敗れて此地に戰死す。

【石津川】 大阪府泉北郡にある川。水源は南上神村の鉢ヶ峯の山間。上流な鉢ヶ峯川といひ、妙見川な合せ上神谷川(かみたにがは)といひ北西流して、陶器・和田川な合して草部川とも稱し濱寺町に至り海に入る。流程約一六粁。

イシズカ 石塚町(いしづかまち)

茨城縣常陸國東茨城郡の北部。水戸市の北西約一五粁。東は那珂川な隔てゝ那珂郡戸田村に對す。地概ね平坦、西半は林野廣く東半には水田拓く。社線茨城鐵道の石塚・那珂西(共に大正十五年設置)の二驛な置き、水戸市・下中妻村・西茨城郡笠間町・那珂郡野口村・太田町方面へ縣道各〻通ず。米・麥な產し、製材所・綿業工場等あり。大正八年町制な施行す。此地は古く奥州街道と野州鐵道との交叉點に位置して、もと石上(いしかみ)郷の內なり。天文年中には佐竹義篤この地な領し、初めて石塚氏な稱し、後宗義に至りて此處に城な築く。天正年中秋田(ゝ)移封せられ、城も亦廢す。城址今なほ遺る。大字那珂西(なかにし)(中西にも作る)の丘陵上に那珂西城址あり、那珂川その東麓な流る。郭中三部に分かれ北な臺町(街道東)といふ、卽ち寶篋院の境內なり。東な中城、南な兵庫坪といふ。共に空濠及び垣壕な存するも附近概ね耕地と化す。中世那珂通泰此地に城な築き那珂氏な稱す。那珂氏は藤原秀郷の裔にて那珂郡の名な負ひて其氏となす(ここの地はもと那珂郷に隣接して中世那珂西郡ともいはれたる事あり)。通辰は建武年中官軍に屬して功あり、久慈郡磯井村(いま磯田村の大字)に戰死し、その跡絕ゆ。思ふに兵庫坪の一郭は其後眞崎兵庫介の居りし處ならんか、眞崎氏は佐竹氏の族にして那珂郡村松村に起る、其城はいまも同地にあり。(寶篋院)新義眞言宗豐山派。開山と號す。應永六年の開創。泉山は白鳥流二十八祖智空上人。の一時杜絕せしも、元祿九年水戸光圀上品蓮臺寺以傳和尙な以て中興開山となし現在に至る。本尊は正觀音。(藥師寺)天台宗。佐久山多聞院と號し、東觀山寬永寺に屬す。德川家康、寺領三十石及び寺中山林竹木諸役免除の朱印な附したり。本尊藥師如來及び兩脇侍像二軀(附銅造の胎內佛一軀)は何れも鎌倉時代の作と推定され現に國寶たり。

イシスチ 石鎚・石槌(いしづち)

【石鎚(石槌)山脈】 四國山脈の一脈。德島市の南方に起りて西方に進なり、其末端は愛媛縣佐田岬となりて豐後海峽に沒し、東西實に約二五〇粁に達す。ほゞ8字形ななし、標高一五〇〇米前後の連嶺ななす。その基盤ななすは主として結晶片岩類の變成岩なるも、愛媛縣のほゞ中央部にある主峯石鎚山(一九二一米)より東その西につゞく二ノ森(一九三〇米)・堂ヶ森(一六九〇米)・青滝(一三〇四米)・石墨山(一四五七米)・皿倉(一二七一米)等の諸峯の部分は、基盤な破りて噴出せる火山岩より成り、其南北兩側にば第三紀層よく發達す。また石鎚山より東方へは瓶ヶ森(一八九七米)・筏ヶ峯(一八六〇米)・工石山(一五一六米)・三傳示山(一一五八米)等となりて土佐・伊豫の境界ななし、また筏ヶ峯の東方にては吉野川の支流銅山川の谷な挾み、その北邊な東西に走る一支脈な分ち、西赤石山(一六二六米)・東赤石山(一七〇七米)・赤星山(一四五四米)等の諸峯となる。主脈は一且吉野川の橫谷によりて斷たるも其東方に起る國見山(一四〇九米)・中津山(一四四七米)・鳳呂ノ塔(一四〇二米)・奥野山(一一六四米)等となりて次第に高度な減じ、德島市の南方に至り、南は鰹山々脈に平行し、北は吉野川鎭谷な隔てゝ讃岐山脈に平行す。

【石鎚(石槌)山】 石槌山脈の主峯。愛媛縣新居・周桑・上浮穴三郡に跨り、四國第一の高山。山頂に突起する天狗岳最高峯をなし、標高一九二一米。主として第三紀層を貫きて噴出せる安山岩より成る。加茂川北麓に發源して瀬戸内海に、仁淀川南麓に發して土佐灣に注ぐ。山後四方に連なり東は瓶ヶ森山、東南は筒上山、西は堂ヶ森・石墨山、西北は三ヶ森等となる。山容は比較的深山の相を見せて谷深く、仁淀川の上流には面河渓あり て近來渓谷美を以て著名なり。中腹以下は大部分杉等の植林帶なるも中腹には極の原生林茂り森林の景觀優れ、山頂近くには暖國四國としては石槌山及び劍山山頂附近にのみ見らるゝ岳樺及び樅・椴等の針葉樹林あれど、太平洋の影響を受け一般に森林の生態は特異にして、山頂附近にはイヌカガミ・ミヤマザクラ等及び數種の高山植物を見る。石槌の景觀の特色は絶え間なき雲霧の去來であり、これは内海方面と太平洋方面の互大なる氣流の交流する爲めに生ずる現象なり。夏季は信仰登山の白衣の行者列をなし年々一萬人以上に達するといふ。登山路は松山より面河渓を探りて登るを裏口とし北麓の豫讃本線の石鎚山驛・伊豫小松驛・伊豫西條驛等よりするを表口とす。石鎚山驛より頂上まで二四軒、中腹の黒川まで約一四軒の間は夏季のみ自動車を通ず。驛より新居郡永見町を過ぎ松林の中を曲りて峠に出で、ついで加茂川に沿ひ渓谷美の優れし黒川合流點迄平坦な道を進み、やがて敷戸の簡易なお簡り式の旅館ある成就社に達す。これより約四軒の間には第一・第二・第三の岩場ありて大鎖頭を垂下す。第三の岩場を過ぐれば頂上に達し、こゝに縣社石鎚神社あり。役行者の開創と傳へ、石土昆古神を祀る。山頂の展望は頗る雄大にして四國の山河の大部分を望み得らる。即ち東方に劍山、東南に高知市・土佐灣、北方には瀬戸内海を望み得らる。石鎚山は古くは伊豫の高嶽または伊豫の大嶽ともといひ、歌枕たり。萬葉・三には山邊赤人の伊豫の温泉に至りて作れる歌の中に伊豫の高嶽と詠めり。夫木・二一「道遠きいよの高根を尋ねても人のゆくへを我に知らせよ 岡野猪政」

イシズチ　石鎚(縣)　明治四年十一月伊豫國にありし諸藩を夫々縣に改めたる松山・今治・小松・西條の四縣を廢して更に松山縣を伊豫國松山に置き伊豫國の北半を管せしもこれを翌五年二月に改稱して石鎚縣とす。翌六年二月九日に至り宇和島に置き神山縣と共に之を廢し、愛媛縣廳を松山に置き伊豫一國を管し以て今日に至る。

イシズチヤマ　石鎚山　豫讃本線の一驛(昭和四年設置)。愛媛縣新居郡橋村にあり。驛の附近に縣社石鎚神社、四國第六十四番札所たる前神寺あり。また石鎚山登山の下車驛の一にして、頂上まで二四軒、徒歩九時間にて達す。

イシズツミ　石堤村　富山縣婦中國西礪波郡の北部。高岡市の西方約六軒。東南は小矢部川を隔てゝ立野村・東五位村に對し、北は永見郡に境す。越中・能登の境をなす丘陵性山脈の東側に當り、丘陵多く、たゞ東南部小矢部川附近に田畑拓け米・繭の產あり、また林產・畜產も豊からず。本村は和名抄、礪波郡川合郷の内なるべく、中世の五位庄の内なり。近世五位庄、五十七村中の柴野・小川・廣野・勝木原・石堤・高生谷の六箇村を併合して石堤村を設置す。大字石勝の眞宵宗、長光寺境内に鎌田陸奥守氏知の塚あり。氏知は後醍醐天皇の第五皇子宗良親王の士にして、應安年中この地を領し、同三年薙髮して僧となり、長光寺を建立し、寺主となりしこと三州史に見ゆ。又大字柴野にある曹洞宗三光寺はその初め詳かならざるも、慶長十七年僧金洞の再興にて、一に寛文三年の再興なりともいふ。三光國師の遺跡に因みて三光寺と號す。(淺井神社)郷社。祭神國象女命。元正天皇養老元年三月の創建といはる。延喜式神名帳に見ゆる淺井神社は即ち之なり。仁壽三年三月春日朝臣雄繼を以て官幣使となし參向、其後も屢〻勅使參向して奉幣の事ありしといふ。明和元年金澤藩寺社奉行の命により神殿を同郡月野谷村見谷氣社へ假遷座し、文久三年に至り石堤村產土神、式内淺井神座神靈殿内神明宮へ歸社の義達せられ遷御ありて舊に復す。明治五年神明宮より本殿に遷座す。例祭九月二十日。

イシズミ　石住村　鳥取縣磐城國石城郡の西部。勿來町の西北約二八軒、荷路夫・貝泊二村の北にして入澗野村の西隣、西北は東白川郡に界す。鮫川の中流南境を流れ、西北方石川郡石川町へ通ずる御齊所街道これに沿ふ。此地は石炭の露出處々にあり、村名の石住は蓋し石炭の義なるべし。いま貝泊・荷路夫・田人三村と共同組合村をなし、役場は田人村にあり。山多き爲め耕地少なく、廣く炭燒業・木材運搬業行はる。主產物は材木・木炭・米、特產物にウド・蕨あり。

イシズミ　石墨山　四國、石槌(鎚)山脈西部の一峯。愛媛縣上浮穴郡の西河村・川瀬村の兩村に跨り標高一四五七米。東方に黒森峠・青瀧・堂ヶ森・二ヶ森を經て石槌山、西方に井内峠・上林峠を經て風穴峯ゆ。仁淀川の上支流南麓に發源して土佐灣に、重信川の上流北麓に發して伊豫灘に注ぐ。

イシズミ　石澄池・石積池　大阪府豊能郡池田町大字畑にあり、二層をなし上は高さ約二〇米下は約一六米。

イシゼ　石瀬　【石瀬】 ↓岩室村(新潟縣)

【石瀬山】 新潟縣西蒲原郡と三島郡に跨る多寶山の別名。

イシタ　伊志太　石田(佐渡國)

イシダ　石田　【石田】 ↓上野村(茨城縣)

【石田】 下總國海上郡の郷。和名抄は訓を闕くも豈岐國石田郡の例により伊之多と訓むべきものならん。今の千葉縣香取郡橋村・豐里村の地なるべし。橋村に大字石出あり、田・出一聲相通じ、即ち石田郷の遺鳴ならん。建武年間の文書に東庄上代郷石田とあれば、東氏の橋庄に兼併せられ石田の郷名廢せられしならん。千葉系圖に千葉胤明は石出次郎と稱し、東庄、石出城に居りしと見え、又江戸名所圖會に千葉常胤の裔胤朝は香取郡石出に居り、石出日向守と稱せしと見ゆ。即ち此地はもと千葉氏の所領たり。橋庄は東庄に同じく、海上庄とも稱せらる。東鑑・文治二年三月「下總國橋並木内庄、二位大納言領」とあり。千葉常胤の子孫は其地頭たり、故に子孫東庄に因み東氏を稱す。

【石田】 相模國大住郡の郷(和名抄)。諸本石見に作るも高山寺本により訂す。今の神奈川縣中郡成瀬村に當り、大字石田は郷名の遺稱といふ。新編相模風土記に「石田村、伊志太半良、石田郷と唱ふ。古は庄名にも唱へし事、鎌倉圓覚寺塔頭正續院藏、觀應二年の文書に見えたり、東鑑に當國の住人、石田次郎爲久を始、石田氏の人四人見えたり、是當所の住人にして在名を稱號とせしならん」とあり。中世禮屋庄の内にして小田原北條氏の頃は鈴田大藏丞この地を領し、慶安四年松平庄右衛門昌吉この地を領せし由、松平系譜に見ゆ。石田氏は桓武平氏三浦氏の族なり。

【石田】 靜岡縣駿河國駿東郡大岡村北東部の大字。黄瀬川の右岸に沿ひ東海道本線此地を通過す。古の石田は黄瀬川の兩岸に亘る地域の汎稱なりしも、今は上中下の三部に分たる。鎌倉時代の東海道は今の下石田にて二岐に分れ、一は東方に向ふ箱根路、他は北方に上る足柄路に岐れ、こゝ即ち黄瀬川宿に當りしものなり。當時の黄瀬川は此宿驛の北方、即ち今の石田の南方を南西に流れたりしも、其後河道は東方に轉じ、街道もこれに伴ひて東に移れり。古驛のありし地は今大岡村の南東部黄瀬川右岸にある大字黄瀬川(木瀬川)より中石田附近に亘る地域に當る。

【石田】 佐渡國雜太郡の郷(和名抄)。今の新潟縣佐渡郡二宮村・河原田町及び澤根町の邊に及べるものか。二宮村大字石田は郷名の遺稱にして、今石田川あり、この地を流れ河原田町にて海に注ぐ。高山寺本は以之多と訓す。中世本間氏の居邑にて其居城を河原田城と呼ぶ。本間系圖には「爲平親王玄孫源頼綱、保安二年任二佐渡守護一、治レ于二石田郷河原田城一」と見ゆ。また貞和二年沙彌忍譽狀に、佐渡國伊志太郷内山城方衛門知行分とあるは此地を指せるもの。永享十年本間李直文書「石田郷金丸・長宇畝・長地・飯瀬・今有二石田村六頁一青野・山田・窪田・五十里・五十里德・五十里炭屋・中原・二ノ宮・上長木・下長木・諏方・川原田・金丸諸色六段一其郷域」

【石田村】 富山縣婦中國下新川郡の北西部。魚津町の北、生地町の南、東は三日市町に隣り、西は富山灣に臨む。南境を片貝川西流して海に入る。村内は一面低濕なる平地にして、並行して西流する二小流によりて灌漑せられ、水田廣く拓く。北陸本線村の東部をほゞ南北に走りて三日市驛(明治四十三年設置)を置き、社線黒部鐵道此驛に於いて交叉して東方黒部川渓谷に通じ村内に堀切・生地口・石田港(何れも昭和五年設置)の諸驛を置き、國道北陸道にも近く交通便なり。米を主產物とし、工產に編織物あり。沿海鰯・鯛・巻烏賊等の漁獲あり。本村は和名抄の新川郡布勢郷の地にして近世の布施保内に屬す。

【石田】 ↓北郷里村(滋賀縣)

【石田】 因幡國八上郡の郷(和名抄)。今の鳥取縣八頭郡國中村、國英村邊に當る。土師郷の西にして千代川に沿ふ。中世は石田荘と稱す。

【石田村】 香川縣讃岐國大川郡の西部。西は長尾町に隣る。南部一帶は讃岐山脈の一峯矢筈山北嶺の傾斜面にして丘陵續くも、北部は平坦にして耕地拓け米・麥・蔬菜を產す。縣道北部を東西に通ず。縣立大川女學校あり。此地は和名抄の寒川郡石田郷の地にして、村内に寒川の流水あり、蓋し寒川郡名の起りし所か。享保年間東石田。西石田の二村に分たるも、明治二十三年復舊して石田村と改稱す。村内に式内社大雲彦神社・布勢神社及び八幡神社あり。此邊は小丘起伏し、其間に四坪五坪の廣さの大石窟及び數十相連なれる上代の墳墓ありて、石鏃・石斧散布し、或は上代の土器・玉器を出土せることあり。また國弘城址あり。當城は鵜足郡西長尾城主中院少將定平の裔孫之に居りしともまた應永中細川持國助弘氏の築く所にして子孫七世之に居りしともいふ。なほ本村より近年平形銅剣(三箇)を出したることは、此地に式内の古社二つまでもあることなど等を傍證として、恐らくは(少なくとも)青銅文化時代より此地に住人ありしものと推察せらる。郷土古代史研究には充分注意すべきものとす。(石田神社)大字石田東に鎮座。郷社。祭神品陀和氣命・足仲彦命・息長帶姫命。創立年代未詳なれども、應永十年領主細川氏の勸請といふ。江戸時代慶長十四年社殿再興のことあり。往時は小十九間八幡とも又單に八幡とも稱し、明治四年現社號に改稱す。附近郷民の尊信篤し。例祭四月三日。境内末社に大雲彦命を祀る大雲彦神社(式内社)及び境外末社に大彦命を祀る布勢神社(式内社)あり。

【石田】 伊豫國伊豫郡の郷。和名抄は伊之多と訓す。今何れの地なるか詳ならざるも、或は愛媛縣伊豫郡北山崎村・南山崎村邊の地か。

【石田】 筑前國席田郡の郷。和名抄伊之多と訓す。今何れの地に當るか詳ならざるも、或は福岡市東南部の地か此地は石田君の居りし地といふ。東鑑、建保三年十一月二十四日「安樂寺領筑前國岩田庄事、此間聞勝有二樂儀一、今日逢所二鳥ヵ于左近大夫菅原時賢之子有成一也」とある岩田庄は或は此地ないひしものならん。

【石田】 筑前國怡土郡の郷。和名抄刻本は伊之太に作るも、高山寺本には伊之太とあり、太字形類するより誤りたるものか。今高山寺本に從ふ。其の地は今の福岡縣糸島郡雷山村の邊なるべし。或は刻本の伊之太と訓するより、田を良て太の誤とし一貴山村及び其の附近をこれに擬するものあり。一貴は蓋し伊之太の訛ならんといふも首肯し難し。乘仁紀に據れば五十日足彦命は石田君の祖なる由見ゆ、此地或は其尊の居住せし地にや。

【石田村】 長崎縣壹岐國壹岐郡の東南部東及び西は海に面す。筒城崎は東部に鐵亀崎南方に斗出し、後者の西に印通寺港を擁し、灣口に妻ヶ島浮ぶ。村内は概れ丘陵地を成せり。縣道西方の武生水町及び、北隣田河村に通じ、バスの便あり。此地は和名抄、石田郡石田郷の地に當る蓋然・一五「石田野に宿する君家人のいづらと我を問はば如何に言はむ」と見える石田は卽ち本村にして、往古は伊波多と言ひしものならん。また延喜式・兵部省式に「壹岐島、優通驛馬五疋」とあるは印通寺の古稱なるべきか。村の東部筒城ヶ濱は壹岐國一の景勝地にして、錦濱・片部濱・小松濱・大濱・小濱・唐瀬濱・宮ノ濱の七濱より成り、前面に浮ぶ島々はいふに及ばず、遙に北九州の遠峯も望まれ、海水浴・潮干狩等も行はる。〔白沙八幡神社〕筒城字白沙濱に鎮座。郷社。祭神、應神天皇・神功皇后・仲哀天皇外四神。創立年代未詳なるも、江戸時代には松浦藩主の崇敬を受け、又壹岐國七大社の一に數へられ、附近一般の尊信亦篤し。

【石田】 壹岐國の古郡名。壹岐島の南部を占めたり。萬葉・一五「石田野に宿する君家人のいづらと我を問はば如何に言はむ」とある石田は卽ち今の壹岐郡石田村の地に當るといふ。されば往古郡名も或は伊波多といひたるものか。乘仁紀・三十四年三月の條に「天皇幸二山背一……五十日足彦命、是石田君之始祖也」とあり、本郡は蓋し石田族の居せし地ならん和名抄は伊之太と訓し石田・物部・笠原沼津の四郷を管す。明治二十九年本郡を廢して壹岐郡に合併す。

イシタテ　石立山　四國、劍山々脈の一峯。德島縣海部郡奥木頭村と高知縣香美郡横山村との境上に跨り、劍山の南方約九粁、標高一七〇八米。東西に分水し郡賀川と物部川の一上源なる横山川との分水界をなす。剛河谷に沿ふ山道は此山の南部を通過す。

イシタニ　石谷山　筑紫山脈に屬する脊振山脈の一峯。佐賀縣三養基郡の北西境。龍、中原二村界に跨り、福岡縣筑紫郡界に近し。標高七五四米。東北山麓には九千部山(八四八米)東南より西北に通ず。又西山麓には七曲峠(五〇二米)東南より西北に通ず。

イジチ　伊知地・伊地知　いちち

【伊知地】 →北郷村(福井縣)

【伊知地山・伊地知山】 鷲ヶ岳(福井縣の別稱)

イシツ　石津　肥後國玉名郡の郷(和名抄)今何れの地なるか詳かならず。一に以之都は以之乃都と訓すべく、今熊本縣玉名郡清里村に大字牛水あり、牛は卽ち石の轉訛にして蓋し這轉ならんといふも知何にや。

イシツクリ　石作

【石作】 尾張國中島郡の郷。和名抄は以之豆久利と訓す。今の愛知縣海部郡甚目寺町の地なるべし。大字に石作の名存す。姓氏錄「火明命六世孫、建眞利根命之後也乘仁天皇御世、奉ヲ爲二皇后一作二石棺一獻也之、乃賜二姓石作大連公一也」とあり、石作は尾張氏の一門にて、石作連の裔が此地に居りし故の名なるべし。

【石作】 尾張國山田郡の郷。和名抄は訓を闕くも中島郡の例により以之豆久利と讀むべきものならん。今の愛知縣愛知郡猪高村・長久手村の邊か。長久手村の大字に岩作あり、ヤサコはイハサコの轉訛なるべし。故に石作はイハサコの假借ならんといふ。中世山田莊と稱せし地にして尾張宿禰の同族、石作連の居りし所なるべし。

【石作】 山城國乙訓郡の郷。和名抄以之都久利と訓す。今の京都府乙訓郡大原野村大字石作に郷名の名殘にて、大字出灰及び大字石作の小字灰方、灰谷等は石作に因む地名なり。石作は石棺製作に從事せる石作部の居りし所。姓氏錄に石作連は建眞利根命之後にして乘仁天皇の皇后日葉酢姫が崩御されし時、石棺を作りて獻上せる爲め石作大連公の姓を賜ふとあり。建眞利根命を祀る式内の古社石作神社は大字石作の大歳神社に合祀さる。また灰方、灰谷には石灰を產し石灰を以て製する漆喰は赤石棺製造の一原料たりしものならん。續紫國史に延曆十一年に桓武天皇石作丘に幸を行ひ給ふとあるは此地の丘を指せしもの。また淳和天皇紀に淳和天皇尼山に擬せられたるも所在未だ決定を見ず。淳和天皇天長元年十二月山陵を定めらぬに由り改葬し奉ることゝなりしも支障の爲めに延引し、三年二月改葬司を任ず。併し新古の陵名の同じきを見れば石作郷内に於ける御改葬ならん。天長元年近陵の一たりしこと「符宣抄」に見ゆるも、天安二年遠陵に改めらる。延喜式に

は「石作陵、簡二二品高志内親王一、在二山城國乙訓郡一、兆域東西三町、南三町、北六町、守戸五烟」とあり。

【石作】 播磨國宍粟郡の郷。今の兵庫縣宍粟郡河東村、神野村及び富栖村神戸村邊に當るものゝ如し。和名抄刊本は石保郷とあるも高山寺本には石作と書き以之都久利と訓す。播磨風土記に石作里と見え、始め伊和(いま神戸村の大字に伊和あり)といひしも石作首の居住せる爲め石作里と改むとあり。石作首は石城作といひ、石棺を作るを職業とせる部民にして乘仁天皇の朝に定められしもの。東鑑、元暦元年四月の條に八條院御領、播磨國石作庄の名見え、後宇多院御領目錄に播磨石作庄とあり、されば中世は院領たりしこと明かなり。かく諸書に石作に作るより見れば石保は和名抄刊本の誤とも考へらる。然し近世まで河東村大字須賀澤の邊に石保谷の名稱を存せりともいひ、石保、石作の正否にはかに判定し難し。播磨風土記・宍禾郡「石作里(本名伊和)所二以名一石作者、石作者首等居二於此村一、故庚午年爲二石作里一、阿賀山、伊和大神之妹阿和加比賣命、在二於此山一、故曰二阿和加山一、伊加麻川、大神占二國、烏賊在二於此川一、故曰二烏賊川川一」

イシデ　石手川　愛媛縣溫泉郡にある川。郡の東北部湯山村の水ヶ峠の西麓に發源して西南流し、松山市を過りて錄土村の地域にて重信川に合し海に注ぐ。流程約二八粁。江戸時代の初め加藤嘉明の臣足立重信(卿正五位)は夙に水利に志し東川及び重信川を大改修し、堅固なる築堤を施し、其利する所水田五千餘町歩に及べりといふ。

イシデラ　石出　→橋村(千葉縣)

イシテラ　石寺　→北山内村(茨城縣)

イシト　石戸村　福島縣岩代國伊達郡の中部。福島市の東方約一五粁、掛田町の東、霊山村の南に位し、東は相馬郡に界す。阿武隈山脈の高原性山地にあり、廣瀬川は西部を南北に、その支流は中部を東西に流る。北界に霊山(八〇五米)峙ち西南面は嶮崖絶壁をなし、南境に三郷峯(七〇三米)あるも其他は土地概れ平かに樹林多し。中村街道廣瀬川支流の谷に沿ひて東西に通じ、相馬郡中村町に通ず。此地は今の大字なる石田と山戸田を合して建てし村にて村名これに基づく。延元の昔義良親王北畠顯家の據りし有名な霊山城址は霊山の中腹にあり、本村大字石田の地籍に屬す。※霊山

イシド　石戸村　埼玉縣武藏國北足立郡の北部。荒川町の西北に隣り、鴻ノ巣町の南方約四粁。荒川の左岸に沿ひ、西は比企郡東吉見村と界す。所謂關東平野の中部に位す。全村土地低平にして林野・畑地多く米・麥・繭の產あり。省線高崎線及び國道(中山道)東部を掠め、北本宿驛、鴻ノ巣驛桶川驛に近し。此地古くは石戸郷と稱し東鑑に見ゆる石戸左衛門尉の住せし地なりといふ。中世轉じて領名となり近世には石戸領二十村の本郷たり正保圖には石戸町ノ上石戸村の二村とし、元祿郷帳には下石戸上村・下石戸下村・石戸町と見ゆ、江戸時代の始めは牧野讃岐守康成の領地たり。大字堀ノ内に蒲櫻あり馬琴の筆に依りて著はれ、いま石戸蒲櫻として指定天然記念物たり。其幹は根本から四本に分れ、最も大なるものは根本の周圍約一一米あり。花は彼岸櫻に似て其花序多少纖房狀をなし、雄蕊の數四十本にも及ぶ。四月中旬に開き一大壯觀を呈す。櫻樹の根本に喰ひ込みて一枚の板碑あり。碑面には阿彌陀三尊の種子(梵字)「光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨」の文及び貞永二年の年號を刻む。此外櫻樹の根本に十數枚の板碑あり、何れも鎌倉時代或は室町時代の年號あり。また大字石戸宿に天神山城址あり。扇谷上杉氏の家人簗田八右衛門の居りし所なりと傳ふ。今は概れ陸田となりて僅に、空堀の跡殘れり。〔阿彌陀堂〕字堀ノ内にあり。此地は蒲冠者範頼の住居の地とも石戸太郎門尉の居址なりとも稱せらる緣起に依れば源範頼故ありて當國石戸郷に配流せられ、土俗これを石戸殿と稱せり。然るにその息女亀御前病に罹りて正治元年卒せり。範頼その追福のため法華和尚を請じて一宇を創建し、西亀山無量院東向寺と呼べり、是卽ち此堂の濫觴なりといふも詳ならず。

イシドー　石堂

【石堂川】 福岡縣筑紫郡にある御笠川の別名。一に比惠川ともいふ。

【石堂山】 九州山脈の一峯。宮崎縣西臼杵郡椎葉村と南隣の兒湯郡西米良村の界に跨り、標高一五四七米。西方に發ゆる市房山(一七二二米)と一ツ瀬川の上流の谷を挾む。東北山麓には一四三五米の樋口山發ゆ。

イシドーシロ　石塔　→櫻川村(滋賀縣)

イシドシロ　石徹白村　福井縣越前國大野郡の東北部。東は白山火山群の銚子ヶ峰(一八一〇米)・芦倉山(一七一七米)・大日岳(一七〇九米)に依りて岐阜縣大野郡上二郡に界す。西は願教寺山(一六九一米)の山脚南方に延び全村山地をなし九頭龍川の上流石徹白川その谷に發して、南流して西に向ひ下穴馬村に入る。產業盛んならざるも木材・炭・米等を產す。風景絶佳なる爲夏季の避暑地としてよきも交通便利ならざる憾とす。此地もと下穴馬村の地内なりしも、明治二十九年獨立す。本村に泰澄大師の御手植といふ杉あり、杉の代表的巨樹にて今石徹白の杉として指定天然記念物たり。村名の起原に就ては景行天皇十二年に、此の泰原の中國に荒振る鬼ありて駭々しかりしため、村内の橋立山に伊非那岐・伊非那美の二神天降りまして途に東南を望まれ峯より下りて長瀬川・短瀬川の間に至り清々しき森に達せられ、是清々敷

く船岡山中居と白し給ひて此處に大宮柱を太敷な立て白山中居神社を鎮座せらる時に船岡山に白雲立籠めしため大神は石度白と申さる。村名これに因ると。また大日嶽山麓に鐘鍾冷泉湧出し鳴鐘と稱す往昔鳴の滝せるより發見されしためこの名出づといふ。(白山中居神社)大字上在所に鎮座。一縣社、祭神、伊弉諾命・伊弉冉命・天照大神外七神を合祀。景行十二年の創立にして吉備武彦命國家鎮護のため祀るところなりといふ。元正天皇養老年中、泰澄白山を開くや此の地に來り、大いに社殿を修め、社域を擴張せしも、神佛混淆の端もまた茲に起れりといふ。古來朝臣武門の崇敬篤く、藤原能信祈願の事ありて大錢十餘品を奉納し、平泉の藤原秀衡も神寶を寄進せしといふ。又鶴井、大野、郡上等諸藩主の崇敬を受く。社殿は本殿・拜殿にして安政年間の建立と傳ふ。明治初年村社に列し、同四十二年境外七末社を合併す。大正十五年縣社に昇格す。(城山)中在所にあり。中居神社の神主の始祖石徹白小河合が、正長年中に築けるものにして當時その威勢穴馬全郷に振へり。城址は獨立の小丘で南は斷崖なるも、三面には壕塁などの址あり。(首無塚)中在所にあり。天文年中石徹白鳥弘美濃の遠藤家を援けてその永藤城に入りて朝倉家に反抗せし際、母と妻を城に殘し置けり。其時朝倉氏は賞を懸けて鳥弘を捕へんとす。天文十四年七月十七日、鳥弘は母を尋ねんものと竊に歸り乳母の家にて酒を飲み居りしも、村人之を知り急に鳥弘を斬りて首を朝倉氏に送りしに賞なし、茲に於いて村人後悔して弘鳥の死體を厚く此地に葬れりと。今路傍に小石碑あり、一に首無ボテンと稱さる。

イシトリヤ 石鳥屋町 岩手縣陸中國釜石市の西北部。花巻町の北方約一二粁、北は紫波郡に境す。東は北上川より西は遠く岩手郡界に及び東西約一八粁、南北廣き所も五粁に過ぎず。西境に青ノ木森・高羅山・塚瀬森(八九二米)等聳え、鳥丸川この山地に發し東流して北上川に注ぐ。東部は北上平野の中部に當り一望の沃野にして耕地拓けまた林野多なし、米を多産す。清酒、蕎麥切の名産あり。舊奥州街道の一宿驛にして、今東北本線南方花巻町より來り石鳥屋驛(昭和七年設置)を置き、北方盛岡市方面に北上す。驛の東約・五粁、奥州街道の西に接し一里塚あり、上に槻の巨木あり。此地もと好地村と稱し、石鳥谷は宿驛名なりしも昭和三年石鳥谷町と改稱せり。(鳥谷ヶ崎城)安倍頼時の創築に係る。曾て南部氏の東征の際敵軍に備へし著名なる堅城にして、勇剛なる伊達政宗もその堅城に驚きたりと。今城址内に城主北氏を祀れる鳥谷ヶ崎神社あり。

イシナ 石那坂 瓜島縣信夫郡杉妻村伏拜坂の南にある坂路。文治五年藤原泰衡の一族佐藤基治その一族と鎌倉勢を拒ぎて戦死せし處。

イシナリ 石成 大和國山邊郡の郷。(和名抄)高山寺本は石生に作るも、刊本は石成に作り以之奈利と訓す。併し石成石生共に或はイハナシと訓ずしにはあらざるか。續日本後紀・承和六年四月の條に、雨な大和國石成社に祈るとあれどこの石成社は石上神宮の前宮の王子宮を稱せしもの、如く、此の王子宮は備前國赤坂郡(古の吉備穴[illegible]梨[illegible]郷の内)石上神の別社なるを以てかく石成神と稱せしものと思はる。此推定によれば石成郷の地は奈良縣山邊郡の丹波市町の邊を稱せしものならん。然るに地理資料はこれを郡の東北部の豐原村・波多野村の邊に擬するも何れとも定め難し。

イシニダ 石仁田山 宮崎縣西臼杵郡椎葉村にある山。標高一三六一米。西南方に高塚山聳ゆ。

イシヌキ 石貫村 熊本縣肥後國玉名郡の中部。高瀬町の北約二粁。西北部一帶は山地にして、東南部に僅に平地を見るのみ。主産物米・麥。北方南關町より高瀬町への道路村内を通じバスの便あり。此地は西南戦争の際、第十四聯隊長乃木少佐の大いに奮戦せし地なり。(石貫村那岐横穴群)指定史蹟。大字那岐にあり。熊野社のある丘陵の東麓に沿ひて約四十間存す。其中入口の飾壁に余な槍抹し、朱青二色を以て同心圓を描き、内部の奥壁に造出せる石厨子の右外壁には、精に納めたる太刀を浮彫せるものもあり、また大形刀子を浮彫せるものも存す。(穴觀音横穴)指定史蹟。那岐横穴群の西北・五粁大字安世寺にあり凝灰岩の崖に西南面して三箇並列し、構造は那岐横穴とほゞ同様なるも、最も大形の中央の穴は構造頗る精巧にて、内部には左右に床を造り、奥壁には造出せる石厨子存し、瓦葺を摸して瓦當を附せる廂は前方に挺出す。奥壁の中央に舟形光背形に彫り窟めて手観音立像の浮彫あり。これは平安時代初期の作爲にして開口後に寵されしものといはれ、また奈良時代の作爲にして、當初より寵されしものなりとも稱せらる。尚その前に石造千手観音坐像(平安時代中期)安置さる。(紫陽山と號す。元徳二年領主菊池肥後守武時の創建に係り、開山は永平六世の法孫大智禪師なり。菊池武時國中の諸士と不和あり、諸處に戦ふも利あらず終に大智に頼る。大智潛かに武時を匿し置き、自ら上洛して奏聞し、本領安堵の綸旨を賜はりて下向す。因りて武時一國を平治し、此恩に報ぜんため當寺を建立すと。爾來菊池家代々の祈願所たり。

イシノ 石野村 愛知縣三河國西加茂郡の東部・岡崎市の北方約二〇粁、矢作川中流左岸に沿ふ。矢作川を距て、猿投村北は勘岡村に接し、東北及び東南は東加茂郡に境す。三河山地の西部に當り、丘陵性臺地をなす、主産物米・麥・繭・薪炭・特産物・石材・松茸・竹材・鮎等。飯田街道中部を東西に走り、社線三河鉄道三河廣瀬(昭和二年設置)・西中金(昭和三年設置)の二驛を置く。本村は和名抄の賀茂郡高橋郷の地にして後の高橋庄の内。明治三十九年、中野村・石下瀬村・七里村・四谷村の大字元山中及び宮貴下村の大字松嶺・押澤・藤澤・宮田の諸地域を合せ、大部落なる石下瀬と中野の各一字を採りて石野村と名づく。廣瀬の地には永祿年間三宅右衛門佐の居城あり、永祿三年徳川家康が擧母、梅ヶ坪を攻めし時右衛門佐は士卒を引具して城を出で、拂菟坂に陣取り、要害に據りてこれを防ぎしも岡崎勢にかけ破られ、遂に城下も攻め破らる。(石野神社)大字野口に鎮座。郷社。祭神豐鍬入姫尊。創立年代未詳なるも、早く文德天皇仁壽元年従五位下を授けられ延喜の制小社に列して例年の國幣に預りまた國内神名帳に正四位下野社明神と見え、三河國の名社として、又附近七箇村の産土神として村民の尊信篤し、例祭九月十九日。(廣濟寺)曹洞宗。梅樂山と號す。應安七年兒島高徳の開基なるも、永祿三年徳川家康の兵火に罹りて鳥有に歸す。元亀元年三宅攝津守高清その父高貞を中興開基とし、月船淳光和尚を開山として之を再建す。(千鳥寺)大字千鳥にあり。曹洞宗、號持山と號す。明治年間足利義滿近江に護持院を建立し、永享二年義數之を現地に移建すといふ。開山は後醍醐帝第五皇子金龍禪師。寺寶に義滿寄贈の王摩詰の畫軸を藏す。(知意寺)大字石下瀬にあり。眞宗大谷派。樂命山と號し觀覽門下克木源海の草創。初め武州豊島郡にありて萬福寺といひしも後三河に移し本願寺三世覺如現稱に改む。

イシノマキ 石巻 【石巻市】宮城縣東部にある港市。舊牡鹿郡役所の所在地。北上川口に跨り、西岸の石巻、東岸の湊より成り、南は石巻灣に面し、西は桃生郡鷹巣村、赤井村、北は牡鹿郡蛇田・稲井の二村、東は渡波町に境す。地勢は概れ平坦なるも牧山連峯と日和山、鮫山の丘陵川を隔てゝ東西に相對峙す。石巻驛(大正元年設置)は省線東北本線小牛田驛より分岐せる石巻線の終端驛をなし、社線宮城電鐵これに接續して宮電石巻驛(昭和三年設置)を置き、西方松島灣岸に沿ひて仙臺に通ず。東は渡波を經て女川に社線金華山軌道線を通じて石巻港・御所湊・伊原津の三驛を置き、陸上の交通は至便にして、港も又近年の改修によりて内務省指定港灣となり商船、漁舟輻輳せり。本市は地勢上水産漁獲物及び加工製造(鰹節・鮪節・竹輪・蒲鉾)を生業の大宗とするも、その他の各種の産業また日に發達し、氣候の良好に惠まれて魚類の外、新鮮なる野菜・果實(大街道の梨は特に著名)等の供給豊富にして、港市としては稀に見る現象を呈す。また北上川左岸の牧山の西麓より日和山公園は、舊西氏城塁の地にして、頂上にいま郷社鹿島御見神社・迎陽館あり、石巻灣の海波を隔てゝ、右に松島、左に牡鹿半島の聳巒を望み、眺望頗る雄大なり。住吉町にある住吉公園は規模小なるも北上川に臨みまた景趣に富めり。舊記に仁德帝の五十五年田道將軍勅命を奉じて東夷征討の途次陸奥國伊寺水門に戦死せりとあり、此伊寺水門は即ち石巻の古名にして、往古は眞野川(今北上川の一小支)に沿ふ一小流付たり。鎌倉時代、文治年間陸奥源頼朝の勅旨奏衡を伐ちし際、勳功に依りて大崎地頭職に補せられし葛西三郎清重は始めて此地に居城を築きしより忽ち陸奥の要津としてその名高まる。葛西氏は天正中豊臣氏のために滅ぼされ後仙臺藩の封領に歸するや、藩祖伊達政宗は岩出山の居城をこの地に移す窟劃なりしが、幕府の慧眼に看破され、遂に仙臺に決するの外なかりしといはる。併し政宗は領内に良港なきを遺憾とし、土木の大家たる家臣川村孫兵衛重吉(慶正五位)に命じ、桃生郡鹿又村より石巻に在る約一二粁間の運河を開き、終に寛永三年北上川下流開鑿の大偉業を完成せしめ萬治年間初めて積出米穀の倉庫を設く。これより同地方の輸出貨物は勿論、又北海、京阪地方より奥州に輸送せらるる貨物は凡てこの港を經由することゝなり、石巻は東奥沿岸唯一の海港となれり。從ひて文化移入の關門としてまた重要の位置を占むるに至り、「三十五反の帆を巻き上げて行くよ仙臺石巻」の名俚謡、また奥の細道に「十二日、平泉と心ざし、あねはの松緒だえの橋など聞傳へて、人跡稀に蜘蛛網の行きかふ道そこともわかず、終に路ふみたがへて石の巻といふ港にいづ。こがね花咲くとよみ奉りたる金花山海上に見わたし、數百の廻船入江につどひ、人家地をあらそひて竈の煙立ちつゞけたり」といへる叙述に徴するも往時隆昌の一斑を窺ふに足る。然るに河水の運搬する泥砂、河口に堆積して大船の入港困難となり、且つ省線東北本線開通以來貨物の運輸は多くこれに奪はれ一時衰運に向ひしも、大正元年以來繼續實施された内務省の河口改修工事進捗も左右兩岸各約一〇〇〇米の大突堤築設され之に伴ひて水深を増し、五〇〇噸以下の船舶の出入は頗る自由となり、更に鐵道・電鐵・軌道等の陸上交通機關及び水道その他の施設進むに從ひ、最近發展は頓に著しく昭和八年遂に市制の實施を見るに至る。(雲巻崎神社)湊町に鎮座。郷社。祭神豊玉彦命。延喜の制名神大社に列す社傳に神功皇后の勅願に依り東奥鎮護の爲に鎮祀されたものといふ。古くは中魂宮・統魂宮・白山神社等と稱せり、例祭陰暦四月八日。(吉野先帝御菩提碑)湊の冬籠院(曹洞宗)本堂の背後にあり、建武二年七月饗良親王鎌倉の御難を免れ潛逃

伊賀守の御東道にて此地に下り給ひ、後醍醐帝の崩御を偲ませらるゝの餘り近侍と共に此碑を建て給ひしものなりといふ。高さ五尺幅二尺位の古墳にて、碑面に「御菩提碑奉爲吉野先帝御菩提也 延元二年乙卯霜月十四日敬白」とあり。〔一皇子宮〕大門崎畔にあり。護良親王、潤逸伊賀守と共に鎌倉の土牢を逃れさせ給ひ、海路窃かに潤逸の郷里なる石卷に落延び給ひしも、幾許もなく此地に委去遊ばされし親王の御墓なりと傳へらる。一王子宮附近には御所入・御殿里・殿原小路・一條・二條・三條等の地名今尚殘り、又吉野朝の錦旗と傳へらるるものを存す。〔日和山公園〕日和山は標高約六十米、南鶴山と連亙して丘陵みなし、東南に遠く白波碎くる牡鹿半島、東方に近く牧山、上品山の聖巒に對もて、脚下に濃々たる北上の清流注ぐ河口を衛蔽し、左右の長汀青松白砂を連れて、紺碧二色の石卷灣の彼方には田代、網地島、金華山模糊裡に松島の青巒を見、更に洋上清澄の時は遙に相馬藩の岬みその青一髪の間に望見す。その眺望の雄大壯麗實に筆舌には盡し難し。山上は葛西氏居城の跡にして、滴山櫻樹多く、數千株の櫻花開、牡丹園等とりどりの景趣あり。〔住吉公園〕住吉の南端にあり北上川の流に臨み、下流に東西兩橋を眺めて頗る景趣に富む。小島の突端に卷石と稱する一岩礁の水面に隱現するあり。これより石卷なる地名出づるもとなりといふ。〔寄磯寺〕新義眞言宗智山派。海石山と號す。京都智積院の直末なり。初め大善院と稱し天台宗たりしも、宥悟法師のとき宗旨並びに寺號を現在の如く改む。〔多福寺〕曹洞宗石卷市法山寺末。日輪山と號す。もと月光山日輪寺と稱せしも、元亀元年盛岩和尚中興して現寺號に改む。寺内に吉野先帝の靈碑、靈牌を安置す。〔梅渕寺〕牧山にあり。曹洞宗黒石の正法寺末。開峯山と號す。弘仁七年の開創なりのち久しく廢頽せしも、貞治二年無蓋天全和尚來錫して之を再興す。往古は靈峯山梅谷寺と稱せしも、のち現寺號に改む。四世佛照禪師の代より數十ヶ寺の末寺を有するに至り、維新前は總持寺に輪番住職を勤む。また有名なる奥州三觀音の一たる牧山觀音堂を管す。〔牧山觀音堂〕牧山にあり。鷲峯山と號す。富山・荒獄の兩觀音と共に奥州三觀音の一、もと天台宗東叡山末にして、延暦年間、延鎮僧都の開山に係り、慈覺大師之を中興す。初め牧山寺と稱せしも、萬治年中長禪寺と改む。本尊觀世音は海中出現の紫佛にして維新後は梅渕寺に遷さる。前佛は惠心僧都の作たり。駒犬赤古く、右方には不動像を安置す。一説には當山は田村麻呂の草創する所と傳へられ、奥州三觀音を鄉人は田村の三觀音とも稱す。

【石卷灣】 宮城縣東岸の海灣。仙臺灣の一支灣にして、東は南方に突出せる牡鹿半島西は松島灣の東をなす諸島の間に灣入し、その範圍は大體牡鹿半島南端の黒崎と松島灣口の宮戸島とを結ぶ線以北の海面なり。北岸は仙臺平野に屬する平滑單調なる砂濱にして鳴瀬川・北上川これに注ぎ、東岸卽ち牡鹿半島の西側にて萬石浦・桃ノ浦・荻濱・大原・鮎川等に小灣入多く好錨地をなし、また田代島・網地島等の島嶼を浮ぶ、沿海の蛸・鰹等の好漁場をなし、萬石浦は牡蠣の養殖場として著はる。沿岸の石卷・荻濱・鮎川の諸港は松島灣内の鹽釜港と共に近海航路船の寄航地なり。

【石卷線】 省線陸羽線の一部。東北本線の小牛田驛(宮城縣遠田郡不動堂村)より分岐して太平洋方面に向ひ宮城縣石卷市の石卷驛まで二七・九粁の線路。なほ將來は女川まで延長の豫定。宮城電鐵仙臺より海岸に沿ひ石卷に來り本線に連絡し また金華川航道これより女川まで開通す

イシノミナト　伊寺水門　仁德天皇の朝、蝦夷の叛きし時、大命を奉じて討伐に赴きし上毛野田道が、却つて蝦夷に敗られ戰死せし處。その位置に就いては古來諸說ありて一定せず。或はこれをイヲと訓して上總國夷灘(今夷隅郡)に當て、或はこれをイシと訓して常陸國多賀郡の鄕形村の大字に伊師の名を存する地方に當て、或はまたこれを陸前國石卷市の邊に擬するものあり、詳ならず。然し石卷は蝦夷の根據地たる仙臺平野にあり往昔は淺と稱せし所にて地理的にも妥當なり、且つ石卷は卽ち伊寺牧より出でたるものと思はる。此地に擬定するを適當と思惟す。石卷市に隣接する牡鹿郡蛇田村の薬師寺といふ寺に「靈蛇田道公墳」と刻める小墳あれど、これは國史によりて僞造したるものにて信ずべからず。仁德紀「五十五年蝦夷叛之、遣田道、令擊、則獲蝦夷所敗、以死千伊寺水門、時有從者、取得田道手經典其妻、乃抱手齧面鑑死、時人聞面鑑齧矣、是後、蝦夷亦畏之、略人民、因以掘田道墓、則有大蛇、發目自墓出、以咋蝦夷、悉被蛇毒而多死亡、唯一二人得免耳、故時人云、田道蹄既亡、逢報讐、何死人之無知耶」

イシバ　石場

【石場】 江戸深川の地名。現今深川區古石場町。江戸時代岡場所のありし地、古石場・新石場に分る、前者は延享四年、後者は天明二年創設、新石場は古石場の西方に位し共に大島川に臨み蛤町・大島町に對す單に石場といへば古石場をさす。辰巳之圖・序「打附有れば椿下伽藍あり、豈分貳人六すには新地、入船、石場、三間堂を譬て愛に樂む」里のをだまき「新地の名いつとなく古、石場の人自和ちぎ、道々客の入船町」

【石場】 大津市の地名。馬場の北方湖岸にあり、往時の打出濱はこの附近にて、矢橋に渡る渡船場に當る。いま京阪電軍大津線の一停留場あり。假名手本忠臣藏・八「石部石場で大石や、小石拾うて我がつまと、珠でつさすりつ手に掴ゐて、やがて大津や三井寺の鐘を越えて山科へ、程なき里へ急ぎ行く」

イシバシ　石橋

【石橋】 福島縣磐城國相馬郡の西部。西は伊達郡に隣る。阿武隈山脈の北部に當り、高原性塞地にして新田川・眞野川の上源の地。東方の原ノ町を去る約二十六粁、西南方伊達郡川俣町へは約八粁。林野多く、耕地は谷間にやゝ拓く。主産物米・麥・蕎麥・繭。古くは和名抄陸奥國行方郡多珂鄕に屬せるものゝ如し。もと臼石、二枚橋の外四部落を合して建てしもので、隣村飯曾村と組合村をなし、役場を飯曾村の大字飯樋に置く。二枚橋は戊辰の役八月廿七日に川俣駐屯の仙臺兵が不意に此の地にある相馬兵(西軍)を攻め破りし所。

【石橋】 常陸國にありし古驛名。常陸國府より奥州への濱街道の一驛。助川驛と河内驛との間にあり。弘仁三年他の五驛と共に廢す。其地今詳ならざるも助川・河内二驛の中間に其地を求むれば大體那珂川の南岸、茨城縣那珂郡石神村の邊なるべし。

【石橋町】 栃木縣下野國下都賀郡の東北部。宇都宮市の南方約十四粁。東は芳賀郡に境す。所謂關東平野の北部に位して土地低平、利根川の支流思川西部を南流し、農耕盛んなり。殊に千瓢の生産地として著名なり。奥州街道北方宇都宮市より來りて南方小山町に通じ、江戸時代は小金井、雀宮間の一宿驛たり。今東北本線之に沿ひ、石橋驛(明治十八年設置)を置く此地に豪族石橋氏あり、源義家奥州征伐の際、これを阻止せしも反つて敗戰す。村名は此の豪族の名に據れりと傳ふ。江戸時代には幕府の直轄領となり、明治元年石橋縣と稱し、村内の開雲寺を以て其廳舍に充てしも、同年日光に移せり。明治二十四年委村より分離獨立し一村を爲す。眞言宗開雲寺は寛永年間徳川家光、宇都宮釣天井危難の際、避難せし所といふ。

【石橋】 神奈川縣足柄下郡にありし村。大正二年米浦・根府川・江ノ浦の三村と合併し片浦村を建て、その大字となる。

【石橋山】 神奈川縣相模國足柄下郡片浦村大字石橋にある山。最高點二五五・九米。小田原町の西南方箱根火山、外輪山の一たる聖岳、東北方山脚上の一高處、勢海街道その下を通ず。治承四年八月二十三日源頼朝、以仁王の令旨を奉じて義兵を擧げ、北條時政父子と共に伊豆相模の住人三百餘騎を率ゐて石橋山に陣す。時に大庭三郎景親・俣野五郎景久・河村三郎義秀等三千餘騎の精兵を率ゐ谷を隔てゝ對陣す。伊東二郎祐親法師は三百餘騎を率ゐて頼朝の後山にありて頼朝を襲はんとす。三浦某は其郎從を遣はし景親黨の據る家屋を燒く、その煙天を突く。景親等遙かに之を見て三浦黨の爲せしなりと知り、黄昏に至り景親諸將と相謀し、明日を待ちて戰はゞ、三浦の大勢馳せ加はり、敵ること容易ならずとなし、直ちに頼朝の陣を襲撃す。頼朝の兵奮戰するも衆寡敵せず、佐那田余一義忠及び武藤三郎等之に死す。景親勝に乘じて頼朝を追ふ、飯田家義、志を頼朝に寄せ、景親の陣中にありて、景親と戰ひ頼朝を逃れしむ。翌日頼朝相山・堀口邊にあり、景親三千餘の兵を以て追窮す。加藤・佐佐木一族・天野遠内遠景・堀藤次親家等奮戰し、加藤景員以下多く死す。頼朝は數度戰ひしも遂に利あらず、土肥實平の謀により臥木の内に隱れ、士卒分散す、景親益〻頼朝の後を追ひ探し求む。時に梶原平三景時なる者あり、頼朝の在所を知るも此山に人跡なしと稱し巒を降り、頼朝遂に逃れて眞鶴より海を航して安房國に至る。佐那田余一の墓今石橋山に存す。

イシバタケ　石畑村　東京府武藏國西多摩郡の東隅。所澤町と青梅町の中間に位し、東北部は狭山丘陵の西端に當り、埼玉縣武藏國入間郡に境す。その丘陵は林地なるも、その他の大部分は土地平坦にして桑畑よく拓け、繭の産多し。入間郡豐岡町と八王子市を結ぶ縣道は南北に青梅街道は東西に通ず本村は殿ヶ谷・箱根ヶ崎・長岡の三村と共に組合村をなし役場を箱根ヶ崎に置く。此地は舊山口庄の内にして、近世武藏七黨村山黨の發祥地たる村山郷に屬し、田安氏の所領たり、元文元年大岡越前守の檢地により貢租を定め、小野田三郎右衛門これを支配すといふ。

イシハマ　石濱

【石濱】 東京市淺草區の町名。もとは淺草寺の北方待乳山附近より橋場の邊に至る隅田川の西岸一帶の稱。往昔は船著にしてまた奥州に至る街道に當る。正平七年閏二月新田義宗及び其一族が足利尊氏の軍を小手差原に破りし時に尊氏の落延びし石濱(太平記)は此地なるか。のち康正年間千葉實胤此地に石濱城を築く。城は天正の末頃まで存續せしものならんも其址いま詳ならず。一に今の石濱神社、(荒川區南千住三丁目)の地なりとも或は橋場の總泉寺の位置なりとも云ひ詳ならず。附近は古來史蹟に富み、彼の在原業平が「名にしおはばいざこととはん都鳥わが思ふ人はありやなしやと」詠めるは此邊に擬すべきか。里見八犬傳・三ノ三「田畑を過る夏の雨に、追れて襲輪の笠やどり、石濱村に母まちて、稍うち渡る墨田河」同・六ノ一「淺草よりこなた無戸、金曾木、阿佐谷、高屋、千束の村々は、みな石濱なる千葉殿の采邑にて候が」人間萬事虚誕計・後「イヤ長命寺前から、眞乳山今戸へん、あるひは鼠屋、石濱の晩望、ヤそのゑ景なる事、たとふるに物なし」

【石濱】 愛知縣知多郡にありし村。明治

三十九年藤江村・生路村・鯖川村・森岡村等と共に廢せられ東浦村を新設す。

イシハラ　石原　山城國紀伊郡の郷（和名抄）。今の京都市下京區に吉祥院石原町あり郷名の遺稱。山城名勝志に「石原郷和名抄云紀伊郡、今吉祥院村南島祥村有ニ石原村ニ桂川東也」とあり、山州名跡志には「石原、在ニ吉祥院南、有ニ民居ニ名ニ村、石原筥ニ上・下、上は今云ふ古貞院村是なり」と見ゆ。三代實錄、貞觀十三年八月の條に、制ニ定百姓葬送放牧之地ニ其一處、在ニ山城國葛野郡五條荒木西里、六條久受原里、一處在ニ紀伊郡十條下石原西外里十一條下佐比里ニ云々」とあり。中世は石原莊と稱し、日吉社領注進狀は紀伊郡石原莊に作る。

【石原山】　鈔見山（兵庫縣美父郡）の別稱

イシビ　石火　伊豆國那賀郡の郷（和名抄）。今の靜岡縣賀茂郡岩科村・三濱村の地に當る。岩科村に大字石部あり、蓋し其遺稱なり。石部とは石火の訛れるものにして、建暦元年の文書に石火宮に作る。此の神社天文十二年の上梁文に仁科莊雲見郷石火村とあれば石火郷の廢したるは久しき以前なるべし。

イシフリ　石布理川　紀伊國牟婁郡にありといふ川。いま何れの川を指すものか未詳。歌枕。夫木・二四「みくまのやいしふり河のはやくよりれがひをみつの社なりけり　忠優朝臣」

イシベ　石部町　滋賀縣近江國甲賀郡の西北部。阿星山（六九三米）の北麓にして西は栗田郡に界す。西南部西部は一帶に丘陵地を成すも、東北部標田川沿岸は土地平坦にして水田拓け米を多産す。省線草津線はゞ東西に走り石部驛（明治二十二年設置）を置く。石部の名は延喜式の神明帳に見える石部鹿鹽上神社（即ち今の吉神子神社）より起りしものにして、後一時磯部に作れり。中世檜物下庄に屬し江戸時代は東海道水口・草津二驛間の一宿驛たり。また古來歌枕としても知られる。明治三十六年町制を布く。萬葉・一一「白檀弓石邊の山の常磐なる命なれやも戀ひつゝ居らむ」夫木・二二「よこた山いしべがはらのよもきふに秋かぜさむみ都こひしも」丹波與作待夜の小宰節「草津の三介三藏、石部金吉泊りならとめてたも」御所櫻堀川夜討・一「夜を日に次いで東海道、伊勢路も跡に水口や、石部の宿の本陣に、泊り賑ふ勝手の混雜」假名手本忠臣藏・八「伊勢と吾妻の別れ道、驛路の鈴の鈴鹿越え、間の土山雨が降る、水口の葉に宵ひ嘆す、石部石塲で大石や」（吉御子神社）大字石部に鎮座。村社。祭神・鹿苑津命・吉比古命・吉比賓命・延喜式神名に見ゆる石部鹿鹽上神社は即ち當社にして承平五年吉御子と改稱す。垂仁天皇即位二年神の示現に因り、宇加乃彦の御子吉彦、吉比賓等を奉齋して鳥乃御前大明神と稱し奉り、蟻喰天皇の御宇弘仁二年に現地に遷祀す。後兵燹に罹りて機亡し元治元年山城賀茂別雷神社の社殿を請け造營せり、是即ち今の社殿にして國寶たり。祭神の吉彦命坐像（木造）は鈴原時代初期の優秀なる作にて、隨神坐像二驅と共に國寶たり。例祭五月一日。（常樂寺）大字西寺にあり。天台宗。阿星山と號し、長壽寺を東寺といふに對し一に西寺の稱あり。和銅年間良辨の開基に係ると。初め法相宗なりしも、延暦年間天台宗に改む。列聖の御願依萬く陽成・近衛・亀山三天皇の御宇、各官符を下して勅願所と定めらる。近江巡禮第一番の札所たり。本堂（觀音堂）は延文五年の建造に係り、宮殿風の面影を存し、應永五年曾麼碑の再建になる塔婆（三重塔）と共に國寶たり。其他寺寶中の、木造釋迦如來坐像一驅（鈴原時代作）、木造廿八部衆立像二十八驅（本尊千手觀音像の脇侍にて、その中の一驅の胎内文書に德治三年八月廿二日法橋永實の作とあり、また延慶元年六月十八日の奥書ある勅進狀には、此等の像を造立して本尊の脇侍とする旨の記事あり、何れも彩色玉眼嵌入の像にて、委態に活潑變化の狀あり）紙本墨書常樂寺勅進狀三卷（延慶元年六月、延文五年七月及び應永五年二月の奥書あり）等は何れも國寶たり。一月十八日の追儺會には鬼走の古式として村民赤鬼の假面を被り炬火を執りて堂の前後を相駆逐せり。（長壽寺）大字東寺にあり。天台宗。阿星山と號し、俗に東寺と稱す。寺傳に天平年間聖武天皇の勅を奉じて良辨之を開創すといふ。同十五年聖武天皇信樂遷宮に方り西寺と共に其鬼門鎮護の任に當れり。清和天皇の御宇勅願寺となり、爾後源頼朝北條貞時・足利尊氏等の武將各々寺領若干を寄せ歸信せり。本堂は俗に地藏堂と呼ばれ、形態の輕快優美、鎌倉時代の建築にして國寶たり。其他、木造阿彌陀如來坐像一驅（鈴原時代末期の作）木造漆箔阿陀彌如來坐像一驅（鈴原時代初期の作にして、高さ一丈、彌陀の定印を結べる大像にて雄大なる趣を現せり）、木造釋迦如來坐像一驅（鈴原時代の作）板裝、絹本着色十六羅漢圖十六幅等は國寶たり。（善隆寺）石部にあり。淨土宗。石部山と號す。天正元年曇誉上人の草創。本尊阿彌陀如來は傳教大師の作と傳ふ。貞享元年炎上後、石部上舊址に移建す。

イシホ　石保　標南國宍粟郡の郷。↓石作

イシボトケ　石佛山　飛騨山脈中の一峯。岐阜縣益田郡高根村に聳ゆ。東北方の乘鞍岳と南西方の御岳の中間に位す。標高一三六七米。この山の南麓に益田川流れ、また松本市と岐阜縣高山町を連ぬる木曾街道の交通路あり。

イシマ　伊島　常陸國鹿島郡の郷。（和名抄）今の茨城縣鹿島郡白島村・上島村・新宮村などの地に當る。郡郷考に「今飯島村是あり、北隣浪上村に、飯島山大悲寺あれば、其地も郷中なり」とあり、飯島は伊島より來たものか。中世以來、北條氏の領域たり。

イジマ　伊島　岡山縣御津郡にありし村、大正十年三月同山市に編入。

イジマ　飯島　神奈川縣相模國鎌倉町材木座東南の海濱。西濱ともいふ。此處は東鑑、壽永元年十一月の條に伏見冠者廣綱住し、頼朝卿は寵妾亀の前を廣綱の家に預け置く。此事露顕なりしも北條殿の室、牧の御方、頼朝の御臺所政子の方に申されしため政子憤り、遂に牧三郎宗親に命じて廣綱の家を破却せられ、廣綱は亀の前の御方を伴ひ遁れ出て三浦の證橋の大多和五郎義久の家に至るとあるも此地なり。南の出崎を飯島崎と稱し、又和賀江島とも稱す。東鑑、貞永元年七月の條に勧進上人往阿彌陀佛が舟船の煩なく着岸する爲めに和賀江島を築くべき旨を願ひ出しに依り、武州泰時殊の外歎喜して之が工事に着手し、諸人もまた之を助成し同年八月其功を終る。仍て尾藤左近入道、平三郎左衛門尉、諏方兵衛尉を御使とし巡檢せられしと、鎌倉時代は築造して船瀬と爲し築島と稱せしも、後世海潮激衝して築島が崩壞し、形狀全く失はれ唯海上に纒岩の孤立するのみ。

イシマキ　石卷

【石卷村】　愛知縣三河國八名郡の南部。西南は豊橋市に接す。東は靜岡縣引佐郡に境す。赤石山脈の餘脈なる淺間山脈西南部の西斜面の地に當り、その支脈西に延び北境に吉峰山（三八二米）、南部に石卷山（三五六米）等をなす。西部は豊川下流々域の平野に續き、地平かに田畑發達し、米・藺・藺卵の產多し。姫街道引佐郡より東境上の本坂峠（四四五米）を越えて東西に走り、西方御油町に至り、豊橋市より新城町に達する縣道南北に貫きて姫街道と交はり、交通の便よし。村内に豊橋航空整備あり。當村は和名抄の八名郡和太郷・美和郷・多米郷及び義父郷の一部の地にして、明治三十九年玉川村・當山村・西郷村・三輪村・多米村を廢し當村を新設す。而して村の南部の大字多米は昭和七年豊橋市に編入さる。當村は清和源氏と稱する大内氏の末裔盛正、八名郡に來り、此地を西郷庄と稱し、其七代の孫正員は西郷庄當山月が谷の城主となり松平清康に屬し後今川氏に降る。其子正勝は永禄四年月ケ谷より中山（今石卷村の大字）の堂山に移り、又五本松に移る。正勝及び其子元正は永禄五年中山の五本松城に戰死し、元正の弟義勝も元亀二年竹廣合戰に討死す。元正の妹は戸塚忠春に嫁し、其の間に愛子を設け、後、淫逸之助正倚に再嫁す。愛子は義勝の室となり家具を生みしも義勝の死後、天正六年濱松に召され德川家康の侍妾となり西郷局と稱せられ秀忠・忠吉を生む。大字當山は當瀬にも作り、西郷の南にして引佐郡氣賀町に通ずる山道に當り、此界嶺を本坂越、又は二見路と稱す。近世は姫街道といふ。（石卷神社）郷社。祭神、大己貴命。石卷山上に奥宮あり。創立年代詳ならざるも、仁壽元年從五位下を授けられ延喜の制式内小社に列す。古來地方の古社として其名國内に洽く、上下の崇敬厚し。例祭五月五・六日、九月十五・十六日に、（相本八幡社）郷社。祭神帝中津日子命外二神。創立年代未詳なるも地方の古社にして、天正十九年領主今川氏眞社殿を建立す。江戸時代には德川幕府より三石の社領並に社邊竹木及諸役免除の朱印を附せられ近郷の產土神たり。（日吉神社）大字萩原に鎮座。郷社。祭神、大山咋命。創立年代未詳なるも、江戸時代には藩主小笠原氏、伊奈氏より社殿の造營、社領の寄進があり、又、林氏・西郷氏等の代官は鳥居を建立し、鰐口を寄進す。尚ほ近郷の總社として崇めらる。（正宗寺）大字當山にあり。臨濟宗妙心寺派、當山と號す。寛暦年間西郷彈正左衛門の開基、日顔禪師の開山。末寺三十三箇寺ありしといふも現在如何にや。寺寶に應擊・蘆雪・元信・探幽・兆殿司等の名畫を藏すといふ。

【石卷山】　愛知縣八名郡の南部、石卷村にある山。豊橋市の東方約八粁。赤石山脈の一支淺間山脈南西部山支の一峯、標高約三五六米。頂上の展望廣闊にして東方眼下に濱名湖。東北方遠に富士山、南西に渥美灣・伊良湖嶺等の眺望絶佳。山頂に一大怪石巒立して牙笏の如く、山中松杉繁茂する間に延喜式内の石卷神社の祠あり。世人吉野の大峰に擬し修業場として登攀する者あり。豊橋市の東北に近く三伏の候に鎌夏の地として賑ふ。

イシマクラ　石枕　愛知縣丹羽郡古知野町の大字。此地はもと秋津村の大字なりしも明治三十九年古知野町に入り石枕は其大字名となりたるもの。此地は古への石枕里の遺稱なるべく古來石枕の傳說により名高し。即ち鹽尻にも尾張國石枕の里は、昔東國に通ふ路なりき、驛舍の老嫗旅人のやどり著けば、臥所の下に石の枕を隱し置き、寢入りし頃、その枕にあて、打殺し、物なとり、屍をば埋めなどせりといひ傳ふ」と記されてあり、嫗はこれを淺ましく思ひ、或時男裝して訪せる老婆知らずして打碎き我嫗なりしを見て大いに驚き發心して嫗の菩提を弔ひしと傳へらる。

イジミ　伊神　↓五十公野村

イシミネ　石峯　福岡縣遠賀郡にありし村。明治三十一年六月村の一部大字修多羅は若松市に編入、更に同三十九年十月全村を同市に編入して村名を失ふ。

イジミノ　五十公野村　新潟縣越後國北蒲原郡の中部。新發田町の東南に接し、五十公野山と稱する丘陵、中部を南北に延び其東麓を加治川北流し、川により村内東村に接す。蒲原平野の一部にして田畑よく拓け米・藺・野菜類の產多く

又櫻桃・無花果・松茸・鯉・鰻を特産とす。新發田町と東蒲原郡津川町とを結ぶ縣道村内を通じ、鳴沼村より南走する間道此縣道と交はり、更に南に走り笹岡村の出湯温泉村杉温泉に至る。倉鎌赤谷線は五十公野驛(大正十四年設置)を置き、東南方赤谷村に至る。當村は中世の豐田莊の内にして、會津街道の五十公野驛の地、延喜式の越後國伊神、驛馬二疋とあるも此處なるべし。五十公野は古訓イキミノで、或は井地峰に訛る。北國太平記に鎌倉公の小姓、井地峰勘五郎は剃髪して道如齋(道壽齋の誤なるべし)といふとあるは即此地の人なり。上杉謙信の時、井地峰道壽齋の據りし所。村内の岩井神社は式内、沼垂郡の官社にて、五十公野山上にあり。後世本地佛を置き觀音堂を建て岩井堂と號し、當國二十八番の札所たり、別當を白蓮寺といふ。〔五十公野城〕五十公野山中にあり。天文年中、五十公野大膳亮弘家居住す。後に五十公野栄女正長澤道壽齋居住す。天正年中新發田治長新發田源太治時と共に上杉家に叛き亂を起し、天正十五年九月景勝五十公野へ押寄せ、後の山に兵を入れ、諸木を切倒し深田に數渡し、景勝は山上に居り城中を眺下に見下し、黄夜三十餘日を待て直江山城守を攻め落す。栄女正・道壽齋は誅せらる。道壽齋は能州山吉城主長澤筑前守の小姓なりしを、永禄十二年能州が謙信に襲せし時、謙信之を視て悦び所望あり、因て筑前守は之に長澤勘五郎と名づけ謙信に献ず。謙信剃髪の時、勘五郎も剃髪して道壽齋と改名し、五十公野城に封ぜられ、因幡守治長の女を娶る、栄女正は其父也。〔豐田神社〕大字五十公野に鎮座。縣社。祭神、新發田藩祖溝口秀勝。社名豐田は當地の古稱なり。溝口氏は清和源氏より出で、其祖新羅三郎義光の遠裔勝政、尾張國中島郡溝口郷に居り溝口氏を稱す。其子竹丸天正九年織田信長に召出され若狭國小濱にて五千石を領し、信長の死後豐臣秀吉を助けて柴田勝家を討ち、功により加賀國大聖寺城に移封され四萬四千石を領す。後豐臣の姓及び秀吉の偏名を賜はり秀勝と稱し、慶長三年當國新發田城五萬石に移る。慶長十五年卒す。謚號を淨見院といひ、廟を此地に建て靈を鎮めしも近年改稱して現社名とす。〔圓山寺〕淨土宗。縣指山と號す。創建年代不詳。元禄七年良巻上人の代、新發田領主溝口氏堂宇を建立す。本尊三尊の彌陀如來は熹心曾都の作なりと傳ふ。

イジム 伊甚・伊自牟　國造本紀に見ゆる國名。凡そ今の千葉縣上總國夷隅郡に當る。古事記は伊自牟、書紀には伊甚に作る。國造本紀は伊甚と書き、成務天皇の朝、安房國造の祖伊許保止命の孫伊己侶止直を國造に任ずとあり。安閑天皇の元年伊甚國造雜子直が後宮闕入の罪を勝ふ爲め伊甚屯倉を獻ぜしこと安閑紀に詳かなり。同書に「因定二伊甚屯倉一、今分爲二郡一、屬二上總國一」とあり、伊甚國はのち郡となり上總國に屬せしも、其期は恐らく大化改新の時なるべし。紀の今分けて郡となし云々は道記で伊甚屯倉を置きし時に郡となせしものにあらず。和名抄に上總國夷灘郡とあり、夷灘郡はいま夷隅郡となる。一説には伊甚を以て出雲國とし、出雲風土記出雲郡伊自美社即ち延喜式の伊甚神社を擧げ、其の所在地たる同國八東郡宍道町附近一帯なこれに當てんとするが記・紀の記すところのイヲムは上總の夷隅郡を以て之に擬するを以て妥當とす。安閑紀・元年四月「内膳卿勝臣大麻呂奉レ勅、遣レ使求二殊伊甚一、伊甚國造等詣レ京運晩、陸レ時不レ進、勝臣大麻呂大怒收二總國造等一、推二問所由一、國造雜子直等恐懼、逃二匿後宮内寢一、春日皇后不レ知二直入一、驚駭面顔、慚愧無レ已、雜子直等使坐二闕入罪一、當二科重一、請奉爲二皇后一、獻二伊甚屯倉一、分爲二郡一、屬二上總國一」※夷隅

イジム 夷針　常陸國茨城郡の郷(和名抄)。其地今詳かならざるも茨城縣新治郡藤澤村の邊なるべし。藤澤村の東北なる都和村の大字に今泉あり、郷名に關係あるか。往昔伊甚國造の族、上總より移住せしところか。延喜式に茨城郡夷針神社あるもいま不明。中世茨城北郡に屬し文祿以後新治郡に入りしものゝ如し。

イシムシロ 石筵　→高川村(福島縣)

イシムラ 石村　→八幡村(熊本縣)

イシモダ 石母田　→藤田町(福島縣)

イシモリ 石森

【石森町】　宮城縣陸前國登米郡の北部。東は米谷町へ約八粁、南は佐沼町に接し、北は岩手縣西磐井郡と界す。仙臺平野の東北部に當り、土地概れ平坦にして迫川と支流夏川西部を南流し、全町耕地開け水田・畑地多し。本吉街道東西に通じ、社線仙北鐵道の石森驛(大正十年設置)を置く。農産物中米の産多く、麥・蘭等これに次ぐ。明治四十五年町制施行。大字加賀野に加賀城趾あり、飯塚修理の居館なりしといふ。こゝの太子堂は天慶年中源義光の建つる所にして聖徳太子の彫像は雲慶の作なりと傳ふ。

【石森山】　福島縣平市東北境にある峯。標高二二五米。山頂東面には太平洋の浩波を望む。常磐炭田の東北部に當り、山の東北部に石森集塊岩と名付けらるゝ第三紀層發達せり。その山容により磐城富士の別稱あり。

イシモリ 石盛　→森田町(福井縣)

イシヤ 石屋濱　大阪市外を流るる淀川岸の古名。天鶴橋天神橋間の南岸八軒屋邊を稱したものか。黄夜用心記・三「石屋の濱より新三に乗合船」

イシヤクシ 石藥師村　三重縣伊勢國鈴鹿郡の東部。四日市市の西南方約一〇粁、鈴鹿川中流の左岸に位し、東は河曲郡に接す。伊勢平野の一部にして土地概れ平坦、西北部は林野、東北部は桑畑、南

半は水田拓け農耕に適す。主産物は工産米・繭・鶏卵等。舊東海道の宿驛。古くは(和名抄)高宮郷に屬し、のち高宮里と呼ばる。天和二年東海道の驛次となるに際し、眞言宗西願寺の石藥師堂に因み石藥師宿とし、村名これに從ふ。倉鎌間西本線の加佐登驛(高津瀬村)へバスの便あり。

萬葉集に石原(天十師原)とあるは此地を指せるものにして、略解には、いま石藥師佛と云ふは地の上に自然に立つ大石の表に佛の形を刻附けしものにして、佛を刻みしは後世のことなり、石原は上代より此地に大なる石がありしため、石の原と云ふ名から生ぜるものならんとの說明あり。また、丹波奥作待夜の小宮節「張るや鈴鹿を後に下れば、負けまいとせきに關より亀山に、煙草火打の石藥師、おつと桑名の舟渡し。博多小女郎波枕・下「尾張へ行くもの、先の宿まで駕籠賃いくら。石藥師までは道は二里ある駕籠賃ころり」(石藥師寺)大字石藥師にあり。古義眞言宗、高宮山と號し大覺寺末寺。神龜年中泰澄法師の開基に係る。本尊の丑石は法師の感得せるものにして、弘仁三年弘法大師、該石に藥師像を刻ぜしに蟾嶋天皇、其靈驗顯著なるを聞召し、精舍・僧坊・庫裡・方丈等壯大なる伽藍を建立せられ寺領を寄せて勅願所となし給ひ、高宮山西願寺と號す。のち寿永年間藤の冠者範頼一七日の參籠をなして驗あり西海に勝利を得たり。天正年中織田氏の兵火に堂舍美上し、時の住僧眞賢假堂を營みまた夢中に本尊示現ありて諸病平癒加持の秘法を傳へしにより、精米を加持し廣く世に施し諸人の疫病を救へり、之を藥師八割米と稱す。慶長年間當國神戸城主一柳監物直盛、その女の重き眼病を祈りて全快せし報恩の爲め、現今の諸堂坊舍等を再建すと。

イシャドー 伊舍堂　沖縄縣琉球國中城村の首邑。もと中城村と稱し中城王府の地にして、その城址はこの地の背後なる海拔約一五〇米の高處にあり。市街は海岸に向ひて發達し、南方の與那原と北方の池瀬とを結ぶ街道通じ、また馬車軌道これに沿ふ。大通りの小高き處に昔より有名なる三本の榕樹あり。この地は古くより歌の名所として知らる。當地の歌に「思ゆらば黒前島とめていまう れ、島や中城花の伊舍堂」盆踊歌謠「伊舍堂前の三本榕樹どつと珍らしもの、しゆのまんざいどつと珍らしもの、しゆのまんざいよう」

イシヤマ 石山

【石山村】　新潟縣越後國中蒲原郡の北部。新潟市と東南亀田町との中間に挾まる。信濃川・阿賀野川二川の下流に挾まれし蒲原平野の一部にて、北部に通船川西に向つて流れ、また信濃川の一分流・中部を新潟市の沼垂町方面へ通じ、西部に島屋野寫あり。村内山林、原野といふべきもなく全く田畑にて米の産頗る多し。沼垂より北蒲原郡の新發田町に通ずる縣道北部を走り、信越本線及び新潟市と亀田町とを結ぶ縣道中部を並行して南北に走る。當村は和名抄の越後國蒲原郡青海郷の内なるべく、中世の青海庄の内とす。天正年間に高田の士、早津長左衛門外二名が歸農し大字西山を開拓せしに始まり、文禄・慶長・元和・寛永年間に至るまで漸次に開發發達せり。大字馬詰は文禄年中開拓せし處。紫竹は始め紫竹山新田と稱し、寛永十三年開拓せし處にして、領主巡見の際、誤つて紫竹新田と屬出しためそれが本名となりしと。また上水戸・下水戸とは往時沼垂港の水戸のありし所より出し地名なりと。近年併合して當村を設立するに當り、主要部落石山を採り以て村名となすといふ。

【石山】　→佐分利村(福井縣)

【石山】　滋賀縣近江國浅賀郡の舊町名。昭和八年四月大津市に編入。舊勝所町の南に位し東及南は瀬田川を距て、栗太郡に隣り西は横田川を以て京都府宇治郡に境す東海道本線の石山驛(明治三十六年設置)は番勝所町の地籍にあり、京阪電氣大津線これと交叉す。この地古くは和名抄古市郷に屬せしものならん。名刹石山寺は奈良時代以後も營繕され觀音の靈所にして地は所謂近江八景の一にして石山の秋月として古來觀月の名所。その後宇多法皇の行幸されし以來平安朝を通じて皇室の信仰厚く行幸啓相接ぎ、貴族並に庶民も頻に參詣し、これを石山詣と稱し、東三條院の如きは五度までも御輦を運ばせられ、和泉式部、赤染衛門の如き歌人も參詣してその文藻なべ、また紫式部が源氏物語述作の所觀をなすと傳へられ、幾多の風流韻事を殘す。石山の名は境内にある硅灰岩よりなる一大奇巖より起れるもの。新古今集・一六「都にも人や待つらむ石山の峰にこもれる秋の夜の月」藤原長能」(石山寺)石山の山腹景勝の地にあり。眞言宗東寺派。山號石光山。東大寺の大佛造立の時、これに檢する黄金を得るために、聖武天皇が良辨に敕して聖德太子の持佛と稱する二體如意輪觀世音を石山に安置し祈誓せしめ給ふ石山院に始まり、而して奥州より黄金の出づるに及び丈六の大悲像を造りその中にさきの觀音像を藏め、堂宇は孝謙天皇の天平寶字五年より六年にかけて建立されしもの。その後宇多法皇が行幸されし以來平安朝を通じ皇室の信仰益〻厚く、貴族並に庶民も石山詣と稱し類りに參詣せしは觀音の信仰と當寺の風光によるものならん。承暦二年火災のため伽藍全燒せしも建久年内幕朝が再興し、建武年中には寺領一萬二千石に達す。天正の頃再び廢絶し、淀君これに寺領を附し堂宇を修め以て今日に及ぶ。堂塔は瀬田川の西岸に屹立せる硅灰岩盤上に位し遠に琵琶湖を俯瞰し、殊に中秋明月の

山上に出づる月の晩は實に八景の名に負かず。德川氏も慶長十八年寺領を附して崇敬の誠を表す。建築の主なるものは觀音堂・多寶塔・鐘樓・東大門等にて特別保護建造物たり。就中多寶塔は鎌倉時代の遺物にて我國多寶塔中の代表的なるもの。本堂の側に紫式部が源氏物語を書きし處と稱せらるゝ源氏の間あり。また寺寶には國寶頗る多く、その主なる物は多くの佛像の外「石山寺緣起」「佛涅槃圖」「源氏物語」「史記」「漢書」「左傳」等にして特に文亂筆石山寺緣起は我國の佛刹繪調傳中の白眉と稱せらる。佛像中有名なるものは觀世音菩薩立像（金銅、高約七〇糎、白鳳時代）、毘沙門天像（木造、高約一・五米鎌倉時代）、大日如來坐像（木造、高約九一糎、鎌倉時代）等。なほ近年境内及び附近より各一箇づゝ製鍍襷紋式銅鐸の發見ありしことはこの邊の古代史研究に注意すべきこと。北内に月見亭あり、眼下に瀬田川を望み鏡方には瀬田の唐橋等見え、頗る眺望に富む。〔石山寺硅灰石〕指定天然記念物。境内に多くの大岩石露出す。花崗岩と石灰岩の鍋接によりて成りし硅灰岩なり。〔石山城〕舊石山町南方の山上にありしもの。足利義昭が、三好三黨及び淺井、朝倉兩氏と結び、恩誼を忘れて織田信長を滅さんと謀り、近江甲賀の士を誘ひ石山、堅田に壘を築く。信長賀を義昭に納れ和を講ふ。義昭肯んぜず、よつて信長柴田勝家・明智光秀を遣はして石山城を攻めしむ。城未だ完成せず而かも城兵は訓練を受けざる土兵なりしを以て旬日ならずして陷る。〔石山驛附近の名所〕（一）古戰場として名高き栗津ケ原は驛のすぐそばにて近江八景の一。今井金平の墓あり。（二）瀬田ノ唐橋。驛より約一粁、近江八景の一。驛よりは電車・バスの便あり。（三）官幣大社建部神社。驛より約一粁八、バスの便あり。（四）石山寺。驛より約二粁四、電車・バス・汽船の便あり。近江八景の一にて西國三十三所の第十三番札所。（五）瀬田川洗堰（南郷洗堰）驛より約四粁八、電車・バス・汽船の便あり。（六）立木觀音（安養寺）驛より約七粁半、山麓までバスの便あり。（七）岩間寺（正法寺）西國三十三所の第十二番札所。石山寺より約四粁。

【石山橋】近江國滋賀郡にありといふ橋歌枕。今の滋賀縣大津市内の石山寺の附近にありしものなるべし。明玉集「東三條院石山に詣でて給ふ時　かくしつついかはつきむ羽衣のたえすきなゝ石山の橋　法性寺入道」

【石山】一向宗の本山石山本願寺のありし處。今大阪城西本丸邊の地に當る。この地はもと玉造莊小坂村と稱し、石多くありしより石山と名付くと。石山本願寺は石山御堂、大阪御坊とも稱す。明應五年蓮如が退隱の場所として攝津石山の地を相し道場を建て山科本願寺の別院とす。天文元年その孫證如の時六角及び日蓮宗の徒に山科本願寺を燒かれしため、本尊阿彌陀の銅像を此處に移し本山とし、特に方八町の城構を築き世に石山城と稱せらる。永祿七年十二月火災に罹り、證如の子顯如これを再建、大いに武備を充實す。元亀元年一向宗の徒この地に據り三好三黨を授け織田氏に抗す。織田信長來り攻めしが勝つこと能はず、三年三月一旦和を講ぜしが天正二年宗徒は毛利氏と通じ再び信長と斷つ、是より連年信長の攻むる所となり海陸の包圍を受け孤立の狀態なりしも、宗徒は一向專念の信念に立ち獻身的に戰ひ容易に屈せず。時に荒木村重の叛ありて攝州の諸城皆信長に反するや、信長憂慮して朝廷に請ひ、和を本願寺と結ばんとす。八年三月正親町天皇、勅を本願寺に下し信長と和し石山を退去せしむ。八月顯如は石山を退き、紀伊の雑賀に移り、本願寺に更に和泉貝塚、大阪天滿に移り四轉して今の京都六條に移る。石山本願寺址には織田氏香柔を置いて守らしめしが、同十一年豐臣秀吉大阪城を築き同十三年工城る。また明應五年本願寺の蓮如、石山別院を建てしより、天正八年蓮如が石山城を退居するまでの期間を石山時代と稱し大阪市史の一時代を劃す。

【石山】岡山市の古稱。

【石山村】愛媛縣伊豫國上浮穴郡の西部喜多郡内子町の東方約一〇粁。肱川の上支小田川の谷の南側を占め北は小田町村に隣り、西は喜多郡大瀬村に界す。全村概ね山地なるも米・麻・蚕等の產あり。交通なほ便利ならず、小田町村を東西に貫く縣道によるを最も便なりとす。村名は大字の立石、南山より取れるもの。往昔菅原道眞讒岐の國司たりし時來村せることありといはる。

イジュ　伊集　→中城村（沖縄縣）

イシュー　伊州　伊賀國の略稱。

易林本節用集下「伊賀伊州」

イジューイン　伊集院　鹿兒島縣薩摩國日置郡の中部。東北は鹿兒島郡伊敷村に、南は上伊集院村に、北は下伊集院村に界す。町内丘陵地多きも西北部を流るゝ神之川及びその支流の谷は土地平坦にして水田・桑園拓く。縣道四方に通じ、鹿兒島本線の伊集院驛（大正二年設置）を置き、社線南薩鐵道を分岐す。伊集院中學校あり。この地方は古くは伊集院と稱し、中世上・中・下の三村に分けられ、大正十一年中伊集院村は伊集院町と改稱す。古來交通の要衝に當り大字下谷口は驛所にして、また本郡の治所たりし地なり。大字壁之原に鎮朝原あり。鎮西八郎爲朝八丈島に配流せられしも後愛に遊歷して住居すといふ。〔一宇治城〕本城は一に嚴山とも稱す。曆應三年八月伊集院長門忠國島津氏に反して當城に據りしも、五代島津貞久これを討ちて城を復く。忠國よりて當城中の一郭平城に據

り。同四年八月及び康永元年八月の兩度貞久の攻撃にあひしも固く守りて終に陥ちず。貞德二年に至り九代島津忠國これを圍めるに及び時の城主忠國五世の孫伊集院大隅守久終に支えずして肥後國に遁る。大永六年十四代島津勝久當所を島津相模忠良に與ふ。同七年忠良大隅加治木に在るに乘じ、叛臣出水領主島津八郎左衛門實久是を襲ふ。城兵奮戰せしも利あらず敗る。天文五年忠良其子貴久、將として是を攻め當城を奪回し十四年貴久田布施城を去りて當城に移りしも、同十九年又鹿兒島に遷る（長崎城）大字竹之山にあり。島津實久の舊肥後大和盛治の居城なり。天文六年島津忠良是を攻む。盛治奮戰せしも終に敗れ盛治以下十餘人戰死して城陷る。城北約三百米にある小迫郷は盛治戰死の跡にて後には松樹二本を植えて標となす。〔德重神社〕大字德重に鎮座、縣社。祭神、島津義弘。往昔は法智山妙圓寺と稱する禪刹にて、島津氏の菩提寺なりしが、明治初年神佛分離の際、島津義弘の神靈を奉祀して神社となす。義弘の畫像を始め多數の寶物を藏す。例祭七月二十三日。舊曆九月十四日の祭典には、鹿兒島市内の青年塗が甲冑または陣羽織を着し、武器を携へて壯烈な行列を作り、約三二粁の行程を徒を徹して當社に參詣するを例とし、世に「圓妙寺詣」といふ。義弘が關ヶ原役に於ける苦戰を記念せるものなりと言ふ。境内は老樹鬱蒼として碧瓦朱欄を圍む。

イショー　渭松面　朝鮮平安北道渭原郡の西北部。鴨綠江の左岸に近さも、南部・北部は山地ふかく中部を東面に曲流する渭原江に沿ひて耕地開け米・麥・大麻・棉等の農產あり、山地より林產多く牧畜も行はる。首邑は西部の渭原江に沿ふ城内洞とす。

イシラ　石良瀬　→虚飛瀬

イジラ　伊自良谷　岐阜縣美濃國山縣郡西部の山谷。行政上いま上伊自良・下伊自良二村に分る。釋日本紀卷十三に上宮記を引き窟富富等王は牟義都國造の伊自牟良君の女、久留比賣命を娶り、汙斯王卽ち彦主人王を生みたりとあり。之によれば本郡初め牟義都國に屬し、伊自牟良君は此地に住せしにより地名に因り名づけしものにして、のち伊自良となりしならん。美濃志には伊自良郷名見ゆ。美濃古跡志に伊自良城見え、伊自良次郎の居城たりとあり。のち土岐頼藝の臣、陰山一景が之を守りしといふも詳かならず。

イジリ　井尻

【井尻】島根縣出雲國能義郡の本郡。安來町の南方一二粁。東は島取縣伯耆國西伯郡に接し其界に比婆山あり。村内殆ど丘陵地にして闘葉樹林多く伯太川の上流井尻川村の中部を北流しその沿岸に水田拓く。主產物は米・清酒・林產物・繭等交通は北方の山陰本線安來驛へ約一二粁バスの便あり。當村古くは和名抄母理郷の内か。德見大明神あり、出雲風土記の所保彌社、延喜式の志保美神社ならんといふ、比婆山の中腹に尼子氏全盛の頃置きし久米神社の神宮寺の遺址あり、この附近にまた其附屬坊たりし金鵄羅堂の遺跡を存す。これより更に登ること數町、丘上鬱蒼たる松林中に社殿あり、出雲風土記に久米社、延喜式久米神社とある古社なり。社後に石櫃を廻らせる封土あり、これぞ伊弉冉尊の神陵にて古事記に所謂「出雲國與伯伎國堺比婆山也」とあるは卽ちこれを指ずるものといふ。尼子經久深く之を尊崇し社殿を造營し社領を附しその居城宮田より大道を通じて參拜を怠らず且つ社僧を附し神宮寺及び四坊を造營せり。然るに尼子氏滅亡の後兵燹に罹りて其舊觀を留めず、松平氏の世に及び領内にかゝる名社ありては高官の應對に財力を落くさん事を憂へ消極的方針を取りしを以て舊時の盛觀を留めず。のち神官某一小祠を舊址に造營し寛文十三年再び今の地に奉遷せり、いま婦德の神とし參拜者多し。（八幡宮）大字市中屋にあり、郷社。祭神、誉田別命。創立年代未詳なるも、元亨年間の勅請と傳ふ。江戸時代には母里藩主の崇敬を受け、社號・額・燈籠等の獻納の外、社領五石を寄せらる。（志保美神社）大字市屋字小門口にあり無格社。祭神、奏美鳴命・大己貴命・稻田姫命。式内の古社なり。例祭九月九日。

【井尻川】→伯太川

イシロ　井代　愛知縣三河國八名郡にありし村。明治二十三年大野村より分村獨立せるも、同三十九年高岡・能登瀬名號・名越・細川・睦平及び當村の七ケ村を合併して七郷村を新設し現在今七郷村の大字たり。この地の大噴峯より採掘さるゝ建築用石材は井代石と呼ばれ古來名高し。

イシロ　印代　伊賀國阿拜郡の郷（和名抄）。今の三重縣阿山郡府中村の地にして同村の大字印代は郷名の遺稱とす。

イシワラ　石原

【石原】東京市本所區一町名。本所區の中部に位す。石原は江戸時代南本所石原代地町に對し北本所とも稱せらる。元祿年間松平對馬守の屋敷のありし處また此地は一に「わくら」とも稱せられたり。御府内備考に「町内里俗此邊わくらと相唱申候、町内より東之方に御賄方御組屋敷有之同所に御檢藏有之候に付相略し唱來候由に御座候」とあり。「南本所石原代地町の邊までも「わくら」と稱せしものの如し。

【石原】江戸より府中に行く途中の甲州街道の宿驛。江戸より六里（二四粁）往時は分陪庄の内に屬す。小田原記によれば上杉朝興、北條の爲に江戸城を落されて石原に落ちのびしも、其處の石原兄弟も戰死したれば川越に退くとあるも、この石原は此地を指す。新編武藏風土記に、

石原・下石原・上布田・下布田・國領を布田五宿と稱すとあり。いま東京府北多摩郡調布町の地とす。

イジン　伊芸　→出雲町（島根縣）

イシンデン　一身田　奇縁參宮線の驛（明治二十四年設置）三重縣河藝郡大里村大字窪田にあり。本驛より三〇〇米の處に眞宗高田派本山の專修寺あり。

イス　伊須灣　鹿兒島縣奄美大島の南東部にある灣。東方村の東南部、北の眞崎と南の皆津崎との間を西北に灣入す。長さ約六粁、灣口幅約五粁。灣岸に劇野子・勝浦・阿木名の部落あり。

イス　椅子山　關東州水師營會の西南部にある小丘。旅順市新市街の北方、大案子山・小案子山の北に並び、日露戰役に際して設けられし永久堡壘の一にして今原型のまゝ殘存す。

イズ　伊豆　ず

【伊豆沼】宮城縣、登米・栗原二郡に跨る沼。周囲約二八・七粁、本縣第一の大沼なり。南岸は新田村、北岸は畑岡村なり。沼の南方、新田村の南に長沼、西に近く内沼、北に小丘を隔てゝ杭ヶ浦沼あり。餘水は東端より流れて荒川となりて東流し迫川に入る。魚・蓴菜を產し、漁獵・鴨猟に適す。省線東北本線は新田村の地内を通じ、南岸に近く新田驛あり、また西岸に近く鼎編仙北鐵道太澤驛あり、交通至便にして狩獵の訪客多し。

【伊豆大島】→大島（東京府）

【伊豆崎】東京府伊豆諸島三宅島の北西三宅島燈臺（明治四十二年設置）あり。不動白光にして光達距離八浬。

【伊豆】→三宅島伊豆村（東京府）

【伊豆（國）】東海道十五國の一。一に豆州ともいふ。駿河・相模二國の間より太平洋に突出せる半島にして、これにより駿河灣と相模灣とを分つ。この半島の脊梁をなすものは富士火山帶の諸峯で、東側には相模にある箱根火山に續いて熱海火山（玄岳火山）天城山があり、西側には達磨山、猿越山等があり、北部狩野川の流域を除けば半島全部山地を成す。沿岸には東面に伊東、南面に下田、西面に松崎・土肥・戸田等の船著場あるも、下田の外は良錨地とは稱し難い。この國は古くより温泉を以て聞え熱海・修善寺を筆頭として湯ヶ原・伊東・長岡・土肥・蓮臺寺をはじめ十數箇所あり、氣候の温和なるより東京人士保養の好適地たり。伊豆の名稱の起原に就いては此國半島なれば出崎の謂なりといひ、出雲のイタは此謂なりといふ。夏にアイヌ語のエトは崎の意なれば之より伊豆の名成れるかと云へど知何にや。また温泉あるより出湯の轉訛せしものかとの說もある。此國廣く海に接し、殊に黑潮の流路に近く、群島列布するを以て、南西地方との交通風に開けたるものゝ如く、一に此國の開拓者は事代主命なりといふ。命は出雲を天孫に奉りたる後、一族隨從の諸神を率ゐ船に乘じて南海三宅島に來往し、八紀に二十七子を擧げ、次いで本國に渡りて開拓經營せりといふ。今半島沿岸の處々に有する傳說、遺跡及び延喜式神名帳に見える本國の神社數が九十二座に及び、而もそれ等の祭神が事代主命若しくは其眷屬たる事、而も今尙三島神社と稱するもの二十餘社ある事等を以てしても、上古の事も大凡推知し得らるゝ。建國の期詳ならざるも、國造本紀「伊豆國造、神功皇后御代、物部連祖天表梓命八世孫若建命定二鴈國造一」應神紀、五年十月「科二伊豆國一令レ造レ船、長十丈、船既成之、試浮二于海一、便經泛疾行如レ鴈故名二其船一曰二枯野一」とあるより見れば、蓋し應神天皇の御世に創建せられしものか。而して孝德天皇大化改新の際一旦駿河國に合せられしが扶桑略記・五、天武天皇白鳳九年七月の條に「別二駿河二郡六郷一爲二伊豆國一」と見えこの時再び置かれしものにして、續日本紀、天平十四年四月の條に「鴈二從五位下日下部直益人伊豆國造、伊豆直姓一」とあり、即ち此時は賀茂、田方の二郡なるべく、後賀茂郡を割きて那賀郡を置けるものにして、和名抄は田方、賀茂、那賀の三郡を載す。萬葉・一四・伊豆國の歌「伊豆の海に立つ白波の在りつつも飜きなむものゝ亂れ始めもや」日本靈異記は伊豆に駿河國風土記は威豆に、武備志譯は因慈に作る。古へ國府は今の田方郡三島町に置かれたり。聖武天皇の時罪人鵜使の地と定められ、平氏の盛時に源爲朝、頼朝共に此地に流さる。併も遺蹟の絶伊豆とは伊豆大島を指せしもの、頼朝大島に至らずして狩野川の下流の蛭小島と稱する地に居たり。是より先き此國は院の御料となり、地頭を狩野介といひ國内を管し他に伊東、河津、工藤、北條等の土豪あり。源頼朝兵を此地に擧ぐるに及び是等の豪族之を輔け、遂に霸業を成すに至る鎌倉幕府の初、山名義範を守護として國守を兼ねしめしが、文治年中後白河法皇の特旨により源頼朝に賜ひ、其子孫に傳へしむ。後足利基氏鎌倉管領となるに及び其執事上杉憲顯を以て守護とせしも憲顯足利氏に叛くに及び、畠山義清を以て之に代ふ。康安年中義深反き、憲顯再び足利氏に降りて本國の守護となる。享禄の頃關東大に亂れ、足利成氏の古河に去るや長禄元年に至り上杉（山内）顯房、上杉（扇谷）定正等潛軍足利義政の弟政知を堀越の館（今韮山村大字四日町の地）に奉じ、關東に號令す。延德年中政知卒し、内亂起るに及び北條長氏（早雲）襲ふて堀越を陷れ、政知の遺子茶々丸を殺し韮山に據りて全州を併せ次いで相模に進出す。天正の頃北條氏規を韮山に置き上方に備ふ。天正十八年豐臣秀吉東征して北條氏を滅ぼすに及び、本所は德川家康の有に歸し、内藤信成（韮山一萬石）、戸田忠次（下田五千石）、石川家成（梅縄五千石）、阿部正勝（市原郷五千石）等を分封し別に三島に代官を置き、州人江川氏をして之に任じ、幕領を治めしむ。既にして諸氏皆移封の後は、江川氏全州及び伊豆七島を管し、その職を世襲して明治維新に至る。明治の初め韮山縣を置きしが同四年廢して相模國にあつた足柄縣の管治とし明治九年靜岡縣の管轄に移し、同十一年伊豆七島及び小笠原島を東京府の管轄に移す。中世賀茂郡を割きて那賀郡を、田方郡を割きて君澤郡を置きしも、これ等の境界屢〻紛更あり。明治二十九年に至り那賀郡及賀茂郡の大部を以て賀茂郡を建て、四方、君澤二郡の全部と賀茂郡の一部とを併せて田方郡を建て以て今日に至る。

【伊豆半島】本州中部東南岸の一大半島伊豆國より成る。北は相模駿河二國の交界地域より鐵狀をなして南方太平洋に突出し、東の相模灣と西の駿河灣とを分つ南北約六〇粁、東西最も廣き處約三五粁あり。半島の地をなすものは、富士火山帶に屬する多くの火山にて、ほゞ東西二列をなす。一般に西列の諸火山は夙く東列のものはその後に噴起せるもの、如し。これを時代の順に見れば、半島のほゞ中央西部にある箱根峠の邊を中心とする猫越火山最も古く、これにつぐものにその南方の蛇石山（五二〇米）北方の達磨山（九八二米）江ノ浦火山群（寢覺迦山等）、半島南端に近き南原山、東岸の北部には支岳火山（熱海火山はその一部と見るべきもの）あり。最後に噴起せるは中部の東方にある天城火山にて、萬二郎岳・萬三郎岳（一四〇五米）八丁池山・三筋山・蓼木山なその主體とし、周圍には大室山・小室山・鉢窪山などはじめ約十五の側火山を有す。半島を組織する地質は輝緑玢岩・石英斑岩・灰石・石英角閃安山岩・輝石安山岩・第三紀及び第四紀の七種にして、皆火成岩及び其碎片より成る。而してその基岩は中世統の緑岩にして、之に次ぐを石英斑岩とす。半島内の最も廣大の地を占むるを第三紀の安山岩とし、達磨山の北部、天城山の全部より北に亘り箱根山に至る間、皆之より成る。第三紀層は概れ凝灰質にして、緑岩及び安山岩の碎片より成り、主に南部の下田地方、松ヶ崎と箕作との中間に亘る第四紀層は諸川の沿岸に露はるゝも其區域廣からず。而して天城火山は半島を南北に縱斷し、北は狩野川に沿うて三島に通じ、南は河津川及び逆川の谿谷に沿ひて下田港に出づ。鐵道は東海道本線三島驛・沼津驛より連絡する社線駿豆鐵道があり、前記下田街道に略々並行して修善寺驛に達する。それより下田へは乘合自動車があり、また東海岸には東海道本線熱海驛より伊東・稲取を經て下田に達するものと、熱海・伊東・修善寺・沼津を巡走するもの等あり。この他諸温泉の施設の發達に伴ひ、湯治、保養遊覽を兼ねての來遊者多く、近年頓にバス網發達せり。海上には東京灣汽船會社の大島・下田航路及び西岸の沼津・下田航路等あり。この地氣候温暖なるを以て既至その他の蔗栗の促成栽培が行はれ、これを京濱地方に移出し、北伊豆では良質の蜜柑を產し、天城山中の椎茸、山葵は夙に聲價高く、また鹿地・河津・土肥・大仁・持越等の金銀山あり鑛業地として知られ南伊豆海岸の石花菜はその良質と多產に於て全國に著名なり。元來この地は氣候の温暖と温泉の湧出多きと、京濱に比較的近き等により休養地帶として近來急速に發達せるものにして、湯ヶ原・熱海・伊東・吉奈・長岡・修善寺・吉奈・湯ヶ原等は交通の利便と相俟つて温泉郷として世に聞え、南伊豆乘合自動車の便開けてより・熱川・谷津・峰・湯ヶ野・蓮臺寺等も浴客增加せり。

【伊豆七島】靜岡縣伊豆國の東南海上にならぶ島嶼の汎稱。北緯三三度乃至三四度五〇分・東經一三九度乃至一四〇度の間にある諸島にて通例大島・利島・新島・神津島・三宅島・御蔵島・八丈島を稱し、今東京府の管轄に屬す。これ等の諸島は即ち富士火山帶に屬する火山の噴出せるものにして、皆火山岩より成る。その脈は夏に南方に延びて、七島の最南端八丈島より南方約二二二粁を隔てたる小笠原諸島となり、その間海底に南々東の方向に一條の脊梁地帶を作る。これ等諸島の海岸は概れ海崖をなし、大島の波浮港の外は港灣と稱すべきものなく風力强ければ

怒濤岸を噛んで碇船に便ならず。その上毎年七八月頃は所謂黒潮の最盛期にして其流速毎時二〇粁以にも及ぶといふ。物産は大島・利島・三宅島等にては主として陸産を、新島・神津島は海産を主とす。各島椿樹多く、其實から搾る椿油は殊に著名なり。伊豆七島の名稱は何時の頃より起りたるものか不詳にして、保元物語普通本には大島・三宅・美計・澳の五島とし同書鎌倉本には大島・みやけの島・上津島・八丈島・みつけ島・奥の島・新島・三倉島などの八島を記せり。而して傳ふるところに依れば、事代主命の開拓經營せる所となし、今その遺跡なりと稱するもの存す。島人古來互に交通なりと、江戸時代に入り七島を伊豆代官の所管とし、屋と諸島を巡視して救恤産業の道を開きしも、各島猶ほ互に交通せず、茲に於いて幕府は乃ち江戸に島會所を設け、各島の物産を集めて實檢けり。明治元年菰山縣の所管となり、同十一年東京府の管下に歸せり。今東京府は大島支廳を大島元村に置き大島以南の六島十六箇村を管し、八丈支廳を八丈島大賀郷村に置き、八丈島及び其以南の數島七箇村を管す。

【伊豆島】 七島を指せるものなるべきもその何れの島なるかは不詳。推古天皇の二十八年に壞疽の人が二人漂着せしこと見ゆ、天武四年廐壞王の子は此島に流さるといふ。天武紀「三位廐壞王有罪、流二于伊豆島」〔一子供=伊豆島〕

【伊豆崎】 靜岡縣伊豆國賀茂郡にある石室崎の別稱。古來歌枕として知られ、東海航路の名所たり。神皇正統記に依れば延元三年義良親王奥州下向の際この崎の邊にて暴風雨に遭遇せりといふ。新撰六帖「伊豆が崎うみとなみとの目もはるに其際見えぬ雲の夕なき 法眼慶誠」

【伊豆鋼山】 →熱海市

【伊豆高嶺】 熱海市と函南村との間に聳ゆる日金山の別稱。もと伊豆山權現こゝに鎮座し、後に濱の宮、即ち伊豆山の今の地に移るといふ。萬葉集には伊豆能多可嶺に作る。標高七七四米もあり、天氣晴朗の日はこの山頂より十州を望むことが出來るから、また十國峠ともいふ。※日金山

【伊豆富士】 大室山(靜岡縣田方郡)の別稱。

【伊豆海】 伊豆半島の東西兩側の海の稱。西は西浦・東は東浦の名あり。西浦は駿河灣の東側を稱し、東浦は相模灣の西側をいふ。古來より歌枕の名所として知らる。霞・夕立・月・雲の眺め佳きを以て著はるといふ。萬葉・一四「伊豆の海に立つ白波の在りつつも戀きなむものを亂れ始めめや」夫木・二三「いつの海やゐきつ波ちの朝なきに遠鳴きえてたつかすみかな 爲道」

【伊豆多賀】 省線伊東線の一驛(昭和十年設置)。靜岡縣熱海市多賀にあり。

イズ 伊祖 琉球地名。古書にあぞとも書く。中頭郡浦添村に在り。英祖王誕生の地にしてその父憲祖のいくさもいの栄邑たり。古城址伊祖城は憲祖の築城といふ。

イズ 出島 宮城縣陸前國牡鹿郡女川町の屬島。女川・雄勝の兩灣を南北にして其灣外に浮ぶ。東岸に近く大島その他の岩礁群散在するも東方は水天に連なり浩波澎湃たる太平洋なり。西方尾浦との間の水道を出島水道といふ。南端に寺間、西北部に出島の部落あり。往昔、遠流人のありし地の一なり。水路志云、出島は尾浦の海上に在りて、女川・雄勝の兩灣を分界す、南北約一海里七鏈、其幅國き處七鏈半、島山低く、松樹深々たり、島の西側一灣ありて、北に嶋島を控へ、其錨地は水深十一尋、泥底にして、繫泊に最便とす、島の沿岸に屬礁多し。

イズエ 出部 ～

【伊部】 備中國後月郡の郷。和名抄は以豆倍と訓す。今の岡山縣後月郡出部村及び高屋町に當るもの、如し。中世に出部莊と稱す。安西軍忠に備中の伊末とあるも此地に同じ。

【出部村】 岡山縣後月郡の南部。井原町の南に隣り、南は小田郡大江村に界す。舊山陽道に沿ひ東は矢掛を經て岡山に、西は福山・尾道に至り、南は笠岡、北は東城に至る縣道ありて交通の便よし、また社線井笠鐵道通じ、出部・下出部(共に大正十四年設置)七日市(大正二年設置)の三驛あり。南部・北部には丘陵あるも中部は東西に平坦地をなし、米・蓼藺の外薄荷の產あり。この地は和名抄の出部郷に當る。村内先史時代の遺物、古墳七ツ塚等ありて古土器多く發掘せられたり。

【出部】 伊豫國浮穴郡の郷(和名抄)和名抄は訓を闕くが、高山寺本は伊豆倍と訓す。今何れの地に當るか詳ならざるも、或は愛媛縣伊豫郡中山町、廣田村、佐禮谷村等の邊ならん。姓氏錄に出雲氏は久志和都命の後裔なりと見ゆ。今愛に據るに蓋し出部は出雲部を修せるものか然らば訓伊豆倍は母の字を脫漏せるものならんといふ。

イズキ 伊豆木 →三穗村(長野縣)

イズキタ 泉北 ～ 和泉國の郡名。泉北郡。

イズサ 出淺 書紀に見ゆる古邑名。垂仁天皇の三年新羅國の王子天日槍我國に歸化を願ひ出づ。天皇これを嘉し、詔して住所を播磨國宍粟邑と淡路國出淺邑とに與へ給ひ己の好む所に居れと。日槍奏して曰はく寡はくは親ら諸國を周遊して臣の心に叶へる地を點はらんことをと。天皇これを聽し給ふ。日槍即ち淀川を泝りて近江に出で此處に暫く停まり更に若狹國を經て但馬國に到りて留まる。書紀の記事は天皇の三年紀の註の中にあるも宍粟を淡路國とし出淺を播磨國と記さる曙覽冲の說に從ひて出淺を淡路とし宍粟を播磨とす。而して出淺の地今淡路國内に見當たらず。或は和名抄の郡志郷の地なちんか。郡志は和名抄豆之と註し伊豆左の接頭語を省ける豆左は豆之に通ず。郡志郷は播磨灘に面し現に津名郡の町名として現存す。

イズサン 伊豆山 ～ →熱海市

イズシ 出石

【出石】 美濃國山縣郡の郷。和名抄は訓を闕くも但馬國出石郡の例により伊豆志と讀むべきならん。その地未だ何れの地なるかを審にせざるも地理志料は景行二十七年紀、「美濃國有二書一射者一曰二弟彦公一率二石占横立……而來一」を引きて出石は石占の誤には非ざるかと說き、この石占は伊自良と轉じ今の岐阜縣山縣郡伊自良谷が其地域たらんと說けり。

【出石郡】 兵庫縣但馬國の東部の郡。面積約三〇〇方粁の東方京都府に張出し、北は熊野・中・東は與謝・南は天田の諸郡に隣まれ、西南は養父郡、西北は城崎郡に接す。主として丹後山塊を成す花崗石の山地にて、北境に高龍寺岳・法澤山・東界に江笠ヶ岳、南境に三國山・床ノ尾山等あるも何れも六〇〇—八〇〇米臺にして高峻ならず、出石川その山地を彫刻して西北流して圓山川に合し、その河道と小支流の谷に幅狹き耕地發達す。農產に米・麥・大豆・麻等あり、蠶業・牧畜行はれて繭・生糸・但馬牛を出し、林產また少なからず、工產の出石燒・竹行李等は古く有名なり。交通は西部の出石町を中心に京都府の宮津・福知山・久美浜へ、縣内の和田山・八鹿・豐岡方面へ縣道を通じ、また社線出石鐵道ありて山陰本線江原驛に連るも、交通なほ利便なりといふを得ず。和名抄は伊豆志と訓じ、小坂・安美・出石・室野・城野・高橋・資母の七郷を置く。天日槍命が留住し其子孫の興れる所といひ、一說に天日槍の持來りし寶物中に出石と呼ぶ刀子あり地名はこれに因むといへど信じ難し。中世山名氏本郡に據り、山陰道に威を振ひしも天正の頃亡ぶ。もと郡役所を出石町に置き氣多郡を兼治せり。

【出石町】 兵庫縣但馬國出石郡の西部。圓山川の支流出石川中流の盆地に位し東北部は山地なるも西南部は水田耕地よく拓く。交通上の一中心をなし、東は宮津・福知山、南は和田山、西は八鹿、西北は豐岡、東北は久美濱の各方面へ道路を通じまた社線出石鐵道ありて西方省線山陰本線の江原驛に連る。和名抄の出石郷の遺稱。中世山名氏居城の地にして江戸時代には仙石氏三萬石の城下町として榮ゆ。古來出石燒の產地にして町の東方谷山產の石英粗面岩の風化による陶土は品質勝れ町の西隣室埴村は優良なる粘土の產地なり。近時丹後方面より絹絲の製織傳はり町の主生業となる。また北方の豐岡方面より柳行李の製作傳まり近時その產額少なからず。此地は郡の中心都邑にして古くは郡家が置き、近くは舊郡役所の所在地たりし處。いま出石警察署・豐岡區裁判所出張所・出石稅務署・郵便局及び出石高等女學校等あり。出石城址・諸杉神社・石部神社・宗鏡寺等の名勝舊蹟あり 町の歴史的人物に澤庵和尚、生野義勇の殉難者多田彌太郎(贈從四位)あり。〔出石城〕吉野時代山名時氏の子時義、出石の北郊なる神美村大字宮内の地に城き此隅山城とも山名城とも稱す。其裔持豐の卒後漸く勢衰へ祐豐に至り、天正二年城を出石に移す。永祿十二年八月、伊丹親興・池田勝政等織田信長に請うて山名氏の此城に攻め祐豐を降す。天正八年羽柴秀吉の弟秀長但馬を略するに及び祐豐出で、因幡に奔るゝ爾後秀長・前野長康・小出吉政相次いで之に居りしが、元祿十年小出氏嗣絶え松平忠德之に代り、更に寶永三年仙石政明來り治す。〔出石藩〕天正年間羽柴秀長之を領す。後屋々その主を更へ寶永三年に至り仙石政明こゝに移り三萬石を領してより子孫相承け明治維新に至る。明治四年出石藩は一旦縣となり後、廢して豐岡縣管下に入り、九年八月更に兵庫縣の管轄に歸す。〔弘道館〕出石藩の藩學問所と稱し天明二年弘道館と改稱。京都堀川の伊藤東涯を聘して開館式を行ふ文化八年十月聖殿を築く、賢侯盛衰ありしも、仙石久利、政固の頃最も盛んなりしといふ。〔諸杉神社〕大字内町に鎮座す。祭神。祭神多選擇毋呂須玖神。式内社にて中世十一町餘の社領を有す。初め有子山の鎮守なりしを、元祿年間新宮を起し遷祭せりといふ。例祭十月十五日。〔石部神社一 村社〕。祭神奇日方命。式内社。例祭九月十二日。〔宗鏡寺〕臨濟宗山名氏の菩提所。初め此陰山の下にありしが、天正以後廢頽中絶したりしを元和年中澤庵和尚、領主小出侯を說きて中興し、同六年茅庵を寺の山に建て、投淵軒といひ、衣鉢の外只鑑見一あり、自ら米を炊き朝夕を給す。寛永元年好仁親王開山叩かせ給ひしも遂に謁見ざりしといふ。後江戸に赴き遷化す。〔出石燒〕磁器明和元年出石町の泉屋治郎兵衛・伊豆屋彌左衛門が土燒を作りしに始まる。寛政元年 二八屋瘞左衛門磁器製造を企て、藩主仙石家の援助を得て、肥前有田の陶法技術を傳へしも不成功に終る。續いて藩業に移り、享和中に新窯を立て、石英粗面岩の分解物を原料として、純白の磁器を製出せり。文政中より再び民業となり、天保以來同業增加し、以來染附の日用諸品製造の外、精巧なる裝飾品をも作るに至る。

【出石】 但馬國出石郡の郷。和名抄は以都之と訓ず。今の兵庫縣出石郡出石町及び其附近に當り、古へ出石郡の郡家のあり。處 中世は山名氏の居邑。また當國一ノ宮出石神社は本郷の内なる神美村大字宮内に鎮座す。

【出石鐵道】 兵庫縣北部にある地方鐵道

倉線山陰本線の江原驛（兵庫縣城崎町日高町）に起り出石郡室埴神社住の出石驛まで一一・二粁の線路を有す。蚊間一・〇六七米。蒸氣及びガソリン車運轉にて客線と運帶運輸をなす。沿線の主要發送貨物は木炭・牛・繭及び米等にして到着貨物の主なるものは、人造肥料・セメント及び飼料等。終點出石驛附近は出石燒の產地にして年額十五萬圓を超ゆ。なほ附近に鵲の巢を構へる鵲山あり、また神鍋山スキー場に遠からず。

【出石川】 兵庫縣の北部、出石郡を流るる川。上源に二脈あり、一は郡の東北境賀母村地內の東北部に、一はその南隣高橋村東南部に發し、西隣令橋村の中部に於て相合して西流し、出石町の西部を北に流れ小坂村を過ぎ、城崎郡中筋村に至りて佛山川に合す。流程約三二粁、出石町より下流は小舟を通ず。古事記に伊豆志河とあるは此川にして、伊豆志袁登賣神の神話に此川の河島の節竹と河石とを取りて韻戸に用ひたる事を載せたり。記、中「故茲神之女。名伊豆志袁登賣神坐也……爲取二其伊豆志河之河島之節竹一而。作二八目之荒籠一。取二其河石一。令レ鹽而。喪二其竹葉一。今二謂言一。……」

【出石】 備前國御野郡にありし郷。和名抄は伊豆之と訓す。今の岡山市の上出石町・中出石町・下出石町は郷名の遺稱にて、また同市の上石井、下石井の町名は本郷に屬する地名ならんか。京都の東寺の寫吉二年の文書に備前國出石郷の名見ゆ。

【出石山】 愛媛縣喜多郡の西境、西宇和郡に跨る山。西に連なりて淨心山（七八二米）聳立し、大和・上須戒・日土（西宇和郡）の三村に跨る。標高八二〇米。此地域より銅を產し、古くは黃金の山と稱せられ、今出石鑛山ありて銅・硫化鐵鑛・鉛鑛・沈澱銅等を採掘す。山頂に眞言宗の古刹金山出石寺あり、本尊は山中より鳴動と共に浮び出でたる金色像彫たる觀音・地藏の二體なりと傳へられ、寺は養老二年の建立といふ。弘法大師は大同年間久しく此寺に留錫し、山中に金多きより本寺の山號を金山と定めたりといはる。九州方面より八幡領に上陸する四國巡路の巡禮者は最初に此寺に參詣するを普通とす。寺寶の銅鐘は高さ二尺二寸八分（約七〇糎）の朝鮮鐘にして國寶に指定せらる。出石山は別稱を矢野ノ神山・矢野山等と呼ばれ、風望開け、名勝として多く詩歌にも詠まる。但し矢野ノ神山の名は出雲國神門郡矢野・備後國甲奴郡矢野・播磨國赤穗郡八野・伊勢國一志郡矢野等の山にも冠せられ、今その孰れとも定め難きものあるも、後世の歌には伊豫國と定めたる歌多し。萬葉・一〇「妻こもる矢野の神山露霜ににほひそめたり散らまく惜しも」夫木・一二「草も木もなみたにそめてつまかくすやのの神山しかそなくなる　鶴家」題二金山出石寺一。曾禰量「懷西行靈海雲邊、遠望孤峯萬仞巔、浦出金山出石寺、仰看繡氣射二青天一」

イスズ　五十鈴川　三重縣伊勢國度會郡にある川。川水は皇大神宮の御手洗となる。水源に二支ありて、一は島地山の逢坂山、一は神路山。伊勢神宮の西南に於いて相會し、東北に流れ鹿海に至りて朝熊川を合せ、末は二派に分れ一は二見浦に注ぎ、一は汐合に至り海に入る。流程約一六粁。一名御裳濯川といふは倭姫命が御裳の纐れを洗ひたまひし故事より起るといふ。此川が內宮の前を流れるより內宮を一に五十鈴宮ともいふ。五十は〇といひ數多き意。すずは細瀨の轉ならんとの說あり、また〇は美語、すずは清しき意ともいふ。垂仁紀・二十五年「故隨二大神教一、其祠立二於伊勢國一、因興二齋宮于五十鈴川上一、是謂二磯宮一」新古今・一九「神風やいすすの河の宮柱幾千世住めと立て始めけむ」。

イズタ　伊豆田村　高知縣土佐國幡多郡の東南部。中村町の南方約一六粁、東南は土佐灣に面し、東岸の在崎と上流村の篠津崎との間に支灣下ノ加江灣を擁す。地勢一般に山地なし森林繁茂す。中央を下ノ加江川東流して下ノ加江灣に注ぎ、其沿岸に僅少の耕地を見る。產物は水產を第一とし、林產これに次ぎ、外に鹽・米・麥を出し、また村の南部なる中生紀層の粘板岩より硯石材を採取す。下ノ加江は高岡郡の上ノ加江に對して稱せらるるもの。もとは重要避難港の一として愛えしも、嘉永七年の海嘯と大正九年の水害により港口甚だ淺くなりやゝ衰へしも尙漁業の中心地として榮え、土佐沿岸航路汽船の寄港地なり。（天滿宮）大字下ノ加江にあり。郷社。祭神菅原道眞・曾我祐成。同時宗。創立年月詳ならざるも、蓋し室町時代の鎭座にして土佐國司一條房家社殿は再興せりと傳ふ。又文明十二年願主米屋女病身の故所願奉納の大集經あり。江戸時代に入り數次社殿・鳥居の造營あり、尙ほ近郷の總鎭守として庶民の崇敬を受く。

イズナ　飯綱山・飯綱山　富士火山帶に屬する二重式火山。長野縣上水內郡の中部に聳え、戸隱山の東方、墨姫山の南方に位し、長野市の西北約一〇粁を距つ。噴火口壁は著しく開析せられて原形を止めず、飯綱山（一九一七米）・靈仙寺山（一八七一米）はその東壁の殘りて峯をなせるもの、中央火口丘はその西部にある鳴璃山（一七五〇米）天狗岳（一七一七米）の二峯となり、中腹には富士見山・大頭山・二子山等の小寄生火山が求心狀に並ぶ。南側の廣漠たる高原は飯綱原にして、多數の沼澤點在し、戸隱道この中央を通じ、戸隱神社の巨大なる一ノ鳥居此處に佇立す。西北麓の戸隱原一帶には、多種類の植物密生し採藥の好適地たり。西側より湯花川の一支なる柚川發して南流し、千曲川の一支鳥居川（御手洗川）また西側に出で北方山麓を繞りて東流す。北麓に火山土の一種にして小粒狀をなす土塊の集積せる地區あり。俗に鐵鬼の飯と呼び其の味麥飯の如し。この小土塊はこれを飯砂と稱せしより飯砂山名を生じ、其後現今の如く飯綱（飯綱）に作るといふ。山頂には式內息足穗命神社（薬師飯綱神社・飯縄權現）の奥社鎭座す。保食神を祀り、里宮を東南麓の字井町大字荒安に置く。中世修驗者の道場となり、飯綱法と稱する詐術を用ひて愚民を惑はせたりといふ。頂上は西北に近く戸隱・黑姫、遠く北アルプス・妙高の諸山峯を望み、南東は遙に四阿山其他の上州境に聳ゆる連山との間なる盆地、麓下に川中島一帶の平野を瞰下して展望雄大なり。山頂附近に飯綱の井戸と呼ばるゝ淨水湧へ清冽にして登山者の渴を醫す、實に天與の甘露なり。鷲仙寺山頂に五社大神祠あり、天照大神・倉稻魂命・猿田彦命・大己貴命・事代主命の諸神を祀る登山路は各方面より通ずるも戸隱中社方面よりする西口九最も便とす。飯縄山附近は夏季雷鳴多きを以て知らる。「鳥居川岸より見れば神のます飯綱の山に霞たなびく　河上嵐平」

イズナガオカ　伊豆長岡町　靜岡縣伊豆國田方郡の西部。三島町の南方約一一粁、伊豆半島の頸部、狩野川の西岸に位す。西南部は丘陵起伏するも、東部は狩野川の清流北流し、其沿岸は土地低平にして耕地拓け米・繭等を產す。この地古來湯泉場として名高く、社線韮山村にあるも怪善寺・沼津方面にバス通ずして交通の便よく、都人士の來り遊ぶ者頗る多し。この地は和名抄の田方郡天野郷の地、今大字に天野存す。附近は史蹟多く、字洞には前方に口を有する半ば露出せる石室あり。また萬法院山には横穴多く、中には小石棺を有するものありといふ。源頼朝の伊豆に兵を擧ぐるや之に屬し、諸處に武功を顯し、果遂して筑紫奉行となれる天野藤內遠景は即ちこの地の人にして今大字天野に其墓あり。また此地の最勝寺內に最明寺入道時頼の墓あり。もと川西村と稱せしが昭和九年町制施行の際現町名に改む。（古奈溫泉）古奈・熱之上・小坂地の三溫泉の總稱にして、長岡溫泉との間に小巒を挾み、一の溫泉郷を成ぜり。この溫泉の起原は實に古く、東鑑、嘉祿二年四月八日「將軍家依レ可レ有レ渡二御子伊豆國小名溫泉一、東鑑、仁治元年九月八日「旣靈院使正四位上丹波朝臣長基卒、（年五十五）于レ時在二伊豆國北條小郡溫泉一」等と見ゆ。然し古來微々たるものなりしも、近年新溫泉を穿掘せしより急速に發展せしものなり。溫泉は凝灰岩中より湧出し、無色透明の單純泉にて稍々鹹味を有す。後に樹木鬱蒼たる古奈の小丘を負ひ、前には廣濶なる田圃を控へ閑雅なる土地にして靜養の地として絕好の場所たり。又萬人風呂と稱する露天の大湯泉ありて、附近の婦女達が憩ひ浴せる樣は轉た原始的の美を思はしむ。（長岡溫泉）明治四十年の發見に係り、有城・多聞・田端の三溫泉を總稱せるものなり。泉質は無色透明の碳酸類泉。四面は背葉の丘陵を成し、北西方は遙に富士の聖峯を眺め、また東南に狩野川の清流を控へ、西は約三粁にして三津海岸に出づべく、散策に適せり。

イズヌキ　伊豆貫川　岐阜縣美濃國本巢郡の川。また伊豆を略して貫河にも作る。糸貫川に同じ。元慶元年の大雷會の歌に入りし名所。雛鳥樂・席田「むしろだの十、席田の、伊津貫川に十、住む鶴の、いつぬき川に十、すむつるの」

イズハ　出羽村　島根縣石見國邑智郡の南部。中國山脈北側の山村にて南境の山を越ゆれば廣島縣高田郡生桑村なり。地は所謂出羽谷の一部を占め、田所村山中に出づる出羽川西北部を東西に貫き、沿岸に多少の耕地を拓く。出羽谷の地は南方なる備後・安藝二國と東隣なる出雲國飯石郡及び北方の大桑銀山との間の要衝に當り、古く大內、毛利氏と尼子氏の攻爭點となり、また大桑銀山より來る街道、南方の廣島縣高田郡及び山縣郡より來る街道の連絡點に當り出羽谷の主邑たり。出羽は江州圓城寺文書に足利義詮の證判「文和元年、出羽・下出羽郷」を圓城寺へ寄進せしこと見ゆ。有名なる石州の刀工直綱は出羽谷の人、二代直綱の作に「石州出羽住」又「永和二年」と銘するものあり、直綱の孫貞綱は永歷中の人にして、出羽の銘字あり。安西軍策に永祿二年二月初旬、吉川治部少輔元春が藝州一千餘騎を以て日の出を發し石見の出羽に向ふ。雲州勢は八千餘騎を以て二手に分れ、同廿七日兩軍此地に會して戰ひ雲州勢敵敗れて退き、藝州勢も之を追はずして止むとの記事あり。大字岩屋は萬葉集・生石村主眞人の歌「大汝少彦名のいましけむ志都の石室は幾代經ぬらむ」とある石室の地に當るといはれ、今大字に岩屋あり。萬葉集略解「石州邑知郡の山中に、岩屋村と云ありて、其山をしづの岩屋と云ひ、其大なる窟あり、高三十五六間許、內甚廣し、里人の言傳に、大汝少彦名の神の隱れたまへる所と云ひ、志都權現と申也、是は正しく其里人の語る所なれば、萬葉の歌を以て附會するに非ず、最深き山奥にて、よそ人の知らぬ地也、然れば志都石室は是にて、もしくは生石村主石見國の司などにて、彼國にてよめるにや云々」（七神社）大字三日市に鎭座。郷社。祭神伊邪那岐大神・上筒津見神・中筒津見神・底筒男神。創立年代未詳なるも地方の古社にして古來上下の尊崇篤し。

イズハラ　伊豆原　千葉縣海上郡にありし村。明治二十四年町制を布きて

西銚子町と改稱し、西銚子町は昭和八年銚子町・本銚子町・豐浦村と共に廢して新に銚子市を置く。

イズハラ　厳原町　長崎縣對馬國下縣郡の東部。東は對馬海峽に臨み、地勢概ね丘陵性奢地を成せり。耶良崎東南に突出して內務省指定港灣たる厳原港を控へ、港頭に石英斑岩の高さ五〇米の巨厳屹立す。町の西部に老樹鬱蒼たる清水山あり、町を脚下に俯瞰し遠く壹岐・平戸の諸山を望む。縣道北方鶏知村方面に通じ、郷之浦・鰐本・佐賀に定期船通ず。就中釜山港との互市最も盛んにして、電信は無線に依る外、島の西岸迄は陸線により、夫より海底電線を以て釜山に通ず。もと下縣郡役所の所在地にて、上縣郡を兼治せり。いま官衙に對馬支廳・厳原區裁判所・同檢事局・厳原稅務署・厳原刑務支署・長崎稅關支署・厳原測候所・厳原航空無電局・厳原無線電信局・厳原港燈臺・對馬營林署・鶏知憲兵分遣隊分駐所等あり。學校には縣立對馬中學校・縣立對馬高等女學校等あり。此地古くは府中または與良中村と稱し、國府のありし地なり。中世以降平知宗の裔宗氏世々居住の地なり。町名の起りは町の東部中央に市ヶ峯の小山ありて、其麓を古く伊豆ヶ嶽留と呼びしに起り、初は嶽ヶ原と稱せしも後遂に現在の稱呼の如くなれり。志賀ノ岬より享保十一年以降志賀焼と稱する御器を産出せり。主として朝鮮の井戸・伊羅保・三島等の茶器を模造せしも明治末年に至り廢滅となれり。また清水山に清水山城址あり。豊臣秀吉征韓軍の本營に充てん爲、天正十九年築城せしめしものといふ。府中城(大字樓原)にあり。寛文以來宗氏の居城たり。宗氏は平知盛の子知宗の裔といふ。後小武氏に屬し、文永中蒙古襲來の際宗助國奮戰して死せり。助國の曾孫經茂正平年中初めて守護に補せられ、應永年中經茂の曾孫貞茂三視郷佐賀に居る。其孫貞國文明年中國府の中村に移り、享祿元年貞國四世の孫將盛與良郷金石に治す。五世の孫義智豐臣氏に屬して功あり、州守に任ぜられ、薩摩國出水郡一萬石(後、肥前の基肆・姜炎二郡の地一萬二千八百石と代ふ)を加封せらる。國ヶ原の役に西軍に應ぜしも、朝鮮交渉の事に任ずるを以て譴責を免かれ食色故の如し。寛文六年義眞の時棧原に移り府中と改稱し、子孫相繼ぎ以て明治維新に至る。(厳原(府中)藩)慶長五年關ヶ原役の際義智西軍に屬し、伏見城を攻略せしも、役後罪を免かれて本領を安堵せり。同九年朝鮮の使僧松雲、對馬國に來り、德川氏と長く隣國の好を復せんことを議せり。茲に於て義智奔走し同十二年に至り、終に修好を結べり。義智この功により、十萬石以上の格を與へられ位必四品に上り、官必侍從に至れり。爾後子孫相承けて明治維新に至る。明治二年府中藩を厳原藩と改稱す。明治四年廢藩置縣の際厳原縣となし、同年九月伊萬里縣に併合せらる。(思文館)厳原藩の藩黌。天明八年宗義功、國老古川圓書に命じて設立せしめ講學方と稱せり。真享二年宗義眞藩校を創立し小學校と稱す、文化十一年、義質藩士村縫殿の宅址に學舎を新設し、思文館と稱せり。元治元年宗重正の創立せる日新館に合す。又明治元年宗重正創立の藩學校あり。(八幡宮)　大字中村にあり。郷社。祭神玉依姫命・神功皇后・仲哀天皇・豐玉姫命・應神天皇。もと和多都美神社といひ、神功皇后三韓より凱旋の途、當地清水山上に御鏡幣帛を置きて神々を祀り給ひ、夷狄の寇を防がん事を祈願し給ふ。後天武天皇白鳳六年勅して當社を創建し給ひ、且つ仲哀・應神兩帝及び神功皇后を合祀し給ふと傳ふ。延喜の制名神大社に列す。社號は中世國府八幡宮と稱せしも、明治五年舊稱和多都美神社に復し、後更に八幡宮と改稱す。例祭、九月十五日。(海岸寺)大字久田道字中道にあり。淨土宗鎮西派常樂山と號す。文明二年の開創に係り、もと厳原港の西海岸にありしが天正八年三世中興開山傳譽知順の時今の地に移せしものの。山門の傍に對馬の名木として知らるゝ巨松蟠立す。樹高約一五米、根廻約六米、樹齢五百年を經たる老松なるも支幹を四方に張りて鬱々繁茂し樹勢尚旺んなり。(國分寺)　曹洞宗。天徳山と號し天平年中聖武天皇勅して諸國に造立せしめ給ひし金光明四天王護國之寺の一なり。初め眞言宗を奉ぜしも、國主宗盛國の季子宗睦これを中興して現宗に改む。而して宗氏二百石の黒印を寄せ、留來同氏の菩提寺となれり。境內に藥師堂ありて、堂內に行基作と傳ふる藥師如來を安置す。

イズフチ　出淵　愛媛縣伊豫郡にありし村。明治三十九年中山村と合併して中山村を置く。大正十四年中山村は町制を布けり。

イズヘ　出部　→出部

イスミ　夷隅　【夷隅郡】千葉縣四市十二郡の一。上總國の一部にして縣の南東岸に位す。東と南は太平洋に臨み、西南は安房郡、西は君津郡、北は市原・長生二郡と界し、東西約二四粁、南北約二八粁(いづれも最廣部)面積四一五方粁。丘陵性なす房總山地の東部に當り、高度は四百米に達する處なく、幾多の小斷層地塊の集合より成る。養老川は西南境をなす清澄地塊の東北側に出で、西北に流れ、また夷隅川とその支流は勝浦・興津の地塊の北面に發し、幾多の斷層角低地を縫ひ、始めは東北、ついで西北、また東北、更に東南と屈曲彎流して太平洋に注ぎ、川岸の低地にはそれぞれ耕地開けて、大多喜・國吉・長者・大原等の中心都邑處々に發達せり。道路また多くはこれらの斷層谷と海岸に沿ひて通じ、縣道には省線房總東

總は東より南の海岸に沿ひて所々に小トンネルを穿ちて走り、木原線は房總東線大原驛に起り、郡の中部を西方に横ぎり上總中野驛(西畑村)に終り、此線小湊鐵道これに連絡す。米・麥・蠶を主産とし、蔬菜・煮乾・乾鰯・鰯油を特産とし、又養鶏行はる。古は伊甚國(日本書紀)伊自牟(古事記)に作る。大化改新の時國を廢して郡となし上總國に屬す。和名抄夷隅に作り伊志美と註し、南路・東道・荒田・長狭・白羽・餘戸の六郷を置く。中世更に分つて夷南・夷北(または伊南・伊北)となす。正保國絵夷隅とし、寛文中夷隅に復し、元禄國更に夷隅に改む。爾後これに從ひイスミ・イシミ兩様に訓み今專らイスミと呼ぶ。※夷蕉

【夷隅川】千葉縣上總國夷隅郡を流るゝ川。郡の南西隅、安房郡境を割する清澄山東方の連嶺に發し北流して大多喜町に至り右折して東流、郡の北東境、長生郡界に於て東南に轉じ、長者町の地內、和泉浦海岸にて太平洋に注ぐ。羊腸曲折して大迂廻をなす流域は郡內の大半に及び本郡の諸水は殆んど此川に集まる。流程約七二粁。水運の便少きも流域の小平地は地味肥沃にして水田開け米の産多く、また川魚の棲息するものの少なからず、中にも大多喜の鯉は特に名高く、鮎の産も多し。河口附近よりは青海苔の採取行はる。

イズミ　泉　→イスミ

【泉岳】那須火山脈に屬する一峯。宮城縣宮城郡の北西部。根白石村の北西部に峙つ。北方に聳ゆる北泉岳(一二五三米)の列嶺にして標高一一七二米。この東側より七北田川發源して東南に流る。別名根白石岳。

【泉村】山形縣羽前國東田川郡の中部。鶴岡市の東方に當り、南境月山の北麓より荒川に沿ひ鼠島町に至る南北約三〇粁東西廣き處約四粁の長大なる地域を占め緩漫に北方に低下し、北部は荘內平野の一部を成す。米の産多くまた繭を出す。大字中里は和名抄の田川郡那可郷の遺名なるべしと。大字玉川は東隣手向村に近接し古く一名を國見山村といひし處、玉川寺あり。三代實錄にある出羽州田川郡人、玉刀自といへる節婦はこの村人にて、玉川郡落を國見山村と稱するは、節婦玉刀自を門閭に表して國民に見せる義なりと玉川寺はその菩提所にして、開山は法明尼とす。この寺は近代越後村上耕雲寺に屬す。出羽風土略記云、玉川寺は國見山村に在り、寺領四石、古の節婦玉刀自の故里歟。三代實錄、貞觀十三年二月「節婦出羽國田川郡人大荒木臣玉刀自、夫死之後、慮於墓之側、闢三念佛理、守節不移、叙位二階、免戸內租、表於門閭」〔八幡神社〕大字荒川字宮東に鎮座。郷社。祭神、應神天皇・天照皇大神。創立年代未詳なるも、蓋し地方の古社にして、古來近郷上下の尊信を受く。例祭、陰暦三月三日。

【泉村】福島縣磐城國石城郡の東南部。小名濱町の西隅、渡邊村の東南に隣る。南は太平洋に面し、その中央部に八崎突出し、東半は砂濱、西半は海蝕を成す。釜戸川と飯原川は此地に至り相合して約二粁にして八崎の東にて太平洋に注ぐ。土地平坦、西半と北部は林地、中部に田園開け、米・麥を産す。省線常磐線は泉驛(明治卅年設置)を置き、磐城海岸軌道ここより起り小名濱町を經て江名に通ず此地は泉城のありし處、寛永年間に平の城主內藤氏の族、兵部少輔政晴此處に分地され、其邸を置きしが、その孫政森に至り、三州崎藩(愛知縣西加茂郡擧母町)に移る。近世は大名陣屋の置かれし一名邑とす。戊辰役には賊軍苦戦の地にして終に泉城を失ひ、官軍は更に平城に進りたる跡なり。大字黒須野は渡邊村に連接し、中世に岩城表泉といへるは此地なり。大字瀧尻は同村の東邊にして、古文書に菊田庄瀧尻といひ、小田氏の族こゝに發り、本庄の地頭たりしことあり。(泉城)本村に其址を存す。何人の築城か詳ならず。寛永年間、內藤・板倉の諸城主を經て延享年間に本多氏の來り治めて明治に至る。(泉藩)　寛永年間に平の城主內藤忠興、弟の政晴に此地の槃田二萬石を分封して之に居らしむ。元禄年間に板倉伊豫守重同これに代り、更に延享年間に至り本多越中守忠恕の遠州相良(いま靜岡縣榛原郡相良町)より移封、二萬石を領し、寛政年間に彈正大弼忠籌、幕府の樞要に列し、功勞を以て加賜一萬石、城主格に列し、以て明治維新に至る。廢藩後、一時泉縣となりしも幾許もなく平縣に編入さる。藩校、汲深館は嘉永五年本多忠籌の創立せるもの。(諏訪神社)大字瀧尻に鎮座。郷社。祭神健御名方神・誉田別命。創立年代を詳にせざるも、地方の古社にて、領主小山氏の祈願所と傳ふ。例祭十月三十一日。

【泉村】福島縣磐城國石川郡の西部。西方は阿武隈川を隔てゝ西白河郡・岩瀬郡に境し、須釜村の東隣、野木澤村の北隣にて石川町を去る北方約九粁、須賀川町に至る石川街道に沿ふ。東境に觀音山(四五二米)あり、村の東北部は稍高きも、西半は阿武隈川谷に沿ふ平地にて水田・桑畑拓け米・繭の産あり。省線水郡線の泉郷驛(昭和九年設置)を置く。此地は古く石川泉氏の領有なりしも石川氏の泉氏を稱したる年代は詳ならず。大字川邊には雲鳥の館といふ泉氏の館址あり。白河古事考云、石川泉氏の族に澤尻・河邊・千石・板橋などあり、澤尻・川邊は皆石川替郡助の領たりし、川邊には雲鳥の館と城迹あり、後は高山に遷り、前は平田廣野に臨みて、其が其地理を得たり。また石川風土記云、川邊村には石川有光の四男、川尻四郎光頼居り、又八幡宮を建てゝ安養寺をおかる、凡石川庄內・澤

井・川邊・須釜寺これなり三安養寺といふ。八幡宮はいま須釜村にあり。字小高は川邊の北、小高の北なる字岩法寺に石川冠者有光の墓あり。有光は源義家の臣にして石川氏を初めて稱せし始祖なり〔石川郷〕字龍崎にあり、川邊の北八粁、須賀川駅（須賀川町）の南東四粁、阿武隈川の東岸に緣る。阿武隈の大川こゝに至りて岩石に支へられ、屈曲高下、頗る奇觀を呈す。一名龍崎瀑とも、また其形容の乙字に似たれば乙字瀑とも云ふ。幅約三〇米（平水には一四米）高さ五米の川流の瓦岩に激突し、斗絶して下る景は無雙の川瀑にして、遙に川下より見れば、丹後の天の橋立に似寄たりと。

【泉村】 新木縣下野國塩谷郡の東部。矢板町の西北、鹽原町の東南に接し、高原山（一七九五米）の東南斜面を占め、那賀川の上支荒川に入る内川・宮川これなかに原野廣きも、内川・宮川下流の地は水田・耕地拓け、米・麥・繭を産し特産にメロンあり。矢板町より内川に沿ひ東北隣巻根村に出づる道路通ず。天正年間宇都宮廣綱と那須資晴の戰ひたる地、もと此地は泉ノ郷の内。江戸時代、一部は宇都宮領へ一部は岡本領となり、或は佐倉領となり、區々分立の有樣なりしが、明治維新後、始め日光縣、次で宇都宮縣の管轄に屬す。明治二十二年、小泉・上太田・長井・立足・平野・下伊佐野・上伊佐野・山田・田ノ原・東泉の諸部落を合せて泉村となる。〔觀音寺〕大字長井の北部、高原山東南麓の景勝の地にあり。矢板駅より西北約一〇粁。新義眞言宗、興樂山と號す。俗に寺山觀音と呼ぶ。開山は德一。大同年中に坂上田村麻呂の建立と傳へらる。本尊千手觀音像および別堂侍の毘沙門・不動像、何れも木造なり。觀音像は高さ一米餘、鎌倉時代の樣式を帶びたる雄勁なる刀法と清新なる意匠による佳作なり。別堂侍はこの繊巧なるに反し一木荒削りの作であるが、面相その他に中尊と同樣の特徴を表はす、共に國寶に指定さる。〔鐵山寺〕大字東泉に在り。曹洞宗。心日山と號す。慶長二年大中寺白庵宗關和尚の草創に係る。慶安元年寺領五十石を賜はる。

【泉井】 神奈川縣相模國鎌倉町扇ヶ谷英勝寺の東北、泉谷附近にあしり井。鎌倉十井の一。新編鎌倉誌に「泉谷は、英勝寺の東北の谷なり……路端に井あり。泉井と云、清水涌出なり。鎌倉十井一なり。」とあり。

【泉谷】 神奈川縣相模國鎌倉町英勝寺の東北の谷なり。東鑑、建長四年五月「今日、被レ壊二右兵衛督泉谷亭一、爲二御方違本所一依レ可レ有二新造儀一也」とあり。是は宗尊將軍の時にて、御亭の跡は今詳ならず。此附近の道路の端に鎌倉十井の一なる泉井がありしといふ。

【泉村】 新潟縣越後國中頸城郡の南部。新井町の南方約六粁。關川（荒川の上流）の右岸に沿ふ。村内山林多く、關川及び村の中部を西流する支流濁流川の域に田畑拓け米・繭の産あり。長野縣下水内郡飯山町より本郡の新井町に至る道路ほゞ關川に沿うて進み、本村附近に於ては關川の西に沿うて走る。當村よりは此道路を經て新井町に至る。

【泉町】 岐阜縣美濃國土岐郡の西部。南は土岐川を界として土岐津町に隣る。西と北とは可兒郡に境す。土地は概れ南方に傾斜せる林野にして、南部の川岸に近く耕地拓け米・麥・繭を産し、又土岐津町と共に陶磁器の製造盛に行はれ窯業地として知らる。中山道は町の東部大字定林寺より北に進み御嵩町に至る。省線中央本線はほゞ土岐川に沿うて町の南部を東西に走り、土岐津驛（明治三十五年設置）を當町の地路内に置く。社線駄地鐵道は此處にて接續し又新土岐津驛（昭和三年設置）を置く。本町は和名抄の土岐郡楢原郷の地なるべく、吉野時代土岐氏居住し其遺跡多し。大字久尻の延命寺には土岐頼貞の位牌を祀る。頼貞が佛光國師祖元を開山として開基せるもの。又清安寺墓地に久尻燒の祖、加藤景延の墓あり。景延は四郎右衛門と稱し、慶長二年筑後守に任ぜらる。大字定林寺は土岐伯耆守頼貞の法號の遺れるものにて、小字の正庵に定林寺址あり。今、寶暦十四年水野氏再興の棟札を存する小觀音堂存し、文祿二年癸巳小春吉辰外護小權山口彌右衛門地下門前熱請と銘する十一面觀音を安置し、同地、延命寺境外に佛堂となる。大字大富には高田大富館址あり、傳説に土岐頼遠の居館址といふ。〔久尻乙塚古墳〕大字久尻字勝負の山丘の突端にあり。圓墳にて直徑二七米餘、直高七米餘の封土完全なり。石室には瓦大なる花崗岩を用ゐ、南面に開口し、奥行十二米餘あり羨道・玄室の二部に分る。羨道の長さ六米餘・口部幅二米半餘、高さ約二・三米あり。玄室との境に約六〇糎角の石柱を左右南壁に接して立て、その上に同大の石材を架し、間隔約二米、高さ約二米となす。玄室は奥行約五米、幅約三米、奥室部に至り幅約二米に減じ、高さ約三米あり。石室の宏大莊嚴なること縣内の古墳中其比を見ざるのみならず、全國中にも屈指のものなり。往時、塚の前に乙塚寺ありしも維新後廢せり。今玄室の中央に壇を作り節塚大明神の少祉を祀る。古來八坂入彦命の王女弟姫の御墓と傳ふ。

【泉村】 靜岡縣駿河國駿東郡の東南部。箱根山外輪山西斜面の地に當る。東の境上に外輪山の一峯山伏峠（一〇三四米）あり、南は伊豆國田方郡北上村に境す。東部は山林原野多く、西部黄瀬川の谷に沿ひ田畑拓け米・繭・茶を産し、又紙の製造行はる。西部を省線御殿場線南北に通じ、湯野驛を置（明治二十二年設置）く。富士の須山口登山道は此驛より西隣の泉村を經て、黄瀬川の本流奇觀斷崖を擁する有名な佐野瀑園附近を通り、更に宮岡村を經て山頂に至る。又沼津往還道もほゞ御殿場線に沿うて北進し、御殿場町より分れて甲府市に至る。此地は往時西岸の大岡庄に對して小泉庄と稱せし所にして、明二十三治年小泉村の内、平松新田・麥塚村・茶畑村公文名村・稲荷村の舊六村を以て本村を新設す。

【泉村】 愛知縣三河國渥美郡西部。渥美半島の北岸、渥美灣に臨む。東は野田村に接し、南は赤羽根村に、西は福江町に隣る。概れ丘陵地にして北部中央に田畑拓け、養蠶・漁業盛に行はれ、又米・麥を産し副業に養鶏あり。福江町より田原町に至る田原街道當村の海岸を東西に走り、海岸は黄淺にて海水浴に適す。大字馬伏の鶏鳴石は幽邃な谿流に臨める珪岩の轉石で、その節理面が直立し、谷側に立つて聲を立て啼き鳴ひ、樂器を奏すれば極めて微妙に反響し、恰も鶏鳴が人語を眞似るに似たるより鶏鳴石と名づくといふ。樂器の中にても笛の音のみは反響せず、そは此地の豪族に背渥美太夫といふものあり、その娘玉柴が許嫁の變心を恨み、母の記念の唐竹の横笛を携へ、此岩下に投身す。其怨恨石に籠りて笛の音のみは反響せずといひ傳ふ。番村は和名抄の渥美郡大壁郷の地なるべく、三代實錄・貞觀二年の條に村松（いま大字村松あり）山中より發見の銅鐸を獻ぜしこと見ゆ。また近年大字伊川津字大木の貝塚より木葉型有茎式銅鏃、有茎柳葉式類似の銅鏃、磨製石鏃、鋼など發見せられ、更に大字石神よりは變形鐵銅式の石劍を發見せり。これ等により此邊の地は少くとも青銅文化時代より開け居たることを推し得ると共に郷土古代史の研究には留意すべきこと、ず。三代實錄・貞觀二年八月「參河國獻二銅鐸一、高三尺四寸、徑一尺四寸、於二渥美郡村松山中一、獲之、或曰是阿育王之寶鐸也」

【泉川・泉河】 京都府相樂郡を流るゝ木津川の別名。

【泉屋】 大和國吉野郡にありしといふ屋敷枕。今の奈良縣吉野郡十津川の附近にありしものか。夫木・原「みよし野の山のあなたの十津川いつみの原もあはれうきよな　公朝」

【泉】 →雲部村（兵庫縣）

【泉村】 岡山縣美作國苫田郡の中部。津山市の西北約一六粁、吉井川（東大川）上流の谷に當る。東は北隣奥津村の東境に聳ゆる泉山の南嶺延びて香香美北村に界す。泉山中に清泉の湧出多く村名これより出づるが如し。山地多きも中部は川にそひて小低地あり。米・麥・繭を産しまた木炭・生柿を出す。省線駅新線院庄驛に自動車通ずるも交通便なならず。〔泉神社〕大字養野に鎮座。郷社。祭神、大山祇命、天之狹土神外九神。創立年代未詳なるも地方の古社にて、附近十二箇村の總鎮守として郷民の尊崇篤し。もと舟水權現又は舟水山口權現とも稱せり。社は泉岳の中腹にあり。この山靈山なるがゆゑ嶺上に登らむとするもその人至誠ならざれば忽ち霊霧四塞して方向を失ふと云ふ。泉池あり、方五間許り、碧水鏡の如し、山名亦此の泉池に起因すといふ。

【泉山】 中國山脈中の一峯。岡山縣美作國苫田郡の中部、香香美北・奥津の二村に跨る山。津山市の北方一六粁に位す。標高一二〇九米にして、花崗岩より成り吉井川の上支の二谿谷を分つ。山頂に大冠と稱せらるゝ巨岩屹立し又その北に泉池あり、碧水鏡の如く、山名これに因るといふ。頂上より展望すれば四周の諸山を始めとし瀬戸内海・四國の山々まで遠望し得て頗る明媚なり。山腹に舟水權現社鎮座。東北山麓には花知ヶ山（一二四八米）聳ゆ。

【泉北】 備中國にありしといふ井。今所在詳かならず。歌枕。治承四年主基方の歌に夫木・二六「國こほりいまさかえむいつみ井の君か御代にはたへしとおもへは」

【泉村】 愛媛縣伊豫國北宇和郡の東部、宇和島市の東北方約一五粁、東部村境に研御前山（九四七米）聳え、その支脈、北境及び東南境に沿ひて延亙し村内概れ山地を成す。四萬十川（渡川）の上支廣見川の清流、村の中部を迂餘曲流し、西南部にて小支流を合せ、その流域に水田新地拓け、部落また點在せり。農産中蚕糸も盛んにして、繭を産しまた米・麥を出し、副業として養雞行はる。縣道は西方の宇和島市に通じ、省線宇和島線また之に沿ひて走る。宇和島線は大正十二年迄は西隣の旭村（近永驛）迄にして、當村よりは辛うじてバスに依り連絡せしが、大正十二年東隣吉野生村まで延長し村の大字出目に出目驛置かれ、なほ近永驛にバスの連絡あり交通の便宜に良好となれり。「出目よいとこ秋頃こされ、裏の松山芽狩に、夏の涼は奥野々橋よ、千町青田はそよそよと、岩谷名高や渡邊修氏えらいお方の出た所、名所名物小倉のトドロ一寸と寄らんせ飛鮎に、雲の戸瓜山夕日なうけて軒に眺むる小西野に、泉よいとこ觀岡の里よ黄金白金繭の山」は泉村を讃へたる民謡なり。

【泉村】 福岡縣豐前國京都郡の東部。行橋町の南に接す。此地は東北隣の今元村と共に和名抄の仲津郡中臣郷の地なりといふも、未だ詳ならず。地勢南部は稍々丘陵地を成すも、其他は西方を東北流する今川下流々域の平地にして、水田よく拓けて米産多く、また麥・繭等を出す。縣道と日豐本線は村の東部を北に走り、行橋町を經て西北方小倉市方面に至る。また田川線は行橋町にて日豐本線と分れ本村の西部に過ぐ。行橋驛と東隣仲津村の新田原驛にバスを通ず。縣立農事試驗場豐前分場・福岡測候所出張所・縣立京都

農學校等あり。〔日吉神社〕大字羽根木に鎮座。郷社。祭神、大巳貴神・天忍穂耳命・國常立命外四神。創立年代は未詳なるも、地方の古社にして又近郷の產土神として、上下の尊信を受く。例祭五月十二日。

【泉山】 ↓有田村(佐賀縣)

【泉灣】 長崎縣上縣郡(對馬北部)東北端の灣入。豐崎村の東北部舌崎とアタ崎との間に灣入し、中部に志古島の小島を浮べ、西岸に泉部落あり良錨地をなす。この部落より近年有柄式石劍の出土を見たるは、古代に於て手頃なる港なる點などゝ合せ考ふれば、この沿岸邊は早く石器時代より住人を見たる如く推せらる。

イズミ 井泉村 埼玉縣武藏國北埼玉郡の北部。羽生町の東に接し、北は利根川により群馬縣上野國邑樂郡千江田村に境す。南部に葛西用水通じ、土地頗る平坦にして田畑よく拓け、米・麥・繭の產多く副業の蠶工品(繩)を出す。社線東武鐵道羽生驛(明治三十六年設置)に近く、村内道路四通す。本村は近世の羽生領内にして葛瀨郷とも稱せられし地なり。大字鹿井上組・鹿井下組はもと鹿井郷と稱せられ、分限帳に永樂二十一貫文、鹿井宮内、十貫文鹿井大助とあり。成田家臣、井鹿氏はこの在名を負ひしものなるべし。大字尾崎は新篇武藏風土記に萬葉集の埼玉の小崎の沼の舊蹟なるべしと說けど詳ならず。明治二十二年今泉・鹿井上組・鹿井下組・發戸・尾崎・北袋の舊六箇村を合して本村を建つ。

イズミ 水泉 山城國相樂郡の郷(和名抄)。一に出水に作る。今の京都府相樂郡木津町・加茂町・上狛町・瓶原村等に當る。和名抄は水泉に作り、以豆美と訓ずるが水泉は泉水の顚倒なるべし。此地は木津川に沿ひ、木津川の古名を一に泉河といふ。これは書紀崇神天皇十年の條によれば天皇が武埴安彥を討ち給ふ時此川を挾んで挑み合つたので挑川といひ、これが轉じていづみ川となりしとあれど信じ難し。萬葉集に恭仁京を御遊營の時近江國田上山より材木を伐出し宇治川を流し淀津より泉河(木津川)を泝つて運搬せし歌も見ゆ。郷名はこの川名より取りしものならん。續紀・寶龜七年の條に後部石島等六人出水連の姓を賜ふとあり、出水連は此地に居りしものか。同じく寶龜九年の條には此地に出水郷山二百町を左大臣藤原永手に賜ふの記事あり。西大寺田園目錄に泉郷和氣里とあるも此地に同じ。延喜雜式には泉河渡、每年九月造。假橋、三月壞收之と見ゆ。三代實錄・貞觀十八年の條に山城泉橋寺(いま上狛町にあり)は曾行基の畿內に建てし四十八院の一にて、寺の前に泉河に梁せし橋あれど川德念にして大水の度每に橋梁流れ行人の迷惑甚しかりしため、大船二隻小船一隻を購ひ不時の要に備へしとあり。續紀日記に橋寺といふもこの寺のこと。萬葉集に泉の柚とあり此地に柚山のありしものならん。續紀・寶龜元年「十二月乙未、賜二左大臣正一位藤原朝臣永手山背國相樂郡出水郷山二百町」萬葉・四「家人に戀ひ過きめやもかはつ鳴く泉之里に年のへぬれば 石川廣成」萬葉・一一「宮材引く泉のそまに立つ民のいこふ時なく戀ひわたるかも」新古今・序「伊勢の海清き渚の玉は拾ふとも盡くることなく、泉の柚しけき宮水はひくとも絕ゆへからす」新後撰・一八「心なきいつみの柚の宮水たにひく人あれは朽果てぬ世な」

イズミ 出水 【出水】 鐵前國大野郡の郷。和名抄には訓を岡くも薩摩の出水郷の例により伊豆美と讀むべきものならん。其他今詳ならざるも福井縣大野郡荒土村の大字に清水島・堀名中清水あれば、或は其の邊ならんか。

【出水里】 播磨風土記に見ゆる里。兵庫縣揖保郡揖西村地方の古稱ならん。今清水の大字を存する。播磨風土記揖保郡「出水里、此村出一寒泉、故因レ泉爲レ名」

【出水】 熊本縣飽託郡にありし村。大正十四年四月熊本市に編入。

【出水郡】 鹿兒島縣一市十二郡の一。薩摩國の內にて、縣の西北部を占め、東は伊佐郡、南は薩摩郡に隣り、東北は熊本縣葦北郡と界し、西は天草灘に、西北は八代海(不知火海)に面す。本陸の外八代海南方にある長島・伊唐島・諸浦島・獅子島等の屬島あり、總面積約五五〇方粁、人口約九萬八千。郡の南半は南境に聳ゆる紫尾山(一〇六七米)を主峯とする紫尾山塊の地、東北部は葦北郡に鈴る火山矢筈山(六八七米)を中心とする肥薩山塊の地に屬す。北部は西部に突出する三笠半島と紫尾・肥薩兩山塊に圍まるゝ出水盆地をなし、土地平坦にして田圃よく發達し、郡の主生產地區をなす。國道は葦北郡より郡の北部に入り出水盆地を橫ぎり、郡の西岸を南下し薩摩郡に出づ。縣道には米ノ津町にて國道に分れ出水町を經て西方に向ひ再び國道に合するもの、出水町より南方宮之城町に至るもの、米ノ津川の谷に沿ひて大口町に達するもの等あり、省線鹿兒島本線また米ノ津・出水・阿町を連れ西方に進みて國道に沿ひ南下す。農業廣く行はれ米・麥・大豆・甘藷等を產し、特に葉煙草の產地として著はる。その他に、繭、山地より薪材を出し沿海漁獲少からず。歷神紀・二年三月の條に「立二仲姬一爲二皇后一……次紀日向泉長姬、生二大葉枝皇子、小葉枝皇子一」と見え、此日向泉は卽ち本郡なるべく、而して奈良時代郡名を二字と定めし際出水と改めたるもの、知し。續日本紀・寶龜九年十一月「第二船到二治薩摩國出水郡一」とあり、この時初めて郡名見ゆ。和名抄は伊豆美と訓じ山內・參度・借家・大家・國形の五郷を管す。中世は和泉に作り山門・萬瀨の二院に分ち、鹿泉氏今の出水町に出水城を築き代々之を領せり。のち宗義智本郡の內一萬石を領せしも、間もなく島津氏全郡を領するに至れり。本郡は肥後より薩摩に通ずる海陸兩路の關門に當り、島津家の祖忠宗忠久入部に當り、其居を山門院木牟禮に占め、以て六代氏久に至る。蓋し薩・隅・日三州を控制するに於て、此地稍々西北に偏すと雖も、肥後・肥前への通路を扼するに於て頗る利ありしがためならん。氏久の時鹿兒島に移る。以後變遷なく以て今日に及ぶ。

【出水町】 鹿兒島縣薩摩國出水郡の中部北は米ノ津町に隣り、東北は熊本縣葦北郡水俣町に界し、その境上に矢筈岳(六八七米)峙つ。南は火山紫尾山(一〇六七米)によりて薩摩郡に界し、東西約一〇粁、南北約一四粁の地を占む。紫尾山の麓長く北方につゞき山地多きも西北部は米ノ津川とその支流ありて耕地拓け、その西半は原野をなす。北隣米ノ津町より南方は宮之城町に、東方は大口町に、西方は阿久根町に至る縣道、町の北部にて分岐し、また省線鹿兒島本線西北部を掠め、出水・西出水二驛を(大正十二年設置)置く。官衙に出水警察署・縣土木出張所・學校に縣立出水中學校・縣立出水實業學校等あり。近世この地一帶を出水郷と稱せり。廢藩置縣の後は鎮潤・武本・知識・莊等の小村に分れしも、明治二十二年舊出水郷を上・中・下の三村に分ち、本村は上出水村となる。同二十四年本村內の大川內を分離獨立させ、大正六年現在の區域を以て町制を施行し、出水町と改稱せり。大字上高城に島津氏の塞所あり。その北端に山田昌巖の墓あり。昌巖は寬永年間の出水地頭にて、勤倹尙武を奬め、所謂出水兵見の訓官に力を致せし人、墓側にその頌德碑あり。また大字上知識に出水貝塚あり。臺地上に貝殼散布し、鐵鏃系土器の外、敲石・砥石・貝輪・人骨等を出土せり〔出水城〕一に龜ヶ城。和泉氏代々の居城たり。建久年中和泉小太夫使保この地に築き、正泉(後の出水)を領す。天正十五年豐臣秀吉西征の際城主又太郎忠辰職はずして降る。秀吉卽ち出水を忠辰に賜ふ。文祿の役に忠辰朝鮮に渡りしも病と僞り、釜山浦に止まりて進まず、秀吉怒りて其封五萬石を沒收し、死一等を減じ小西行長に命じて軍中に囚へしむ。忠辰の弟備前忠清・伯耆忠官・小七郎忠豐等も國にて幽囚せらる。後忠辰朝鮮に病死し家絕ゆ。慶長四年秀吉出水等の地五萬石を島津義弘に賜ひ以て明治維新に及ぶ。〔尾崎城〕一に識知城、また知色城、世々知識氏の居城たり。文和三年和泉莊の上司政保、同所名主知識產三郎入道行覺と共に兵を合せ木牟禮城一時の城主島津守久)を襲ふ。島津師久卽ち兵を發して之を救ひ續て當城を攻む幾何もなくして城陷り行覺逃亡し、師久卽ち城に入る。同四年宮方の軍串木野なる閑むに及び師久鳥尙して之を退く。然るにその隙に乘じて和泉莊の名主等牛屋高光等と共に當城を攻む。師久急を聞きて兵を旋し、之を救ひ終に牛屋氏等を攻略すといふ。〔諏訪神社〕大字武本にあり。郷社。祭神、建御名方命。創立年代は未詳なるも、江戸時代には藩主島津家の崇敬を受く。又出水郷三社の一に數へられ附近業庶の尊信赤篤し。〔西照寺〕武本にあり。眞宗本願寺派。泉城山と號し明治九年本山より井上蘆洲出張し本寺を創建す。本尊阿彌陀如來は安阿彌の作と傳ふ。〔淨圓寺〕武本にあり。淨土宗。無量山と號し建久年間松蟲・鈴蟲の兩女本寺を建つと云ふ。本尊阿彌陀佛木像は知恩院より迎へしもの。〔龍光寺〕曹洞宗。塗磨山西來院と號し、長祿三年藩主島津久國の創建に係る。

イズミ 出海村 愛媛縣伊豫國喜多郡の西部。長濱町の西南約八粁、八幡濱市の北約一〇粁。南は西宇和郡に境し、西は伊豫灘に面す。石鎚山脈の西部に屬する出石山・淨心山(七八二米)の西麓にて急に伊豫灘に傾き平地なく、農耕盛ならず。僅に米・麥・繭等を產するのみ。部落は海岸に沿ひて形成され、交通また不便なり。村內に銅硫化鐵鑛・銅鑛を產する金山鑛山あり。

イズミ 和泉 【和泉】 ↓狛江村(東京府)

【和泉】 江戸神田の町名。外神田にて佐久間町の北に接し、下谷區・淺草區と隣る四方といふ酒屋の赤味噌にて有名。契國策「あの大はしのきわにぱん小やかみゆいとこ見るよふなる小みせに見ゆるこそびくにといふ物也、すなはちあたけといふ國よりいづるなり、むかしは大はんじやうにて門ぜきまへ、代地、いづみ丁、八官丁などに出はりして大きにぜんせいをつくしたり」柳樽・一五「和泉町下肱と味噌とで名が高し」(新和泉町の下肱屋外法と和泉町四方酒屋の味噌)「下肱と味噌程な逢は和泉町」

【和泉橋】 東京市神田區の神田川に架せる橋。往時、藤堂和泉守の屋敷が橋の北にありしためかくは名づけりといふ。この橋の初めは不明なるも、享保年間は長さ十四間(約二五米半)幅三間(約五米半)ありしといふ。御府內備考「和泉橋但和泉橋と相唱候譯、向柳原に藤堂和泉守樣御屋鋪有之候故、相唱候儀に可有御坐候、且又先年近邊に酒井和泉守樣御屋鋪有之候故、右樣相唱候趣も申傳候得共疑と仕候儀無御坐、今く藤堂和泉守樣御屋鋪有之候故相唱候儀と奉存候」

【和泉】 ↓金澤村(新潟縣)

【和泉】 愛知縣三河國碧海郡にありし村明治三十九年東端村・西端村・榎前村・根崎村・城ヶ入村・米津村と共に廢し新に明治村を置く。

【和泉】 畿內五箇國の一。一に泉州。北は攝津國、東は河內國、南は紀伊國、西

は大阪灣に臨む。東西約四四粁、南北約三六粁。面積約五〇八方粁。いま大阪府の管轄に屬し、堺市・岸和田市及び泉北・泉南の二郡に分る。地勢北より西北に亙る一帶は、大阪平野の一部にして土地肥沃なるも、南は紀伊山脈の一部なる和泉山脈東西に連亙し和泉・紀伊の國境をなし、其餘脈は緩慢なる丘陵地を成し、北及び北西に向ふに從ひ低下す。從つて河流は南又は東南より北或は北西に流れ其主なるものに石津川・大津川・津田川・近木川・男ノ川あり、また大和川は國の北境を西流して大阪灣に入る。地質は第三紀層及び第四紀層より成り、河流頗く水量多からざれど、谷間を利用し灌漑用の水を貯ふる溜池の築造發達し、水田良く拓く。海岸は沙濱長く續き、たゞ和泉臺地より流下する小河川の川口に、小三角洲發達するのみにて著しき出入なく、また良錨地を缺く。交通は海岸に沿ひ、堺より和歌山に達する和歌山街道、これより岐れ尙海岸に沿ひて紀伊に入る孝子街道・貝塚より紀伊の粉川街道に合する小栗街道、鳥より西南七餘哩を經て紀伊に入る父鬼街道、堺より河内に入る西高野街道・富田林街道・竹内街道などあり、社線南海鐵道(電車)海岸に沿ひ大阪より來り、堺・岸和田・貝塚等を連れて紀伊に入り、また東方をこれに鉗行して阪和電氣鐵道走る。この國は古へ茅渟と稱せし地にて、國郡制置の際河内國に屬せしが、靈龜二年珍努宮を置き、和泉・日根の二郡を供し、尋いで大鳥・和泉・日根の三郡を以て和泉監を置く。天平十二年和泉監を廢して河内に併せたりしが天平寶字元年先の三郡を以て和泉國を建つ天長二年攝津國江南四郡(東生・西成・百濟・住吉)を割き和泉國に併せたりしが、民情これに服せず幾くもなく之を止めし事、續日本紀・國造本紀・續日本後紀等に見ゆ。而して國府を和泉郡に置く(今泉北郡和泉町大字府中)。鎌倉時代佐原義連守護となり、建武年中楠木正成守護に任じ、和田正遠をして岸和田に治せしむ。足利氏勢ひを得るに及び山名氏清守護となり堺の津に城く。明德の初め氏清誅せられ大内義弘之に代りしもまた應永の亂に誅ぜられ細川滿元これに代り爾後四傳して政元に至る。政元子なくその義子高國・澄元立つを爭ひ、大永年中澄元の子晴元反して堺に據り後本州を略取し、家宰三好長基をして守らしめしに、天文の末その子長慶また晴元に反して本州を奪取す。永祿年間織田信長之を降し、堺南ノ莊に政所を置く。天正年間豐臣氏これを北ノ莊に移し小西行長をして州務を掌らしめ、のち弟秀長に與ふ。江戸時代に至り奉行ん堺に置き其他岸和田(岡部氏五萬石)伯太(渡邊氏一萬三千五百二十石)の二藩あり。明治の初め近江の三上藩の流藩氏日根郡に移封、吉見藩と稱し三藩となる。明治四年廢藩置縣の際夫々岸和田・伯太・吉見の三縣とせしが間もなく更に、これ等を廢して堺縣を置きて和泉・河内二國を管し、明治十四年二月大阪府に合併せり。所管の郡は和名抄に大和泉・日根の三郡あり、中世和泉郡は和鳥・泉・南の二郡に分れ、和泉國に二郡ありしが、明治二十九年大鳥・和泉の二郡を合して、泉北郡とし、南・日根の二郡を合して泉南郡とす。これより先、明治二十二年に堺市大鳥郡より分立し、大正十一年に堺市泉南郡より岸和田市分立し以て今日に至る。

【和泉】 和泉國の古郡名。一に泉に作る。書紀欽明天皇十四年の條に河内國泉郡茅渟海と見え、續日本紀・靈龜二年河内國和泉等の三郡を以て和泉監を置くと見ゆ天平寶字元年和泉國が置かれ、國府が本郡に置く。和名抄は和泉に作り信太・上泉・下泉・輕部・坂本・池田・山直・八木・掃守・木鳥の十郷あり。中世分ちて泉南郡を置き、元錄郷帳には泉郡及南郡の名あり。明治に至りて和泉・泉南の二郡とし、明治二十九年和泉郡と大鳥郡を合せて泉北郡、泉南郡と日根郡を併せて泉南郡とせり。今の泉北郡大津町・和泉町及び信太・忠岡・南松尾・南池田・南池田・北松尾・南松尾・横山・南横山・山邊の諸村が明治二十九年前の和泉郡にて岸和田市及び泉南郡の山直町・春木町・貝塚町及び南掃守・土生郷・有眞香・東葛城・西葛城の諸村が凡そ南郡に當る。

【和泉町】 大阪府和泉國泉北郡の西部。堺・岸和田兩市の中間、大津町の東南に隣る。地は所謂和泉平野の一部を占め、東部に信太山の丘陵を負ふも他は概れ土地平坦、槻尾川・松尾川・牛滝川等西南部を貫流し、米を主産物とす。府道は町の中央部を南北に貫通し、社線阪和電鐵これに沿ひて西部を走り、信太山・和泉府中の二驛を置き、またバスも發達し交通の便よろし。野砲兵第四聯隊・大阪陸軍病院信太山分院・伯太憲兵分遣隊・第四師團野砲兵無線教習所等あり、また府社泉井上神社を始め、國府清水・箸塚・伯太陣屋等の名所舊蹟多し。古くは和名抄の上泉郷及び坂本郷の地にして、町は昭和八年四月、國府・伯太・郷荘の舊三村を合して置けるもの。國府は往昔和泉國府のありし所、伯太は寛文元年渡邊源中守之綱一萬三千五百石を領し陣屋を置き明治維新に及びたる地なり。郷荘は和名抄の坂本郷の地にして武内宿禰の裔坂本朝臣の居住せる所といふ。〔伯太藩〕寛文元年渡邊方綱此地に封ぜられ、一萬三千五百石を食み子孫相承けて明治維新に至る。明治四年藩を廢して伯太縣を置きしが間もなく廢せられ堺縣に入る。陣屋は舊伯太村、今の大字伯太にありしもの。藩校、伯太假學校は天保年中渡邊潔綱の創立せるものなり。〔泉井上神社〕大字府中にあり。府社。府内の古社にて井八幡社、井戸の森八幡宮と稱す。境内社

の御屋五社總社、即ち國府總社本殿は三間社流造、千鳥破風・唐破風を有し、繪様彫形雄健に、蟇股内部の彫刻等宮殿にて、内外の彩色裝飾よく當初の儀を存す。慶長十年豐臣秀賴の造立にて、いま國寶に指定さる。屋根は柿葺なりしも天保年間に茅葺に改めたりといふ。殿内に神像四十軀を存す。〔國府清水〕 泉井上神社の後なる一小池なり。老杉盤根の下、清泉淡々として湧き湛へ一湫の池をなし、流れて里の小川となる。傳へいふ神功皇后征韓の年、此水一夜に湧き出でしかば瑞を稱して和泉の郡と名づけ給ひ、凱旋の際再び舟して茲に行幸あり大に泉を賞で給ふ。之を和泉國號の起因と傳ふ。天正年中豐太閤命じて日々此の才を大阪城に輸さしめ、茶を點て其雅味を喜びしと。水甘くして茶に宜しく醸酒に適す。〔箸塚〕大字濱島にあり。本町内最高の處にして大阪灣を眼下に眺め、遙に淡路島を望み周圍は桃園にして花季訪ふ者多し。往古より旱魃の年には町民集合して焚火兩乞をなす處。毎年陰暦七月の十四・十五日には鬼燒とて箸を燒き其延長數町に亙る明治三十一年明治天皇特別大演習御統監の際茲に御駐蹕遊ばされ、今これを記念する碑あり、表に「天皇駐蹕碑」と刻す。〔好泉寺〕 日蓮宗。暦應四年大覺大僧正妙實上人の南海弘通の最初に開敎創立せる靈場。奉安の宗祖の尊像に弘長元年五月十二日宗祖日蓮上人四十歳の時伊豆の伊東に流罪、弘長三年春四十三歳の時に赦免せられて鎌倉へ歸る際、伊東の住民日蓮と別れん惜みしため、日蓮は一木を三段に別ちその一を以て自ら像を刻みこれを伊東朝高に與へしものなり、後年朝高この尊像を日朗上人に獻じ、更に大覺上人日朗上人より之を受け傳へて當山に安置せしものといひ、日蓮宗にては宗祖御自作日本一木三體の尊像と稱する靈寶なり。また天文法亂の節京都二十一箇本山の寶主は當山に來集し法亂鎭定の祈念を無前に修し、此外京都深草の元政上人の參籠して三大誓願をなされし靈跡にて日蓮宗門の著名な靈場。〔和泉寺址〕 本町の南方にあり。行基菩薩の建立と傳へ、在原業平の遺骨を納むるを以て在原寺ともいへりと。天正年中兵火に燒失せしも今尙柱石を存す。〔神宮寺〕 眞言宗。阪本近江守の自坊にして七堂伽藍あり、其末寺七箇寺も其附近にありしといふ。天正年中羽柴秀吉織田信長の命を受けて此寺を攻め、爲めに兵火に罹り末寺諸共燒盡せりと。今、塔の塞石其他殘留し燒殘の木像彌勒菩薩あり、俗に新右衛門樓と稱し知何なる畢竟時にもこの像を背負へば多少の降雨を得らるると、但し背負へる人は必ず死を免れずとの傳說あり。〔雷井〕 大字桑原の眞言宗西福寺の境内にある井。傳說に昔此井へ雷落あり、井戸より昇らんとせしを村人集りて井の上に蓋を覆へゝ爲め雷は大いに苦しみ、今後桑原の地へは落ちずとな誓ひしにより蓋を取つて放てりと。これより此地には落雷なし、雷鳴の時桑原々々と言ふは此古事より起れるものなりと傳ふ。

【和泉山脈】 西南日本外帶山系の一部。大阪府和泉國泉南郡の南界をほゞ東西に連り、東部は南北に走る葛城山脈に接續す。南邊は紀ノ川の大斷層によつて斷たれ、北邊は東北東の方向に走る斷層によつて切られ、東方に廣く西方に狹く、ほゞ楔狀をなす山塊にして、高度も東部に高く約八一九百米率の平頂丘をなし、西部に至るに從ひ次第に低下す。中生層の上部白堊紀たる和泉砂岩より成り、地質的には西方の淡路南部の瑞雀羽山地、四國の讃岐山脈に續くものなり。

【和泉潟】 土佐日記に見ゆる地名。土佐守たりし紀貫之が任期滿ちて、承平五年の某國府を出發し京都に歸る途中翌六年正月の晦日鳴門海峽の邊み出でゝ「とらう(寅卯)午前四時より六時の頃)の時ばかりに奴島(沼島)といふ所を過ぎて田無川といふ所をわたる。からく急ぎて和泉の潟といふ所にいたりぬ云々」(土佐日記)とあり。田無川は和泉國の南端にある今の大阪府泉南郡多奈川村の大字谷川にて此處より急ぎて潟に到達した。潟の地名今尋れ難きも翌日の行程より考へて深日村の海濱深日浦卽ち古の味鋺浦なるべし。

【和泉】 ↓出水郡(薩摩國)

イズミ 厳美村 岐阜縣美濃國山縣郡の南部。岐阜市の東北に隣り、東南の一部は長良川により稻葉郡芥見村に界し西は源太ヶ峯(二二八米)により岩野田村に接す。西南部は丘陵地なるも東部及び北部に田畑拓け米・麥・蠶の産あり。武儀郡關町と高富町とを結ぶ道路本村の北部を東西に走る。本村は和名抄の山縣郡片野郷の地なるべく、大字岩井に古刹延算寺あり。〔太郎丸城址〕大字太郎丸にあり。文明十年春、土岐氏の臣深尾重列之が築き、その子孫、重利・重政・重良まで四世百餘年間居城せり。天正十年十一月織田信孝の臣、津藤慶隆に攻められて降る。深尾氏後山内氏に仕へ城廢せり。〔延算寺〕 大字岩井にあり。古義眞言宗岩井山延算寺と號す。弘仁六年空海諸國巡化の際に開創す。三代實錄・貞觀六年五月の條に「以美濃國山縣郡延算寺・預之定額」とあり。卽ち清和天皇貞觀六年勅願寺に列し、且つ岩井山の山號を賜はる。爾來、寺運隆盛にして天正の頃までは十二坊ありしが、兵燹に罹り末寺諸共燒盡せりと。德川時代無祿無權にして衰微甚しかりしも法燈絶ゆることなく、十六世相承けて現在に至る。寛永年中僧淳仁再興す。本尊木造藥師如來立像一軀は弘仁時代の作と推定され國寶に指定さる。

イズミガモリ 泉森山 四國石鎚山脈の支脈に屬する一峯。愛媛縣宇和島市の北境に聳ゆ。標高七五五米。頂上

より出は宇和島市街を俯瞰し西方遙に宇和島灣一帶を展望し景色秀麗なり。

イズミカワ 泉川村 愛媛縣伊豫國新居郡の東北部。新居濱町の東南四粁、西條町の東方約一二粁。北部は山地その他の一帶は地勢平坦、國領川中部を北流し、地味肥沃にして耕地拓け、米・麥・繭の産多く、副業に養蜂盛なり。國道東西に貫き別子鑛山と新居濱町とを結ぶ。道路は西部を南北に走り、省線豫讃本線は西部を掠め、新居濱驛（大正十二年設置）を置く。我國屈指の大鑛山たる別子銅山へは此驛にて下車し、住友別子鑛山鐵道により中萩村・角野村を經て至るを便とす。新居農學校あり。本村は和名抄は新居郡丹上郷の内なるべく、中世の新居庄の内なり。德川時代には西條藩に屬し明治二十二年泉川村外二村組織す。（浦渡神社）大字泉川にあり。郷社。祭神、大山祇神・大雷神・高龗神を祀る。創立年代を詳にせざるも、大三島の内浦戸神社を勸請せる古社なりといひ。郷民の尊信篤し。例祭十月二十六日。

イズミゴー 泉郷 省線水郡線の驛（昭和九年設置）。福島郡石川郡泉村小高にあり。

イズミゴシ 泉越隧道 省線東海道本線、湯河原・熱海兩驛間にある隧道。靜岡縣熱海市泉區岩戸山（七三四米）の東部を貫き、延長二四五七米、本邦第十三位の隧道なり。丹那隧道と同樣に地質構造複雜なるため開鑿總工費四百八十餘萬圓を要せり。

イズミザキ 泉崎 福島縣西白河郡川崎村の大字。省線東北本線の泉崎驛（明治二十九年設置）を置く。二粁餘の處に指定史蹟泉崎横穴あり。

イズミサワ 泉澤 省線江差線の一驛（昭和五年設置）。北海道渡島國上磯郡木古内村にあり。

イズミタ 泉田 【泉田】 山形縣最上郡萩野村の大字。奥羽本線の泉田驛（大正二年設置）あり。

【泉田村】 長野縣信濃國小縣郡の北部。上田市の西にあり、その間に鹽尻村・川邊村を隔つ。千曲川の左岸に沿ひ、北は更科郡村上村に境す。西境に城山（九三三米）聳え、村の北半は山林原野にして、南半に耕地拓け米・麥・繭の産多し。松本街道村の南部を東西に走り、此街道に上田温泉電氣鐵道通じ、福田・小泉の二驛（昭和二年設置）を置く。泉田尋常高等小學校數地内の朝日山麓に、高仙寺大日堂あり、安置の大日如來坐像・十一面觀音立像・曾形坐像は鎌原期の作、堂は大同年間坂上田村麿の建立と傳へらる。千曲川の清徳は日本百景の一に數へられ、風景の美と水の清冽を以つて知らる。岩鼻の峰には公園あり、附近には高山植物ゼイハナズナ多く、春夏秋季、盛近の遊客多し。本村は明治二十二年小泉村・許田村・福田村の舊三村を併合して建てしもの。古くは和名抄の福田郷の地なるべく、中世には小泉庄と稱す。東鑑・文治二年三月の條に小泉庄、二條大納言家領とあるは此處なるべし。甲陽軍鑑にも先方衆小泉二十騎と見ゆ。（弓崎神社）大字八幡山に鎮座。郷社。祭神・磐田別尊・息長足姫尊・玉依姫命。創立年代を詳にせざるも地方の古社にて、應永年間社殿造營のことあり。もと弓崎山の頂嶺弓立山にありしも應永造營の時現地に遷祀すといふ。關來近郷の名社として知らる。古より傳來の歌あり。「弓都賀矢幡熊神處多知帶志陸奥治賀田浦廻里」。山證に出浦氏の古墳と稱するものあり。明治三年石櫃及び太刀・矢鏃等發掘せらる。例祭十月一日。

イズミダ 和泉田 ↓富田村（福島縣。

イズミダケ 泉嶽村 宮城縣陸前國宮城郡にありし村。明治廿年八月、根白石村と改稱す。

イズミドノ 和泉殿橋 江戸神田川に架せる橋。附近に藤堂和泉守の邸宅ある故の名稱と思はる。今の神田區和泉橋、柳原と平河町とを通ず。呼子鳥「ここはいづみ殿橋といふ橋だア。……ここはあんといふ所だア。エェしつこい人だア平川町といふ所だよ」

イズミノ 泉野村 長野縣信濃國諏訪郡の中部。八ヶ岳の西麓の裾野にあり上諏訪町東南方に位す。上川の支流村の中部を東西に流れ、田地・桑畑よく拓け。米の産多く、又繭を産す。本村は玉川村を經て甲州街道（信州往還道）及び中央本線の茅野驛に至る道路あり。乙見瀧・河原鹽泉等の名勝ありて、都人の訪るるもの又尠しとせず。本村は和名抄山鹿郷の地なるべく、近くは大日影・根木・小屋場・中道の四箇村を併合して泉野村を建つ。近年大字日鳴より三角無摩有孔式の磨製石鏃及び石棒・凹石・縄など發見せられたることは、郷土の古代史研究上注意すべきことゝす。

イズメ 出目 愛媛縣北宇和郡泉村の大字。省線宇和島線の出目驛（大正十二年設置）あり。

イズモ 出雲 【出雲】 山城國愛宕郡の郷。和名抄は以都毛と訓じ、有二上下一と註す。平安京一條通以北の地にして西は清藏口（今の新町通）の邊に至りしものといふ。上下二郷に分れ、下出雲郷は中世京都の市街の北方に發展するに及びて京洛の中に入り、出雲路道鞍神社は今は幸神社として寺町通今出川上ル西に存す。而して上出雲郷の西部は一に小山郷ともいひ、東部は後、鞍馬口村となり何れも京都市上京區に入る。今鞍馬口通より賀茂川に架せる橋を出雲路橋と稱するは郷名に因むもの、その出雲路の名稱は延喜式の七寺の内と稱する出雲寺に出るともいひ、或は延喜式の大社出雲井上神社に至る道路の義なりともいへど詳ならず。名所物名「花の色はいつもしらくさに見ゆれとも散れはひとつも殘らさりけり」

【出雲路】 山城國の古地名。↓出雲

【出雲】 大和國の地名。今の奈良縣磯城郡朝倉村大字出雲の邊に當る。初瀬町の東。武烈天皇の皇居泊瀬列城宮のありし處 日本書紀「武烈天皇、設二壇場於泊瀬列城一、餙二天皇位一、踐定二都焉一」とあり。書紀通證「在二長谷寺南一、出雲村一」とあり。古事記に繼體天皇の皇女に出雲郎女あり、此地に住みたまひしなるべし。また萬葉・二に溺死せし出雲娘子を吉野に火葬せし時、柿本朝臣人麿の作れる歌二首あり。「山の際ゆ出雲の見等は霧なれや吉野の山の嶺に棚引く」「八雲刺す出雲の子等か黒髪は吉野の川の奥になつさふ」

【出雲崎】 和歌山縣西牟婁郡潮岬村の東端。東方は東牟婁郡大島村に對し、その間に遙夜島を挾む。

【出雲富士】 鳥取縣西伯郡に聳ゆる大山の別稱。

【出雲國】 山陰道八箇國の一。一に雲州。北は日本海に面し、東は伯耆國、南は山陽道の備後國、西は石見國に接す。東西約五八粁、南北凡六〇粁。島根縣に屬し、松江市及び能義・八束・大原・仁多・飯石・簸川の六郡を含む。南部に中國山脈峙ゝ東西に走り國境に三ヶ國山・毓政山・大萬木山等何れも一〇〇〇米以上の山岳聳え地勢北に傾く。國の北部に島根半島を形成する宍道山脈あり、中國山脈とこの半島の其間は宍道湖湖畔にて、西部は此國の二大川なる斐伊・神門の二川によりて潅漑され、其處に簸川平野を作る。中部及び東部は比較的水深浅き宍道湖・中海となる。從つて此國の海岸は山陰道に類例なき屈曲に富み、風光頗る明媚なり。先史時代出雲地方は出雲族の根據地なり。出雲族は天照大神の一統たる天孫族に對しかく呼びしもの。考古學上の研究によれば日本島の石器時代住民には二種あり一は繩紋式土器を用ひし族、他は彌生式土器を用ひたる民族にして天孫族・出雲族は後者に含まると考へらる。出雲族の先住地に就いては、喜田貞吉等の南方重視説と、鳥居龍藏等の北方重視説とあり、未だ何れも定説をなさゞるも、たゞ出雲族が用ひしといはるゝ彌生式土器が朝鮮・滿洲・蒙古方面より發掘せらるものと略ゝ同一系統であると見做すらし。出雲族は約三千年以前より日本邦に渡來し、血族的小團體を以て部落を組織し既に本州地方の大部は其の勢力範圍にありしものなり。當時東北方にはアイヌ族居り、時々出雲族の邊境を侵せしに、偶々天孫族たる須佐之男命（素戔嗚尊）出雲に現はれ、アイヌ族の闖入を膺懲せしものなり。これ出雲族と天孫族との合同を見るに至る最初の契機にて、高志の八俣遠呂智退治の傳説はこれを物語るものなり。（蓋し遠呂智は大蛇でアイヌを指し、須佐之男命これを退治す）その後須佐之男命は先住土著人の女を娶り給ひ須賀宮（縣社須我神社、大原郡海潮村に鎮座）を造り住み給ひしなり。素戔嗚尊には御子數十人あり、大國主命はその一人におはせしが庶兄の迫害に苦しみ、父君を頼りて遂に命の御女須勢理毘賣と婚するに至る。その後大國主命は少彦名命と共に國土經營に努力し、幣後その一統は彌榮えに榮えてその威力は山陰・山陽は勿論近畿地方にまで及べり。一方高天原においはせし天照大神は全國統一の大御心より天菩比神（天穂日命）・武三熊之大人・天若日子等を相次ぎて出雲族の許に遣はし旨を諭さしめ給ひしも、何れも復奏せざるのみならず、出雲に留まり平和を樂しむといふ有樣なり、この事實は出雲族の包容的政策を如實に示せるものにて、尚出雲の如何に樂土なりしかを覗ひ知らる。此に於て高天原にては最も大神の御信任を得、且つ剛健を以て聞えたる經津主神と建雷之男神を選びて出雲に遣はされ、「汝が今まで統治せる現事（政治）は皇孫命に治らしめ、汝は神事を治らせよ。また汝の住むべき千足天日隅宮（今の出雲の杵築大社）は今まさに造營せしめん」との勅命あらせられしため、出雲族の頭目たる大國主神・事代主神等はこの勅命を拜し、國譲りの事が圓滑に行はれ、こゝに出雲族と天孫族との形式上の合同は成立せしなり。しかも尚高天原にてはこの結合を一層鞏固ならしむるため、大國主命に諭して「汝もし國神（出雲族）を以て妻とせば、なほ汝を疎んずる心ありと謂はむ。されば今吾が女三穂津比賣を汝に配はせ取らすべければ宜しく娶とせよ」と宣はれ、天孫族と出雲族との實質上の合同は用意周到の間に行はれたり。其後天照大神の御直系卽ち天孫族の總本家たる神武天皇が、國内の群がる賊を平定して橿原宮に卽位の大禮を擧げたまふと共に、出雲族の頭目たる事代主神の女、媛蹈鞴五十鈴媛を納れて、正紀（皇后）となし給ひしことは誠に意義深きものなり。これ畏くも出雲族とは所謂天孫族と全然異なる民族にはあらざるも、日本島渡來の年代を異にし、また居住地域を異にし更にまだ十分政治的統一を有せざりしため殆ど平和の裡に天孫族との間に同化され、國内の他の土著諸族と共に大和民族を形成するに至りしものにて、事實上神武天皇の國家創建以前に、出雲族なるものは自然天孫族の間に抱容せられしものなり。國造本記によれば崇神天皇の御天皆比命（天穂日命）十一世の裔孫宇迦都久怒を出雲國造に定め給ひ、國造家は幣後子孫連綿として相承け家系の正しきこと他に比類なく、千家・北島の二家に分れ、明治に至り共に男爵を賜る。國號の起原に就いては出雲風土記に「所二以號一二出雲一者、八束水臣津野命詔二八雲立之詔一、故云二八雲立出雲一」とあり。此處に

いふ八雲立詞は素戔嗚尊の御詠歌・記・上「夜久毛立つ出雲八雲垣妻ごみに八重垣作るその八重垣を」を指するものにして、素戔嗚尊の當時既に出雲の地名あり、或は其當時より此地方を總稱して出雲國と稱せしにはあらざるか。出雲の語原については、アイヌ語のエト・エトモにて岬の義より出づと云へど未だ詳ならず。或は、いづ。。くもの約とも、また、いづ(美稱)雲の意との說もあれど適に信じ難し。中古に至り國府を中海に近き出雲郷に置き、鎌倉時代には佐々木氏が守護となり世々神門郡(今簸川郡の中)の櫛治(今の今市町の邊)に居り、よつて櫛治氏といふ。室町時代の頃には同じく佐々木の一族たる尼子氏が飽義郡の月山(廣瀬町の內)に宮田城を築きこれに居る。永祿年間毛利元就尼子經久を降して此國を領し、豐臣秀吉の頃には吉川廣家に與へて、こゝに居らしむ。德川氏に至り堀尾吉晴封ず此國に受け末次(松江)に城を築き、寛永年間酒井忠直の手松平直政が此國に封ぜられ、以來廣瀨及び母里の支藩を置き、子孫世襲して明治維新に至る。此國はもと十郡なりしを、明治二十九年島根・意宇・秋鹿三郡を併せて八東郡とし、出雲・神門・楯縫の三郡を合して簸川郡とし、屬後出雲は六郡となる。

【出雲(郡)】 出雲國の古郡名。建郡の期詳ならざるも大化改新の頃なるか。郡名は出雲風土記に見ゆ。和名抄は建郡・濱治・河內・出雲・杵築・伊努・美談・宇賀の八郷を置く。中世出東・出西の二郡に分ち、杵築・河內・伊努・出雲・の四郷は出西郡に屬せしものか。其後出西郡は郡名亡び杵築・河內・伊努の地は神門郡に入り、出雲郷は出東郡に復し、宇賀・美談は出東郡より轉じて楯縫郡に入る。寛文年中、出東郡を出雲郡と改めしが、土俗舊稱を以てジュストーと呼ぶ。明治二十九年出雲郡は神門・楯縫二郡と合し簸川郡となる。舊出雲郡の地は今凡そ簸川郡出東・久木・直江・伊波野・荘原・出西の諸村に當る。

【出雲】 出雲國出雲郡の郷(和名抄)。今の島根縣簸川郡出西村に當る。出雲郡家のありし處にして其址は大字出西の地なりんといはる。出雲風土記・出雲郡「出雲郷、郡屬。郡家(說ノ名如ノ國)」

【出雲山】 出雲國出雲郡にありしといふ山。歌枕。出雲御崎山に同じ。今の島根縣簸川郡にあり。夫木・二〇「いつも山こよひの月のさやけさは雲のあしたのこゝちこそすれ 後經」

【出雲大川】 斐伊川の古稱。出雲國の最大の河なるによりてかくいふ。斐伊川の下流はもと簸川平野に出で初は北流後西流して神門湖(神門水海)に注ぎしと、寛永年間の大洪水にその水決して、東流し、今日の如く宍道湖に入る。出雲風土記にはその舊河道が示されたり。從つて上古の出雲大川は今の硯門川の下流の邊を流れ居りしもの。因に神門湖は地形の變遷に伴ひ今は神西湖となりて其の名殘を留むるに過ぎず。出雲風土記・出雲郡「出雲大川、源自ノ伯耆與ニ出雲ニ二國堺鳥上山ヨ流、出ニ仁多郡横田村ニ、即經ニ横田・三處・三澤・布勢等四郷ニ出ニ大原郡堺引沼村ニ、即經ニ來次・斐伊・屋代・神原等四郷ニ出ニ出雲郡堺多義村ニ、經ニ河內・出雲二郷ニ、北流更折西流、即經ニ伊努・杵築二郷ニ入ニ神門水海、此則所謂斐伊河下也」

【出雲川】 出雲國出雲郡の歌枕。今の島根縣簸川郡斐伊川のことか。夫木・二四「いつも川そこのみくつの數さへにみえこそわたれよはの月かげ 中務」

【出雲浦】 出雲國の歌枕。今の島根縣簸川郡大社町附近の海岸を稱せしものか。夫木・二五「神のますいつもの浦にやくしほのけふりやかてやくもなるらむ 內大臣」

【出雲御埼山】 島根縣簸川郡出雲半島の西部にある山。出雲山とも御埼山ともいふ。その西端は日御崎である。その高峯を獅山及び鼻高山といふ。出雲大社の東に聳ゆ。出雲風土記・島根郡「出雲御埼山、郡家正北廿七里三百六十步、高三百六十丈、周九十六里一百六十五步、西下所謂所、達ニ天下ニ大神之社坐也。」

【出雲社】 出雲國の歌枕。今の島根縣簸川郡出雲大社の附近か。堀川百首「ちはやふるいつものもりにみはすあてれきそかけつる紅葉ちらすな 伊實」

【出雲今市】 省線山陰本線の一驛(明治四十三年設置)。大社線、一畑電氣鐵道大社宮前鐵道の接續點。島根縣簸川郡今市町にあり。

【出雲大東】 省線木次線の驛(大正五年設置)。島根縣大原郡春殖村にあり。三杆餘の處に海潮溫泉、九杆の地に縣社出雲神社鎭座。共に乘合自動車の便あり。

【出雲高松】 省線大社線の驛(大正元年設置)。島根縣簸川郡高松村にあり。

【出雲三成】 省線木次線の驛(昭和七年設置)。島根縣仁多郡三成村にあり。これより五杆の處に名勝及び天然記念物なる鬼舌振あり。乘合自動車の便あり。

【出雲八代】 省線木次線の驛(昭和七年設置)。島根縣仁多郡布勢村にあり。

【出雲横田】 省線木次線の驛(昭和九年設置)。島根縣仁多郡横田村にあり。武驛より三杆にして指定天然物たる岩屋寺の切開に達す。

【出雲村】 山口縣周防國佐波郡の中部。防府市の東北、山口市の東、各約一六杆佐波川中流の地を占め、防府より地續を經て津和野に至る街道に沿ふ。西、吉敷郡境に眞田ヶ岳(六二一米)自石山(五四一米)等あり、東部に要害山(四〇九米)ありて、村內概ね丘陵地をなし、原野・森林多し。たゞ佐波川に沿ひ細長き耕地帶ありて米を產す。林產・牛また尠からず。防石鐵道佐波川に沿ひて通じ、岸見・伊賀地・山根(何れも大正九年設置)神ノ原(昭和九年)堀(大正九年)の五驛を置く。この地は和名抄神戸郷の內、周防の二ノ宮田雲神社、式內御坂神社鎭座。(田雲神社)縣社。大巳貴命・事代主命の二座を祀る。出雲國所大明神ともいふ。聖武天皇天平十年詔稻二十束を以て春秋祭神料に充て、清和天皇貞觀九年八月正五位上より從四位下を授けられ延喜式の小社に列し、のち正一位に進められ、また當國の二の宮とせらる。鳥羽天皇應永二年國司藤原家保本社に弓・箭・鉾・鉦等の神寶を捧げて神拜の禮を修す。領主・藩主の崇敬厚く、社運隆興せり。例祭四月十九日。(三坂神社)大字岩見字西磯ノ口にあり。郷社。祭神大國主命・事代主神・素戔嗚尊外二神。創立年代未詳なるも地方の古名社にして、早く聖武天平十年春秋祭料に詔稻二十束を充てられ、仁明天皇承和六年從五位下を授けられ、清和天皇貞觀九年從三位を加へられ醍醐天皇延喜の制小社に列せられ、御坂神社と見ゆ。

イズモザキ 出雲崎町 新潟縣越後國三島郡の西部。日本海岸に沿ひて西北方遙かに佐渡島を望む。土地南北に細長く低平なるも、面積狹少なる爲專ら水產業行はる。舊北陸道の一宿驛として賑逢せる處にて街村式をなし、道は南は柏崎に北は寺泊を經て新潟市に通ず。省線越後線の出雲崎驛は東隣の西越村の地域にあり。大字尼瀨には明治六年に發見せられ、我國石油事業の發祥地たる油井あり。明治二十七・八年頃までは油田景豐富なりしが、近年に至り衰微し今は僅に昔日の面影を偲ぶに過ぎず。出雲崎の名の起りは、イヅモ卽ちアイヌ語のエト・エトモにて崎の義なりといへど未だ詳ならず。此地は和名抄の古志郡大家郷の地か。古は佐渡往來の碇泊地として名高く度々官船を繫ぎ、管領武藏に依れば天正十六年上杉景勝も此地より佐渡に渡航せりといふ。近世に至り幕府の代官所を置きし地にして、諸郡散在の公料六萬石を支配せり。越後野志に「三島郡出雲崎民家千五百餘戶、置ニ官廨ニ治ニ三島郡之諸村落ニ、寛保中、長岡侯受ニ幕命ニ而治ニ之ニ、寛政之始、高田侯受ニ幕命ニ而治ニ之ニ、從ニ寛政六年寅正月ニ屬ニ水原官廨ニ、自ニ寛政十二年庚申八月五日ニ代官經間助左衞門治ニ之ニ、從ニ文化元年ニ白川侯松平越中守定信治ニ之ニ、從ニ文化九年ニ代官某治ニ之ニ、從ニ十二年乙亥ニ石瀨村官廨之代官佐藤友五郎移而治ニ之ニ、改ニ名患左衞門ニ、從ニ文政四年ニ代官野田斧吉治ニ之ニ」とあり。明治戊辰の役に水戶藩の脫走隊柳組(鳶首創比奈三左衞門)此地に也して海邊か拠守せしが、官軍に破られ、而も僅ほ逃せず更に同盟諸軍と相呼應して近地を守備せりといふ。明治維新に至り民政局を置かる。後柏崎縣より新潟縣管轄となり、明治三十七年四月尼瀨町と出雲崎町とを合併して出雲崎町と改む。眞言宗多門寺は雪て上杉謙信の位牌ノ原(昭和九年)堀(大正九年)の五驛を置く。この地は和名抄神戶郷の內、周防の二ノ宮田雲神社、式內御坂神社鎭座。(田雲神社)縣社。大巳貴命・事代主命の二座を祀る。出雲國所大明神ともいふ。聖武天皇天平十年詔稻二十束を以て春秋祭神料に充て、清和天皇貞觀九年八月正五位上より從四位下を授けられ延喜式の小社に列し、のち正一位に進められ、また當國の二の宮とせらる。鳥羽天皇應永二年國司藤原家保本社に弓・箭・鉾・鉦等の神寶を捧げて神拜の禮を修す。領主・藩主の崇敬厚く、社運隆興せり。例祭四月十九日。(三坂神社)大字岩見字西磯ノ口にあり。郷社。祭神大國主命・事代主神・素戔嗚尊外二神。創立年代未詳なるも地方の古名社にして、早く聖武天平十年春秋祭料に詔稻二十束を充てられ、仁明天皇承和六年從五位下を授けられ、清和天皇貞觀九年從三位を加へられ醍醐天皇延喜の制小社に列せられ、御坂神社と見ゆ。

イズモザキ 出雲崎町 新潟縣越後國三島郡の西部。日本海岸に沿ひて西北方遙かに佐渡島を望む。土地南北に細長く低平なるも、面積狹少なる爲專ら水產業行はる。舊北陸道の一宿驛として賑逢せる處にて街村式をなし、道は南は柏崎に北は寺泊を經て新潟市に通ず。省線越後線の出雲崎驛は東隣の西越村の地域にあり。大字尼瀨には明治六年に發見せられ、我國石油事業の發祥地たる油井あり。明治二十七・八年頃までは油田景豐富なりしが、近年に至り衰微し今は僅に昔日の面影を偲ぶに過ぎず。出雲崎の名の起りは、イヅモ卽ちアイヌ語のエト・エトモにて崎の義なりといへど未だ詳ならず。此地は和名抄の古志郡大家郷の地か。古は佐渡往來の碇泊地として名高く度々官船を繫ぎ、管領武藏に依れば天正十六年上杉景勝も此地より佐渡に渡航せりといふ。近世に至り幕府の代官所を置きし地にして、諸郡散在の公料六萬石を支配せり。越後野志に「三島郡出雲崎民家千五百餘戶、置ニ官廨ニ治ニ三島郡之諸村落ニ、寛保中、長岡侯受ニ幕命ニ而治ニ之ニ、寛政之始、高田侯受ニ幕命ニ而治ニ之ニ、從ニ寛政六年寅正月ニ屬ニ水原官廨ニ、自ニ寛政十二年庚申八月五日ニ代官經間助左衞門治ニ之ニ、從ニ文化元年ニ白川侯松平越中守定信治ニ之ニ、從ニ文化九年ニ代官某治ニ之ニ、從ニ十二年乙亥ニ石瀨村官廨之代官佐藤友五郎移而治ニ之ニ、改ニ名患左衞門ニ、從ニ文政四年ニ代官野田斧吉治ニ之ニ」とあり。明治戊辰の役に水戶藩の脫走隊柳組(鳶首創比奈三左衞門)此地に也して海邊か拠守せしが、官軍に破られ、而も僅ほ逃せず更に同盟諸軍と相呼應して近地を守備せりといふ。明治維新に至り民政局を置かる。後柏崎縣より新潟縣管轄となり、明治三十七年四月尼瀨町と出雲崎町とを合併して出雲崎町と改む。眞言宗多門寺は雪て上杉謙信の位牌

佐渡討伐の時に宿せし處にして、其文書ありといふ。曹洞宗光照寺は國內三十三所觀音巡禮第十九番の札所にして、安阿彌作の三光觀音を本尊とす。また江戶末期の奇僧と稱せらるゝ良寛は卽ち此地の人、文化五年四十八歲の時西蒲原郡國上山に隱栖し、五合庵に寓す。後山麓の乙子宮といふ小社の境內に住し、名慾を離れ風月を友として悠々自適世を終れり。「盜人にとり殘されし窓の月」「飯乞ふとわが來しかとも春の野に菫つみつゝ時をへにけり」等はよくその恬淡無慾の性質を吐露せるものなり。好色一代男「佐渡の國、かな山に寄る慰行に、十八里こなた、出雲崎といふ所に渡り日和を待て明暮只も居られず、舟宿のあるじを招き此所のなぐさみ女はと尋ねければ」長謠・佐渡おけさ「佐渡と出雲崎や竿さしやとどく、などてとどかぬ我が恩」(明治天皇出雲崎行在所址)指定史蹟。明治十一年北陸東海巡幸の際九月十四日御駐泊あらせられたる處にして其物は同十四年三月機失せり。御座所址は切石にて圍み石壇を築き玉垣を繞して保存せり、附近羽黑神社境內に御時水の井あり。(善願寺)大字尼瀨にあり。日蓮宗。大覺山と號す正應元年日則上人の開基に係る。卽ち文永八年日蓮上人佐渡配流の際、日則上人日和待の緣故を以て草創せしものなりと傳ふ。本尊は釋迦牟尼佛にして、春日の作なりと云はる。境內に日則上人塚・越後孝女碑等あり。(多聞寺)妙義眞言宗豐山派。出雲山と號す。空海上人の開基に係り、もと寶塔院と稱す。本尊多聞天は上杉家代々の守護神たりしな、天正十六年上杉景勝の寄附により、寺號もそれに因みて多聞寺と改む。境內別殿に順德天皇御作苦公像を安置し靈驗顯著なりと。(念相寺)大字尼瀨にあり。眞宗大谷派。文治年間佐藤繼信の妻音羽前らの假初の住居の址なり。開基不詳。寺寶に、義經の忠信に賜はりし靜女の鼓・陣羽織・忠信の甲冑等を藏す。(法持寺)大字勝見にあり。曹洞宗。文治年間源義經此地を過ぎ、一字を草と兜守たる稻荷尊天を安置すと傳へらる。(萬國寺)大字尼瀨にあり。眞宗佛光寺派。田澤山と號す。開基は蓮照房永吟法師にて、寺寶に、聖德太子作太子孝養の尊像を藏す。

イズモノミサキ 出雲御崎山 ↓寺尾村(新木縣)

イスル 出流 石動 ↓

【石動町】 富山縣越中國西礪波郡の中部高岡市の西南方約一五杆、西部は稍と丘陵地を成すも、東部は小矢部川に沿ひて平地拓け米・絹織物等を產す。市街は其中央に發達す。北陸街道は西南金澤市方面より天田越を經て來り、東北高岡市方面に走る。北陸本線また之に沿ひ石動驛(明治三十一年設置)を置き、これより此線加越鐵道を分岐す。石動氣象觀測所

及び縣立石動高等女學校あり。また眞宗大谷派道林寺は明治十一年明治天皇北陸御巡行の砌行在所となりし聖蹟にして、今指定史蹟たり。此地は和名抄鵜波郡八田郷の内か、中世は宮島郷に屬せり。江戸時代は北陸道の一宿驛たりしが、明治維新後寫會所を置き、後町村制施行に當り十二箇村を一團として石動町を組織す。大字小矢部は古戰場として名高く、寿永二年、平維盛の軍木曾義仲の兵と般若野に戰つて敗れ、退きて小矢部磯に陣を布きしも鵜波山の合戰に再び敗れ、終に加賀に敗走せり。〔今石動城〕北隅の子撫村との入會山中に在り。天正十三年前田利家、木舟城に對して築きたる城にして、利家の弟秀継、加賀國津幡城より來り、其子利秀をして守らしめしが、文祿二年病歿し、後家臣藤島縫部を置きしも幾何もなく廢城となる。〔愛宕神社〕大字今石動にあり。郷社。祭神・軻玖突智命・伊須流岐比古命・伊須流岐比賣命。創立年代は未詳なるも、山城國愛宕山を勧請せる地方の古社にして、中世伊須流岐比古神を合祀して鵜波の大宮と稱へ、石動町外四十餘村の產土神として上下の崇敬を受く。又白馬山城の守護神として領主前田氏の尊信篤く、所願神として社殿の造營・寄進等のことあきらか。社域は舊白馬山城址にして古木老松茂り頗る眺望に富む。例祭四月二十四日。〔觀音寺〕古義眞言宗。本尊山と號し國宗金剛峯寺末なり。法道仙人の開基と傳ふ。天正年間前田利秀永代祈願所と定めたり。〔乘光寺〕今石動にあり。眞宗本願寺派。寺傳に佐々木高綱の創建といふ。高綱源平爭亂の後、親鸞の門に入りて了智と號し、承久二年、今の石川縣河北郡中條村相窪に道場を開く。是當寺の濫觴なりといふ。のち現地に寺基を移建せり。韓如・蓮如の兩上人留錫せし事あり。國主前田氏黒代の崇信殊に厚く、明治維新に至る迄慶事には參謁するを恒例とせり。〔十輪寺〕眞宗大谷派源義經の臣片岡八郎經晴出家し、鵜波山麓に天台宗の精舍一宇を建立す。のち親鸞上人北國巡錫の際歸依改宗す。慶安二年に至り現地に移りしものなり。

【石動山】 石川縣寶達山脈の一峯。鹿島郡の南東邊、富山縣水見郡境に連る山。「せきどうさん」・二宮山とも呼ばれ、越路村大字石動山は此山中の地なり。標高約五〇〇米。連峯は東北に走りて鹿渡岬・佐宋岬となる。山上に延喜式内伊須流支比古神社あり、二宮とも呼ばるゝより此山の別稱生ず。また太平記の載する所、元弘年中、能登國司中院少將定清の普門利清と千戈を交へて戰死せる遺蹟なり。山中にもと石動山天平寺と號せし互刹あり、法堂仙人の開基にして天智天皇以來の勅願所たり。中世その勢漸く盛にして僧房三百六十餘に達し、天正十年僧徒兵を擧ぐるや前田利家・佐久間盛政等の攻伐をうけ一山悉く燒亡せり。慶年羽柴秀吉勅を奉じて再建せしも、明治維新後廢寺となる勅きなき世には變りて石動の山とは神や名つけそめけん　准后道興」

イセ　伊勢

【伊勢】 江戸日本橋の町名。本小田原町瀬戸物町等の東に接し伊勢町堀に臨み、南北に走れる町。町名は小田原落城の後北條氏政の弟氏村が此地に來り伊勢氏と名のりし故と、伊勢人が移住せし故との二說あり米穀問屋の多かりしにて有名。現存。通言總覽に「日本ばしの眞中から、ふりさけみれば神風や、伊勢町の新道に奉公人口入所といふ、籠板のすちむこふ」

西鶴置土產・二「是は〳〵伊勢町の月夜の利左門といへる大臣、我が家を立のき何國に暮せしももちざりしに」

【伊勢國】 東海道十五箇國の一。北は美濃・尾張の二國、東は伊勢海及び志摩國に、南は一部太平洋に、一部は紀伊國に接し、西は近江・伊賀・大和の三國に境す。行政上五市十郡に分れ三重縣の所管に屬す。一に勢州とも稱し、また雲出川を境として北伊勢・南伊勢にも分つ。鈴鹿山脈・布引山脈國の西部を南北に走り南部に於て紀伊山脈と丁字形に交はるを以て太平洋方面は急傾斜をなし從つて河流と稱すべきものなし。町屋川・鈴鹿川・雲出川・櫛田川・宮川等の諸川は皆東流して伊勢灣に入る。而してこれ等諸川の下流に肥沃なる平地を構成し、米を產し伊勢米として名著はる。伊勢海の海岸は屈曲乏しく北部の四日市と南部の大湊とを除き良港地を缺く。此國は往昔より神宮鎭座の地として水陸の交通よく開け、東海道は近江より鈴鹿峠を經て、國の北部を通過して尾張に出で、伊勢街道即ち參宮街道は四日市附近から岐れて山田に來る。伊勢は夙くより開け、太古には猿田彦命この地を領す。後神武天皇御東征の時熊野に至り給ふや天日別命に命じて此の國に占據せる伊勢津彦を退去せしめ給ふ。伊勢津彦は伊勢國風土記(釋日本紀引く所の)によれば神武天皇の將天日別命に攻められ、叶はずして此國を棄て東方に退去す。退去の夜八風を起し、海水を吹き、日の如く燿き波に乘じて東に向ひ、後信濃國に居住せりとあり。神風の伊勢國といふは此古事より起りしものと云へど遽に信じ難し。たゞ先史時代伊賀・伊勢の地は出雲族の占據せるところにて海人系の阿部(阿閉)氏との間に領地爭奪の行はれしこと而して伊勢の出雲族は大和朝廷の壓迫により東方に移動せしこと等は考へ得らる。國造本紀によれば神武天皇の朝、國造常立尊十世の孫天半羅雲命・孫天日鷲命を國造に任ずとあり。日鷲は即ち日別である。尙當時の伊勢國は伊賀・志摩をも含みしもの。垂仁天皇の朝、天照大神の神諭に從ひ神宮を五十鈴川の上に建て磯宮といふ。伊勢の國號は此の磯より出づるか。雄略天皇の時豐受大神宮を丹波より山田に遷し後則神宮の封域か神國と呼ぶ。武烈天皇の時、國の東南隅答志・英虞を割きて志摩國を分置し、天武天皇の時西境河拜・山田・伊賀・名張の四郡を分割して伊賀國を置き、其餘を以て伊勢國となし三宅進を國司に任じ、國府を鈴鹿郡に置く。元正天皇の養老五年三月國司門部王を以て志摩を兼治せしむ。是より先き大化改新の際この國は桑名・員弗・朝明・三重・河曲・鈴鹿・奄藝・安濃・壹志・飯高・度會・多氣の十二郡あり、度會・多氣を神郡と呼ぶ。天智天皇の時多氣より飯野を分ち十三郡となる。神郡は後に飯野を加へ神三郡と稱し、更に員弗・三重・朝明の三郡を加へ、道前・道後の稱を以て之を分つ。また安濃郡を東西に、飯高郡を南北に分ちて神領とし神八郡ともいふ。戰國の頃國境大いに亂れ度會郡伊氣郷は志摩國に入り、志摩の濱渭・船越・芳草の三郷は度會郡に入る。中世には平維衡國守となり以後子孫繁榮し清盛の時最も隆盛にして神領多く其侵略する所となり、世にこれを伊勢平氏といふ。鎌倉時代平貞盛・大内惟信相繼いで此の國の守護となり、建武中興の際には北畠顯能國司に任じ志摩國を兼治し一志郡多藝に居り子孫世襲す。足利尊氏の叛するや仁木義長を守護とし北畠氏を攻めしめ、義長の吉野に歸順するに及び足利義詮は土岐頼康を守護とす、時に州族長野藤房長野城に據り安濃・奄藝二郡を領し、岡・神戸・峯・鹿伏兎・國府の五族は鈴鹿・河曲二郡に據り皆土岐氏と共に北畠氏を拒みしも、天中九年南北講和の後、顯能の子顯泰一志・多氣・飯野・飯高・度會の五郡を領し故の如く國司と稱す。土岐氏も亦守護を襲ぐこと三世に及びしも、永享中土岐持賴の誅せられし後は、土奈四十八族北勢に相爭ふこと數十年に及び、南勢の北畠顯泰の曾孫政具田でゝ長野神戸諸氏を降し伊勢一圓に號令するに至る。政具の曾孫具教の時、織田信長北境を侵し弟信包をして長野氏を繼がしめ、第三子信孝を神戸氏の後とし、また鵜川一益を桑名・員弗・朝明・三重・鈴鹿五郡に封じ長島に居らしむ。永祿十二年具教、信長と和し信長の次子信雄を養ひて北畠の嗣とし松ヶ島に置く。天正四年に至り信長北畠氏を滅し悉く本州を領す。天正十年本能寺の變あり信長弑に遇ふに及び信雄は尾張清洲に歸る。既にして豐臣秀吉一益の封を奪ひ北勢を信雄に納れ、南勢五郡に蒲生氏郷を封じ松坂に治せしむ。信雄はまた岡一政に龜山を與ふ(一政後に白河に轉封す)。天正十八年秀吉の天下を平定するや信雄の封を奪ひて部須に放ち、北五郡を義子秀次に賜ふ。氏郷轉封の後に服部一忠・古田重勝相繼いで松坂に居る。文祿の初め信包の地を收め、分部光嘉を上野一萬石に、富田知信を安濃津五萬石に封じ、次いで氏家行廣を桑名二萬二千石に封ず。德川氏に至り、菅沼定仍を長島に(のち增山正賢)。一柳直盛を神戸に(のち本多忠統)松平忠明を亀山に(のち石川總慶)、土方雄久を菰野(菰野)に封じ、古田重勝を濱田に徙し、松坂を紀州の德川賴宣に加賜し(近畿十八萬石)、分部・富田の二氏を他國に移し、鈴鹿高虎を封じて安濃津に鎭せしめ其支封役を久居(藤堂高次二男高通)に置く。關原後、桑名の氏家行廣の領地を沒し、本多忠勝を桑名十二萬石に封じ元和中其の嗣忠政を姫路に轉ぜしむ。のち松平定勝・松平定綱・松平忠雅相繼いで封ぜられ、忠雅の後七世にして武州の忍に移り、定綱十世の孫定永再び此地に封を受く。他の六藩(津・亀山・長島・神戸・菰野・久居)は皆世襲して幕末に至る。是より先き山田は神宮の所在地なるを以て幕府の直轄地として山田奉行を置き神宮の事を管せしむ。明治維新となるや度會府を山田に置き、二年二月改めて縣とす。明治四年諸藩を廢して縣を置きしも同年十一月これ等の諸縣及び度會縣を廢して更に安濃津・度會の二縣とす。明治五年安濃津縣を四日市に移し郡名に因みて三重縣と改稱、翌年再び安濃津に復せしも三重縣の稱を踏襲す。明治九年度會縣を廢して三重縣に合す。明治二十九年朝明郡を三重郡に併せ奄藝・河曲の二郡を以て河藝郡を建て、飯高・飯野二郡を併せて飯高郡を置き以て今日に至る。

【伊勢平野】 三重縣伊勢國の東半を占める平地。南は宇治山田市の邊より北は養老山脈の南約八〇粁まで、東端は伊勢海より西は鈴鹿山脈東側まで約一二粁の間に亙る。弓形に長く延び、西より東に緩かに傾き、町屋・朝明・三滝・内部・鈴鹿・安濃・雲出・櫛田・宮・五十鈴の諸川これを灌漑す。東は海に面し、西北に山を負ひ氣候溫和にして國産また中庸、伊勢米を多產し、麥・茶・種柔・煙草の產また少なからず。養蠶行はれて繭の產額に、紡績・織物・生絲・陶磁器・漆器の工產また榮え、三重縣諸生產額の大部分はこの平野より產出せらる。特に伊勢神宮の鎭座せらるゝを以て誇りとす。

【伊勢灣・伊勢海】 本州中部地方南西岸の大灣入。三重縣志摩郡東北部にある答志島群と愛知縣渥美半島の西角伊良湖岬との間より西北方伊勢と尾張の間に灣入し、灣口は僅に一二粁なるも南北約六〇粁、東西最も廣き處約三〇粁に達す。東は知多半島によりて限られ、その南端幡豆岬と伊良湖岬との間より東方、北方に灣入せる渥美・三河湖灣に通ず。この灣入は陸内陷沒盆地の一逸が破れて海水の侵入せるものにして靜岡縣濱名湖とその成因は同じく、たゞ規模の大なるものと見るべきものなり。沿岸延長約一八〇粁に上るも、北岸には木曾川・長良川、西の伊勢海岸には鈴鹿川・雲出川・櫛田川・宮川等流入し、概れ砂濱をなし遠淺にして良港をなさず。たゞ古く幾内と東海との交通上の要路に當るを以て、桑名・四

日市・安濃津（今の津市）・大湊等は港として繁榮せり。特に宮川河口にある大湊は、吉野時代吉野朝の東海・關東經營上の要津たりし處。また灣口西岸の鳥羽港は熊野灘と遠州灘との間を航行する帆船の絶好の風待港たり。古來港の清きにより名所とされ歌に詠ぜらる。萬葉・四「基檢師の伊勢國に往ける時留れる妻の作れる歌一首　神風の伊勢の濱荻折り伏せて旅宿やすらむ荒き濱邊に」催馬樂・伊勢海「伊勢の海の、伊勢の海の清き渚の汐間に、名告藻や摘まん、貝や拾はん玉や拾はん」玉葉・釋教「いせの海の清き渚はきもあらはあれ我は濡れる水に宿らむ」

【伊勢濱】　伊勢灣西岸の海濱。歌枕。→伊勢海

【伊勢灣】　伊勢海に同じ。

【伊勢路】　伊勢國に通ずる街道。單に伊勢地方を總稱して伊勢路ともいふ。八雲御抄に伊勢路の名見ゆ。三國地志・伊勢國・路程「按津より京師に至る廿五里、江戸に至る百一里二十三町、南都に至る二十一里、大坂に至る廿九里、鳥羽に至る十一里廿九町」とあり。これ等の街道はいづれも伊勢國に通ずる街道の意にして伊勢路と呼びしもの、特定の一街道を指ぜしにはあらざるべし。信濃宮傳「一品宮は十餘年の春秋を、上野・信濃の間に送りむかへさせ給ひ、正平二十四年の夏、長都綿光實を信濃に留置たまひて、尾張國犬山へ出させ給ふ」、同じ國羽豆崎より御船にめされ伊勢路を經て芳野に御上りあり」五雜俎「關・東海道「伊勢路、中國路、中山道、美濃路」

【伊勢山】　伊勢國鈴鹿郡の歌枕。今の三重縣鈴鹿郡の鈴鹿山を稱せしものか。夫木・二〇「もみちはのせきは鈴鹿のいせの山にしきをぬすむ風なとほすな　慈鎮」

【伊勢島】　志摩國の異稱。伊勢より海中に突出せる島の如き國の意。志摩には初め答志・英虞の二郡ありしも、明治維新後、志摩の一國一郡となる。諸國名義考・上「或書に、志摩國風土記の逸文として引きたるに、志摩は、爲二伊勢島一之意也、故、地田二海中一之島也」神樂弓立「伊勢島や海人のとれちがたたほのけオケオケ」

【伊勢奥津】　省線名松線の一驛（昭和十年設置）三重縣一志郡八幡村大字奥津にあり。

【伊勢柏崎】　省線紀勢東線の一驛（昭和二年設置）三重縣度會郡柏崎村にあり。

【伊勢鍛冶】　省線名松線の一驛（昭和十年設置）三重縣一志郡八知村にあり。

【伊勢川口】　省線名松線の一驛（昭和六年設置）にして中勢鐵道に接續す。三重縣一志郡川口村にあり。

【伊勢竹原】　省線名松線の一驛（昭和十年設置）。三重縣一志郡竹原村にあり。

【伊勢八太】　省線名松線の驛（昭和五年設置）。三重縣一志郡川合村八太にあり。

【伊勢八知】　省線名松線の一驛（昭和十年設置）。三重縣一志郡八知村にあり。

【伊勢村】　兵庫縣揖保郡の東北隅。姫路市の西北約一二粁。作州街道南部を掠め新宮・三日月方面に向ふ。西は林田村、東は飾磨郡餘部村に界す。東西兩界は山地をなし森林あるも、中部には南北に細長き低地あり、水田拓け米を主産し外に麥・麦麺・繭の産あり。古の伊勢野の地。播磨風土記「所以名伊勢野者、此野等在人家、不得靜安、於是衣縫猪手・漢人刀良等祖將居此處、立社山本、敬祭在山岑、神伊和大神子伊勢都比古命・伊勢都比賣命矣。自此以後家々靜安蓬得成里。即號伊勢」

【伊勢野】　→伊勢村

【伊勢川】　兵庫縣揖保郡の東部。伊勢村を流れるより此名あり。下流は大津茂川となり播磨灘に注ぐ。伊勢は此地に祀る神、伊勢都比古・伊勢津比賣の二神の名に據りて名づくと傳ふ。播磨風土記「伊勢川、因二神爲一名」

イセー　伊西

【伊西面】　朝鮮全羅北道全州郡の西部。全州府の西約一〇粁、その間に伊東面を隔ち、西は金堤郡に接す。萬頃江の流域たる全州平野の一部にて耕地一面に開け米麥・大豆・綿花等の農産多く、養蠶も行はれ、また叺の製産多し。西部に首邑上同里あり、東方の全州府より西方の金堤邑方面に達する道路に當る。

【伊西面】　朝鮮慶尙北道清道郡の西北部。北は達城・慶山の二郡に接し、大邱府の東南方約二四粁。北部は一帶の山地なるも、南部は郡内第一の平野なる清道川上流流域の北部を占め、耕地開けて米麥・大豆・棉・大麻等の農産物あり。なほ本郡の特産盤柿（種子なし柿）は本面内各地よりも産す。

イセオ　伊勢雄潟

石見國那賀郡長濱村の灣入せる所。歌枕。今の島根縣那賀郡濱田港の南部にあたる。夫木・二五「いせをかたけふりもなみもつらからすそれにも秋のいろしみえれは　爲家」

イセカミ　伊勢神

【伊勢神】　愛知縣東加茂郡にありし村。明治三十九年本村は賀茂村・金澤村と共に廢せられ、其の區域を以て新たに賀茂村を置く。

【伊勢神峠】　愛知縣東加茂郡賀茂村・北設樂郡武節村の境界にある山路。飯田街道に當る。この峠より遙に伊勢神宮を拜し得る故に、この名ありといふ。標高約九百米。

イセキ　井關

【井關】　三重縣一志郡大井村の大字。省線名松線（名古屋・松坂間）の井關驛（昭和五年設置）を置く。

【井關山】　三重縣阿山郡布引村にある山。歌枕の名所にて謠曲井關山も此山に因みたるもの。新續古今・一一「流れ出つる涙はかりを先たててるせきの山を今日過ゆるかな　道命法師」

【井關崎】　大阪府泉南郡と和歌山縣海草郡との境に近く、泉南郡東鳥取村より海草郡の直川村を經て和歌山市に至る大阪街道の間道に當る。櫻雲記に和泉國井山城に官軍籠れりとあるは此處なるべし。

【井關村】　山口縣周防國吉敷郡の西南部。宇部市の東北約一四粁、西は厚狹郡厚東村に界し、東は樺野川口の海灣を隔て吉敷郡秋穂二島村に對す。西半は丘陵地にて原野多きも東半は平地廣く水田拓け、主産物に米・麥あり。外に煙草の栽培行はる。本村の字名を負へる山陽本線の阿知須驛は北隣の佐山村の地路にあり。社線宇部鐵道は本村内に本河知須・岩倉（共に大正十四年設置）の二驛を置き交通の便に寒まる。なほ村内の萬年池附近より近年石劍の破片及び彌などを出土せり、此邊は古代人の居住に適する地なることを思ひ合ふる時、恐らく此邊は石器時代より既に住人ん見たるにあらざるか。なほ後考に俟たん。〔北方八幡宮〕井關村字北方に鎮座。郷社。祭神、座神天皇・伸宮天皇・神功皇后外三神。室町時代の古社にて、座氷十七年大内盛見社殿の造營をなすと傳へ、また現社殿は延寶八年の建立といふ。

イセザキ　伊勢崎

【伊勢崎町】　群馬縣上野國佐波郡の中央部に位し、前橋市を距る東南約一二粁。地勢は平坦にて地味肥沃、耕地に富む。利根川の支流粕川・廣瀬川の二流それぞれ町の東部及び西部を南流す。地質は第四紀層埴質壤土と同紀新層砂質壤土とより成る。國道西北方前橋市方面より來りて東南方埼玉縣深谷を經て熊谷市方面に通じ、省線兩毛線西北方より國道の北方に並行して來り、伊勢崎驛（明治二十二年設置）を置き、また社線東武鐵道伊勢崎線（電車）の新伊勢崎驛（明治四十三年設置）あり。此地は桐生・足利と共に機業甚だ盛んにして、特に伊勢崎銘仙の本場として名高く、絞物を伊勢崎絞といひ絣物を伊勢崎絣といふ。夙く享保年間より世に著はる。古くは自製の撰斗絲・玉繭絲を原料とし、これを植物性染料にて梨皮色或は茶鼠色等に染色し、單純なる絞を織出せる太織に過ぎず。文化の頃に至り、經絲の數多くして地合の密なるもの製織され、これを目專または目千と名づけしも遂に銘仙と呼ぶに至る。文政年間には著しく進歩し、天保年間には賞機を專業とする者もあり。明治二十四年頃より經絲に紡績絹絲を試用せしも、地合は平滑になり假も比較的に廉く、同時に染色に改良を施ぜし結果世の嗜好に投じ著しく需要を增加するに至る。現今每週金曜の本市、火曜の準市に於いて賣買ぜられ、其年産額一千萬圓内外にも及ぶ。當郡役所の所在地にて縣立伊勢崎高等女學校・縣立工業學校・伊勢崎商業學校等あり。此地往昔は赤石郷といはれ、永祿九年伊勢大神宮に神領を獻じ、社殿を城中に造營して之を祀れるより地名を伊勢崎と改稱せりと傳ふ。奈良時代より平安時代に入り藤原秀郷五世の孫淵名大夫、この地を統御し子孫世々掌領せしものゝ如く、越えて鎌河天皇寛治年間郷人赤石左衛門尉源義家に從ひ、戰功に依り三箇の莊を賜はり始めて赤石城（のちに伊勢崎城）を築く。〔伊勢崎城〕郷人赤石左衛門尉の築城に係り、當時は郷名により赤石城と稱す。久壽・平治の頃より天龜に至るの間三浦・新田・由良等の諸族相次いで之を領し、次いで那波氏の據る所となりしも、駿河守宗俊に至り永祿三年上杉謙信の攻取する處となる。而して其部將荻田備後守これを守りしも、のち北條氏の居城となる。慶長六年稻垣長茂、關ヶ原役の功に依り一萬石の封を受けて此處に居り、元和二年其子重綱は更に一萬石の加增を得て越後に轉ぜしより暫らく其主を缺くに至る。〔伊勢崎藩〕尋いで脇坂侯酒井忠世の所領となり、寛永十四年孫忠能伊勢崎侯に封ぜられ、寛文二年宗家の領に歸せしも、永寶九年酒井忠清の第二子忠寛二萬石を分與され、別に一家を爲して此處に封ぜられ、爾來子孫相繼ぎて明治維新に至る。明治二年伊勢崎藩主酒井忠彰封土を奉還し同時に知藩事となり、同四年廢藩置縣の際群馬縣に屬し、後一時熊谷縣に屬せしも同九年更にまた群馬縣に歸す。藩政時代學習堂と稱する藩校あり、安永四年の創立に係る。寶暦天明年間に至り、藩主酒井驍河守儒學を尊崇し、其臣關重嶽・磯田邦光等力めて學事を振興せるを以て一時大いに隆盛を致す。學派は子思を主とす。〔伊勢崎神社〕伊勢崎城址の中に鎮座村社。祭神宇氣母智命・倉稻魂命。大正十五年村社西福神社と無格社稻荷神社とを合祀せるもの。飯福神社は順德天皇の建保元年三浦介義澄の創建といふ。元德元年新田義貞社殿を修理し又歷代藩主の尊崇を受く。稻荷神社は享保七年の創建、今伊勢崎町の總鎮守たり。〔同案院〕字袋町にあり。曹洞宗。本尊は正觀世音菩薩。平治元年赤石城主三浦介義明、鎌倉建長寺の僧智海を招き赤石左衛門の靈を弔ふ爲に創建すと傳ふ。當時は臨濟宗なりしも元德二年新田義貞太田の金龍寺住職をして後任せしめ曹洞宗に改む。戰國時代寺僧雖を遺れて三郷村（波志江）に一字を結び山號赤石山と改む。弘治元年附天意堂宇を今の地に移建し中興開山と稱せらる。〔華藏寺〕字華藏寺にあり。天台宗山門派。本尊は釋迦牟尼如來。貞觀十四年三井寺中興の座主智證大師下野國日光山よりの歸路この地に留まりて建立せし大刹にて末寺十二を有せりといへど今は如何。文治年中赤石城主藤田經義の新願所となり、慶安二年將軍德川家綱より朱印地十三石を賜はる。寶暦・天保の二回に亘り火災に罹る。〔本光寺〕淨土宗。本尊は阿彌陀佛。貞永年中道圓上

人(三浦氏の臣遠谷七郎)の建立と傳ふ。永和年中大後郡日阿彌入道堂宇を改築し東光寺と改稱し、のち赤石城主赤石氏の香華院となる。文政六年・寛永四年の兩度火災に罹り、今の堂宇は寛永六年の建立に係る。〔伊勢崎公園〕 字華藏寺にあり。天然の林園にして東方に小丘あり、相對して西方に沼あり。丘上に登れば伊勢崎市街を俯瞰し、また赤城の雄偉・機名の秀麗・妙義の奇峯を一眸の裡に望み、遙に富岳をも望見し得る。沼を圍る堤上には老松鬱然と茂り、其間に老櫻・壯楓及び躑躅など點綴し寔に天然の勝區を成す。〔華藏寺境内の金木犀〕指定天然記念物。華藏寺境内にあり目通幹圍約二・六米幹は三大枝に分れ樹勢旺盛金木犀の互樹として有數のものたり。

【伊勢崎村】 島取縣伯耆國東伯郡の北部。大山火山の東北側の散射谷の末に當り、加勢蛇川下流右岸を占め、北は日本海に面す。倉吉町の西北約一二粁、舊山陰道・省線山陰本線共に東西に通ず。概ね平地にして田畑拓け、米・繭の産あり。西隣の市勢・逢東の二村と組合村をなし役場は市勢村大字金市に置く。此地古くは和名抄八橋郡高見郷の内。〔雲尾驛寺址〕大字雲尾の原野にあり、東西に相對する二箇の土壇にして礎石殘存す。西方は明に塔址、東方は金堂址と推定さる。金堂址の北や、低き處に七間四面の礎石排列し、南に中門址と認むべき土壇の一部あり。遺瓦等より奈良時代に於ける法隆寺式伽藍の遺址と推定せらる。此種の址は山陰地方には稀有のものとす。

イセジ 伊勢寺 大阪府三島郡高槻町の南部にありし里の名。同村金龍寺の山麓にあたる。現在伊勢寺のある附近ないひしものか。武道傳來記・二「此麓の里に伊勢寺と云所有、是はむかしの獄人の伊勢が古里にして草ふかき山陰ながら」

イセジ 伊勢地村(いせ) 三重縣一志郡の西南部。西は奈良縣宇陀郡御杖村と界す。紀伊山脈の一脈高見山脈東部と布引山塊の接觸部に當り、雲出川の上支川上川の支谷を占む。山地多く、たゞ中部東西に谷地をなし農業行はれ、米・繭を産す。東隣八幡村に出で川上川に沿ひて下る外、交通の便よろしからず。本村は和名抄の豊志郡宮野郷の内。大字三多氣(みたけ)に眞言宗眞福院あり昌泰二年曾彫寶の開創といひ、北畠氏の祈願所たりし寺。東方大字石名原よりこの寺に至る間約一・五粁の間櫻樹並植され、花時甚だ美觀を呈す。

イセデラ 伊勢寺村 三重縣伊勢國飯南郡の東北部。松阪市の西方約四粁。西及び北は一志郡に境す。西部郡境に堀坂山(七五七七米)峙ちて西半は山地なるも東半は所謂伊勢平野の南部に位し、土地低平にて水田拓け、また蔬菜栽行はる。東部は松阪市に近く交通不便ならず。大字岩内は北畠國司の一族岩内氏の居せし地、また淨土宗の瑞巖寺ありて眞面に觀音菩薩の大像を刻せり。此地は和名抄の飯高郡上枚郷の地か。往古國分尼寺のありし地といはれ、村名は是より起るといふ。三國地志・四二「伊勢寺 按、本尊藥師佛、丈六の釋迦、及び七級の塔等、悉く中世の兵燹に罹る。後世一小寺を建て國分寺の名を冒す。其傳云、是古の國分寺の遺址にして、所々坊舍の遺名あり。且寺を距ること五町許、八重田村(今の大字)に中門の址、並に下乘の地あり。二十九町を距て、東曲村に仁王門の址ありと云。雖然、民部省圖帳に、僧尼を國院にわかち、府の西東に置と云を以みれば、本國の國府は鈴鹿郡にあり、國分寺の故址は河曲郡にありて、正しく府の東にあたる。伊勢寺は、府及國分僧寺かへたつること遙絶して、古制に應ぜず。且天平の經營といへども、堂門相距る二十九町に至るへからず。東曲・八重田の故址は、別に大寺の礎址なるへし。後世行基の夢想を稱して、奇異妄誕の說を以、此等の所緣に附會す。曾とらず」〔國分寺〕大字伊勢寺にあり。古義眞言宗仁和寺末。一に伊勢寺と稱す。往古國分尼寺にして僧寺は河曲村國分の國分寺なるべしといふ。〔瑞巖寺〕大字岩内にあり。淨土宗知恩院末。妙法山と號す。弘仁年間空海の開創に係り自刻の十一面觀音石像を本尊とす。中興は法譽。

イゼナ 伊是名島 →伊平屋村(いへ)

イセハタ 伊勢畑村 茨城縣常陸國東茨城郡の最北端。北は那賀川を隔て、那珂郡野口村長倉村に對し、南は西茨城郡七會(ちかい)村に接し、西は樹木縣芳賀郡茂木町に界す、南境に井殿山(三一七米)あり。大部分低き山地をなし北方に低下し山林多し。那賀川に沿ひ耕地や、拓け、米麥を産す。尊攘の志士蓮田東三(爵從五位)は此地の出身なり。

イセハラ 伊勢原町 神奈川縣相模國中郡の北部。大山の東南麓に位す。東南部はやゝ丘陵を成すも西部は鈴川南流し土地平坦なり。主産物は米・麥・落花生・蠶・煙草にして其他弓を特産す。縣道八方に通じ、就中東北方厚木町を經て東京青山に至る大山街道といふ。此線小田原急行鐵道(電車)の伊勢原驛(昭和二年設置)を置く。伊勢原高等女學校あり。此地は中世糟屋庄といへる地にして、古くは南隣大竹村(今本町の地内に入る)の秣場なりしを開墾して一村落を成せるものなりといふ。而して土人の傳に元和六年伊勢國の人來りて棗茸を墾圃して此處に住し、且つ故國を慕ひて神明社を建てたり。〔村名〕これによりて起りしといふ。〔神明社〕村社。祭神天照皇大御神・豐受姫大神。當村開墾の頃勸請せりと傳へ、伊勢の神廟に擬し、二十一年目毎に此頃修理を加へ遷宮の式あり。例祭六月十五、十六日〔大慈寺〕淨土宗。芝の増上寺末。田原山最勝院と號す。元和六年柔譽空華の創建に係る。本尊は阿彌陀如來にして那須太子の作と傳ふ。〔伊勢原八幡塚石器時代住居址〕指定史蹟。塚地に二箇所あり。各〻畑の地下約一尺七八寸の處に存す。一は字山王塚にあり、冒平なる根府川石を ほゞ楕圓形に敷き、南北の徑約十九尺東西の徑約十一尺、やゝ中央に壇址を存す。一は字宮の前にあり。河原石を敷きたるものにして、今敷石移動せられ其の全形を認むるを得ざるも、ほゞ南北の徑約二十八尺、東西の徑約三十八尺あり、中心より西南に片寄りて壇址を存す。兩遺址及び附近より石器並に縄紋土器を出す。

イセン 伊川

【伊川郡】 朝鮮江原道の北西隅。南北に狹長なる地を占め、東は平康郡、南は鐵原郡、西は黄海道金川・新溪・谷山の三郡、北は深く咸鏡南道に突入して德源・安邊の二郡にそれぞれ隣接す。大白山脈支脈の山地は全郡に亙りて起伏し、北境に霊異山(一五八五米)・蜜峰(一三四〇米)、東境に鶴岩山(一一二三米)・鳥德山(八八二米)、西境に雲花山(五八一米)・華蓋山(七五九米)・大乙山(六八一米)・立岩山(一一〇七米)、郡内中部に石峰(八〇九米)、南部に文治山(七九七米)等の諸山屹立す。臨津江北方の德源郡より來り古味香川その他の大小十數の支流を合して郡の中央を南に貫き、沿岸一帶に耕地を開く。地味肥沃にして農作に適し、米・麥・豆類・粟・稗・玉蜀黍・綿・大麻等を産し、養蠶・養鮮行はれ、また蕎麥粉・小麥粉・麻布・絹布・燒酎・鰊等の土産あり。なほ林産・畜産も少なからず。道路は臨津江の河谷に沿ひて縱貫するものを幹線とし、諸支流に沿ひて東西に通ずるもの多數あり。高句麗時代には伊珍買縣と稱し、新羅時代には兎山に屬して兎山嶽縣となる。高麗顯宗王の時に東州(今の鐵原)に屬して花山縣と稱し、李朝太宗十三年に至りて伊川縣と改稱、光海君時代に伊川府に改め仁祖太王の時に縣に復し、肅宗太王の時に又伊川府と稱せしも李太王の建陽元年に郡となして今日に及ぶ。大正三年の行政區劃整理に際し南隣にありし安峽郡の安峽・東・西の三面を本郡に合し、今伊川面以下十一面を管轄し、郡廳を伊川面郷校里に置く。

【伊川面】 朝鮮江原道伊川郡の南部。東は平康郡に接す。大白山系の支脈延びて南境に嶺星山・文治山(七九七米)・頭龍峯北境に鷲峰・峰火山等聳り山地をなすも、西邊を臨津江南北に流れ一支玉溪川また東境より西の中部を流し西境に近く本流に合す。二川の流域に耕地開けて米麥その他の穀類・綿花・大麻等の農産あり西部の郷校里は郡廳の所在地にして麻布・燒酎等の工産を有す。道路は此地を中心として四方に通達し、物資の集散取引行はる。此邑の南部、玉溪川の河岸に聳ゆる南山は、全山鬱蒼たる綠樹によりて蔽はれ、紅葉の勝地として知らる。

イセン 伊仙村 鹿兒島縣大島郡、德之島の南西部。東北は亀津村に、北は天城(あまぐすく)村に隣る。北境中部に大田布岳(四一七米)、東部にも丘峯ありて、地勢東北部に高く西南に緩かに低下し概ね平坦面をなし、小流數條その間を流る。海岸の南部には暮念崎・伊仙崎、西部には犬田布岬突出し、その間多くは崖岸をなし、また海岸に沿ひ珊瑚礁發達せるを以て良錨地を缺き、西南岸の鹿ノ浦の小錨地あるのみ。北の大島を經て鹿兒島へ航路あるも交通の便悪し。砂糖・大島紬等の工産の外、米・麥の農産、林産・畜産あり。

イセン 渭川(せん)

【渭川郡】 朝鮮慶尙南道居昌郡の西北部。南西境は咸陽郡に接す。面内殆ど全部山脈の山地にして、南部に冀白山(一三三一米)聳ゆ。中央部は黄江の支流渭川ほゞ南北に流れ、それに沿ひ平地ありて耕地開け、米麥・豆類・大麻・精等の産あり。山地よりは薪炭・藥草を出す。交通の便よろしからず、民心一般に質朴順良なるも、また一面やゝ頑迷の傾あり。

【渭川】 朝鮮慶尙北道軍威郡の南部に發源、北西流して義城郡西南部を貫き諸溪水を合せつつ尙州郡の中東面に於て洛東江に合す。流程約一〇〇粁。沿岸に肥沃なる耕地を開き、流域は米を始め多く農産物を出す。

イソ 伊祖(いそ) →伊祖(沖縄縣中頭郡)

イソ 伊蘇

【伊蘇】 相模國餘綾郡にありし郷(和名抄)。中世の二宮庄の内なるべく、東鑑・海道記・平安紀行に見ゆる大磯は此地とす。今の神奈川縣中郡大磯町の地をほゞ其地域とす。新編相模風土記「伊蘇 唱を註ぜず、按ずるに郡中大磯・小磯等の地、蓋是ならん」

【伊蘇】 伊勢國度會郡にありし郷。和名抄は以曾と訓ず。今の三重縣度會郡豐濱村・北濱村の邊に當り、豐濱村大字磯村は郷名の遺稱なり。

【伊蘇】 伊觀(いかん)縣に同じ。→伊觀

イソ 磯

【磯】 安房國長狹郡にありし村。其地域は現在の千葉縣安房郡鴨川町の内とす。もと磯村(いそむら)といひ獄枕の名所たり。同國雜記「磯村といへる所は名にし負ひて、磯傳ひなれば 海近く磯つたひ行く磯村にむらむら見ゆるあまの釣ふね 道興」

【磯崎(いそがさき)】 義經記に見ゆる地名。治承四年源賴朝兵を伊豆蛭ヶ島に擧げ一旦石橋山の戰に敗れしも海を航して安房に至りそれより上總國を經て下總國に出て佐貫のえだ濱を經てこの海濱を通る。其地明かならざるも、今千葉縣君津郡大貫町の海岸にある磯根崎附近を稱せしものか。

【磯】 →豐濱村(ほうひん)(三重縣)

【磯山】 近江國犬上郡にありといふ山。獄枕。今の滋賀縣飯田郡米原町の大字に磯あり。この地琵琶湖畔に望めるより、此地の丘を指せしものならんか。家集「しかの路やいそ山おろしつかにて波ちの

なかにかよふ舟人　光俊」

【磯村】　島根縣隠岐國周吉郡の南部。西郷町の西に隣り、南は海に臨む。大崎・的ノ島突出して加茂の小灣を抱くも、海崖多く好錨地をなさず。東部に西郷灣の支灣ありて灣岸に西田の部落あり。養蠶行はれて生絲の産あり、外に米・魚類を出す。明治三十七年西田・下西・今津・加茂の四村を合せて本村を建つ。〔玉若酢命神社〕大字下西に鎮座。縣社。玉若酢命を主神とし、須佐之男命・稲田比賣命ほか三神を配る。若酢大明神とも地社明神ともいふ。延喜の制名神大社に列し所年の國幣に預る。國史に現はれしは平安時代の初期にて、貞觀十三年從五位下を授けらる。國内神名帳には正一位と見ゆ。社司を隠岐國造といひしといふも詳ならず、中世には國府の地社として崇敬篤し。社殿前に玉若酢命神社の八百杉として天然記念物に指定せられたる大樹あり。高さ二九米餘、幹圍は地上約一・五米に於いて約八・八米。樹齢千年以上と稱せらる。隠岐に殘存する有名な驚齢の杉は此の杉の枯枝を以て造りしもの。木理極めて美麗なり。

イソー　石生・石負

【石生】　兵庫縣氷上郡生郷村の大字。省線福知山線は此處に石生驛（明治二十二年設置）を置く。

【石生・石負】　丹波國氷上郡にありし郷。和名抄刊本には郷名を國くも、高山寺本は石負郷に作り只曾布と訓す。今の兵庫縣氷上郡生郷村の大字石生は郷名の遺稱とす。もと石生村といひしも明治四十年本郷村を合し生郷村を建て其大字名となる。此地に式内郡神社あり、また地頭方・領家方の小字名も存するは中世の莊園制度を物語る一資料たり。延喜式の星角驛は石生の地に當るといへど詳ならず。

イソー　射添村

兵庫縣但馬國美方郡の中部。城崎郡の香住町の西南約一六粁、濱坂町の東南約二〇粁。矢田川中流の谷に沿ひ、山地多く森林あり、川に沿ふ所と西南部にやゝ耕地あり、米・繭を産し、また蔬菜・花卉・食用農産の栽培行はる。舊山陰道は和田山より八鹿・村岡を經て村の中部を横ざり西隣温泉村を過ぎ蒲生峠を越えて鳥取縣（因幡）方面に通じ、縣道また山陰道に沿ふ大字和田より矢部川岸に沿ひ香住町に至る。古の七美郡射添郷の地に當り、和名抄は伊曾布と訓し中世射添莊と稱す。延喜式に射添驛馬八疋とあるは大字川會及び和田の邊に當るものか。また大字味取に式内伊曾布神社あり。

イソイチ　五十市

宮崎縣北諸縣郡にありし村。昭和十一年五月都城市に編入。

イソゴ　磯子

武藏國久良岐郡にありし古地名。近世の久良岐郡本牧領の内にして、往時は瀧頭・岡・磯子の三村を一村として神奈川郷と唱へ、のち神奈川郷平子庄となる。正保年中改定圖に既に岡・瀧頭・磯子の三村を載せたれば、それ以前に既に分村し居りたるものならん。寶永七年代官鍋口又兵衛の支配せし時、星合孫津守・小濱志摩守二人に賜はり、のち子孫星合鍋五郎・小濱佐左衛門知行せりといふ（新編武藏風土記）。東鑑・建久四年五月の條の平子野平右馬允愛甲三郎とあるは此地の人にして、彼は眞照寺を再興す。本村は一時屏風浦村の大字たりしも今は附近の諸村と共に横濱市に編入せられ磯子區として其名殘る。

イソサキ　磯崎

【磯崎港】　茨城縣常陸國那珂郡平磯町の北端。漁船の出入多く、主なる輸入品は鰯魚肥にして、内務省指定港灣たり。同崎の北方遙に多賀郡水木崎と對し、その間に延々約一六粁の砂濱を擁す。酒列磯前神社あり、近年大洗磯前神社（東茨城郡磯濱町大洗）と共に國幣中社に列す。祭神は少彦名命。この神社名より推するに此附近一帯の古名は酒列なりしか。一説に酒列はサカナキと訓み、逆浪の義かといふ。古くは逆磯にも作る。萬葉・一四「左奈都良の岡に翠蒔きかなしきか駒はたくとも吾はそともはし」の左奈都良の岡は此地を指せしものならんか。

【磯崎】　駿河國庵原郡の歌枕。今の靜岡縣庵原郡の駿河灣に面せる崎なるべし。興津町の薩埵山は古名を磐城山と稱し、磐城は名義岩木なり。擬歌林良材集に引く所の駿河國風土記に「盧原の郡、不來見の濱に、妻を泣きて、かよふ神あり、その神、常に、岩木の山より飛えて來るに、かの山に荒ぶる神の道さまたぐる神ありてさえぎりて通さず、この神あらざる間をうかがひてかよふ。かるが故に、來ること難し。女の神は、男の神を待つとて、岩木の山の此方にいたりて夜々待つに、待ち得る事なければ、男の神の名呼びて叫ぶ。よりてそこを名づけて「この呼坂」とすと云々。「ことは、東の俗のことばに、女を「こと」といふ。田子の浦も手子の浦なり。「東路の手子の呼び坂飛えかれて山にかれむも宿りはなしに」「東路の手子の呼び坂飛えていなばあれは慰むな後は相ぬとも」上の二首は、かの男の神の歌といへり。女の神の歌に曰く「岩木山ただ飛えきませいほさきの不來見の濱に我れ立ち待たむ」この歌も、萬葉集に入れられ侍りり。いほ崎は、いほ原の崎なり。不來見の濱は、男の神の來ぬよりいへると云々」とあり、歌林良材集の説は盧崎とあれど、萬葉集には磯崎とあり盧崎は磯崎の誤とす。名所栞の毒崎の條に、萬葉集の歌を引き、「此歌のいをさきは磯ないほさきと誤れるなり、いをさきは磯の前にて地名にあらず」とあり。

イソザキ　磯崎

→米原町（滋賀縣）

イソサン　伊曾乙岳

北海道北見山脈北部の一峯。天塩國天塩郡と北見國枝幸郡の界に跨る。標高六八一米。眼別川の一支字津内川、西側は天塩川の一支問察別川の水源となる。

イソシ　伊子志

→良元村（兵庫縣）

イソシマ　伊曾島

三重縣伊勢國桑名郡の南部。木曾・長良二川の河口に横はる堆洲よりなる長島の南部を占め、東は木曾川を隔てゝ木曾岬村に、西は長良川を挾みて桑名市に對す。東西兩岸に護岸を築く。水田拓け南部は堆沙を以て徐々に伊勢灣に進出しつゝあり。主産物は米にして、名産に伊曾島海苔あり。交通は多く渡船によりて對岸の桑名と往來し、また北隣長島村の長島驛に出で關西本線の便多かる。村名は伊勢國を流れる木曾川の中にある島といふに因めるものといふ。

イソズ　磯津村

愛媛縣伊豫國西宇和郡の東北部。佐田岬半島頸部の北面に當り、東は喜多郡出海村に隣り、北は伊豫灘（硫黄灘）に面す。石鎚山脈の西端に當る鋼ケ嶋（七六七米）・南乞山（四九〇米）等南境に連なりその北側は急に海に降り屋岸をなし、平地少なく、部落は海岸に沿ひて發達す。米・繭を産す。東北長濱町方面へ（約一二粁）里道海に沿ひて通ずるも交通の便よろしからず。

イソダ　磯田村

滋賀縣近江國犬上郡の西部。彦根市の西南に隣り、犬上川の河口に位し、西は琵琶湖に臨み、西南は愛知郡稲村に接す。土地低平、琵琶湖東岸につゞく曾根沼その他の湖沼を抱き、水田多く、米を産し、漁業行はる。大字八坂は往古は八十の湊とよび廻船往行の津なりし處。西北五粁の湖上に浮ぶ多景島は村の屬島とす。東海道本線河瀬驛（河瀬村）へ縣道通じバスの便あり、又湖上舟運の便あり。（見塔寺）大字八坂にあり。日蓮宗。靈夢山と號す。明暦元年日請上人の草創に係る。寺寶に出山釋迦・鬼子母神・見沙門天像等あり。

イソタケ　五十猛村

島根縣邇摩郡北部の海村。温泉津町の東北約一二粁、安濃郡大田村の西約七粁、村内丘阜起伏し、その低き所に耕地開く、西と北は日本海に面し、大岬突出し、その以東は砂濱なれども以西は屋岸をなし、大浦の小錨地あり。陸上交通としては山陰本線の五十猛驛（大正六年設置）あり。主産物は水産を第一とし米産工産之に次ぐ。もと磯竹と書きしも、明治二十五年五十猛と改む。此地は和名抄の託農郷の内にして五十猛命と由緒深く、いま命を祀る五十猛神社あり。五十猛命は父素戔嗚命に隨ひ韓土より樹種を蒔らし、西は九州より東は紀伊に至るまで播植せられし神なり。また江戸末期の經世家林德則（贈從五位）は此地の人にして、大浦港の修築・土地開拓に盡力しまた登攀を說く。安政の大獄には大森代官所の獄に繫れしも罪狀明ならずして釋され、天壽を完うす。

イソナ　磯名

備前國邪久郡にありし郷（和名抄）。神紀・神護景雲三年六月の條に「美作備前兩國宇都、母等理郡二氏人等、妻ノ頭島ニ姓石野連」とあり。石野に卽ち磯名を指せるものにて其の位置は母等理に隣る。而して母等理は今郷名を傳へて赤磐郡に物理村あり（今瀬戸町と改む）、郷名の遺稱にして其の東には屏背郷あり、されば磯名郷はこれ等の北なる萬富村の邊に定むべく、今萬富村の大字磯崎は郷名磯名の轉訛ならんか。

イソネ　磯根岬

房總半島西岸の一岬角。千葉縣君津郡大貫町に屬し、西方浦賀水道（海峡）に突出し、對岸の三浦半島東岸の觀音崎に對す。岬上は低平にして針葉樹繁茂し、北岸基部に小久保の小錨地あり。

イソノ　磯野

→七郷村（滋賀縣）

イソノカミ　石上

【石上】　下野國那須郡にありし郷。和名抄は訓み闕くも、大和國の石上郷の例により伊曾乃加美と讀むべきか。往古石上部の居りし所なるべく、延喜式の下野國磐上、駿馬十疋とある磐上も石上と同じく赤この地にて當時驛傳の事を掌せるものならん。地は凡そ今の烏木縣那須郡湯津上村なるべし。

【石上】　大和國山邊郡にありし郷。和名抄は伊曾乃加美と訓す。今の奈良縣山邊郡丹波市町大字石上は郷名の遺稱とす。もと山邊村の大字なりしものち山邊村は丹波市町となる。安康天皇の石上穴穂宮、仁賢天皇の石上廣高宮のありし所。また有名なる石上神宮鎮座の地なり。物部氏の出なる石上朝臣（天武天皇の朝石上氏と改む）は此地の地名を負ひしものなるべし。石上溝は慶中天皇の四年十月作られし溝堰にて大和志には山邊郡長柄村にあり、今布留の寺井川と呼ぶとあり。また雄略紀に「十四年夏四月……天皇卽命二根使主一爲二共食者一、並於二石上高抜原一饗吳人」とある高抜原は此地を指せるのもか。また石上池は齊明紀に「於二石山池一作二須彌山一、高如二劇塔一、以饗二蝦夷一」とあり、大將軍の池ともいひしが今その址を止めず。萬葉・一二「吾妹子や吾を忘もすな石上猶布留河の絶えむと念へや」とあり、古今集に「いそのかみふるき都のほとときす聲はかりこそ昔なりけれ」とあり、石上の中に布留（いま丹波市町の大字）といふ地名あるより、和歌にては「ふる」にかゝる枕詞に用ひらる。

【石上】　備前國邪久郡にありし郷。和名抄は伊曾乃加美と訓す。今の岡山縣邪久郡國府村の邊に當り其の大字磯上は郷名の遺稱とす。

イソハマ　磯濱町

茨城縣常陸國東茨城郡の東南端。水戸市の東南約一二粁の距て、西南と西は涸沼川下流とその分流とにより大貫町下大野村と界し、北は那珂川口を隔てて湊町に對し。東より東南は鹿島灘に面す。一體に丘陵性臺地なるも最高處も二九米に過ぎず、西部の川邊と沿海は幅狹き低地なるも市街は南岸に沿ひ東西に長く發達し、その東端は卽ち

大洗岬なる。水戸市より水濱電車通じ、磯濱・大洗・大貫・曲松・東光寺・海門橋の諸停留所あり。此地は文祿の頃より漁港として賑ひし漁村にて、いま漁港磯濱港は内務省指定港灣の一。町の生業は漁業、商農工。これに次ぐ。磯節の本場にて、近時常陽明治記念館の所在地としまた大洗海水浴場なる以て著はる。海岸は所謂大洗の勝地にて前は滄茫たる鹿島灘に面し、大洗岬の岬南は約三〇〇米も海中に斗出し、風光明媚、磯濱八景などの名勝あり、背後の丘陵には青松繁茂せる國幣中社大洗磯神社の境内を控へ、社頭より見る日出の大觀は世に知らる。磯節唄歌「磯で名所は大洗さまよ、松が見えます、ほのぼのと、松が水、見えます、イソ、ほのぼのと」〔常陽明治記念館〕大洗の東光寺の松林中にあり。明治天皇御等身尊像の奉安所にて、昭和四年四月の開館。國民信仰の標的たる明治大帝の英靈を奉祀せる明治神宮あるも大帝の御尊親を日夕拜する御尊像の未だ珍設せられざるを遺憾とし、前宮内大臣として多年大帝の側近に奉仕せる田中光顯伯が主唱して常陽明治記念會を起し、明治天皇の御威德を欽仰し國體の精華を發揚せんが爲、前記の場所に彫像殿を建て御等身の御尊像を安置しまた彫像殿の側に明治記念館を設け、御物室には田中伯が、明治天皇を始め奉り大正・今上兩天皇・英照・昭憲兩皇太后より拜受せし諸種の實物類を奉安し、更に別室には幕末維新の志士の遺墨を陳列す。彫像殿奉安の御尊像は田中伯の發願にかかり、昭憲皇太后の御内寸を何ひ、百方苦辛を經て彫刻家渡邊長男原型を作り、米田・藤波・東園・日野西・大炊御門等の近侍の方々の意見を叩き、並に柳原・高倉兩典侍と謀り、數十回の添削を加へ、更に昭憲皇太后の御内見を經て原型を確定し、彫金家岡崎雪聲は特に足尾・日立・別子三銅山の精銅を以て鑄造せるものなり。工畢りて皇室へ奉獻、宮内省はこれを嘉納されて紅葉山の寶庫に奉安す。茲に於いて田中伯は更に同一の尊像を一體拜造、一般衆庶の拜觀の爲にこれを常陽明治記念館に奉安せり。御尊像を此地に奉安せる理由は、明治大帝が水戸藩主德川光圀の身德川の親族たるにも係はらず尊王の大義を鳴道して君臣の分を正しまた大日本史を編纂して國體を闡明せる功を恩召され、贈正一位の破格の待遇を賜はり、また明治八年四月には舊水戸侯の東京の小梅の邸に行幸あらせられ「花清し櫻はあれとこの宿の代々の心をわれは汲みけり」の御製を賜はりしことを思ひ、且つ北島觀房の兵馬の間に神皇正統紀を撰して皇統の正閏を論ずるも此國であり、大日本史編纂の大事業も水戸に於いて完成され、明治維新回天の事業も亦水戸藩に負ふ處多く、常陸國は種々の點に於いて皇室に於ける因緣の深きを思ひ、かくは明治記念館を水戸市外の形勝地たる磯濱に設くるに至りしもの。〔大洗磯前神社〕大洗に鎮座。國幣中社。大己貴命を主神とし少彦名命を配祀す。延喜式に大洗磯前薬師菩薩神社とあり、二神共に醫藥に功德ありといふ。また洗磯前神社・洗磯神社・磯前神社にも作る。文德實錄・齊衡三年十二月「常陸國上言、鹿島郡大洗磯前有二神新神降云々」とあり大己貴神・少彦名神の兩神、濟世利民の故を以て此地に降臨せし記事あり。因りて海濱大洗の地に天安元年大己貴神ゝ本社に祀り、小彦名神を酒列磯前神社（那珂郡平磯町）に祀る事となり、二社共に官社に列せり。共に延喜の創名神大社に列し古來祭祀甚だ豐なりしに永祿中、小田氏治の兵燹にかゝり祠宇灰燼となる。元祿中藩主德川光圀、新たに地を相し社を建て藩官を行ひ少彦名命を配祀す。享保十五年現地に移る。例祭九月九日。〔願入寺〕眞宗大谷派。岩船山と號す。初め親鸞聖人の孫如信、東國を巡錫し、奥州白川郡大網（いまの福島縣東白川郡、大網は大綱か、いまその地詳ならず）に草庵を營みて願入寺といふ。文安三年八世如慶の時、兵火に罹り堂宇失上せるにより常陸國大根田（この地いま詳ならず）に移遷す、十二世如正の代に久慈郡久米（いま久米村）に移る。更に十五世如高、延寶元年に德川光圀の許可を得て現在の地に移し、東本願寺末如の子、慧明院如晴を請じて本寺法統を繼承せしむ。水戸藩より寺領三百石及び年々黄金二百兩の寄進あり、住持は代々蓮枝に準ぜらる。寺後の山上に水戸八景の一、岩船夕照の碑あり。寺寶甚だ多く殊に十字名號三幅・聖德太子像・唯信鈔義一卷・一心歸西鈔二卷・知信木像・二十四輩牒等なり。尚もとは拾遺古德傳繪卷を藏せしも故ありて瓜連常福寺（那珂郡瓜連村大字瓜連）の有となる。〔西福寺〕天台宗。俊明山と號す。無量壽院と號し、上州世良田長樂寺末。創建年代不詳。光海上人を中興開山とす。初め茨城郡島田村にありしを延寶五年現地に轉ず。本尊は地藏菩薩（行基作）。寺寶に智證大師筆千貫不動尊・惠心僧都筆百貫彌陀佛等を藏す。

イソハラ　磯原町　茨城縣常陸國多賀郡の北部大津町の西南約六粁、南は南中郷村に接し。東方は太平洋海岸に近し。地勢西半は丘陵をなし、十里上峠を以て西界とす。東半は概れ平地にて田圃拓く。省線常磐線の磯原驛（明治三十九年設置）を置く。米麥の豐富なる實りと製絲・製板・製材等の工場を擁し、また我國重要石炭山の一なる軍内炭礦々區の一部をなし、將來の發展を期待せらる。大正十四年舊名北中郷村を廢して現在の町名に改む。重内炭礦は隣村の華川村と南中郷村との三所に跨り、同町の西都字大塚はその地域なり。省線磯原驛の西方四粁。第三紀層の砂岩・頁岩・礫岩などの間に存する炭層は厚さ一米、南北に走り一五度内外の傾斜にて東方に沈下す。長壁法により採掘す。炭質は薄煙性の優良炭にて茨城無煙炭と稱せられ、粉炭・塊炭・粗炭を產す。この大塚の地は應永年間、大塚氏の領有の地、松岡城址（岩袋城址）は其名殘なり。大塚氏は小野崎氏の族、佐竹氏の支流。のち岩城氏に歸服し、慶長年間岩城氏除封の時、その附庸たりし故を以て共に廢亡す。岩城氏は佐竹氏と同じく清和源氏の流れにて奥州磐城郡（福島縣）に多くの氏族を有し、何れの岩城氏の此地に移りたるか詳ならず。また安南國源流物語によれば常陸國多賀郡磯原の船頭左源太・永主次七・庄兵衛・吉四郎・善左衛門・十三郎の六名、水戸領磯原彌八郎の持船鎮宮丸に乘組み、明和二年十一月五日下總國銚子浦を出帆し、途中難風に遭ひ安南國へ漂流し、明和四年七月十六日長崎に送りとどけられしといふ。〔天妃山〕字磯原の海岸近き島上にあり。大北川の河口に位置す。驛より東北一粁餘。一名櫻現山とも稱天島とも稱し、遠望すれば岩角に似たり。高さ約一八米、周圍三六米の岩山より成る島にて、千古の老松鬱々と繁茂し松籟天に響く。古へ折澤山といふは是れなりと。頂より鹿島灘を望む。北方一粁半に豆巖の波濤に洗はるるを見る、二つ島と稱し共に近隣の景勝地として知られる。頂に天妃神を祀る。元祿年間、明僧心越禪師の持ち來れる天妃像を安置し、廟宇は水戸光圀公の創建にして漁民の信仰甚だ厚し。天妃山の名これに因る。東茨城郡磯濱町にも之と同一のものを祀り、天妃神社と稱す。祭神は海神なれば波海船を守護すの義なるか。天木・二六「常陸なるたなへの磯にけふよりや風の吹かぬに浪のたつらむ」六帖「いつことてふみまとはせる玉章なここはたなへの磯ならなくに」とありて、歌枕・名寄などに田邊磯に作りて本郡の名所とす。折澤・田邊の訓相近し、故にたなべの磯とは卽ち折澤山（天妃山の古名）の邊りなる磯を詠めるものなるべし一說に、この田邊磯は鹿島郡田邊村（いま豐郷村字）とするも、恐くは誤りならん。

イソブンナイ　磯分内　省線釧網線の一驛（昭和四年設置）。北海道釧路國川上郡標茶村にあり。

イソベ　石部山　越前國坂井郡にありしといふ山。歌枕。今の福井縣坂井郡に磯部村あり、和名抄の坂井郡磯部郷の地なるも、この附近は西南に平地開き山地東部にあるを以て本郡の東部にありしものなるべし。萬葉・七「白まゆみいそへの山のときはなるいのちかあやな駈つゝなあらむ」夫木・一九「白まゆみいそへの山の秋かせにたなひく雨やこの葉なるらむ　伊嗣」

イソベ　石邊山　近江國甲賀郡にありといふ山。歌枕。一本に越前なりといひ又遠江なりともいふ。今の滋賀縣甲賀郡石部町の南嶺なる磯部山といへばこれを指せるもの歟。往時石部は磯部にも作れりといふ。萬葉・一一「白檀弓石邊の山の常磐なる命なれやも慰ひつつあらむ」の歌を萬葉代匠記に『此の石邊は近江國石部なるべし』古今集に「梓弓いそべの松」とつゞけたる歌には人麿と注ぜり、人麿は近江守の屬官にて下られしこと云々』とあり。神祇史料にも延喜式の甲賀郡石部（磯部）上神社は今石部驛にありて上下兩社とし上は吉姫明神、下を吉產明神といふとあれば石邊山は此地なるべし。

イソベ　勝戸　越前國今立郡にありし郷（和名抄）。諸本訓を缺くも高山寺本は伊曾倍と訓す。其地いま福井縣今立郡北中山村・片上村の邊の地といはれ、北中山村の大字磯部はその遺稱ならんといふ。郷名の戸は部の轉略音と誤まりしものなるべきも、勝を以曾と訓するはその義詳ならず。延喜式の神名帳を見れば今立郡に石部神社あり、或は勝部郷はもとカツベと訓ずるなこの社名により何時とはなしに郷名を石部と稱ずるものか、或は石部はまた磯部に作り磯を勝に譌りしものか、なほ後考に俟たん。

イソベ　磯部　【磯部村】福島縣磐城國相馬郡の東端。中村町の東南約六粁、東は太平洋に直面し沿岸の南半は海崖をなすも、北半は平砂を連ねる長洲をなし、その尖端は鵜ノ尾岬に對し西に飯豐村との間に潟湖松川浦を抱く。村の北部に山信田浦、南部に八澤浦の潟湖あり。地概れ平坦原野・林地廣く、東部・西北部に耕地拓く。農業の外漁業に從ふもの多し。中村町へバスの便あり。松川浦十二景の歌の一に「真萩さくなかすの磯の夕なきになれもあかすやあさる鹿かれ」とあり。天文年間、佐藤伊勢好信この地を領す。永祿年中、中村城主草野式部直隆謀逆を企て、伊達氏の援軍を得て好信を攻むるも好信の勢强く、直清大いに敗走すといふ。本村小磯邊の地に佐藤氏の館址あり。明治三十九年同村の一部を割きて西隣日立木村を建つ。

【磯部】→東那珂村（茨城縣）

【磯部町】群馬縣上野國碓氷郡の東部。高崎市の西方約一二粁、北は安中町・原市町に隣接す。碓氷川に沿ひて東西に狹長なり、全村殆んど土地低平にして農耕行はれ米・麥を產し古來著名なる磯部煎餅・磯部おこしの特產あり。信越本線東方高崎市方面より來り本町に磯部驛（明治十八年設置）を置き碓氷峠に向ふ。當地は溫泉町として近年急激に發展し昭和十一年終に町制を布けり。隣接の西横野町・東横野村等と共に和名抄の碓氷郡磯部郷の地に當る。續紀・天平勝寶元年五月「上野國碓氷郡人外從七位上石上部君諸弟」續紀・天平勝寶五年七月「左京人正八位上石上部君男島等四十七人言、己親父登與、以二去天寶元年一賜二上毛野坂本君姓一而子孫等、猶帯舊稱注二石上部君一於二理不安、强請、隨二父姓一欲二改正之一、許焉」

等に見える石上部は後の磯部にして、磯部は卽ち石上部を修せるものといふ。東鑑・建仁元年五月十四日「佐佐木三郎兵衛尉盛綱入道使者參著……到ヲ著于西念(盛綱)之住所上野國磯部郷と」と見え卽ち佐々木盛綱磯部に居りしに越後の城資盛兵を起せしにより、盛綱進擊しその事を鎭せり。是に依りて見るに盛綱は此處に住せしもの、如く、其子孫磯部氏を稱するといふ。今建仁年間盛綱の城きしといふ城址あり、土人城山と稱す。近世に至り此地は仙石因幡守久俊の領地となりしも土地高燥にして水利に乏しきを憂へ、寛文中非常なる努力と苦心とを以て遂に碓氷川から引きて人見堰の基を開く。嘉永五年領民その德を長く子孫に傳へんとして仙石公遺蹟碑を建設し、碑に勒するに稻葉大樵現の撰號を以てす。曹洞宗の禪林磯明山松岸寺に盛綱の墓と稱するものあり。また同寺内に九郎兵衛樣と稱せらるゝ墓あり。九郎兵衛は卽ち淺野長矩の老臣大野九郎兵衛にて、赤穗改易後この地に來りて林業譜と號し手習師匠たり。而して若し義士の壯擧の失敗に終りし際には仇敵吉良上野介の領地の附近にありしため此地に潛みて報復の機會を待たんとせしものといはれ、土人は九郎兵衛を惡く傳へず、寧ろ尊敬を捧へりと傳ふ。

【磯部鑛泉】 發見の年代は不明なるも、往昔は湧出量僅少なりしもの、如く、天明三年の浅間山大爆發の際大湧出を呈し、暫來胃腸病の名湯として知られ、上毛に於ける鑛泉の雄となり伊香保・草津に匹敵するに至る。泉質は鹹味ある炭酸泉。溫度低きゆゑ加熱浴用す。鑛泉地附近は桂・楓・躑躅等の花樹に富み、碓氷川の清流と相映して平和なる風景を形づくる。西南には妙義の白雲・金洞・金鶏の三奇峯嶙々として相連なる。殊に九月初旬より十月下旬に掛けて妙義山の靈氣樓を見るべく、最も奇觀を極めたる時には妙義山の手前一里許の空中と、妙義と沸間の中間に同じ姿の三つの妙義が屋と相重りて現はるゝといふ。

【磯部】 下總國香取郡にありし郷(和名抄)。高山寺本は磯に作り、温古堂本・郭波本は磯々に作り、慶安本は磯田に作る。部の字は俗に省きて阝に作り、夏に略してアに作る。字を重ねる時に使用するの字(例へば磯々の如き)も之に倣る。故に磯アは卽ち磯部郷か磯々に誤りしものならん。飛騨の濃部郷か澄々に作り、陸奥の伴部郷か伴々に作るが如きその例は多々あり故に今磯部に從ふ。美濃・三河・信濃・上野・越前・但馬に磯部郷あり、多くは磯部臣の居りし所、されば此郷も磯部臣の族居りしか。郷域は凡そ今の千葉縣香取郡神河町及び小御門村と印旛郡の久住村の地に當る。久住村の磯部は其遺稱とす。

【磯部】 ↓新磯村(神奈川縣)

【磯部村】 新潟縣越後國西頸城郡の東北部。名立・能生の二町の間にあり北は日本海に面す。東は大峯(四六五米)により名立村に接す。大字筒石の海岸に千束の小島あり。島中の井より眞水湧出すといふ。村内山地多く林野をなすも所々に耕地拓け米・繭の産あり。人家は山海の間に密集し平地狹くして海波は家の際に迫り、斷岸は屋梁を壓するの感あり。村民古來より漁業に從事し領主より幕府に獻上せし眞鱈は此濱の漁獲物なりしといふ。舊北陸道(今は國道)と北陸本線は海岸に沿ひて走り、筒石驛(大正元年設置)を置く。近年海磯にある一祠を式内水島磯部神社なりと稱せらるゝに至りしより、村名を磯部と改むるに至りしといふ。(明治天皇能崎御小休所址)指定史蹟。大字鈴崎字梨平にあり。明治十一年北陸東海御巡幸の際九月二十六日御小休所となりたる處、建物は大正八年七月取除かれ御座所址は空地のまゝ保存せらる。(水島磯部神社)村社。延喜式神名帳、頸城郡十三座の一に擬せらる。祭神、一説に櫛御方命なりといひ、社傳によれば鞏屋別尊なりといふ。蓋し越後野志は新井攝氏錄を引き「磯部臣典薬寮官部首-同祖、伸宮天皇皇子鞏屋別命之後也、日本書紀編」と記す。

【磯部村】 福井縣鯖前國坂井郡の南部。福井市の北方約八粁。南は吉田郡森田町・東南田島村に境す。鯖前平野の中部に位し、九頭龍川東南境を西流し、全村土地低平にして田地よく拓け米を多産し、また絹織物業盛んなり。北陸道は南方福井市より來りて北方丸岡町方面に走る。大字寄安にある住吉神社は明治七年順德天皇の御神靈佐渡より御遷座の際、御駐輦遊ばされし地にして、今なほ碑を建てゝ永く記念とす。此地は和名抄の坂井郡磯部郷の地か。然るに布久漏神社存するより見れば、其一部或は和名抄の坂井郡福留郷の地なりしか。(布久漏神社)村社。祭神應神天皇・神功皇后。往古繼體天皇鯖前に御滯龍あらせられし際、其皇女の圓媛命當地に在し此郷の氏神として一社を御創建あらせらる。是卽ち本社なりといふ。例祭九月十四日。例祭當日表見の米なる特殊神事あり。豐年滿作を神に感謝する儀行はるゝものにして、若者は玄米を持寄り白米に春き、之を蒸して雜煮大の握飯を造り社前に撒く、(黃檜堂)大字寄安にあり。親鸞上人越後に下向の途、洪水のため當地の長者武右衛門方に三日間逗留せし時、長者は菓子に柘榴の楊子を添へて捧げし所、他力島行の法門を說き、佛智不思議の誓なるを、楊子を取り之を庭に挿して出發せるに一夜にして發芽せり。聖朝之を見たる長者は直ちに上人の後を追ひ細呂木の鷲坂にて追ひ著き、以上の次第を述べ遂にその法力の偉大なることを悟り歸依すといふ。其際上人は十字の名號と「官にきくのこきり坂なひきわかれ身の行末はこころ細呂木」の一首の和歌を詠じ與へしといふ。柘榴の木は

今も殘存し、黃檗堂は開山上人の靈地として參詣者多し。

【磯部】 信濃國埴科郡にありし郷。和名抄は伊曾倍と訓す。長野縣埴科郡戸倉村大字磯部は其遺稱なりといふ。蓋し鞏屋別命の裔磯部臣の居せし地ならん。

【磯部山】 伊豆國那賀郡にありといふ山。歌枕。今の靜岡縣賀茂郡岩科村の大字に石部あれば、或は此附近か。磯部は又石部にも作る。夫木・二〇「見渡せばいそへの山の常磐なるいのちもかもや戀つつながむ 安嘉門院四條」

【磯部】 愛知縣渥美郡にありし村。明治三十九年本村は福岡・高師・野依・植田・大崎の五村と共に廢せられ、其區域を以て高師村を設置して村名を失ふ。而して高師村は昭和七年豐橋市に編入さる。

【磯部】 參河國渥美郡にありし郷。和名抄は以曾部と訓す。美濃・信濃・上野・越前・但馬に磯部郷あり。姓氏錄に磯部臣は伸宮天皇の皇子鞏屋別命の後なりとあり、蓋し其族の居りし地なるべし。今の愛知縣渥美郡老津村・高豐村・二川町の地及び豐橋市に昭和七年編入せられしもとの高師村等の地に當れる如く、中世の和地莊の地なるべし。

【磯部】 尾張國にありといふ里。今その地何處なるや詳ならず。歌枕。新葉「山ちよりいそへのさとにけふは來てうらめつらしきたびころもかな」

【磯部村】 三重縣志摩國志摩郡の中部。部庄と稱し、また磯部里にも作る。

イソホ 石太 美濃國大野郡にありし郷(和名抄)。其地いま詳ならざるも岐阜縣揖斐郡川合村の大字上磯・下磯・本庄等の邊か。東鑑・文治二年三月、利部鄕典侍領事、二品被ゝ遣ゝ御下文……美濃國大野郡內石太郷住人、可ゝ早停ゝ止美濃國大安平濃妨、爲利部鄕典侍御沙汰ゝ事。右件所、致ゝ安平無道、命ゝ押領ゝ之由、有ゝ其聞、事實者、尤以不當也」

イソマ 磯間浦 備中國の歌枕。今の岡山縣小田郡の笠岡港の南方海陸する神島の浦なるべし。萬葉・一五「月よみの光を清み神島のいそみの浦ゆ船出すわれは」

イソミツ 磯光 福岡縣鞍手郡宮田町の大字。倉線相野線は磯光驛(明治四十五年設置)を置く。

イソヤ 磯谷

【磯谷郡】 北海道後志國十七郡の一。後志支廳の管下にして磯谷・南尻別の二村を含む。後志國の中部に位し、西は日本海に臨み、北は岩內郡、南は瀋都・歌棄二郡、東は膽振國虻田郡に隣接す。北部と東南部は後志火山群の地にして北境に雷電山(一二二二米)・目國內山(一二〇三米)・チセヌプリ(一一三五米)・硫黃山(岩雄登)(一一五四米)・南境に幌內山(八四二米)・天狗山(八〇二米)等の諸火山あり多數の溫泉湧出す。尻別川は郡の中部を東より西北に流れ、見布川その他の諸支流を合せて海に入る。その流域には平野拓けて耕地多く米麥・豆類・馬鈴薯・甘藍その他の蔬菜類など農產物少なからず、沿海よりは鯡を主とし鮭・鱈等の漁獲物あり、また南尻別村の硫黃山よりは硫黃を採取す。道路は南方の熟岩村より郡の東部蘭越に出で尻別川に沿ひて上り東は倶知安町方面、西は尻別川口方面に通ずるもの及び西南方歌棄村より海岸に近く磯谷村の島古丹を經て尻別川に沿ひて下るものに合し更に北方の岩內町方面に通ずるものあり。倉線函館本線は東部の蘭越を經由し、ほゞ街道に並行して倶知安方面に通ず。本郡の地は、元磯郷幌のシリヘチ・イソヤの二寓部に當り、後磯屋領を定められ、明治の初め一郡を建てしもの。郡名磯谷はアイヌ語のイシュヤを寫音せるものにて其義は岩礁の處とす。

【磯谷村】 北海道後志國磯谷郡の西部。東隣の南尻別村と共に一郡をなし、後志支廳の管下西は日本海に臨み、北は岩內郡に南は歌棄郡に接す。村內嶄れ山地にして南と北は高く、北東境に雷電山(一二一二米)聳立す。西北部尻別川流域に小平地を開く。南境は天狗山より發して北西に流るゝ幌別川によりて界せらる。道路は南方の歌棄村より來り海岸に沿ひて村の首邑島古丹を經由し、尻別川を渡り、北境の雷電峠を越えて岩內町方面に通ず。農・漁を主業となし、平地には米麥・豆類・馬鈴薯・蔬菜類を作り、沿海よりは

鯉を主とし鮭・鱒等の漁獲物多し。島古丹は古の磯屋場所の運上屋にして、地名磯谷はアイヌ語のイショヤ(岩礁の處の義)の寫音せるもの。尻別川河口左岸なる能登(能登)はもと一村をなせし地にして海神を祀るといふ古社(天保二年)あり。地名はアイヌ語ノット(岬の義)より出づ。河口に尻別崎あるに因るなるべし。また川の北岸は北尻別村といひし地にして、海岸は砂濱をなす。此海岸一帯は古くより鰊漁場として賑ひし處、古へ漁季には一時的の花街など現出し、歌・俚謡等に詠まれたるもの多し。松前道分「認路高島およびもないがぜめて歌棄磯谷まで」

【磯谷崎】 北海道後志國奥尻郡、奥尻島の北西角。一に磯屋崎に作る。此岬附近の海岸、殊に東方の稻穂岬に至る約一〇粁の間海中に岩礁遝なりて船舶を寄せ難し、特に北々西に向ひては長く礁脈斗出し、その末端は高さ約三米の岩島をなす。

【磯谷】 ↓臼尻(北海道流島國)

イソラ 磯等崎 三重縣志摩郡答志島の西部、桃取村の海岸。又いさらが崎ともいふ。六百番歌合「みさご居るいそらか崎にあさりせるあまのみるめは猶もとめたり 中宮權大夫」

イタ 爲多 肥後國玉名郡の郷(和名抄)。姓氏錄に井代臣、大和池上郡井手村に居りしより姓井手臣を賜ふとあり。多と氏は聲相通ず、或は其裔の居りし地か。今平井村に大字上井手・本井手・下井手あり。是を只て見るに熊本縣玉名郡平井村・荒尾町・有明村等の地に當るか。

イタ 井田

【井田】 常陸國新治郡の郷(和名抄)。今の茨城縣西茨城郡の七會村・北山内村・大池田村等の諸村に亘る。いま大池田村の大字に飯田あり、井田の訛と推定さる。この郷の當時の形勢は、瓦神郷(今の笠間町・南山内村・西山内村)の東北に隣り、茨城郷(今の大原村)・公郡郷(今の東茨城郡山根村)・鹿島郷(今の鹿島郡鹿島町・豊津村)等とその界を分つ。

【井田川】 富山縣婦賀郡を流るゝ川。上流を大長谷川といひ、岐阜縣吉城郡の西部なる檜峠(海拔一二二六米)の北麓に發して北に下り、婦賀郡大長谷村を縫貫し、富牧村に入りて富牧川となり、その東北隅八尾町にて、南方より來る野積川・久婦須川等を容れて井田川と呼ばれ、富山平野の中部を北流し、富山市南の神明村に至り神通川に合す。長さ約四六粁、灌漑に利用せらる。川名の井田は即ち婦賀郡松原村の大字井田に據れるものなり。

【井田】 ↓戸田村(靜岡縣)

【井田】 伊豆國那賀郡の郷(和名抄)。今の靜岡縣田方郡戸田村・土肥村・西豆村の地に當るか。戸田村の大字井田は其遺稱なりといふ。逢阪山の西麓に當り、駿河灣に臨める地にして、中世井田莊と稱せし地。戸田村の大字井田は眞城山(鎌崎山ともいふ)の下にして、洲口とも稱せしといひ、往時は攝籙家の傳領地たりしといふ。延喜式、神名帳の那賀郡二十二座の一なる井田神社は戸田村大字井田にありて井田明神とも稱す。

【井田】 三河國額田郡にありし古地名。中世、井田郷と稱す、今は愛知縣岡崎市に編入され井田町と呼ぶ。所謂井田合戰のありし地。井田合戰は明應二年十月に、西參河の上野城主阿部滿五郎・寺邊城主鈴木日向守・蜷母城主中條田羽守・伊保城主三宅加賀守・八草城主那須宗左衛門等の軍勢合せて三千餘騎、松平親忠の領内に攻め入り、井田郷にて合戰せしも敗走す。是より後は西參河の國人の大半は親忠の手に屬せり。此戰に討死せし敵味方非常に多く親忠は是を憐み、淨土寺を建立して髑骨を埋め千人塚と名づけしといふ。

【井田村】 三重縣紀伊國南牟婁郡の南部の海岸。東は熊野灘に面し砂濱南北に一直線をなし、熊野街道これに沿ひて通ず。南は和歌山縣新宮市との間に鵜殿村を挾む。熊野沿岸山張の南端部に當り、西隣相野谷村との境上に大烏帽子山(三六二米)峙ち、平地はその東南麓の谷地にありて水田拓く。主產物は水產物を主とし米・薪これに次ぐ。新宮市に近く交通比較的便なり。明治二十二年鵜殿村と合して宇和野村と稱せしも、同二十七年四月分離獨立せり。大字井田は吉野熊野國立公園の一部にて風光よろし。

【井田村】 島根縣石見國邇摩郡の南西部。東は大家村、西は波積村に隣り、南は邑智郡三原村・谷住郷村に界す。村内丘陵地多く、林野をなすも、西部・東南部は低地ありて水田・畑地拓く。舊山陰道ほゞ東面に横ぎる。主產物は米を主とし薪・醬油の產あり。古くは和名抄の邇摩郡大家郷の内。

【井田村】 大分縣豐後國大野郡の北部。犬飼町の西南に接す。大野川の支流醫川は南東部を、桑北川は東北境を流れ、その川岸に沿ひ小低地ある外は村内殆んど丘陵地をなす。縣道醫川に沿ひて犬飼町より西方竹田町方面に通ず。製絲工場あり。和名抄の大野郡田口郷の内か、風土記解に依れば田口は後世井田と改むといふ。〔平屋社〕大字新殿に鎮座。郷社。祭神、田心姫命・湍津姫命・市杵島姫命・天御中主命。創立年代未詳なるも、吉野朝時代の古社にして、層應三年の古塔・觀應二年建立の八角柱鳥居を有す。江戸時代には岡藩主の崇敬篤し。また近郷庶民の尊信篤し。

イタ 伊田

【伊田】 ↓大長村(靜岡縣)

【伊田崎】 井崎(高知縣幡多郡)の別稱。

【伊田町】 福岡縣豐前國田川郡の中部。東は香春町・勾金村・大任村に隣り、西は後藤寺町に接す。彦山川東南より西北に貫流し、支流東隣香春町より來りて村の中部に於てこれに合す。河流に沿ひて

轉地拓け水田あり、四邊は多くは丘陵をなす。省線田川線は町の中部を東西に通じ、伊田(明治二十八年設置)・夏吉(明治三十二年設置)二驛を置き、伊田線は伊田驛に起り彦山川に沿ひて豊驛(明治三十三年設置)を設け、社線小倉鐵道東南部を掠めて上伊田驛を置く。縣立田川高等實業女學校あり。此地は近世まで一山村なりしも炭坑の開發と共に一躍繁盛なる市邑となり、大正三年町制を布き、昭和八年隣村金川村を合併してより人口三萬を突破するに至れり。地は筑豐炭田の中心地に位し、三井田川炭礦・方城炭礦・豐國炭礦・横島炭礦等の一部を成せり。文久の末西國に兵を募り義擧に應ぜんとして捕はれし志士原田七郎(贈正五位)は此地の人なり。〔天台寺址〕里俗の傳ふる所に依れば、大字伊田の地内、伊田原の東門寺といふところに天台寺の蹟あり、今門の礎石を存す。往時は三百坊有りしといふ。一に今存する礎石は門に非ずして本堂及び大塔の蹟にして、其の二基は南北に相並び、礎石の邊に古瓦殘れりといふ。往昔、傳教大師歸朝の際、十八箇の伽藍を建立して天台別院と號せり。是卽ち本寺にして、台宗關學の道場中、護持國土の名藍たり。然るに僧徒やゝもすれば佛衣を脫し、甲冑を帶して妨亂を企て、野伏な語ひ惡行を成せり。茲に於いて大内盛見・鷲頭兵部大輔・桂左衛門督を遣はして、惡僧六人の首み寺僧にて刎れたりといふ(豐前志)。〔熊西原〕大字伊田に屬し、一に中津原または八郎原といふ。飯西八郎爲朝、此所に館を造り暫く寓居せしにより此名ありといふ。今猶ほ爲朝屋敷といへる址あり。應永戰亂記に爲朝十三歳にして豐後に下り、臼杵に居す。仁平元年居を豐前國勾金南大原の地に移し、後久壽二年京師に上るといふ。〔小督局墓〕大字伊田の曹洞宗成道寺内にあり。墓は石を積め上に二尺四方の石を置き、其上に一尺八寸四方許の石を據え、其四方に佛像を彫り、其上は七輪の塔なり。源平盛衰記・小督局事「櫻町中納言重範卿の女に小督殿とて世に類なき美人、琴の上手にておはしけるが」とあり、而して後大原の別所にて終れる由明かなるも、一に小督局は髮をおろして後、太宰府に來りしともいふ。其墓傳は詳ならず。〔岩屋洞窟〕町の北部字岩屋磯石山の麓にあり。石灰岩より成りて天井高く奥行一・二粁あり。岩態は千變萬化し、洞内に山川あり。無數の蝙蝠棲息す。附近に奥行約三〇米の小鍾乳洞あり。〔風治八幡神社〕大字伊田に鎮座。郷社。祭神、仲哀天皇・神功皇后・應神天皇・豐玉姫命・玉依姫命。創立年代詳ならざるも地方の古社にしてもと伊田大神と稱し海津神を奉齋せしも、後八幡神を勸請せりといふ。元祿元年現社名に改稱す。古來十四箇村の產土神として上下の尊信篤し。例祭五月十七日。〔成道寺〕曹洞宗、白鳥山と號す。傳教大師の開基にして天台別院十八箇寺の一たり。

【伊田線】 省線筑豐線の一部。筑豐本線の直方驛より分岐し中泉・金田南驛を經て福岡縣田川郡伊田町の伊田驛に至る一六・二粁。終點伊田驛は省線田川線に連絡す。また省線の中泉驛にて貨物支線に、又金田驛よりは產業セメント鐵道ありて田川線の宮床驛に連絡し、別に貨物支線に接續す。省線は筑豐炭田の一部をなし石炭の出貨多し。

イタ 猪田村 三重縣伊賀國名賀郡の北部。上野(伊賀)盆地の南部に位し、北は阿山郡上野町との間に城南村を隔つ。伊賀川の支流長田川東北境を西北流し、西南部を除けば村内土地低平にて水田多し。名張街道村の中部を南北に走る。主產物米・薪。この地和名抄の伊賀郡猪田郷に當る。〔猪田神社〕大字猪田に鎮座。村社。祭神、少名毘古那神・健御名方命外數神。例祭十月二十二日。〔勝因寺〕大字山出にあり。新義眞言宗豐山派。草創は不明なるも本堂は文明十二年中興宥實の造營なればそれ以前の草創ならん。本尊木造虚空藏菩薩坐像一軀は國寶にして弘仁末期の作と傳ふ。

イタイ 板井 筑後國御原郡の郷(和名抄)。諸本は坂井に作るも、今高山寺本に依りて之を訂す。東鑑の元暦二年の條に板井莊の名見え、筑後志に問註所觀願、小板井城に居せること見ゆ。今の福岡縣三井郡小郡村・御原村等の邊ならん。小群村の大字大板井・小板井は蓋し其遺稱なり。

イタイ 伊臺村 愛媛縣伊豫國温泉郡の中部。松山市の東北なる道後湯之町に接し、東は湯ノ山村、北は五明村に隣る。高縄山西南麓の南部を占め、北境に夫婦山(三八九米)、東部に勝岡山(四五二米)ありて村内丘陵地多きも中央部の谷にやや平坦の地ありて耕地をなす。主產物は米・麥・蔬菜・煙草にして、其他特產物に蜜柑等の果實類あり。松山市に近く交通不便ならず。此地和名抄の温泉郡沂上郷の内か。天正年間河野氏の臣伊代伊左衛門の領地なりしより伊代村と稱し上・下二村に分れ居りしも、のち村の中央に薬ノ成といふ所ありしより現村名に改むといふ。〔西法寺〕大字下伊臺櫻組にあり。天台宗山門派。大樂山東光院と號し藥師如來二體を本尊とす。延暦十一年桓武天皇の御宇、一條院宮の御建立に係り、後河野對馬守鬼門鎮護の靈場となせり。寺内に薄墨櫻あり。傳ふる所に據れば天武帝の御宇伊豫熟田津石湯行宮に太后御臨有りし時、偶〻當加藍の藥師如來に祈願せしに靈驗あり。卽ち感恩の餘り勅使を當山に遣はされ御製の國風一首に名櫻一本及び綸旨を添へて下し賜ふ。此花顏る美麗にして他に比類なきを以て世人賞翫して薄墨櫻と稱す。

イタイツ 到津川 ↓板櫃川

イダイラ　伊平村　静岡縣遠江國引佐郡の中部。南は井伊ノ谷村・奥山村に隣り、北は鶯玉村に接し、西北の小部は愛知縣八名郡山吉田村に界し、赤石山脈の餘脈に屬する淺間山(五二一米)峙ち、村内山地多し。都田川の支流井伊谷川の上源地にて、濱松市より三方ヶ原を横ぎり八名郡大野町に至る道路南北に通ず。米・麻・茶の農産の外に工産・林産あり。和名抄引佐郡渭伊郷の内にして、古來井伊氏の勢力範圍に屬せり。元亀三年十月甲州勢の東三河に攻め入りし際、此地にて菅沼治郎右衛門・近藤石見守等防戰し井伊飛驒守は戰死せりといふ。〔長興寺〕大字伊平にあり。臨濟宗方廣寺派。百香山と號す。元中四年(嘉慶元年)悦翁禪師の創建に係り、本尊には行基菩薩作と傳ふる聖觀世音を安置す。享保十三年罹災の災に罹り諸堂宇悉く烏有に歸せしも十一世泰岱惠年これを再建せり。

イタガ　板荷村　新木縣下野國上都賀郡の東南部。今市町の南方、鬼沼町の西北約八粁に當る。思川の上支黒川はその中央を東南に、滑川その東北部を流れ、それ等の沿岸に平地あるも、北境には石尊山(五九四米)・笹目倉山(八〇〇米)、南境にも山嶺連亙し山地多し。近世まで日光の神領區たりし處。社線東武鐵道の日光線(電車)の板荷驛(昭和四年設置)あり。主産物は米・麥・繭。本村はもと板荷村の大字なりしも明治二十六年獨立して村制を布く。〔觀音寺〕新義眞言宗智山派。鉢石山と號す。開創年代及び開山未詳。境内山上に千手觀音堂あり、本尊千手觀音像は弘法大師作なりと傳ふ。

イダカ　猪高村　愛知縣尾張國愛知郡の西北部。西は名古屋市東區の地に接し、北は東春日郡守山町に隣る。愛知丘陵の西端部に當り、西境・東界共に一〇〇米内外の丘阜つゞき、中部と北部の矢田川支流沿岸は土地平低にて水田多し。西は名古屋市、東北は瀬戸市に道路通じ、交通比較的に利便なり。亞炭を産出する高針礦山の一部を成す。本村或は和名抄の山田郡石作郷の内か。明治三十九年猪子石村、高畑村を廢し其地域を以て本村を置く。大字猪子石に長さ約一・五米の豕石二箇あり。其形豕子に似たるよりかく名づけしといふ。大字上社字前山に上社城址あり。里俗の傳ふる所に依れば城主は加藤勘三郎なりといふ。この地の臨濟宗觀音寺の過去帳に前山之城主俗名加藤勘三郎と見え、大字藤森の丁支院の古位牌には赤舞眞天庭城井禪門霊位、寛文明六年正月初四日とあり。また本村の書上帳に「長三十間横八間西の方に堀の形巾三尺程七十二間御座候先年之城主加藤勘三郎殿行末は存不ル由候有之屋敷之内畑二畝二十四歩是は備前殿御除地の時高の内へ入申候殘の分山の内に成ニ御座一候」と見ゆ。大字高針にある高針城もまた加藤勘三郎の居城なりしといふ。また此地は驍勇を以て聞えし戰國時代の武將柴田勝家の生れし地なり。〔長福寺〕黄檗宗。紫磨山と號す。天和三年の草創にして開山は千丈道岩和尚。木菴禪師支那より携帶せる御釋迦を藏す。〔蓮敬寺〕大字高針にあり。眞宗高田派。法雲山と號す。長徳年間源頼光尾張守の草創にして開基は惠心僧都。もと天台宗なりしも永禄四年蓮香法師現宗に改め、元和元年舊號高計山なる現號に改む。

イダガワ　井田川　〔井田川浦〕福島縣磐城國相馬郡の東南端にある潟湖。福浦村の東部にあり、往時は入江なりしも砂洲發達して潟湖となれるもの。一名蛯澤浦と呼び、又古くは耳井浦ともいへりといふ。面積約四方粁。常磐線小高驛の東南約六粁。

〔井田川村〕三重縣伊勢國鈴鹿郡の中部。亀山町の東に接し、鈴鹿川とその支流に沿ふ。西部は亀山町につゞく小丘陵あるも、その他は所謂伊勢平野の一部に屬し、土地平坦にして水田廣く拓く。舊東海道、關西本線相接近してほゞ東西に貫き、後者の井田川驛(昭和四年設置)あり。主産物米・繭。古くは和名抄の枚田郷の内にして、川俣縣造の居りし所。いま式内川俣神社あり、鈴鹿川俣縣造祖大比古命を祭る。村名は井尻・和田・川合の各一字を取りて名づけしもの。〔海善寺〕大字海善寺にあり。曹洞宗。開山は賢明亀懸和尚。往古大寺院たりしは貴個物に依り推定せらる。寛永年中、中興南門和尚一宇を建立す。明治七年焼失し、同九年再建して今に至る。〔正覺寺〕大字井尻にあり。天台宗眞盛派。成等山と號す。文禄十年の火災のため沿革不明。今の堂宇は元和年中行誉の再建に係る。本尊阿彌陀如來。〔常念寺〕大字中富田にあり。天台宗眞盛派。富光山と號す。承應年間晋誌和尚の開基、後震災のため倒壊せしも、明治初年眞言宗白浪山平建寺の堂宇を買収して之に移る。〔盛福寺〕大字西富田にあり。天台宗眞盛派。梅光山と號す。文明二年鎌倉の眞法印來り、眞言宗御願寺を開創し、のち延徳元年現號に改む。承應年間の大洪水のため堂宇崩壊せしも、寛文二年智誉法印之を再建し、再び嘉永七年震災のために崩壊しのち再建して現在に至る。〔石上寺〕大字和田にあり。眞宗高田派。那智山と號す。延暦十五年大和の人紀眞龍の開基に係り、護國寺として高賞の歸依篤く今に聖徳太子の筆なる額を存す。寺寶に弘法大師眞筆を藏せりといふ。〔福萬寺〕大字西富田にあり。眞宗高田派。文永十一年の草創。開山は常願法師。初め常願寺と稱せしも、寛文元年眞宗に改め現號を稱す。明和八年洪水のため流失す。のち再び地をトして現存の堂を建立す。

イタキ　板木村　廣島縣備後國甲奴郡の西南端。東は世羅郡津名村・上山村、南は豊田郡川源村、西は高田郡原町・小田村によりて圍まる。南西境上に大土山(八〇〇米)峙ち、村の西南部はその山脚延びて山地をなし北部にも丘陵起伏す。中部は比較的平坦にして水田拓く。道路北部を東西に横ぎり、東は三良坂村に、西は吉田町に通ず。古くは和名抄の三次郡上次郷に屬せるものゝ如し。大字羽出庭に中世三浦因幡義長(のち福馬國光と改む)の居りし六郎山城址あり。

イタキ　板城村　廣島縣安藝國賀茂郡の中部。東は三津町・早田原村に、南は野路村に、西は上黒瀬村・郷田村に、北は下三永村に接す。東半は土地高く林野をなし、中部以西に耕地拓け、水田・畑地あり。主産物米・麥。北方西條町よりの縣道西部を南北に過て西南方の吳市方面に向ふ。古くは和名抄の養訓郷の内。村名は村内の松板山・中城山より各一字を採りて命名せるもの。

イタク　板來　常陸國行方郡の郷(和名抄)、刊本に坂とあるは板の誤なり。其地いま茨城縣行方郡の潮來町・津知村等の邊に當る。また板久にも作る。建借間命の説話中なる伊太久之郷も此地と思はる。常陸風土記・行方「霞郷……俗、此往南十里、板來村、近臨ニ海濱一、安ニ置驛家一、此謂ニ板來之驛一」と見ゆ。この驛家の延喜式に載せざるは、継嶋天皇紀にも弘仁六年、廢ニ常陸國板來等驛一とあるに依る。然るに後世に至るもなほ水驛の實を失はざるは、此地早くより水郷として開け、娼家・酒肆多くして風流韻事を傳へ、歌詞・舞曲などに專ら潮來と稱するに依る。潮來とは前に継嶋天皇紀に見ゆる知々古宇にはあらずして、元禄年中に水戸光圀公の鹿島神社の摂宮に散ひ且つ又常陸國の方言にて潮をイヽといふを興ある事として、潮は舊の儘にして改めしといふ。上古、國夜尺斯・夜筑斯の二人この地に據りて謀叛す。崇神帝、建借間命を遣はして之を伐たしむ、命奇計を以て賊徒を滅せり、因りて殉殺の義を取りて伊太久の郷と名づくと風土記に見ゆ。貞治五年の海夫注文に、蓮子書信方津、板來津とあれば、當時は蓋し信方(今の延方村)に屬せしものか。※潮來町

イタクラ　板倉　〔板倉沼〕群馬縣邑樂郡伊奈良村大字板倉にある沼。周圍約九粁。伊奈良村はもと板倉村と稱せしも、この沼は古歌に見えたる伊奈良の沼に擬せらるゝに至り、岩田・根谷二村を合して伊奈良村と改稱するに至れり。萬葉・一四「上毛野伊奈良の沼の大藺草よそに見しよは今こそ靡れ」夫木・二四「おほるくさ須はうへにそなりにけるいならの沼に靖めさみたれ鳥家」

〔板倉村〕新潟縣鄙後國中頸城郡の東部。高田市の東南方に位す。西北境は荒川によりて和田村に界し、村はその支流の谷に當り、施西北より東南に長く、長さ約一五粁、幅廣き處約六粁。南部は長野縣上水内郡に接し、境上に近き黒倉山(一二八九米)の北斜面を占め、山地多きも中部以北は次第に低平となり殊に西北部は卽ち荒川平野の東南部に當り、水田廣く分布し米・繭を主産す。西北方は高田市に、北は柿崎方面に達する縣道、村の西北部を通ず。本村は四十一箇の大字を合併したる大村なり。和名抄の頸城郡板倉郷の地にして、中世上・下板倉の二郷に分たれしものゝ如し。板倉の名はこの地國府に近接せるため板倉を置きて公穀を納めしより起りしものにて、延喜十七年越中國官倉交替帳に某村の東第一板倉に穀若干を納め、第二の板倉に穀若干を納むと見ゆるは卽ち此地の板倉を指せるものなり。大字山部に此地の板倉あり、上杉房能の臣大熊鎮前守朝秀及び其子備前守朝秀等の居城なりといふ。本村は元和元年以後徳川幕府の領となり、寛保元年榊原氏の高田に轉封せらるゝや翌二年幕府は川浦に代官を置きて此地を支配せり。〔實壽院〕大字針にあり。曹洞宗。寶重院と號す。養老年間行基菩薩の草創。初め感應山觀樂寺と稱せしも、のち兵火に罹りて衰頽す。天正元年上杉謙信の臣竹俣三河守芳綱自ら開基となりて堂宇を修し、曹洞宗に改む。其のち三度災火に罹りしも、寺寶東山法橋の十六尊者畫像殘りて今に傳ふる。

〔板倉山〕近江國にあり。歌枕の名所。一書には高島郡なりといひ、名所案はこれを蒲生郡とす。調花・一〇「今上の大嘗會の悠紀方の御屏風に近江の國板倉の山田に稲を多く刈り積めり……板倉の山田に積める稲を見て治まれる世のほどを知るかな　顯輔」

〔板倉〕備中國賀夜郡にありし郷。和名抄は伊太久良と訓す。今の岡山縣吉備郡眞金町大字宮内)の板倉あり、轉じて郷名となれるものと傳ふ。後冷泉天皇の治暦四年大嘗會主基方の歌に板倉里とあるはこれに同じ。平家物語に「備前備中兩國のさかひ、瀬谷川をおひにせる、吉備の中山のふもと、板倉の里」と見え、太平記にも板倉川。板倉橋の名あり。板倉川は卽ち瀬谷川を指せるものといへど一説には足守川なりといふも詳ならず。寛永二年十月妹尾愛康は此の地の板倉城に據り、木曾義仲を拒ぎし事は源平盛衰記・平家物語等に見え、盛衰記には「木曾の軍勢庶皮宿、板蔵城に押寄せしに、愛康は城を出てて、深山に隱れ、大木を楯にして敵を待ち、遂に山中に自害し、木曾勢は其首を聟之森にかけ渡し、萬寿庄に退く」とあり。また此地は舊長崎街道の宿驛として賑はひし所にて、いま指定史蹟眞金一里塚は往時を偲ぶ縁となる。大嘗會歌集・治暦四年主基方・備中國板倉里「苅つめるわさたの稲の多かればみさめもやちずいたくらの里　經衡」

イタコ　板來　新木縣上都賀郡にありし村。明治二十六年本村を廢し、其二大

字なる板賀・小來川各〻獨立の村となる。

イタコ　潮來

【潮來町】茨城縣常陸國行方郡の南端。香取・鹿島の兩神宮を繫ぐ街道の中間にある港津にして、霞ヶ浦の排水口たる北利根川の東北岸に沿ふ。その分流潮來川中郷を東流して町を南北に分つ。南半は低濕なる水田卽ち出島を成し外濠逆浦を隔てゝ東南方鹿島郡息栖村に對し北半は河岸に低地ありて市街地をなし北方の丘陵につゞく。鹿島・玉造方面及び千葉縣佐原町にバスを通じ、また霞ヶ浦・北浦及び銚子への舟運の便ありて交通比較的便なり。住民の多くは半商・半農にして主産物は米。副産物に繩・筵・叺等の藁工品、鯉・鮒・鯉魚等の水産物及び其加工品あり。又市街地には織物工場・酒造工場あり。幕末の勤王家にして常陸史料・圖域歸史の著者たる宮本尙一郎(號は茶村、體正五位)は此地に生る。此地は和名抄の板來郷の内にして中世大掾平氏の管下にありしも、後その臣島崎氏に讓り、次いで佐竹氏の治下に移る。のち佐竹氏の秋田に轉封され、德川頼房の水戸に封ぜられるに至り、幣來二百五十餘年その治下にありて明治維新を迎ふ。イタコは蓋し郷名の遺稱ならんも潮來の字をこれに充てたるは何時の頃よりか詳ならず。蓋し鹿島志に水戸光圀は鹿島神宮の攝社潮宮に倣ひ、且つ常陸國の方言に潮をイタコといふに基ぜられて潮來と改めたりとある

より見れば元祿年間の事ならんか。古來此地は鹿島・息栖・香取の三社詣での船客の足溜として且つ自らなる水郷の佳境と相俟ちて榮え、潮來節・あやめ踊に名を得たるも近時娼家漸く其跡を絶ち、今は僅に其面影を留むるのみ。いたこ出島の眞盛の中にあやめ咲くとはしたなりしや」等に依りて普く人口に膾炙せられたる潮來節は水郷の哀愁と寂寞と、此種歌樂郷特有の人情の生める小唄、それが船唄の影響を受けて享保・元文頃の隆盛時代に醸酵せられたるものなり。而して其の最も古く歌はれしものは山家鳥蟲歌に見える「潮來出てから中島までは、雨は降られど袖しぼる。さつさおせおせ」等ならんといふ。潮來港全盛時代の後まもなく江戸に謠はれ、寶曆・明和の頃に漸次流行の期に入り、天明・寛政の頃の洒落本には既に前期流行の投節の名は絶え屋と潮來の文字を見るに至れり。町の背後にある公園稻荷山の丘陵に上れば水郷十六島一帶を見下し、遠に香取・佐原の市街を水外に望み、右は浮島・阿波崎の樹色、左は鹿島・根三田の沙丘、みな指顧の中にありて風光絶佳たり。栗毛後駿馬・初ヶ「精米の飯や酒は美女、鼻についてはうきことを羨しくて旅あるき、江の島鎌倉筑波山、香取や潮來にてうし」潮來節誌・前「夏衣香取の濱のうたたねにといへる宜廉の歌も、波のよる〳〵潮來に通ふ心なやよみ給ひけん。スマヨ加藤洲の十二の橋とうたへる川崎の唄もいづれ潮來にわたる心をやうたふらん……前には利根川滲々として合流百川勢ひ悠々たり、後には稻荷山森々として蒼樹千里の眺を逃り勝景又いふべからず」(素雲熊野神社)大字潮來に鎭座。郷社。祭神、須佐男之神・事解之男神・奇稻田比賣命外數神。創立年代詳かならざるも、もと牛頭天王と稱し、江戸時代に水戸藩主德川氏の崇敬を受く、又全町の產土神として町民の崇敬篤し、例祭十一月二十三日。(慧雲寺)日蓮宗。德大山と號す。築地村本國山妙光寺末なり。元祿中慧雲上人庵を結びしも、のち水戸光圀の命によりて德大山慧雲寺と號せしを嚆矢とす。初め村内他地にありたれど元祿十三年現地に移る。(長勝寺)大字潮來にあり。海雲山と號す、臨濟宗妙心寺派。文治元年源頼朝の開創と傳ふ。中興開山は太牧祖清。幕府寺領十石を附せり。同寺の銅鐘は高さ一米、口徑約六三糎、その鐘銘拓本一卷は國寶に指定さる。※板來

【潮來田島】茨城縣常陸國行方郡潮來町の附近にして、霞ヶ浦・北浦と北利根川とにより生じたる洲嶋の汎稱を卽ち田島といふ。

【潮來川】茨城縣常陸國行方郡潮來町街の南なる濠堀。北利根川の一分流にて東方の延方村へ通じて北浦口に入る。前川・圓部川ともいふ、流程約四粁。

イタサノオバマ　五十田挾之小汀

→五十俣挾之小汀

イタシキ　板敷

【板敷山】山形縣羽前國最上郡古口村と東田川郡立谷澤村との境に峙つ。標高六三〇米。板敷峠あり、板敷嶽ともいふ。此峠は戊辰役の際、新生町を進發せる薩長軍を邪ゐし大山藏等は、既軍の堅めし清川村その他の陣營を攻略せんと此所を通過す。從來、最上郡より東田川郡・西田川郡・飽海郡に至るには最上川の舟便あれども嚴冬の際河水凝結して其便を失ふことありて、板敷の險を冒すものあり。最上川本流は東北流を西北に流れ又西流にはその支流立谷澤川北走す。奥細道「最上川はみちのくより出て山形を水上とす、こてん・はやぶさなど云ふおそろしき難所あり、板敷山の北を流れて果は酒田の海に入る」夫木・二〇「陸奥に近き出羽の板敷の山に年經てすむそわびしき」

【板敷温溪】山梨縣西山梨郡にある板敷川の谿谷。御機昇仙峽の仙嶮瀧より東北二五粁。板敷川と荒川との合流點より上流板敷川に沿ふ約一粁の谷を隔し兩岸斷崖絶壁を成し、上に樹木繁茂し、下に大瀧・落合瀧・とうやり瀧等大小十餘の瀑布相次いでかゝり其景觀頗る壯大なり。また「とうやり瀧」の南三〇〇米の處に幕岩といふ壯大なる岩壁聳ゆ。

イタシマ　板島　宇和島市の舊稱。

イタズ　板津村　石川縣加賀國能美郡の北西部。小松町とその東南白江村との北に隣り、大杉川の下流を以て界す。石川（金澤）平野の南部を占め、水田廣く拓け、米・繭の產多し。荷北陸道及び北陸本線南北に通ず。本村は和名抄の能美郡山下郷の内なるべく、近世の板津郷と德橋郷の一部の地にして、村名は板津郷の遺稱なり。藤原北家、齋藤氏の族、この地に居り板津氏を稱し本郡の大領家たり。三州志に板津介成景の後裔板津九郎小松城(小松町にあり)を取立つとあり。明治四十年高田・田川の二村を合併して本村を建て同時に金屋の一字を白江村に割く。

イタダ　板田橋　大和國高市郡小墾田にありし橋。小墾田は飛鳥の別稱なるも、板田橋は飛鳥の何れの邊にありしものか詳かならず。一說に板田は坂田の誤りにて、今の奈良縣高市郡高市村大字坂田をこれに擬するものあるも古寫本皆板田に作り容易に信じ難し。萬葉・一一「小墾田の板田の橋の壞れなば桁より行かむな戀ひそ吾妹」新撰古今・戀「なはりたの板田の橋をこほるるは渡らぬ中の涙なりけり　源俊氏」堀川百首「桁おちて苦むしにけり小墾田の板田の沼にわたすたなはし　仲實」

イタチ　印達・因達　攝津國飾磨郡の古地名。和名抄刊本には印達郷とあるも高山寺本は印達に作り伊多知と訓ず。今これに擬ふもまたイタテとも訓みしものの知し。攝津風土記には因達里と見え伊太代の神が鎭座し給ふよりの名とあり。今の姫路市及び其東郊が其地に當るものならん。又青窪山の地方なりともいふ。式内射楯兵主神社鎭座。攝津風土記・飾磨郡「因達里、右稱二因達一者、息長帶比賣命歌、平二韓國一、渡坐之時、坐二于)御船前一、伊太代之神、在二於此處一、故因二神名一、以爲二里名一」

イタチ　射立　阿波國麻植郡にありし郷。和名抄伊多知と訓ず。今の德島縣麻植郡山瀬町・川田町・三山村等の地に當る。川田町に湯立の地あり、蓋し射立の轉ならん。延喜神名式に伊太氏神社、又射楯神社あり、而して五十猛命を祀る、射立は蓋し此神號を取りたるものか。

イタチ　鼬川

【鼬川】相模國鎌倉郡にあり。一に猫河川に作る。柏尾川の一支。大平山に發し柏尾川に入り南流して境川に合す。東鑑・貞應三年六月、炎旱渉旬、仍今月爲二祈一雨、被レ行二靈所七瀬御祓一由比濱國道朝臣、金洗澤池知輔朝臣、因幡河親職、六運忠業、猫河泰貞、杜戸有道、江島能穴信賢」

【鼬川】富山縣常願寺川の一分流。上新川郡上瀬町地内に於て常願寺川より分派して北西に流れ、大庄・太田・山室等の諸村を經、富山市に入りて神通川に合し、沿岸の富山平野の耕地を灌漑す。

【鼬川】大阪市淀花區中部を東西に流るる川。高津入堀の末にて今宮惠比須の傍を流れ、今宮・難波・木津邊の水を西に導き、木津川町に至り、七瀬川となりて木津川に入る。昔天王寺造營の折に材木を引きのぼせしと傳ふ。當時此運河を掘りたるに、鼬多く出でたりとて、此名あり。

イタチボリ　立賣堀・鼬堀

【立賣堀(鼬堀)】大阪市西區中部の町名。西横堀より分るゝ立賣堀川の南北兩岸に沿ふ通あり、南岸を南通、北岸を北通といひ新町遊廓の北に當る。卯月の潤色・中「立賣堀の伯母諸共に、傳三兄弟引連れて河内の親の手に預け」双蝶々曲輪日記「此方の男を昨夜鼬堀まで使に遣つたれば、新町橋でよう投げたり蹈んだりしやつたの」

【立賣堀川・鼬堀川】大阪市西區中部の川。一に伊達堀ともかけり。西横堀川より分れて西流し江ノ子島の南端に於て、百間堀川に入る。攝津名所圖會大成に、「慶元戰爭の時、伊達家の陣所の地にして、要害の堀切なりし跡を、穿足して川とせし故に、始は伊達堀とよべり」とあり。また今日も尙この川の沿岸に多數の材木商竝べるより、往時も此處に材木の立賣行はれ、從つてこの川の名稱とせしものならんといふ。梳久末松山・下「戀に願ひは西方の、玉の臺のあみだ橋、うき長堀もわんざくれ、ぬれてぞ渡るいたちの堀」今宮心中「裏の御堂もたか〳〵と立賣堀を潛ざ廻し、辨當すまば梳家具も、釜もちやくちやくあらや橋」

イタツキ　板築　文德實錄に見ゆる流江國の驛名。今の鯵岡縣引佐郡三ヶ日町の地内なるべけれど、其の何れの邊なるか詳ならず。或は大字日比澤の邊ならんといふ。日比澤は舊名を板築と稱せしものなり、或は大字只木なる以て板築に擬するものあり、卽ち後世其頭の母音を脫落してイヅキとなり、更に訛りてイヅキとなれるものならんといふ。或はまた大字本坂の地ならんともいふ。此地は和名抄、濱名郡坂本郷の内にして、延喜式兵部省式に濱名傳馬五疋とあるは、卽ち板築驛の地にありたるものならん。坂本郷は一に板築郷の誤りたるものならんといふも詳かならず。承和年中橘逸勢罪を得て伊豆に流さるゝの途、此驛にて病死す。其女追ひ來り、悲歎の極終に尼となり庵を結び居ること數年。嘉祥年中逸勢の罪免さるゝに及び、其遺骨を負うて京に歸り、其跡に逸勢遺愛の古鏡面を埋むといふ。文德實錄・嘉祥三年五月「追二贈流人橘逸勢正五位下一、詔下二遠江國一、歸二葬本郷一……承和九年、連二染伴健岑謀反事一、淫涉不レ服、滅レ死配二流伊豆國一、初逸勢之赴二配所一也、有二一女一、悲泣步從、官兵黙送者比レ之レ今レ去、女書止夜行、遂得二相從一、逸勢行到二遠江國板築驛一、終于二逆旅一、女變號震哭、便葬二驛下一、廬二于墓前一、守レ屍不レ去、乃落髮爲レ尼、自名二妙神一、爲レ父菩念、曉夜苦王、行旅過者爲レ之流涕、及レ詔二歸葬一、女尼負レ屍還レ京、時人異レ之、稱爲二孝女一」

イタテ　印達・因達　→印達

イダテ　伊達　↓伊達郡（福島縣）

イタドメ　板留　↓山形村（宮崎縣）

イタドリ　板取

【板取】　↓堺村（福井縣）

【板取村】　岐阜縣美濃國武儀郡の北部。長良川の支流板取川の上源を占め、北境に瀧波山（一四一三米）・平家岳（一四四二米）・左門岳等の山岳連りて福井縣大野郡と界し、西はその山支たる明神山・日永岳ありて本巣・山縣二郡に、東は高賀山等連りて郡上郡に界す。東西約一五粁、南北約二〇粁の大村なるも山支縱横に連亙して森林ふかし。飯美南線板取口驛に自動車を通ずるも交通便ならず。此地の圓教寺觀音堂は、當國三十三番巡禮の第一番の札所なり。

【板取川】　岐阜縣武儀郡を流るゝ川。郡の北部、福井縣大野郡との境上に發ゆる平家岳・左門岳の南側に發源。山谷をなして南流し、郡の中部洞戸村に至りて東南に轉じ、美濃町北部にて長良川に入る。下流は故川ともいふ。流程約五〇粁。川筏にては抄紙業行はる。

【板取山】　赤石山脈の一峯。靜岡縣榛原郡中川根村と上川根村に跨る。標高一五一三米。東北方は澤口山へ、南西方は蓄麥鞍山に連なる。北麓一體の森林は千頭山御料林にして、大井川の一支流大間川此地に發す。

イタトリグチ　板取口　飯美南線の驛（大正十五年設置）。岐阜縣武儀郡洲原村にあり。

イタナベ　板鍋山　中國山脈の一峯。廣島縣豐田郡乃美村と川源村の境界にあり。標高七五五米。東北に天神岳（七五八米）、西北に鷹巣山（九二二米）峙つ。

イタノ　板野

【板野】　甲斐國都留郡にありしといふ。歌枕。今の山梨縣北都留郡櫛原村の大字井戸に板屋といふ地あり。これ右の板野にして字飯湯じて轉訛せしものか。甲斐國誌に「甲斐の國つるの郡のいた野なるしらたまこすけ笠に縫ふらん（夫木集）」、はるはると甲斐の高根は見えかくれ板野の小菅ふなびくなり（宗祇法師）」、蓋し隣村西原村より檜木玉笠を產し、其隣村小菅村より小菅笠を經ひ出せしなるべし」と見ゆ。

【板野郡】　德島縣（阿波國）十郡の一。縣の東北部を占め、東は紀伊水道に面し、南は德島市・名東・名西二郡及び麻植郡東部に、西は阿波郡に隣り、北の西半は香川縣大川郡に界し、東半は瀬戸內海（播磨灘）に臨む。郡の北半は讃岐山脈東西に連り、大山・大坂山・大麻山等の山峯聳ゆるも、高度は何れも八〇〇米に達せず。その東端は島田島・高島・大毛島等となり、鳴門海峽に岩礁を曳きて溪路島の西南岸に相對し、北岸は山脚急に海岸に下りて出入少し。南半は吉野川下流に發達せる沖積層の平野の東北部に當り、吉野川本流をはじめ、その分流今切川・別宮川曲流し、且つ互に水脈を通ずるものあり、また北部讃岐山脈より下る小河川はみな吉野川に入る。撫養街道郡の中部を東西に通じ、南方德島市に起る濱路街道東部を北方に延びて撫養街道に合し、讃岐街道は中部を西北に走り撫養街道と交り北境の大坂峠を踰えて大川郡に入る。省線高徳本線また德島市より起り、始は濱路街道の西方を北進し、次で撫養街道に沿ひて西し、更に讃岐街道と並行して香川縣に入り、その池谷驛より撫養線を、板西驛より鍛冶屋原線を岐つ。沃土に惠れ耕地よく拓け米・麥・雜穀・甘藷・馬鈴薯・藍・蒟の產あり、管て藍知廣く榎き特に藍圓村その中心なりしも今は全く衰へて桑園と變じ養蠶盛に行はる。漁業赤蟹にて鯛・鰯・海鼠・若布の漁獲あり、撫養・鳴田には製鹽榮ゆ。郡の創は詳かならざるも、續日本紀・神護景雲元年三月「阿波國板野名方阿波等三郡百姓言曰、己等姓、庚午年籍被ㇾ記ㇾ凡直、唯葛皆著ニ費字、自ㇾ此之後、評督凡直麻呂等被ㇾ陳倒庶、改爲ニ粟凡直姓一、己等不ㇾ安、於ㇾ是改爲ニ粟凡直一」と見え、和名抄は伊太乃と訓じ板島・津麻・高野・小島・井隈・田上・山下・全戸・新屋の九郷を管す。貞應二年土御門上皇、土佐の香美郡より本郡池谷村（今の堀江村）に遷幸し、寛喜三年此地に崩御せらる。建武中細川頼春守護となり勝瑞城に據りて之を治す。後同族讃岐守成之守護を兼ね、天文二十一年に至り、三好長慶の弟之康、成之の曾孫守護持隆を弑して勝瑞に據り全州を擅有す。永祿三年之康和泉に入り島山高政と戰ひて敗死し、子長治闕ぎしも其臣一宮成助竊に欵を長曾我部元親に送り長治を襲殺せしむ。三好の舊臣等長治の弟十河存保を迎へて主となせしも、同十年再び元親來り侵すに及び存保遂に勝瑞より遁走す。中世板東・板西の二郡に分割せしも寛文四年舊に復せり。後世北郡の厮起りしも、これは郡名に非ずして、勝浦・那賀二郡を南郡といふに對して本郡及び名方郡等吉野川下游の總名なりしものゝ如し。草高元祿中三萬四千石、寛政中五萬六千石ありしといふ。爾後變遷なく以て今日に至る。

イタノニシ　板西　德島縣阿波國にありし郡。バンザイとも呼ぶ。一に坂西にも作れり。中世板野郡を分ちて板東・板西の二郡に分ちしも、寛文四年再び復た合して板野郡となる。

イタノヒガシ　板東　德島縣阿波國にありし郡。バンドーとも呼ぶ。一に坂東にも作れり。中世板野郡を分ちて板東・板西の二郡に分ちしも、寛文四年再び復び合して板野郡となる。

イタバシ　板橋

【板橋村】　茨城縣常陸國筑波郡の南部。谷田部町の南に續き東南は稻敷郡堀崎村に接す。低き等地多なし林野・畑地多く北部と東邊は阜瀉の地ななす。龍ヶ崎町より北方北條町への縣道は同村の西邊を北走す。米・麥を產す。此地は岡見氏の據れる處にて、天正年間に下野の多賀谷重經と相互に攻防せし古戰場なり。岡見氏は宇都宮氏の族、小田氏滅にて小田治久の二子某を擁とし河內郡岡見より起る。岡見は今の稻敷郡の岡田村なり。河內郡は明治二十九年に新治・稻敷・筑波の三郡に分割編入され其名滅ぶ。板橋の地は上世には河內郡大山郷（今の稻敷郡牛久村と堀崎村大字岩崎邊に當るか）の內。中世は田中庄（いま田水山村）に屬せるものゝ如し。文祿檢地の時、牛久沼は悉く筑波郡に屬す。德川氏の治世に至り全村その旗本の知行たり。（永寶院）寶洞宗。東光山と號す。眞壁郡下妻町多寶院の末寺にして、天正十五年の開創なり。開基は領主月岡摠廟守朝世、不山等智大和尙を開山とす。（不動院）大字板橋にあり、淸安山と號す、新義眞言宗豐山派。平城天皇の大同年間、空海東國を巡化して當地に來り、不動明王及び二童子の像を彫刻して、求子安產の祈念を修す。これ當寺の起原なりと傳ふ。往時は諸堂具備完全し、莊麗を極めしも其後數度の兵火に罹り舊觀を止めず。本尊不動明王像は高さ一米、及び二童子立像三軀は何れも木造にて藤原時代の作、その肢體細く刀法淡く、概して穩和なる趣致に富み、國寶に指定さる。な住境內に代官岡田氏の碑あり、碑脇の惡習を矯正せし功を錄す。毎月二十七日の緣日には安產を願ふ婦者多し。

【板橋】　↓海合村（新板縣）

【板橋】　東京市の地名。古くは東京府北豐島郡に屬せり。江戸名所圖會に依れば板橋の名は石神井川に架せる小橋より起りしものならんといはれ、古き地名なり。中世上・下板橋宿に分る。義經記・三「佐殿御覽じ、神妙なる由仰せられ、さてこそふとひ墨田打越えて、板橋につき給ひけり」と見え、中古治承記に慶安元年正月六日、芳賀兵衛入道禪可の子伊賀守高貞、武州板橋原に打出づとあり。中世桓武平氏豐島忠康此地に住して板橋氏を稱せり。寶永系譜に信濃守忠康、北條氏直に仕へしが、沒落の後舊地たりし武藏國板橋に隱居せる由見ゆ。また鎌倉大草紙に板橋城を載せ、小田原記に板橋肥後守當城に住して千葉次郎に屬すと見ゆ。板橋城のありたる地は上板橋宿の地ならんも、今その所在を詳かにせず。面して松隣庵話に永祿四年、松山の城主北條安房守板橋といふ處に鷹野に越し逗留したりけるに、太田三樂三千餘騎を率ゐて來り暫時の中に攻略せりとあるより見れば、此時廢城となりしものならん。一に小田原沒落の頃廢せしものかともいふ。江戸開府の後は中仙道第一の宿驛にして、人馬各五十ヵ定額とし、日本橋迄二里、廢宿へ二里十町の距立なせり。また西北方に分れて川越に到る別路あり。今なほ此地には旅舍妓樓ありて往年の宿場情趣を彷彿せしめるものあり。路傍に緣切榎といふ周圍約六米の巨木ありて、其の樹下に第六天の小祠あり。俗に惡緣の男女此所に祈願すればその緣絕ゆといはれ、餘墅の時は忌みて此處を過ぎず。文久元年和宮御降嫁の際も通行を避けられしといふ。正保・元祿の改めには上・下板橋村と記し、近年上板橋村・板橋町と改めしが、昭和七年東京市に入り附近の練馬町・上練馬村・志村・赤塚村・大泉村・中新井村・石神井村を併せて板橋區となる。好色二代男・二「森川宿吹上を過て追分にさしかゝり……所々日本橋より二里、板橋の宿なると」八笑人・五中「なんぼ友達づくだといつても、呑七が間の抜けたまで聞けば澤山から駒込・王子・板橋」

【板橋區】　東京市三十五區の一。市の西北隅に位し、東は王子・淀野川の兩區に、南は豐島・中野・杉並の諸區に、西は東京府北多摩郡に、北は埼玉縣北足立郡に境す。當區は昭和七年十月一日東京市域擴張により一區を成せしものにして東西一五粁、南北九粁の廣大な地域を占め、面積八〇・五方粁、三十五區中の首位を占め略〻寫市域に匹敵す。地勢は北部の荒川流域の低地を除けば大部分臺地を成し、其臺地は北東に向つて緩傾斜し舊千川上水は南部を、石神井川は中部を各東流して荒川に合流し、白子川は西北部を東北に流れ荒川に注ぐ。これ等の河川間の地は武藏野臺地の原形が比較的よく保存さる。道路は東南隅にある省線山手線の板橋驛（明治十八年設置、板橋區板橋町にあり）を核心として放射狀に通ず。即ち、東部を南北に縱貫する中山道、中部を東西に橫斷する板橋街道あり、更にこれ等を軸にして關東の府道を派出す。電鐵には東武鐵道東上線・武藏野鐵道・西武電車等あり、何れも省線山手線に連絡して交通便利なり。東南部志村町の一帶は工業區に屬し、東南部板橋町邊は舊中仙道に沿ひ古くより商業榮え、區內に於ける最も繁華なる地域をなす。西部の白子川流域、及び石神井川の水源地たる三寶寺池一帶の地は風致地區に指定せられ、近時都人士の避樂地として著名なり。

【板橋】　相模國足柄郡にありし地名。歌枕。今の神奈川縣足柄下郡大窪村の大字に板橋あり。小田原城の西南に當る。新編相模風土記「板橋村文明中太田持資入道道灌上洛の路次、當所を過りて和歌を詠ぜり、平安紀行曰、板橋と云所にて、朽にけるまきのいたはし苔むして危うなからもわたるかち人」

【板橋街】　臺灣臺北州海山郡の北部。東北は淡水河の支流新店溪を挾みて臺北市西南部に對し、西と北は淡水河によりて新莊郡新莊街と界す。臺北平野の西部を

占め土地低平肥沃、米・茶・甘藷・蔬菜等の農産豊に、特に蔬菜は奈北市に供給せらるゝもの多し。また板橋炭礦ありて石炭を産す。道路は板橋市街を中心に、奈北・新荘・鳥歌・新店の各方面に通じ、特に奈北へは新店溪に昭和橋架設後、頗る便利となり、愈〻首都の西南郊外地としての發展著しきものあり。鐵道は總督府鐵道縱貫線が奈北市西南部の萬華驛より來り、江子翠(昭和七年設置)・浮洲(昭和七年設置)の三驛を置き、ガソリン機動車により首都との交通頻繁に行はる。海山郡役所・奈北警察電信局・奈北放送局(JFAK)・板橋巡信所・林本源庭園等あり。本街はもと枋橋庄と稱せられ、島内第一の富豪林家の居邑として古くより拓けたる地にして、四什頭料理・板橋藝妓の名は夙に此地の名物として著はる。枋は板に同じく、もと一小後に一板橋を架せしより地名起るといひ、道光二十六年(我が弘化三年)頃、林家の祖、林平侯が此地の開拓を行ひ、枋橋新興街と名づけたるを板橋市街の發生とす。後咸豐三年(我が嘉永六年)奈北に支那移民の亂闘ありしも林家一族此地に避難せしよりこれに從ひて移住する者相繼きて街肆益〻増加し、附近の物資集散市場として逐年膨脹をなし今日の殷賑を見るに至れるものなり。〔奈北無電板橋巡信所〕板橋驛の東方〇・七粁の地にあり。巡信所としては世界屈指のものにして昭和三年十月の竣工、長波アンテナタワー四基あり、高さ一一〇米、波長六六〇〇米。又奈北放送局巡信所としては一〇キロ放送を行ふ。〔林本源庭園〕板橋驛の北西〇・四粁にあり。島内隨一の名園にして、林家の住宅地を加ふれば、其總面積約三ヘクタールに及び、もとは枋橋庄の大半を占めたりといふ。此の庭園を築造せるは林家を大成せしめたる林維源にして道光の末年頃、即ち今より約百年前の林家黄金時代に成り、材料・職人等すべて支那本國より集め、三箇年の日子と數十萬圓の巨費を投じたる純支那式庭園にして規模の廣大、技巧の優秀完美なるは專門家をして三嘆せしむるものあり。眞に阿房宮の壯觀を偲ばせ奇岩怪石、流水深淵、池沼點綴し、陸橋高く架して園内を長蛇の如くに走る廻廊と連なり、宏壯なる建物には定靜堂以下來青閣・田植を望見するための觀稼樓、圓書館たりし汲古書屋、舞樂のための大舞臺等あり、外郭は塀を廻らして一城郭をなし、昔時は數百の衛兵これを守りしといふ。現今は無料にて一般に公開す。〔林本源〕林家の家號にして、飲水思源、即ち清事本源を忘るゝ勿れといふ意を藏せるもの。林家の祖林平侯は支那福建省龍溪縣の人。父の壓實が臺灣に渡來して今の新荘郡新荘に書房を設けし時、十八歳にして渡臺、米商に從ひ、鹿港を巡みて豆官を成し、一時藩國として廣西省柳州府知事たる事數年、再び渡臺して枋橋の地に居して諸方面に事業を殖せり。三顧漢を經ゆる宜蘭街道は當時平侯の拓けるもの。又當時支那一流の文人學者にして書家なりし呂世宜(鹿西村)・書家謝琯樵・文章家葉東谷等を招來して文化の開發に努むるなど精神的方面にも功績を殘せり次代林維源は奈灣巡撫大臣光緒帝大夫侍郎の顯官に任じ、生蕃討伐に從ひて鐵路敷設大臣をも兼ね、當時の巡撫劉銘傳督辦を補佐して鐵道敷設に當れり。正に林家の黄金時代にして財産は數千萬圓に達し、枋橋の庭園を築き、義田を寄附し、學校其他の社會事業を起し、枋橋の地は當時臺灣の文化の中心となれり。

イタバナ　板鼻町　群馬縣上野國碓氷郡の東部。高崎市の西方約八粁、西は安中町に隣る、中山道に沿ひ街道町として發達せる處。北に天神山(三二三米)ありて烏川の谷と隔たり、南はその支流碓氷川東流してその岸に沿ひて平地あり。米・蚕を産す。信越本線安中驛(安中町)・倉線高崎線高崎驛(高崎市)に近く交通比較的便なり。この地は和名抄の片岡郡高堰郷の地たり。中山道の一驛にして義經記・四の條に「墨田川過ぎ馬にまかせて、歩ませ給ひける程に、馬の足早くて、二日に通りける所を、一日に上野の國板鼻といふ所につき給ひけり」と見ゆ。古來屢〻戰場となりし地にして、太平記・鎌倉九代記等に依れば上杉民部大輔は板鼻の合戰に宇都宮氏に討負け信濃國に逃下りし由見え、また關東古戰錄には永祿三年九月中旬信玄一萬餘騎を率ゐて信州余地峠より西上州の下仁田を經えて松井田・安中の間に著陣して兵を板鼻宿まで押出し長野業政は廣野に待請け一戰に及べりと見ゆ。弘安三年、一遍上人此地を過ぎりし際、時宗開名寺を建立す。いま稱光天皇の勅願及び開山上人の遺品を藏す。また天台宗稱名寺は聖德太子の開基と傳へられ寺寶に太子の製禁等あり。境内に佐野常世の手栽と傳へられたる楓樹ありしも、今は枯れて實生の一樹を存し當年の偉を僅に存せるのみ。〔鷹巣城〕鷹巣山上にある城址。碓氷川に臨む絶壁上にあり。此地はもと箕輪城主長野氏の所領なりしも、永祿中武田信玄これに築城し依田六郎を置き西上州の守備に當らしむ武田氏亡び後北條氏の有となり、小田原落城後は廢城となる。〔稱名寺〕天台宗。創建年代不詳なるも、永享年中明尊法印に依り中興せられたり。本尊は聖德太子作の彌陀三尊を安んず。境内に觀音堂・地藏堂あり。〔長傳寺〕曹洞宗。八幡山と號す。初め長傳庵と稱し、天文年中爲影清春の創建に係り、開山は瑞啓文瑞和尚なり。本尊に釋迦牟尼佛を安んず。

イタヒキ　板曳　筑前國筑紫郡にあり。し郷。和名抄は伊多比岐と訓ず。高山寺本板引に作る。今その地詳かならざるも一に郡珂村大字板付は其遺名の轉訛にして即ち今の福岡縣筑紫郡珂村に當るといひ、一に福岡市の西部の邊ならんともいふ。

イタヒツ　板櫃　福岡縣企救郡にありし町。明治四十一年西紫村を廢し、其大字益崎・小熊野を板櫃村に合せ、導いで大正十一年町制を布きしも、同十四年八月八幡市に編入す。此地は往古門司より太宰府に通ずる街道に當り、延喜式に到津驛馬十疋と錄せるは即ち此地なり。天平十二年藤原廣嗣叛するや、大野東人を大將軍に、紀飯麻呂を副將軍として一萬七千の兵を率ゐて之を討たしむ。而して廣嗣は板櫃川の河西に、官軍は河東に對陣す。板櫃川は蓋し蒲生川ならんも、小倉築城の後水道變易し、板櫃營址も亦滅沒せしもの〻如し。此地の到津八幡宮は社傳に依れば、神功皇后三韓御征伐の砌筑紫櫃日宮より穴門豐浦宮に還幸ましまさんとして御船を此處に寄せ給ひしより到津と呼び、かくて神靈を崇め祀りしが、其後また後鳥羽天皇の文治四年、神託に依り宇佐八幡宮を勸請するといふ。大友記に依れば永祿四年七月二十日、大友義鎮宇佐を亂燒す。神官・社僧等即ち神輿を守護して此地に匿れ、天正十一年上宮を造營し宇佐に歸幸せりと。當社は明治維新前迄藩主の氏神として尊崇甚だ篤きものあり。檀日本紀・天平十二年十月「逆賊藤原廣嗣率二萬許騎一到二板櫃河一、廣嗣親自率二軍人一、爲二前鋒一、即渡二水爲一船、將渡二河一、于レ時、佐伯宿禰常人、安倍朝臣虫麻呂、發レ弩射レ之、廣嗣衆却到二河西一、常人等率二軍士六千餘人一、陣二河東一、即令レ軍人等呼云、隨二逆人廣嗣一、拒二捍官軍一者、非二直滅一其身一、罪及二妻子親族一者、則廣嗣所レ率軍人并兵等、不二敢發一箭一、子レ時、常人等呼云、廣嗣、十度、而猶不レ答、良久廣嗣乘レ馬出來云、承二勅使到來一、其勅使者爲レ誰、常人等答云、勅使衛門督佐伯大夫、式部少輔安倍大夫、今在二此間一者、廣嗣云、而今知二勅使一、則下レ馬、兩段再拜申云、廣嗣不二敢捍一朝命一、但請二朝廷鬼人二人一、耳、廣嗣敢捍二朝廷一者、天神地祇罰殺、常人等云、爲爲二勅符一、喚二太宰典已上一、何故發レ兵捍來、廣嗣不レ能二辨答一、乘レ馬却還」

イタミ　伊丹町　兵庫縣攝津國川邊郡の東南部。尼ヶ崎市の北方約四粁、東北は猪名川を隔てて大阪府豐能郡池田町・神津村に對し、所謂武庫平野中央部の小丘陵の南端に當り、神崎川の支流猪名川その東境を南流す。舊西國街道池田町より來りて西南に町を横ぎり西宮方面に出で省線福知山線通じて伊丹驛(明治二十六年設置)を置き、また阪神急行電鐵の伊丹線その塚口驛より分岐北上して町の中央部に達す。此地は古く清酒の醸造を以て名高く、賴山陽に「兵は用ふべし、酒は飲むべし」の有名な詩あり、伊丹の醸造の意で丹醸の名が天下に聞えしも、今は遷地方に及ばず。古くは和名抄郡家郷の地にして郡家を置き、中世は伊丹氏之に居しも後板倉。元龜四年七月、信長荒木村重等をして之を攻めしめ、親興力盡きて遂に自殺し伊丹氏滅ぶ。信長攝津を村重に與ふるにより、村重此處に治し有岡城と呼ぶ。天正六年十月村重叛するに及び信長來り攻め、村重能く之を拒ぎしも翌七年十一月に至りて城陷り村重逃走す。江戸時代に入り伊丹は近衛家の領邑となる。〔猪名野神社〕縣社。俗に野の宮祇園社と呼び町の鎮守。祭神、素盞嗚尊。醍醐天皇の延喜四年の創建と傳ふ。後陽成天皇の御宇、豐臣秀頼、長照法印をして再建せしむ。慶長六年近衛基熙また再建し爾來近衛家の祈願所となる。例祭十月十四日。〔伊丹酒〕古くより芳醇の良酒として灘酒と共に著はれ剣菱・白雪の如きその代表的銘酒なり。現今にてはその産額灘酒に比して遙に及ばず。灘酒沿革誌によれば、灘酒の興隆は寛永中伊丹の酒造家鴻喰屋文右衛門が西宮に移住し醸造業を創めたるに胚胎し、馬の背により江戸に運びたるものと傳ふ。〔大鹿池〕大字大鹿にあり。周圍約二粁。古くは荒木池といひ、いま瑞ヶ池とも呼ぶ。篠柔を産するを以て名高し。

イタムロ　板室　↓高林村(栃木縣)

イタメ　板目山　近江國栗太郡にありしといふ山。歌枕。散木・八「いためし山さかゆく身かは玉かつら苦しくてのみ世を過しつる」

イタモチ　板持川　福岡縣筑前國糸島

郡にある川。怡土村の井原に發源し、北流して高祖川と併せ元岡村に至り福岡灣に注ぐ。尙ほ前項町の大字に板持あり。

イタヤ　板谷

【板谷】　省線奥羽本線の驛（明治三十二年設置）。山形縣南置賜郡山上村の大字板谷にあり。これより三粁餘にて五色温泉・五色スキー場等あり。

【板谷峠】　山形縣南置賜郡の東南隅山上村地内にある峠。福島市より西北方米澤市に通じ奥羽山脈を横斷する山道にて最高點約八六六米。阿武隈川の支流松川と米澤市に流下する羽黒川の上源を分つ山嶺にて、省線奥羽本線この兩河谷に沿ひ隧道を穿ちスウィッチバックして通過し東に板谷驛（明治三十二年設置）、西に峠驛（明治三十二年設置）を置く。線路の勾配最急千分ノ三十三にして、庭坂・赤岩・板谷・峠各驛間に合計十六の隧道あり。板谷第二隧道は峠の最高點の中腹を穿つて通じ、長さ一・五粁あり。此等四驛間は地盤の變動著しきものありて鐵道敷設工事に難渋を極めたる處なり。附近に五色・新五色・滑川・姥湯等の諸温泉あり、松川源流に懸れる瀑布群の壯觀あり、また五色温泉スキー場は附近の吾妻山其他の山岳スキーの根據地として早くより開發せられたるもの。

【板谷岳】　赤石山脈の一峯。静岡縣安倍郡井川村と長野縣下伊那郡大鹿村に跨り赤石岳の北方約五粁、荒川岳（三〇八三米）と小河内岳（二八〇一米）との中間、尾根續きに聳立す。標高二六三六米。東側は大井川の一水源なる小西俣谷、西側は天龍川の一支源なる板谷谷ななす。北方の驪見岳、南方の赤石岳等より縱走して至る。

イタヤナギ　板柳町　青森縣陸奥國北津輕郡の南西端。弘前市の北方約一〇粁、東は南津輕郡畑岡村に隣り、西は岩木川を境として中津輕郡新和村に對す。津輕平野の中部に位し、土地概れ平坦、水田・果樹園多く、米・林檎を産す。弘前市より北方五所川原町に至る縣道南北に通じ、また省線五能線の板柳（大正七年設置）・掛落林（昭和十年設置）の二驛を置く。此地はもと板屋野木村といひしを明治二十八年に板柳村と改め、更に大正九年町制を施行す。大字赤田は、藩政の頃は赤田組として近隣の數村を統ぶ。明和三年、此地方に起りし大地震の際には赤田組の被害最も大なりしと。舊記によれば、赤田組潰家六百七十一、燒家十三、死亡百六十一と記さる。（海蒙神社）大字板柳に鎮座。郷社。祭神、底津綿津見命・中津綿津見命・上津綿津見命。創立年代は未詳。もと大川岸にありしを正保元年現地に遷祀す。安永三年藩主津輕信寧、舊赤田組内の安全五穀成就を祈願せり。

イタヤノキ　板屋野木　↓板柳町（青森縣）

イタン　伊淡面　朝鮮京畿道楊州郡の北端。東は抱川郡、西は漣川郡に隣接し地は概れ丘陵性の山地にして東北境に道遙山あり、漢灘川の一小支流が面の中央を南北に貫流して沿岸に狹長なる平地を開く。二等道路は此の川に沿ひて南方の京城・議政府方面より北方の漣川・鐵原方面に通ず。總督府鐵道京元線またこれに沿ひ面の中部に東豆川驛（明治四十五年設置）を置く。平地には米・豆類・麻等、山地には薪炭の産あり、又特産に松の實あり。道遙山は東豆川驛の北約四粁にあり、清流に沿ふ山道を辿りて進めば左右の峽嶺漸く迫り來りて景致を加へ、山中に二條の懸瀑あり、又藥水の湧出するありて興趣深きものあり。頂上に近く自在庵の古寺あり。秋季全山錦繡を織り訪客多し。

イチ　伊知　筑前國那珂郡にありし郷名和名抄には郷名見えざるも萬葉集によりて郷名を知る。萬葉・卷五に筑前國守山上憶良の鎮懷石の歌を掲げ、その註に「右事傳言、那珂郡伊知郷資烏人建部牛麻呂是也」と見ゆるが今何れの邊に當るか詳ならず。今福岡市の官幣小社住吉神社の南の邊に資烏の地名遺れりといへば或は此邊に定むべきか。

イチ　伊秩　出雲國神門郡の郷（和名抄）凡そ今の島根縣飯川郡窪田村・山口村・乙立村の邊に當る。出雲風土記に飯戸里とあるは此地を指ぜるもの。何れの頃郷となりしものか詳かならざるも天平十一年大税帳に已に伊秩郷坂本里と見ゆ。郷名の起原に伊は發語詞、秩は知知と訓み銀杏を稱せるものにして此地は銀杏の生長に適せし爲なりとの說あるも今遽かに信じ難し。

イチ　伊智　肥後國山鹿郡の郷（和名抄）今何れの地に當るか詳ならざるも、伊智は字智に轉じ、今熊本縣鹿本郡内田村の上内田・六郷村の下内田の邊ならんといひ、或は吉松村大字伊知坊を以て其遺稱ならんといひ、同郡吉松村・田底村・山本村等の邊ならんともいふ。

イチ　一

【一池】　椎現池（岐阜縣大野郡丹生川村にあり）の別稱。

【一瀬】　奈良縣吉野郡天川村字洞川にある瀬。高さ約六米。

【一坂】　山口市上字野令一ノ坂にある峠。山口より萩への通路に當り、一に板堂峠ともいふ。一ノ坂川の水源地。往昔は此處に銀山あり、山口虛實見聞錄によれば、萩城の普請は此山の運上にて出來せしものにて毎日千枚の運上が三四十年も續きしといふ。

【一岳】　福岡縣筑紫郡の西南境、南畑村西部に峙つ山。標高六四四米。脊振山塊の一峯にて花崗石より成る。那賀川その東谷を北流し福岡市にて海に入る。

【一岳】　金峯山（熊本縣鹿兒島郡の西方に聳え、標高六六六米）の別名。

イチ　市

【市川】　埼玉縣比企郡にある川。荒川の一支流。本郡の西北部八和田の井部に發源して東南流し松山町に至り、七郷村の北部より來る滑川を入れて更に東南流して、小見野村に至りて荒川に入る。流程凡そ二九粁。

【市川】　↓市川渡

【市川】　兵庫縣播磨國中部を南流する川。朝來郡（但馬國）粟鹿村の南境にある粟鹿山西麓に發源、西南流して生野町の南部より神崎郡に入り、郡の中部を南流し、姫路市の東境をなし、飾磨郡妻鹿町にて播磨灘に注ぐ、流程約八〇粁。川筋は姫路市より但馬に至る縣道、并に省線播但線の通路をなす。

【市村】　兵庫縣淡路國三原郡の中部。國道舊四國街道に沿ひ、津名郡洲本町の西南約一四粁、福原町の東北約七粁。三原平野の中央部にて東南より西北に緩く下るも土地概して平坦にして水田・畑地拓け米・麥を主産す。社線淡路鐵道の一本松・市村の二驛（何れも大正十一年設置）あり。舊郡役所の所在地。和名抄神稻郷の内。大字市村は往昔國府・國學のありし處。また市の神といはれる夷社あり、古くより毎歲冬季市のたちし處なり。大字十一ヶ所は總社十一明神より起れる名にて、十一明神とは淡路の、延喜の制名神大社二座小社十一座なるが爲め、古へ祈年祭其他の奉幣には國司以下齋戒以て祭に會し幣を班たざるべからざるにより、國府に十一座の祭場を造りて之を爲せしものにして國府總社とも呼べり。總社の東にある野郡宮（野邊宮）の小祠は淡路廢帝を祀れるもの。大字三條は掾人形芝居の發祥地にして、大阪文樂座に比すれば洗練されざるもまた一種古風莊重なる藝風を傳へ、江戸時代末期より明治の中頃まで當國を始め四國・紀州・北九州等の諸地方に巡業し、一時は座元の數も七座を數へしも今多くは衰微せり。

【市村】　廣島縣備後國御調郡の中部。南方の尾道市より西北方世羅郡甲山町に至る縣道に沿ひ、尾道を去る西北約一五粁。村内殆ど丘陵地なるも、村の中部を西南より東北に貫流する芦田川の支流御調川に沿ひて幅狹き低地あり水田發達す。社線尾道鐵道（電車）の諸原・市の二驛（大正十五年設置）を置く。縣立市村農學校あり。古くは和名抄の伯多郷に屬せるものか。

【市村】　廣島縣深安郡の南部。福山市の東北に隣る。西境に藏王山（二二六米）、東邊に丘陵あるもその他は概れ平地にて水田拓け、米・繭を主産す。往昔本村の地は遠淺の干潟をなし藏王山の邊まで深く彎入せしも正保年中藩主水野侯築堤せしより漸次平野を成せしもの。明治二十二年舊市村・市村沼田の二村を合して市村となる。

【市】　大分縣北海部郡にありし村。明治四十年佐賀村と合併して佐賀市村と稱し大正九年坂ノ市町と改稱す。

イチイ　一位岳　山口縣豐浦郡殿居村と大津郡俵山村に跨る山。境上西北方の天井ヶ岳（六九一米）と連續をなし、標高六七二米。豐浦郡豐田中村の一峯或は本浴より約四粁にして至る。「長門なる三位の滝や二位か濱一位か嶽を登りてそ行く　誰人不知」の古歌あり。

イチイズ　櫟津　大和國の古地名。其地いま詳ならざるも奈良縣添上郡治道村大字櫟枝の邊ならんか。姓氏錄「左京皇別櫟井臣、和爾部同祖、彦姥津命五世孫…之後也」古事記・歷神天皇御歌「伊知比拿能　和邇佐能邇寫」考紀・允恭天皇七年「到二倭春日一食二于櫟井上一」等と見ゆる櫟井も櫟津に同じきか。萬葉・卷一六の長忌寸意吉麻呂の歌に「さしなへに湯沸かせ子ども櫟津の檜橋より來む狐に浴むさむ」とあり、右の一首は傳へいふ、一時衆集ひて宴飯す、時に夜漏三更狐の聲聞ゆ、留乃衆諸奥麿を誘ひて曰く此の饌具の鍾器、狐の聲、河橋等の物に關けて、偶に歌に作れといひき、卽ち聲に應じて此の歌を作れりとの註あり。

イチイダニ　櫟谷　山城國嵐山の東麓の稱。大堰川の南岸にして松尾神社の攝社櫟谷神社あり。今の京都市右京區に屬す。真應百首「大堰川しくるる秋のいちひ谷山やあらしの色をかすらむ　爲家」

イチイン　一院　總督府鐵道博川線の一驛（大正十五年設置）。朝鮮平安北道博川郡博川面にあり。

イチウ　一宇村　德島縣美馬郡の東南部。吉野川南岸の真光町より南方約一二粁。南は東祖谷山村に隣る。剱山北方の赤帽子山（一六一二米）・丸笹山（一七一二米）等の北面に當り、東境に八面山、西界に黑笠山（一七〇三米）聳え、山地深く、渓水集りて真光川の上源となる。主産物煙草（八十一萬圓）・木炭（五萬圓）・繭（三萬圓）・蒟蒻玉（二萬圓）にして特産物は柿（七千圓）。真光町方面へはバスを通ず。當村はもと一宇口山村、一宇奥山村の二村に分れて、各役場を置きしが明治二十九年二村を合併、一宇村と改稱し、大正十二年大字を廢せり。（土釜）一に怒釜ともいふ。真光川の村の北部に至る邊瓦巖左右に横出し相距ること僅に數米、奔流恰も瀑布の如く落下し其下穿たれて淵をなし、之を土釜といふ。然して左右の絶壁は斧にて削りたるが如く渾水白泡を吐きて熱湯の沸騰せるが如きものを一の釜といひ其北に二の釜、三の釜ありて一の釜より來る處の水を呑吐す。その水音雷々として山動き谷應へ萬雷の吼ゆるが如し。古來河北の奇勝として著名なり。（天ノ岩戸）土俗、天照大神の隱れ給ひし處なりといひ、尊崇極めて篤し。前堂なる天磐戸神社には天照大神の木像を安置す。天ノ岩戸は地層の節理によつて開かれたる洞穴にして穴の長さ約七米に

して入口に小祠を祀る、卽ち天磐戸神社の奥社なり。附近に神樂石・高天原・天岩戸・天ノ香具山・天ノ安川等の古跡を傳ふ。〔大鳥〕眞光川の西崖にあり、其形鳥に似たるを以て名附く。色蒼黑にして高さ數十仞、形圓く頂尖り巖崖險絶、毛髮森聳久しう居るを得ずといふ。

イチウン　一運面　朝鮮慶尙南道統營郡、巨濟島の中部。東南・北西の方向に狹長なる地を占め、兩端は海に臨み、東南に鼠耳末の岬角長く突出して其の南北兩側に灣入あり、海上に只心島・助羅島等の屬島あり。平坦部には耕地拓けて米、麥・大豆等が作られ、沿海は漁業盛にして鯛・鯖・鰆・鰯・鰹・太刀魚・石首魚・はも・まいわし・ひしこいわし等の漁獲あり。東南部灣岸の主邑舊助羅里は鎭地にして、此地を通ずる三等道路が西方の巨濟より北方の長承浦・河清・松眞浦方面に達す。また北西部の古縣里は附近の中心地なり。なほ本面及び附近一帶は要塞地帶に屬す。

イチエ　市江・市旅　〔市江(市旅)村〕愛知縣尾張國海部郡西南部。彌宮町の北に續き、北は佐屋村を隔てゝ津島町に對す。尾張平野の西南部に位し土地低平到る處田圃を成す。彌宮より津島を經て一宮市に至る縣道西部あ南北に通じ、社線名古屋線道尾西線またほゞこれに沿ふ。農産は米を第一とし蠶桑・藺草等あり、また機業盛にして織物の產額多し。關西本線の彌宮驛へは約三粁にして交通稍〻便なり。もとは市旅・東市江の二村なりしも、明治三十九年この二村と十四山村の一部とを合併して本村を置く。

〔市江崎〕和歌山縣紀伊國西牟婁郡日置町西岸の岬。南方に突出し、その東岸に大字市江の小灣を抱き、岬上に市江崎燈臺の設けあり(大正十年設置)。八角形白色の混凝土造りにて第四等速閃白光を放つ。

イチオー　一樫　山梨縣東八代郡にありし村。明治三十六年本村及び國立・清野の二村を廢し、其地域を以て一宮村を置く。

イチカ　市香　德島縣阿波郡にありし村。明治四十年十一月市場町と改稱す。

イチガオ　依遲尾山　また一箇尾山にも作れり。京都府丹後國竹野郡の北東部、間人町及び竹野・上宇川の二村に跨る。標高五四〇米。頂上よりは眼下に突出する大ヶ峰を見降し、また日本海の波濤を俯瞰して展望雄大なり。

イチガヤ　市谷　東京市牛込區の南部四谷區に接する一帶の地の汎稱。もと東北に通ずる穢谷の名なりしものゝ如く今の陸軍獨科士官學校のある臺地を本村町といふは蓋し市ヶ谷本村の位置か。附近の町名には市ヶ谷の名を冠するもの多く省線中央本線市ヶ谷驛(明治二十三年設置)は麴町區土手三番町にあり。市ヶ谷とは卽ち市ヶ谷本村町より四谷まで谷數四あり、第一を一ヶ谷、第四を四谷といひしものといふ。江戸志に昔は此處に六齋の市が立ち、市買と書きしとあり(兎園小說外集)。もとは市ヶ谷村といひ、鶴岡八幡宮領たりしもの、また同八幡宮の文書に見ゆる市ヶ谷孫四郎も此地を領せし事あり。この在名を貢ひしものならんか。江戸城內より市ヶ谷方面へ出る門を市ヶ谷門といひ、江戸城の西北面に當り枡形を設け內外二門あり。これを普通に市ヶ谷見附といふ。今僅に枡形右方の石垣の一部を存す。江戸時代には門衞に勤番及び兵器の備へ等赤坂門に同じ、卽ち萬石以下三千石以上の者三箇年宛勤仕す。番士三人、羽織袴を著用す。鐵砲五挺・弓三張・長柄五筋・持筒二挺・持弓一組を備へたりといふ。御府內備考に「此御門も市ヶ谷への出口なれば名付たるなちん飯に正保御圖繪圖には市ヶ谷口と記せり」同書に「市ヶ谷は古き地名と見えて江戸古地圖に市谷村なのす、又北條守隈幟に太田新六郎江戸市谷三十二貫九百十六文の地を領せしといふ又同じき人江戸中里市ヶ谷にて二十貫六百十六文の所を知行せしよしも見ゆ、是によれば市谷は中里までつゞきしやうに見ゆ……相州鶴岡八幡の別當の家に藏する所の古文書を見しに、その文に云鶴岡八幡宮雜掌任阿申す武藏國金曾木彦三郎市谷孫四郎等讓ノ事正江戸道路守押領任正和元年八月十一日寄進狀可ㇾ被ㇾ沙汰ㇾ付此家之狀如件延文三年十二月廿二日基氏判阿波守殿と是によれば金曾木市谷みな豐島郡の地名なれば、その居し所の地によりて氏とせしなるべし、又此地もおそらくは市谷孫四郎の領地なりしこともおもひしるべしさもあらんには正和延文より前古き世よりして領せしことも又しるべし、江戸氏は此地にてもことに古き大家にて一屬も廣かりければその勢なもてかゝることもありしならむ、この江戸氏の押領せしをもておもへばいよ／＼その江戸內の金曾木市の谷なることもしらる……或說に今も長延寺谷とてよほどの谷ありそれらをさして市ヶ谷といふとまさしきをしらず改撰江戸志」とあり。

イチカワ　市川　〔市川村〕青森縣陸奥國三戸郡の東北端。八戸市の北方約一〇粁、五戸川(市川)の下流域を占め、東は太平洋に面し、北は奥入瀨川によりて上北郡百石町に界す。村の南半と西北部は原野なるも、中部は五戸川、東北部は奥入瀨川下流の平地に屬し水田拓け海岸は平滑の沙濱ななす。交通上東北本線の下田驛(上北郡下田村)に最も近し。主生業は農業にして漁業を兼ね、主なる產物は米・小麥・馬鈴薯・柔麻・大豆・鰯鮑・煮干等。村名は土地にてはエチカハといひ居れど從來はエヅガと發音せり。東遊雜記に「市川はやうやう三十軒許の在所にて、八之戸へ二里廿八丁とぞ、此邊より南は少しづつ人物もよくなり、五十軒三十軒の村里も、所々に見ゆるなり」とあり、文化五年の終北蝦は、市川へ巨鯨逆流して上るもの七十三、土民徒手にして之を捕らへし由を記す。維新前は盛岡藩の所管にて五戸町に代官所があり、八戸に近きも八戸藩との關係なく、八戸藩の罪人は「市川拂ひ」として當村に追放されしものなり。

【市川市】千葉縣西北部にある都市。東は船橋市に、南は行德町に、北は松戸町・八柱・大柏二村に接し、西は大利根の分流江戸川を挾み東京市江戸川區に對す。北部は洪積層の臺地ななし、その他は沖積層の低地にして西南部は水田拓け、東南部は砂質壤土の畑地ななし、米穀・蔬菜の栽培に適す。省線總武本線は市の南部を東西に橫ぎり下總中山・市川・本八幡の三驛(何れも明治二十七年設置)を置き、社線京成電氣軌道またその北方を併行し、市川國府臺・市川眞間・菅野・新八幡・京成八幡・中山鬼越の六驛あり。東京との交通至便なるため、關東大震災後郊外住宅都市として急激なる發展をなし大東京の延長地域たるの觀あり。工業も盛に赴き、毛絲・毛布類・酒類・パイプその他金屬製品等工產額少からず。市內に佐倉聯隊區司令部・東京憲兵隊市川分隊・野戰重砲兵第三旅團司令部・野戰重砲兵第一聯隊・騎砲兵隊・國府臺陸軍病院・野戰重砲兵第七聯隊・野戰重砲兵聯隊高射砲第二聯隊の兵營・市川警察署等の官衞・兵營及び其他の學校・會社・工場あり。明治天皇市川第六天行在所跡に明治天皇市川上出口行在所は史蹟として指定。八幡町の千本公孫樹は天然紀念物として指定さる。市內はまた名勝史蹟に富み、西北部の國府臺は古へ國府を置かれし地にて、國分寺址・國府臺城址・弘法寺・總寧寺・里見公園の外、その他、眞間の手兒奈堂・鎭社葛飾八幡神社・不知八幡森・中山の法華經寺等あり。此地は往古の狀勢は文獻の徵すべきものなく、人皇第三十六代孝德天皇大化の改新に方り國造・縣主を廢するに際し、國府臺の地に國府を置きしことあり。中世に至り、東部は和名抄の葛飾郡栗原郷の稱あり、また八幡庄と稱せられ、西部は風早庄・市川庄等と呼ばる。義經記・三「治承四年九月十一日、武藏と下野の境なる松戸の庄、市河といふ所に著き給ふ」とあり。天文年間に北條氏康が八千の兵を率ゐて兩上杉八萬の大軍を破りし古戰場たり。江戸時代に於ては多く幕府直轄代官の所管、若しくは寺領に屬ぜり。明治維新當初小菅縣管轄後、印旛縣に屬し、廢藩置縣に際し葛飾縣となり、同二十二年町村制實施の際に中山村・國分村・八幡町・市川町と稱せしが、中山村は大正十三年町制を施行し、ついで昭和九年市川町・八幡町・中山町・國分村を廢し、其區域を以て市川市を置く。市內の八幡町はもと八幡庄の遺稱にして、もと八幡宿と稱せられ、江戸より房總往來の街道に當る。市川町はもと市川宿と稱せられ、江戸幕府の時、その江頭對岸の地に市川關檀を置き、往來の人々を檢せしといふ。明治戊辰の時に、江戸の人、江原周市が脫走兵百餘人を率ゐ八幡に入るを以て、之を討つ爲に備前藩の兵は總督府の命を以て進擊し、江戸川を渡り此地に來る。東軍は敢て抗せず僞り降り、のち中山邊に到り與黨を集め、四月三日曉に乘じ八幡に屯せし官軍を擊つ。狼狽せる官軍は江戸川に溺死する者多數を殘して鴻臺に逃れ、松戸方面より來れる援兵に援けられ漸く市川驛を奪還す。大字國分は下總國分寺のありし處の故の名なり。相武平氏、千葉氏の族常胤の子、胤通が國分五郎と稱して此地に居り、文治五年奥州征伐の後、軍功を以て奥州宮城郡に邑を賜はり、州の留守所に任補せられ、子孫は彼の地の名族となれり。東鑑、治承四年九月の條には胤通を胤道に作る。〔國府臺〕鴻ノ臺・鴻巢・小府代・高野臺とも書す。往古下總國府の所在なれば高所なれば此名あり。市內西北部江戸川に臨み、眞間山に連亘せる一帶の高臺にして老松古杉鬱蒼たり。後花園天皇の御代、千葉氏の居城たりし後、天文・永祿の頃、北條・里見兩氏の古戰場としてその名高く、神川時代には江戸を衛護する地たるを以て弗くの城となり、明治時代に至り陸軍教導團を設置せしも、のち廢せられ、今は野戰重砲兵聯隊高射砲第二聯隊所在地たり。附近に古城址・里見塚・大觀堂・天守址・氏康床几塚・夜啼石・鐘掛の松・鐘ヶ淵等の遺跡存す。今は里見八景圖と稱し、江戸川の清流を俯瞰し四季の景色頗る佳し、特に櫻花の名所として聞え、又夏秋の交、河流に棹して釣魚投網等の淸遊を試みるもの多し。因みに八景とは富士の白雪・利根の歸帆・水壁の秋月・市川の夕照・安國の晚鐘・葛西の落雁・戰場の夜雨・武藏の晴嵐を稱せしもの。〔市川城〕國府臺にあり。今の總寧寺の地にして、古への國府の址に築きたるものといふ。江戸砂子に「總寧寺の後の山は里見義廣の城跡也といひつたふ。また山上に石の唐櫃といふものあり、過半埋もれて少し見ゆ、國府臺の軍と云ふも此なり」とあり、眞間山より連れる丘陵にて江戸川に臨み、要害として古來關東諸豪族爭奪の地たり。文明十一年七月太田道灌・足利成氏の內意を受け、臼井城を攻めんとして此地に城を築くともいひ、康正年中千葉氏の據る處ともいふ。天文七年小弓御所足利義明は里見義堯と結び房總の兵五千六百を率ゐて此地に陣し、小田原の北條氏綱はまた豆・相・武の兵二萬を率ゐて此地に迫り、側面より義明とその弟頼基の軍を討ち大に之を破る。義堯信に殘兵を集めて房州に奔る。永祿七年正

月見見義弘、北條氏康と此地に戰ひ一旦これを破りしが、氏康その子氏政をして折からの風雨を利して不意にその營を衝かしむ。敵に義弘大敗して上總に逃る。

〔八幡神社〕 八幡町にあり。郷社。祭神玉依姫命・誉田和氣命・息長帶姫命。一に富師八幡宮とも稱す。創立年代を詳にせざるも、蓋し鎌倉以降の古社にて領主千葉氏・太田氏の崇敬を受く。元亨元年丸子氏奉納に係る銅鐘は世に知らる。銘中に「下總第一鎮守」とあり。以て當時有勢なる社運の狀を察する足る。天正十九年德川家康五十二石の朱印を安堵し爾後歷代の將軍に及びて替ることなかりき。神前右方に公孫樹の巨木あり。天然紀念物に指定せらる。例祭は九月十五日。又附近に有名なる不知八幡の藪あり。〔不知八幡藪〕郷社八幡神社の大華表に近く、國道に沿へる地域に、廣さ方二十餘歩、石樓を廻らしたる竹藪あり。これ即ち有名なる不知八幡藪にして、里傳にこの藪地に入る時は必ず祟りありと傳ふ。天慶年中平眞盛こゝに八門の陣を布き將門を平げ、上洛するに臨み土人に告げて曰く、此は八門遁甲の陣にして死門の一角を遺す、後世人跡を容るる勿れ、犯さば必ず祟あらんと、衆怖れて入ることを禁じたりといふ。今なほ人々入ることを怖れ足跡を印する者なし。〔法華經寺〕中山町中山にあり。日蓮宗。正中山と號し、日蓮宗四大本山の一なり。建長六年、下總國若宮の領主、富木常忍が日蓮の弟子となり、文應元年、日蓮が松葉ヶ谷の草庵より諸宗徒に逐はるゝや、これを屬ヶ谷の自邸に迎ふ。のち日蓮に請ひ若宮八幡の社前に設法せしめ、次いで若宮の己が館の傍に法華堂を建つ。日蓮ここに釋迦如來立像を安置す。のち常忍出家し日常といひ法華堂に住す。當時太田乘明の子出家して日高と稱し、父の邸宅を寺院に改めて本妙寺と號す。その後この二寺合して本妙法華堂と稱し、また略して法華經寺といふ。現在の法華經寺は即ち本妙寺の後にして、奥ノ院は法華堂の跡なり。元應二年、第一世日常、第二世日高の嫡孫なる千葉胤貞、田圃を寄進し以來千葉氏の縁者此寺に關係する者多く、胤貞は其二子を日高の弟子とし、胤貞の男胤綱亦二子を日祐に就き出家せしむ。胤貞の子、日胤は法宣院・淨光院を開き、日貞は其二世となり法兄日祐の教化を輔佐せり。胤綱の子日經は淨光院の第三代となり、日慧は安世院を開基す。應安二年四院家を定め、日貞は法宣院に日經は淨光院に、日慧は安世院に、日尊の弟子日堯は本行院を開基して四院家の祖となり寺基漸く繁固となる。足利氏開府後は戰屬の暗雲漸く深く、一門の名僧多く上洛して寺運傾に衰ふ。のち京都頂妙寺・本法寺・妙國寺の三寺輪番の制を定め、文祿二年妙國寺の佛心院日珙入寺して第十二世となる。〔日珙は德川家康と親交あり、其援助により寺門再び舊態に復す。慶長十九年幕府は三年を一期として輪番交代せしむ。明治後寺務を改め寺運振ふ。五重塔・法華堂は現に國寶に指定さる。五重塔は元和八年本阿彌光室の本願により其父母の菩提のため前田利光の寄進せし所といふ。法華堂は鎌倉愛染堂の四足門なりと傳へ、室町初期の建立と推定せられ、手法唐様になる四足門として珍重すべき遺構なり。五重塔・四足門・法華堂は共に國寶。境内に開山日常上人の銅像あり。また十六羅漢像(趙璕筆)・八曲屏風一雙も國寶に指定さる。〔遠壽院〕日蓮宗。法華經寺の支院にして、寛永十一年日祥上人の開基。中山新禱法修行道場として名高し。その根本新禱法は日蓮上人より日常上人に傳へられしものなり。鬼子母神堂の右なる荒行堂は、最冬十旬水垢離の處なり。〔弘法寺〕大字眞間にあり。日蓮宗。眞間山と號す。當宗六門家の一。四十四本山の一。もと眞言宗にして空海の遺跡なりといふ。邑主の富木胤盛の男、伊豫房は日蓮の弟子となり、本尊に釋迦如來像を安置し、これより日蓮宗の寺院となる。もと寺領三十石を有せり。近く江戸川の清流を望み、眞間手古奈の昔を偲ぶ眞間の川邊、麓下にあり。遠く伊豆・相模・甲斐連山の雲煙の内に起伏せるを見る。境内には祖師堂・客殿・書院・寶藏・方丈・鐘楼、山下に手古奈祠堂・眞間の橋あり。〔手見奈祠〕眞間山弘法寺の南麓眞間川の邊にあり。眞間手見奈を祀る。出産・小兒の疳薬に立願して靈驗著しと稱せらる。手見奈明神・手見奈神社ともいふ。例祭十月九日。これは萬葉集により古來有名なる眞間の手見奈の奥津城所なり、眞間山弘法寺中興の開祖日興上人、初めて安産の神としてこれを祀る。傳へいふ千五百年の昔、朝な夕な眞間山麓の眞間の井の泉を汲む美しき少女あり。天成の麗質喩ふるなし。里の若人等、貴賤の別なくこの少女、即ち手見奈の家に集り、切々愛慕を訴ふるもの多し。手古奈懊惱つひに身を眞間の入江に投ず、里人哀だこれを哀憫し、淺井の邊に奥津城を築き厚くこを葬れりと。萬葉・三「我も見つ人にも告げよ勝鹿のまの手見奈かおくつきところ 赤人」同「葛飾の眞間の入江にうち靡く玉藻刈りけむ手見奈し思ほゆ 赤人」〔國分寺〕大字國府にあり。新義眞言宗豐山派。國分山と號し、聖武天皇の勅願により造營せられたる國分寺の一。古くは藥師堂領十五石を領し、伽藍壯麗なりしが明治二十四年火災に罹り、藥師堂・山門焼失して往觀を失へり。〔總寧寺〕國府臺にあり。曹洞宗。安國山と號す。鶴東僧錄司三箇寺の一なり。永德三年、佐々木氏頼、通幻寂靈を藍山とし、近江國新庄經原郷(今の大津市馬場か)の地に來安寺を開創す。天正三年、北條氏政、これを下總國國府の東にうつす。寺實に不動明王の古畫・一蓮法阿の書簡等を藏す。

移し、寺號を今の如くに改む。慶長十七年德川家康、曾錄所たる事を許し、寺領二十石を寄進す。元和三年また内町に移せしが、此地は水腐の憂あるにより、寛文三年三轉して國府臺城址の現在の地に移る。寺運次第に榮えしが嘉永年中火災に罹り、文久年間再建せしも復舊に及ばず。附近に道鏡の分骨塔なりと稱する法王塚なる古墳あり。〔東昌寺〕曹洞宗。六國山と號す。國府臺城主柳田河内守滿勝の開創に係り、代々その香華院たり。寺實に天正十八年の古制札あり。〔堀ノ内貝塚〕市内國分の堀内にあり。市川驛の東北五粁の地に位す。練兵場の北に連なる丘陵の上より傾斜面にかけて存在し、地表に貝層の露出を見る。石器時代の土器・土偶・石器・骨角などの諸遺物が豐富に發見され、東京近郊に於ける同時代遺蹟の代表的なるものといはる。

【市川渡】 下總・武藏二國の間を流るる江戸川の渡船場。江戸川は古名を太井川・太日川といひ今利根川の分流なるも昔ては本流たりしことあり、且つ河道の變遷にありしも下流國府臺(今の千葉縣市川市内)の西の邊を市川といひ又からめき川ともいふ。江戸時代こゝの渡船場を市川渡といふ。往昔は此處に太井渡のありしことは類聚三代格に見ゆ。

【市川村】 長野縣信濃國下高井郡の北部千曲川の谷に位し、西北は川を隔てて下水内郡岡山村に對す。南界に峙つ水尾山(一一〇四二米)の北斜面を占め山地多く洞壑樹林をなす。耕地は千曲川右岸に沿ひて少しく發達せり。交通上、社線飯山鐵道の桑名川・西大瀬の二驛(何れも大正十二年設置)へ最も近し。古くは此邊一帶を市川谷と總稱せしもの、如く、新潟縣中魚沼郡への通路に當り、市川氏の世々住居せし地なり。越後治亂記に依れば明應三年八月武田大膳大夫義春、信州に出馬せし際、市川氏等その威勢に驚きて降參せる由見ゆ。當てその城址に定願寺といふ禪寺あり、上杉驗河守定顧の在城ありし故なりといふ。その地は今遊園地となる。

【市川村】 廣島縣安藝國高田郡の南部。太田川の支流三篠川中流の谷に位し、地東西(約八粁)に長く南北(約二粁)に狹く西は安佐郡大林村と界す。山地多く、中部以西は針葉・闊葉の混淆林、東北部は原野をなし、東部川筋には狹小の耕地ありて水田拓く。廣島市より三次町に達する縣道と省線藝備線東部を通ず、後者の志和口驛(大正四年設置)あり。古くは和名抄三田郷に屬せるものゝ如し。

イチカワダイモン 市川大門町

山梨縣甲斐國西八代郡の北部。富士川の二大上支笛吹・釜無二川の合流點に當り、北は笛吹川を隔てゝ中巨摩郡忍村に對す。中部戸南は念斜の山地なるも北部は甲府盆地の南邊に當り地平に水田・桑畑あり。また和紙を多産す。東北方甲府へ縣道を通ず、また社線富士身延鐵道町を通過して市川本町驛(昭和二年設置)を置く。この地はもと西八代郡役所の所在地。江戸時代には幕府公料を支配せし代官の陣屋を置きし地なり。市川は庄名にして、東鑑・寛元二年八月七日の條に「伪市河掃部助入道見西所ら訴申」之信濃國給山内貴沼村、伊勢國光吉名、甲斐國市河屋敷等者、可令氏女領掌之」と見え、世々市河氏の住居せし地なり。もと平驛或は青島と稱せしが近世庄名を轉じて村名としのち平驛寺の門前町を今併して市川大門と稱し、明治三十三年町制を布く。〔弓削神社〕郷社。祭神瓊々杵命・木花咲耶姫命・彦火々出見尊。本社はもと巨摩郡市川庄にありしものにして、御弓削と稱し延喜の制式内小社に列せり。古來一に二ノ宮とも稱せられ、近世に至り德川氏の崇敬篤かりき。社の南に俗に弓削塚といふものあり、大伴武日の廟と稱せらる。當社は大伴武日居館の遺址なりと傳へらる。境内に檜柏の老樹ありて、其枝間の洞穴は數十人を容るゝに足るといふ。例祭十一月三日。〔雲福寺〕七軒町にあり。眞言宗高野派。覺王山と號す。もと時宗に屬せり。本尊に大日如來を安ず。境内に武田信玄の弟一條左衛門太夫の墓あり。〔實壽院〕大字羽場に在り。眞言宗高野派。金剛山と號す。草創年代不詳。開雄法印なる中興開山となす。本尊に虚空蔵を安ず。また境内に觀音堂ありて正觀世音を安置す。寺實に不動明王の古畫・一蓮法阿の書簡等を藏す。

イチキ 市木

【市木】 愛知縣三河國西加茂郡にありし村。明治三十九年本村は平井・寺部・上野山・流川・野見・金富・岡谷の七村と共に廢せられ其區域を以て高橋村を置く。

【市木村】 三重縣紀伊國南牟婁郡の南部東海岸。南方の新宮市と北方の木本町との中間に位し、東は熊野浦に面し平滑の砂濱をなす。村の大部は熊野沿岸山脈の山地なるも、中部と東北部は市來川と其支谷には平地あり水田拓く。熊野街道海岸に沿ひて南北に通ず。主産物は米・鹽。大字下市木は吉野熊野國立公園の一部。

【市木村】 島根縣石見國邑智郡の西南隅。南は廣島縣山縣郡大朝町・美和村に界し、西は那賀郡都川村に隣る。南境に阿佐山(一二一八米)、北界に原山(八八八米)聳え、村内山地多く、針葉・闊葉の混淆林をなす。江ノ川の支流市來川阿佐山の東北側に發し、村の中部を西流し、その川沿ひに細長き耕地あり。廣島より可部町を經て西方島根縣那賀郡浜田町に至る縣道、村の東南境の三坂峠を經て市來川に沿ひて西方に通ずるも交通便利ならず。

〔市木神社〕縣社。祭神、市寸島姫命・田心姫命・湍津姫命・誉田別命・比賣大神・息長足姫命・黑江大神。天平年間宇佐八幡宮の御分靈を木村神屋の地に奉遷せし者藤を安ず。また境内に觀音堂あり。